
熊 谷 市

北 島 遺 跡 XIV

ラグビーワールドカップ 2019™会場整備事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 1 8

埼 玉 県

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 第 20 号住居跡出土土器



2 第 55 号住居跡出土装身具・玉類

序

埼玉県では、平成31年にはラグビーワールドカップ2019TMが、その翌年には、東京2020オリンピック・パラリンピックが開催されます。

これらの国際スポーツ大会の開催により、国内外からの多くの観客が本県を訪れるとともに、世界各地でテレビ放映されるなど、本県の魅力を世界中に発信する絶好の機会となります。また、大会開催を契機にスポーツ・文化の振興や多文化共生の推進、安心・安全でにぎわいのあるまちづくりなどハード・ソフト両面にわたる資産をつくりあげ、次世代に引き継いでいくことが期待されます。

ラグビーワールドカップ2019TMの会場となる県営熊谷ラグビー場は、開催に向けて会場整備事業が行われていますが、熊谷ラグビー場のある熊谷スポーツ文化公園内には、周知の埋蔵文化財包蔵地として北島遺跡が所在しております。この遺跡は、これまでに28次にわたる発掘調査が行われてきましたが、この報告書の第25次発掘調査は、会場整備事業に伴う事前調査であり、埼玉県の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

調査では、古墳時代から平安時代の竪穴住居跡が幾重にも重なって発見されました。これは、この地に長い間人々が生活していた証であります。また、竪穴住居跡が密集する範囲に隣接して畠跡が見つかり、生活の場に密着して農業生産が行われていた当時の状況がよくわかりました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部文化資源課をはじめ、埼玉県都市整備部公園スタジアム課、熊谷市教育委員会、並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成30年7月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 藤 田 栄 二

例 言

1. 本書は、熊谷市に所在する北島遺跡第25次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

北島遺跡第25次調査
熊谷市上川上777番地他
平成28年8月12日付け 教生文第2-24号
3. 発掘調査は、ラグビーワールドカップ2019TM会場整備事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、埼玉県都市整備部公園スタジアム課の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 各事業の委託事業名は、下記のとおりである。

発掘調査事業（平成28年度）
「ラグビーワールドカップ2019会場整備（メインスタンド埋蔵文化財発掘調査業務委託）」
整理報告書作成事業（平成29・30年度）
「ラグビーワールドカップ2019会場整備（埋蔵文化財発掘調査整理業務委託）」
「ラグビーワールドカップ2019会場整備（埋蔵文化財発掘調査整理業務委託その2）」
5. 発掘調査・整理報告書作成事業はⅠ-3に示した組織により実施した。

発掘調査は、平成28年8月1日から平成29年2月28日まで、赤熊浩一、瀧瀬芳之、堀内紀明、渡邊理伊知、木戸春夫、砂生智江、的野美佐子、久永雅宏が担当した。

整理・報告書作成事業は、平成29年7月3日から平成30年5月30日まで、田中広明、大

- 谷徹、福田聖、木戸春夫、砂生智江、入江直毅が担当した。報告書は、平成30年7月25日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第446集として印刷・刊行した。
6. 発掘調査における基準点測量は、有限会社ジオプランニングに委託した。
 7. 発掘調査における空中写真撮影は、株式会社GIS関東に委託した。
 8. 発掘調査における自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
 9. 巻頭図版の遺物写真撮影は、小川忠博氏に委託した。
 10. 発掘調査における写真撮影は、堀内・渡邊・砂生・久永が行い、整理作業時の遺物写真撮影は大谷・福田が行った。
 11. 出土品の整理・図版作成は上記各担当者が行った。弥生土器については吉田稔、鉄製品については瀧瀬、須恵器について富田和夫の協力を得た。
 12. 本書の執筆は、Ⅰ-1を埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、Ⅱ・Ⅲを入江・福田、他は木戸・砂生・福田が行った。
 13. 本書の編集は大谷・金子が行った。
 14. 本書にかかる諸資料は平成30年8月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
 15. 発掘調査や本書の作成にあたり、下記の機関から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします（敬称略）。

熊谷市教育委員会

凡 例

1. 北島遺跡におけるX・Yの数値は、世界測地系、国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯36° 00′ 00″、東経139° 50′ 00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。

B-16グリッド北西杭の座標は、X＝18870.000m、Y＝-38730.000m、北緯36° 10′ 09.4923″・東経139° 24′ 10.1428″である。

2. 調査に際して使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10×10mの範囲を基本（1グリッド）とし、座標値X＝188800.000m、Y＝-38880.000mを北西の原点（A1グリッド）に、事業地内の全体を覆うように設定した。
3. グリッドの名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に数字（1・2・3…）を付し、アルファベットと数字を組み合わせて呼称した。

4. 遺構の略号は以下のとおりである。

SJ…竪穴住居跡 SB…掘立柱建物跡
SE…井戸跡 SD…溝跡 SK…土壙
SX…円形周溝状遺構 P…ピット

5. 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。ただし、一部例外もあり、それについては図中に縮尺とスケールを示した。

全体図 1/300

遺構図 1/100・1/60・1/30

遺物実測図・拓影図 1/4・1/3・1/2

6. 遺構断面図に表記した水準数値は、すべて海拔標高（単位m）を表す。
7. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。
- ・遺物計測値はcm、石製品・銭貨をmm、重さをg単位とした。
 - ・（ ）内の数値は復元推定値、[]内の数値は現存値を示す。
 - ・土器の胎土は特徴的な鉱物等を記号で示した。
A：雲母 B：片岩 C：角閃石 D：長石
E：石英 F：軽石 G：砂粒子
H：赤色粒子 I：白色粒子 J：針状物質
K：黒色粒子 L：その他（小礫）
 - ・焼成は良好・普通・不良の3段階に分けた。
 - ・残存率は器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。
 - ・備考には出土位置、注記No.、煤の付着、生産窯、文様（外面、見込み、底面の順）、年代、分類等を記した。
8. 本書に使用した地形図は、熊谷市発行の1/10,000都市計画図を編集・使用した。
9. 文中の引用文献等は、（著者 発行年）の順で表記し、その他の参考文献とともに巻末に掲載した。

目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	(3) 溝跡	115
1. 発掘調査に至る経過	1	(4) 土壇	137
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(5) 円形周溝状遺構	142
(1) 発掘調査	2	(6) 畠跡	144
(2) 整理・報告書作成	2	3. 奈良・平安時代	152
3. 発掘調査・報告書作成の組織	3	(1) 竪穴住居跡	152
II 遺跡の立地と環境	4	(2) 溝跡	241
1. 地理的環境	4	(3) 土壇	274
2. 歴史的環境	7	(4) 井戸跡	289
III 遺跡の概要	19	(5) ピット	296
1. 北島遺跡の概要	19	(6) 遺物集中区	309
2. 調査地点の概要	25	4. 近世	332
IV 遺構と遺物	31	(1) 溝跡	332
1. 弥生時代	31	5. グリッド出土遺物	347
2. 古墳時代	31	V 自然科学分析	358
(1) 竪穴住居跡	31	VI 調査のまとめ	367
(2) 掘立柱建物跡	108	写真図版	

插图目次

第1図	北島遺跡の位置	4	第35図	第21号住居跡	53
第2図	埼玉平野の地形面区分図	5	第36図	第21号住居跡遺物出土状況	54
第3図	利根川の中流域の地形区分図	6	第37図	第21号住居跡出土遺物	55
第4図	周辺の遺跡（旧石器～弥生時代）	8	第38図	第22号住居跡	57
第5図	周辺の遺跡（古墳時代）	10	第39図	第22号住居跡遺物出土状況	58
第6図	周辺の遺跡（古代）	12	第40図	第22号住居跡出土遺物（1）	59
第7図	周辺の遺跡（中・近世）	16	第41図	第22号住居跡出土遺物（2）	60
第8図	北島遺跡のこれまでの調査地点	23	第42図	第23号住居跡	61
第9図	調査区の位置	24	第43図	第23号住居跡出土遺物	61
第10図	基本土層	26	第44図	第25号住居跡	62
第11図	北島遺跡第25次調査区全体図	27	第45図	第25号住居跡出土遺物	62
第12図	北島遺跡第25次調査区分布図1	28	第46図	第31号住居跡	63
第13図	北島遺跡第25次調査区分布図2	29	第47図	第31号住居跡出土遺物	64
第14図	北島遺跡第25次調査区分布図3	30	第48図	第32号住居跡	65
第15図	弥生時代出土遺物	31	第49図	第35号住居跡	65
第16図	第3号住居跡	32	第50図	第36号住居跡	66
第17図	第3号住居跡遺物出土状況	33	第51図	第37号住居跡	66
第18図	第3号住居跡出土遺物	33	第52図	第39号住居跡	67
第19図	第7号住居跡・遺物出土状況	35	第53図	第39号住居跡遺物出土状況	68
第20図	第7号住居跡出土遺物	36	第54図	第39号住居跡出土遺物	69
第21図	第8号住居跡	37	第55図	第42号住居跡	71
第22図	第8号住居跡遺物出土状況	38	第56図	第46号住居跡	72
第23図	第8号住居跡出土遺物	39	第57図	第49号住居跡	73
第24図	第9号住居跡	40	第58図	第49号住居跡出土遺物	73
第25図	第9号住居跡出土遺物	41	第59図	第50号住居跡・遺物出土状況	74
第26図	第10号住居跡	42	第60図	第50号住居跡出土遺物	75
第27図	第10号住居跡遺物出土状況	43	第61図	第52号住居跡	76
第28図	第10号住居跡出土遺物	43	第62図	第52号住居跡出土遺物	77
第29図	第14号住居跡	45	第63図	第54号住居跡	78
第30図	第14号住居跡出土遺物	46	第64図	第54号住居跡出土遺物	79
第31図	第20号住居跡	47	第65図	第55号住居跡	80
第32図	第20号住居跡遺物出土状況	48	第66図	第55号住居跡遺物出土状況	81
第33図	第20号住居跡出土遺物（1）	49	第67図	第55号住居跡出土遺物	82
第34図	第20号住居跡出土遺物（2）	50	第68図	第57号住居跡	85

第69図	第58号住居跡	86	第106図	第30号溝跡（2）	122
第70図	第58号住居跡出土遺物	87	第107図	第32号溝跡	123
第71図	第59号住居跡	88	第108図	第40・57号溝跡	125
第72図	第61号住居跡	89	第109図	第41号溝跡	126
第73図	第61号住居跡遺物出土状況	90	第110図	第42号溝跡	127
第74図	第61号住居跡出土遺物	90	第111図	第48号溝跡	128
第75図	第64号住居跡・遺物出土状況（1）	92	第112図	第53・58号溝跡	129
第76図	第64号住居跡・遺物出土状況（2）	93	第113図	第56号溝跡	130
第77図	第64号住居跡出土遺物	94	第114図	第59号溝跡	131
第78図	第68号住居跡	94	第115図	第60・63号溝跡	132
第79図	第69号住居跡・遺物出土状況	95	第116図	第61・62号溝跡	133
第80図	第69号住居跡出土遺物	96	第117図	第64号溝跡	133
第81図	第71号住居跡・遺物出土状況	97	第118図	溝跡出土遺物（1）	135
第82図	第71号住居跡出土遺物	98	第119図	溝跡出土遺物（2）	136
第83図	第72号住居跡	99	第120図	第1・23・24・37・39～42・46～49号 土壌	138
第84図	第77号住居跡	100	第121図	第55・69号土壌	139
第85図	第79号住居跡	101	第122図	土壌出土遺物	140
第86図	第80号住居跡	102	第123図	第1号円形周溝状遺構	142
第87図	第81号住居跡・遺物出土状況（1）	103	第124図	第2号円形周溝状遺構	143
第88図	第81号住居跡・遺物出土状況（2）	104	第125図	第1号円形周溝状遺構出土遺物	143
第89図	第81号住居跡出土遺物	104	第126図	第1号畠跡（1）	144
第90図	第82号住居跡	106	第127図	第1号畠跡（2）	145
第91図	第82号住居跡遺物出土状況	107	第128図	第2号畠跡	146
第92図	第82号住居跡出土遺物	107	第129図	第3号畠跡	148
第93図	第83号住居跡	108	第130図	第4・5号畠跡	149
第94図	第1号掘立柱建物跡	109	第131図	第6号畠跡（1）	150
第95図	第1号掘立柱建物跡出土遺物	109	第132図	第6号畠跡（2）	151
第96図	第2号掘立柱建物跡・出土遺物	110	第133図	第7号畠跡	151
第97図	第3号掘立柱建物跡	112	第134図	第1号住居跡・遺物出土状況	152
第98図	第3号掘立柱建物跡・出土遺物	113	第135図	第1号住居跡出土遺物	153
第99図	第4・5号掘立柱建物跡	114	第136図	第2号住居跡	154
第100図	第9号溝跡	116	第137図	第2号住居跡遺物出土状況	155
第101図	第12号溝跡（1）	117	第138図	第2号住居跡出土遺物	155
第102図	第12号溝跡（2）	118	第139図	第4号住居跡	157
第103図	第14・15号溝跡	119	第140図	第4号住居跡出土遺物	157
第104図	第21号溝跡	120	第141図	第5号住居跡	159
第105図	第30号溝跡（1）	121			

第142図	第5号住居跡出土遺物……………	160	第179図	第41号住居跡……………	196
第143図	第6号住居跡・遺物出土状況……………	161	第180図	第41号住居跡遺物出土状況……………	197
第144図	第6号住居跡出土遺物……………	162	第181図	第41号住居跡出土遺物……………	198
第145図	第11号住居跡……………	163	第182図	第43号住居跡……………	199
第146図	第11号住居跡出土遺物……………	163	第183図	第43号住居跡遺物出土状況……………	200
第147図	第12号住居跡……………	165	第184図	第43号住居跡出土遺物……………	200
第148図	第12号住居跡遺物出土状況……………	166	第185図	第44号住居跡……………	202
第149図	第12号住居跡出土遺物……………	167	第186図	第45号住居跡・遺物出土状況……………	203
第150図	第13号住居跡・遺物出土状況……………	169	第187図	第45号住居跡出土遺物……………	204
第151図	第13号住居跡出土遺物……………	170	第188図	第47号住居跡……………	205
第152図	第15号住居跡……………	172	第189図	第47号住居跡遺物出土状況……………	206
第153図	第15号住居跡遺物出土状況……………	173	第190図	第47号住居跡出土遺物……………	206
第154図	第15号住居跡出土遺物……………	173	第191図	第48号住居跡・遺物出土状況……………	208
第155図	第16号住居跡……………	175	第192図	第48号住居跡出土遺物……………	209
第156図	第17号住居跡……………	176	第193図	第51号住居跡……………	211
第157図	第17号住居跡出土遺物……………	177	第194図	第51号住居跡遺物出土状況（1）…	212
第158図	第19号住居跡・出土遺物……………	178	第195図	第51号住居跡遺物出土状況（2）…	213
第159図	第24号住居跡……………	179	第196図	第51号住居跡出土遺物……………	214
第160図	第24号住居跡出土遺物……………	180	第197図	第53号住居跡……………	215
第161図	第26号住居跡……………	181	第198図	第53号住居跡出土遺物……………	216
第162図	第26号住居跡遺物出土状況……………	182	第199図	第60号住居跡……………	217
第163図	第26号住居跡出土遺物……………	183	第200図	第60号住居跡遺物出土状況……………	218
第164図	第27号住居跡……………	185	第201図	第60号住居跡出土遺物……………	218
第165図	第27号住居跡出土遺物……………	185	第202図	第62号住居跡・遺物出土状況……………	220
第166図	第28号住居跡……………	186	第203図	第62号住居跡出土遺物……………	221
第167図	第29号住居跡・遺物出土状況……………	187	第204図	第63号住居跡……………	222
第168図	第29号住居跡出土遺物……………	188	第205図	第63号住居跡遺物出土状況……………	223
第169図	第30号住居跡……………	189	第206図	第63号住居跡出土遺物……………	224
第170図	第30号住居跡遺物出土状況……………	190	第207図	第65号住居跡……………	226
第171図	第30号住居跡出土遺物（1）……………	191	第208図	第65号住居跡出土遺物……………	226
第172図	第30号住居跡出土遺物（2）……………	192	第209図	第66号住居跡……………	227
第173図	第34号住居跡……………	194	第210図	第66号住居跡出土遺物……………	228
第174図	第34号住居跡出土遺物……………	194	第211図	第67号住居跡……………	229
第175図	第38号住居跡……………	195	第212図	第67号住居跡出土遺物……………	230
第176図	第38号住居跡出土遺物……………	195	第213図	第70号住居跡……………	231
第177図	第40号住居跡……………	195	第214図	第70号住居跡出土遺物……………	231
第178図	第40号住居跡出土遺物……………	195	第215図	第73号住居跡・遺物出土状況……………	232

第216図	第73号住居跡出土遺物	233	第253図	第38・39号溝跡	266
第217図	第74号住居跡	234	第254図	第49・50・51号溝跡	267
第218図	第74号住居跡出土遺物	234	第255図	第55・65号溝跡	268
第219図	第75号住居跡	235	第256図	溝跡出土遺物（1）	269
第220図	第75号住居跡出土遺物	236	第257図	溝跡出土遺物（2）	270
第221図	第76号住居跡	237	第258図	溝跡出土遺物（3）	271
第222図	第76号住居跡出土遺物	237	第259図	溝跡出土遺物（4）	272
第223図	第78号住居跡	238	第260図	第2～12号土壇	275
第224図	第78号住居跡遺物出土状況	239	第261図	第15・20・25～29号土壇	277
第225図	第78号住居跡出土遺物	239	第262図	第31～36・38・43～45・50～52号土壇	279
第226図	第84号住居跡	240	第263図	第53・54・56～67号土壇	281
第227図	第84号住居跡出土遺物	240	第264図	第68・70～76号土壇	283
第228図	第3号溝跡（1）	242	第265図	土壇出土遺物（1）	287
第229図	第3号溝跡（2）	243	第266図	土壇出土遺物（2）	288
第230図	第6号溝跡（1）	244	第267図	第1～5号井戸跡	291
第231図	第6号溝跡（2）	245	第268図	第6号井戸跡	292
第232図	第6号溝跡（3）	246	第269図	第1号井戸跡出土遺物（1）	293
第233図	第10号溝跡（1）	247	第270図	第1号井戸跡出土遺物（2）	294
第234図	第10号溝跡（2）	248	第271図	第2号井戸跡出土遺物	295
第235図	第11号溝跡（1）	249	第272図	北島遺跡第25次調査区ピット分布図1	297
第236図	第11号溝跡（2）	250	第273図	北島遺跡第25次調査区ピット分布図2	298
第237図	第17号溝跡	251	第274図	北島遺跡第25次調査区ピット分布図3	299
第238図	第18号溝跡（1）	252	第275図	北島遺跡第25次調査区ピット分布図4	300
第239図	第18号溝跡（2）	253	第276図	ピット（1）	301
第240図	第18号溝跡（3）	254	第277図	ピット（2）	302
第241図	第19号溝跡	255	第278図	ピット（3）	303
第242図	第20・28号溝跡（1）	256	第279図	ピット（4）	304
第243図	第20・28号溝跡（2）	257	第280図	ピット（5）	305
第244図	第20・28号溝跡（3）	258	第281図	ピット（6）	306
第245図	第22号溝跡	259	第282図	ピット出土遺物	306
第246図	第23号溝跡	260	第283図	遺物集中（1/40）	310
第247図	第24号溝跡	261	第284図	遺物集中（1/40）	311
第248図	第25号溝跡	262			
第249図	第31号溝跡	262			
第250図	第35号溝跡	263			
第251図	第36号溝跡	264			
第252図	第37号溝跡	265			

第285図	遺物集中E	311	第309図	第26号溝跡	339
第286図	遺物集中A (1/20)	312	第310図	第27号溝跡	340
第287図	遺物集中A' (1/20)	313	第311図	第29号溝跡	340
第288図	遺物集中B (1/20)	314	第312図	第34号溝跡	341
第289図	遺物集中B' (1/20)	315	第313図	第43・44号溝跡	342
第290図	遺物集中C (1/20)	316	第314図	第45号溝跡	343
第291図	遺物集中D (1/20)	317	第315図	第46号溝跡	344
第292図	遺物集中D' (1/20)	318	第316図	第47・54号溝跡	345
第293図	遺物集中出土遺物(1)	319	第317図	第52号溝跡	346
第294図	遺物集中出土遺物(2)	320	第318図	溝跡出土遺物	346
第295図	遺物集中出土遺物(3)	321	第319図	グリッド出土遺物(1)	348
第296図	遺物集中出土遺物(4)	322	第320図	グリッド出土遺物(2)	349
第297図	遺物集中出土遺物(5)	323	第321図	グリッド出土遺物(3)	350
第298図	遺物集中出土遺物(6)	324	第322図	グリッド出土遺物(4)	351
第299図	遺物集中出土遺物(7)	325	第323図	グリッド出土遺物(5)	352
第300図	遺物集中出土遺物(8)	326	第324図	グリッド出土遺物(6)	353
第301図	遺物集中出土遺物(9)	327	第325図	グリッド出土遺物(7)	354
第302図	遺物集中出土遺物(10)	328	第326図	グリッド出土遺物(8)	355
第303図	第1号溝跡	333	第327図	花粉化石	359
第304図	第2号溝跡	334	第328図	土塊資料・種実遺体	361
第305図	第4号溝跡	335	第329図	木材	364
第306図	第5号溝跡	336	第330図	古墳時代の遺構変遷図	369
第307図	第7・8号溝跡	337	第331図	奈良・平安時代の遺構変遷図	373
第308図	第13号溝跡	338			

表 目 次

第1表	遺跡地図に掲載した遺跡の一覧表	17	第10表	第20号住居跡出土遺物観察表	51
第2表	これまでの北島遺跡の調査概要	22	第11表	第21号住居跡出土遺物観察表	56
第3表	弥生時代出土遺物観察表	31	第12表	第22号住居跡出土遺物観察表	60
第4表	第3号住居跡出土遺物観察表	34	第13表	第23号住居跡出土遺物観察表	61
第5表	第7号住居跡出土遺物観察表	36	第14表	第25号住居跡出土遺物観察表	62
第6表	第8号住居跡出土遺物観察表	40	第15表	第31号住居跡出土遺物観察表	64
第7表	第9号住居跡出土遺物観察表	41	第16表	第39号住居跡出土遺物観察表	70
第8表	第10号住居跡出土遺物観察表	44	第17表	第49号住居跡出土遺物観察表	73
第9表	第14号住居跡出土遺物観察表	46	第18表	第50号住居跡出土遺物観察表	75

第19表	第52号住居跡出土遺物観察表	77	第51表	第34号住居跡出土遺物観察表	194
第20表	第54号住居跡出土遺物観察表	79	第52表	第38号住居跡出土遺物観察表	195
第21表	第55号住居跡出土遺物観察表	83	第53表	第40号住居跡出土遺物観察表	196
第22表	第58号住居跡出土遺物観察表	87	第54表	第41号住居跡出土遺物観察表	198
第23表	第61号住居跡出土遺物観察表	90	第55表	第43号住居跡出土遺物観察表	201
第24表	第64号住居跡出土遺物観察表	94	第56表	第45号住居跡出土遺物観察表	204
第25表	第69号住居跡出土遺物観察表	96	第57表	第47号住居跡出土遺物観察表	207
第26表	第71号住居跡出土遺物観察表	98	第58表	第48号住居跡出土遺物観察表	209
第27表	第81号住居跡出土遺物観察表	104	第59表	第51号住居跡出土遺物観察表	215
第28表	第82号住居跡出土遺物観察表	107	第60表	第53号住居跡出土遺物観察表	216
第29表	第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表		第61表	第60号住居跡出土遺物観察表	219
	110	第62表	第62号住居跡出土遺物観察表	221
第30表	第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表		第63表	第63号住居跡出土遺物観察表	224
	111	第64表	第65号住居跡出土遺物観察表	226
第31表	第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表		第65表	第66号住居跡出土遺物観察表	228
	113	第66表	第67号住居跡出土遺物観察表	230
第32表	溝跡出土遺物観察表	134	第67表	第70号住居跡出土遺物観察表	231
第33表	土壇出土遺物観察表	140	第68表	第73号住居跡出土遺物観察表	233
第34表	第1号円形周溝状遺構出土遺物観察表		第69表	第74号住居跡出土遺物観察表	234
	143	第70表	第75号住居跡出土遺物観察表	236
第35表	第1号住居跡出土遺物観察表	153	第71表	第76号住居跡出土遺物観察表	237
第36表	第2号住居跡出土遺物観察表	156	第72表	第78号住居跡出土遺物観察表	239
第37表	第4号住居跡出土遺物観察表	158	第73表	第84号住居跡出土遺物観察表	240
第38表	第5号住居跡出土遺物観察表	160	第74表	溝跡出土遺物観察表	272
第39表	第6号住居跡出土遺物観察表	163	第75表	土壇出土遺物観察表	289
第40表	第11号住居跡出土遺物観察表	163	第76表	第1号井戸跡出土遺物観察表	296
第41表	第12号住居跡出土遺物観察表	168	第77表	第2号井戸跡出土遺物観察表	296
第42表	第13号住居跡出土遺物観察表	171	第78表	ピット出土遺物観察表	306
第43表	第15号住居跡出土遺物観察表	174	第79表	グリッドピット計測表	307
第44表	第17号住居跡出土遺物観察表	177	第80表	遺物集中出土遺物観察表	329
第45表	第19号住居跡出土遺物観察表	178	第81表	溝跡出土遺物観察表	346
第46表	第24号住居跡出土遺物観察表	180	第82表	グリッド出土遺物観察表	355
第47表	第26号住居跡出土遺物観察表	184	第83表	花粉分析結果	360
第48表	第27号住居跡出土遺物観察表	185	第84表	種実遺体分析結果	362
第49表	第29号住居跡出土遺物観察表	188	第85表	樹種同定結果	364
第50表	第30号住居跡出土遺物観察表	192			

写真図版目次

巻頭図版 1	第20号住居跡出土土器	住居跡遺物出土状況（西から）
2	第55号住居跡出土装身具・玉類	4 第21号住居跡遺物出土状況
図版 1	1 北島遺跡第25次調査区全景（1）	（西から）（1）
図版 2	1 北島遺跡第25次調査区全景（2）	5 第21号住居跡遺物出土状況
2	北島遺跡第25次調査区全景（3）	（西から）（2）
図版 3	1 北島遺跡第25次調査区遠景	6 第22号住居跡（南西から）
（東から）	2 北島遺跡第25次調査区遠景	7 第22号住居跡（北西から）
（北西から）	図版 7	8 第22号住居跡カマド（南西から）
図版 4	1 第3号住居跡（南東から）	1 第22号住居跡貯蔵穴（南西から）
2 第3号住居跡遺物出土状況	2 第22号住居跡遺物出土状況	2 第23・25号住居跡（南から）
（東から）	3 第23・25号住居跡（南から）	4 第31号住居跡（西から）
3 第7号住居跡遺物出土状況	4 第31号住居跡（西から）	5 第37号住居跡（東から）
（南西から）	5 第37号住居跡（東から）	6 第39号住居跡遺物出土状況（1）
4 第8号住居跡遺物出土状況（1）	6 第39号住居跡遺物出土状況（1）	7 第39号住居跡遺物出土状況（2）
5 第8号住居跡遺物出土状況（2）	7 第39号住居跡遺物出土状況（2）	8 第39号住居跡遺物出土状況（3）
6 第8・69号住居跡	8 第39号住居跡遺物出土状況（3）	図版 8
7 第69号住居跡遺物出土状況	図版 8	1 第42号住居跡
8 第69号住居跡炉跡	2 第49号住居跡遺物出土状況	2 第49号住居跡遺物出土状況
図版 5	1 第10号住居跡遺物出土状況	（南から）
（南東から）（1）	3 第50号住居跡	3 第50号住居跡
2 第10号住居跡遺物出土状況	4 第50号住居跡遺物出土状況（1）	4 第50号住居跡遺物出土状況（1）
（南東から）（2）	5 第50号住居跡遺物出土状況（2）	5 第50号住居跡遺物出土状況（2）
3 第14号住居跡（南から）	6 第50号住居跡遺物出土状況（3）	6 第50号住居跡遺物出土状況（3）
4 第14号住居跡カマド（南から）	7 第50号住居跡遺物出土状況（4）	7 第50号住居跡遺物出土状況（4）
5 第14号住居跡貯蔵穴（南から）	8 第52号住居跡	8 第52号住居跡
6 第20号住居跡（東から）	図版 9	1 第54号住居跡遺物出土状況
7 第20号住居跡カマド	2 第55号住居跡（南から）	2 第55号住居跡（南から）
8 第20号住居跡カマド周辺遺物出土状況（東から）（1）	3 第55号住居跡遺物出土状況	3 第55号住居跡遺物出土状況
（東から）（1）	（東から）	（東から）
図版 6	4 第55号住居跡管玉出土状況	4 第55号住居跡管玉出土状況
1 第20号住居跡カマド周辺遺物出土状況（東から）（2）	5 第57号住居跡遺物出土状況（1）	5 第57号住居跡遺物出土状況（1）
2 第19・21号住居跡（西から）	6 第57号住居跡遺物出土状況（2）	6 第57号住居跡遺物出土状況（2）
3 第19号住居跡床面検出・第21号	7 第58・59号住居跡（南西から）	7 第58・59号住居跡（南西から）
	8 第61号住居跡	8 第61号住居跡

図版10	1	第61号住居跡カマド	4	第37号土壇
	2	第64号住居跡（南東から）	5	第39号土壇
	3	第64号住居跡遺物出土状況（1）	6	第40・41号土壇
	4	第64号住居跡遺物出土状況（2）	7	第42号土壇
	5	第77号住居跡（南から）	8	第46号土壇
	6	第79号住居跡（西から）	図版15	1 第1号円形周溝状遺構（東から）
	7	第80号住居跡		2 第2号円形周溝状遺構（北西から）
	8	第81・82号住居跡（南から）		3 第1号畠跡（北東から）
図版11	1	第81・82号住居跡遺物出土状況		4 第1号畠跡（南東から）
	2	第81号住居跡カマド		5 第2号畠跡（北東から）
	3	第81号住居跡カマド袖遺物出土状況		6 第3号畠跡（西から）
	4	第83号住居跡（西から）		7 第3号畠跡西側（北から）
	5	第1・2号掘立柱建物跡（東から）		8 第3号畠跡東側（東から）
	6	第3号掘立柱建物跡（北西から）	図版16	1 第3号畠跡北側（東から）
	7	第3号掘立柱建物跡		2 第4号畠跡（南西から）
	8	第3号掘立柱建物跡ピット1		3 第4号畠跡（南東から）
図版12	1	第5号掘立柱建物跡（北から）		4 第5号畠跡（東から）
	2	第5号掘立柱建物跡（東から）		5 第6号畠跡（南東から）
	3	第9・11号溝跡（南西から）		6 第6号畠跡（北東から）（1）
	4	第9・12号溝跡（西から）		7 第6号畠跡（北東から）（2）
	5	第12号溝跡（北東から）		8 第7号畠跡（南から）
	6	第14号溝跡（南西から）	図版17	1 第1号住居跡（南から）
	7	第20・21号溝跡（東から）		2 第2号住居跡（南から）
	8	第17・18・30号溝跡（北西から）		3 第2号住居跡遺物出土状況（南から）（1）
図版13	1	第15・20号溝跡（東から）		4 第2号住居跡遺物出土状況（2）
	2	第30・42号溝跡（南東から）		5 第2号住居跡遺物出土状況（3）
	3	第30号溝跡遺物出土状況		6 第2号住居跡遺物出土状況（4）
	4	第40号溝跡遺物出土状況		7 第2号住居跡遺物出土状況（5）
	5	第30・45号溝跡		8 第5号住居跡（南から）
	6	第40・48号溝跡	図版18	1 第5号住居跡カマド（南から）
	7	第48～51号溝跡		2 第6号住居跡（南から）
	8	第56・59・60号溝跡		3 第6号住居跡遺物出土状況（南から）
図版14	1	第58号溝跡（南東から）		4 第6号住居跡遺物出土状況（東から）
	2	第1号土壇（南東から）		5 第6号住居跡遺物出土状況
	3	第1号土壇遺物出土状況（南東から）		

	(南から)	3	第41号住居跡遺物出土状況 (4)
6	第11号住居跡 (南から)	4	第43号住居跡遺物出土状況
7	第12号住居跡 (南東から)		(南から) (1)
8	第12号住居跡遺物出土状況	5	第43号住居跡遺物出土状況
	(南東から) (1)		(南から) (2)
図版19	1 第12号住居跡遺物出土状況	6	第45号住居跡 (西から)
	(南東から) (2)	7	第47号住居跡 (南から)
2	第12号住居跡カマド袖補強材	8	第47号住居跡遺物出土状況 (1)
3	第13号住居跡 (南から)	図版23	1 第47号住居跡遺物出土状況 (2)
4	第13号住居跡遺物出土状況	2	第47号住居跡遺物出土状況 (3)
	(南東から)	3	第48号住居跡 (南から)
5	第13号住居跡カマド (1)	4	第48号住居跡カマド
6	第13号住居跡カマド (2)	5	第48号住居跡カマド遺物出土状況
7	第15号住居跡 (西から)	6	第47・48号住居跡
8	第15号住居跡カマド (西から)	7	第51号住居跡
図版20	1 第15号住居跡遺物出土状況	8	第51号住居跡カマド (南から)
	(西から)	図版24	1 第51号住居跡遺物出土状況 (1)
2	第17・44号住居跡 (南東から)	2	第51号住居跡遺物出土状況 (2)
3	第17・44号住居跡 (南西から)	3	第51号住居跡遺物出土状況 (3)
4	第17号住居跡カマド	4	第51号住居跡遺物出土状況 (4)
5	第44号住居跡カマド	5	第51号住居跡遺物出土状況 (5)
6	第29号住居跡 (西から)	6	第53号住居跡
7	第29号住居跡遺物出土状況	7	第60号住居跡 (西から)
	(西から)	8	第60号住居跡遺物出土状況 (1)
8	第29号住居跡カマド (西から)	図版25	1 第60号住居跡遺物出土状況 (2)
図版21	1 第30号住居跡 (西から)	2	第60号住居跡遺物出土状況 (3)
2	第30号住居跡遺物出土状況	3	第62号住居跡 (南東から)
	(西から)	4	第62号住居跡遺物出土状況 (1)
3	第30号住居跡カマド遺物出土状況	5	第62号住居跡遺物出土状況 (2)
	(西から)	6	第63号住居跡 (西から)
4	第34号住居跡 (南から) (1)	7	第63号住居跡遺物出土状況 (1)
5	第34号住居跡 (南から) (2)	8	第63号住居跡遺物出土状況 (2)
6	第41号住居跡	図版26	1 第63号住居跡遺物出土状況 (3)
7	第41号住居跡カマド	2	第65号住居跡 (東から)
8	第41号住居跡遺物出土状況 (1)	3	第66号住居跡 (南から)
図版22	1 第41号住居跡遺物出土状況 (2)	4	第67号住居跡
2	第41号住居跡遺物出土状況 (3)	5	第66・67号住居跡 (南から)

	6	第70号住居跡（南から）		3	第18号土壇（西から）
	7	第73号住居跡床面検出（西から）		4	第18号土壇遺物出土状況
	8	第73号住居跡遺物出土状況		5	第27号土壇遺物出土状況
図版27	1	第74号住居跡		6	第38号土壇（東から）
	2	第75号住居跡（東から）		7	第45号土壇
	3	第76号住居跡（南東から）		8	第50号土壇
	4	第78号住居跡（南西から）	図版32	1	第51号土壇
	5	第78号住居跡遺物出土状況（1）		2	第52号土壇曲げ物検出状況（1）
	6	第78号住居跡遺物出土状況（2）		3	第52号土壇曲げ物検出状況（2）
	7	第78号住居跡遺物出土状況（3）		4	第53号土壇
	8	第3・6号溝跡（南から）		5	第54号土壇
図版28	1	第3・6号溝跡（北東から）		6	第56号土壇検出状況
	2	第10号溝跡（南から）		7	第59号土壇
	3	第18号溝跡（北から）		8	第71号土壇（東から）
	4	第18号溝跡炭化物検出状況（1）	図版33	1	第72号土壇炭化物検出状況 （南東から）
	5	第18号溝跡炭化物検出状況（2）		2	第72号土壇（南西から）
	6	第20号溝跡遺物出土状況		3	第73号土壇（北東から）
	7	第23・25号溝跡（北西から）		4	第74号土壇炭化物検出状況
	8	第34・36号溝跡（南西から）		5	第74号土壇
図版29	1	第37・38・39号溝跡		6	第75号土壇
	2	第51号溝跡遺物出土状況（1）		7	第76号土壇
	3	第51号溝跡遺物出土状況（2）		8	第1号井戸跡（南から）
	4	第51号溝跡遺物出土状況（3）	図版34	1	第2号井戸跡遺物出土状況（1）
	5	第51号溝跡遺物出土状況（4）		2	第2号井戸跡遺物出土状況（2）
	6	第55号溝跡		3	第3号井戸跡（東から）
	7	第2号土壇（北から）		4	第4号井戸跡（東から）
	8	第3号土壇（南から）		5	第6号井戸跡（北から）
図版30	1	第4号土壇（南から）		6	第7号溝跡（東から）
	2	第4号土壇遺物出土状況（南から）		7	第8号溝跡
	3	第5号土壇（南から）		8	第13号溝跡（東から）
	4	第6号土壇（南から）	図版35	1	第26号溝跡（東から）
	5	第7・8号土壇（北西から）		2	第34号溝跡
	6	第9号土壇（北西から）		3	第52号溝跡
	7	第10号土壇（南から）		4	D-16グリッドピット1根石
	8	第11号土壇		5	基本土層（1）
図版31	1	第15号土壇（北から）		6	基本土層（2）
	2	第18号土壇検出状況（南東から）			

	7	基本土層 (3)		3	第21号住居跡 (第37図1)
	8	基本土層 (4)		4	第21号住居跡 (第37図2)
図版36	1	遺物集中 (北から) (1)		5	第21号住居跡 (第37図3)
	2	遺物集中 (2)		6	第21号住居跡 (第37図4)
	3	遺物集中 (3)	図版41	1	第21号住居跡 (第37図5)
	4	遺物集中 (4)		2	第21号住居跡 (第37図6)
	5	遺物集中下部出土状況 (北東から)		3	第21号住居跡 (第37図7)
図版37	1	弥生出土遺物 (第15図)		4	第22号住居跡 (第40図1)
	2	第8号住居跡 (第23図8)		5	第22号住居跡 (第40図2)
	3	第8号住居跡 (第23図10)		6	第22号住居跡 (第40図3)
	4	第10号住居跡 (第28図1)		7	第22号住居跡 (第40図4)
	5	第10号住居跡 (第28図2)		8	第22号住居跡 (第40図5)
	6	第10号住居跡 (第28図4)		9	第22号住居跡 (第40図6)
	7	第14号住居跡 (第30図1)	図版42	1	第22号住居跡 (第40図7)
	8	第14号住居跡 (第30図2)		2	第22号住居跡 (第40図8)
	9	第14号住居跡 (第30図3)		3	第22号住居跡 (第40図9)
	10	第14号住居跡 (第30図4)		4	第22号住居跡 (第40図10)
図版38	1	第20号住居跡 (第33図1)		5	第22号住居跡 (第40図11)
	2	第20号住居跡 (第33図2)		6	第22号住居跡 (第40図12)
	3	第20号住居跡 (第33図4)		7	第22号住居跡 (第40図13)
	4	第20号住居跡 (第33図5)		8	第31号住居跡 (第47図1)
	5	第20号住居跡 (第33図6)		9	第39号住居跡 (第54図1)
	6	第20号住居跡 (第33図7)		10	第39号住居跡 (第54図3)
	7	第20号住居跡 (第33図8)	図版43	1	第39号住居跡 (第54図4)
	8	第20号住居跡 (第33図9)		2	第39号住居跡 (第54図8)
	9	第20号住居跡 (第33図10)		3	第39号住居跡 (第54図10)
図版39	1	第20号住居跡 (第33図11)		4	第39号住居跡 (第54図11)
	2	第20号住居跡 (第33図12)		5	第50号住居跡 (第60図1)
	3	第20号住居跡 (第33図13)		6	第50号住居跡 (第60図2)
	4	第20号住居跡 (第33図14)	図版44	1	第50号住居跡 (第60図3)
	5	第20号住居跡 (第33図15)		2	第52号住居跡 (第62図1)
	6	第20号住居跡 (第34図16)		3	第55号住居跡 (第67図2)
	7	第20号住居跡 (第34図17)		4	第61号住居跡 (第74図1)
	8	第20号住居跡 (第34図18)		5	第64号住居跡 (第77図2)
	9	第20号住居跡 (第34図19)		6	第64号住居跡 (第77図3)
図版40	1	第20号住居跡 (第34図20)		7	第69号住居跡 (第80図2)
	2	第20号住居跡 (第34図21)		8	第69号住居跡 (第80図5)

	9	第69号住居跡 (第80図6)	7	第22号住居跡 (第41図14)
	10	第69号住居跡 (第80図8)	8	第3・7・50・55号住居跡 (第18・20・60・67図)
図版45	1	第81号住居跡 (第89図2)	図版49	1 第20号住居跡 (第34図22)
	2	第2号掘立柱建物跡 (第96図1)		2 第20号住居跡 (第34図23)
	3	第9号溝跡 (第118図1)		3 第21号住居跡 (第37図8)
	4	第12号溝跡 (第118図4)		4 第50号住居跡 (第60図4)
	5	第12号溝跡 (第118図5)	図版50	1 第55号住居跡 (第67図20)
	6	第12号溝跡 (第118図6)		2 第55号住居跡 (第67図)
	7	第12号溝跡 (第118図7)		3 第3号住居跡 (第18図)
	8	第21号溝跡 (第118図8)		4 第3・7号住居跡 (第18・20図)
図版46	1	第30号溝跡 (第118図10)		5 第8・10号住居跡 (第23・28図)
	2	第30号溝跡 (第118図11)		6 第20号住居跡 (第34図)
	3	第30号溝跡 (第118図13)		7 第20・22号住居跡 (第34・41図)
	4	第30号溝跡 (第118図14)		8 第22号住居跡 (第41図)
	5	第30号溝跡 (第119図17)	図版51	1 第25・31・49号住居跡 (第45・47・58図)
	6	第48号溝跡 (第119図25)		2 第50号住居跡 (第60図)
	7	第40号溝跡 (第119図22)		3 第3号掘立柱建物跡 (第98図1)
	8	第55号土壙 (第122図6)		4 第1号掘立柱建物跡 (第95図1)
	9	第69号土壙 (第122図7)		5 第1号住居跡 (第135図1)
図版47	1	第69号土壙 (第122図8)		6 第2号住居跡 (第138図1)
	2	第69号土壙 (第122図9)		7 第2号住居跡 (第138図2)
	3	第1号円形周溝状遺構 (第125図1)	図版52	1 第5号住居跡 (第142図2)
	4	第1号円形周溝状遺構 (第125図2)		2 第5号住居跡 (第142図3)
	5	第3・7・9・10・20・23・31号住居跡 (第18・20・25・28・33・43・47図)		3 第5号住居跡 (第142図4)
	6	第8号住居跡 (第23図)		4 第6号住居跡 (第144図1)
	7	第39号住居跡 (第54図)		5 第6号住居跡 (第144図2)
図版48	1	第52・54・55・58号住居跡 (第62・64・67・70図)		6 第6号住居跡 (第144図3)
	2	第61・64・69・71・82号住居跡 (第74・77・80・82・92図)		7 第11号住居跡 (第146図1)
	3	第9・30・40・48・57号溝跡 (第118・119図)		8 第12号住居跡 (第149図2)
	4	第1・55号土壙 (第122図)		9 第12号住居跡 (第149図3)
	5・6	第55号住居跡 (第67図)	図版53	1 第12号住居跡 (第149図5)
				2 第12号住居跡 (第149図6)
				3 第13号住居跡 (第151図2)
				4 第13号住居跡 (第151図4)

	5	第13号住居跡 (第151図5)		3	第30号住居跡 (第172図19)
	6	第13号住居跡 (第151図9)		4	第30号住居跡 (第172図20)
	7	第13号住居跡 (第151図10)		5	第30号住居跡 (第172図21)
	8	第15号住居跡 (第154図1)		6	第41号住居跡 (第181図1)
	9	第15号住居跡 (第154図4)		7	第41号住居跡 (第181図2)
図版54	1	第15号住居跡 (第154図3)		8	第41号住居跡 (第181図6)
	2	第15号住居跡 (第154図5)		9	第41号住居跡 (第181図7)
	3	第15号住居跡 (第154図6)		10	第41号住居跡 (第181図8)
	4	第15号住居跡 (第154図9)	図版58	1	第43号住居跡 (第184図1)
	5	第15号住居跡 (第154図10)		2	第43号住居跡 (第184図2)
	6	第17号住居跡 (第157図1)		3	第47号住居跡 (第190図2)
	7	第17号住居跡 (第157図2)		4	第48号住居跡 (第192図1)
	8	第17号住居跡 (第157図3)		5	第48号住居跡 (第192図2)
	9	第17号住居跡 (第157図4)		6	第48号住居跡 (第192図3)
	10	第24号住居跡 (第160図1)		7	第48号住居跡 (第192図5)
図版55	1	第26号住居跡 (第163図1)		8	第51号住居跡 (第196図3)
	2	第26号住居跡 (第163図2)		9	第51号住居跡 (第196図8)
	3	第26号住居跡 (第163図3)		10	第51号住居跡 (第196図10)
	4	第26号住居跡 (第163図4)	図版59	1	第60号住居跡 (第201図1)
	5	第26号住居跡 (第163図12)		2	第60号住居跡 (第201図4)
	6	第26号住居跡 (第163図13)		3	第60号住居跡 (第201図5)
	7	第26号住居跡 (第163図14)		4	第62号住居跡 (第203図2)
	8	第26号住居跡 (第163図18)		5	第62号住居跡 (第203図4)
	9	第29号住居跡 (第168図1)		6	第62号住居跡 (第203図5)
	10	第29号住居跡 (第168図3)		7	第62号住居跡 (第203図6)
図版56	1	第29号住居跡 (第168図6)		8	第62号住居跡 (第203図7)
	2	第29号住居跡 (第168図8)		9	第63号住居跡 (第206図6)
	3	第30号住居跡 (第171図1)	図版60	1	第66号住居跡 (第210図1)
	4	第30号住居跡 (第171図8)		2	第70号住居跡 (第214図1)
	5	第30号住居跡 (第171図9)		3	第73号住居跡 (第216図1)
	6	第30号住居跡 (第171図10)		4	第78号住居跡 (第225図3)
	7	第30号住居跡 (第171図11)		5	第84号住居跡 (第227図1)
	8	第30号住居跡 (第171図12)		6	第10号溝跡 (第257図26)
	9	第30号住居跡 (第171図13)		7	第10号溝跡 (第257図28)
	10	第30号住居跡 (第171図14)		8	第10号溝跡 (第257図29)
図版57	1	第30号住居跡 (第171図16)		9	第11号溝跡 (第257図33)
	2	第30号住居跡 (第172図18)	図版61	1	第11号溝跡 (第257図34)

	2	第11号溝跡 (第258図43)			58～61・63、第298図64)
	3	第20号溝跡 (第258図49)	図版70	1～10	遺物集中 (第298図65～74)
	4	第20号溝跡 (第258図50)	図版71	1～8	遺物集中 (第298図75～77、 第299図78・80・82～84)
	5	第20号溝跡 (第258図51)			
	6	第20号溝跡 (第258図52)	図版72	1～9	遺物集中 (第299図85～87・ 89～92・94・95)
	7	第20号溝跡 (第258図53)			
図版62	1	第4号土壇 (第265図6)	図版73	1～9	遺物集中 (第300図96～99・101～105)
	2	第12号土壇 (第265図13)			
	3	第12号土壇 (第265図15)	図版74	1～7	遺物集中 (第300図106、 第301図107・110～114)
	4	第12号土壇 (第265図16)			
	5	第27号土壇 (第266図24)	図版75	1・2	遺物集中 (第302図116・117)
	6	第27号土壇 (第266図25)		3	第1・2号住居跡 (第135・138図)
	7	第27号土壇 (第266図26)		4	第4・5・6・12号住居跡 (第140・142・144・149図)
	8	第27号土壇 (第266図28)		5	第13号住居跡 (第151図)
	9	第56号土壇 (第266図29)		6	第15・17・19号住居跡 (第154・157・158図)
図版63	1	第56号土壇 (第266図30)		7	第24・29号住居跡 (第160・168図)
	2	第71号土壇 (第266図32)	図版76	1	第26号住居跡 (第163図)
	3	第1号井戸跡 (第269図2)		2	第30号住居跡 (第171・172図)
	4	第1号井戸跡 (第269図3)		3	第34・38・40・41号住居跡 (第174・176・178・181図)
	5	第1号井戸跡 (第269図5)		4	第43・45号住居跡 (第184・187図)
	6	第1号井戸跡 (第269図8)		5	第47・48・53・60号住居跡 (第190・192・198・201図)
	7	第1号井戸跡 (第269図9)		6	第51号住居跡 (第196図)
図版64	1	第1号井戸跡 (第269図13)	図版77	1	第62・63・65号住居跡 (第203・206・208図)
	2	第2号井戸跡 (第271図1)		2	第67・73～76・78号住居跡 (第 212・216・218・220・222・225図)
	3	D-16グリッドピット2 (第282図1)		3	第3・6号溝跡 (第256図)
	4～9	遺物集中 (第293図1・2・5～8)		4	第10・11号溝跡 (第257図)
図版65	1～10	遺物集中 (第293図9～12・16 第294図17・20・24～26)		5	第11・17・51号溝跡 (第258・259図)
図版66	1～6	遺物集中 (第295図 28・30・31・32・34・37)		6	第3～5・10号土壇 (第265図)
図版67	1～6	遺物集中 (第295図33・38・39、 第296図40～42)	図版78	1	第12・15・27・61号土壇 (第265・266図)
図版68	1～9	遺物集中 (第296図43・44・46 ～48・50、第297図51～53)			
図版69	1～9	遺物集中 (第297図54～56・			

	2	第1号井戸跡 (第269図)		7	近世出土遺物 (第318図)
	3・4	第1号井戸跡 (第270図)		8	グリッド (第319図2)
	5	遺物集中 (第293～295図)		9	グリッド (第319図11)
	6	遺物集中 (第295・299～302図)	図版81	1	グリッド (第319図10)
図版79	1	鉄製品 (第154・163・165・181・201図)		2	グリッド (第320図19)
	2	第6号溝跡 (第256図21)		3	グリッド (第320図24)
	3	第48号住居跡・第6号溝跡・ 第10号土壇 (第192・256・265図)		4	グリッド (第320図26)
	4	N-18グリッドピット2・ 遺物集中 (第282・302図)		5	グリッド (第321図31)
	5	第6号住居跡・第11号溝跡 (第144・258図)		6	グリッド (第321図32)
	6	第6・41・48号住居跡 (第144・181・192図)		7	グリッド (第322図45)
	7	第51・62号住居跡 (第196・203図)		8	グリッド (第322図55)
図版80	1	第2号井戸跡・第3号溝跡 (第256・271図)	図版82	1	グリッド (第323図65)
	2	第3・6・11号溝跡 (第256・258図)		2	グリッド (第323図66)
	3～5	遺物集中 (第302図)		3	グリッド (第323図77)
	6	遺物集中 (第302図121)		4	グリッド (第324図86)
				5	グリッド (第325図108)
				6	グリッド (第325図109)
				7	グリッド (第326図114)
				8	グリッド (第319・322図)
				9	グリッド (第323・326図)

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では平成29年度からの5か年計画『埼玉県5か年計画—希望・活躍・うるおいの埼玉—』を策定し、「3. ラグビーワールドカップ2019™及び東京2020オリンピック・パラリンピックの開催」を重点推進課題とし、ハード・ソフト両面の充実を図っている。

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課では、これらの施策に伴う文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

ラグビーワールドカップ2019会場整備に係る埋蔵文化財の所在及び取り扱いについては、公園スタジアム課長から平成28年4月18日付け公スタ第16号で、生涯学習文化財課長（当時）あて、埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて照会がなされた。

平成28年6月19日までラグビー場として使用している点を考慮して、平成28年5月12、13日に事業地に近接する箇所の試掘調査を実施した。その結果、古墳、平安時代の遺構、遺物が検出された。

ラグビー場の使用終了後の6月20、22、23日に場内の埋蔵文化財の有無を確認した結果、古墳時代、古代の遺構・遺物が検出された。既存の北サイドスタンドの解体工事終了後の同年11月15、16日にも試掘調査を実施し、遺構、遺物が検出された。

これらの試掘結果をもとに、平成28年5月25日付け教生文第405-1号、同年7月29日付け教生文第1191-1号、同年11月21日付け教生文第1810-1号で、北島遺跡の取扱いについて次のように回答した。

1 埋蔵文化財の所在

工事予定地内には、次の埋蔵文化財包蔵地が存在します。

名称	種別	時代	所在地
北島遺跡 (No.59-050)	集落跡 墓	弥生・古墳 奈良・平安 中世	熊谷市大字 上川上地内

2 法手続

工事予定地内には、上記の埋蔵文化財包蔵地が存在しますので、工事に先立ち、文化財保護法第94条の規定による発掘通知を提出してください。

3 取扱いについて

「発掘調査を要する区域」については、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

調査にあたっては、実施機関である公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と公園スタジアム課、生涯学習文化財課（当時）の三者で、工事日程との調整、調査方法、調査期間等について協議を行った。その結果、第25次調査については、平成28年8月1日から平成29年3月31日までの期間で発掘調査を実施することとなった。

文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、記録保存のための発掘調査を実施する必要がある旨の指示通知は下記のとおりである。

平成28年6月3日付け教生文第4-248号

また同法第92条の規定による発掘調査届が公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され、それに対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知は下記のとおりである。

平成28年8月12日付け教生文第2-24号（第25次調査）

（埼玉県教育局市町村支援部文化資源課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

北島遺跡（第25次）の調査は、ラグビーワールドカップ2019™会場整備事業に伴い、平成28年度に実施した。今回の調査箇所は会場のメインスタンドに当たる。調査面積は4,480㎡である。

調査は平成28年8月1日から平成29年2月28日にかけて実施した。8月2日に発掘事務所の設置を行った。

また、12月から調査区北側に隣接する地点は追加して調査を行ったため、1月6日に事務所を増設した。

重機による表土除去作業は、上物の撤去作業の関係から2回に分けて実施し、南側を平成28年8月1日から、北側を10月4日から行った。北側隣接調査地点については、12月2日から実施した。

遺構測量用の基準点測量及びグリッド杭打設作業は、各々の表土除去終了後に実施し、9月1日、11月17日、1月12日に実施した。

補助員による作業は8月18日から開始し、それぞれの調査箇所の表土除去作業終了後、遺構確認作業を行った。

調査区南側からは古墳時代後期から平安時代の住居跡など、多数の遺構が検出された。

調査区北側からは、古墳時代後期から平安時代の住居跡、畠跡、溝跡が多数検出された。

北側隣接調査区からは、住居跡や掘立柱建物跡のほか溝跡などが検出された。

3箇所の調査区で確認された遺構については、並行して順次精査を行い、土層断面、遺構平面図、写真撮影等の記録作成作業を行った。

12月22日に自然科学分析委託を、1月24日に航空機による空中写真の撮影を実施した。

2月28日までに発掘調査を終了し、3月3日に発見届(熊谷警察署長宛て)、保管証(埼玉県教育委員会)を提出した後、事務処理を行い、調査を終了した。

なお、引き続き第26～28次の調査を行ったため、器材や発掘事務所の撤去は行わなかった。

(2) 整理・報告書作成

整理・報告書作成作業は、平成29年7月1日から平成30年5月31日までの11箇月間、平成29年度、30年度を跨いで実施した。

各年度の作業は、出土遺物の水洗・注記から開始し、順次接合・復元作業に着手した。接合・復元が終了した遺物は、実測、トレース、採拓を経て、遺構ごとにパソコンで印刷用の挿図を作成した。実測には磁気式3次元元位置計測装置、正射投影画像撮影機などを活用した。平成30年2月・4月には図版用の遺物写真を撮影し、写真図版の版下データを編集・作成した。

同時に、発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図等を照合し、修正を加え第二原図を作成した。その後、第二原図をスキャナでパソコンに取り込み、画像編集ソフトを用いて遺構ごとにトレースし、土層説明等を組み込んで、印刷用の版下とした。

発掘調査で撮影した遺構写真は、平成29年度に整理を進め、写真図版用の版下データを作成した。

平成30年1月から作成した遺構・遺物のデータ、及び自然科学分析結果等をもとに原稿執筆を開始した。執筆した原稿と、遺構・遺物の挿図、写真図版等を組み合わせて、報告書の割付・編集を行った。5月末に原稿を印刷業者に入稿した。

報告書は、6月上旬から7月中旬にかけて3回の校正を経て印刷を行い、7月24日に事業団報告書第446集『北島遺跡XIV』を刊行した。

なお、図面や写真などの記録類や遺物は、5月末に整理・分類のうえ、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成28年度（発掘調査）

理 事 長	塩野谷 孝 志	調査部	
常務理事兼総務部長	木 村 博 昭	調 査 部 長	金 子 直 行
総務部		調査部副部長兼調査第二課長	瀧 瀬 芳 之
総 務 部 副 部 長	黒 坂 禎 二	調 査 部 副 部 長	細 田 勝
総 務 課 長	曾 川 浩 二	調 査 部 副 部 長	赤 熊 浩 一
		主 任	堀 内 紀 明
		主 事	渡 邊 理伊知
		主 事	的 野 美佐子
		主 事	砂 生 智 江
		主 事	木 戸 春 夫
		主 事	久 永 雅 宏

平成29年度（報告書作成）

理 事 長	塩野谷 孝 志	調査部	
常務理事兼総務部長	川 目 晴 久	調 査 部 長	赤 熊 浩 一
総務部		調 査 部 副 部 長	田 中 広 明
総 務 部 副 部 長	黒 坂 禎 二	調査部副部長兼整理第二課長	吉 田 稔
総 務 課 長	曾 川 浩 二	主幹兼整理第一課長	大 谷 徹
		主 任 専 門 員	木 戸 春 夫
		主 事	砂 生 智 江
		主 事	入 江 直 毅

平成30年度（報告書作成）

理 事 長	藤 田 栄 二	調査部	
常務理事兼総務部長	川 目 晴 久	調 査 部 長	瀧 瀬 芳 之
総務部		調 査 部 副 部 長	吉 田 稔
総 務 部 副 部 長	田 中 広 明	調査部副部長兼整理第二課長	山 本 靖
総 務 課 長	新 井 了 悟	主幹兼整理第一課長	福 田 聖

Ⅱ 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

北島遺跡は、熊谷市大字上川上777番地ほかに所在する（第1図）。遺跡は、J R高崎線熊谷駅の北東約3.5kmの熊谷スポーツ文化公園を含む周辺一帯に位置し、南北約1.2km、東西約1.6kmの範囲に広がっている。

熊谷駅には、J R高崎線・秩父鉄道・上越新幹線が乗り入れている。国道17号が東西に横断し、国道407号が南北に縦断している。このように、熊谷市は主要な国道や鉄道が通過する交通の要衝であり、県北地域における中心的役割を担っている。平成17年度には、妻沼町・大里町、平成19年度には江南町と合併し、北は利根川左岸の妻沼小島地区から、南は荒川を越えて一部が比企丘陵に位置する江南地域にまで市域が拡大した。

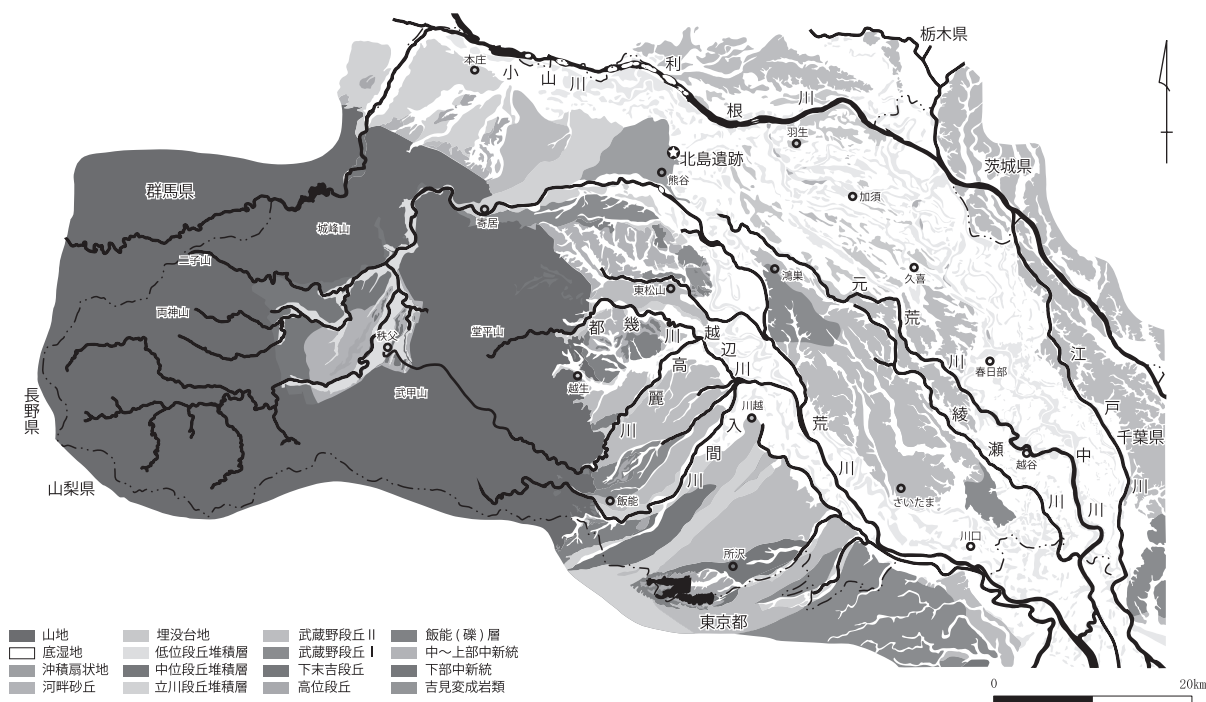
北島遺跡の所在する上川上周辺は、熊谷扇状地上の荒川によって形成された自然堤防にあたり、

水田の中に住宅地が混在する景観が広がっている。

埼玉県は、おおまかに秩父山地を中心とする山地、それに連なる台地・丘陵からなる西部地域と、荒川低地を中心とする日本最大の平野である関東平野の多くを占める東部地域の埼玉平野に分けられる。

熊谷扇状地は、埼玉平野の北に位置し、利根川中流域低地の西半である妻沼低地の西側、荒川低地の北側に当たる。東側を加須低地、西側を妻沼低地と接し、北側には利根川が、南側には荒川が流れ、両河川が最も近接する箇所である（第2図）。また、扇状地の東側は、櫛引台地・江南台地となる。

現在の熊谷市周辺の地形は、丘陵・台地・低地に分けられる。



第1図 北島遺跡の位置

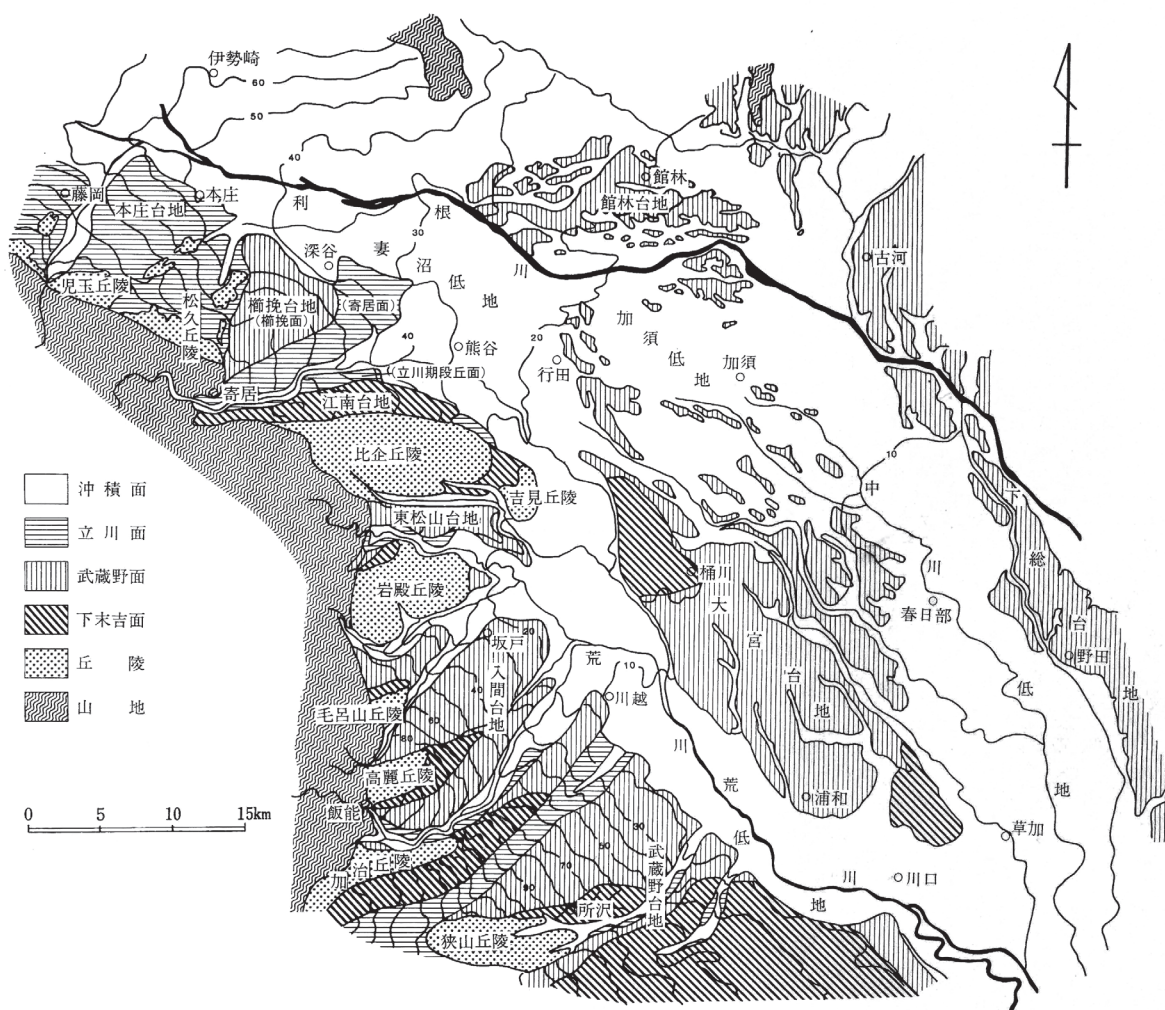
丘陵は南西の江南地域に、比企丘陵がある。比企丘陵は、西方の外秩父山地から半島状に突き出た形の丘陵であるが、山地との境界があまり明瞭ではない。

荒川の左岸地域には櫛挽台地、右岸地域には江南台地がある。櫛挽台地は形成時期の異なる二つの段丘面に分けられる。段丘面の境界は、寄居町大字桜沢から深谷市下郷、同市秋元町へと続く崖線である。西側の高い段丘面は櫛挽面と呼ばれ、武蔵野面に対比される。一方、南東側の低い面は寄居面と呼ばれ、立川期後期に形成された段丘面である。寄居面に相当すると考えられる段丘面は江南台地の北側にもあり、立川期段丘面と呼ばれている。江南台地は下末吉面に相当する。

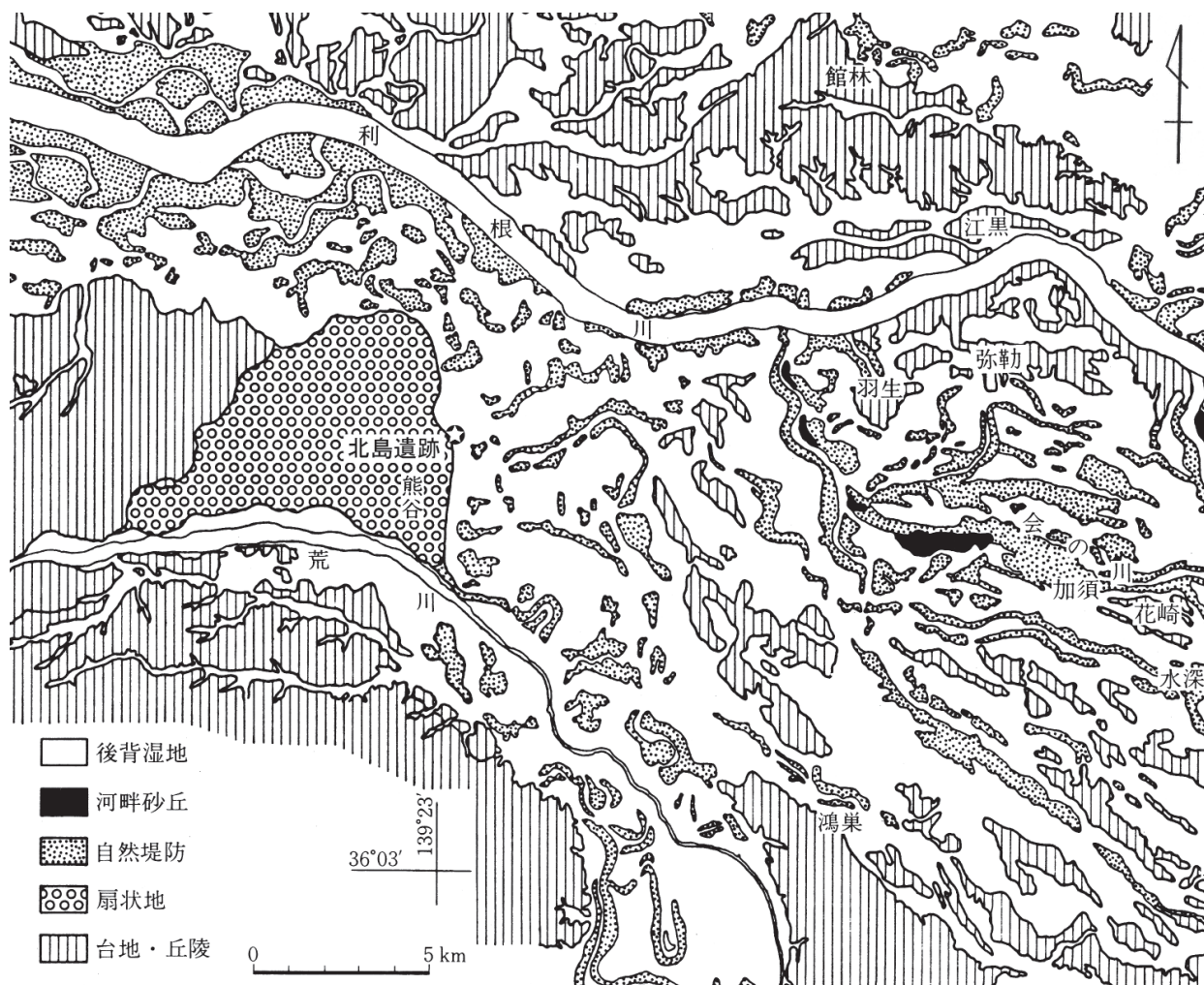
この二つの台地は、荒川が形成した荒川扇状地が台地化したもので、旧石器時代に形成された。

当初の荒川扇状地は寄居町に扇頂があるが、縄文時代以降に下流の深谷市川本明戸付近へ移動したと考えられている。扇頂が移動して新たに形成された扇状地は、熊谷扇状地と呼ばれている。

低地は北半部に妻沼低地がある。妻沼低地は、利根川によって形成された低地で、熊谷扇状地面と、扇状地よりも下流に形成された自然堤防・後背湿地とに分けられる（第3図）。縄文時代後期後半以降には自然堤防上に遺跡が確認されるため、この頃までには、自然堤防や後背湿地が形成されていたと考えられる。熊谷扇状地面には、利根川や荒川の旧河道が発達し、自然堤防や後背湿地が



第2図 埼玉平野の地形面区分図（堀口 1980 より引用 一部加筆）



第3図 利根川中流域の地形区分図

多数形成され、中小河川が幾筋も流れている。

北島遺跡の東側は、羽生市、加須市、行田市にわたって広がる広大な加須低地となっている。この加須低地は関東造盆地運動によって、現在の景観となったもので、本来は館林一大宮台地として連続する台地が形成されていた。下水工事によって地下3mの深さから発見された羽生市小松1号墳の例から、その沈降の度合いが窺え、現在の行田市街付近を中心に多くの箇所で埋没台地が認められる。その沈降にともない、利根川、荒川の支流となる中小河川が乱流し、多くの自然堤防が形

成され、現在の景観が生みだされたのである。

北島遺跡の周辺は、熊谷扇状地の扇端部にあたり、北島遺跡は熊谷扇状地の扇端部と妻沼低地との境界付近を東西に延びる星川左岸の自然堤防上に立地している。現在は地盤改良が進み、平坦な地形となっている。かつて、遺跡の周辺には旧河道跡の小さな谷状の湿地が点在し、湧水の豊富な地である。水田経営に適した地域である一方、荒川や利根川の洪水による被害をたびたび被っていた。北島遺跡第17～19地点でも、洪水の痕跡が確認されている。

2. 歴史的環境

北島遺跡周辺では、近年、低地や自然堤防上に立地する多くの遺跡が調査され、従来から行われてきた台地の調査とあわせて、地域の遺跡の様相が徐々に明らかになってきた。

北島遺跡は昭和60（1985）年から30年以上に亘って、断続的に発掘調査が実施されてきた。その結果、弥生時代中期後半に本格的な集落が営まれ、その後多少の空白期間はあるものの、古墳時代前期・後期・古代と大規模な集落が継続していたことが分かっている。

（1）旧石器時代

北島遺跡に本格的な集落が営まれる以前の旧石器時代は、遺跡の数が極めて少ない。熊谷市内の大里地域の東山遺跡・大境遺跡、江南地域の鹿嶋遺跡、塩西遺跡では、ナイフ形石器や礫群が検出されている。いずれも今から約2万年から1万7000年前の石器群である。

中でも、東山遺跡は吉野川に面した台地上に立地し、ナイフ形石器や削器のほかにも石核や石器製作時に生じた剥片が発見されている。礫群は破碎された礫が主体をなしており、その多くが被熱によって赤く焼け、煤状の付着物も認められた。このほか、櫛挽台地上に立地する籠原裏遺跡からは、黒曜石製の尖頭器が出土している。

（2）縄文時代

縄文時代草創期から後期前半にかけての遺跡は、その多くが荒川右岸の江南台地及び左岸の櫛挽台地上に立地し、少数ながら加須低地西部の埋没台地上にも分布している。

草創期の遺跡は江南台地上に立地する熊谷市原谷遺跡のみで、押圧縄文系の土器が出土している。一方、研究史でも著名な熊谷市宮林遺跡は、櫛挽台地上に立地している。今後、両方の台地で、この時期の遺跡が発見される可能性がある。

続く早期では、撚糸文期の熊谷市萩山遺跡・上

杉館跡・宮脇遺跡などで竪穴住居跡が発見され、江南地域に集中している。

一方、撚糸文期に続く沈線文期や条痕文期の遺跡は少ない。江南地域の熊谷市萩山遺跡において沈線文期や条痕文期の遺物が報告されているが、竪穴住居跡などは確認されていない。また、同じ江南台地上に立地する熊谷市桜山遺跡では、支谷に面した斜面部から平坦地にかけて集石が発見されている。

早期末から前期前半にかけて、関東地方では縄文海進と呼ばれる海水面の上昇があり、荒川や利根川の下流域では盛んに貝塚が形成された。しかし、熊谷市内にまで海水面が達することはなかった。

前期前半の関山式期の遺跡は少ないが、櫛挽台地上に立地する寺東遺跡から関山式土器が出土している。続く黒浜式期になると、櫛挽台地上に立地する熊谷市三ヶ尻（林）遺跡では大規模な集落が営まれている。このような荒川に注ぐ支谷によって開析された台地上に集落を形成する傾向は、縄文時代後期前半まで続く。

諸磯式期から十三菩提式期は、遺跡の発見例が少ない。江南地域の熊谷市上前原遺跡で遺物が出土した程度である。

前期以降、加須低地の埋没台地上にも遺跡が認められるようになる。行田市馬場裏遺跡（29）では、前期前半の関山式の住居跡13軒が調査されている。馬場裏遺跡では中期以降の住居跡も検出されており、縄文時代の中核的な集落と考えられる。中期では、勝坂式期の中葉から加曽利E式期にかけて遺跡数が増加し、大規模な集落が営まれるようになる。代表的な遺跡として、櫛挽台地上に立地する寺東遺跡、江南台地上に立地する三ヶ尻（天王）・上前原遺跡が知られている。加須低地の馬場裏遺跡南側の行田市船郷・内郷通遺跡、陣場遺跡（34）、原遺跡、諏訪山遺跡（D）でも中



第4図 周辺の遺跡(旧石器～弥生時代)

(▲旧石器 ●縄文 ■弥生)

期の遺物が出土している。住居跡の検出例が少なく、小規模な活動に留まるようである。

後期後半になると、それまで遺跡が形成されることのなかった自然堤防上に集落が営まれるようになる。熊谷扇状地の自然堤防上には諏訪木遺跡（2）・中西遺跡（3）・西城切通遺跡（4）などから遺構や遺物が発見されている。特に諏訪木遺跡では堀之内式から安行Ⅲc式までの各型式の土器が出土している。中でも安行Ⅱ式期から安行Ⅲa式期の遺物が最も多く、豊富な土器とともに土偶・耳飾・土版・石棒などの遺物が出土している。また、加曾利B式期の土器集中遺構も確認されている。加須低地では高畑遺跡（31）で後期中葉の住居跡2軒が検出されている。

晩期では、江南台地の南端部に立地する中廓遺跡で堅穴住居跡や土壇などが発見されている。熊谷扇状地の自然堤防上に立地する古宮遺跡（5）では堅穴住居跡は未検出であるが、遺物集中区から有段口縁の粗製深鉢や北関東に分布する天神原式土器が出土している。有段口縁の粗製深鉢の多くには帯状の炭化物が付着し、当時の食料と調理方法を推測する上で重要な資料となっている。

晩期後半から弥生前期までの間の遺跡は極端に少なく、空白の時期となっている。前中西遺跡（6）では、包含層中や他時期の遺構の中から晩期終末の浮線文土器が出土している。

（3）弥生時代

北島遺跡では、第4次調査の際に前期末葉から中期初頭と思われる再葬墓が確認されている。

櫛挽台地崖線下の自然堤防上に立地する熊谷市横間栗遺跡にからも、前期終末から中期中葉にかけての再葬墓群が発見されている。第1号再葬墓は、長管骨5本が縦に並べられて壺の内部に納められていた。

中期前半では、妻沼低地の利根川沿いに熊谷市妻沼地域の飯塚北遺跡があり、中葉まで継続する。再葬墓のほかに、焼土と骨片を大量に含む土壇や、

墓壇と推測される楕円形の土壇など、一次葬から再葬までの工程を窺うことができる。中期中葉の遺跡は、飯塚北遺跡に近接する飯塚遺跡や飯塚南遺跡も存在する。飯塚南遺跡は、再葬墓から土壇墓、土器棺墓への変換期に位置付けられ、その両者が検出されている。堅穴住居跡も確認され、それまでの墓域のみの遺跡から集落と墓域とが共存し、注目されている（熊谷市教委編2005）。

中期中葉の後半から中期後半にかけては、熊谷扇状地扇端部の湧水点及び湧水点を起点とする小河川に沿った自然堤防上に、水稻農耕を基盤とした本格的な集落が営まれるようになる。特に熊谷市と行田市に跨る位置に所在する池上遺跡（7）・小敷田遺跡（8）は、この地域において最も早く営まれた開拓的集落で、学史的にも著名である。池上遺跡は集落の西側から見つかった直線状の溝は河川と接続する可能性が高く、灌漑用の水路であった可能性が考えられている。また、この溝の南側に接して、関東地方では最古級の3基の方形周溝墓が発見されている。さらに、堅穴住居跡内から炭化米が出土し、調査区西側の低地からプラントオパールも検出され、稲作農耕が行われていた可能性が高い（熊谷市教委編2005）。出土土器の中には北陸系の小松式土器や信州系の栗林式土器、南東北系の南御山2式土器・龍門寺式土器などもあり、他地域との交流が盛んに行われていたことがわかる。

この遺跡を端緒として、北島遺跡や古宮遺跡・前中西遺跡など、中期中葉から後期初頭に多くの遺跡が熊谷扇状地に営まれるようになる。これらの中期後葉の集落遺跡は、大規模集落を形成しながらも環濠は設けられていない。

前中西遺跡は、遺跡範囲のほぼ中央で確認された旧河川跡を境として、北側に集落域、南側に方形周溝墓による墓域が広がる。集落は中期中葉から後期前半までの長期にわたって継続するが、中期後半に最も発展する。堅穴住居跡は、分布の状



第5図 周辺の遺跡（古墳時代）

況からいくつかの単位に分けられるが、遺跡の北東部に密集する。墓域を構成する方形周溝墓は、すべて四隅が切れている。方形周溝墓の外に、乳幼児用土器棺墓と木棺墓がある。土器棺墓は中期後半～末には集落域で、後期になると墓域で確認されるようになる（関東弥生文化研究会編2014）。

後期初頭までに、熊谷扇状地の周辺で営まれていた集落は姿を消す。その一方で、江南台地・比企丘陵の末端部に、多くの遺跡が営まれるようになる。熊谷市大里地域の円山遺跡・北廓遺跡、江南地域の富士山遺跡・姥ヶ沢遺跡などが例として挙げられる。

再び北島遺跡周辺の自然堤防上に遺跡が展開するようになるのは、弥生時代の終末期から古墳時代前期にかけてである。

北島遺跡のほかに熊谷扇状地の諏訪木遺跡、妻沼低地の熊谷市一本木前遺跡、荒川低地北端の大里地域の下田町遺跡(39)などが挙げられ、その多くは古墳時代前期に継続する。

（４）古墳時代

北島遺跡周辺における前期の遺跡は、熊谷扇状地の扇端部や妻沼低地に分布する自然堤防上に立地している。

北島遺跡の西側に隣接する天神遺跡から集落や墓域は検出されていないが、堅穴状遺構から前期～中期の土器が一括出土している。

北島遺跡の北東に隣接する田谷遺跡（10）では、弥生時代末から古墳時代前期の住居跡31軒をはじめ、堅穴状遺構・溝跡・土壇が発見されている。この遺跡は、第三遺構面と第二遺構面とが、層厚約0.2mの洪水砂層によって区切られ、水害を被りながらも連綿と集落が営まれていた様子を窺い知ることができる。

北島遺跡の東側に隣接する天神東遺跡（11）からは、前期の住居跡5軒・掘立柱建物跡1棟が発見されている。住居跡から多量の炭化物が確認されていることから、火災に見舞われた集落跡と推

定されている（山本2005a）。

同様に東側に隣接する中条条里遺跡（12）の西端部からは、住居跡17軒・方形周溝墓2基・土壇6基・溝跡7条・土器集中1カ所が確認されている。

北島遺跡の東約1kmに位置する東沢遺跡（13）では、前期～中期の土器とともに、各種の木製農具類が多く出土している。その北約1kmに位置する雷電遺跡では、甕・台付甕・高坏・器台などが一括出土している。

このように、北島遺跡を含む上中条・大塚・今井一帯は、当該期の集落遺跡、古墳が集中し、中条遺跡群と呼ばれている。

中条遺跡群のほかにも、熊谷扇状地の扇端部に前期の遺跡が集中して立地している。前中西遺跡からは堅穴住居跡とともに前期～後期の堅穴状祭祀遺構が、藤之宮遺跡（14）からは堅穴住居跡8軒とともに前期～中期の河川における水辺祭祀跡が、検出されている。

小敷田遺跡からは、堅穴住居跡1軒、周溝持建物跡18軒、掘立柱建物跡3棟などが発見されている。遺物は、畿内地方や東海地方などの外来系土器が多数出土している。また、河川跡からは鋤鍬などの木製品が多量に出土している。

一方、下田町遺跡からも、堅穴住居跡46軒、方形周溝墓17基が検出されている。特に、碧玉製石釧、滑石製腕輪、卜骨といった特殊な遺物が出土し、注目される。

台地上にも前期の集落が形成されている。江南台地の東端部の熊谷市瀬戸山遺跡や船木遺跡などは数十軒単位の住居で構成された中規模の集落である。

中期になると、櫛挽台地の末端部や妻沼低地の北部に小規模な集落が分布する。妻沼低地の中央部においても大規模な集落は姿を消し、小規模集落が点在するようになる。

一方で、本庄・児玉地域では、台地上に中期の



第6図 周辺の遺跡（古代）

大規模集落が展開する。江南台地も比較的密に集落が確認されるようになる。

中期の断絶期間を経て、5世紀末から6世紀の初頭に、再び集落が妻沼低地に進出する。この集落動向は、妻沼低地に留まらず、その東の埼玉古墳群を取り巻く加須低地、笠原低地においても急激に遺跡が増加する。

妻沼低地では、一本木前遺跡・深谷市上敷免遺跡・深谷市城北遺跡などで堅穴住居跡が100軒を超えるような大規模集落が展開する。一本木前遺跡では300軒以上の重複が著しい堅穴住居跡が調査されている。当該期の河川跡も複数確認され、堅穴住居跡との重複関係から、流路の変遷を辿ることができる。そこから、流路の変更によって度重なる水害を被ったにもかかわらず、継続的に営まれていたことが分かる。これらの集落では、数多くの堅穴住居跡が確認されている一方で、掘立柱建物跡は発見されていないのが特徴である。

北島遺跡東側の自然堤防上には、小敷田遺跡、行田市池守遺跡(26)が継続して展開する。池守遺跡では、住居跡は未発見であるが、遺物溜まりから大量の土師器坏と木製品が出土している。全国で初めて出土した地機織機の中筒受けは、本格的な布生産を具体的に示すものとして注目される(中島2008)。

現在の行田市域の東側に当たる加須低地の埋没ローム台地上の埼玉古墳群周辺には、神明遺跡、林遺跡、馬場裏遺跡、屋敷通北遺跡、陣場遺跡、船原・内郷通遺跡などの後期の集落跡が多く分布している。「小針型坏」の提唱から、地域を代表する遺跡として知られている小針遺跡は、後期から平安時代まで継続して営まれ、160軒以上の住居跡が調査されている。

南側の忍川の自然堤防上には、行田市武良内・中通遺跡、高畑遺跡が知られている。高畑遺跡では、方形の大規模な区画溝が検出されており、豪族居館との関係も推定されている(金子1998)。

埼玉古墳群の造営とほぼ時を同じくして始まった行田市築道下遺跡は、元荒川を利用した水運の拠点と考えられる大集落遺跡である。幅の狭い自然堤防上に、6世紀初頭から8世紀前半の住居跡789軒、掘立柱建物跡239棟、井戸跡606基、溝跡429条等が激しく重複している。特に7世紀後半から建てられ始めた掘立柱建物跡群は、県内でも最多の棟数とともに、元荒川を意識した規則的な配置が複数見られ、遺跡の性格をよく示すものとして注目される。北島遺跡においても、規則的に配置された掘立柱建物群の造営が開始される時期でもあり、両者の関係が問題となるであろう。

一方、和田吉野川、現荒川を超えた大里地区の低地には、住居跡300軒余りの集落、下田町遺跡がある。碧玉製石釧、滑石製腕輪子持勾玉、紡錘車、白玉、石製模造品などの多くの石製品が出土し、未成品もみられるため、石製品の製作が行われていたと推定されている。特に溝跡から大量の土器や木製品、ハマグリ、カキなどの海産の貝やイルカなどの海獣の骨が廃棄された状態で発見され、東京湾岸との直接の交易推定されている。

諏訪木遺跡では、後期の河川祭祀跡が調査されている。雌馬の馬頭骨や木製壺鐙、管玉・切子玉・勾玉といった玉類、滑石製模造品とともに、土師器・須恵器が出土し、地域首長の関与が窺える大規模な水辺の祭祀の具体的な様相が明らかになっている。

北島遺跡周辺の古墳時代は、埼玉古墳群を除いては語れない。埼玉古墳群は、5世紀第4四半期に金錯銘鉄剣を出土した稲荷山古墳を嚆矢に、6世紀末の中の山古墳まで、墳長100mを超える大前方後円墳が造営され続けた。当時の武蔵国造の奥津城と考えられ、古墳群に埋葬された首長の動向が地域全体に多大な影響を与えた。周辺の集落、古墳群の隆盛は、ほぼ埼玉古墳群の造営時期と重なる。

埼玉古墳群の成立期である5世紀末から6世紀

初頭になると、それと軌を一にして、東側の北島遺跡周辺の妻沼低地、埼玉古墳群の北側に当たる加須低地の利根川沿いに多くの古墳が築造されるようになる。

北島遺跡の北側には中条古墳群が造営されている。墳長43.8mの帆立貝形前方後円墳の鎧塚古墳(16)では、後円部の北東側と南東側から須恵器の大型器台を用いた墓前の儀礼跡が検出されている。女塚1号墳(17)も同様の帆立貝形前方後円墳である。

埼玉古墳群の北側には、行田市斎条(C)、大塚(B)、酒巻(A)、大稲荷、新郷、小見、若小玉などの多くの古墳群が知られている。

埼玉古墳群最後の戸場口山古墳(方墳)が築造される7世紀前半にも、小見、若小玉の古墳群では引き続き古墳の造営が続く。墳長127mの真名板高山古墳(前方後円墳)、漆塗木棺・銅碗が出土し、関東の石舞台として知られる八幡山古墳、絵画古墳である地蔵塚古墳(円墳)などである。

埼玉古墳群の終焉とともに、隆盛を見せていた周辺の集落も減少し、7世紀後半から古代へと移行していく。併せて8世紀にまで集落の続く集落が新たに登場する。

(5) 古墳時代末から古代初頭

現在の熊谷市は、幡羅郡・男衾郡・大里郡・埼玉郡・横見郡に跨る広大な地域で、北島遺跡の周辺は幡羅郡に属すると考えられている。幡羅郡の中心は現在の深谷市にあり、その範囲は熊谷市西部・深谷市東部・妻沼町に及ぶ。

『北島遺跡V』で述べられたように、7世紀後半のある段階に、北島遺跡周辺も国郡制に先行する国評制に編成されていたと推定できる。その物証となる資料が、奈良県明日香村に所在する日高山瓦窯から出土した「前玉評 大里評」という刻書のある文字瓦である。日高山瓦窯は藤原京の建設に伴って操業を停止した瓦窯であり、遅くとも天武・持統朝段階には、前玉評と大里評が存在し

ていたことを示す。

このように7世紀末には、北島遺跡の周辺が既に地方行政単位の一つとして、評に編成されていたと考えられる。

櫛挽台地の突端では、三ヶ尻(天王)遺跡が終焉を迎える。その一方で、樋の上遺跡・在家遺跡・上辻遺跡・下辻遺跡・東方遺跡などが新たに登場する。

中でも東方遺跡では、大型の掘立柱建物跡が確認されている。隣接する西別府廃寺からも7世紀後半の堅穴住居跡が確認されており、評の中核的な建物群が建築されていた可能性がある。

東方遺跡に隣接する西別府祭祀遺跡は湧泉に対する祭祀遺跡である。7世紀代では、人形・馬形・櫛(横櫛)形・勾玉形・剣形などを模した石製模造品を用いた祭祀が行われていた。8世紀以降になると、石製模造品に替わって坏・埴・皿といった土器を用いて祭祀が行われるようになる。

北島遺跡周辺では、光屋敷遺跡(18)・中条遺跡群などが姿を消し、北島遺跡をはじめとして、諏訪木遺跡・前中西遺跡・中島遺跡・肥塚中島遺跡(19)などで集落が継続的に営まれている。特に諏訪木遺跡からは堅穴住居跡や掘立柱建物跡のほかに河川祭祀跡が確認され、斎串・人形や馬形といった形代の木製品や銅鉦・皇朝十二銭の一つである長年大寶・銚帯具などが出土している。そのほか、土師器・墨書のある須恵器・三彩陶器・灰釉陶器・緑釉陶器なども河川祭祀跡から出土しており、その内容からも、北島遺跡とともに郡の中核となる遺跡と考えられる。

これらの遺跡群の東側になる小敷田遺跡からは、著名な公出挙を示す木簡が出土している。池上遺跡からは整然と配置された掘立柱建物群とともに、北島遺跡と並んで多量の墨書土器が出土しており、両遺跡付近を郡家とする説もある(宮瀧2002)。加須低地には、古墳時代から継続する北大竹、高畑遺跡・小針遺跡・馬場裏遺跡・築道下遺跡が古

代にも継続して分布している。

竪穴建物跡789軒、掘立柱建物跡146棟が調査された築道下遺跡は、北島遺跡と並ぶ県内屈指の集落遺跡である。幅の狭い自然堤防上に著しい重複関係をもって造営され続けた様相は、この遺跡が地域にとっていかに重要な位置にあったのかよく示している。小針遺跡からは掘立柱建物跡十数棟とともに、「丈部鳥麻呂」の銘のある紡錘車や円面硯が出土している。

北島遺跡とその周辺、小敷田遺跡から築道下遺跡にかけては、元荒川と当時複雑に流路を変えていた利根川が最も隣接する箇所である。幡羅郡と埼玉郡が接する北島遺跡周辺は、河川交通の上からも、両郡にとって重要な地域であったと推定される。

7世紀後半から8世紀にかけては、畿内と地方とを結ぶ官道が整備された時期でもある。埼玉県を南北に縦断する東山道武蔵路も例外ではない。推定ルートは、北島遺跡の西側を通過し、河川交通と合わせて北島遺跡周辺の隆盛を支える一つの要因と考えられる。

（6）古代

8世紀になると妻沼低地では、熊谷市別府条里・中条条里（12）・行田市南河原条里（25）・道ヶ谷戸条里など、武蔵国最大の条里地帯が形成される。北島遺跡でも第17地点及び第18地点で条里跡が発見されている。こうした広大で肥沃な水田域も北島遺跡周辺の隆盛を支えたと考えられる。

7世紀後半に、新たに開始した各集落は、9世紀後半になって新たに再編され、遺跡の数や規模が縮小していく。櫛挽台地の突端では、樋の上遺跡、在家遺跡、上辻遺跡、下辻遺跡が終焉を迎え、原遺跡のみが継続する。

熊谷扇状地の扇端部でも、前代から継続して集落が営まれていた前中西遺跡・中島遺跡・肥塚中島遺跡などが姿を消す。

一方、諏訪木遺跡では継続的に集落が営まれて

いる。諏訪木遺跡は、9世紀前半ころから突如として溝で区画された区域に掘立柱建物が建ち並び、10世紀後半まで継続する。3棟の四面庇建物を中心として合計31棟もの掘立柱建物が、中央に広場の空間を形成しながら計画的に配置されている。また、多数の灰釉陶器・緑釉陶器・皇朝十二銭の長年大寶が出土している。こうした点から、官衙に関わる集落であると考えられている（熊谷市教委編2005）。

池上遺跡では、新たにこの時期の掘立柱建物跡群が確認されている。

古宮遺跡では9世紀代を中心に、竪穴建物跡90軒余りが調査されている。北島遺跡周辺が古代においても継続して地域の中心的な役割を担っていたと考えられる。

一方、加須低地には、埼玉古墳群の浅間塚古墳の墳頂に延喜式内社に比定されている前玉神社があり、その南側から区画溝の可能性のある溝跡が検出されている。周辺の埋没台地上には古墳時代からの継続的な集落の陣場遺跡や小針遺跡、9世紀後半から10世紀初頭を中心とする原遺跡、8世紀後半から9世紀前半の野合遺跡（32）が知られている

分布図の東側には大同年間（806～809）に創建されたと伝えられる盛徳寺があり、奈良時代末から鎌倉時代の瓦が採集されている（栗原1975）。

また、下田町遺跡では8世紀に集落が急速に収縮するが、総漆塗りの木製壺鐙が出土するなど官人と密接に関係していたと推定される。

他にも熊谷市街の宮町遺跡（20）からは、平安時代の四面庇付建物、完形の坏類を一括廃棄した土壇、「上家」「楊井」の墨書土器が出土し、隣接する延喜式内社の高城神社との関係が推定されている。

10世紀後半には集落の縮小傾向が顕著なものとなり、掘立柱建物は激減し、住居のみの小規模な集落が点在する程度となる。



第7図 周辺の遺跡（中・近世）

第1表 遺跡地図に掲載した遺跡の一覧表

1	北島遺跡	10	田谷遺跡	19	肥塚中島遺跡	28	柳坪遺跡	36	石田堤遺跡
2	諏訪木遺跡	11	天神東遺跡	20	宮町遺跡	29	馬場裏遺跡	37	宝養寺古墳
3	中西遺跡	12	中条条里遺跡	21	熊谷氏館跡	30	林遺跡	38	袋・台遺跡
4	西城切通遺跡	13	東沢遺跡	22	成田氏館跡	31	高畑遺跡	39	下田町遺跡
5	古宮遺跡	14	藤之宮遺跡	23	中条氏館跡	32	野合遺跡	A	酒巻古墳群
6	前中西遺跡	15	瀬戸山遺跡	24	忍城	33	武良内遺跡	B	犬塚古墳群
7	池上遺跡	16	鎧塚古墳	25	南河原条理遺跡		(鴻池遺跡)	C	斎条古墳群
8	小敷田遺跡	17	女塚1号墳	26	池守遺跡	34	陣場遺跡	D	佐間古墳群
9	天神遺跡	18	光屋敷遺跡	27	文珠前遺跡	35	愛宕神社古墳		(諏訪山遺跡)

(7) 中世

遺跡の減少傾向は、12世紀まで続き、再び遺跡数が増加するようになるのは13世紀以降のことである。この間、天仁元(1108)年に上信国境の浅間山が噴火し、上野と武蔵の両国には、大量の火山灰が降り注いだ。この火山灰は多くの田畠を覆い、甚大な被害をもたらした。12世紀における遺跡の減少に拍車をかけた。

北島遺跡周辺における中世の遺跡の多くは、13世紀以降の遺跡である。

中条氏館跡は、熊谷扇状地の扇端部外側の自然堤防上に立地し、中条氏に所縁のある常光院を中心として広がっている。中条氏館跡は、中条家長(1165～1236)が居住した館で、12世紀後半に建立されたと考えられている。常光院は、祖父である常光の菩提を弔うため、建久3(1192)年に家長によって、館内に建立されたのが始まりと伝えられている。

常光院東遺跡・権現山遺跡などからは、13世紀から14世紀のかわけなどが出土している。

光屋敷遺跡(18)は、中条常光の館跡があったと考えられている。発掘調査によって居館の堀と推測される溝が確認されている。遺物は、かわらけ・板碑などが出土している。

北島遺跡の南には成田氏館跡(22)と、菩提寺である龍淵寺がある。龍淵寺は、応永18(1411)年、成田左京亮家時が和庵清順を招聘して開山したとされている。その後、永禄5(1563)年に焼

失し、翌年には成田肥前守泰季(1516～1590)によって復興されたという。

15世紀後半以降、成田氏は居館を現在の行田市忍城(24)に移す。忍城は「忍の浮城」という異名をもつように周囲を河川・沼沢に囲われている。天正18(1590)年、豊臣秀吉の小田原征伐に伴い、石田三成を総大将とする豊臣方によって、城の北側を流れる利根川を利用した水攻めを受けるも、落城しなかった。その際、豊臣方によって築堤された総延長28kmに及ぶ石田堤(36)は、行田市から鴻巣市にかけてその一部が残存している。

熊谷氏館跡(21)は、現在の熊谷寺の地に位置していたといわれており、熊谷寺は、熊谷直実(1141～1208)が建立した庵の跡地に建てられたと伝えられている。

熊谷氏館跡の東側には、宮町遺跡が隣接し、調査区の西側に集中する7条の溝跡が確認された。東側には中世の遺構が存在せず、溝跡は調査区の西側に続くことから、隣接する熊谷氏館跡との関連が想定されている。

(8) 近世

近世において、熊谷一帯は、中山道の重要な宿駅として発展していった。熊谷宿は現在の熊谷市中央部に位置し、宿を中心に中山道から熊谷秩父道・熊谷大田道・行田道・熊谷川越道などが分岐する交通の要衝であった。

熊谷宿及び周囲の村々は忍領に属し、西部と北部については旗本領で、なかには幕府領・藩領も

含まれていた。北島遺跡の所在する上川上は忍領に属していた。

熊谷市内には、多くの用水路がかつては存在していた。特に、慶長7（1602）年から伊奈忠次によって設置された荒川六堰は、市域に所在した

村々の貴重な用水源になった。北島遺跡周辺はその供給を受け、広大な水田が広がっていたと考えられ、水田とその間に屋敷林が分布する景観が広がっていた。

Ⅲ 遺跡の概要

1. 北島遺跡の概要

北島遺跡は、荒川によって形成された自然堤防上に立地し、熊谷扇状地の扇端部と妻沼低地との境界付近に位置している。

北島遺跡は、1985（昭和60）年から30年以上もの間、各種の開発事業に伴い、断続的に発掘調査が実施されてきた。その結果、縄文時代晩期から近世に至るまでの膨大な各種の遺構・遺物が検出されている。

なお、北島遺跡では当事業団の調査区を地点名で呼んでいたが、市教育委員会の調査と合わせた回数との混同を避けるため、本調査中から回数での呼称に変更した。

縄文時代晩期は遺物のみが検出され、第14地点及び第15地点で晩期終末の浮線文土器が出土している。

弥生時代の遺構は、第14地点～第17地点・第19地点に集中している。また第4地点からは前期末葉～中期初頭と思われる再葬墓が確認されている。

第17地点・第19地点では関東地方で最古級の水田跡が、所謂合掌造りの堰跡から分水する用水路跡を伴って検出されている。第19地点の集落跡・土壌墓群と合わせて、関東地方における初期農耕集落の様相を具体的に示すものである。

古墳時代の遺構は、第12地点・第14地点～第17地点・第19地点・第20地点と、遺跡の東側にまとまっている。

第19地点の前期の集落は、幅3m前後の「方形環濠」によって区画されている。この環濠は集落の成立段階から存在し、住居域と墓域を明瞭に区別する計画的な集落形成が窺える（山本2005b）。溝の東側クランク部分付近からは加工された木材が大量に出土し、区画内への進入路となる木橋の存在を想起させるが、柵列や門などの痕跡は明確ではない。この方形環濠の北側には方形周溝墓

群が展開し、集落と墓域の全体の様相が明らかになっている。

第19地点からは、古墳時代後期の円墳2基が検出されており、墳丘は削平されているものの、人物埴輪、馬形埴輪等の多くの埴輪が出土している。

古代の遺構は、遺跡の全面に広がっており、埋没河川と集落域との関係によって集落の変遷を窺い知ることができる。北島遺跡は、時代によって浮き沈みがあるものの、7世紀後半から11世紀まで古代の全期間を通じて継続して集落が営まれている。7世紀後半になると、それまで住居で構成されていた集落に、4×2間や2×2間の掘立柱建物群が出現し、集落の規模も拡大する。さらに8世紀では、掘立柱建物が住居を凌駕するようになり、掘立柱建物の配置に規則性を見出すことができる。前述の諏訪木遺跡とともに中心的な施設として機能していた可能性が高い。

特に第19地点では、奈良時代には区画溝によって区画された倉庫と居住施設が、平安時代には築地堀によって区画された五間の四面庇建物が建てられ、大量に出土した灰釉陶器・緑釉陶器とともに郡司層に関わる居宅であったと推定される。

さらに、東側の古墳群中の第2号墳では土壌墓が1基確認されている。墓壇底面の北側でヒトの骨片と歯がまとめて発見され、西壁際からは山吹双鳥鏡と短刀片も出土している。鏡は、その特徴から、平安時代後期の12世紀中ごろの製作とされているが土壌墓の造営年代については、和鏡を副葬する土壌墓が流行した平安時代後期から鎌倉時代初期と幅をもたせるのが妥当とされている。土壌墓は、墳丘を意識して選地が行われたと考えられる。

また、広大な遺跡内ではこれまでに6条の道路跡を検出している。特に第19地点で検出した第4号道路跡は6m幅で、波板状の凹凸面が認めら

れることから、「傳路」に相当すると考えられる。この道路跡は、調査区の西南部から南辺中央にかけての範囲で検出した。北西から南東方向に走り、調査区の南端付近で南側に曲がる。前述の東山道との具体的な関係は不明だが、前述の築地塀を伴う四面庇の五間建物と合わせて、北島遺跡と古代の道路交通との関係を具体的に示す遺構として評価できよう。

中世・近世の遺構は、第19地点で検出した。

第200号溝跡からは、近世の坎樋の痕跡が確認された。この溝跡は東西に走り、上川上村の用水路、松河堀を介して、上中条・大塚村方面へ流れていたと推定されている。この坎樋からは、天保通寶や嘉永3（1850）年の護摩札が出土した。この護摩札には、「醫王薬師」という墨書があり、北島遺跡から西に500m程に位置していた上川上村の醫王寺とも考えられている。現在は廃寺になっているものの、醫王寺には薬師堂があり、薬師如来が本尊だったという。

既に調査を行った各地点の概要は、次のとおりである（第8図・第2表）。

第1地点 熊谷スポーツ文化公園内のラグビー場（Aグラウンド）建設に伴い調査を実施した。遺跡西方に位置する。

遺構の大半は、調査区の西半分から検出された。8・9世紀の竪穴住居跡と掘立柱建物跡で構成された集落である。東半では、溝跡群と浅間B軽石層によって覆われた平安時代の水田跡が確認されている。溝の一部には溜池状の施設が見つかった。

第2地点 スポーツ文化公園内のソフトボール場建設に伴う調査である。遺跡中央に位置する。

9世紀の大型の掘立柱建物跡群と竪穴住居跡が検出された。遺跡の西半部の中心的建物群と推定されている。

第3地点 スポーツ文化公園内の道路建設に伴う

調査である。第2地点の南側に位置する。

調査区全面から7～9世紀の竪穴住居跡が検出され、特に東側で多く認められた。ほかに、中世の溝跡や水田跡にかかる溝跡も確認されている。

第4地点 スポーツ文化公園内の道路建設に伴う調査である。第3地点の西側に位置する。

調査区の東半では、7～9世紀の竪穴住居跡と掘立柱建物跡が、第3地点から続いている。西半では、浅間B軽石層で覆われた平安時代の水田跡が第1地点から続いている。

第5地点 さいたま博覧会シンボルタワーの建設に伴う調査である。第1地点と第2地点との間に位置する。本書の報告箇所第25次調査区が西側に隣接する。

7～9世紀の竪穴住居跡群が密集した状態で検出されている。調査区の北側からは、東西に延びる道路跡と考えられる2条の平行した溝跡が確認されている。

第6地点 スポーツ文化公園内の道路建設に伴う調査である。遺跡の西端部に位置する。

調査区全面から7～9世紀の集落跡が検出されている。第6地点の西側は、河川跡と考えられている。

第7地点 スポーツ文化公園内の調節池建設に伴う調査である。遺跡の中央付近に位置する。

調査区の北半では、7～8世紀の掘立柱建物跡を中心とする集落が展開し、小規模な竪穴住居跡群とピット群が併存している。南半は緩やかに傾斜し、旧流路へと続く。坏坑類を中心とした大量の土器と木製品が出土している。

第8地点 用水路建設に伴う調査である。遺跡の中央、第2地点の東側に位置する。

河川跡に向かう傾斜部に当たり、疎に9世紀の竪穴住居跡と掘立柱建物跡、ピットが検出された。

第9地点 用水路建設に伴う調査である。遺跡の東側に位置する。

多数の溝跡のほか、8・9世紀の竪穴住居跡と

掘立柱建物跡が少数ながら検出されている。

第10地点 スポーツ文化公園内の調節池建設に伴う調査である。遺跡の東側、第9地点の南側に位置する。

大型の溝跡群と、条里地割に関わる大型の溝跡が検出されている。調査区の南側では、8世紀の掘立柱建物跡群が「コ」の字状に配置されている。第11地点 用水路建設に伴う調査である。第10地点の南側に位置する。複数の溝跡群と土壌を検出した。

第12地点 用水路建設に伴う調査である。遺跡の東側に当たり、第11地点の北側、第19地点の西側に沿った箇所位置する。

第19地点から連続する弥生時代中期・古墳時代前期・8～10世紀の竪穴住居跡・区画溝・土壌群が調査されている。

第13地点 用水路建設に伴う調査である。遺跡の東側に当たり、第10地点の南側、第16地点の北側に位置する。

第10地点から広がる8世紀後半から9世紀前半の掘立柱建物跡群と墓壇群、多量の遺物が出土した10世紀の溝跡が検出されている。第14地点に続く河川跡が検出されている。

第14地点 上之調節池建設に伴う調査である。これまでの調査区のうち、最も南側に位置する。

8世紀後半から9世紀の竪穴住居跡と掘立柱建物跡・溝跡が多く検出されている。調査区の西側で検出された規模の大きい河川跡は、第13地点に続いている。

第15地点 上之調節池建設に伴う調査である。遺跡の南側に当たり、第14地点の西側に隣接する。

調査区南半では、8世紀後半から9世紀の掘立柱建物跡・竪穴住居跡群が軸を揃えて配置され、「コ」の字状の掘立柱建物跡の配置も認められる。加えて、それらを迂回する道路跡が検出されている。一方、北半では、やや疎らではあるものの、同時期の竪穴住居跡群が認められる。また、第14

地点に続く規模の大きな溝跡が確認されている。

第16地点 上之調節池建設に伴う調査である。遺跡の南側に当たり、第13地点と第14地点に隣接する。

8世紀後半から9世紀の小規模な竪穴住居跡と掘立柱建物跡、9～11世紀の多数の溝跡群が検出されている。

第17地点 スポーツ文化公園のメインスタジアム建設に伴う調査である。第10地点の東側に位置する。

第19地点から延びる用水路から取水した、弥生時代中期以降平安時代までの水田跡が重層する文化層として検出されている。古墳時代前期の竪穴住居跡・畠作遺構、8・9世紀の大型掘立柱建物跡を伴う集落跡が検出されている。

第18地点 スポーツ文化公園の調節池建設に伴う調査である。遺跡の南東側に当たり、第17地点の南東側に位置する。

調査区全面から浅間B軽石に覆われた水田跡が検出されている。また、東側は、堆積層の状況から近世には大きな河川あるいは沼地であったと推定されている。

第19地点 スポーツ文化公園の屋内競技場建設に伴う調査である。遺跡の東側に当たり、第12地点の東側に隣接する。

弥生時代中期後半の集落跡、古墳時代前期の集落跡・墓域、古墳時代後期の古墳跡、古代の集落跡、中・近世の数多くの遺構が検出されている。

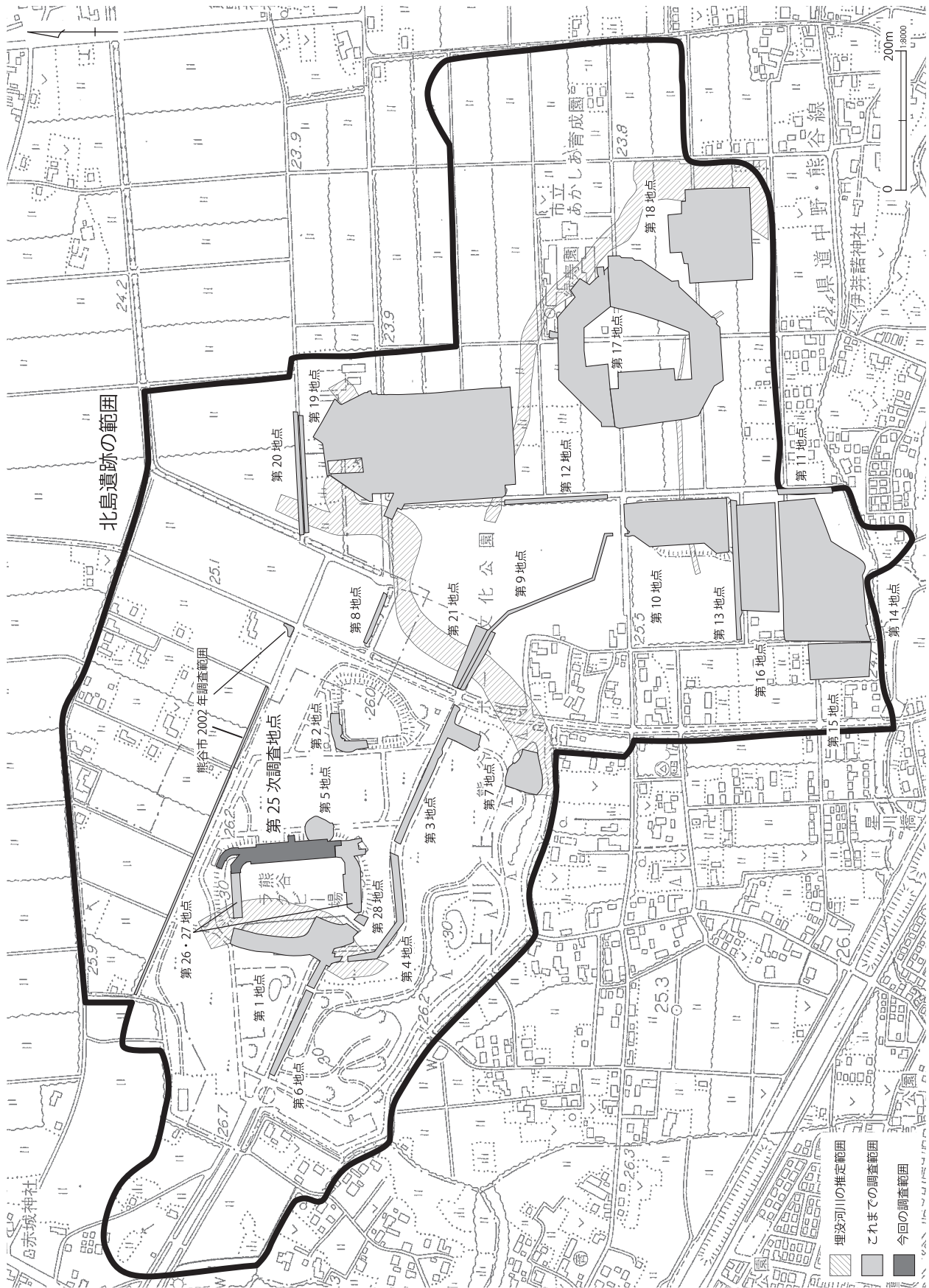
弥生時代から平安時代まで、調査区の北側を東流する河川から合掌型の堰によって分水された用水が、南北に調査区を貫いて第17地点の水田に供給されている。

第20地点 スポーツ文化公園の外周道路建設に伴う調査である。遺跡の東側に当たる。第19地点の北側に位置する。西側からは第19地点に続く河川跡が検出されている。

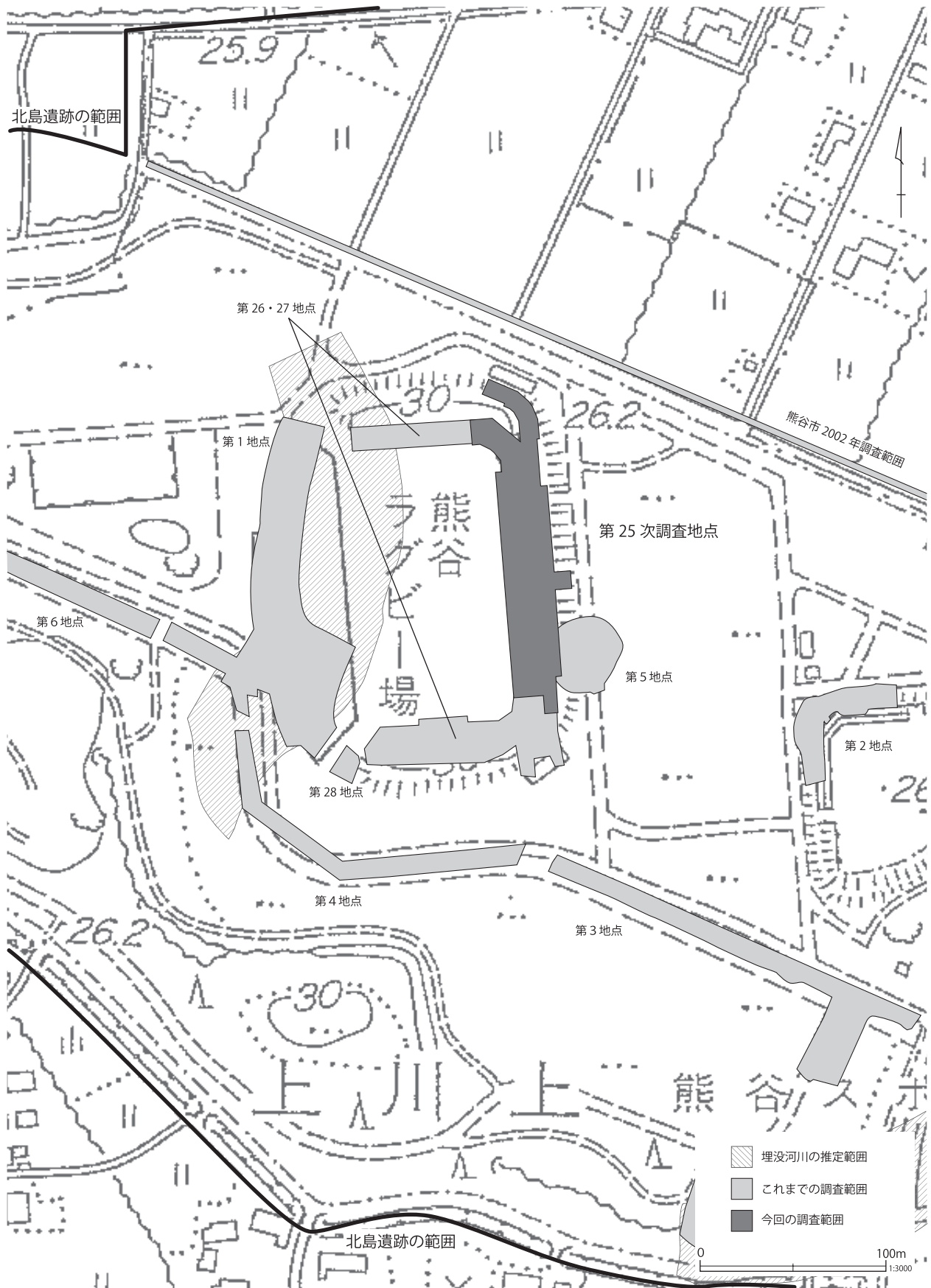
古墳時代前期の集落跡・畠跡、8・9世紀の集

第2表 これまでの北島遺跡の調査概要

地点名	調査面積	竪穴 住居跡	掘立柱 建物跡	井戸跡	土 壙	溝 跡	柵 列	道路跡	水田跡	その他	文 献
第1地点	5,800	21	9	5	24	17			○		i
第2地点	1,300	9	13	2	13	24					i
第3地点	2,900	54	1	9	34	65					i
第4地点	1,800	45	7	3	17	17					i
第5地点	1,600	37	2	2	44	25					i
第6地点	1,000	29	6	5	38	14				墓墳 (1)	i
第7地点	2,200	4	15	1	18	20					i
第8地点	300	2	3		4	3					i
第9地点	900	4	1	1	7	35				火葬墓 (2)	ii
第10地点	10,000	2	8		15	35					ii
第11地点	150				7	15					ii
第12地点	1,250	21	2	2	114	30					iii
第13地点	1,400		3	1	19	31					iii
第14地点	19,100	72	43	15	78	102	6			再葬墓 (1)	iv
第15地点	4,200	34	9		28	29		1	○		iv
第16地点	8,480	11	15	20	48	119	2		○	※	iv
第17地点	10,000	20	6		114	4	1		○	河川跡 (1) 竪穴状遺構 (42)	vii xi xii
第18地点	13,000					5			○		xii
第19地点	10,000	423	78	95	790	537		5	○		v vi viii ix x xi xiii
第20地点	1,780	45	4	1	21	44			○	畠跡 (1) 河川跡 (1)	vii
第21地点	2,250	4			30	35					xi
第25次	4,480	81	5	6	67	63				円形周溝状遺構 (2) 畠跡 (7)	xiv
熊谷市 (22 ～24次)	1,175	16		1	16	56				竪穴 (1) 畠跡 (3)	xv
※ 地鎮跡 (1) 古墳跡 (8) 水路 (1) 堰跡 (4) 河川跡 集石遺構 (1) 木器集積遺構 (1) 木棺墓 (1) 方形周溝墓 (27)											
i	『北島遺跡』			1989	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第81集						
ii	『北島遺跡Ⅱ』			1989	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第88集						
iii	『北島遺跡Ⅲ』			1991	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第103集						
iv	『北島遺跡Ⅳ』			1998	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第195集						
v	『北島遺跡Ⅴ』			2002	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第260集						
vi	『北島遺跡Ⅵ』			2003	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集						
vii	『北島遺跡Ⅶ』			2004	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第291集						
viii	『北島遺跡Ⅷ／田谷』			2004	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第292集						
ix	『北島遺跡Ⅸ』			2004	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第293集						
x	『北島遺跡Ⅹ』			2005	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第302集						
xi	『北島遺跡Ⅺ』			2005	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第303集						
xii	『北島遺跡Ⅻ』			2005	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第304集						
xiii	『北島遺跡Ⅼ』			2005	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第305集						
xiv	『北島遺跡Ⅽ』			2018	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第446集						
xv	『北島遺跡』			2002	埼玉県熊谷市教育委員会						



第 8 図 北島遺跡のこれまでの調査地点



第9図 調査区の位置

落跡が調査されている。

第21地点 スポーツ文化公園のオーバークリッジ建設に伴う発掘調査である。遺跡の中心付近に当たる。第3地点の東側に位置し、中央を第9地点が横断している。

調査区の中央には第7地点に続く河川跡が南北方向に認められ、両岸に古墳時代前期から8・9世紀の集落跡、畠跡が検出されている。

熊谷市教育委員会による発掘調査 市教育委員会による調査は、スポーツ文化公園の北側にある道

2. 調査地点の概要

調査地点は、熊谷スポーツ文化公園ラグビー場内にあるAグラウンドの、新メインスタンド建設部分である。調査面積は4,480㎡である。

ラグビー場は遺跡の中で北西側に位置し、Aグラウンドの現在のメインスタンドは、1985（昭和60）年に北島遺跡で最初の調査が行われた場所である（第1地点）。今回の調査地点とはグラウンドを挟んだ反対側にある。また、第25次調査地点の東側に、第5地点が接しており、連続すると考えられる遺構もある。

調査区内の基本土層は、Ⅰ：灰色土、Ⅱ：褐灰色土、Ⅲ：黒褐色土、Ⅳ：灰黄褐色土、Ⅴ：灰オリブ土、Ⅵ：灰色土、Ⅶ：灰黄色シルトによって構成されている。調査は、Ⅲ層上面を近世の確認面、Ⅳ層上面を古代の確認面、Ⅴ層上面を古墳時代の確認面として実施した。

調査地点内の地形は、南半と北端が僅かに高く中央部はやや低くなっていた。南半の微高地上には堅穴住居跡が密集し、中央から北側のやや低い範囲には畠跡が広がり、溝跡が交錯している。

検出した遺構は、古墳時代が堅穴住居跡39軒、掘立柱建物跡5棟、土壇14基、円形周溝状遺構2基、溝跡21条、畠跡7箇所、奈良・平安時代が堅

路整備に伴うものである。次数としては第22～24次（地点）に当たる。調査区は、第20地点の西側及び第1地点・第5地点の北側に位置し、Ⅰ～Ⅷ地点に分かれる。古墳時代前期、古代の堅穴住居跡・畠跡などが検出されている。

以上のこれまでに当事業団と熊谷市教育委員会によって発掘調査された遺構の総数は、堅穴住居跡853軒、掘立柱建物跡225棟、井戸跡163基、土壇1,479基、溝跡1,262条、柵列9条、道路跡6条である。県内最大級の複合遺跡である。

穴住居跡42軒、井戸跡6基、土壇53基、溝跡24条、ピット127基、遺物集中区1箇所、近世は溝跡18条である。

集落の中心となる時期は7～9世紀で、住居跡の分布は調査地点の南側に密集している。古墳時代中期の第55号住居跡からは管玉や臼玉がまとまって出土している。

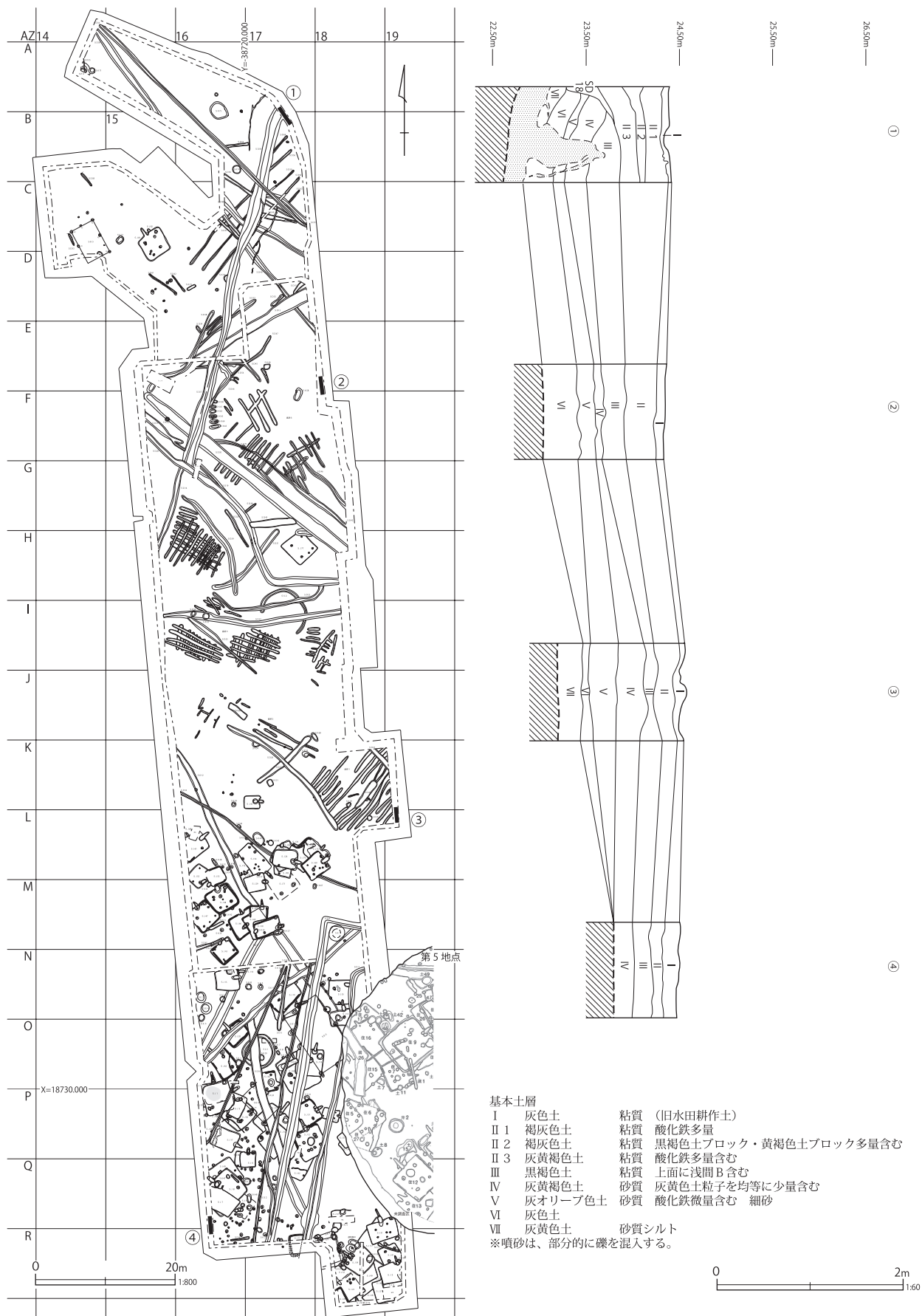
掘立柱建物跡は、古墳時代の堅穴住居跡と併存している。第3号建物跡は、桁行4間、梁行2間の大型建物で、ヒノキの柱材が見つかった。

古墳時代の畠跡は、堅穴住居跡が分布する北側に隣接して広がっている。

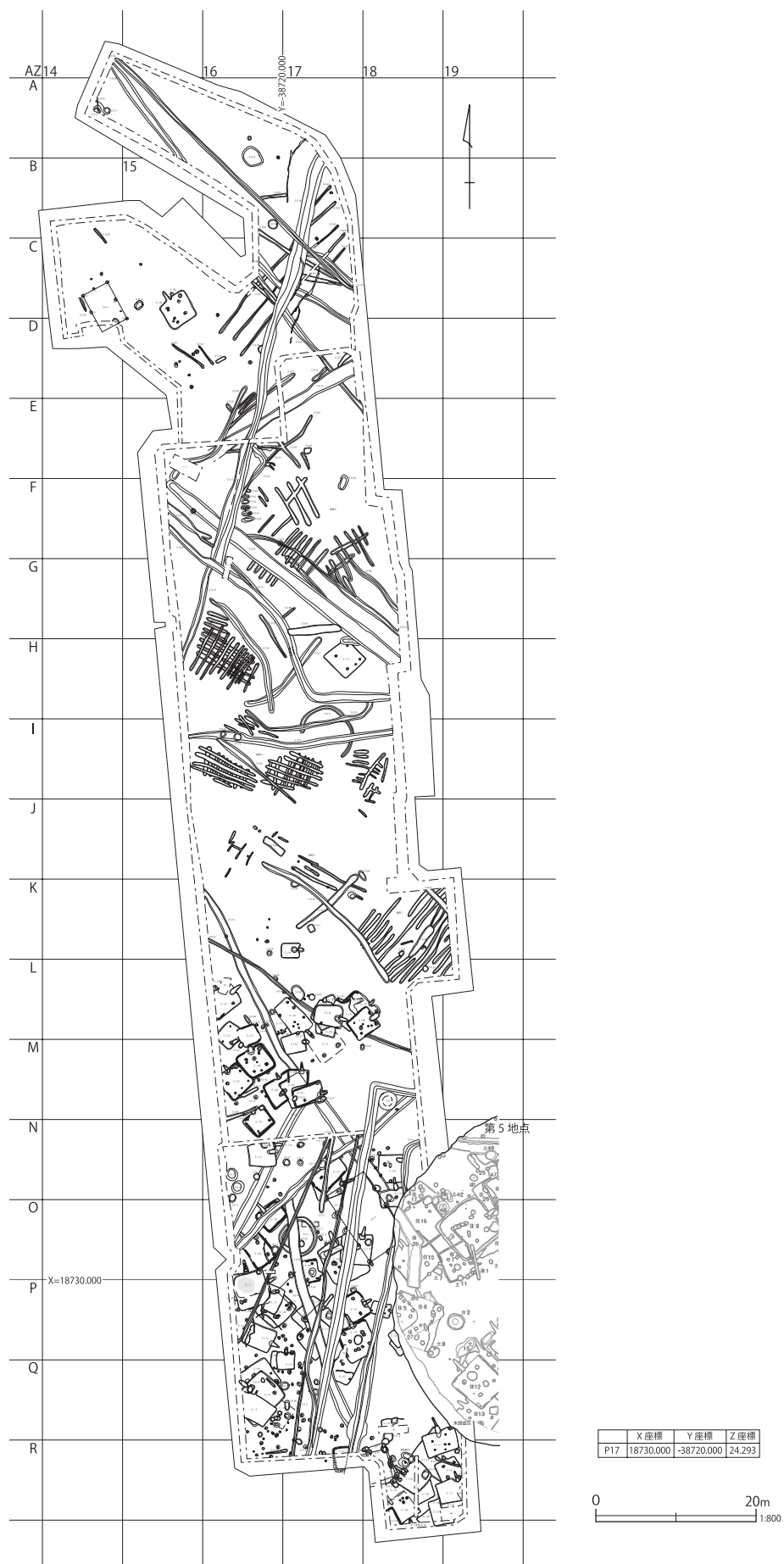
円形周溝状遺構は、古墳時代のものである。調査区の南側と中央に各1基分布していた。

溝跡は各時期とも多く、砂の堆積もみられるため用途は排水目的と考えられる。一方、第3・6号溝跡は並行して直角に曲がるため、何らかの区画溝と考えられる。

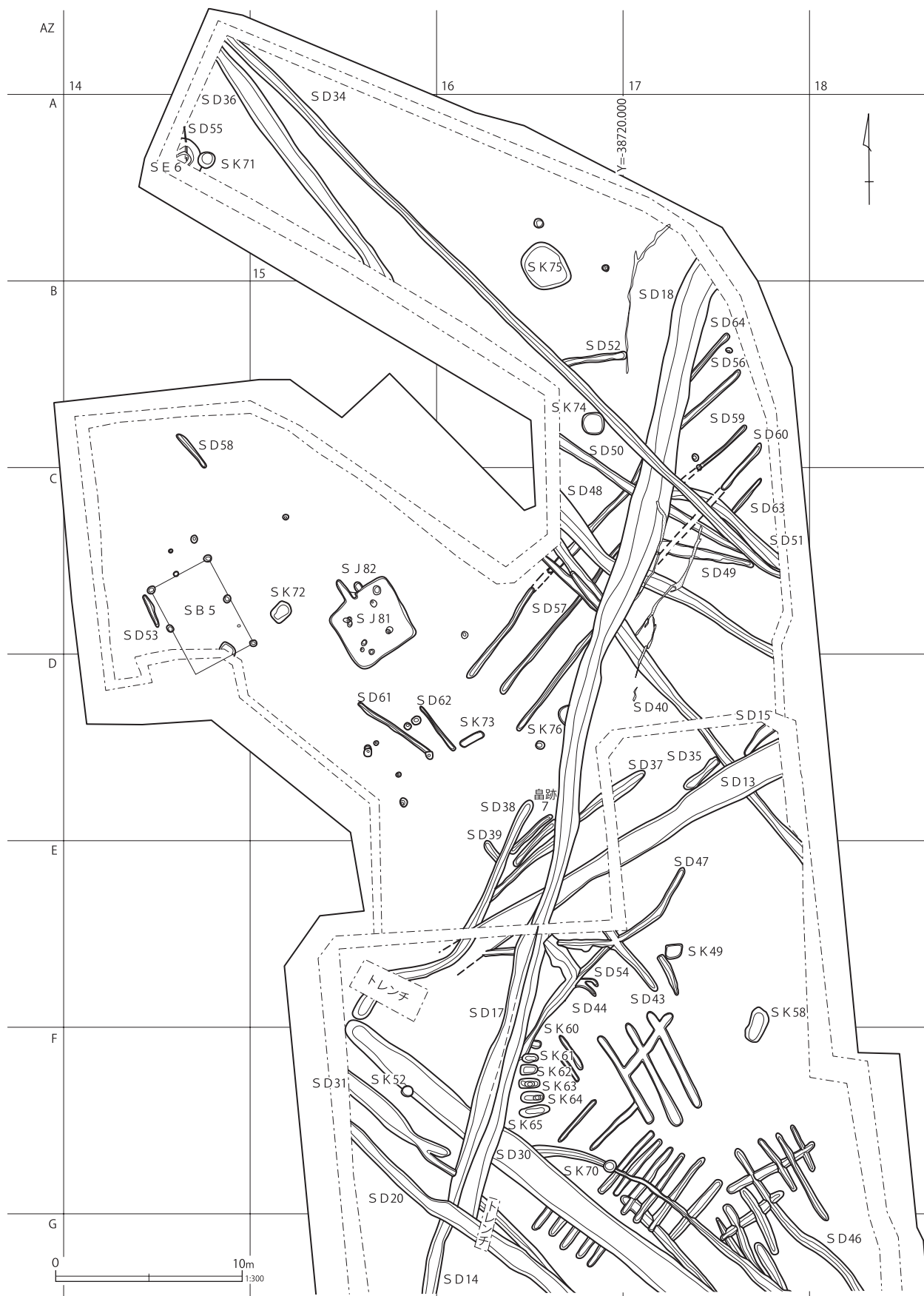
調査区南端から検出された遺物集中区からは、6～9世紀の3000点余りの土器片が、細片の状態で出土しており、意図的に廃棄されたものとして注目される。



第10図 基本土層



第 11 図 北島遺跡第 25 次調査区全体図



第 12 図 北島遺跡第 25 次調査区分布図 1

IV 遺構と遺物

1. 弥生時代

北島遺跡では、弥生時代の遺構・遺物は主に第9・10・14～17・19地点など本調査区より南東方向に離れた地域に分布している。特に、東に0.5km以上離れた第19地点では集落や分水管理を目的としたとみられる堰などが検出された。南側の第17地点から見つかった水田に供給され、北島遺跡における弥生時代の中心的生活域とみられる。第25次調査区周辺では、第2地点で甕が2点出土しているが遺構に伴うものではない。現段階では、これまでの調査結果から推定される埋没河川（第8図）の南側が、弥生時代の遺構の主な分布域と考えられる。

第25次調査では、弥生時代の遺構は検出されなかったが、第31号住居跡の覆土中及びグリッドピットから当該期の土器片が1点ずつ出土した。第31号住居跡は古墳時代のため、土器片は混入と考えられる。ピット出土の1点は、覆土中からの出土で遺構に伴うものかどうか不明である。時期はいずれも後期前半の岩鼻式と考えられる。

第3表 弥生時代出土遺物観察表（第15図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	弥生	甕	—	[2.1]	—	CEGHIK	5	良好	明赤褐	S J 31 C 岩鼻式	37-1
2	弥生	甕	—	[3.9]	—	ACEGL	5	良好	褐灰	M-17 P 1 チャート	37-1

2. 古墳時代

古墳時代の遺構は、竪穴住居跡39軒、掘立柱建物跡5棟、土壇14基、円形周溝状遺構2基、溝跡21条、畝跡7箇所を検出した。遺物が出土しない遺構は所属時期の判断が困難なものが多いが、遺構間の重複関係などから時期を推定した。

遺構の分布状況は、調査区の南側に住居跡が集中し、やや標高の高い調査区中央北側には畝跡が広がっている。調査区北側は遺構が希薄な状況となる。

（1）竪穴住居跡

弥生時代の出土遺物（第15図）

1は第31号住居跡の覆土中から出土した。甕の頸部付近の破片である。外面は櫛歯状工具による櫛描簾状文が2段施され、下位の簾状文が重ねられている。櫛歯は太目で5本まで確認できるが全体は不明である。内面は斜め方向にナデが施されている。色調は橙褐色で、胎土には砂粒が含まれ、焼成は良好である。

2は、M-17グリッドのピット1から出土した。甕の頸部付近の破片である。外面は3本一単位の櫛歯状工具による櫛描簾状文が2段施され、その上部には波状文が施されている。文様は上から下へと施されている。文様の下位は施文具と同一の工具で斜め方向に調整されている。内面はナデ調整である。色調は黒褐色で、胎土には粗い砂粒が多量含まれる。焼成は良好である。



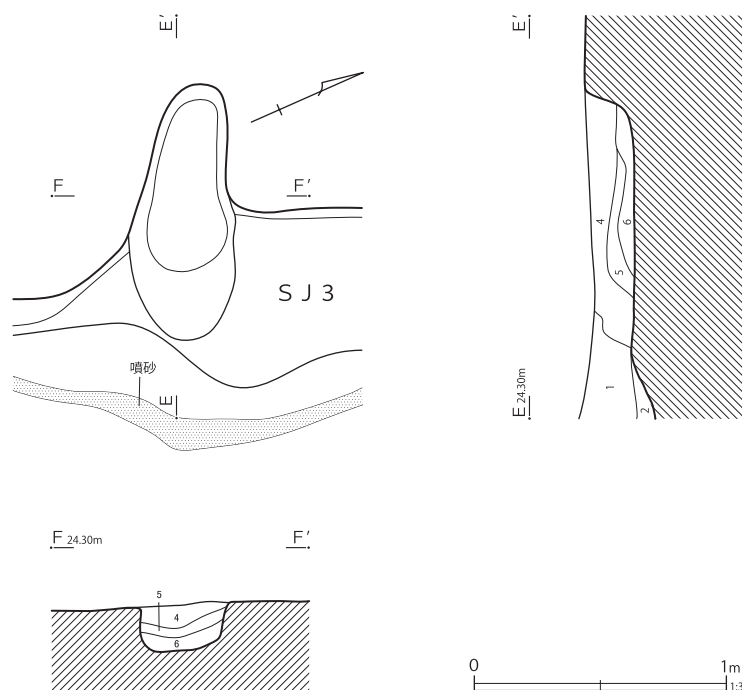
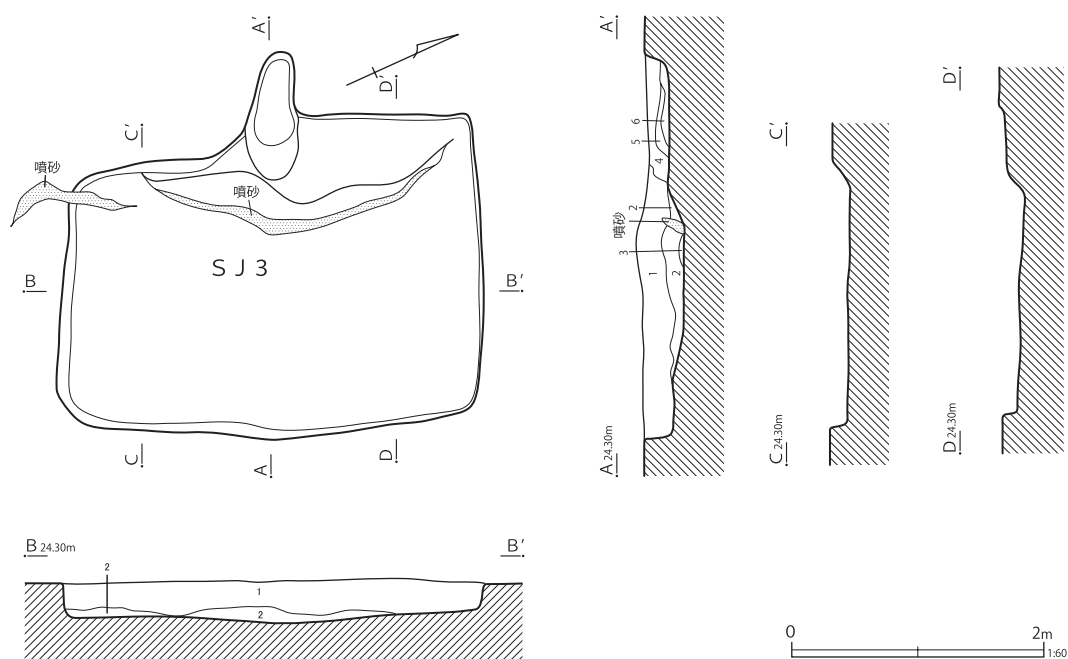
第15図 弥生時代出土遺物

第3号住居跡（第16・17図）

P-16・17グリッドに位置する。第1・5・50・58・59号住居跡、第4号掘立柱建物跡と重複し、第1・5号住居跡より古く、第50・58・59号住居跡、第4号掘立柱建物跡より新しい。

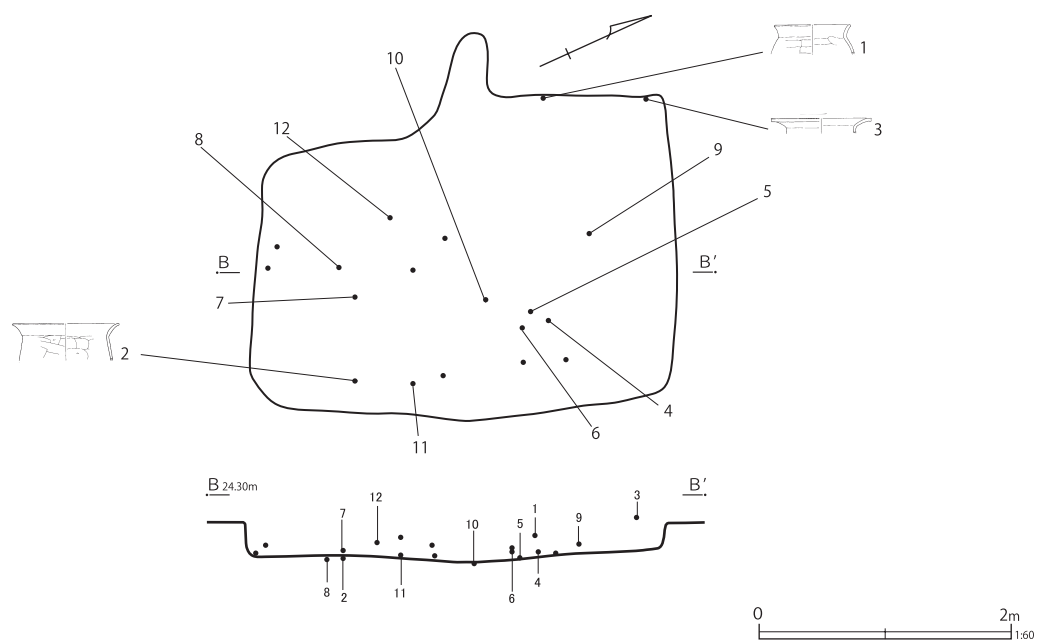
また、噴砂を伴う地震による地割れによって、床面が大きく壊されていた。地割れは、住居跡内を南北方向に通じ、20cmに及ぶ段差を形成していた。

平面形は幅広の長方形である。西コーナー付近は不整形となっており、噴砂も認められるため、

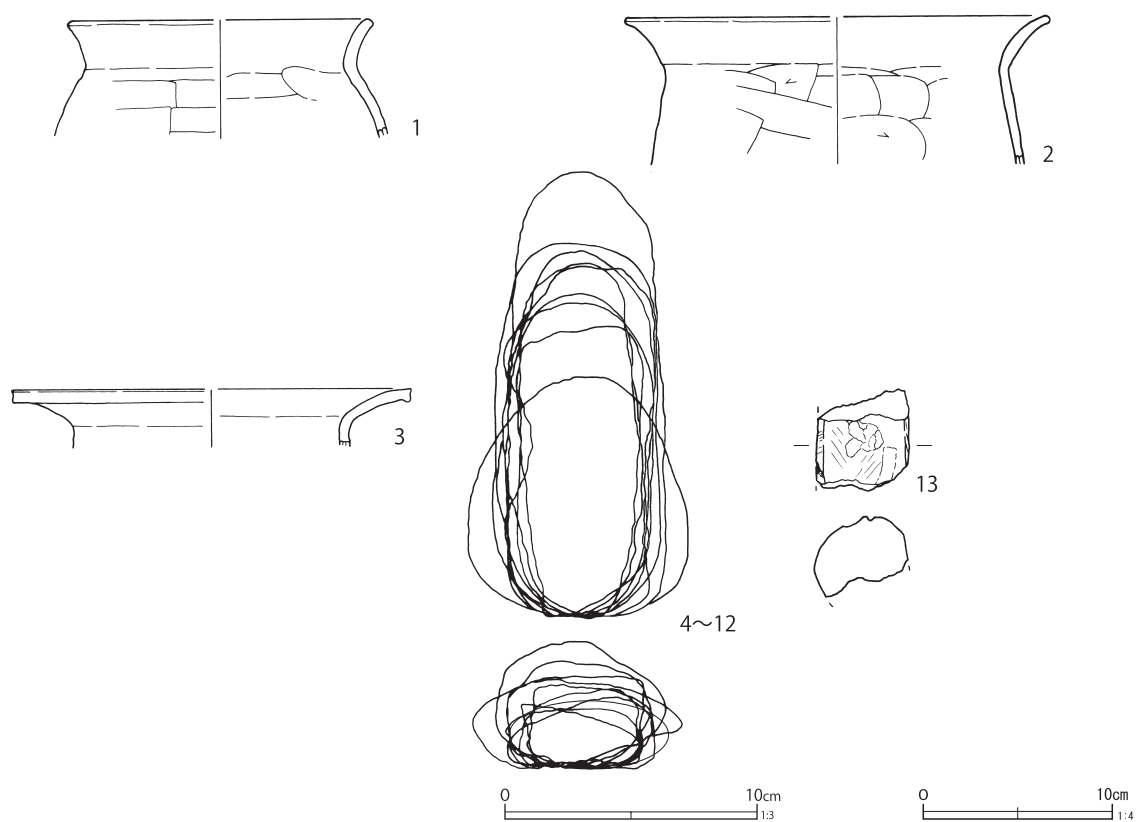


- S J 3
- | | | | | |
|--------|-------|--------|------------------|--------------------------|
| 1 褐灰色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 焼土・炭化物均等に少量含む | 地山（灰黄褐色）ブロックを部分的に少量含む |
| 2 黒褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 焼土・炭化物少量含む | 地山ブロック部分的に少量含む |
| 3 黒色土 | しまりあり | 粘性あり | 焼土少量・炭化物を含む | 地山含む |
| 4 黒褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 焼土及びブロック部分的に多量含む | 炭化物少量含む 地山はほとんど含まれない カマド |
| 5 黒褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 焼土及びブロック少量含む | 炭化物少量含む 地山及びブロック含む カマド |
| 6 黒色土 | しまりあり | 粘性あり | 炭化物少量含む | 焼土・地山わずかに含む カマド |

第 16 図 第 3 号住居跡



第 17 図 第 3 号住居跡遺物出土状況



第 18 図 第 3 号住居跡出土遺物

第4表 第3号住居跡出土遺物観察表（第18図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土		残存	焼成	色調	備考	図版		
1	土師器	甕	(15.4)	[6.3]	—	C E G H I K		10	普通	浅黄橙	No. 9	47-5		
2	土師器	甕	(22.0)	[7.8]	—	C E G H I K		15	普通	浅黄橙	No. 4	47-5		
3	土師器	甕	(21.0)	[3.1]	—	G H I K		20	普通	にぶい黄橙	No. 8	47-5		
4	石製品	編物石	長さ 14.2	幅 5.9	厚さ 4.8	重さ 559.2 g						No. 11	砂岩	50-3
5	石製品	編物石	長さ 14.6	幅 6.6	厚さ 5.0	重さ 790.7 g						No. 12	片岩	50-3
6	石製品	編物石	長さ 9.3	幅 8.8	厚さ 3.6	重さ 375.2 g						No. 13	砂岩	50-3
7	石製品	編物石	長さ 13.7	幅 5.7	厚さ 3.6	重さ 473.0 g						No. 14	頁岩	50-3
8	石製品	編物石	長さ 17.4	幅 6.3	厚さ 3.1	重さ 533.7 g						No. 15	砂岩	50-3
9	石製品	編物石	長さ 11.3	幅 4.9	厚さ 2.5	重さ 217.1 g						No. 16	白雲母石英片岩	50-4
10	石製品	編物石	長さ 13.4	幅 4.8	厚さ 3.4	重さ 353.9 g						No. 17	砂岩	50-4
11	石製品	編物石	長さ 12.7	幅 5.4	厚さ 2.7	重さ 300.8 g						No. 18	頁岩	50-4
12	石製品	編物石	長さ 12.2	幅 5.9	厚さ 3.3	重さ 291.9 g						No. 19	砂岩	50-4
13	石製品	砥石	長さ [4.0]	幅 [3.6]	厚さ [3.6]	重さ 24.7 g						B 角閃石安山岩 欠損		

地震による変形と考えられる。

西辺はカマドの左右で壁面が連続せず、右側はごく浅い掘り込みの棚状施設が設けられていた。

壁はほぼ垂直に立ち上がっていた。床面は地震により大きく壊され、カマド前面に大きな段差が生じており、特に床面中央付近が凹んでいた。壁溝や貯蔵穴等の施設は確認されなかった。

規模は、主軸方向が2.60m、直交軸方向が3.38m、深さは部分的に異なり、最大で0.28mである。北東辺の方位はN-65°-Wである。

覆土は、褐色から黒褐色土が主体で、床面付近に焼土粒や炭化物粒がやや多く認められた。自然堆積である。

また、地震による噴砂が覆土中に吹き上げているのが観察されたことから、床面に大きな段差を生じさせた地震は、住居廃絶後に起きたことがわかる。

カマドは西壁の中央に設けられていた。規模は、残存長1.02m、燃焼部幅0.46m、深さ0.18mである。地割れの影響のためか袖部は明確には捉えられなかった。燃焼部と床面の境も不明瞭である。奥壁はほぼ垂直に立ち上がるが、煙道は確認できなかった。燃焼部の壁はわずかに被熱により赤化していた。カマドの覆土は、第4～6層が天井部の崩落土で、灰層は確認されなかった。

遺物は、全体的に住居内に散在する状況であっ

た。上層から土師器の有段口縁坏・坏蓋模倣坏・甕の小破片、床面の中央南寄りから編み物石がまとまって出土している。

第3号住居跡の所属時期は、他の遺構との重複関係、長胴甕の形態的特徴から、7世紀前半に位置づけられる。

第3号住居跡出土遺物（第18図）

1～3は土師器の甕である。胎土にはいずれも砂粒、角閃石の混入が目立ち、利根川流域の粘土が用いられていると考えられる。

1は、胴部の中位に最大径があるやや小型のものである。胴部上位に、横方向のヘラケズリが施されている。2・3は、長胴甕である。2は胴部上位に横方向のヘラケズリが施され、それより下位には縦方向のヘラケズリが施されている。いずれも、内面は横位のヘラナデである。3の口縁部は大きく外反し、端部は直立する面を持つ。

4～12は編み物石である。長さ9.3～17.4cm、幅4.8～8.8cm、重さは217.1～790.7gである。石材は砂岩・片岩・頁岩・白雲母片岩・角閃石安山岩である。打割、剥離等の加工は施されず、中央に擦過痕がわずかに認められるのみである。

13は砥石である。角閃石安山岩製で、上下を欠失する。断面形は丸みを帯びるが各面に使用痕が認められる。

第7号住居跡（第19図）

Q-16グリッドに位置する。第8・9号住居跡と重複し、第7号住居跡が最も新しい。西側は調査区域外にかかる。

平面形は幅広の長方形である。東西方向に長軸を持つ。規模は短軸方向3.23m、長軸方向は調査範囲で4.64m、深さは0.10mである。東壁の方位はN-36°-Eである。遺構写真では床面が2段になっているが、調査時に床面を誤認して本住居より古い第8号住居跡まで下げてしまったもので、画面右側の一段高い部分が本来の床面である。

床面は平坦で、ピット、壁溝などの施設は検出されなかった。

北辺中央部に溝状の張り出しを確認した。長さは0.62m、幅0.22mである。当初はカマドとして調査を行ったが、カマドらしい特徴は認められなかった。性格は不明である。

出土遺物は、覆土中および床面から土師器坏・

甕などの小片が出土した。

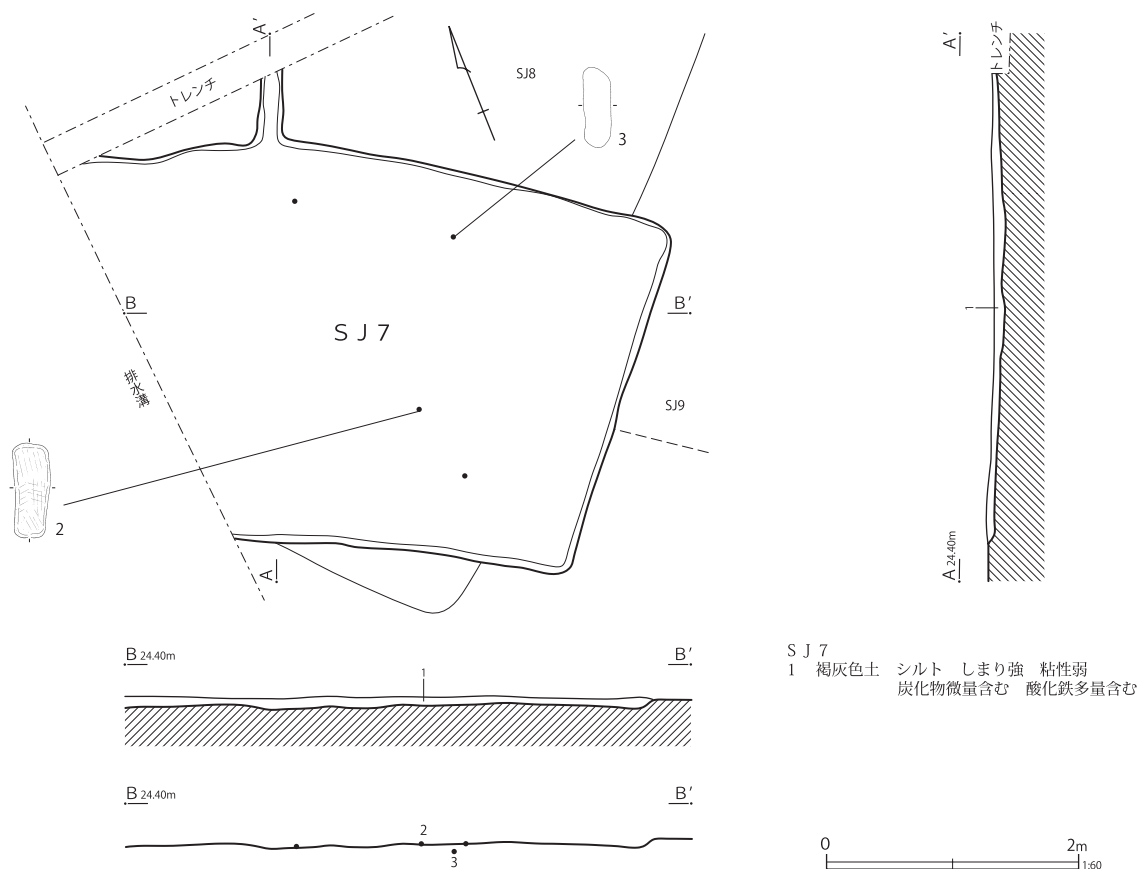
第7号住居跡の所属時期は、重複し古い第8号住居跡が7世紀後葉に位置づけられることから7世紀末から8世紀初頭頃とする。

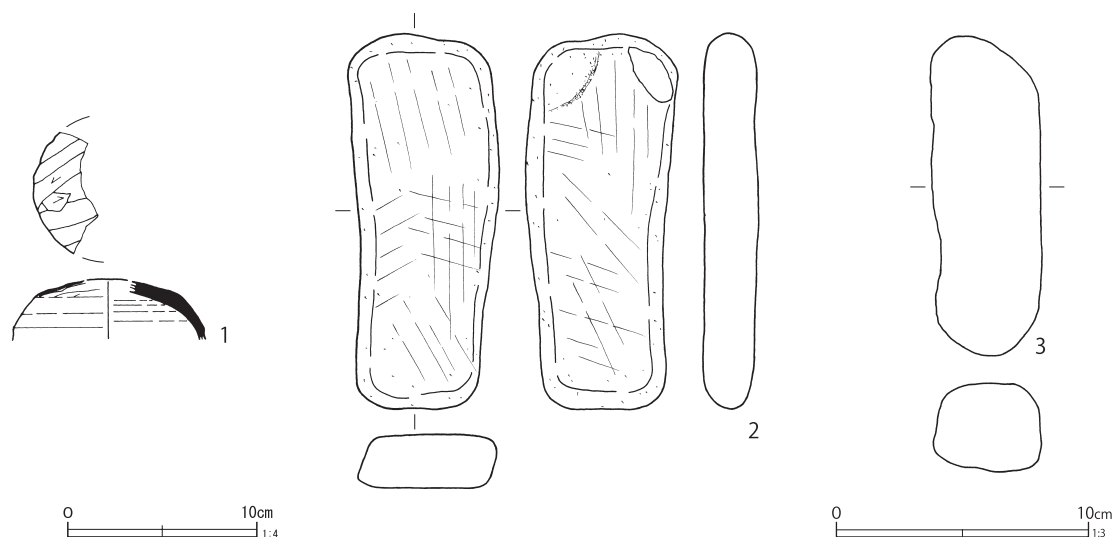
第7号住居跡出土遺物（第20図）

1は、須恵器の蓋である。口縁部を欠くが、小型で、口径はおよそ11cm前後と考えられる。天井部は手持ちヘラケズリである。胎土には白色針状物質がごくわずかに含まれ、南比企産と考えられる。ごく小破片のため混入の可能性がある。

2は砥石である。大略長方形で、両面に不明瞭な面を持ち、ランダムな使用痕が認められる。側面も平滑で、何らかの形で使用された可能性がある。石材は砂岩である。

3は編み物石である。床面出土。長さ12.6cm、幅4.4cm、重さは352.8gである。石材はホルンフェルスである。加工痕はなく、中央に僅かに擦痕が認められるのみである。





第 20 図 第 7 号住居跡出土遺物

第 5 表 第 7 号住居跡出土遺物観察表 (第 20 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	—	[3.1]	—	EGK	20	普通	灰白	D	47-5
2	石製品	砥石	長さ 14.9	幅 6.0	厚さ 2.2	重さ 342.7 g				No.2 砂岩 砥面 2 面 完形	48-8
3	石製品	編物石	長さ 12.6	幅 4.4	厚さ 3.7	重さ 352.8 g				No.3 ホルンヘルス	50-4

第 8 号住居跡 (第 21・22 図)

Q-16・17 グリッドに位置する。第 7・9・69 号住居跡と重複し、第 7 号住居跡より古く第 9・69 号住居跡より新しい。西隅は調査区外にかかる。

平面形はやや横長の方形である。規模は、主軸方向 4.63m、直交軸方向 5.85m、深さは 0.22m である。主軸方位は N-45°-W である。

覆土は炭化物、焼土を含む褐灰色、灰黄褐色土で、自然堆積と考えられる。

床面はほぼ平坦であるが、東側がやや下がっていた。壁溝は東壁側中央部のみで検出されている。壁からやや離れた位置で、長さ 1.56m、幅 0.25m、深さは 0.15m である。ピットは 5 基検出した。P 1 は円形で直径が 0.44m、深さは 0.25m である。P 2 は不整楕円形で、0.64×0.46m、深さは 0.05m である。P 3 は不整円形で、規模は 0.45m×0.43m、深さは 0.18m である。P 4 は不整楕円形で、規模は 0.43m×0.33m、深さは 0.10m である。P 5 は不整円形で、規模は 0.49m×0.49m、深さは 0.15m である。覆土は P 1・P 3・P 4 は同様の土層であるが、P 5 は

地山土を多く含む層の間に炭層を挟み他のピットとは異なる。主柱穴は、その位置から P 2・P 3 と考えられるが、やや壁よりに位置しており確実ではない。貯蔵穴は検出されなかった。

カマドは北西壁の中央に構築されていた。燃烧部のみが残存していた。燃烧部の大半は住居の壁より外側にある。規模は、長さ 1.25m、幅 0.57m、床面からの深さは 0.10m である。第 3 層が焼土粒を少量含む灰層である。

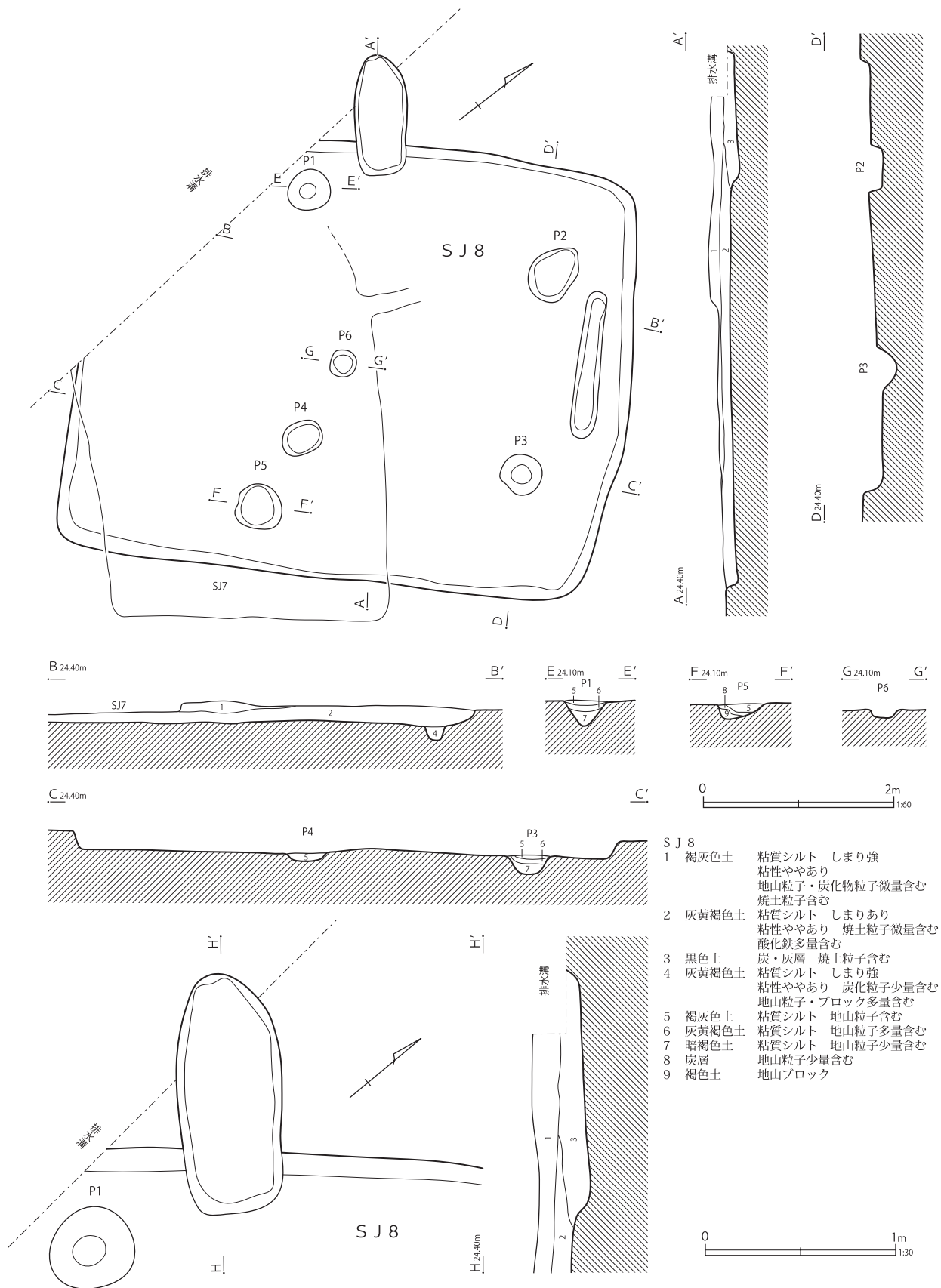
なお、燃烧部の東側の壁にかかって土師器甕が出土したが、出土状況から本住居跡には伴わないと考えられる。

遺物は、覆土中から散在した状態で、土師器坏・甕、須恵器甕、編物石等が出土した。

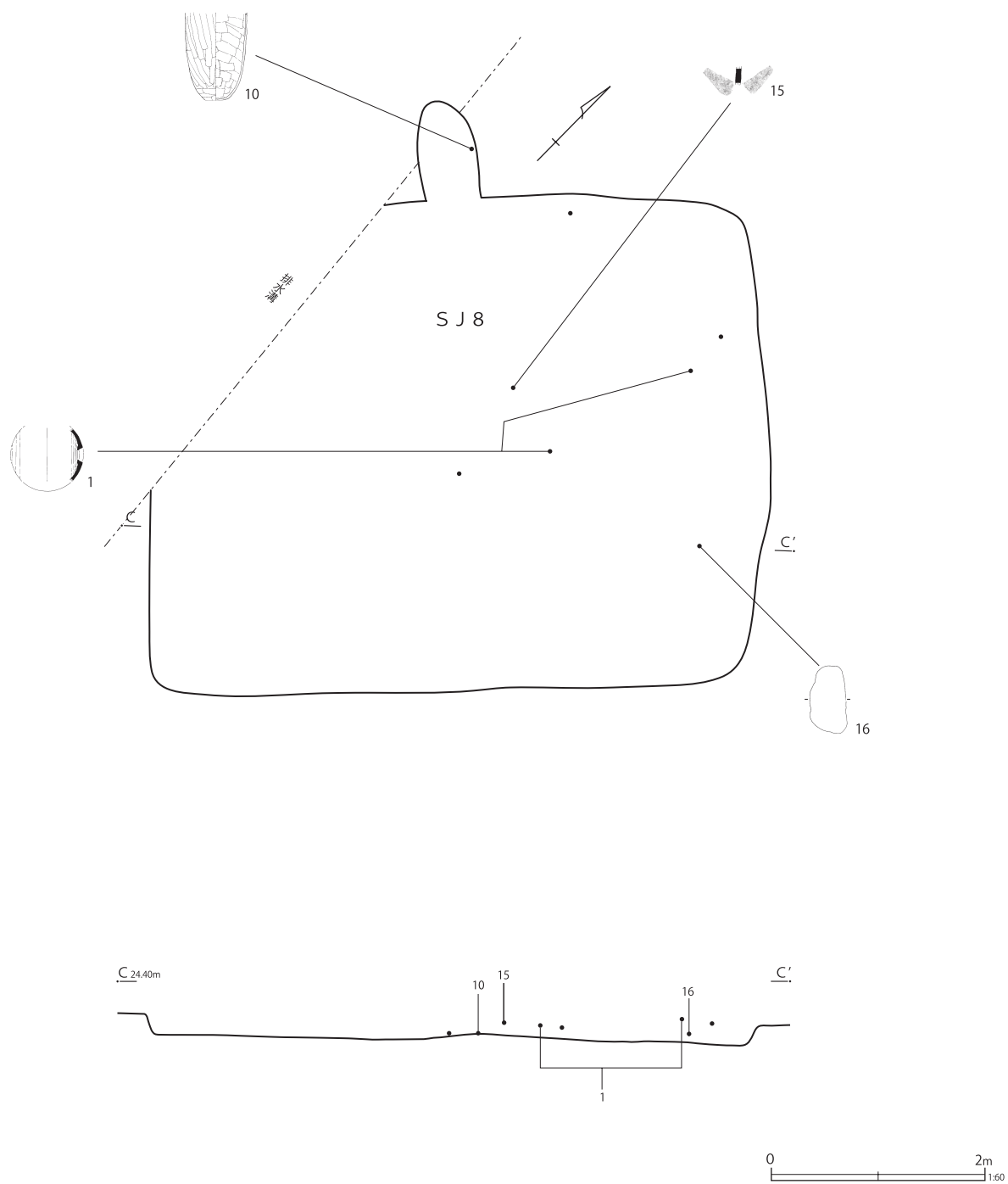
第 8 号住居跡の所属時期は、北武蔵型坏の形態的特徴から 7 世紀後葉に位置づけられる。

第 8 号住居跡出土遺物 (第 23 図)

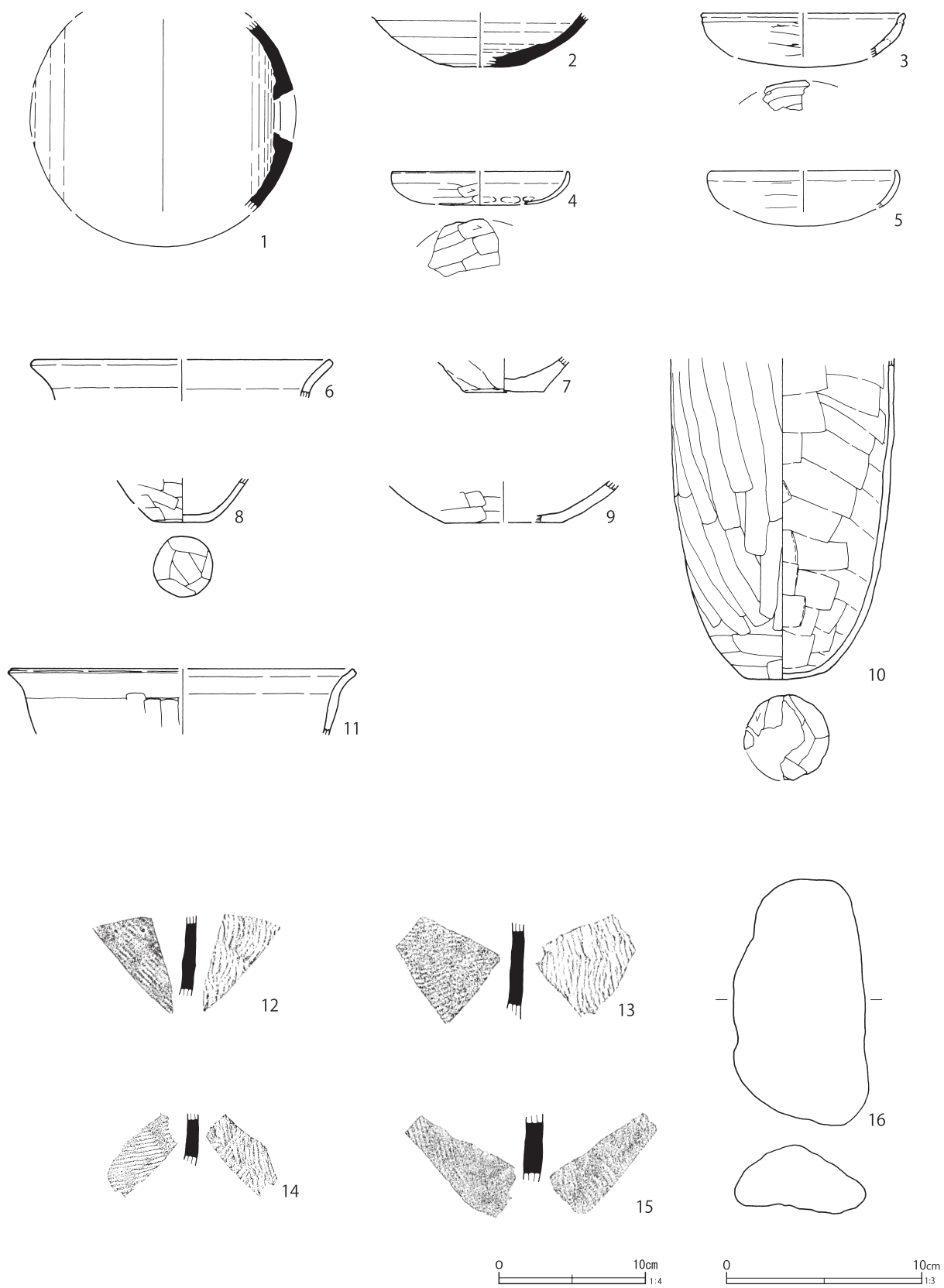
1 はフラスコ形瓶である。胴部の破片で、横の蓋の部分欠失する。ロクロ目が顕著で、外面には自然釉がかかる。粘土は肌理細かい。湖西産。2 は丸底に近いツボの底部である。上野産か。



第 21 図 第 8 号住居跡



第 22 図 第 8 号住居跡遺物出土状況



第 23 図 第 8 号住居跡出土遺物

第6表 第8号住居跡出土遺物観察表（第23図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	フラスコ瓶	—	[5.5]	—	K	20	普通	灰白	No.4・No.5 自然釉 湖西産	47-6
2	須恵器	壺	—	[3.7]	(2.0)	I K	25	普通	灰	No.3 外面釉付着 上野産か	47-6
3	土師器	坏	(13.5)	[3.0]	—	C E G H I	5	普通	橙		47-6
4	土師器	坏	(11.8)	[2.3]	—	C G H I	10	普通	橙	カマド	47-6
5	土師器	坏	(12.5)	[2.6]	—	G H I	5	普通	橙	B	47-6
6	土師器	甕	(20.0)	[2.6]	—	G H I	5	普通	橙	カマド	47-6
7	土師器	壺	—	[2.3]	(10.0)	A G H I K	40	普通	灰白		47-6
8	土師器	甕	—	[3.0]	4.1	C G H I	40	普通	にぶい黄橙	C	37-2
9	土師器	壺	—	[3.3]	(8.0)	C E G H I	10	普通	にぶい橙		47-6
10	土師器	甕	—	[21.9]	5.6	E G H	70	普通	橙	No.1 カマド	37-3
11	土師器	甕	(23.0)	[4.5]	—	E G H I	5	普通	にぶい黄橙	C	47-6
12	須恵器	甕	—	[5.5]	—	I K	5	良好	灰	カマド 上野産	47-6
13	須恵器	甕	—	[6.5]	—	I K	5	良好	灰	上野産	47-6
14	須恵器	甕	—	[3.5]	—	I K	5	良好	灰	上野産	47-6
15	須恵器	甕	—	[4.6]	—	I K	5	良好	灰	No.6 上野産	47-6
16	石製品	編物石	長さ 12.6	幅 6.1	厚さ 3.3	重さ 399.8 g				No.8 砂質凝灰岩	50-5

3～11は土師器である。胎土にはいずれも砂粒、角閃石の混入が目立ち、利根川流域の粘土が用いられていると考えられる。3～5はごく小片の北武蔵型坏である。小片のため確実ではないが低平な印象を受ける。7・9は土師器の壺である。いずれも底部の破片で、外面ヘラケズリ、内面はナデが施されている。6・8・10は甕である。長胴甕になると考えられる。胴部の外面は縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデ。底部外周は横方向のヘラケズリが加えられている。底面もヘラケズリである。内面は横位のヘラナデ。11は所謂砲弾形の甕と考えられる。

12～15は甕の胴部破片である。12・14はやや薄手、13・15はやや厚手である。12は外面格子状タタキが平行にナデ消されている。13～15は平行タタキである。内面は青海波文の当て具痕が顕著である。胎土に白色粒子を多く含む。色調は黒みがかっており、粘土はいずれも緻密で重量感がある。東毛産と考えられる。

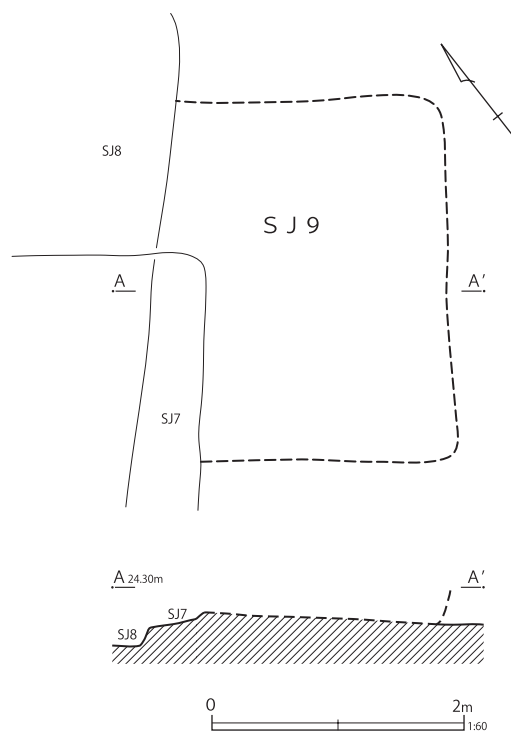
16は編み物石である。長さ12.6cm、幅6.1cm、重さは399.8gである。石材は凝灰岩である。打割、剥離等の加工は施されず、中央に擦過痕がわずかに認められるのみである。

第9号住居跡（第24図）

Q-16・17グリッドに位置する。第7・8号住居跡と重複し、第9号住居跡が最も古い。

床面のみが残存した状態で検出した。

平面形は方形と考えられる。規模は、東辺が長さ2.92m、北辺の残存長は2.15mである。東辺



第24図 第9号住居跡

の方位はN-35° -Eである。

床面は平坦で、やや硬化していたが、柱穴や壁溝等の施設は検出できなかった。

遺物は、土師器甕の破片などが僅かに出土したのみである。

第9号住居跡の所属時期は、重複する遺構との新旧関係から7世紀後半と考えられる。

第9号住居跡出土遺物（第25図）

1は土師器甕の口縁部である。風化が進んでいる。胎土には砂粒と角閃石を多く含む。



第25図 第9号住居跡出土遺物

第7表 第9号住居跡出土遺物観察表（第25図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(19.8)	[4.6]	—	CEGHI	15	普通	にぶい黄橙	C	47-5

第10号住居跡（第26・27図）

P・Q-17グリッドに位置する。第22号住居跡、第6・10号溝跡と重複し、溝跡より古く第22号住居跡より新しい。第6号溝跡によって東のコーナーを壊され、さらにカマド脇から中央部を第10号溝跡が南北に貫いている。

平面形は方形と推定される。規模は主軸方向が4.02m、直交軸方向が4.23m、深さは最深部で0.05mである。主軸方位はN-38° -Wである。覆土は炭化物、焼土を含む灰黄褐色土、褐灰色で、自然堆積である。

床面は平坦で、壁溝やピットは検出されなかった。貯蔵穴はカマド左側の西コーナーで検出した。平面形は隅丸方形に近く、長軸0.83m、短軸0.75m、深さは0.24mで、底面に径0.36m、深さ0.10mの円形の掘り込みが掘り込まれていた。

カマドは北辺中央に構築されていた。袖や煙道は検出されず、袖は壊されていると考えられる。燃烧部は壁の外側で、一段高くなっている。掘り込みは浅く、床面とほぼ同じ高さである。底面は平坦で、奥壁は垂直に立ち上がる。規模は、長さ0.70m、幅0.49mである。覆土には焼土粒と炭化物粒が多く含まれていた。灰層は確認できなかった。

出土遺物は、土師器坏、甕、甗の小破片、編み物石である。

第10号住居跡の所属時期は、小型化した坏の形態的特徴から、7世紀後葉に位置づけられる。

第10号住居跡出土遺物（第28図）

1～4は土師器である。胎土にはいずれも砂粒、角閃石の混入が目立ち、利根川流域の粘土が用いられていると考えられる。

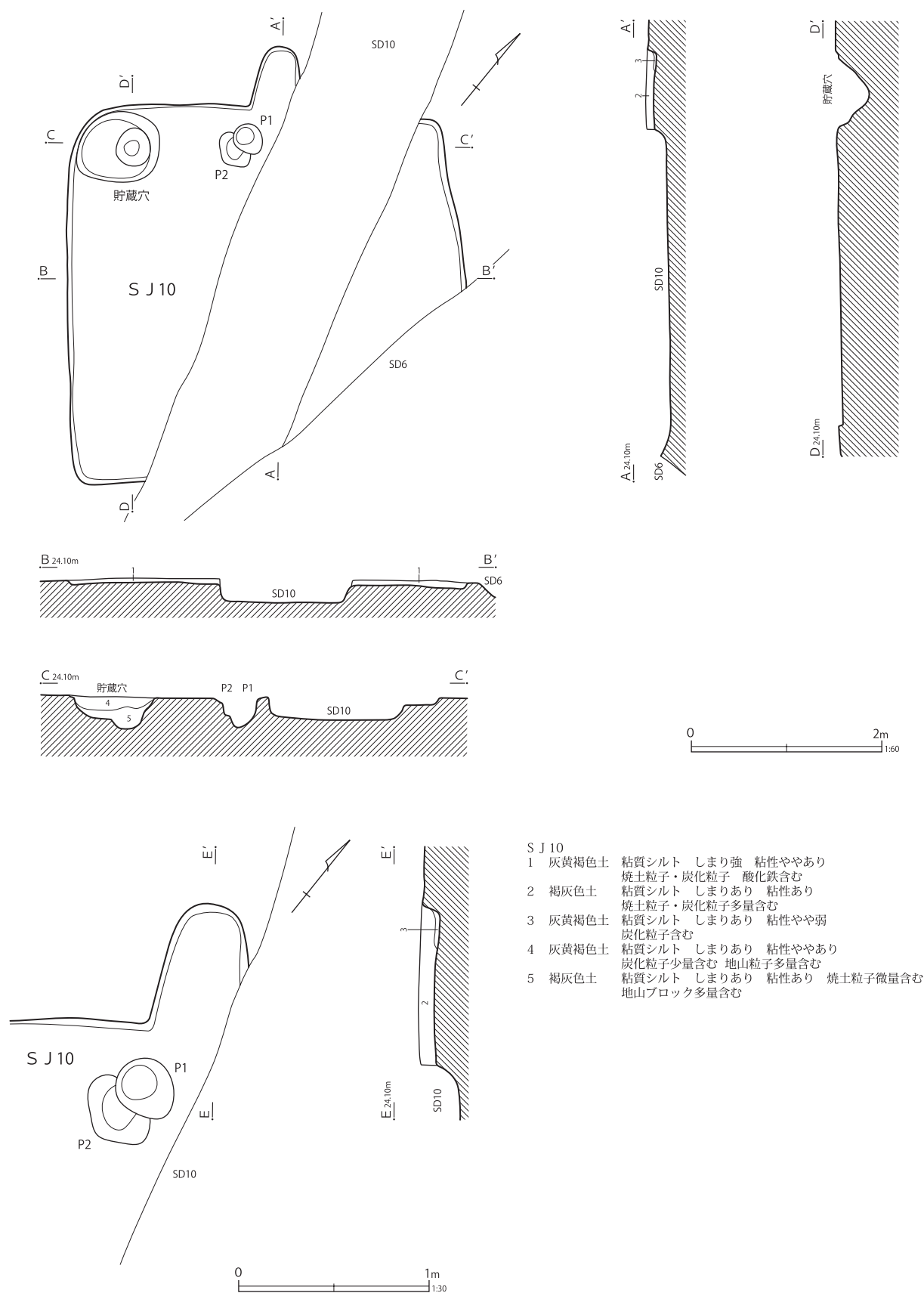
1は有段口縁坏、2は坏蓋模倣坏である小型で、やや深身である。内外面黒色処理されている。3は北武蔵型坏である。やや扁平である。いずれも風化が進む。

4は甗である。砲弾形で、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面はナデが施されている。側面には小型の把手が付く。把手は手捏ねで、ナデによって調整されている。

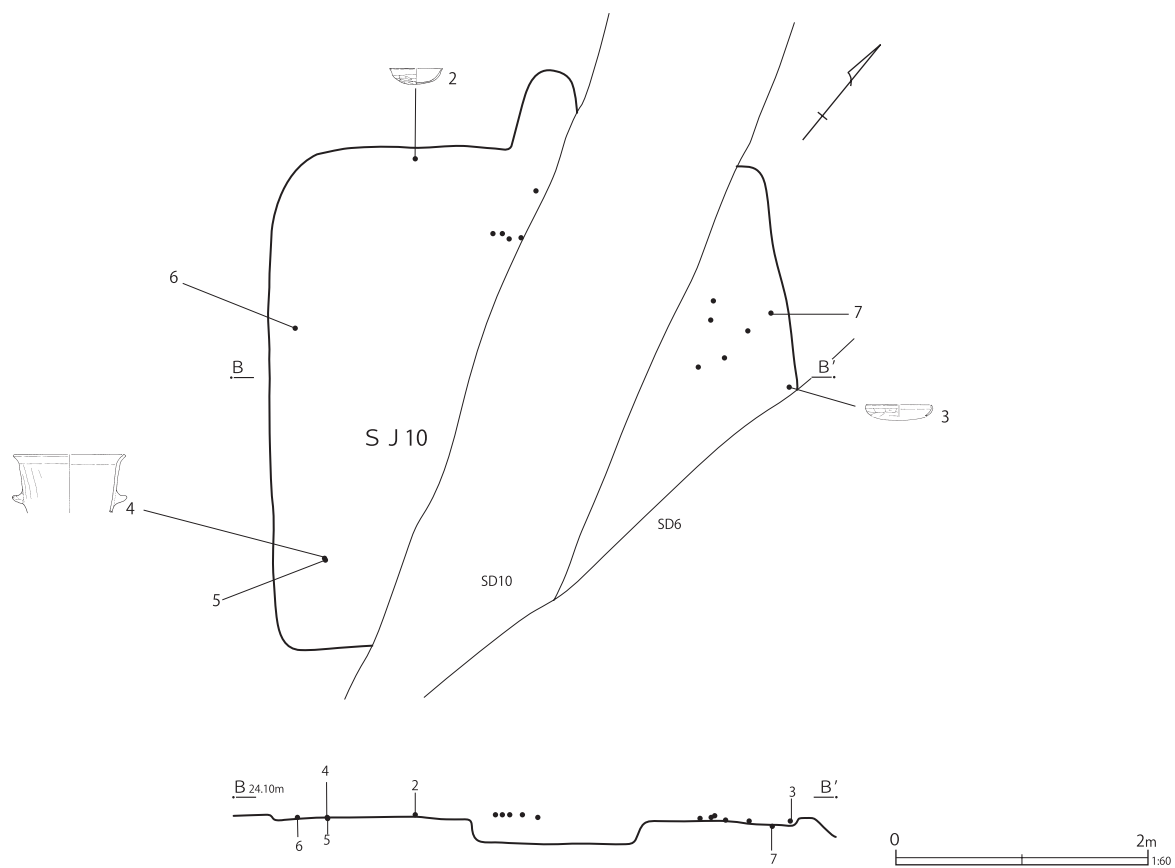
5～8は編み物石である。長さ7.7～13.8cm、幅3.9～6.4cm、厚さ2.6～4.6cm、重さは156.1～462.8gである。石材は砂岩、頁岩である。打割、剥離等の加工は施されず、中央に擦過痕がわずかに認められるのみである。

第14号住居跡（第29図）

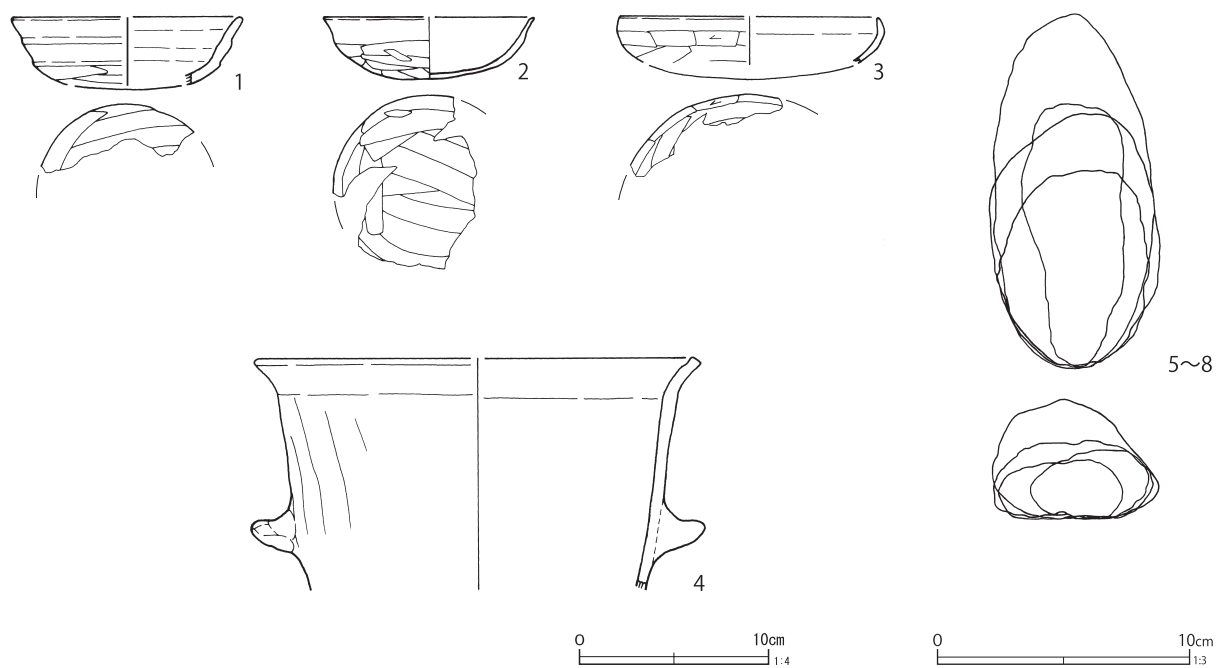
O-17・18グリッドに位置する。第64号住居跡、第3号掘立柱建物跡、第55号土壇、第6号溝跡と



第 26 図 第 10 号住居跡



第 27 図 第 10 号住居跡遺物出土状況



第 28 図 第 10 号住居跡出土遺物

第8表 第10号住居跡出土遺物観察表（第28図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	[3.6]	—	C G H I	20	普通	橙	No. 3	37-4
2	土師器	坏	(11.0)	3.3	—	C G I	30	普通	明赤褐		37-5
3	土師器	坏	(13.2)	[2.4]	—	C G H I	20	普通	橙	No. 15	47-5
4	土師器	甗	(22.6)	[12.4]	—	E G H I	5	普通	にぶい黄褐	No. 1	37-6
5	石製品	編物石	長さ 7.7 幅 5.9 厚さ 2.6 重さ 190.6 g							No. 1 砂岩	50-5
6	石製品	編物石	長さ 10.0 幅 6.4 厚さ 4.6 重さ 414.8 g							No. 2 砂岩	50-5
7	石製品	編物石	長さ 13.8 幅 6.2 厚さ 3.4 重さ 462.8 g							No. 11 砂岩	50-5
8	石製品	編物石	長さ 10.2 幅 3.9 厚さ 2.6 重さ 156.1 g							B 頁岩	50-5

重複し、第6号溝跡より古く、他の遺構より新しい。第10号住居跡の西側は、第6号溝跡によって南北方向に壊されている。

平面形は、形の整った方形である。

規模は、主軸方向が3.88m、直交軸方向が3.92m、深さは最も深い部分で0.10mである。主軸方位は、N-10°-Eである。

覆土は灰黄褐色土の単層で、自然堆積である。

床面は平坦で、壁溝及びピットは検出されなかった。貯蔵穴は、カマド右側のやや壁から離れた箇所から検出した。平面形は不整円形で、規模は長軸0.92m、短軸0.86m、深さは0.28mである。断面形は逆台形で、覆土は白色粘土ブロックを多く含む灰黄褐色土である。カマド袖や土器製作の材料として白色粘土が入れられていた可能性がある。遺物は覆土上層から、土師器片が出土したのみである。

カマドは北壁の東寄りに構築されていた。全長は1.28mである。住居跡内側に幅0.8mの浅い窪みが検出された。灰層が続いているため、この部分が燃焼部と考えられる。袖は検出されなかったが、燃焼部の両脇に設置されるため、かなり長い袖が造られていたと推定される。燃焼部と煙道の境は不明瞭である。奥壁の立ち上がりが比較的緩やかで、灰層が連続するため、現状よりも長い煙道が設けられていた可能性が考えられる。

出土遺物は、土師器坏などの小片、編み物石が床面から出土した。

第14号住居跡の所属時期は、土師器模倣坏や甗

の形態的特徴から、7世紀後半に位置づけられる。

第14号住居跡出土遺物（第30図）

1～4は土師器の坏である。1・4は有段口縁坏、2・3は坏蓋模倣坏である。いずれも小破片である。1・3・4は胎土に角閃石を含み、利根川流域の粘土が用いられている可能性がある。

1～3はやや大振りだが扁平で、口縁部と体部の境目が不明瞭である。4はやや小振りだが器高がやや高く、口縁部と体部の境目が明瞭で、段になり、やや古手の感を受ける。

第20号住居跡（第31・32図）

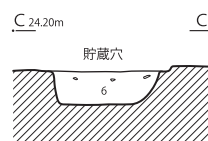
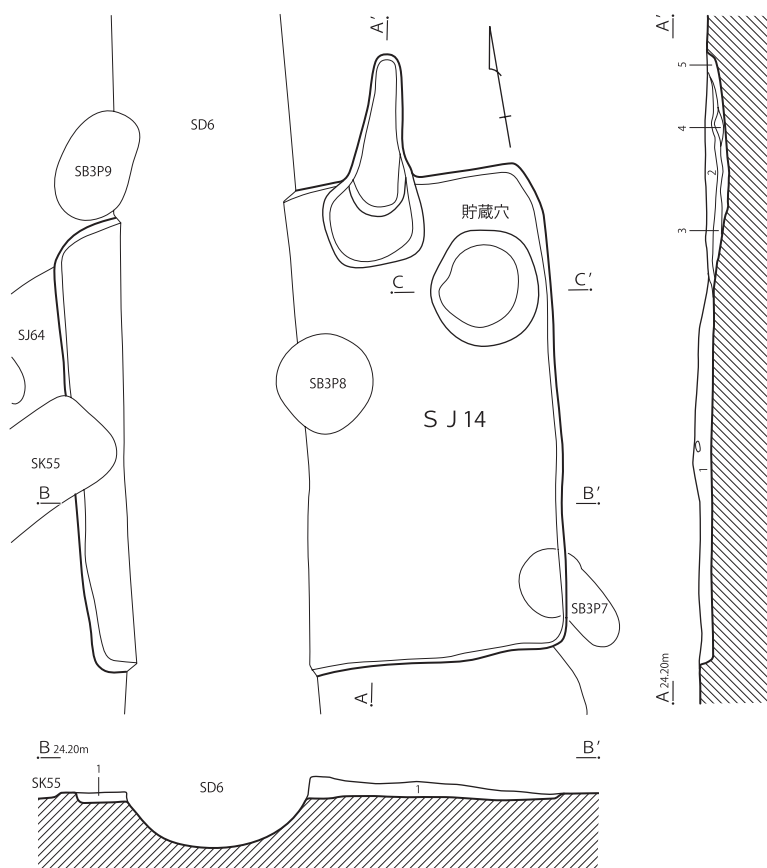
O-16・17グリッドに位置する。第9・10・11号溝跡と重複し、第20号住居跡が最も古い。第9号溝跡によって煙道の先端を壊され、第11号溝跡が住居跡のほぼ中央を東西方向に貫いている。東コーナーを、第10号溝跡によって壊されている。

平面形は、北東-南西方向が長辺となる横長の長方形である。

規模は、主軸方向が3.84m、直交軸方向が3.02mで、深さは0.10mである。主軸方位は、N-42°-Wである。

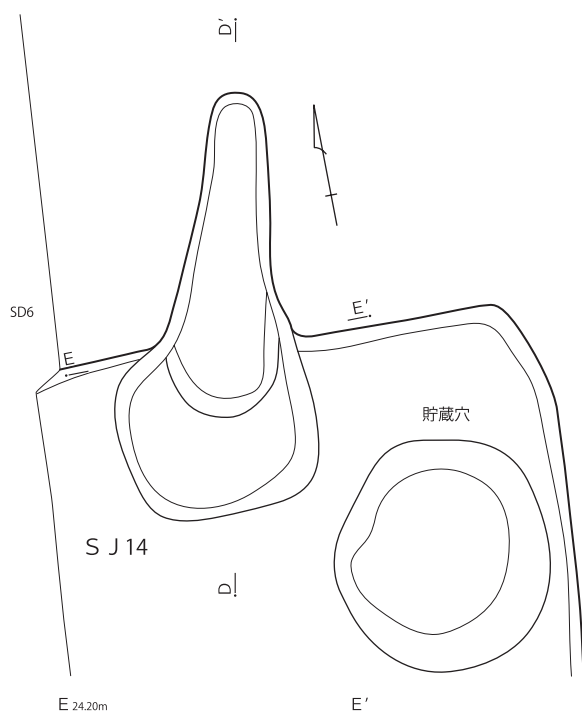
覆土は上層が褐灰色土、下層は黒褐色土で、自然堆積である。

床面からは、壁溝と貯蔵穴が検出されたが、ピットは検出されなかった。壁溝は、カマド及びカマドの左側を除いて巡っていた。幅は0.13～0.13mで、深さは0.04m前後である。底面からは、打ち込まれた杭の痕跡と思われるピット列が検出された。全体として、北東壁際には見られず、南



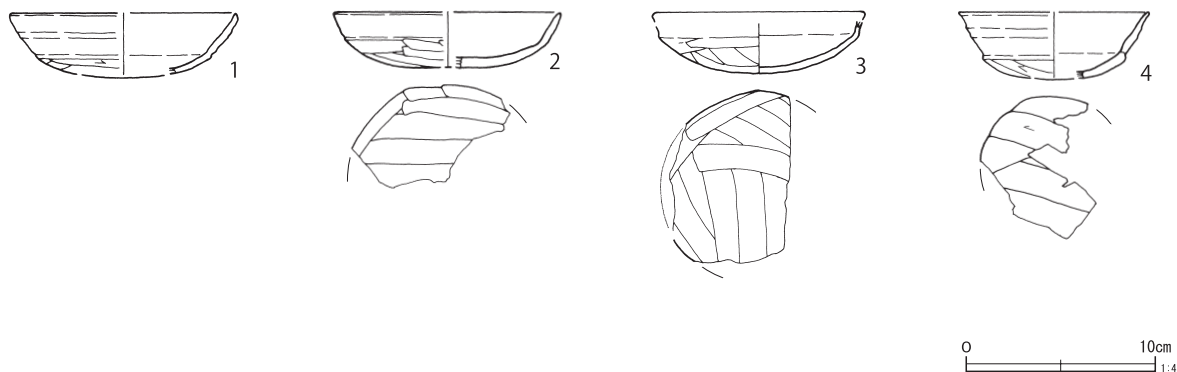
- S J 14
- | | | |
|---|-------|--------------------------------|
| 1 | 灰黄褐色土 | 焼土粒子微量含む 覆土
しまりあり 粘性あり |
| 2 | 褐灰色土 | 炭化粒子微量含む 焼土粒子を含む
しまりあり 粘性あり |
| 3 | 黒灰色土 | 灰と焼土粒子からなる層 灰層
しまりあり 粘性あり |
| 4 | 灰色土 | シルトブロックの層 |
| 5 | 褐灰色土 | 砂質で地山に近い 焼土粒子少量含む
しまり弱 粘性弱 |
| 6 | 灰黄褐色土 | 白灰色粘土ブロック多量
炭化粒子極微量含む |

0 2m 1:60



0 1m 1:30

第 29 図 第 14 号住居跡



第 30 図 第 14 号住居跡出土遺物

第 9 表 第 14 号住居跡出土遺物観察表（第 30 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.8)	[3.2]	—	C G H I	20	普通	橙	D	37-7
2	土師器	坏	(11.8)	2.9	—	E I K	25	普通	橙		37-8
3	土師器	坏	—	[2.6]	—	H I K	30	普通	橙		37-9
4	土師器	坏	(9.9)	[3.5]	—	C G H I	25	普通	橙	C・D	37-10

東壁際に多い。ピットの大きさは径0.08～0.20mであるが、0.10m前後が多い。深さは0.05～0.10mである。南東壁の最も密に並んでいる箇所では、間隔が約5cmしかない。

貯蔵穴はカマドの左側から検出された。住居の西コーナーのカマド左袖と壁の間一杯に設けられている。平面形態は長方形で、長軸0.75m、短軸0.57m、床面からの深さは0.10mと浅い。住居跡を掘り下げる段階で、貯蔵穴上面から土師器甕や甔などがほぼ完形で出土した。

カマドは、北西壁の中央から左寄りに構築されていた。煙道先端は第9号溝跡によって壊されており、残存する長さは1.68mである。袖は両袖とも長さが0.30mほど残っていた。袖は粘質土を使って構築されており、壁に据え付けられている。焚口の幅は0.47mで、壁から0.3mほど内側に設けられている。燃烧部の奥壁は不明瞭で、明確な掘り込みがなく、煙道に連続する。煙道先端まで明確なくびれがなく徐々に細くなっている。先端の第9号溝跡との重複部分の幅は、0.28mである。

出土遺物は、貯蔵穴上面から土師器甕・甔がま

とまって出土した。また、覆土上層から土師器片、須恵器片が出土した。22・23の紡錘車、24～30の編み物石もそれらと共伴して出土している。

第20号住居跡の時期は、土師器模倣坏、長胴甕の形態的特徴から7世紀後半に位置づけられる。

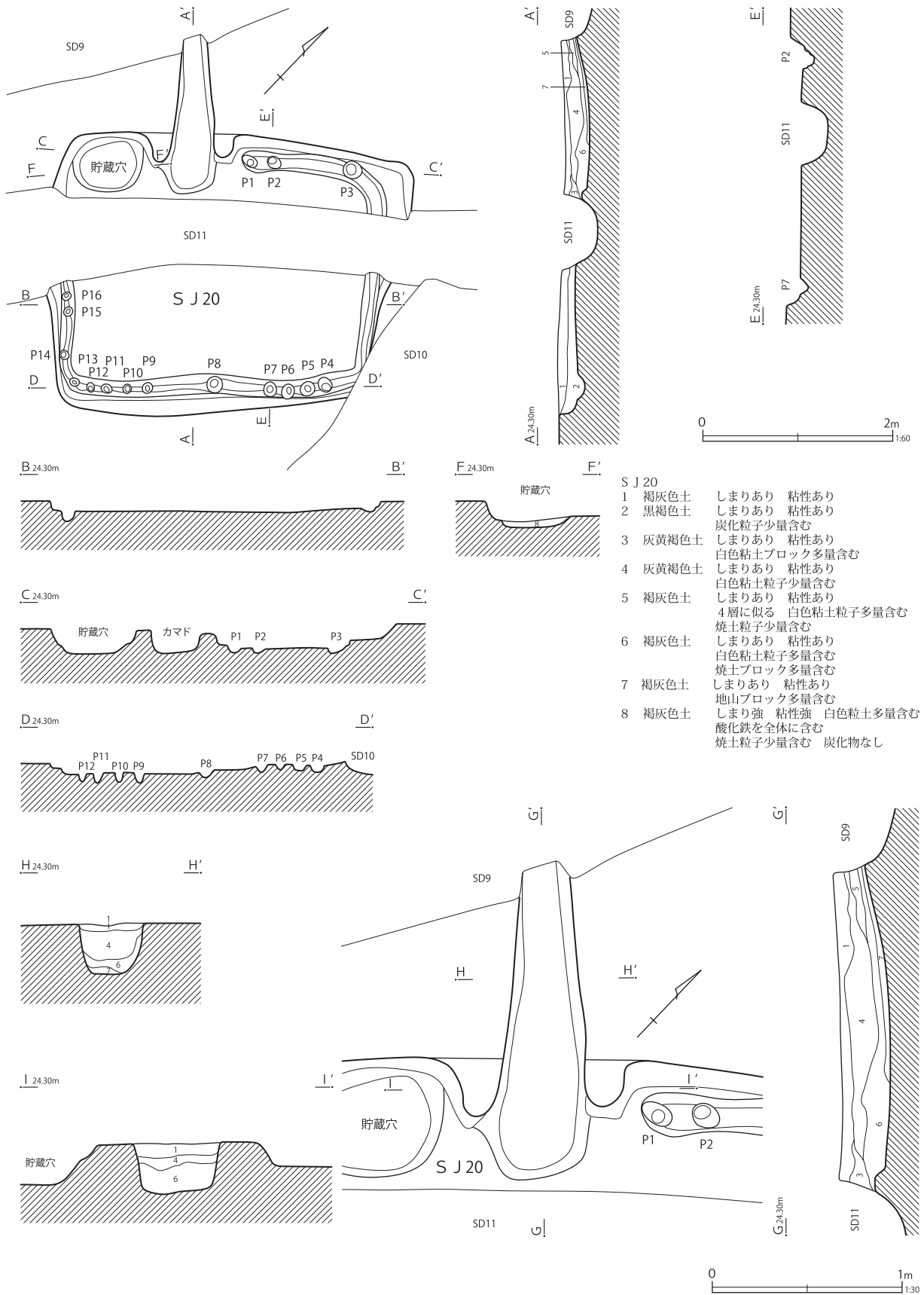
第20号住居跡出土遺物（第33・34図）

1～3は湖西産須恵器の瓶類である。焼成が堅緻で、軽い印象を受ける。1・3は平瓶の口縁部である。1の口縁端部は内剥ぎ状、2は複合口縁状になっている。3はフラスコ形で、胴部横の蓋の部分である。2は全体に灰がかかり、内面には自然釉が垂れている。

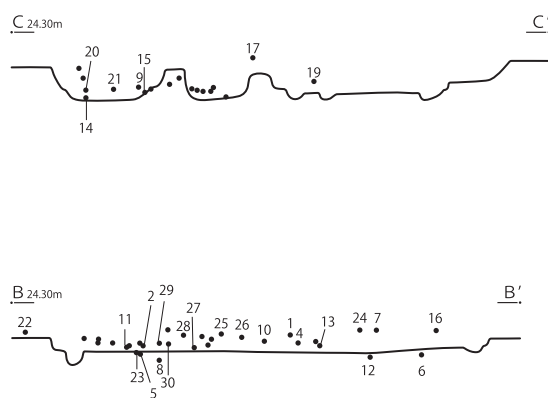
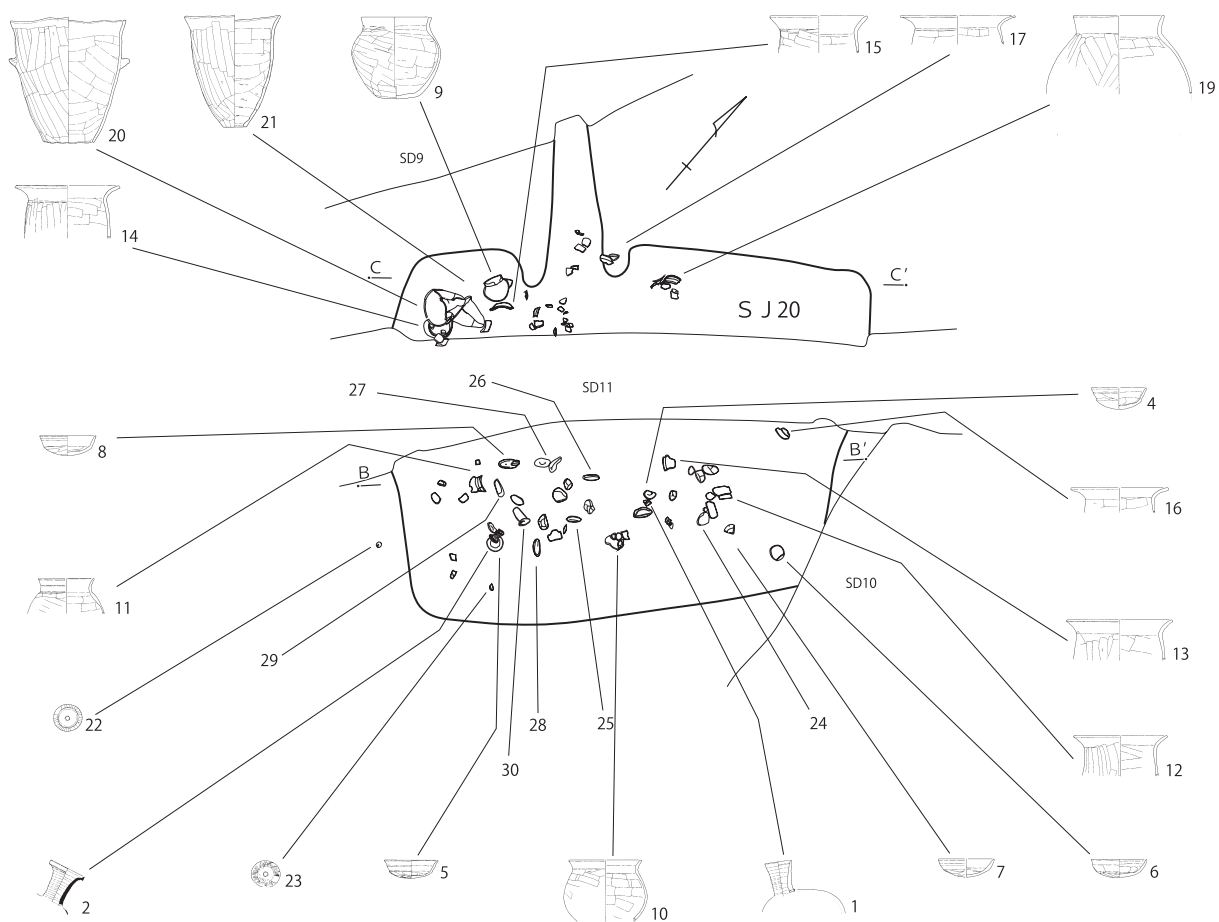
4～21は土師器である。胎土にはいずれも砂粒、角閃石の混入が目立ち、利根川流域の粘土が用いられていると考えられる。

4～8は有段口縁坏である。口径が11cm台と小型だが、やや深身である。いずれも内外面黒色処理されている。5の底面にはヘラ記号が認められる。7・8は口縁部と体部の境目が不明瞭である。

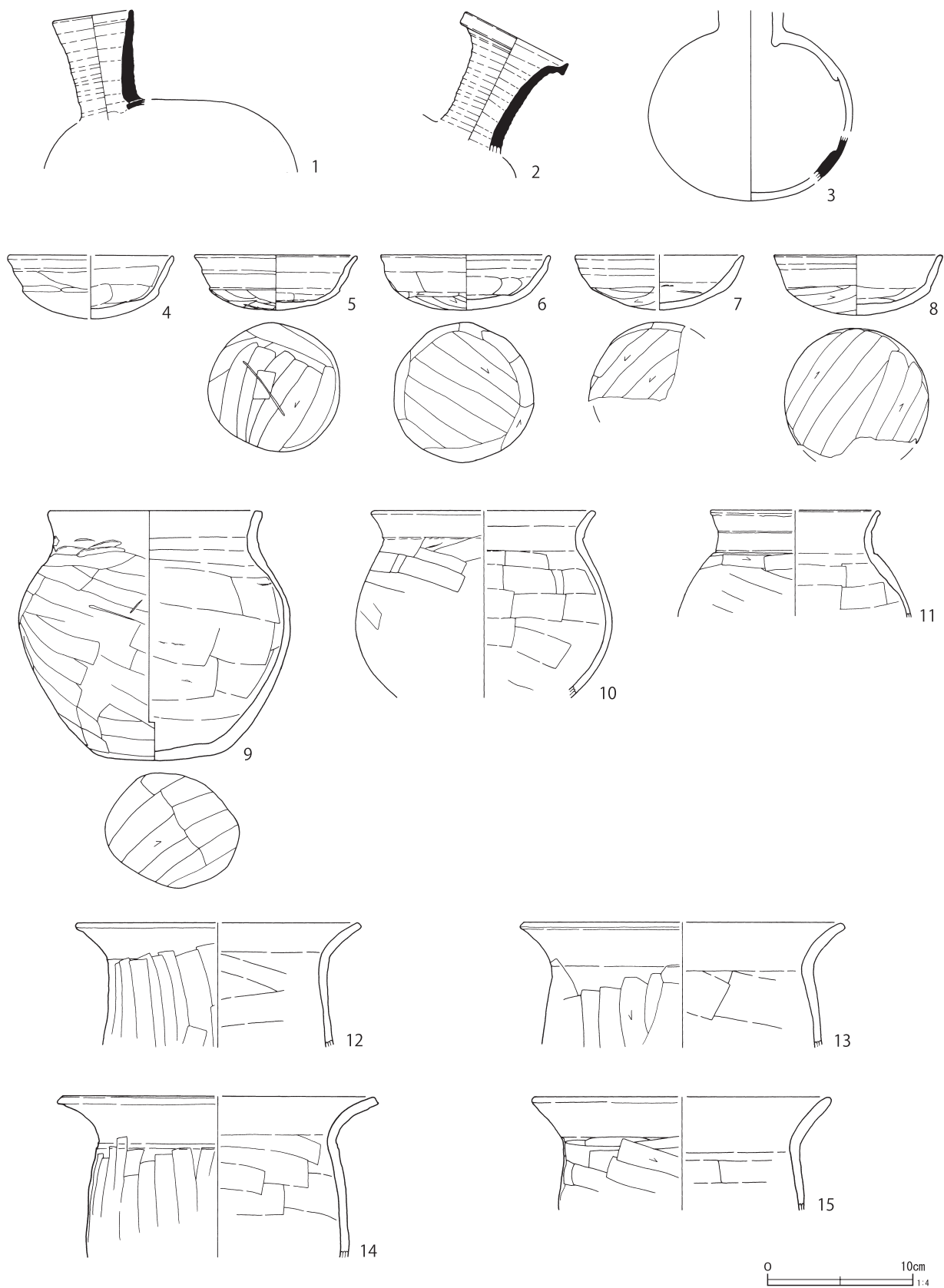
9～11は小型の壺である。全体に胎土は砂が多く、ザラザラしている。短く若干外反する口縁部



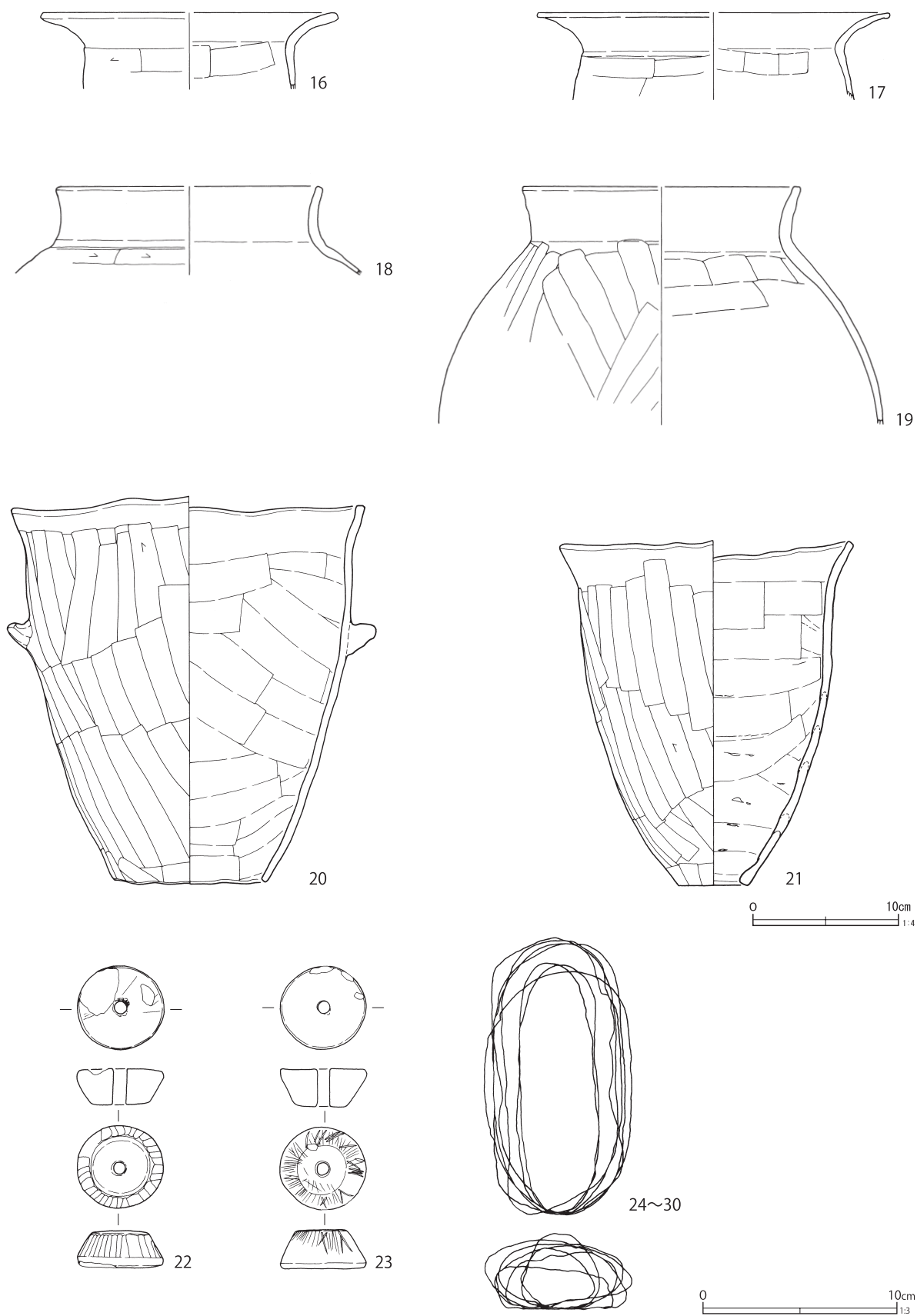
第 31 図 第 20 号住居跡



第 32 図 第 20 号住居跡遺物出土状況



第 33 図 第 20 号住居跡出土遺物 (1)



第 34 図 第 20 号住居跡出土遺物（2）

第 10 表 第 20 号住居跡出土遺物観察表（第 33・34 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	平瓶	5.2	[8.8]	—	I K	70	普通	灰	No. 16 内面自然釉 湖西産	38-1
2	須恵器	平瓶か	7.8	[9.6]	—	I K	90	普通	灰	No. 28 湖西産	38-2
3	須恵器	フラスコ瓶	—	[3.0]	—	I	5	普通	灰	一括 外面灰付着 湖西産	47-5
4	土師器	坏	(11.3)	[4.3]	—	C E G I K	45	普通	にぶい橙	No. 16 内外面黒色処理	38-3
5	土師器	坏	11.0	3.8	—	C E G I	95	普通	淡黄	No. 33 内外面黒色処理	38-4
6	土師器	坏	11.5	3.8	—	C D E G H	100	普通	にぶい黄橙	No. 12 内外面黒色処理	38-5
7	土師器	坏	(11.4)	(3.8)	—	C D E G	25	普通	にぶい黄橙	No. 18 内外面黒色処理	38-6
8	土師器	坏	11.5	4.2	—	C D H I G	85	普通	にぶい黄橙	No. 42 内外面黒色処理	38-7
9	土師器	壺	14.6	17.1	9.1	A C E G H I K	95	普通	にぶい黄橙	No. 4	38-8
10	土師器	壺	(14.9)	[12.9]	—	C E G H I K	30	普通	にぶい黄橙	No. 19	38-9
11	土師器	壺	(11.4)	[7.4]	—	C E G I K	30	普通	灰白	No. 24	39-1
12	土師器	甕	(19.2)	[8.6]	—	C G I K	20	普通	浅黄橙	No. 13	39-2
13	土師器	甕	(21.8)	[8.6]	—	E G H K	20	普通	橙	No. 14	39-3
14	土師器	甕	(21.2)	[11.1]	—	E G H I K	60	普通	橙	No. 2・一括 煤付着	39-4
15	土師器	甕	(20.0)	[7.9]	—	G H I K	50	普通	にぶい橙	No. 6	39-5
16	土師器	甕	(20.0)	[5.3]	—	G H I K	20	普通	黄橙	No. 9	39-6
17	土師器	甕	(24.0)	[6.0]	—	C G K	20	普通	橙	カマドNo. 1	39-7
18	土師器	甕	(17.7)	[6.1]	—	C E G H I K	15	普通	にぶい橙	一括	39-8
19	土師器	甕	(18.9)	[16.0]	—	C G H I K	30	普通	橙	No. 8 煤付着	39-9
20	土師器	甗	24.1	26.7	10.2	G H I K	95	普通	浅黄橙	No. 1	40-1
21	土師器	甗	19.5	23.6	4.8	E G H I K	95	普通	浅黄橙	No. 3	40-2
22	石製品	紡錘車	長さ 4.3 幅 4.4 厚さ 1.9 重さ 55.3 g							No. 31 滑石	49-1
23	石製品	紡錘車	長さ 4.2 幅 4.4 厚さ 2.0 重さ 53.6 g							No. 32 滑石	49-2
24	石製品	編物石	長さ 14.1 幅 6.5 厚さ 2.4 重さ 355.1 g							No. 34 ホルンフェルス	50-6
25	石製品	編物石	長さ 13.7 幅 6.3 厚さ 3.6 重さ 463.2 g							No. 35 砂岩	50-6
26	石製品	編物石	長さ 12.8 幅 4.3 厚さ 3.1 重さ 247.0 g							No. 36 片岩	50-6
27	石製品	編物石	長さ 14.1 幅 5.9 厚さ 3.0 重さ 399.6 g							No. 38 緑泥片岩	50-6
28	石製品	編物石	長さ 12.5 幅 3.9 厚さ 4.0 重さ 312.4 g							No. 39 凝灰岩	50-6
29	石製品	編物石	長さ 13.9 幅 6.8 厚さ 3.5 重さ 542.4 g							No. 40 蛇紋岩	50-7
30	石製品	編物石	長さ 12.3 幅 7.6 厚さ 3.4 重さ 490.0 g							No. 41 砂岩	50-7

に丸い胴部が付く。いずれも外面斜め方向のヘラケズリ、内面横方向のヘラナデ調整である。底部は 9 のみで認められる。不明瞭でやや丸みを帯びた平底である。底面はヘラケズリが施されている。11 は口縁部がやや長く、中位に沈線状の段が認められるため、壺の可能性はある。

12～17 は長胴甕である。16・17 は口縁部の外反が強い。胴部外面は 12～14 が縦方向のヘラケズリが施されている。15～17 は頸部下位に横方向のヘラケズリが加えられている。いずれも内面は横方向のヘラナデである。

18・19 は縦長の胴部で中位が張る形態のもので、壺の可能性はある。口縁部は直線的で直立する。胴部の調整は外面縦方向のヘラケズリ、内面は横

方向のヘラナデである。19 は外面に煤が付着する。

20・21 は所謂砲弾形の甗である。20 は全体的に径が太く、矮小化した把手が付く。歪みが著しい。胴部は縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデである。把手は手捏ねで、調整も指ナデである。

22・23 は滑石製の紡錘車である。断面形は台形で、上下、側面には丁寧な研磨痕がみられる。23 は上下面、側面に線刻が見られるが、有意なものとは考え難い。穿孔は両側穿孔である。

24～30 は編み物石である。形態は大略不整な楕円形である。長さは 12.3～14.1 cm、幅 3.9～7.6 cm、厚さは 2.4～4.0 cm である。重さは 247.0～542.4 g である。石材は砂岩、片岩、ホルンフェルス・緑泥片岩・凝灰岩・蛇紋岩である。

第21号住居跡（第35・36図）

N・O-17グリッドに位置する。第19号住居跡、第3号掘立柱建物跡、第6号溝跡と重複し、第19号住居跡、第6号溝跡より古く、第3号掘立柱建物跡より新しい。第19号住居跡によって北側の大半を壊され、第6号溝跡によって煙道の先端を壊されている。

平面形は東西に長い長方形、もしくはカマドの設置する場所が南によった方形と考えられる。

規模は、主軸方向が3.76m、直交軸方向が2.39m、深さは0.14mである。主軸方位は、N-71°-Eである。

覆土は、灰褐色粘土ブロック、炭化物、焼土粒子を含む暗褐色土を主体とする。自然堆積である。

床面はほぼ平坦である。壁溝は検出されなかった。ピットと貯蔵穴を検出した。貼床は施されていないかった。

ピットは床面南西のやや壁寄りに1基検出したのみである。位置的に柱穴ではないと考えられる。平面形は、ほぼ円形で径は0.37m、深さは0.50mである。覆土は粘性の強い黒褐色土が主体で、柱痕は確認されなかった。

貯蔵穴はカマド右側の、住居跡の東コーナーで検出した。平面形は不整形で、規模は長軸0.75m、短軸0.67m、深さは0.12mである。底面は中央部が低く、断面形は鍋底状である。覆土は褐灰色土の自然堆積である。住居跡床面で確認した際に、土師器甕片が出土したが覆土からは出土しなかった。

カマドは東壁に設けられていた。住居跡の北側が大きく壊されているため位置関係は定かではないが、南に寄っている可能性が高い。規模は残存長2.04m、幅0.37mである。住居廃絶時に壊されていると考えられ、3～5層は天井部の残土である灰褐色粘土を巻き込んで堆積したのと考えられる。袖は灰褐色粘土によって構築されていた。残存している張り出しは短く、現状の両袖の先端

には構築材として土師器甕が逆位に使われていた。袖間には土師器甕が横位で割れた状態で出土した。焚口天井部を構築する際の補助材と考えられるため、本来の焚口は更に西側にあり、袖も本来その部分まで延びていたと考えられる。焚口部の痕跡は明瞭でない。燃焼部は東壁の外側に半ばかかるように掘りこまれている。長さ0.74m、幅0.37mで、深さは床面から0.08mである。底面は中央部が窪み、被熱による赤化部分は見られなかった。煙道との段差は0.05mである。煙道は、残存長1.30mで、幅は先端に向かって狭くなる。底面は燃焼部から先端向かってごく緩やかに上がっていた。煙出し部分の状況は、第6号溝跡によって壊されていたため不明である。

遺物は、カマド前面から南壁際を中心に、土師器坏・甕、須恵器甕片が出土した。また、南壁際中央付近の覆土中から石製紡錘車が出土した。煙道では底面から浮いた状態で土師器坏が出土した。第21号住居跡の所属時期は、有段口縁坏、長胴甕の形態的特徴から7世紀後半に位置づけられる。

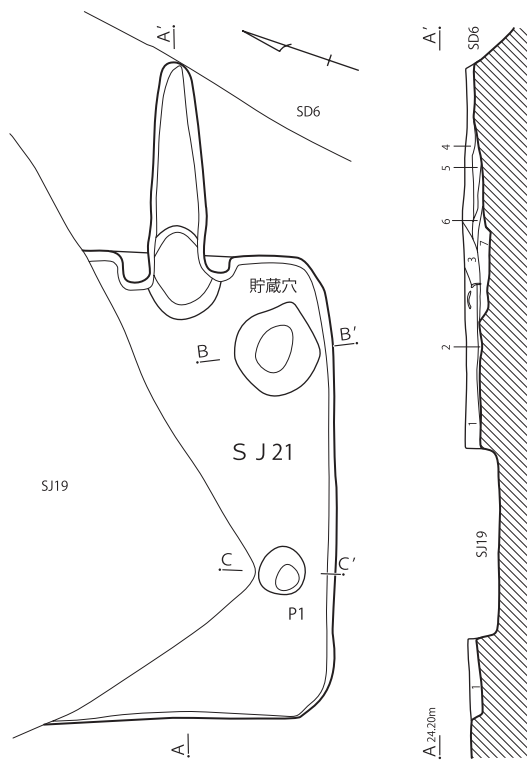
第21号住居跡出土遺物（第37図）

1～7は土師器である。胎土にはいずれも砂粒、角閃石の混入が目立ち、利根川流域の粘土が用いられていると考えられる。

1・2は有段口縁坏である。口径が11cm台と小型だが、やや深身である。いずれも内外面黒色処理されている。1は口縁部と体部の境目が不明瞭である。

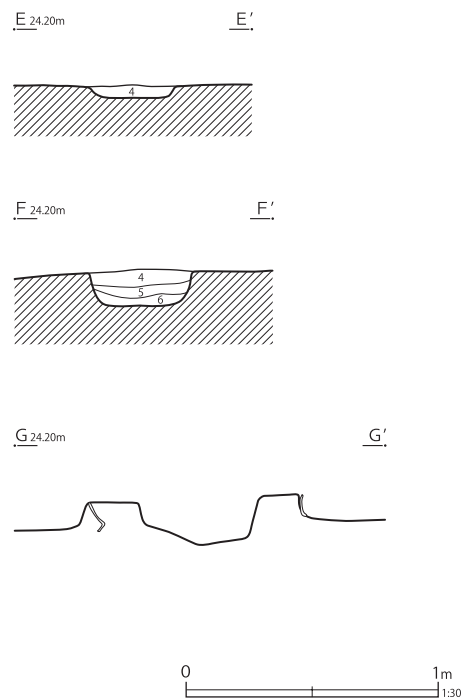
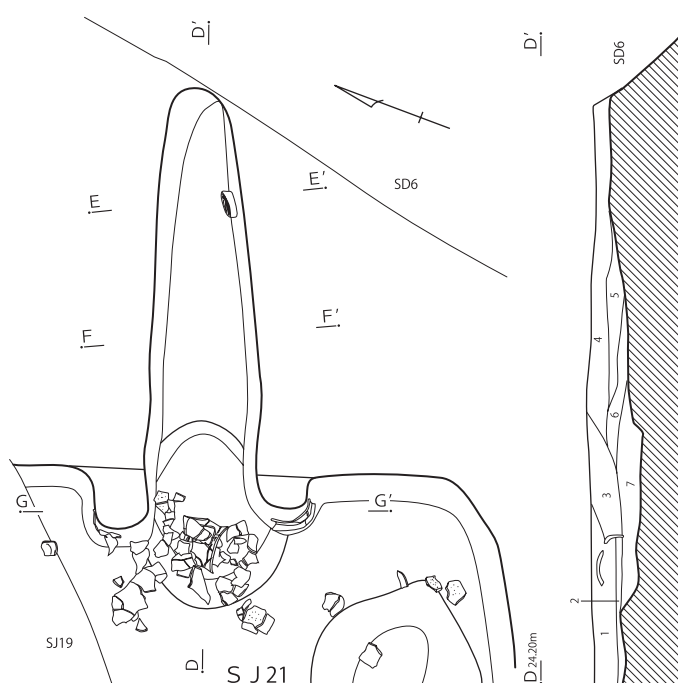
3～7は長胴甕である。3・6が細め、4・5・7はやや太めである。口縁部は3が短く、4・5はやや長めである。直線的に開き、端部は面を持つ。いずれも胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデが施されている。

8は滑石製の紡錘車である。断面形は台形である。全体に顕著な研磨痕がみられ、光沢がある。上面にヘラ記号状の線刻が見られるが、有意なものとは考え難い。

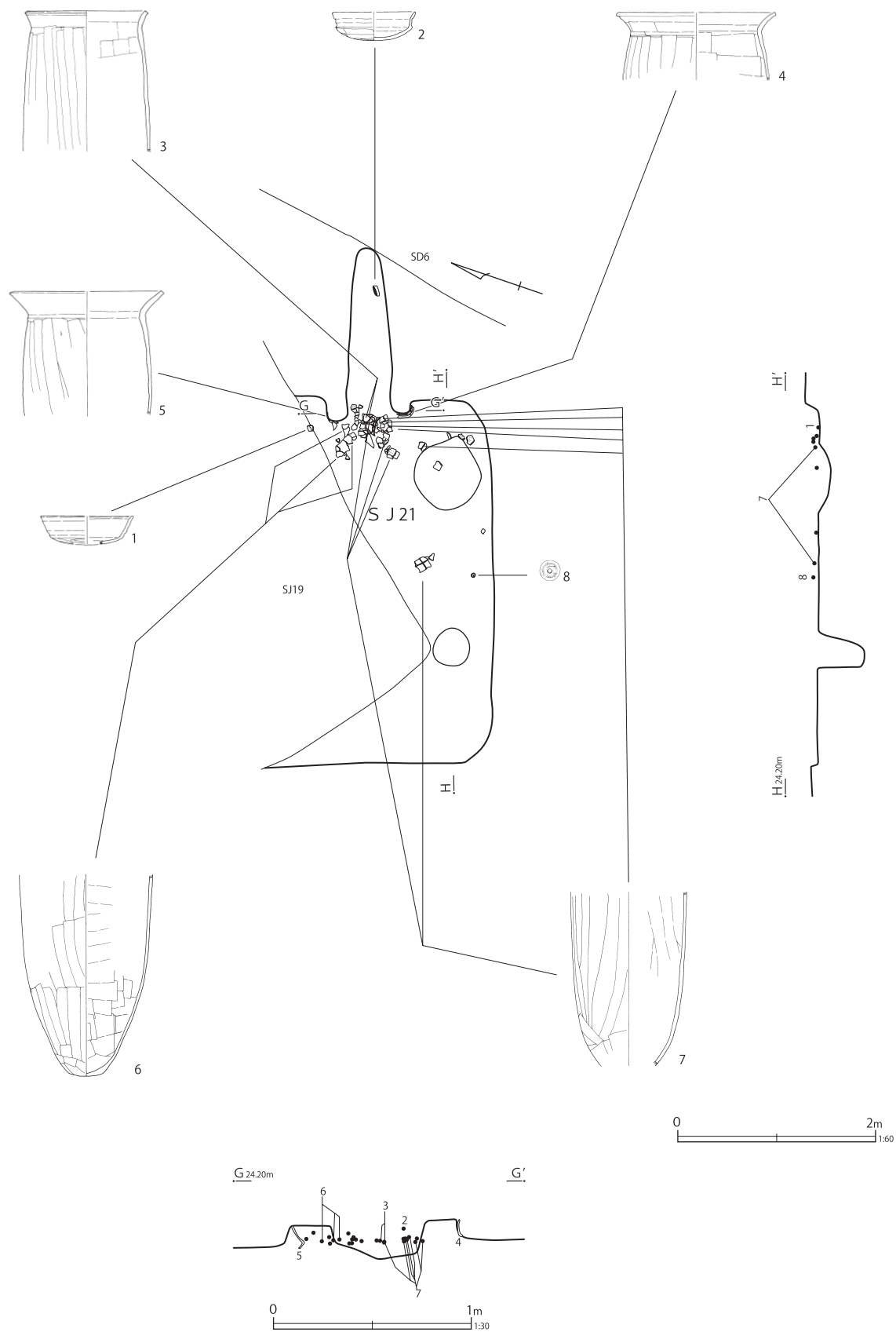


- S J 21
- | | |
|-----------|----------------------------|
| 1 暗褐色土 | 黄褐色ブロック・炭化粒子を含む |
| 2 暗褐色土 | しまりややあり 灰褐色粘土ブロックを含む |
| | 炭化粒子が混在する |
| 3 暗褐色土 | しまりややあり |
| | 2層に比べ灰褐色粘土ブロックを多量含む |
| 4 暗褐色土 | 灰褐色粘土ブロック・炭化粒子・焼土粒子・ |
| | 焼土ブロックを含む |
| 5 暗褐色土 | 灰褐色粘土ブロック・炭化粒子・焼土粒子を含む |
| | 4層より暗い |
| 6 黒褐色土 | しまり弱 カマド灰層 炭化粒子を多量含む |
| 7 にぶい黄褐色土 | しまりあり 粘性あり 灰を少量含む |
| 8 褐灰色土 | しまりあり 粘性あり 炭化粒子・焼土粒子微量含む |
| 9 褐灰色土 | しまりあり 粘性あり 焼土粒子微量含む |
| 10 黒褐色土 | しまりあり 粘性あり マンガン多量含む |
| 11 黒褐色土 | しまりあり 粘性あり マンガン少量含む |
| 12 褐灰色土 | しまりやや粘性あり |
| | 1層よりやや粘性あり |
| | しまりあり 粘性強 白色土(地山) ブロック多量含む |

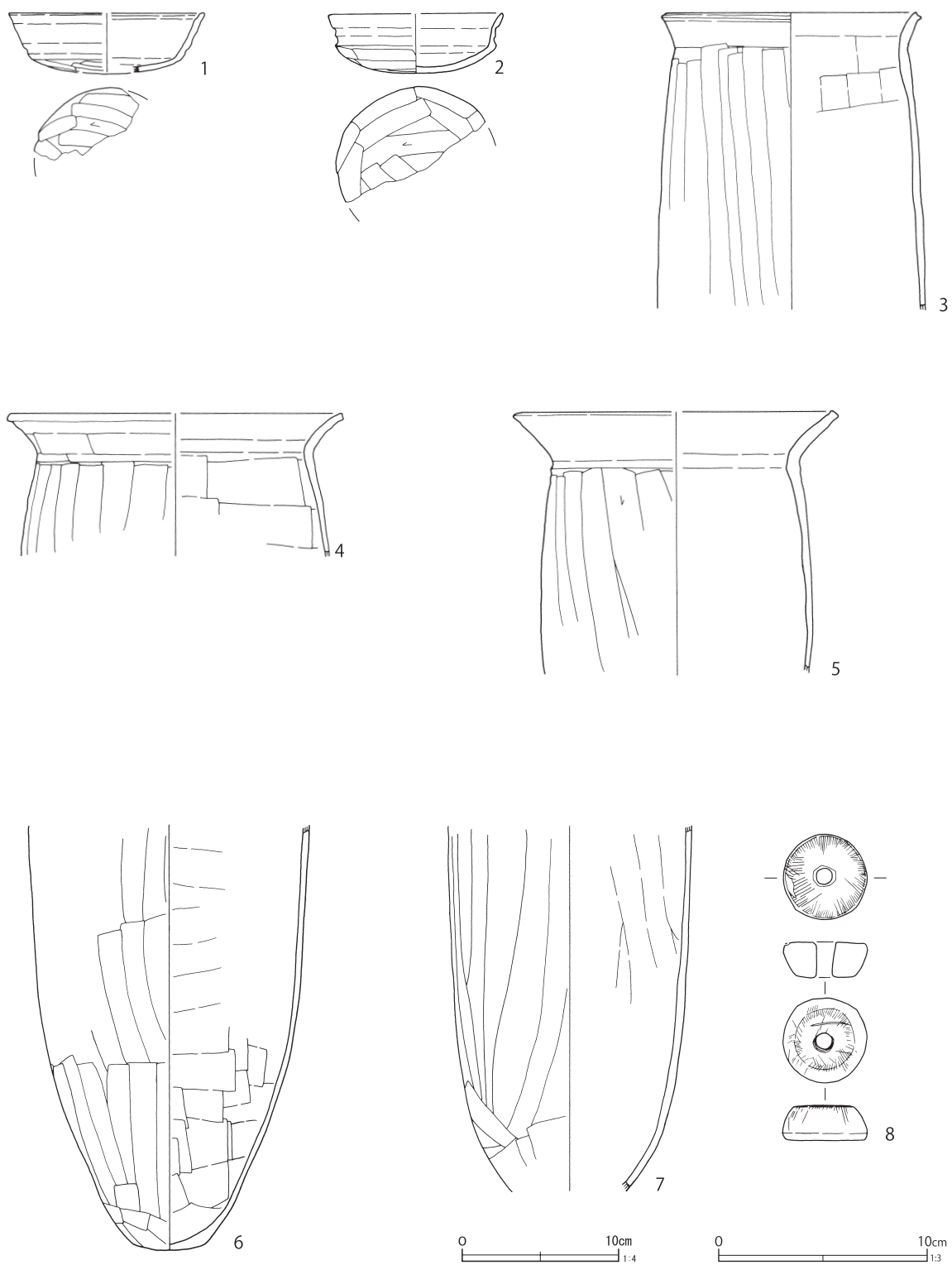
0 2m
1:60



第 35 図 第 21 号住居跡



第 36 図 第 21 号住居跡遺物出土状況



第 37 図 第 21 号住居跡出土遺物

第11表 第21号住居跡出土遺物観察表（第37図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.4)	[3.8]	—	ACEHI	15	普通	明赤褐	No. 33	40-3
2	土師器	坏	(10.8)	3.8	—	ACEHI	40	普通	浅黄橙	No. 34	40-4
3	土師器	甕	(15.8)	[19.1]	—	ACIK	75	普通	黄	No. 18・No. 35	40-5
4	土師器	甕	(21.0)	[9.2]	—	EIK	40	普通	浅黄橙	No. 37	40-6
5	土師器	甕	(19.8)	[16.8]	—	HIK	20	普通	浅黄橙	No. 36 カマド	41-1
6	土師器	甕	—	[26.9]	(4.6)	ACHIK	25	普通	にぶい黄橙	No. 27・No. 29・No. 31	41-2
7	土師器	甕	—	[23.2]	(7.2)	HIK	70	普通	浅黄橙	No. 2・8・9・10・13・15・16・17・18 B・C・一括	41-3
8	石製品	紡錘車	長さ 4.05	幅 3.90	厚さ 1.70	重さ 45.3 g				No. 1 滑石	49-3

第22号住居跡（第38・39図）

P17グリッドに位置する。第10号住居跡、第6・10号溝跡と重複し、第22号住居跡が最も古い。当初、カマドの煙道のみが確認できた状態で、住居跡本体の形状が不鮮明であったため全体に掘り下げ、掘り込みが確認できた。そのため、住居跡全体の覆土の観察は十分にできなかった。

平面形は方形と推定される。規模は主軸方向4.13m、直交軸方向は残存している範囲で3.35mほどである。煙道を確認した面からの深さは0.16mである。主軸方位はN-44°-Eである。

床面は平坦である。貯蔵穴を検出したが、壁溝、ピットは検出されなかった。

貯蔵穴はカマド右側から検出された。隅丸長方形で、長軸0.90m、短軸0.76m、深さ0.23mである。覆土は自然堆積で、遺物は出土しなかった。

カマドは北壁の中央に構築されていた。規模は長さ2.37m、幅0.52mである。住居廃絶時に壊されていたと考えられ、1・2層は流れ込みである。袖は、灰褐色粘土が壁に貼りこまれて構築されていた。残存している張り出しは0.3mほどである。燃烧部は方形の掘り込みで、規模は長軸0.62m、短軸0.52m、床面からの深さは0.14mである。覆土は第3層が灰層である。底面や袖の被熱は不明瞭であった。煙道へは0.04mほどの段差を持って続く。煙道は幅広で、幅0.40～0.50mである。奥壁はほぼ垂直に立ち上がっていた。煙道の床面、壁面の被熱は不明瞭であった。

遺物は、カマド周辺から土師器坏、甕、住居南

西壁際から編み物石が、いずれもほぼ床面から出土した。支脚はカマド右側袖手前から出土した。

第22号住居跡の時期は、模倣坏、長胴甕の形態的特徴から7世紀後半に位置づけられる。

第22号住居跡出土遺物（第40・41図）

1は須恵器の甕である。小型で、胴部が張る形態である。所謂丸甕と言えようか。石英粒を多く含む。色調は明るい灰色である。西毛産か。

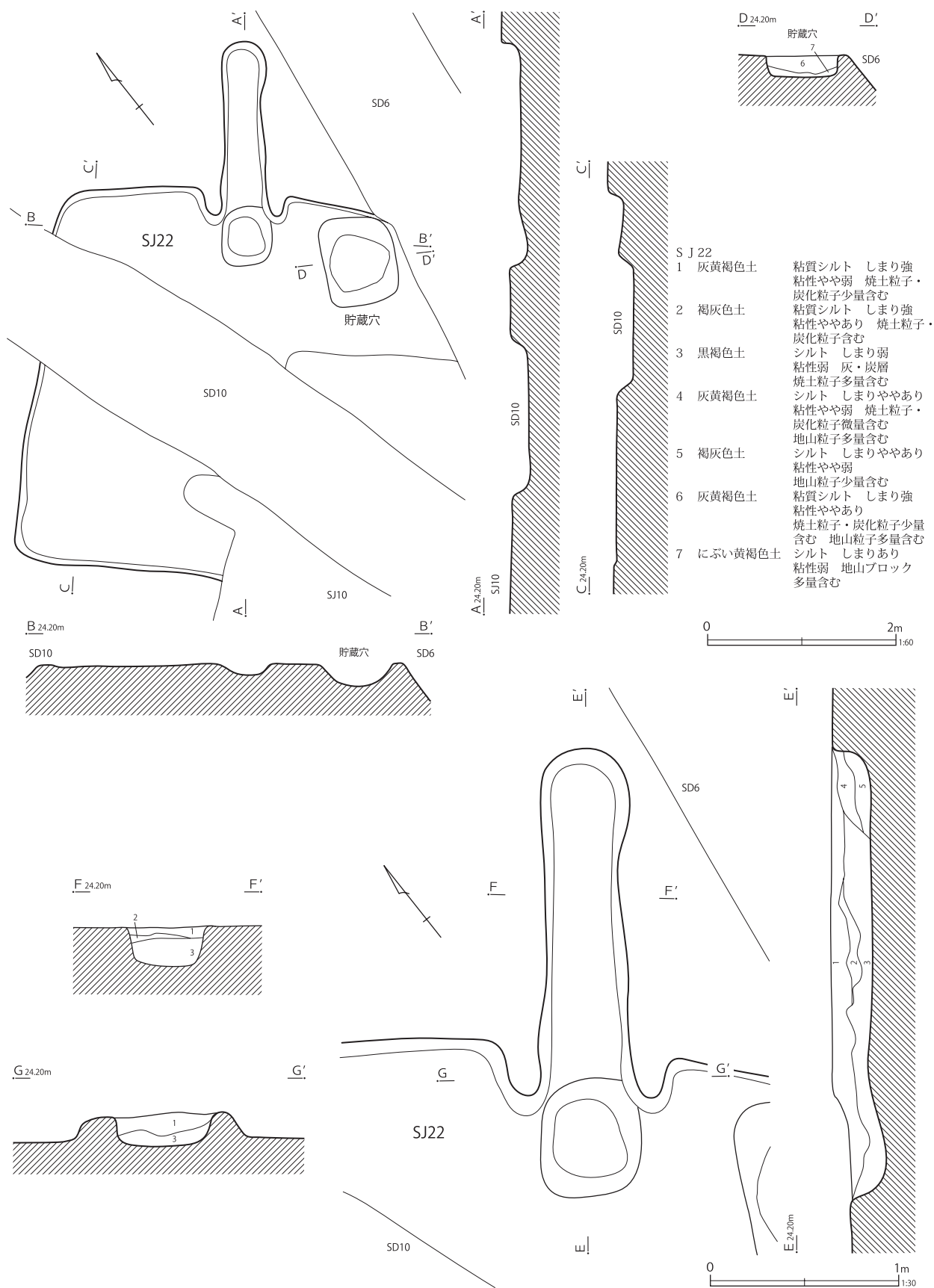
2～13は土師器である。胎土にはいずれも砂粒、角閃石の混入が目立ち、利根川流域の粘土が用いられていると考えられる。

2・3は有段口縁坏で、内外面黒色処理されている。風化が著しい。4は坏蓋模倣坏である。いずれも口径が10～11cm台と小型だが、やや深身である。

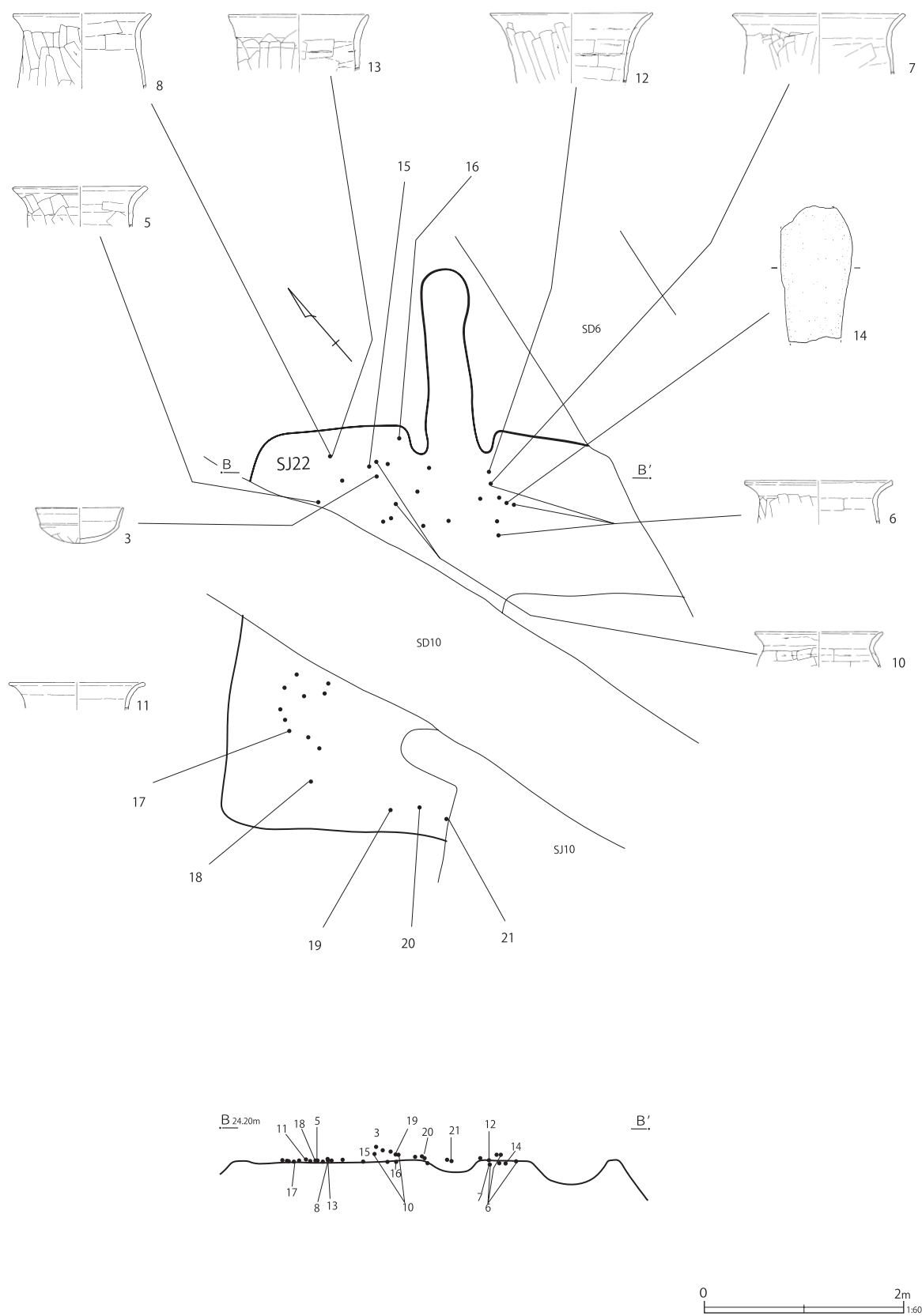
5～13は長胴甕である。9・10は肩部に横方向のヘラケズリが施され、やや胴部が張る。その他は胴部が張らず、口縁部から直線的な胴部に至る。いずれも口縁部は短く、直線的に開き、5・6は端部が面取りされている。胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデが施されている。13は口縁部の外反が弱く、甑の可能性もある。

14は砂岩製の支脚である。上下を欠失している。被熱し、一部に煤が付着する。

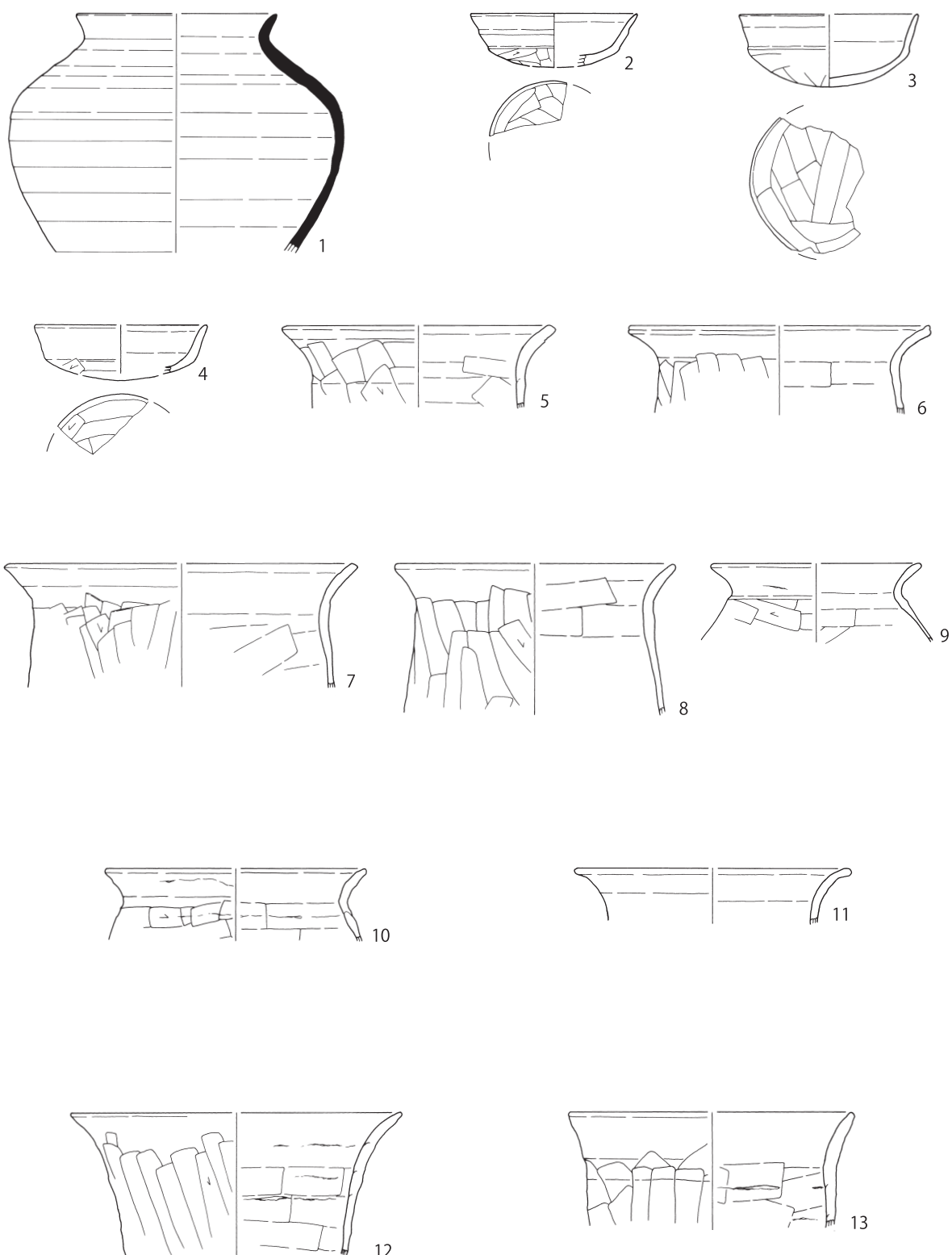
15～21は編み物石である。いずれも南西壁の壁際から出土した。長さ7.5～13.4cm、幅4.2～6.5cm、厚さ2.7～4.3cm、重さは200.7～480.3gである。石材は砂岩、蛇紋岩である。加工痕はなく、中央に僅かに擦痕が認められるのみである。



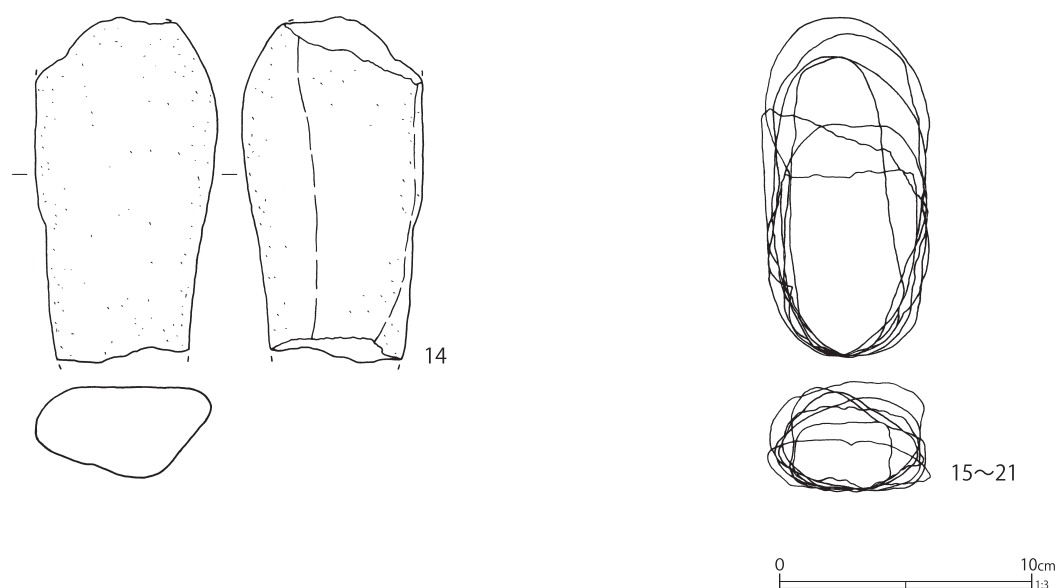
第 38 図 第 22 号住居跡



第 39 図 第 22 号住居跡遺物出土状況



第 40 図 第 22 号住居跡出土遺物 (1)



第41図 第22号住居跡出土遺物（2）

第12表 第22号住居跡出土遺物観察表（第40・41図）

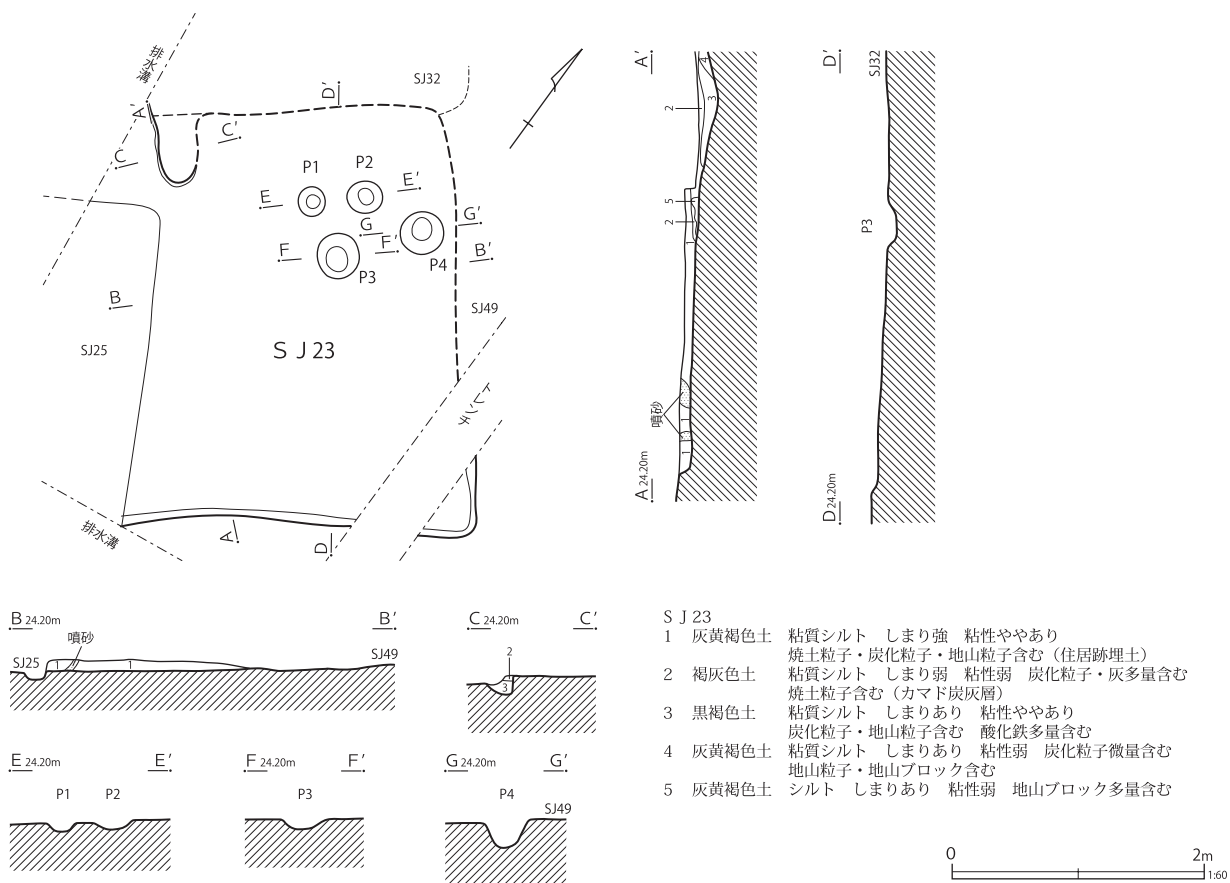
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	(13.0)	[15.6]	—	BEK	45	普通	灰	S D 10 西毛産か	41-4
2	土師器	坏	(10.8)	[3.4]	—	CGH	20	普通	にぶい橙		41-5
3	土師器	坏	(11.6)	[4.8]	—	ACGHK	40	普通	橙	No. 15	41-6
4	土師器	坏	(11.1)	[3.2]	—	CEG	25	普通	明黄褐		41-7
5	土師器	甕	(17.0)	[5.5]	—	CEGHI	15	普通	にぶい黄橙	No. 18	41-8
6	土師器	甕	(19.4)	[5.8]	—	CEGHI	30	普通	にぶい黄橙	No. 2・No. 3・No. 6	41-9
7	土師器	甕	(22.0)	[8.2]	—	BCEGHI	15	普通	にぶい黄橙	No. 2	42-1
8	土師器	甕	(17.8)	[10.0]	—	ACEGHI	20	普通	橙	No. 20	42-2
9	土師器	甕	(13.4)	[5.1]	—	ACDEGH	25	普通	橙	貯蔵穴	42-3
10	土師器	甕	(16.7)	[4.9]	—	ACEGHI	40	普通	にぶい橙	No. 13・No. 16	42-4
11	土師器	甕	(17.4)	[3.6]	—	ACEGH	15	普通	にぶい橙	No. 30	42-5
12	土師器	甕	(21.4)	[9.4]	—	ACEGHI	20	普通	にぶい黄橙	No. 1	42-6
13	土師器	甕	(18.4)	[7.6]	—	ABCEGI	20	普通	にぶい黄橙	No. 20	42-7
14	石製品	支脚	長さ [13.6] 幅 [7.3] 厚さ 3.8 重さ 566.8 g							No. 4 砂岩 被熱一部煤付着 欠損	48-7
15	石製品	編物石	長さ 7.5 幅 5.3 厚さ 3.5 重さ 202.0 g							No. 21 蛇紋岩	50-7
16	石製品	編物石	長さ 9.1 幅 6.2 厚さ 4.3 重さ 331.8 g							No. 23 砂岩	50-7
17	石製品	編物石	長さ 12.6 幅 6.3 厚さ 3.4 重さ 348.5 g							No. 32 蛇紋岩	50-8
18	石製品	編物石	長さ 11.6 幅 4.2 厚さ 4.3 重さ 237.2 g							No. 34 砂岩	50-8
19	石製品	編物石	長さ 10.0 幅 6.5 厚さ 2.7 重さ 200.7 g							No. 35 砂岩	50-8
20	石製品	編物石	長さ 13.4 幅 6.0 厚さ 4.2 重さ 480.3 g							No. 36 砂岩	50-8
21	石製品	編物石	長さ 11.7 幅 5.7 厚さ 3.9 重さ 387.7 g							No. 37 砂岩	50-8

第23号住居跡（第42図）

R・S-18グリッドに位置する。第25・32・49号住居跡と重複する。第25号住居跡より古く、他の住居跡との新旧関係は不明である。残存状態が非常に悪く、掘り込みは南壁の部分かが残っていたのみである。北側は貼床状の痕跡で確認した

のみである。カマドの大部分と住居本体の西側は、第25号住居跡によって壊されていた。

平面形は方形と思われるが、カマドを中心と仮定すると横長の長方形になる可能性がある。規模は、主軸方向3.50m、直交軸方向の南辺の残存長2.85m、深さは最大で0.12mである。主軸方位は



第 42 図 第 23 号住居跡

N-36° -Wである。

確認できた覆土は、焼土、炭化物、地山土を含む灰黄褐色土の単層である。

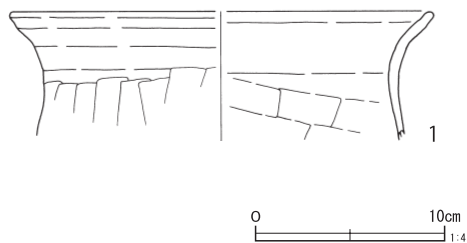
床面は辛うじて範囲がわかる程度に残っていたのみである。ほぼ平坦だが、噴砂が脈状に南北に貫いており、その東側は若干下がっていた。壁溝、貯蔵穴は検出されなかった。

ピットは4基検出した。柱穴に相当するのは、位置的にはP 2またはP 3と考えられるが、いずれも浅く確実ではない。覆土は観察できなかった。

カマドは北壁に構築されていた。第25号住居跡により大半が削平され右袖の一部のみが残っていた。残存していたのは基部のみで、長さ0.55m、幅0.38mである。わずかに残っていた燃焼部の土

第 13 表 第 23 号住居跡出土遺物観察表（第 43 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(22.0)	[6.9]	—	A E G H	10	普通	にぶい橙		47-5



第 43 図 第 23 号住居跡出土遺物

層は、第3・4層が掘り方の埋め土、その上面が使用面、第2層が灰層と考えられる。

遺物は覆土中から土師器甕の小破片が少量出土したのみである。7世紀後半としておきたい。

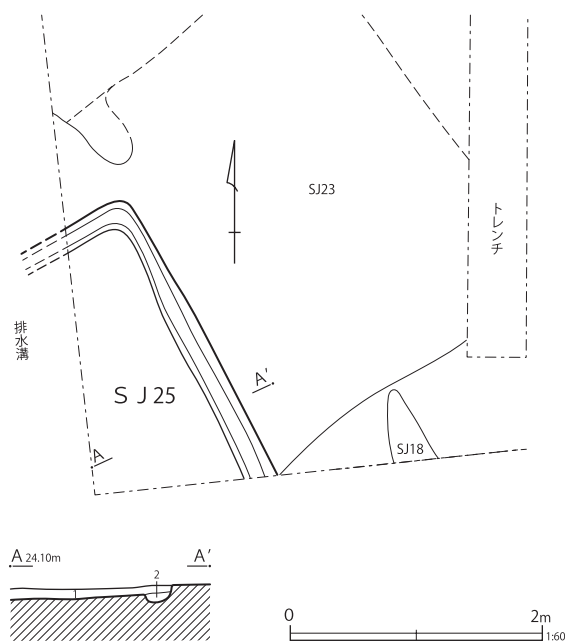
第23号住居跡出土遺物（第43図）

1は土師器の甕である。胎土は砂粒が多く、口縁部の屈曲が緩く、胴部が全体に太目であること

から甕の可能性もある。口縁部は直線的に外側に開き、端部はやや内湾する。胴部外面は縦方向のヘラズリ、内面は横方向のヘラナデが施されている。器面は風化が進み、荒れている。

第25号住居跡（第44図）

R・S-18グリッドに位置する。第23号住居跡と重複し、第25号住居跡が新しい。西側と南側は調査区外に続く。



S J 25
1 褐灰色土 粘質シルト しまりあり 粘性あり 焼土粒子・炭化粒子多量含む
2 灰黄褐色土 シルト しまりあり 粘性弱 褐灰色土に地山ブロック多量含む

第 44 図 第 25 号住居跡

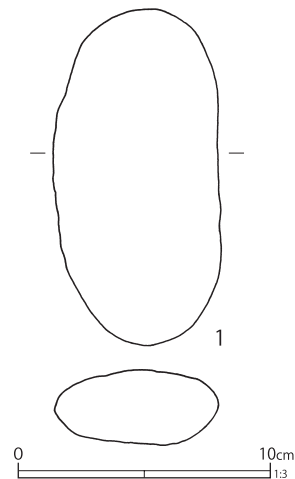
東辺の一部が検出できたのみで、平面形は不明である。検出した東辺の長さは3.53m、深さは0.09mである。東辺の方位はN-29°-Wである。

床面の北側は、地震による地割れの影響を受けやや凹凸があった。壁溝は、幅が0.14~0.25mで、深さは0.08m前後である。ピット、貯蔵穴は検出されなかった。カマドは調査区外の部分に構築されていると考えられる。

遺物は、土師器甕の小片、編み物石などが少量出土したのみである。

第25号住居跡出土遺物（第45図）

1は編み物石である。長さ13.1cm、幅6.4cm、厚さ3.1cm、重さ427.5gである。石材は緑泥片岩である。明瞭な加工痕は認められず、中央に僅かに擦痕が認められるのみである。



第 45 図 第 25 号住居跡出土遺物

第 14 表 第 25 号住居跡出土遺物観察表（第 45 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	石製品	編物石	長さ 13.1	幅 6.4	厚さ 3.1	重さ 427.5 g				緑泥片岩	51-1

第31号住居跡（第46図）

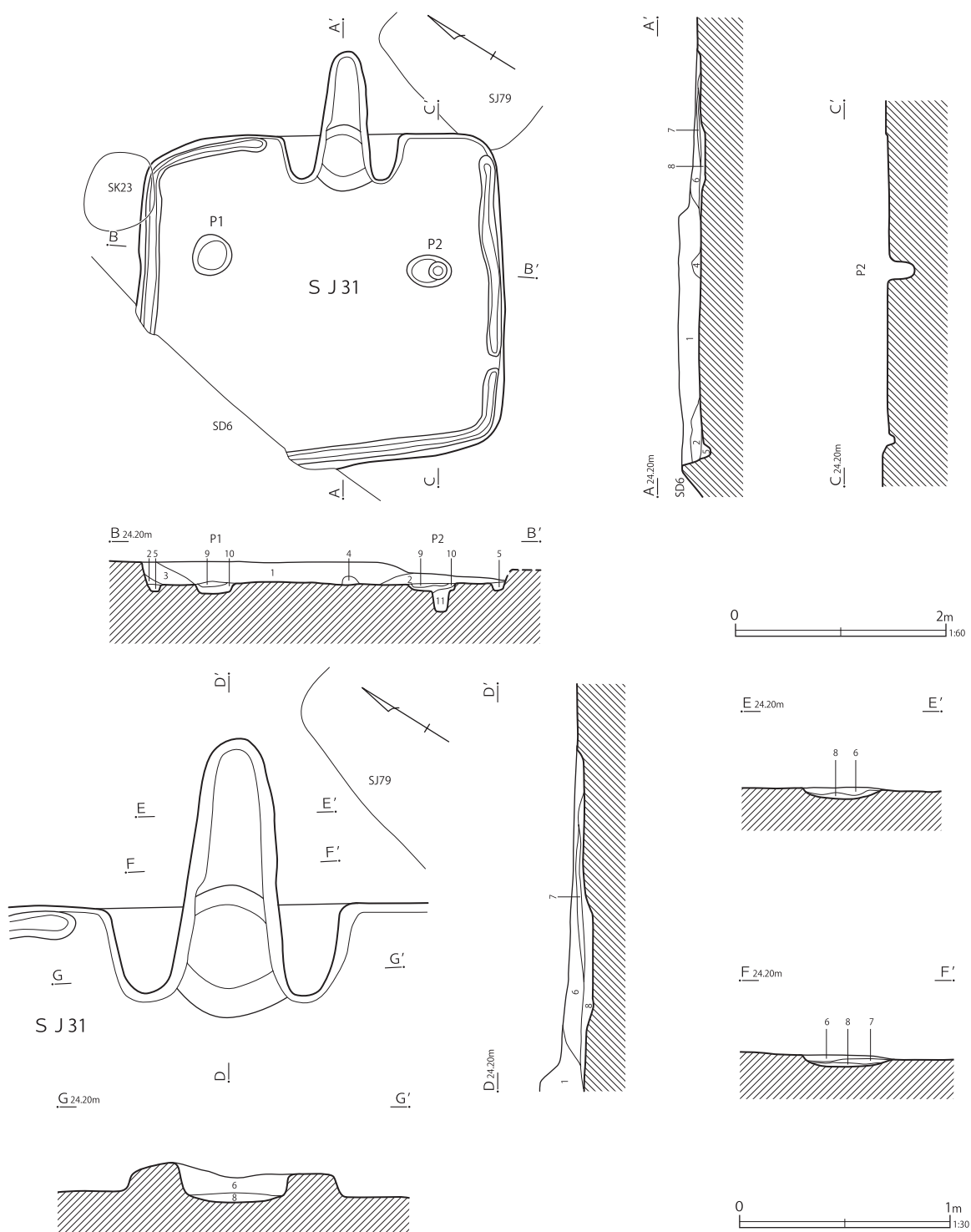
P-17・18グリッドに位置する。第12・79号住居跡、第6号溝跡、第23号土壇と重複し、第79号住居跡より新しく、その他の遺構よりも古い。西隅を第6号溝跡によって大きく壊されている。

平面形はやや横長の方形である。規模は、主軸方向3.48m、直交軸方向3.18m、深さは0.27mである。主軸方位はN-58°-Eである。

覆土は、白色粘土、炭化物、焼土を含む灰黄褐色土、褐灰色土を主体とする自然堆積である。

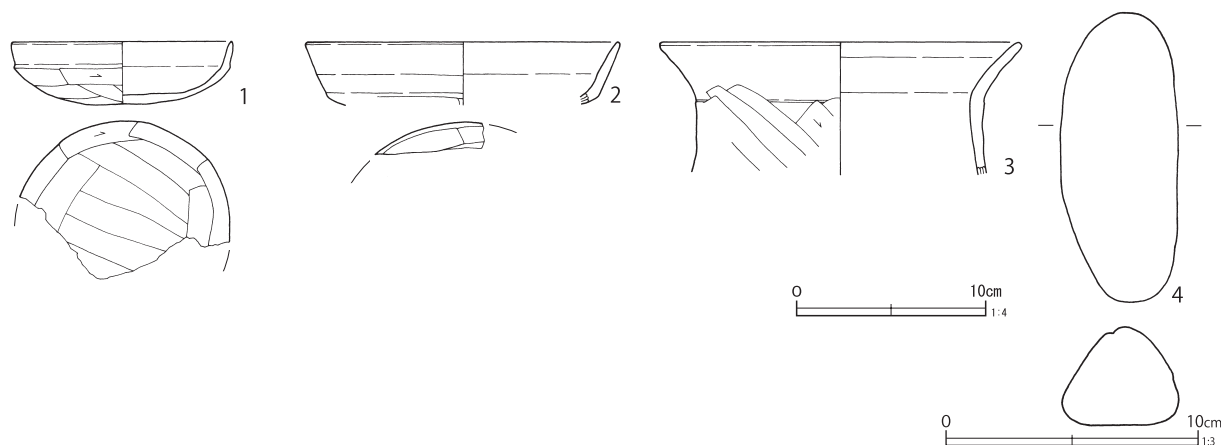
床面はほぼ平坦であった。壁溝、ピットが検出された。壁溝は住居跡北壁の東側を除いて、ほぼ全周していた。幅は最も広い部分で0.16m、深さは最も深い部分で0.10mである。覆土は地山ブロックを多く含み、埋戻しの可能性がある。

ピットは床面中央の南北の壁寄りでそれぞれ1



- S J 31
- | | | | | | |
|----|-------|-------|------|---------------------|---------------------|
| 1 | 灰黄褐色土 | しまりあり | 粘性あり | 白色粘土粒子（地山）・ブロック多量含む | 炭化粒子・焼土粒子少量含む |
| 2 | 褐灰色土 | しまりあり | 粘性あり | 白色粘土粒子を含む | 白色粘土 |
| 3 | 褐灰色土 | しまりあり | 粘性あり | 白色粘土粒子多量含む | 壁の崩落土 |
| 4 | 黒色土 | しまりあり | 粘性あり | 焼土粒子多量含む | 炭と焼土の混合層がブロック状に堆積する |
| 5 | 黒褐色土 | しまりあり | 粘性あり | 焼土粒子微量含む | 炭化物なし |
| 6 | 褐灰色土 | しまりあり | 粘性あり | 白色粘土粒子を含む | 焼土粒子少量含む |
| 7 | 褐灰色土 | しまりあり | 粘性あり | 焼土粒子多量含む | 天井の被熱部分 |
| 8 | 黒褐色土 | しまり弱 | 粘性あり | 炭と灰の混合層 | カマドの堆積物 |
| 9 | 黒褐色土 | しまりあり | 粘性あり | 焼土粒子・地山ブロック微量含む | |
| 10 | 黒褐色土 | しまりあり | 粘性あり | 地山ブロック多量を含む | |
| 11 | 褐灰色土 | しまり強 | 粘性強 | 地山ブロック微量含む | 焼土・炭化物・酸化鉄なし |

第 46 図 第 31 号住居跡



第 47 図 第 31 号住居跡出土遺物

第 15 表 第 31 号住居跡出土遺物観察表（第 47 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.4)	3.3	—	A E H I	60	普通	橙	一括 A E 砂岩	42-8
2	土師器	坏	(16.6)	[3.3]	—	A C E H I K	5	普通	浅黄橙		47-5
3	土師器	甕	(18.6)	[7.1]	—	C H I K	10	普通	橙		47-5
4	石製品	編物石	長さ 11.3 幅 4.3 厚さ 4.6 重さ 317.1 g								51-1

基検出した。P 1 は径 0.40m の不整円形で、深さは 0.12m である。覆土は焼土を主体としており、第 4 層の炭化物層、もしくはカマドに関する性格が推定される。P 2 は楕円形で、規模は長軸 0.30m、短軸 0.43m、深さは 0.26m である。掘り込みは 2 段で、柱穴状になっている。やはり焼土を主体とする覆土が上部に堆積しており、柱抜き取り後に P 1 同様の機能があった可能性がある。

カマドは東壁の中央に設けられていた。燃烧部は壁の内側に掘りこまれていた。全長は 1.32m である。袖は両側ともに良好な状態で残存していた。地山の削り出しである。残存していた右袖は長さ 0.46m、幅 0.31m、高さ 0.10m、左袖は長さ 0.44m、幅 0.35m、高さ 0.12m である。燃烧部は長さ 0.63m、幅 0.56m で、深さは床面から 0.04m と極めて浅い。焚口部は平坦で、明瞭に把握できなかった。覆土は第 8 層が炭と灰の純層で、カマド使用時の堆積と思われる。その上部に焼土粒の混じった層が堆積しており、天井部分の崩落土と考えられる。煙道へはわずかな段を持って続き、あまり奥行はない。煙道は長さ 0.69m、幅 0.44m で、先端に向かって幅 0.22m と狭くなる。底面は燃

焼部から先端向かってごく緩やかに上がっていた。

出土遺物は、覆土中から土師器坏・甕の小片が少量出土した。また、第 1 節に掲載した弥生土器の小片が出土した。

第 31 号住居跡の所属時期は、模倣坏の形態的特徴から 7 世紀後半に位置づけられる。

第 31 号住居跡出土遺物（第 47 図）

1～3 は土師器である。胎土には砂粒、角閃石の混入が目立ち、利根川流域の粘土が用いられていると考えられる。

1・2 は坏蓋模倣坏である。1 は全体に低平な印象を受ける。粘土は雲母を含み、肌理が細かく、風化しており、溶けて手に付く。2 は小破片のため、径が小さくなる可能性がある。

3 は長胴甕である。直線的に開く口縁部に、直線的な胴部が付く。風化が進み、器面は荒れている。胴部外面は斜め方向のヘラケズリ、内面の調整は不明である。

4 は編み物石である。長さ 11.3cm、幅 4.3cm、厚さ 4.6cm 重さ 317.1g である。石材は砂岩である。明瞭な加工痕は認められず、中央に僅かに擦痕が認められるのみである。

第32号住居跡（第48図）

R-18グリッドに位置する。第23・39号住居跡、第1号掘立柱建物跡、第57号土壇と重複している。新旧関係は確認できなかったが、調査時の所見では、第1号掘立柱建物跡、第57号土壇より古いと思われる。西側は調査区域外にかかる。

上面は削平され、掘り方埋土と思われる変色した方形プランが残っていた。

平面形は方形で、残存部分の規模は東西2.22m、南北2.06mである。

カマドや床面の施設などは確認できず、詳細は不明である。

遺物は出土しなかった。

第33号住居跡 欠番

第35号住居跡（第49図）

P-18グリッドに位置する。第36号住居跡と重複し、第35号住居跡が新しい。東側半分は攪乱により壊されており、完全に残存しているのは西壁のみである。

平面形は方形と考えられる。規模は、西辺が2.14mで、北辺の残存長は1.20m、深さは0.08mである。西辺を基準とした方位はN-37°-Wである。

覆土は黒褐色土が主体で、第1層が住居の埋積土、第2層は貼床ではないかと考えられる。

床面はほぼ平坦であるが、北側に向かってやや下がっていた。ピットや壁溝などは確認されなかった。カマドも確認されず、遺構の東側に設けられたと考えられる。

遺物は、覆土中から土師器坏・甕、須恵器甕の小片が少量出土したが、図示できるものはない。

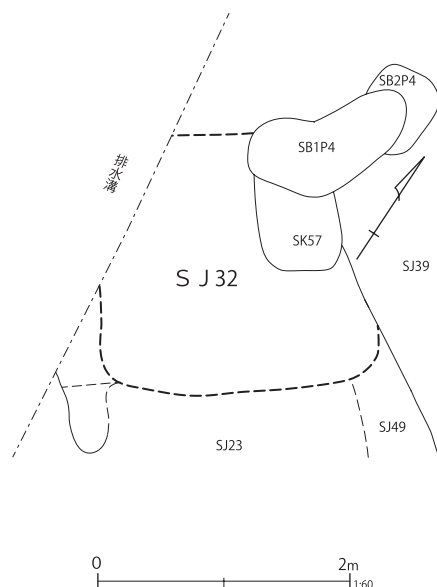
第35号住居跡の所属時期は、遺構の重複関係、土師器の様相から7世紀中葉と考えられる。

第36号住居跡（第50図）

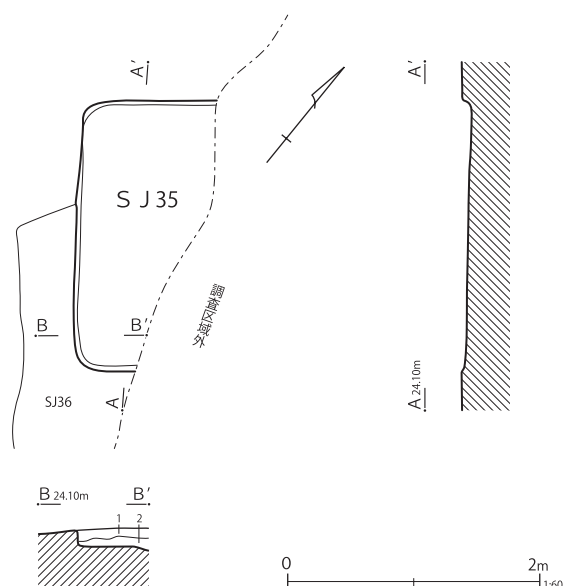
P-18グリッドに位置する。第35号住居跡と重複し、第36号住居跡が古い。大部分が第35号住居跡と攪乱により壊されており、残存していたのは

西辺のみである。

平面形は方形基調と考えられるが、西コーナーの角度がやや開いている。規模は、西辺2.29m、南辺の残存長0.64m、深さは0.08mである。西辺を基準とした方位は、N-40°-Wである。



第 48 図 第 32 号住居跡



- S J 35
- | | | | | |
|--------|-----------------|------|--------|-------------|
| 1 黒褐色土 | 粘質シルト | しまり強 | 粘性ややあり | 焼土粒子・炭化粒子含む |
| | 地山粒子多量含む | | | |
| 2 黒褐色土 | 粘質シルト | しまり強 | 粘性ややあり | 炭化粒子微量含む |
| | 地山粒子・地山ブロック多量含む | | | |

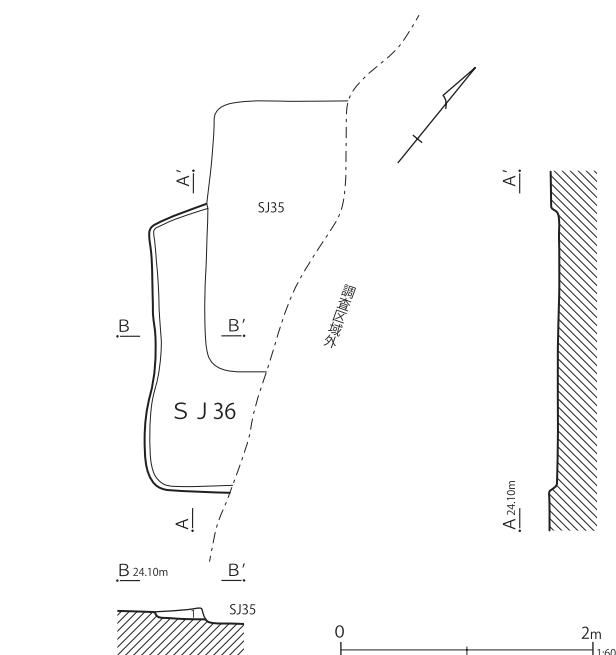
第 49 図 第 35 号住居跡

覆土は、地山ブロックを含む灰黄褐色土であった。貼床あるいは掘り方埋土と思われる。

床面はほぼ平坦で、ピットや壁溝などは確認されなかった。カマドも確認されず、遺構の東側、北側に設けられていると考えられる。

遺物は出土しなかった。

第36号住居跡の所属時期は、第35号住居跡より古いことから、7世紀としておきたい。



S J 36
1 灰黄褐色土 粘質シルト しまりあり 粘性ややあり 地山大ブロック多量含む

第50図 第36号住居跡

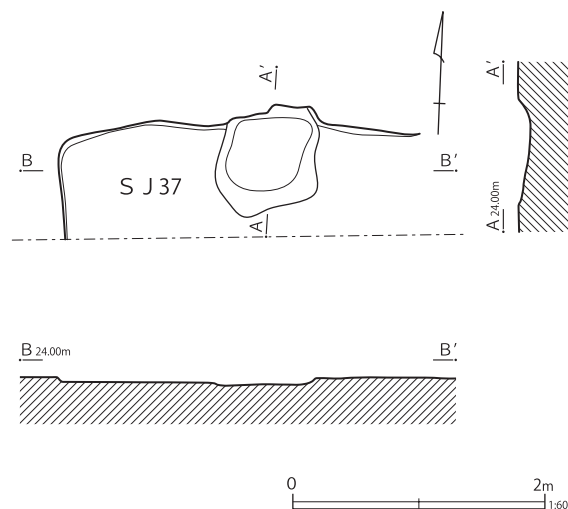
第37号住居跡 (第51図)

Q-18グリッドに位置する。残存状況が悪く、南側と東側は削平されていた。

平面形は方形と推定される。東西方向2.88m、南北方向0.99mが残存している。深さは0.04mと浅い。西辺の方位はN-3°-Wである。

床面は、ほぼ平坦である。残存部分では硬化部分は確認されず、貼床は施されていないと考えられる。ピットや壁溝等の施設は確認できなかった。

カマドは北辺に設置されていた。大部分が削平され、壁の内側に掘りこまれた燃焼部底面が残っ



第51図 第37号住居跡

ていたのみである。0.88m四方の不整な方形で、深さは0.11mである。灰と炭化物が薄く堆積しており、灰層と考えられる。

遺物は、土師器甕、須恵器甕などの小片が少量出土したのみで図示できるものはない。

時期は、遺構の様相から7世紀としておきたい。

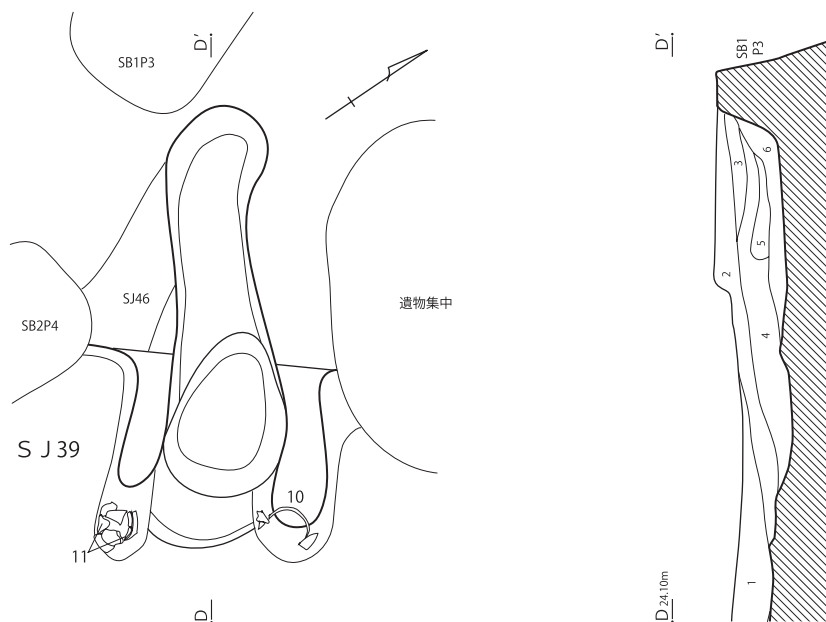
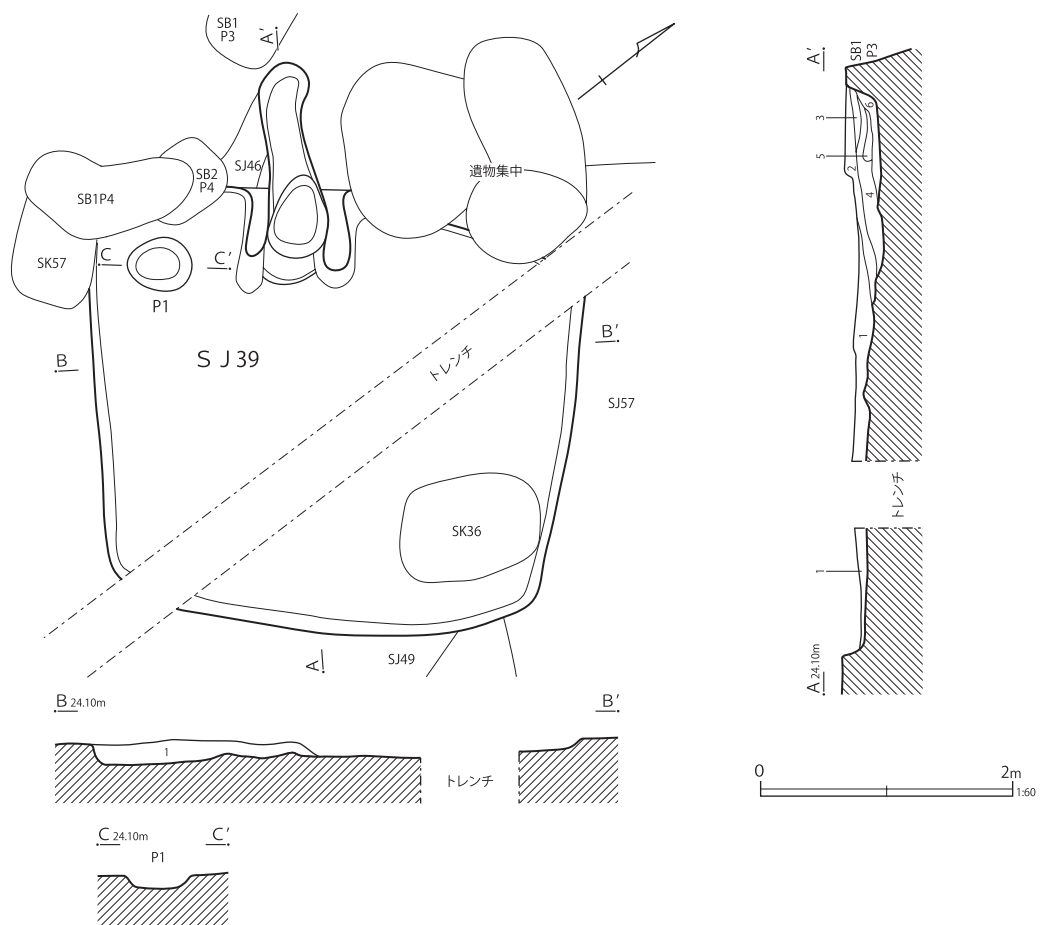
第39号住居跡 (第52・53図)

R-18グリッドに位置する。第32・46・49・57号住居跡、第1・2号掘立柱建物跡、第36・57号土壙と重複し、第46号住居跡より新しく、その他の遺構よりも古い。カマドの右側を土壙により、左側を掘立柱建物跡によって壊されている。

平面形はほぼ方形である。規模は、主軸方向3.51m、直交軸方向3.94m、深さは0.23mである。主軸方位はN-55°-Wである。覆土は、地山ブロックを多量に含んでおり、埋め戻しの可能性がある。

床面は平坦である。壁溝は検出されなかった。カマド左脇からピット1基を検出した。楕円形で、長軸0.52m、短軸0.42m、深さは0.11mで浅い。貯蔵穴の可能性がある。

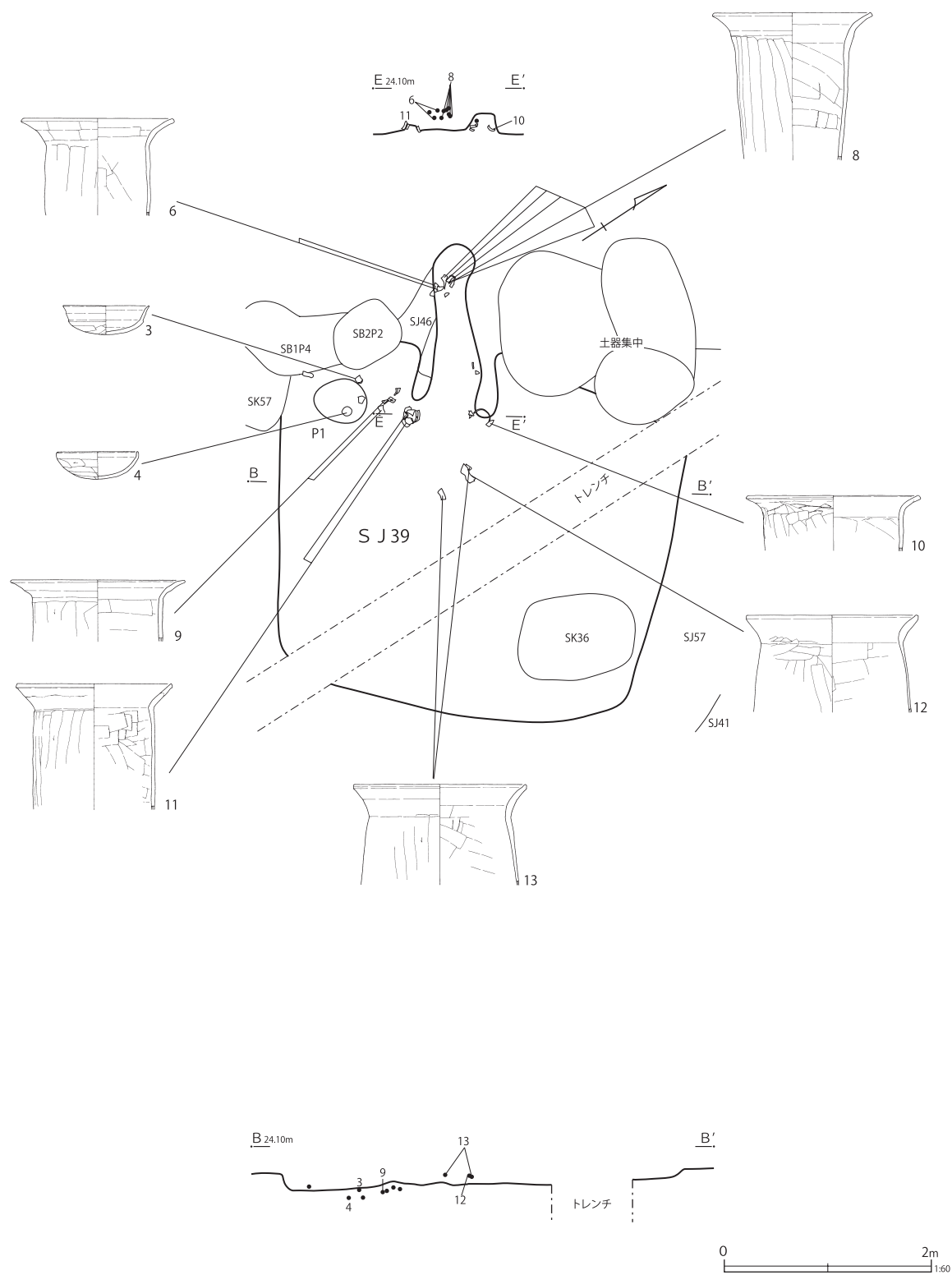
カマドは北西壁の中央からやや西寄りに構築されていた。燃焼部は、北西壁の内側に掘りこまれていた。全長は1.54m、幅は0.49mである。袖は、



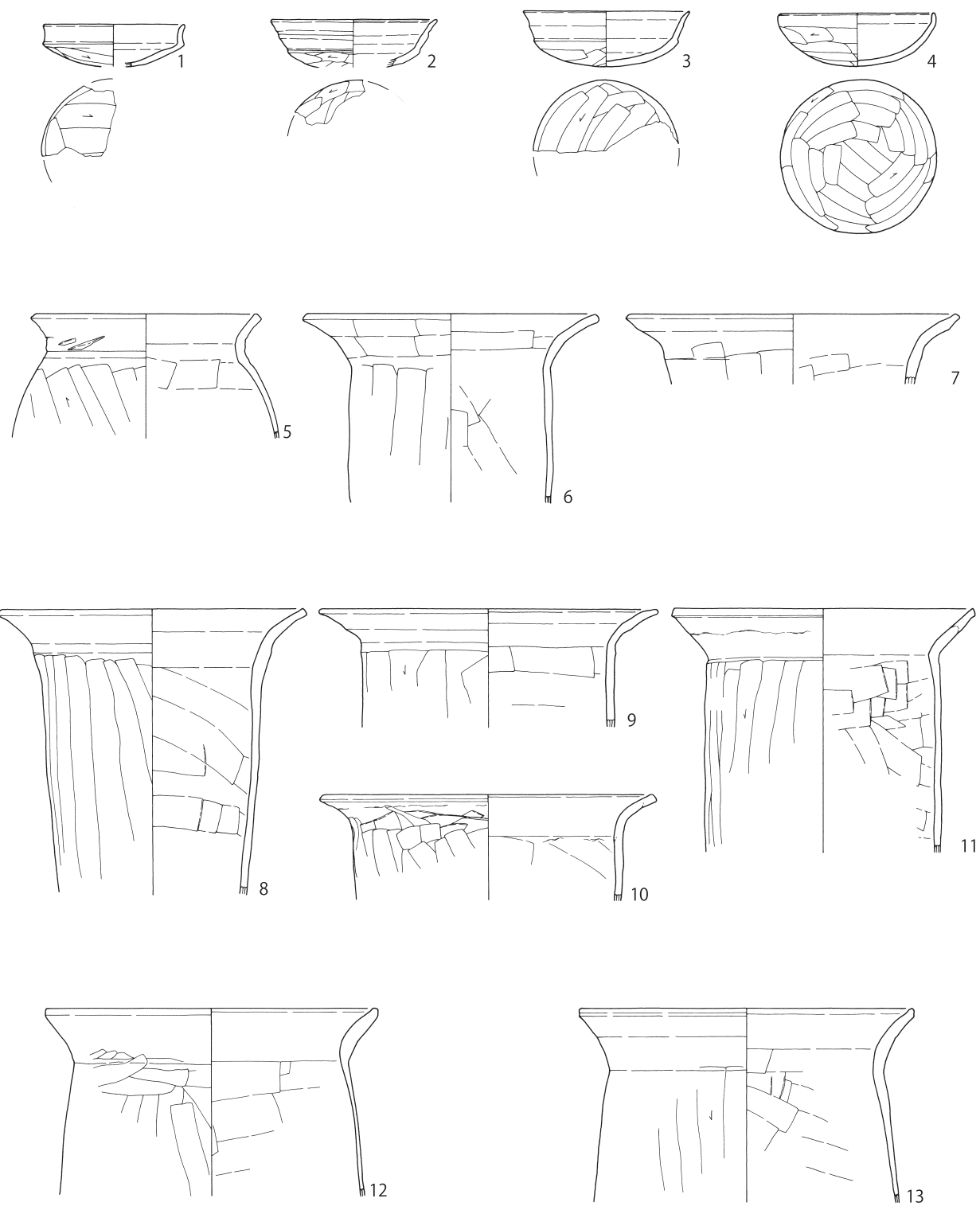
- S J 39
- | | | | | | |
|-----------|-------|---------|--------|-----------------|------------|
| 1 黒褐色土 | 粘質シルト | しまりあり | 粘性ややあり | 炭化粒子少量含む | 地山ブロック多量含む |
| 2 灰黄褐色土 | 粘質シルト | しまりややあり | 粘性ややあり | 焼土粒子・焼土ブロック多量含む | |
| 3 にぶい黄褐色土 | シルト | しまりあり | 粘性弱 | 焼土粒子少量含む | |
| 4 灰層 | | | | | |
| 5 にぶい黄褐色土 | シルト | しまりあり | 粘性弱 | 炭化粒子少量含む | |
| 6 暗褐色土 | 粘質シルト | しまりややあり | 粘性ややあり | 炭化粒子多量含む | |



第 52 図 第 39 号住居跡



第 53 図 第 39 号住居跡遺物出土状況



第 54 図 第 39 号住居跡出土遺物

第 16 表 第 39 号住居跡出土遺物観察表（第 54 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(9.1)	[2.8]	—	CEGHI	10	普通	にぶい黄橙	S J 33 カマド (S J 39 扱い)	42-9
2	土師器	坏	(10.8)	[3.1]	—	CDEGHIK	10	普通	橙	S J 33 (S J 39 扱い)	47-7
3	土師器	坏	(10.8)	3.7	—	CEGHI	40	普通	褐灰	カマドNo.11	42-10
4	土師器	坏	10.1	3.5	—	CGHI	100	普通	橙	No.12	43-1
5	土師器	甕	(14.4)	[8.2]	—	CEGHI	15	普通	にぶい赤褐	S J 33 (S J 39 扱い)	47-7
6	土師器	甕	(19.0)	[12.6]	—	CEGHI	20	普通	明赤褐	S J 33 カマド・カマドNo.2・6 (S J 39 扱い)	47-7
7	土師器	甕	(21.4)	[4.7]	—	ACEGHIK	10	普通	にぶい橙	S J 33 (S J 39 扱い)	47-7
8	土師器	甕	(19.8)	[18.9]	—	CEGH	25	普通	明黄褐	カマドNo.4・5・7・8・9	43-2
9	土師器	甕	(22.3)	[7.8]	—	CEGHI	10	普通	橙	No.7・8	47-7
10	土師器	甕	(21.6)	[7.0]	—	ACEGHI	40	普通	にぶい橙	No.14	43-3
11	土師器	甕	(19.7)	[16.2]	—	CEGHIK	60	普通	橙	No.9・10	43-4
12	土師器	甕	(21.8)	[12.4]	—	ACEGHI	10	普通	橙	No.1	47-7
13	土師器	甕	(22.0)	[12.9]	—	CEGHI L	10	普通	橙	No.2・3 胴部外面煤付着	47-7

白色粘土によって造られている。両袖の先端部分に土師器甕が逆さに立てられ、補強材として使用されていた。袖の長さは、右が0.77m、左は0.83mである。補強材の甕の間隔から、焚口は0.4mに満たない幅と推定される。燃焼部は三角形に近い形態で、煙道との境は段差があまりなく不明瞭である。燃焼部の長さは0.65m、幅は0.49m、床面からの深さは0.1mである。土層は第4層が灰層で使用時のものと考えられる。第2層は焼土ブロックを多く含むことから天井崩落土であろう。煙道は長さ0.89mで、先端に向かって次第に細くなる。煙出しはピット状に丸く膨らむ。奥壁は角度を持って立ち上がっている。

袖の内側から煙道の壁面は被熱し、赤化している。床面の被熱は不明瞭である。

出土遺物は、土師器坏・甕などがカマドとP1周辺の床面から出土した。

第39号住居跡の所属時期は、模倣坏や北武蔵型坏、長胴甕の形態的特徴から7世紀後半に位置づけられる。

第39号住居跡出土遺物（第54図）

1～13は土師器である。胎土にはいずれも砂粒、角閃石の混入が目立ち、利根川流域の粘土が用いられていると考えられる。

1～4は坏である。いずれも径9～11cmと小型である。1は坏身模倣坏、2・3は有段口縁坏で

ある。1はごく小型で風化が進む。2は風化が著しい。3は内外面黒色処理されている。4は口縁部が短く立ち上がる、北武蔵型坏である。

5～13は長胴甕である。5はやや胴部が張る。その他は胴部が張らず、大きく外反する口縁部から直線的な胴部に至る。口縁端部が、8・11・13は面取りされている。胴部の調整は、外面縦方向のヘラケズリ、内面は横もしくは斜め方向のヘラナデである。10・12は頸部に横方向のヘラケズリが加えられている。7・12・13は、やや径が大きく太めである。

第42号住居跡（第55図）

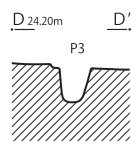
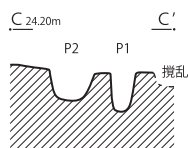
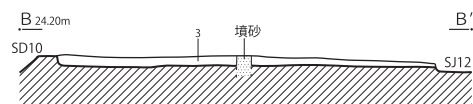
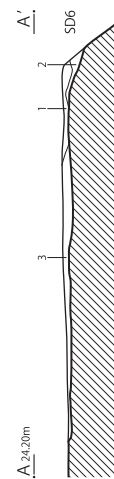
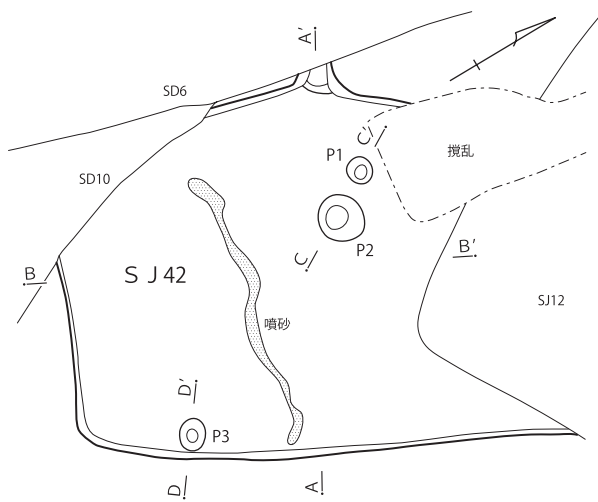
P・Q-17グリッドに位置する。第12号住居跡、第6・10号溝跡と重複し、第42号住居跡が最も古い。北西コーナー付近は、攪乱により壊されている。

平面形はカマドに対して横長の長方形である。規模は主軸方向2.95m、直交軸方向は残存長4.17mである。主軸方位はN-60°-Wである。

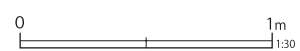
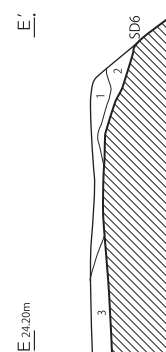
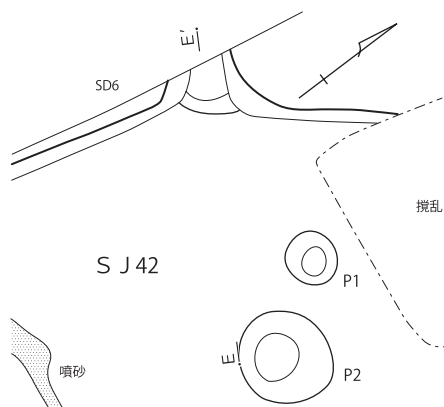
床面に近い高さで検出したため、覆土の堆積状況は確認できなかった。

床面は平坦である。床面には噴砂が認められたが、第42号住居跡においては第3号住居跡のような大きな段差は認められなかった。

壁溝、貯蔵穴等の施設は検出されず、他の遺構との重複箇所にあった可能性がある。



- S J 42
- | | | | | |
|---|------|-------|------|-----------|
| 1 | 褐灰色土 | しまりあり | 粘性あり | 焼土粒子少量含む |
| 2 | 黒褐色土 | しまりあり | 粘性あり | 焼土粒子微量含む |
| 3 | 褐灰色土 | しまりあり | 粘性あり | 地山ブロックを含む |



第 55 図 第 42 号住居跡

ピットを3基検出したが、位置的に柱穴とは考え難い。P1とP2はカマドの手前で検出された。P1は円形で、径0.22m、深さは0.29m、P2は楕円形で径0.39m、深さは0.23mである。P3は南東壁の壁直下で検出された。楕円形で長径0.25m、短径0.20m、深さは0.26mである。いずれも、覆土は確認できなかった。

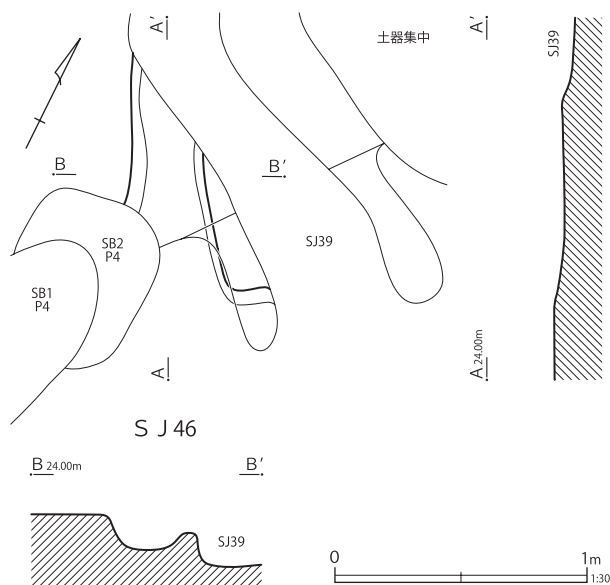
カマドは北西壁中央に構築されていた。第6号溝跡によってほぼ全体が壊されていた。燃焼部は壁より外側と考えられ、内側に掘り込み等は検出されなかった。白色粘土が認められるため、袖は粘土の貼り付けによって造られたと考えられる。残存長0.26m、幅0.32m、床面からの深さは0.08mである。左側の壁が被熱により赤化していた。

遺物は出土しなかった。

第42号住居跡の所属時期は、遺構の形態的特徴から7世紀後半と考えられる。

第46号住居跡（第56図）

R-18グリッドに位置する。第39号住居跡の調査時にカマドが重複していることが判明し、住居



第56図 第46号住居跡

跡として認定したものである。残存していたのはカマドのみである。第39号住居跡、第2号掘立柱建物跡と重複し、これらより古い。

カマドは煙道先端を第39号住居跡の煙道によって壊され、左袖部分は第2号掘立柱建物跡により壊されていた。右袖部分は辛うじて一部が残存しているが、大半は第39号住居跡により壊されていた。残っていた壁は被熱により僅かに赤化していた。燃焼部は掘り込みが認められなかった。

残存する規模は、長さ1.00m、煙道幅0.38m、深さ0.14mである。煙道の方位はN-25°-Wである。

遺物は出土しなかった。

第39号住居跡との重複関係から、7世紀中葉以前と考えられる。

第49号住居跡（第57図）

R-18グリッドに位置する。第23・32号住居跡と重複する。第23・32号住居跡との新旧関係は、削平が著しく、不明である。

平面形は方形と思われるが、唯一残存している南東隅の角度は開き気味である。残存していた南辺の残存長は2.40m、東辺は2.20mである。検出できたのは、深さ0.05mほどである。東辺の方位はN-18°-Wである。

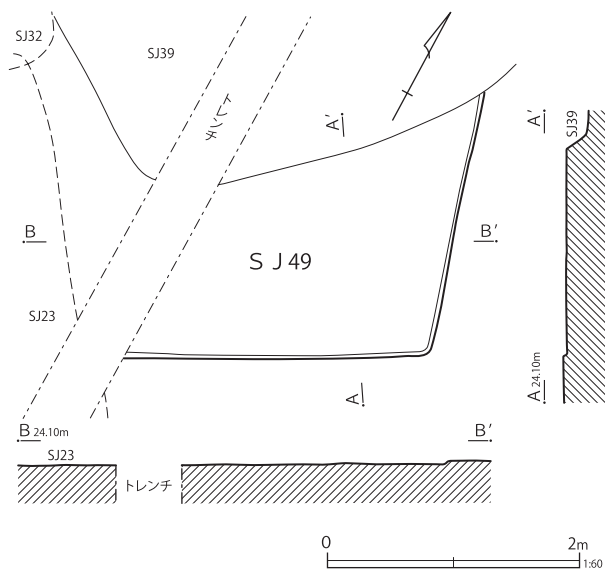
床面はほぼ平坦である。ピットや壁溝、カマドは検出されなかった。

遺物は、土師器甕、編み物石などが少量出土したのみである。

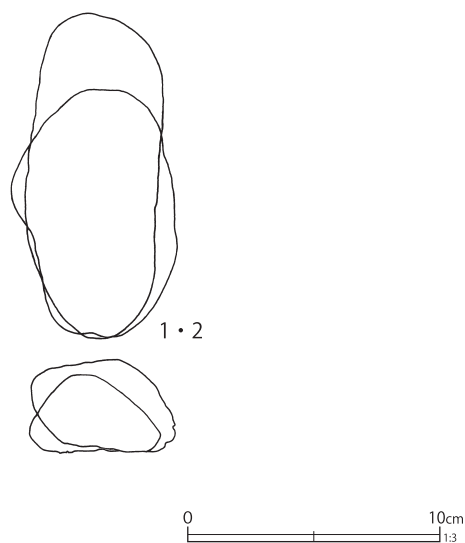
第49号住居跡の時期は、重複遺構との関係から7世紀としておきたい。

第49号住居跡出土遺物（第58図）

1・2は編み物石である。石材は砂岩・花崗閃緑岩である。明瞭な加工痕は認められず、中央に僅かに擦痕が認められる。



第 57 図 第 49 号住居跡



第 58 図 第 49 号住居跡出土遺物

第 17 表 第 49 号住居跡出土遺物観察表（第 58 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	石製品	編物石	長さ 9.6	幅 6.3	厚さ 3.7	重さ 341.3 g				一括 砂岩	51-1
2	石製品	編物石	長さ 12.7	幅 4.6	厚さ 3.8	重さ 329.4 g				一括 花崗閃緑岩	51-1

第50号住居跡（第59図）

P-16・17グリッドに位置する。第3・5・58号住居跡、第4号掘立柱建物跡と重複し、第3・5号住居跡より古く、第58号住居跡、第4号掘立柱建物跡より新しい。

平面形は方形であるが、地震による地割れによって平面形はかなり乱れている。南西側の壁は約10cmずれ、北コーナーが不自然に歪んでいる。さらに、床面は大部分が陥没して8cm前後の段差が生じている。

規模は、主軸方向が4.23m、直交軸方向が4.10m、深さは陥没していない部分で0.10mほどである。主軸方位は、N-48°-Wである。

前述のように床面は平坦ではないが、ピットを複数検出した。壁溝や貯蔵穴は検出されなかった。ピットはP2・3・4・7あるいはP8が主柱穴となる可能性がある。P2・8の周辺には複数のピットが認められるため、建て替えの可能性がある。いずれのピットも覆土は単層で、褐灰色の粘

質シルトである。各ピットの規模は、長径0.28～0.72m、短径0.22～0.51m、深さはいずれも0.10～0.12mである。

出土遺物は、P1周辺の床面からまとめて出土した。その他は散在した状態で、覆土中から出土した。南東側の壁際からは完形の土師器坏が並んで出土している。

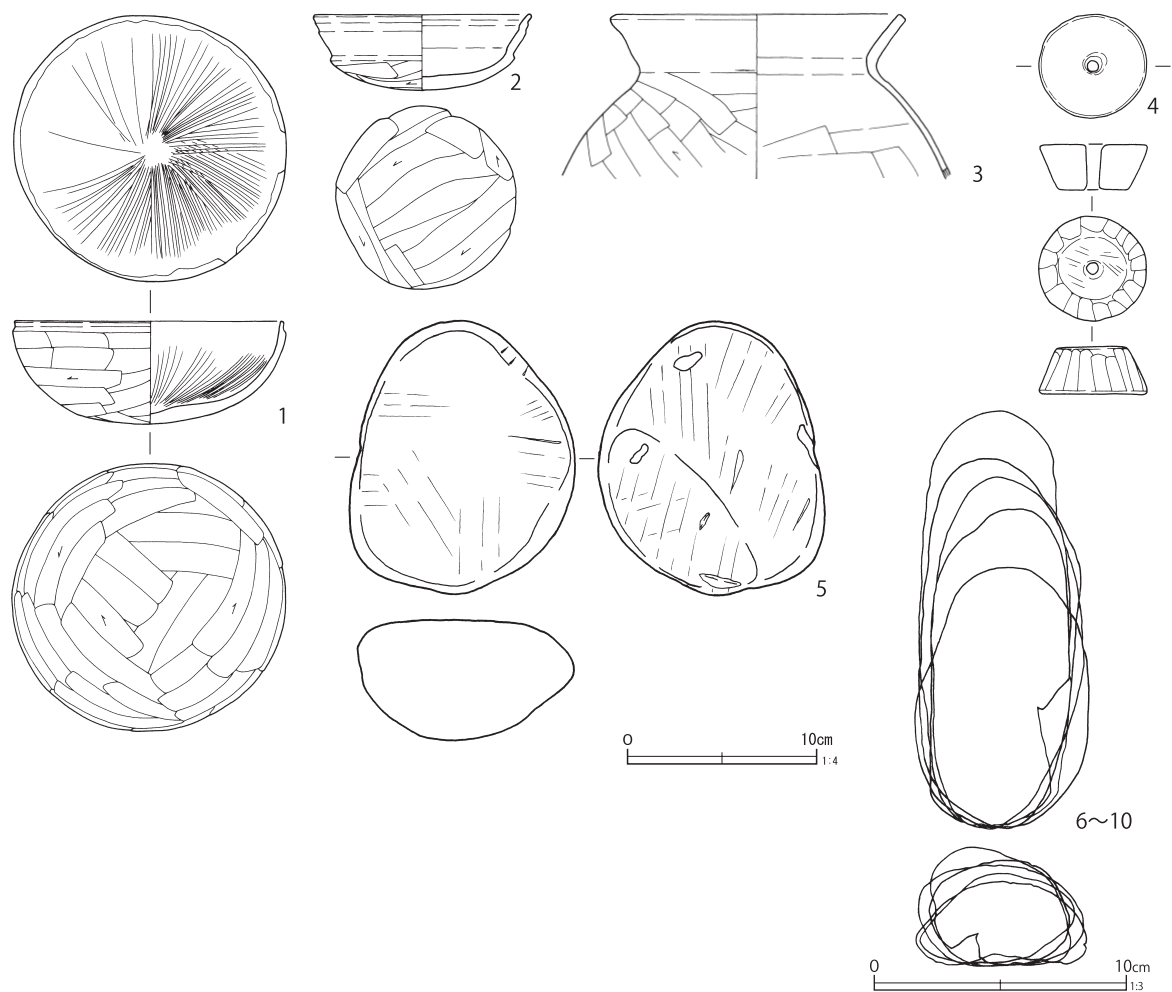
第50号住居跡の時期は、北武蔵型暗文坏、模倣坏の形態的特徴から7世紀後半に位置づけられる。

第50号住居跡出土遺物（第60図）

1～3は土師器である。胎土にはいずれも砂粒、角閃石の混入が目立ち、利根川流域の粘土が用いられていると考えられる。

1は北武蔵型暗文坏で、完形である。短く立ち上がる口縁部で、体部は深身の半球形である。内面に放射状の暗文が施されている。風化が著しい。2は有段口縁坏である。完形で、内外面黒色処理されている。

3は長胴甕である。直線的に開く口縁部に、中



第 60 図 第 50 号住居跡出土遺物

第 18 表 第 50 号住居跡出土遺物観察表（第 60 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	14.0	5.5	—	C G H I	100	普通	橙	No. 2 内面放射状の暗文	43-5
2	土師器	坏	11.2	4.0	—	C G E I	100	普通	にぶい黄橙	No. 1 内外面黒色処理	43-6
3	土師器	甕	15.0	[8.7]	—	C E G H I K	55	普通	橙	No. 7・No. 9・No. 10	44-1
4	石製品	紡錘車	長さ 4.25 幅 4.1 厚さ 1.9 重さ 39.7 g							No. 7 凝灰石	49-4
5	石製品	砥石	長さ 10.8 幅 8.9 厚さ 5.0 重さ 641.1 g							No. 8 砂岩 完形	48-8
6	石製品	編物石	長さ 12.5 幅 5.0 厚さ 4.8 重さ 385.6 g							No. 3 砂岩	51-2
7	石製品	編物石	長さ 10.1 幅 6.6 厚さ 3.4 重さ 352.9 g							No. 4 砂岩	51-2
8	石製品	編物石	長さ 14.3 幅 6.1 厚さ 3.7 重さ 486.1 g							No. 5 砂岩	51-2
9	石製品	編物石	長さ 16.3 幅 6.3 厚さ 4.1 重さ 636.8 g							No. 6 砂岩	51-2
10	石製品	編物石	長さ 13.6 幅 6.0 厚さ 4.6 重さ 579.4 g							No. 12 ホルンフェルス	51-2

位が張る胴部が付く。胴部外面は斜め方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデである。

4は凝灰岩製の紡錘車である。断面形は台形で、顕著な研磨痕がみられ、光沢がある。

5は砥石である。不整円形で、断面形は不整な逆台形である。全ての面が使用面として用いられ

ており、刃物痕が認められる。砂岩製。

6～10は編み物石である。長さ10.1～16.3cm、幅5.0～6.6cm、重さ352.9～636.8gである。石材は砂岩、ホルンフェルスである。明瞭な加工痕は認められず、中央に僅かに擦痕が認められるのみである。

第52号住居跡（第61図）

L・M-16グリッドに位置する。第53号住居跡と重複し、本住居跡が古い。東コーナーの上面を第53号住居跡によって壊され、西コーナーは調査開始時に掘削した排水溝によって壊されている。

平面形はやや歪む箇所があるが、全体としては方形である。規模は、南東辺が3.00m、北東辺が2.84mで、深さは0.20mである。北東辺を基準とした方位はN-47°-Wである。

覆土は、第2・3層が地山ブロックを主体とする層で埋め戻された可能性がある。

床面は平坦である。ピットを2基と土壇1基を検出した。P1は楕円形で、長径0.18m、短径0.16m、深さは0.05mである。P2は円形で、径0.14m、深さは0.18mである。いずれも位置的には柱穴ではないと考えられる。壁溝及び貯蔵穴は検出されなかった。南東壁直下に土壇状の掘り込みを検出した。土壇は壁に沿うように隅丸長方形に掘り込まれ、長径1.05m、短径0.46m、床面か

らの深さは0.10mである。

カマドは検出されなかった。第53号住居跡に壊されている東辺に造られていた可能性がある。

遺物は土師器の細片が少量出土したのみである。

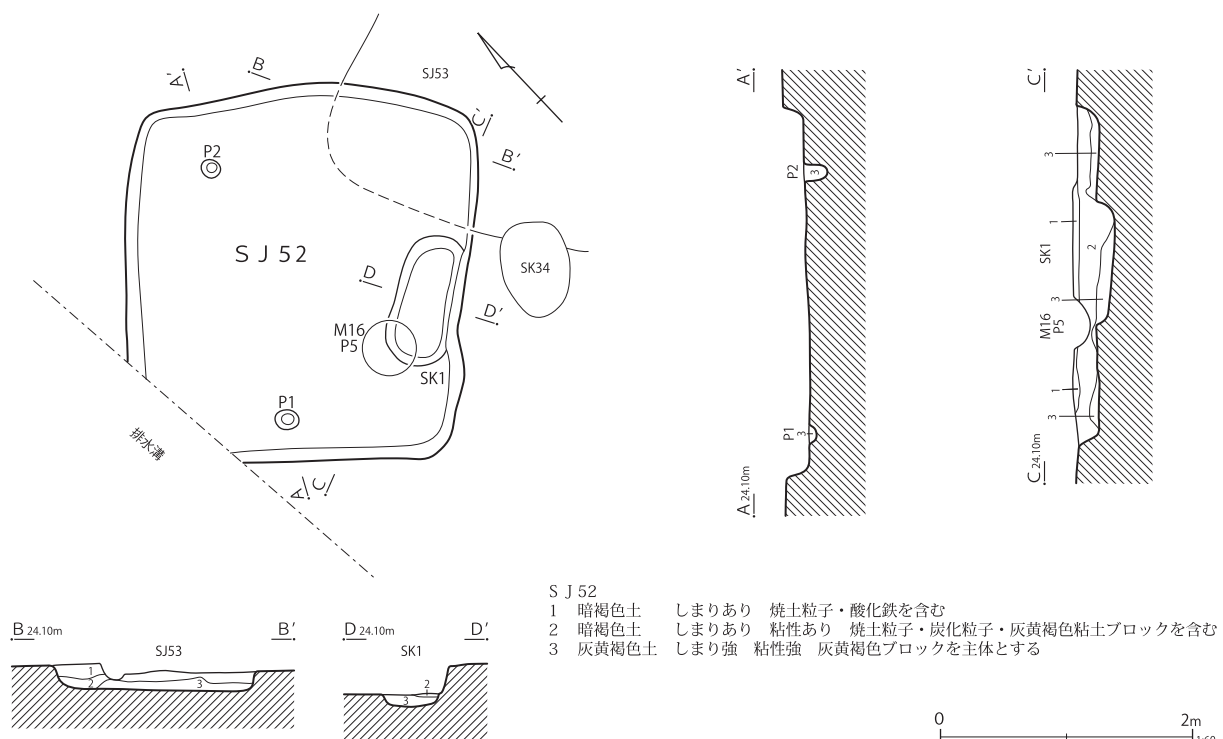
第52号住居跡の時期は、北武蔵型坏の形態的特徴から、7世紀後半～末と考えられる。

第52号住居跡出土遺物（第62図）

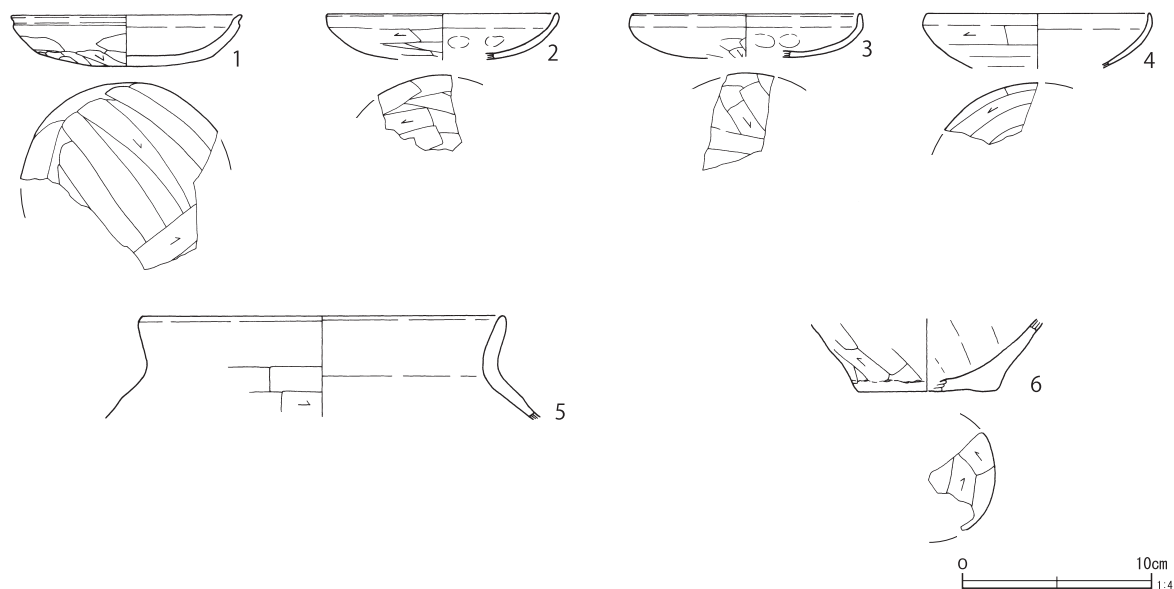
出土遺物は、いずれも土師器である。胎土には砂粒、角閃石の混入が目立ち、利根川流域の粘土が用いられていると考えられる。

1～4は北武蔵型坏である。いずれも低平な器形である。1は口縁端部が摘ままれて外に広げられている。胎土に赤色粒子を多く含み、見込み部分に煤が付着する。2・3は内面に指頭痕が残る。

5・6は甕である。5は口縁部が直線的に開き、胴部は肩が張り、球形になる可能性がある。頸部には横方向のヘラケズリが加えられている。風化が著しい。6は底部である。外面は縦方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ、底面ヘラケズリである。



第 61 図 第 52 号住居跡



第 62 図 第 52 号住居跡出土遺物

第 19 表 第 52 号住居跡出土遺物観察表 (第 62 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.9)	2.7	—	C E G H I	50	普通	橙	S J 52 No.1 ・ S J 53 一括 内面煤付着	44-2
2	土師器	坏	(12.0)	[2.4]	—	C G H I	10	普通	橙	S J 52 一括 ・ S J 53 一括 指頭痕	48-1
3	土師器	坏	(12.0)	[2.3]	—	C G H I	10	普通	橙	S J 53 (S J 52 扱い) 一括 指頭痕	48-1
4	土師器	坏	(11.7)	[2.9]	—	C G I K	5	普通	橙	S J 53 (S J 52 扱い) 一括	48-1
5	土師器	甕	(19.0)	[5.4]	—	C E G H I	10	普通	明赤褐	S J 53 (S J 52 扱い) 一括 煤付着	48-1
6	土師器	甕	—	[3.8]	(7.0)	C G H I	25	普通	明赤褐	S J 53 (S J 52 扱い) 一括 煤付着	48-1

第54号住居跡 (第63図)

L-16・17、M-17グリッドに位置する。第29・72・80号住居跡、第37号土壇と重複し、第29号住居跡より古く、第72・80号住居跡より新しい。第29号住居跡によってカマドの右脇から住居の南コーナーを壊されている。

平面形は、カマドの軸に沿った長方形である。

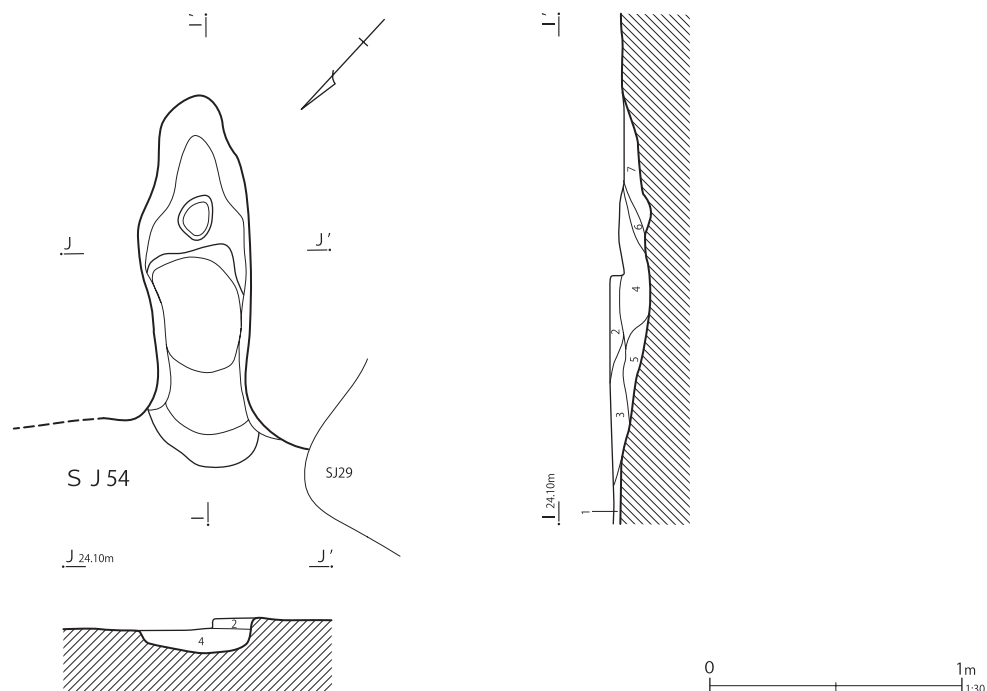
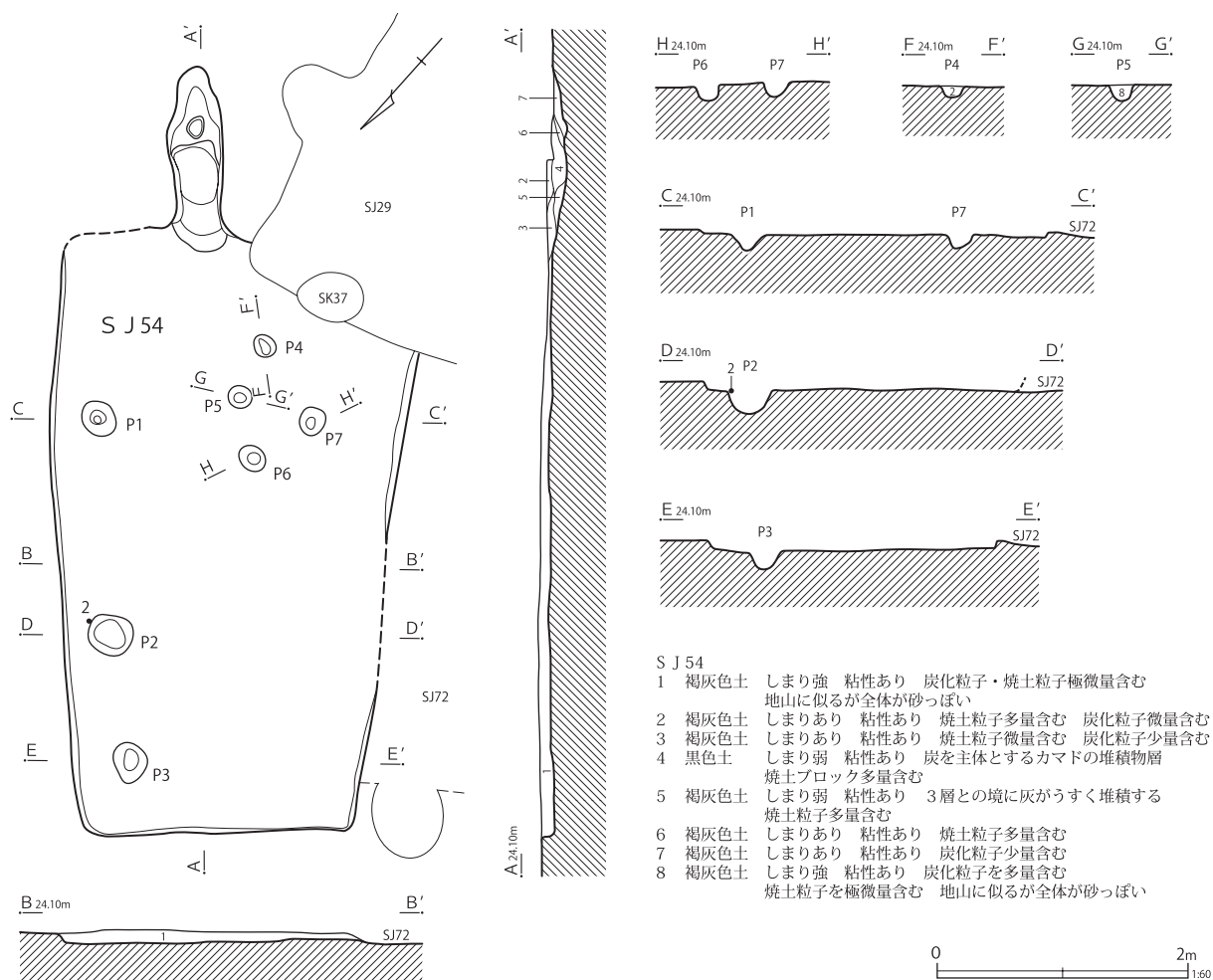
規模は、主軸方向が.83m、直交軸方向が2.85mである。深さは0.10mである。主軸方位はN-45°-W、カマドの方位はN-135°-Eである。

覆土は、褐灰色の粘質シルトが主体で他の住居跡と同様に砂を含む。

床面は平坦で、壁溝や貯蔵穴は検出されなかったが、ピットを複数検出した。北東壁際のピットは柱穴の可能性はあるが、他は不明である。

各ピットの規模は、P 1 が径0.29m、P 2 が径0.37m、P 3 が径0.33m、P 4 が径0.20m、P 5 が径0.20m、P 6 が径0.24m、P 7 が径0.23mである。深さは0.09~0.18mである。

カマドは南東壁のほぼ中央と思われる位置に構



第 63 図 第 54 号住居跡

築されていた。右袖にあたる部分は第29号住居跡により、左袖にあたる部分は削平されて不明瞭である。右袖に白色粘土が認められるため、袖は貼り付けにより造られたと考えられる。燃烧部は壁の外側に出ると推定される。残存長は1.50mである。燃烧部は不整長方形の掘り込みで、長さ0.87m、幅0.45m、床面からの深さは0.15mである。第5層が灰層と考えられる。煙道への移行は不明瞭である。煙道の底面はやや凹凸が目立つ。残存する長さは0.38m、幅は0.35mである。

出土遺物は、土師器坏、須恵器の小片が少量出

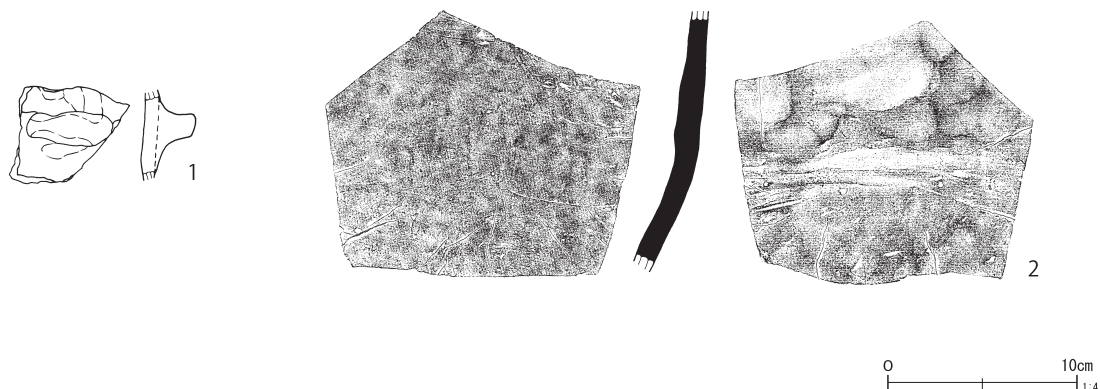
土した。

第54号住居跡の所属時期は、住居跡の重複関係から7世紀後半に位置づけられる。

第54号住居跡出土遺物（第64図）

1は土師器の甑である。把手部分のみの破片で、小型で不整形である。貼り付け、外面の調整も指頭によるものである。

2は須恵器大甕の胴部破片である。白色針状物質を含む。南比企産か。外面は平行タタキ目がナデ消され、内面は無文の当て具が用いられている。



第 64 図 第 54 号住居跡出土遺物

第 20 表 第 54 号住居跡出土遺物観察表（第 64 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甑	—	[4.7]	—	A E H I K	5	良好	にぶい橙	C 把手	48-1
2	須恵器	甕	—	[13.7]	—	J K	5	良好	灰	No.1 南比企産か	48-1

第55号住居跡（第65・66図）

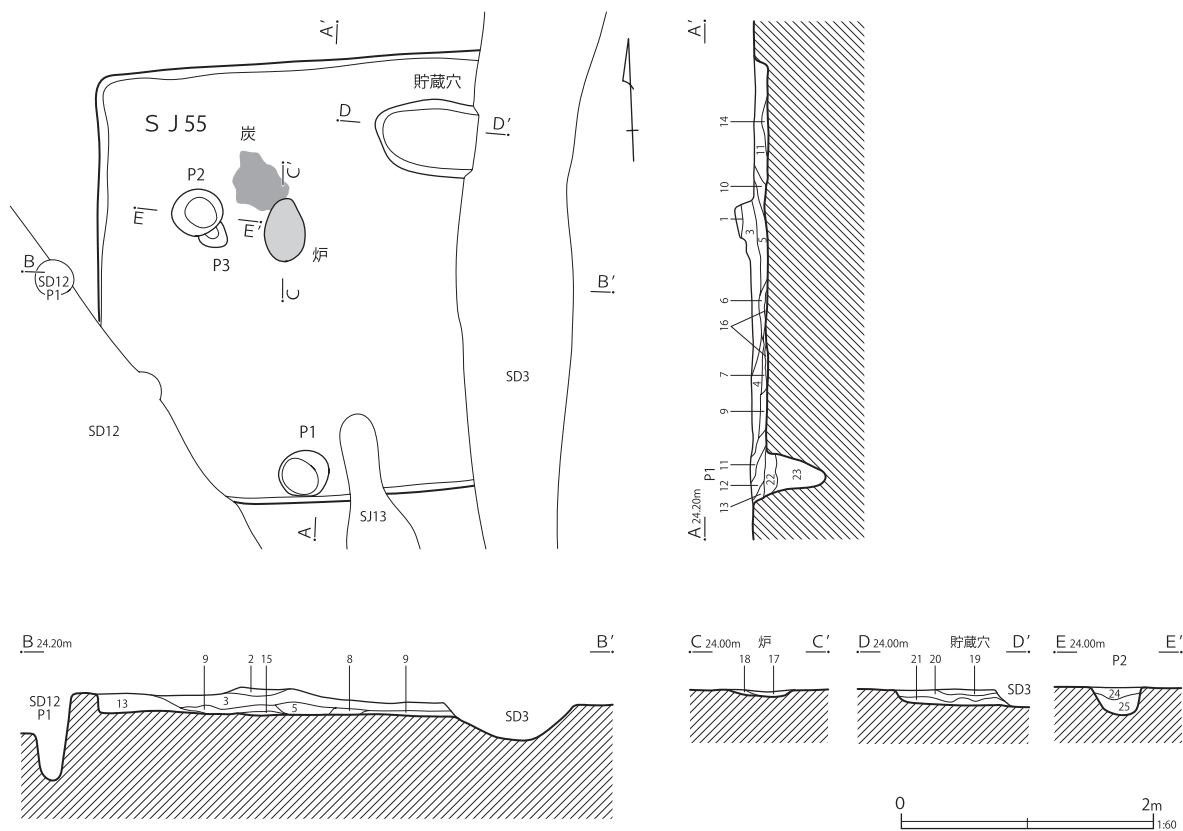
N-18グリッドに位置する。第13号住居跡、第3・12号溝跡と重複し、第55号住居跡が最も古い。

平面形は方形で、東辺は第3号溝跡によって、南西隅は第12号溝跡によって壊されている。南辺中央部は第13号住居跡の煙道がかかっている。

平面形は、方形である。残存している規模は、南北方向3.56m、東西方向3.12mである。深さは、最も深い部分で0.24mである。西辺の方位は、ほぼ南北方向である。

覆土は、レンズ状堆積を示し、自然堆積と考えられる。床面付近に炭化物を含む層が広がっており、炭化材がないため焼失家屋ではないが、上屋がなくなった窪地の状態で何らかの理由で流入したと考えられる。

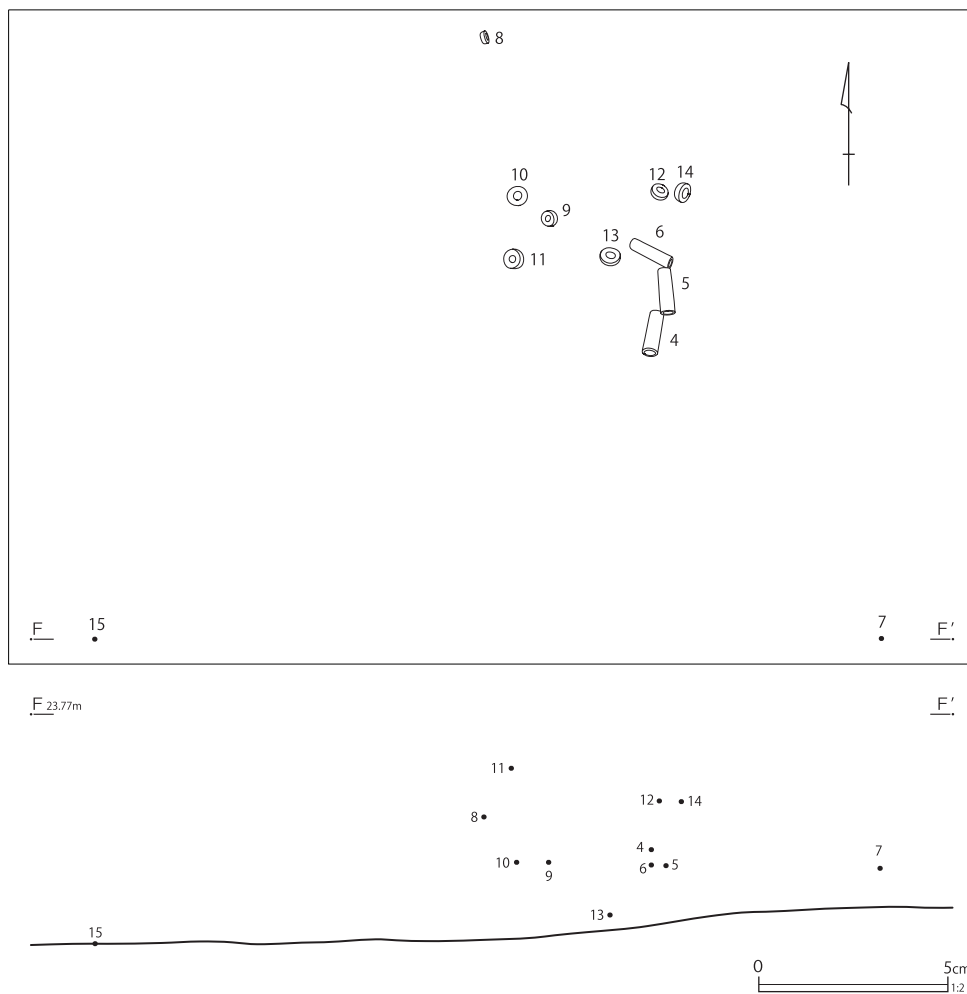
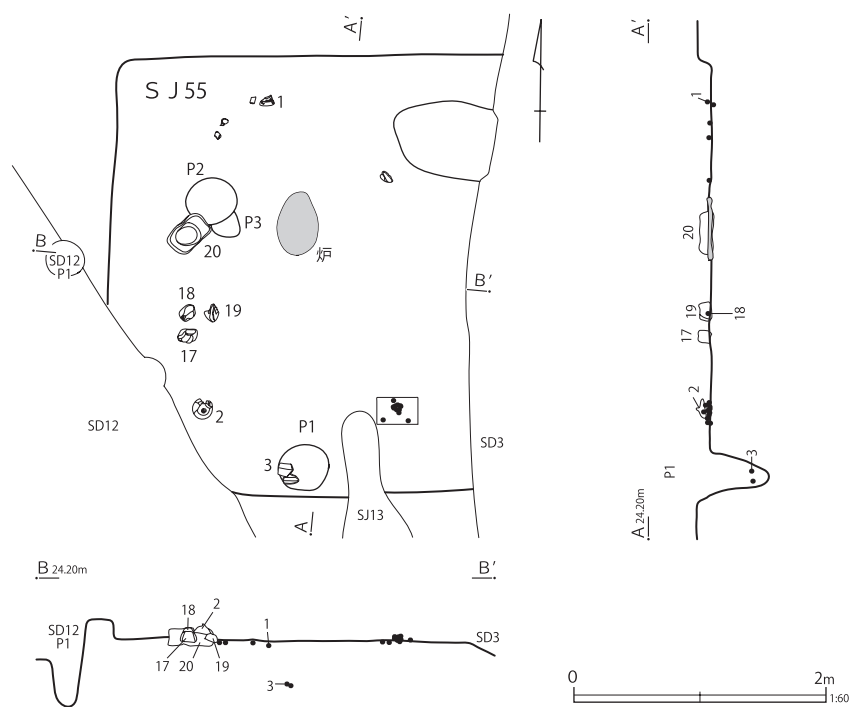
床面はほぼ平坦である。壁溝は検出されなかった。貯蔵穴を北東隅に近い部分で検出した。北辺の壁からは約0.3m離れている。平面形は不整楕円形と考えられる。規模は、長軸の残存長が0.75m、短軸0.60m、深さは0.16mである。覆土は炭化物を含む灰黄褐色土で、自然堆積と考えられる。



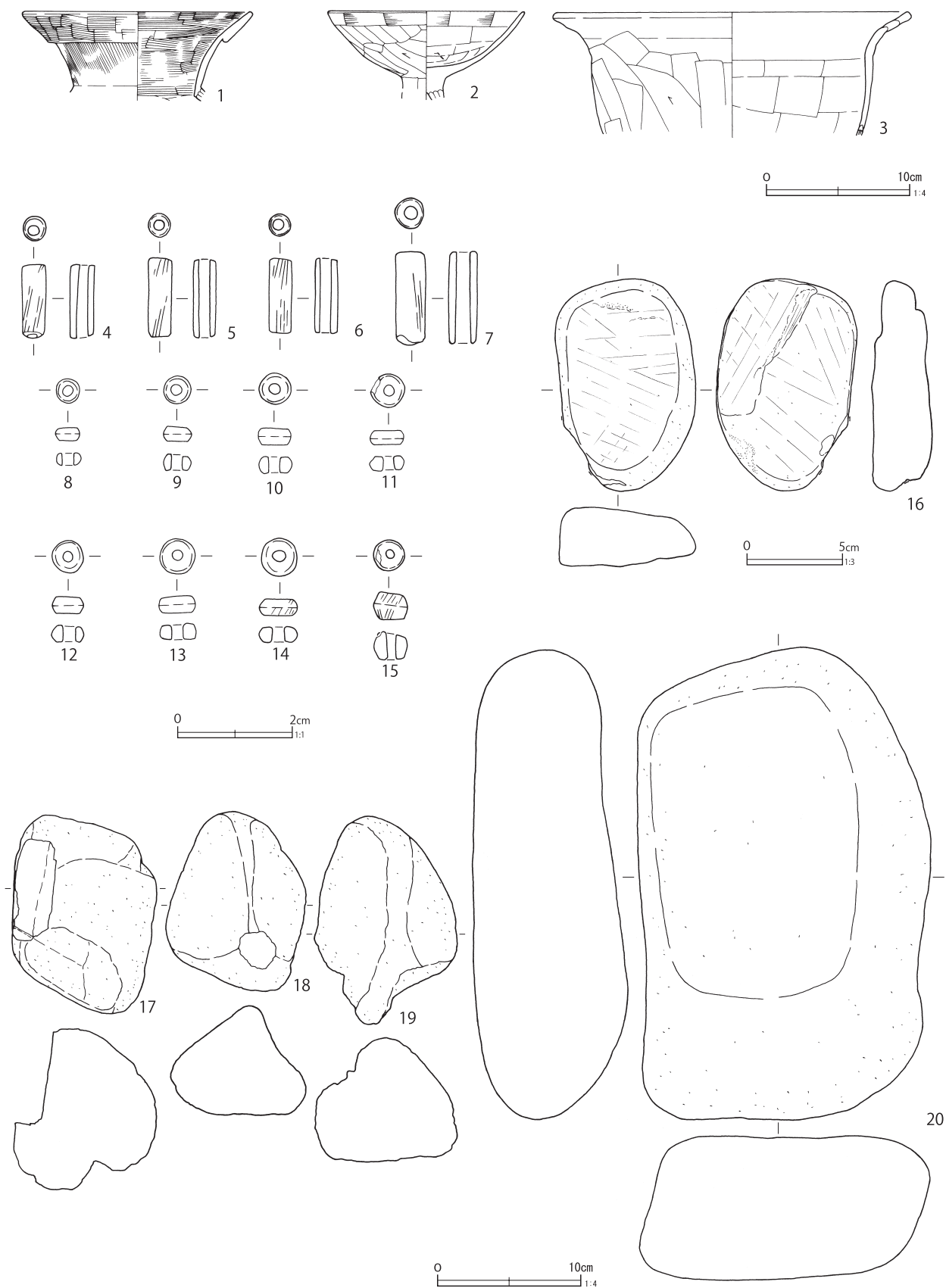
S J 55

1 褐灰色土	しまりあり	粘性あり	焼土粒子多量含む
2 灰黄褐色土	しまりあり	粘性あり	
3 灰黄褐色土	しまりあり	粘性あり	下半に灰が層状に混じる
4 黒褐色土	しまりあり	粘性あり	6層より明るく炭化粒子をほとんど含まない 地山粒子少量含む
5 黒色土	しまりあり	粘性強	炭化粒子多量含む
6 黒褐色土	しまりあり	粘性あり	全体に均一に灰が混じる 炭化粒子微量含む
7 黒褐色土	しまりあり	粘性あり	焼土粒子・地山粒子多量含む
8 黒褐色土	しまりあり	粘性あり	炭化粒子多量含む
9 黒褐色土	しまりあり	粘性あり	炭化粒子・地山粒子多量含む
10 灰色土	しまりあり	粘性強	炭化粒子少量含む
11 灰黄褐色土	しまりあり	粘性やや弱	地山に似た砂質の土
12 褐灰色土	しまりあり	粘性あり	地山ブロック多量含む 埋め戻し土に似る
13 灰黄褐色土	しまりあり	粘性やや弱	11層に極めて似る 壁の崩落土か
14 黒色土	しまりあり	粘性あり	炭化粒子多量含む
15 黒褐色土	しまりあり	粘性あり	地山粒子極多量含む
16 白色粘土ブロック			
17 赤褐色土	しまりあり	粘性あり	被熱部分
18 黒褐色土	灰と炭化粒子を含むシルト		
19 褐灰色土	シルト しまり弱	粘性弱	炭化粒子多量含む 地山粒子少量含む
20 灰黄褐色土	シルト しまり弱	粘性弱	地山粒子多量含む 炭化粒子少量含む
21 にぶい黄褐色土	シルト しまり弱	粘性弱	地山ブロック多量含む 炭化粒子微量含む
22 灰黄褐色土	粘質シルト しまりやや弱	粘性ややあり	地山ブロック多量含む
23 褐灰色土	粘質シルト しまりやや弱	粘性あり	地山粒子多量含む
24 灰黄褐色土	粘質シルト しまりややあり	粘性強	地山粒子微量含む
25 褐灰色土	粘質シルト しまりややあり	粘性強	地山粒子・ブロック多量含む

第 65 図 第 55 号住居跡



第 66 図 第 55 号住居跡遺物出土状況



第 67 图 第 55 号住居跡出土遺物

第 21 表 第 55 号住居跡出土遺物観察表 (第 67 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(15.6)	[6.2]	—	C E H G I	25	普通	明赤褐	No.7 煤付着 赤変	48-1
2	土師器	高坏	13.4	[6.2]	—	C E G H	90	普通	にぶい橙	No.1 一括	44-3
3	土師器	甗	(24.4)	[8.6]	—	A C E H I	10	普通	にぶい黄橙	P 1 No.1	48-1
4	石製品	管玉	径 0.4	高さ 1.3	孔径 0.2	重さ 0.3 g	残存 100%			No.3 滑石	48-5
5	石製品	管玉	径 0.4	高さ 1.4	孔径 0.2	重さ 0.3 g	残存 100%			No.4 滑石	48-5
6	石製品	管玉	径 0.4	高さ 1.3	孔径 0.2	重さ 0.3 g	残存 100%			No.5 滑石	48-5
7	石製品	管玉	径 0.5	高さ 1.6	孔径 0.2	重さ 0.7 g	残存 100%			No.1 滑石	48-5
8	石製品	臼玉	径 0.4	高さ 0.2	孔径 0.2	重さ 0.1 g	残存 100%			No.12 滑石	48-6
9	石製品	臼玉	径 0.5	高さ 0.3	孔径 0.2	重さ 0.1 g	残存 100%			No.10 滑石	48-6
10	石製品	臼玉	径 0.6	高さ 0.3	孔径 0.2	重さ 0.1 g	残存 100%			No.11 滑石	48-6
11	石製品	臼玉	径 0.6	高さ 0.3	孔径 0.2	重さ 0.1 g	残存 100%			No.9 滑石	48-6
12	石製品	臼玉	径 0.6	高さ 0.3	孔径 0.2	重さ 0.1 g	残存 100%			No.7 滑石	48-6
13	石製品	臼玉	径 0.6	高さ 0.3	孔径 0.2	重さ 0.2 g	残存 100%			No.8 滑石	48-6
14	石製品	臼玉	径 0.6	高さ 0.3	孔径 0.2	重さ 0.2 g	残存 100%			No.6 滑石	48-6
15	石製品	臼玉	径 0.6	高さ 0.5	孔径 0.2	重さ 0.2 g	残存 100%			No.2 滑石	48-6
16	石製品	砥石	長さ 11.1	幅 7.4	厚さ 3.2	重さ 325.1 g				No.6 泥岩 一部欠損 2面砥面	48-8
17	石製品	作業石	長さ 13.8	幅 10.1	厚さ 12.0	重さ 1828.8 g				No.2 チャート 完形 No.2～No.5で1セット	50-2
18	石製品	作業石	長さ 12.5	幅 9.8	厚さ 7.7	重さ 1072.4 g				No.3 チャート 完形 No.2・No.4・No.5とセット	50-2
19	石製品	作業石	長さ 14.5	幅 10.0	厚さ 8.5	重さ 1287.6 g				No.4 チャート 完形 No.2・No.3・No.5とセット	50-2
20	石製品	作業石	長さ 20.4	幅 33.2	厚さ 11.2	重さ 1220.0 g				No.5 砂岩 完形 No.2～No.4とセット	50-1

ピットは3基検出したが、P 3は本住居に伴わない可能性がある。覆土は褐灰色土、灰黄褐色土で、柱痕等は認められず、自然堆積と考えられる。P 1は南辺の壁際に掘り込まれていた。炉を通る軸線上にあることから、入り口に関する施設と考えられる。形状はほぼ円形で、径0.41m、床面からの深さは0.48mである。P 2は炉の西側で検出された。位置的には柱穴の可能性が高いと考えられる。上面の一部にかかって礫が置かれたような状態で出土している(第66図)。形状は円形で、径0.39m、深さは0.23mである。

炉を床面中央から北西に寄った部分で検出した。楕円形で、掘り込みは浅い皿状である。規模は、長軸0.50m、短軸0.33m、深さは0.06mである。炉の周囲には炭化物が広がっており、特に北側に多く見られた。炉の底面は、被熱により赤化していた。

炉の西側からは大型の礫を検出した。P 2の上面にかかるように、長さ32.6cm、幅20cm、厚さ11.2cmの長方形の自然石が据えられていた。上面及び下面はほぼ平らで滑らかである。

さらにその南には3個の礫が三角形を形作るように置かれていた。いずれの礫も下部が床面に僅かに食い込んでおり、据えられたものと考えられる。大きさはいずれも拳大より大きめである。石の間隔は7～12cmである。周辺には薄く炭化物が見られたが床面は焼けておらず、石も被熱や加工された痕跡はなかった。石材は3個ともチャートである。

出土遺物は、覆土中から土師器壺の口縁部、高坏の坏部、砥石などが出土した。住居跡南東部分からは管玉4個、臼玉8個が集中して出土した。管玉と臼玉各1個は、調査時に掘削土と一緒に上がってしまったため正確な位置は不明であるが、他はおよそ10cm四方の範囲で、床面上1～4cmの高さにまとまっていた。管玉は連の可能性はある。臼玉の配置には規則性は見られない。

第55号住居跡の所属時期は、古墳時代前期の4世紀後半と考えられる。

第55号住居跡出土遺物 (第67図)

1・2は古墳時代前期の土師器である。角閃石、砂粒を多く含み、利根川流域の粘土が用いられていると考えられる。

1は壺である。頸部から大きく開く口縁部である。複合口縁で、端部外周に粘土帯が貼付されることにより、複合部が作出されている。口縁部の内外面とも刷毛目が施されている。全体に煤が付着し、赤変している。

2は高坏である。小型の碗状の坏部に柱状の脚部が接合すると考えられる。坏部外面へラケズリ、内面へラナデが施され、端部には内外面小口ナデが加えられている。接合はホゾ接合である。脚部は中空の柱状で、内面にへラの圧痕が見られる。外面にはへラナデが施されている。

3は古墳時代後期の甗である。角閃石、砂粒を多く含み、利根川流域の粘土が用いられていると考えられる。直線的に開く口縁部に、底部に向かって緩やかに窄まる胴部が付く。胴部外面は縦方向のへラケズリ、内面横方向のへラナデが施されている。

4～7は滑石製の管玉である。所謂極小管玉である。外面には斜め方向の研磨痕が見られるが、非常に丁寧に研磨されている。4・7は小口の片側が不整形である。穿孔は両側穿孔である。

8～15は滑石製の白玉である。サイズはごく小さい。側面は8角形に斜めに成形され、研磨されている。斜め方向の研磨痕が確認できる。上下は平滑に仕上げられている。15は高さがあるが、仕上げは斜めになっている。穿孔は両側穿孔である。

16は泥岩製の砥石である。不整楕円形で、一部を欠失する。表裏とも平滑に整えられている。裏面のやや広い剥離面も使用されており、刃物痕が確認できる。

17～20は、住居跡の南西側からまとまって出土した礫である。一部が平滑に整えられており、何らかの作業に使用されたと考えられる。大型の20は面が滑らかで、一種の砥石的な用途が推定できる。石材は17～19がチャート、20は砂岩である。

第57号住居跡（第68図）

Q・R-18グリッドに位置する。第2・34・

39・41・51号住居跡、第19・21・36・69号土壌と重複し、第57号住居跡が最も古いと考えられる。住居の中央を北から南に第2・41・51号住居跡が重なり、西側は第39号住居跡により壊されている。東側は削平され消失していた。

平面形は方形もしくは長方形を呈すると推定される。残存する規模は、北西辺が4.47m、南西辺は5.13mである。深さは最もよく残っていた北隅で0.10mである。北西辺の方位はN-39°-Eである。床面はほぼ平坦だが、重複する遺構によって壊されているため残存している部分は少なく、カマドやピット、壁溝等の施設は検出されなかった。

覆土は、重複する遺構に壊され、ほとんど残っていないが、地山粒子やブロックを含み、埋め戻された可能性がある。

遺物は、住居跡北隅で第51号住居跡のカマドに半分壊された状態で土師器甕が出土したが、図示できる状態ではなかった。

第57号住居跡の所属時期は、7世紀後半の第39号住居跡より古いと、7世紀と考えられる。

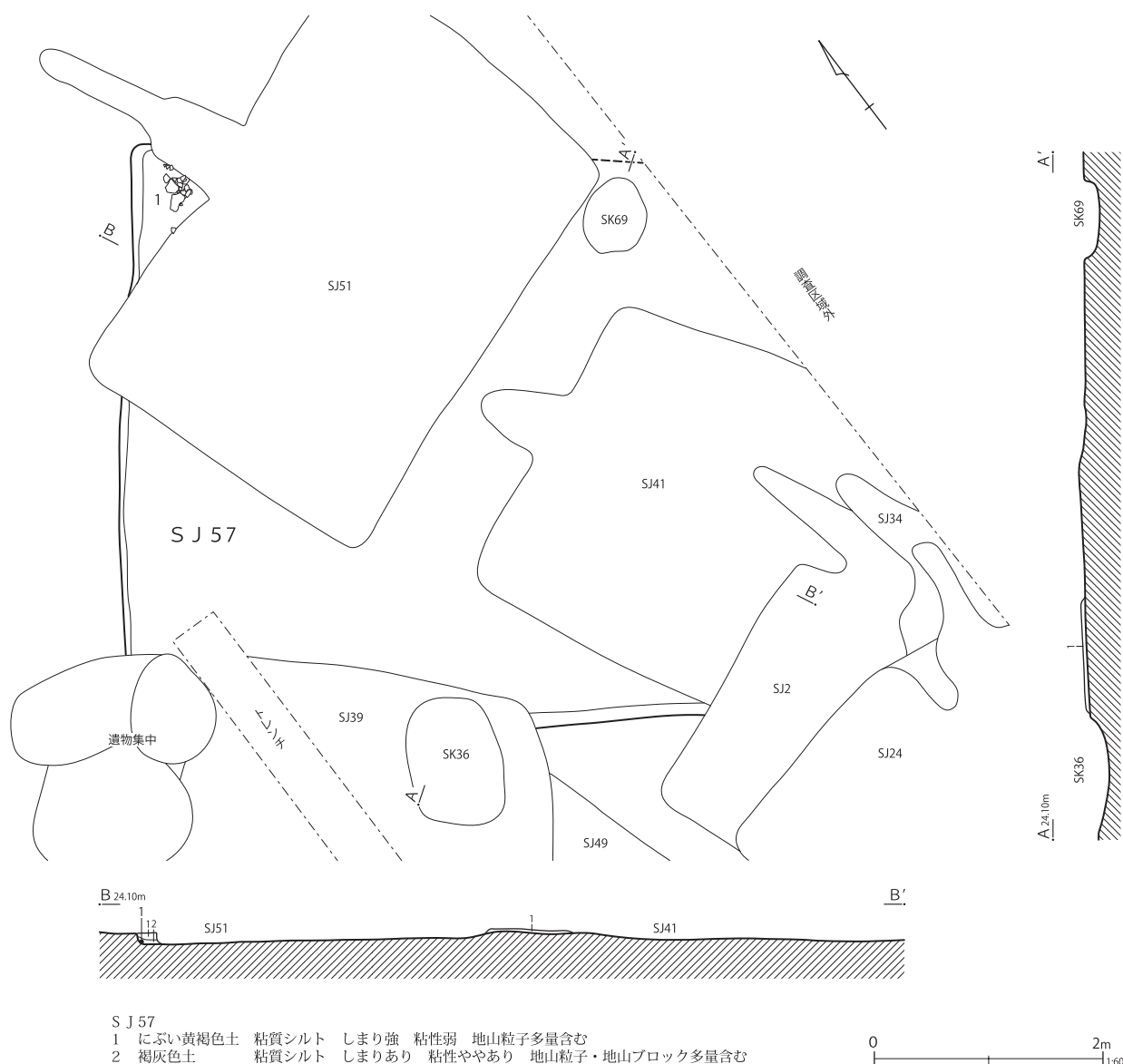
第58号住居跡（第69図）

O・P-16グリッドに位置する。第1・3・5・50・59号住居跡と重複し、第1・3・5・50号住居跡より古く第59号住居跡より新しい。ほぼ同位置に第5号住居跡が重複しており、大部分は同住居跡により壊されており、遺構の大半は失われていた。更に南東コーナーは第3号住居跡により、壊されていた。

平面形は方形と考えられる。残存していた規模は、主軸方向3.98m、直交軸方向は3.3m、深さは0.17mである。北東辺を基準とした主軸方位はN-39°-Wである。

覆土は、重複のため殆ど残っていなかった。残存していた4～6層は、掘り方の埋め土と考えられる。

床面は重複する遺構のため、ほとんど残ってい



第 68 図 第 57 号住居跡

なかった。残存する部分は、ほぼ平坦である。

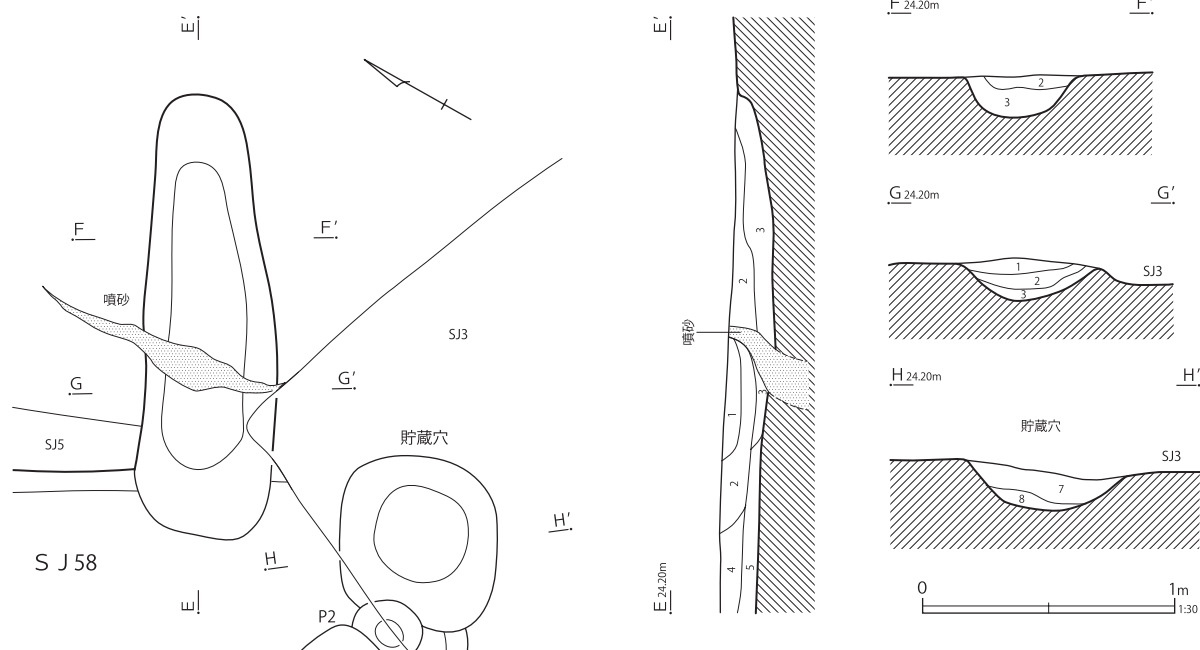
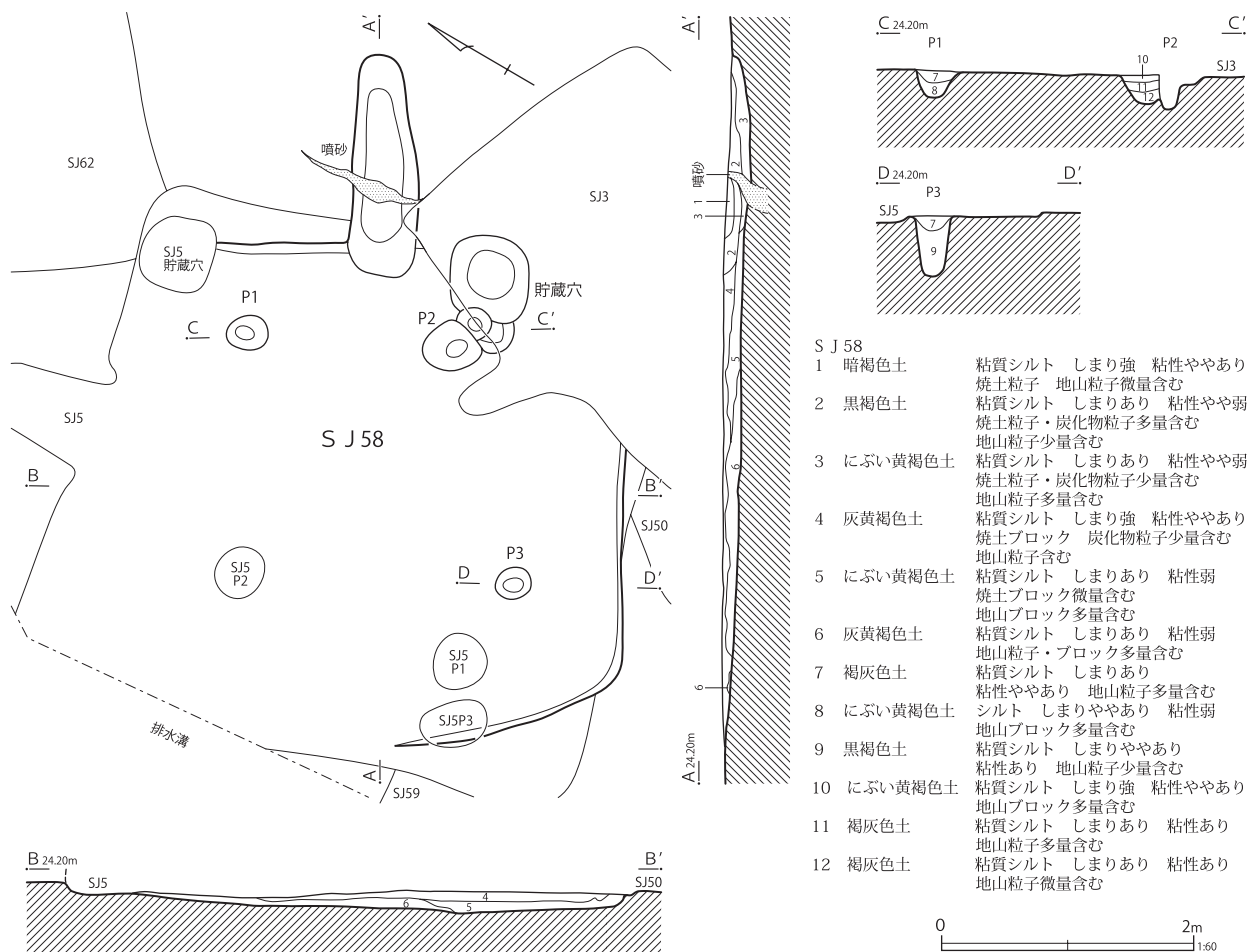
壁溝は検出されなかった。

ピットは複数検出された。その位置から、P 1～P 3 が支柱穴と考えられる。ピットの規模は、P 1 が長軸0.34m、短軸0.28m、深さ0.21m、P 2 が長軸0.42m、短軸0.37m、深さ0.34m、P 3 が径0.29m、深さ0.47mである。P 2 は柱痕が認められ、柱掘り方の互層が確認できる。

その他は褐灰色土、黒褐色土等の自然堆積である。

貯蔵穴はカマド右側から検出された。隅丸方形で規模は長径0.89m、短径0.62m、深さは0.20mである。覆土は褐灰色土、にぶい黄褐色土で、自然堆積である。

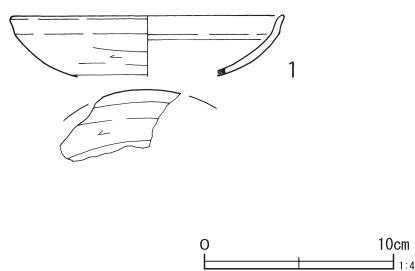
カマドは東壁の中央に設けられていた。全長1.78m、燃烧部幅0.54mである。燃烧部は住居跡の外側に構築される。袖は検出されなかった。燃



第 69 図 第 58 号住居跡

第22表 第58号住居跡出土遺物観察表（第70図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(14.2)	[3.2]	—	C E G I	10	普通	橙	P 7 内外面タール状付着物	48-1



第70図 第58号住居跡出土遺物

焼部は掘り込みがほとんどなく、煙道との境は不明瞭である。煙道は煙出しへの傾斜が緩い。覆土は暗褐色土、黒褐色土、にぶい黄褐色土だが、天井部、灰層は不明瞭で、自然堆積と考えられる。燃焼部及び煙道の壁は被熱により赤色となり硬化していた。

遺物は、土師器坏・甕などの小片や須恵器小片が少量出土した。

第58号住居跡の所属時期は、重複関係、出土した土師器坏蓋模倣坏の形態的特徴から、7世紀中葉以前に位置づけられる。

第58号住居跡出土遺物（第70図）

1は口縁部がやや外反する、坏蓋模倣坏である。形態的には北武蔵型坏に近い形態である。角閃石、砂粒を多く含み、利根川流域の粘土が用いられていると考えられる。内外面にタール状の付着物が見られる。

第59号住居跡（第71図）

P-16グリッドに位置する。第1・3・5・58号住居跡と重複し、これらの中で最も古い。

第3・5・58号住居跡によって大部分が壊され、南側の壁のみが残存していた。平面形や全体の規模は不明であるが、検出できた南辺は長さ3.53mで、深さは最も残りのいい所で0.10mである。南辺を基準とした方位はN-89°-Wである。

床面からはピットなどの施設などは検出されず、遺物も出土しなかった。

第59号住居跡の所属時期は、重複関係から、7世紀中葉の第3号住居跡より古いと推定しておきたい。

第61号住居跡（第72・73図）

L-16グリッドに位置する。第68号住居跡と重複し、第61号住居跡の方が新しい。北側コーナーは攪乱によって壊されている。西側は調査区域外にかかる。

平面形はカマドの軸方向に沿った長方形である。

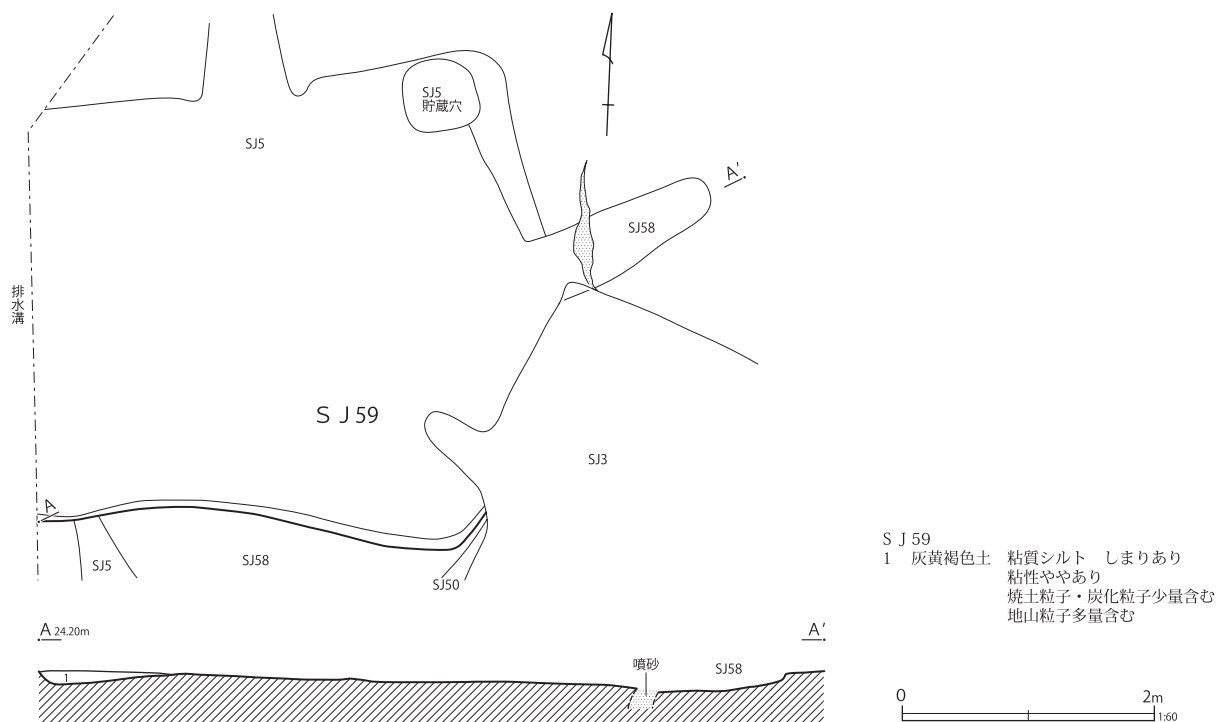
規模は、主軸方向4.08m、短軸方向3.26m、深さは0.12mである。主軸方位は、N-52°-Eである。

覆土は炭化物を含む灰黄褐色土、黄灰色で、自然堆積と考えられる。床面にはカマド前面を中心に炭化材が分布し、焼失家屋の可能性が考えられるが、覆土中には炭化物が不明瞭であり、確実ではない（第73図）。

床面はほぼ平坦で、貼床が施されていた（第3層）。壁溝や貯蔵穴は検出されなかったが、柱穴の可能性のあるピット1基と、壁際に小ピットが列状に検出された。

P 1は柱穴の可能性はある。径0.35m、深さ0.16mで、覆土は黄灰色の単層である。柱痕等は認められなかった。

壁際のピット列は、いずれも径0.15m以下で細く、崩落防止のために打ち込まれた杭などの痕跡の可能性はある。各ピットの規模は、P 2が



第 71 図 第 59 号住居跡

径0.10m、深さ0.03m、P 3が径0.12m、深さ0.08m、P 4が径0.13m、深さ0.05m、P 5が径0.14m、深さ0.05m、P 6が径0.13m、深さ0.02m、P 7が径0.12m、深さ0.09m、P 8が径0.12m、深さ0.02mである。

カマドは北東壁の中央、やや西寄りに構築されていた。ちょうど住居の壁が燃焼部の中間に当たり、検出した長さは1.70mである。袖は両袖とも短く、住居廃絶時に壊されたと考えられる。袖を含むカマド全体に白色粘土が分布しており、白色粘土と地山の黄灰色土を混ぜて、構築されていたと考えられる。

燃焼部は長方形の掘り込みで、長さ0.96m、幅0.61mである。床面からの深さは0.08mである。覆土は第6層が使用時の灰層、第5層は天井あるいは壁の崩落土と考えられる。燃焼部から5cmほどの段をもって煙道に移行する。煙道底面は奥に向かって緩やかに上がる。奥壁は斜めに立ち上

がっている。煙道の長さは0.75mである。幅は0.47mで、煙出しは0.25mと狭くなる。袖、燃焼部、煙道とも焼土化し、赤化していた。

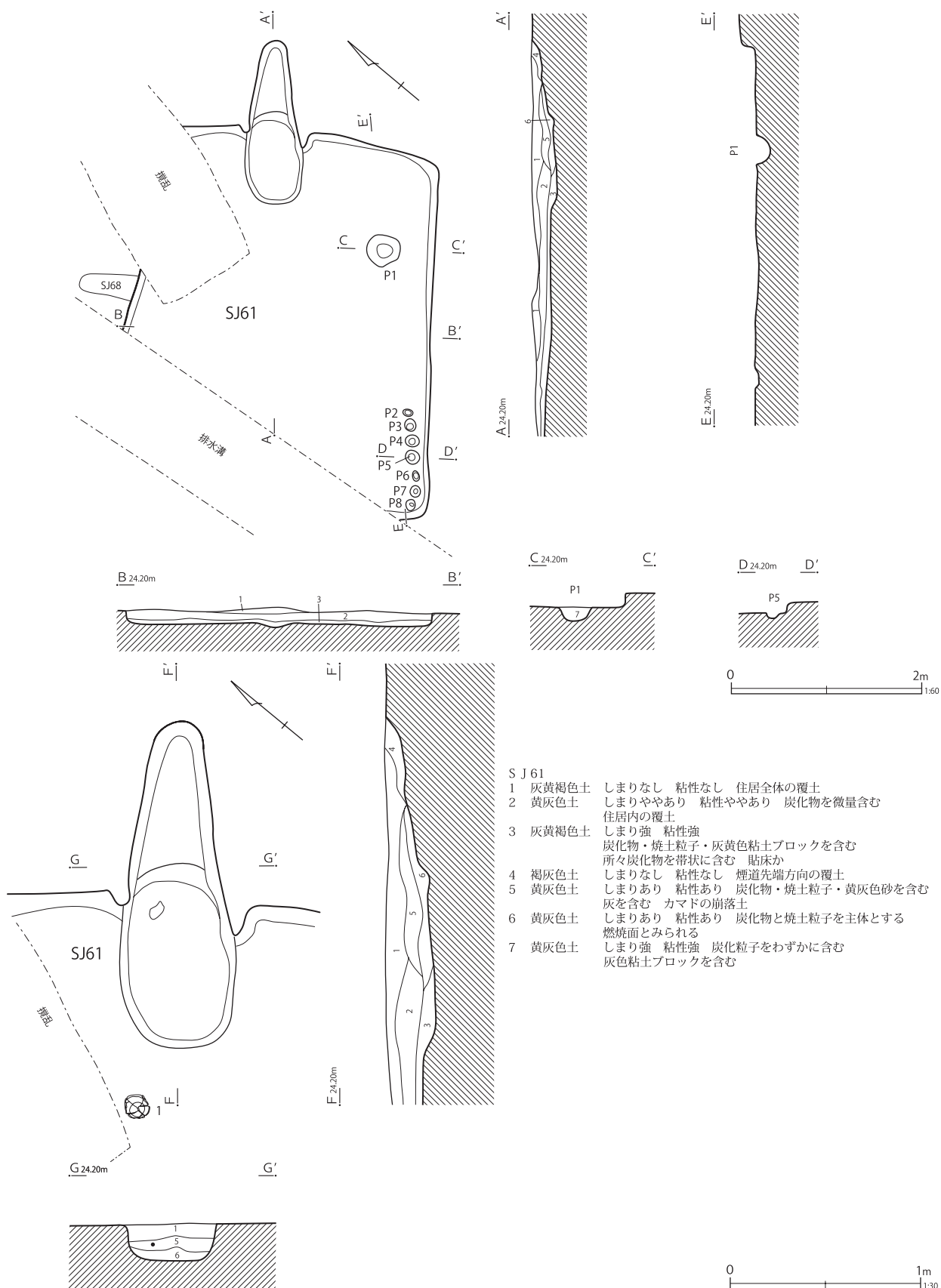
出土遺物は、カマド及びカマド前面から土師器坏・甕が出土した。また床面に炭化材が分布していた。柱等の構造材ではないため、柱抜去後に火を受けた可能性がある。

第61号住居跡の所属時期は、北武蔵型坏、模倣坏の形態的特徴から、7世紀後半に位置づけられる。

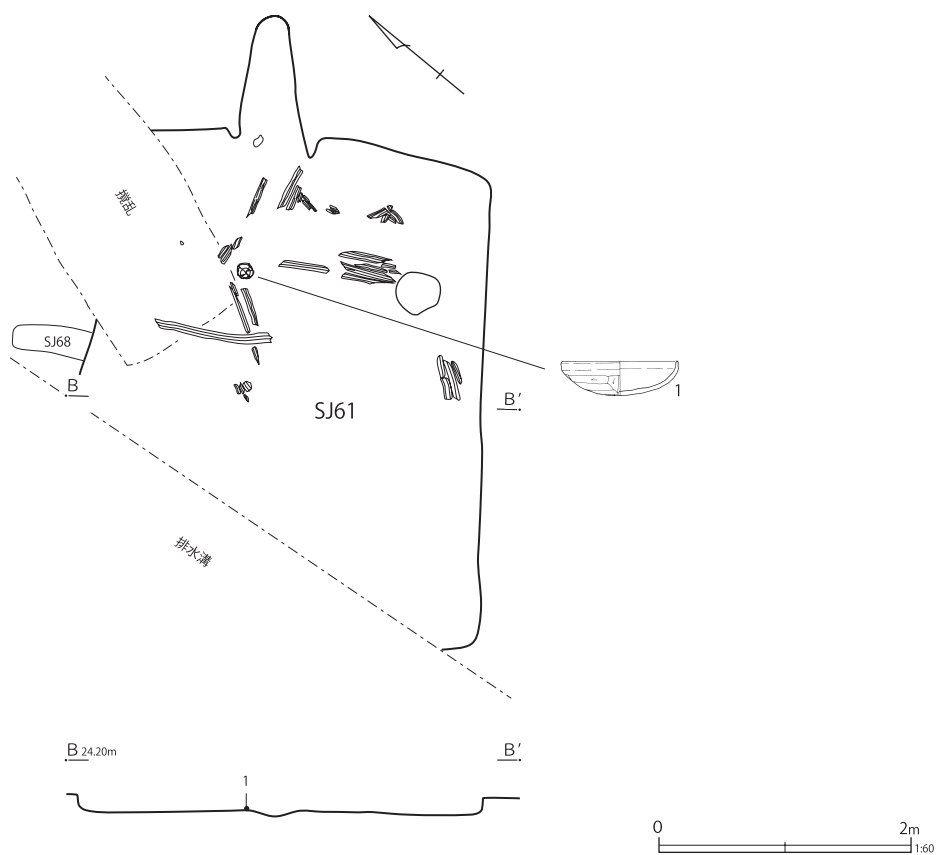
第61号住居跡出土遺物（第74図）

1～3は土師器坏である。胎土にはいずれも砂粒・角閃石の混入が目立ち、利根川流域の粘土が用いられていると考えられる。

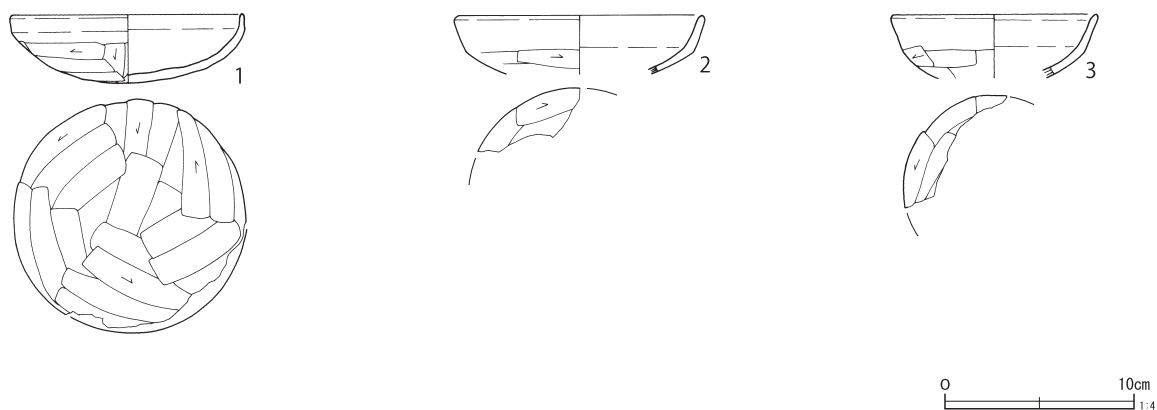
1は北武蔵型坏である。ほぼ完形である。カマドの燃焼部から出土した。風化が著しい。2・3は坏蓋模倣坏である。口縁部と体部の境目が不明瞭で、低平な印象を受ける。風化が著しい。



第 72 図 第 61 号住居跡



第73図 第61号住居跡遺物出土状況



第74図 第61号住居跡出土遺物

第23表 第61号住居跡出土遺物観察表（第74図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	12.1	3.6	—	CEGHI	80	普通	にぶい黄橙	No.2	44-4
2	土師器	坏	(12.6)	[3.1]	—	BCEGHI	10	普通	にぶい橙	カマド	48-2
3	土師器	坏	(10.8)	[3.3]	—	CEGH	25	普通	橙	カマド	48-2

第64号住居跡（第75・76図）

O-17・18、P-17グリッドに位置する。第14号住居跡、第55号土壌、第6号溝跡と重複し、第14号住居跡、第6号溝跡より古く、第55号土壌より新しい。また、第3号掘立柱建物跡と重複する位置関係にあるが、確認面が異なっており、直接重複していないため新旧関係は不明である。住居の東側を第14号住居によって壊され、さらにその上から第6号溝跡が北東から南西方向に斜めに突き抜けている。第55号土壌は、本住居跡の精査中に床下から検出した。

平面形は長方形で、北辺はカマド付近がやや外側に張り出している。

規模は、主軸方向5.60m、直交軸方向5.04m、深さは最も深い部分で0.10mである。西辺を基準とした主軸方位はN-29°-Wである。

覆土は褐灰色の粘質シルトの単層である。

壁溝および貯蔵穴等の施設は確認されなかった。貯蔵穴をカマドの右側と仮定すると第14号住居跡等によって壊された可能性がある。ピットは4基確認した。位置的には積極的に柱穴と判断できるものはない。P1は不整円形で、径0.56m、深さ0.18m、P2は不整楕円形で、長径0.70m、短径0.54m、深さ0.70m、P3は不整円形で、径0.28m、深さ0.11mである。P4は不整楕円形で長径0.40m、短径0.32m、深さ0.13mである。覆土は鈍い黄橙色土、灰黄褐色土の単層である。

カマドは北壁の中央に構築されていた。全長1.93mである。袖は両袖とも確認された。長さは左袖が0.70m、右袖は0.75mである。粘質土に砂質土を混ぜた土で造られており、右袖の先端には補強材として土師器甕が伏せられた状態で使用されていた。平面、断面ともに燃焼部と煙道の境が明瞭でない。袖の状況からは、燃焼部は壁の内側にあると推定される。袖の長さのほぼ中間に土製支脚と考えられる焼土塊が検出されており、燃焼部の範囲を示すものと考えられる。

燃焼部は特に掘り込みはなく、底面の高さは住居本体の床面、煙道の底面と同じである。燃焼部の正確な規模は計測できないため、便宜的に袖の長さを燃焼部の長さとする、長さは0.75m、幅0.62mほどになる。燃焼部には支脚と考えられる土製品が据えられていた。円盤状で高さは2～3cmである。被熱により激しく赤化しており、損耗が激しく取り上げることはできなかった。

煙道は燃焼部とほぼ同じ幅で延び、先端は幅0.43mとなる。長さは1.20mである。底面は燃焼部と同じ高さで延び、へばりつくように、灰層が燃焼部から煙道奥まで認められた。

出土遺物は、土師器坏・甕などが少量出土した。

第64号住居跡の所属時期は、北武蔵型坏、有段口縁坏、長胴甕の形態的特徴から7世紀後半に位置づけられる。

第64号住居跡出土遺物（第77図）

1～3は土師器である。胎土にはいずれも砂粒、角閃石の混入が目立ち、利根川流域の粘土が用いられていると考えられる。

1は有段口縁坏である。内外面黒色処理されている。風化が進み、口縁部と体部の境の段が不明瞭である。2は北武蔵型坏である。口縁端部はやや外傾する。風化が著しい。

3は甕である。胴部がやや張る形態である。口縁部は大きく外反する。胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデが施されている。

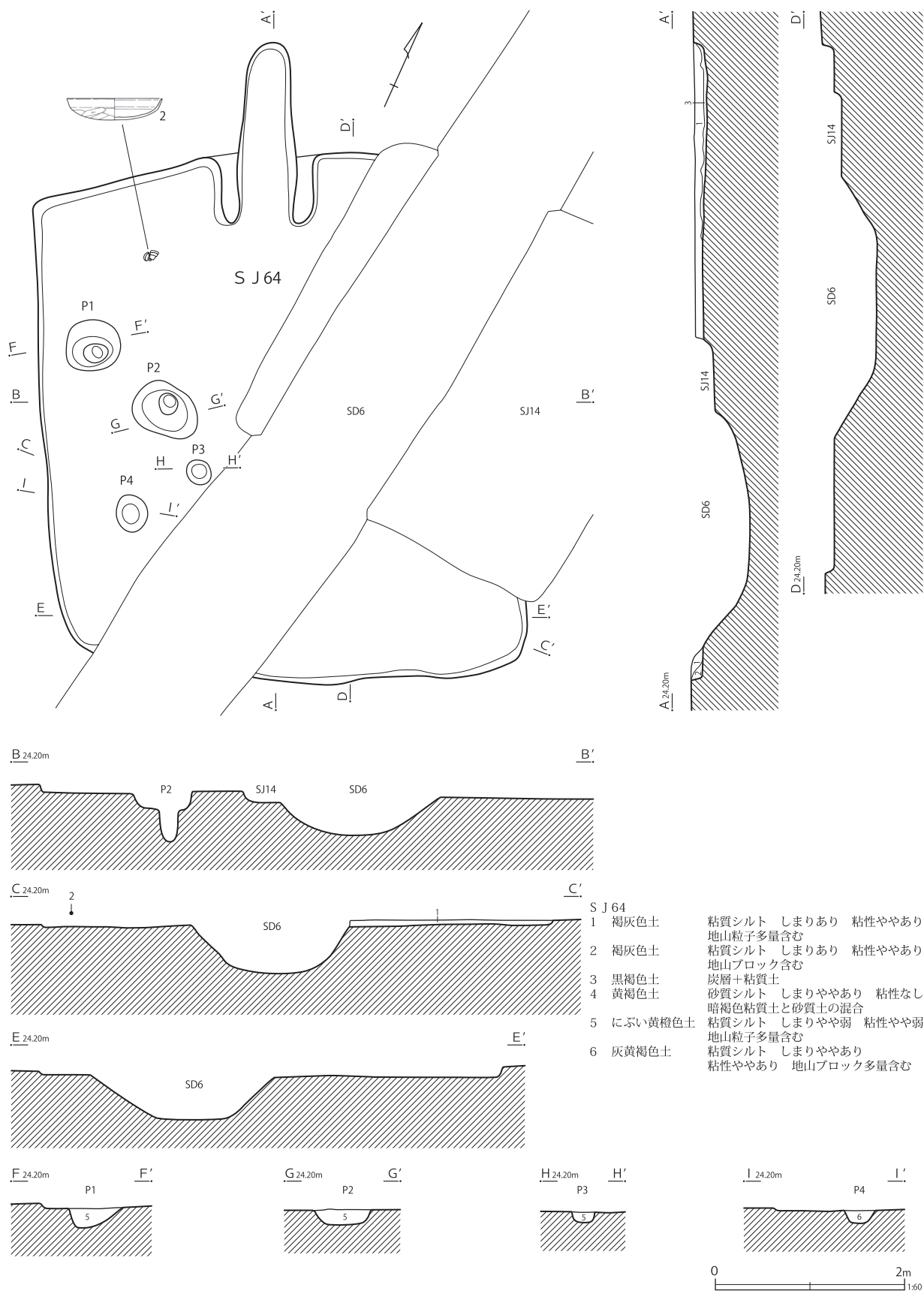
第68号住居跡（第78図）

L-16グリッドに位置する。大部分が第61号住居跡と重複する。ほとんど残っておらず、カマドの煙道部分だけが残存していた。

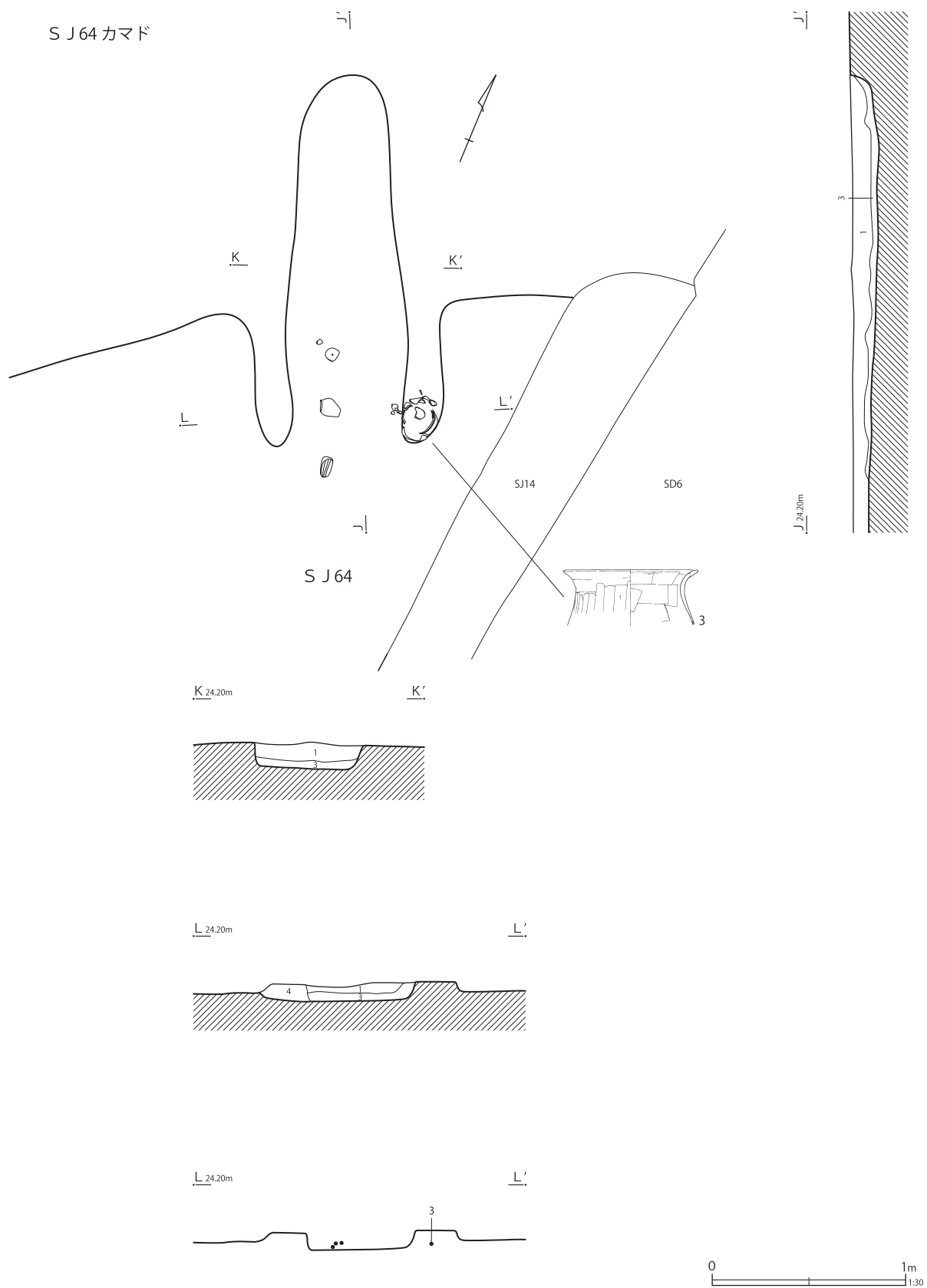
検出時に既に灰層が露出しており、上は削平されていた。第2層は掘り方の埋め土の可能性がある。残存していた煙道の長さは0.64m、幅は0.28m、深さは0.18mである。

遺物は出土しなかった。

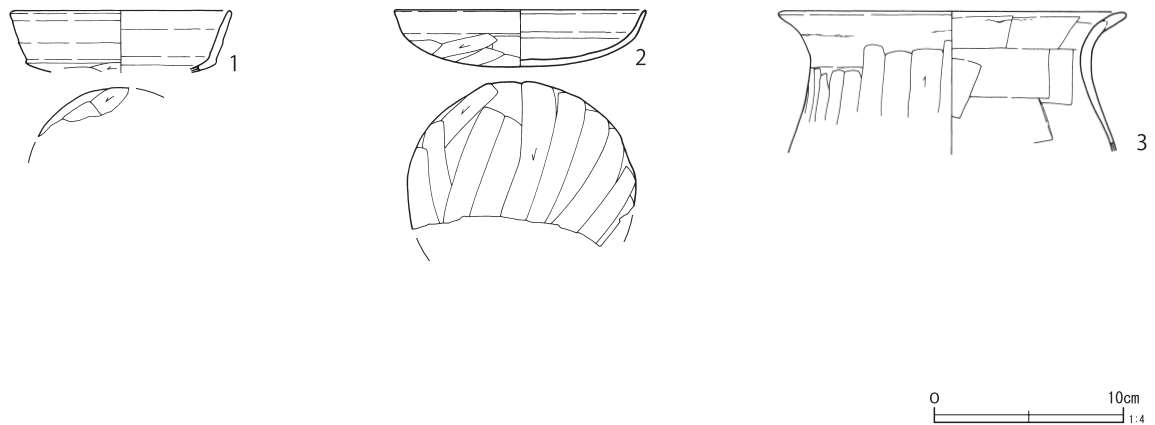
第68号住居跡の所属時期は、重複関係から7世



第 75 図 第 64 号住居跡・遺物出土状況（1）



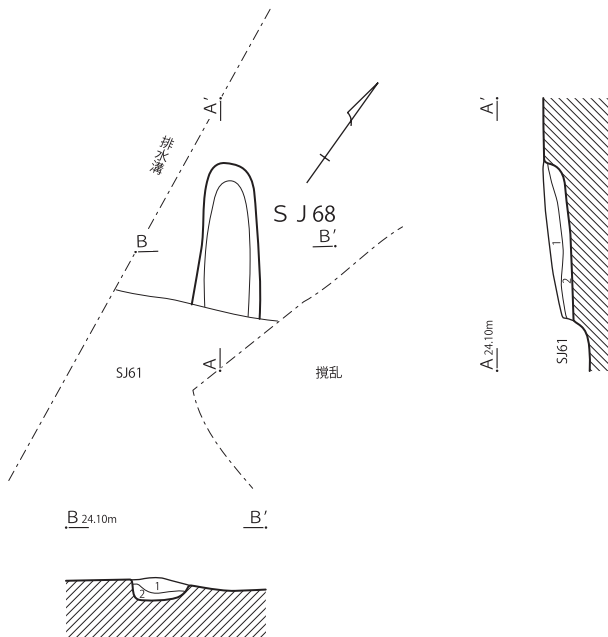
第 76 図 第 64 号住居跡・遺物出土状況（2）



第 77 図 第 64 号住居跡出土遺物

第 24 表 第 64 号住居跡出土遺物観察表（第 77 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.4)	[3.3]	—	CEGHI	10	普通	にぶい黄橙	C 内外面黒色処理	48-2
2	土師器	坏	(13.0)	3.0	—	CDGH	50	普通	橙	No.5	44-5
3	土師器	甕	18.0	[7.4]	—	CEGHI	70	普通	橙	No.1・カマド	44-6



S J 68

- 1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり 焼土粒子微量含む
炭化粒子を焼土粒子より多く含む
2 黄灰色土 しまりあり 粘性あり 砂を全体に含む 焼土・炭化物は含まない



第 78 図 第 68 号住居跡

紀後半以前と考えられる。

第69号住居跡（第79図）

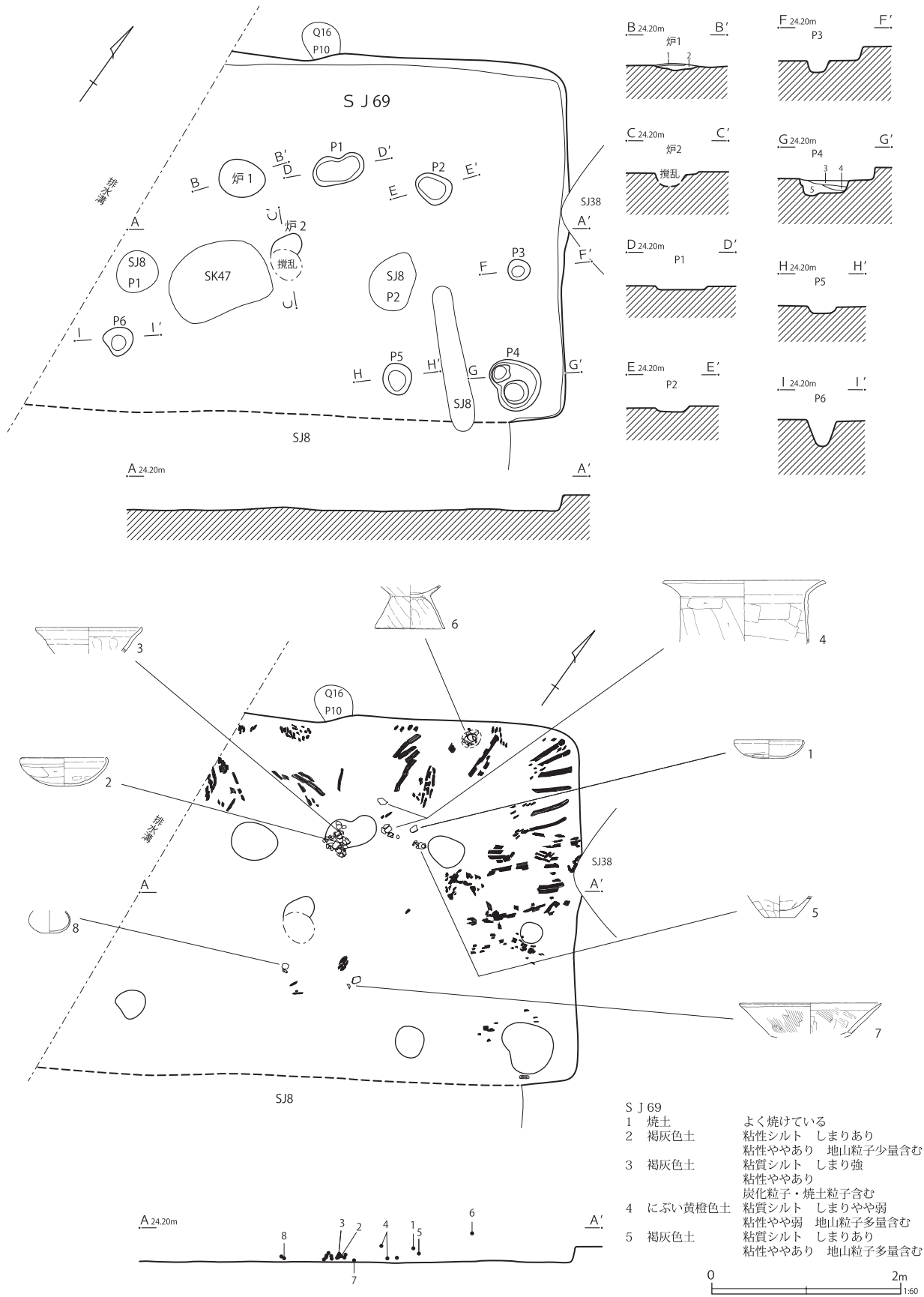
Q-16グリッドに位置する。第7・8・38号住居跡、第47号土壇と重複し、第69号住居跡が最も古い。西側は調査区外に続き、南壁の大半は第8号住居跡によって壊されていた。北壁の中央付近は、グリッドピットに壁の一部が壊されていた。

また、第69号住居跡は焼失住居と思われ、多量の炭化材が床面から出土した。

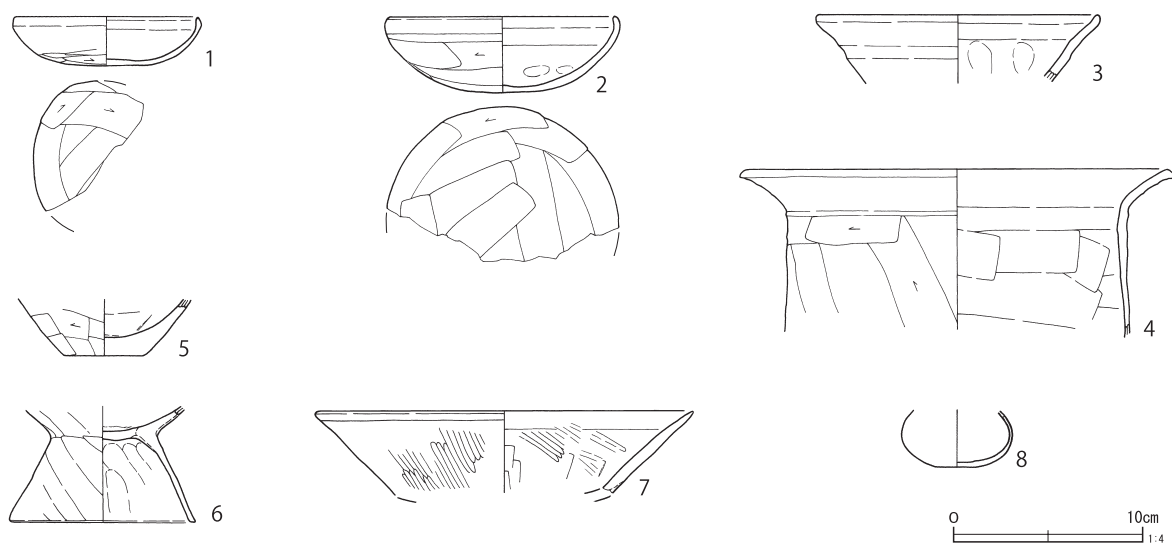
平面形は、残存している範囲から推定すると長方形になると考えられる。残存している規模は、南北3.87m、東西5.75mである。深さは0.10mである。東辺を基準とした方位はN-35°-Wである。

覆土は、第8号住居跡調査時に掘削したため図面としては残せなかったが、調査時の所見では暗褐色土で炭化粒子や焼土粒子を含む土層であった。

床面は平坦で、壁溝および貯蔵穴は検出されなかった。複数のピットが検出されたが、規模、深さが各々異なっており、柱穴として特定する



第 79 図 第 69 号住居跡・遺物出土状況



第 80 図 第 69 号住居跡出土遺物

第 25 表 第 69 号住居跡出土遺物観察表（第 80 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(9.6)	2.5	—	CEGHI	30	普通	橙	No. 3	—
2	土師器	坏	11.8	4.0	—	CEGI	60	普通	橙	No. 20 指頭痕	44-7
3	土師器	坏	(14.8)	3.5	—	CGHI	10	普通	にぶい黄橙	No. 14 指頭痕	48-2
4	土師器	甕	(22.2)	[8.9]	—	CEGH	30	普通	にぶい赤褐	No. 2・6・一括	—
5	土師器	甕	—	[3.0]	4.0	CEGI	60	普通	橙	No. 4	44-8
6	土師器	台付甕	—	[6.2]	9.8	CEGH	70	普通	橙	No. 1	44-9
7	土師器	高坏	(19.7)	[4.3]	—	CEG	30	普通	にぶい橙	No. 21・表採 前面、赤彩の可能性あり	48-2
8	土師器	埴	—	[3.0]	2.0	BCEG	70	普通	にぶい橙	No. 22	44-10

には至らなかった。それぞれの規模は、P 1 が長径0.56m、短径0.29m、深さ0.05m、P 2 が長径0.38m、短径0.31m、深さ0.05m、P 3 が径0.24m、深さ0.13m、P 4 が径0.51m、深さ0.15m、P 5 が径0.32m、深さは0.10m、P 6 が径0.33m、深さ0.27mである。

炉が床面の中央やや西寄りから 2 箇所検出された。掘り込みはいずれも浅い皿状で、底面はよく焼けていた。炉跡 2 は後世のピット状の攪乱によってかなり壊されていた。炉跡 1 の規模は長径0.48m、短径0.40m、炉跡 2 は長径0.35m、残存している短径は0.15mである。

第 8 号住居跡に壊されていない北側および東側の壁際では住居の中央に向かって放射状に炭化材が残っていた。炭化材に混じって壁際などから土

師器が出土しているが、多くは炭化材の上に乗っているものが多く、住居廃絶後に捨てられたものと考えられる。

第 69 号住居跡の所属時期は、遺構の軸方向や土師器坏、長胴甕の形態的特徴から 7 世紀後半に位置づけられる。現状で検出されている炉跡や床面から出土した古墳時代前期の土器から古墳時代前期の可能性も考えられる。

第 69 号住居跡出土遺物（第 80 図）

出土遺物は、いずれも土師器である。1～6 の胎土には砂粒、角閃石の混入が目立ち、利根川流域の粘土が用いられていると考えられる。

1・2 は北武蔵型坏である。1 は径がごく小さく、低平である。2 はやや深身で、内面に指頭痕が残る。3 は大きく直線的に開く体部のものであ

る。形態的には落合型坏や盤状坏に類するが、相違が大きく、現段階では系統は不明である。

4・5は甕である。4は大型で、頸部に横方向のヘラケズリが加えられている。外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデである。5は底部である。外周に横方向のヘラケズリが加えられている。6は台付甕である。器肉が薄く、天井部は強くナデこまれている。

7は古墳時代前期の高坏である。直線的に大きく開く坏部で、内外面にヘラ磨きが施されている。角閃石が目立たず、雲母を含んでいる。

第71号住居跡（第81図）

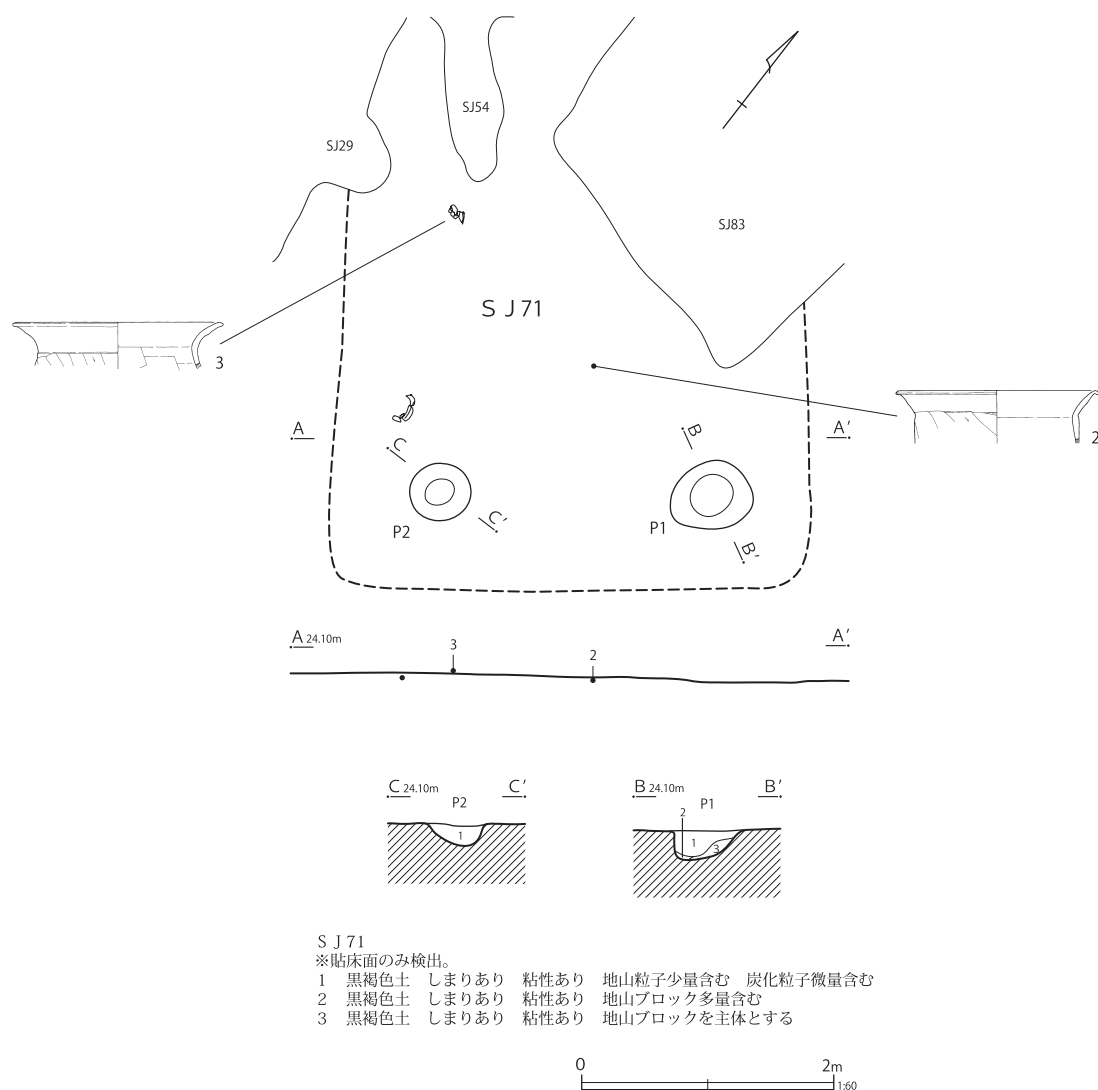
L・M-17グリッドに位置する。第29・54・83

号住居跡と重複している。床面が削平され、柱穴のみを検出した。他の遺構の覆土に第71号住居跡との重複関係が認められなかったため、それらより古いと考えられる。非常に不明瞭だが、遺構確認段階で薄く確認できた範囲を、床面として認定した。

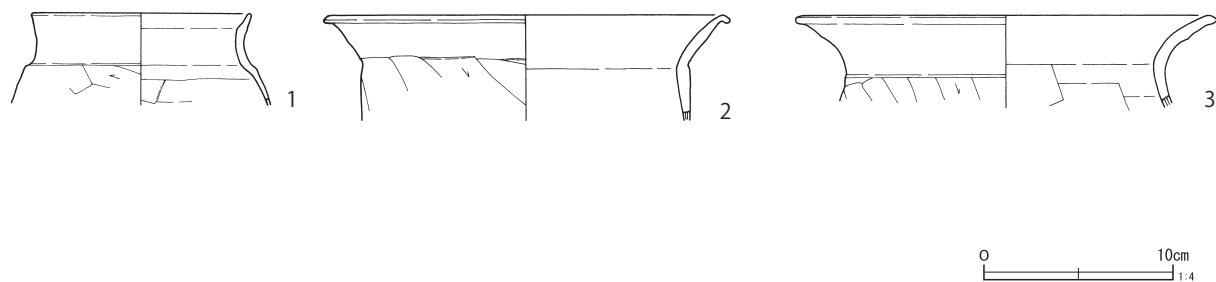
平面形は方形と考えられるが、北西側は他の住居跡と重複するため、範囲を確定できなかった。

推定される規模は、南東辺が3.85m、南西辺は他の住居跡と重複するため、3.15m以上になると考えられる。南西片の方位はN-35°-Wである。

掘り込みが確認できなかったため、カマドや貯蔵穴は検出されなかったが、柱穴と考えられる



第 81 図 第 71 号住居跡遺物出土状況



第 82 図 第 71 号住居跡出土遺物

第 26 表 第 71 号住居跡出土遺物観察表（第 82 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(11.3)	[4.9]	—	C E G H I	15	普通	にぶい褐	一括 内外面煤付着	48-2
2	土師器	甕	(20.6)	[5.6]	—	C E G H	20	普通	明赤褐	No. 3	48-2
3	土師器	甕	(21.2)	[4.9]	—	C D E G H	20	普通	赤褐	No. 2	48-2

ピット 2 基が検出された。

P 1 は楕円形で、規模は長軸 0.63m、短軸 0.54m、深さは 0.09m である。P 2 は円形で、規模は径 0.46m、深さは 0.06m である。覆土は黒褐色土で、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器坏・甕、須恵器の細片が少量出土したのみである。

第 71 号住居跡の所属時期は、重複する遺構との関係から 7 世紀中葉以前と考えられる。

第 71 号住居跡出土遺物（第 82 図）

出土遺物は、いずれも土師器の甕である。胎土には砂粒、角閃石の混入が目立ち、利根川流域の粘土が用いられていると考えられる。

1～3 は甕である。1 は口縁部が短く外反し、胴部は肩が張る形態である。頸部下には横方向のヘラケズリが施されている。2・3 は大きく外反する口縁部に、直線的な胴部が付く。頸部下のヘラケズリは斜め方向である。内面は横方向のヘラナデが施されている。

第 72 号住居跡（第 83 図）

L-16・17 グリッドに位置する。第 29・54・80 号住居跡、第 37 号土壇、第 12 号溝跡と重複し、第 80 号住居跡より新しく、他の遺構より古い。西側

は第 12 号溝跡によって、南側は第 29 号住居跡によって大きく壊されており、全体に削平されて壁は殆ど立ち上りがなく、床面あるいはその痕跡で範囲が確認できたのみである。掘り込みが残っていたのはカマド部分のみである。

平面形は、方形になると考えられる。

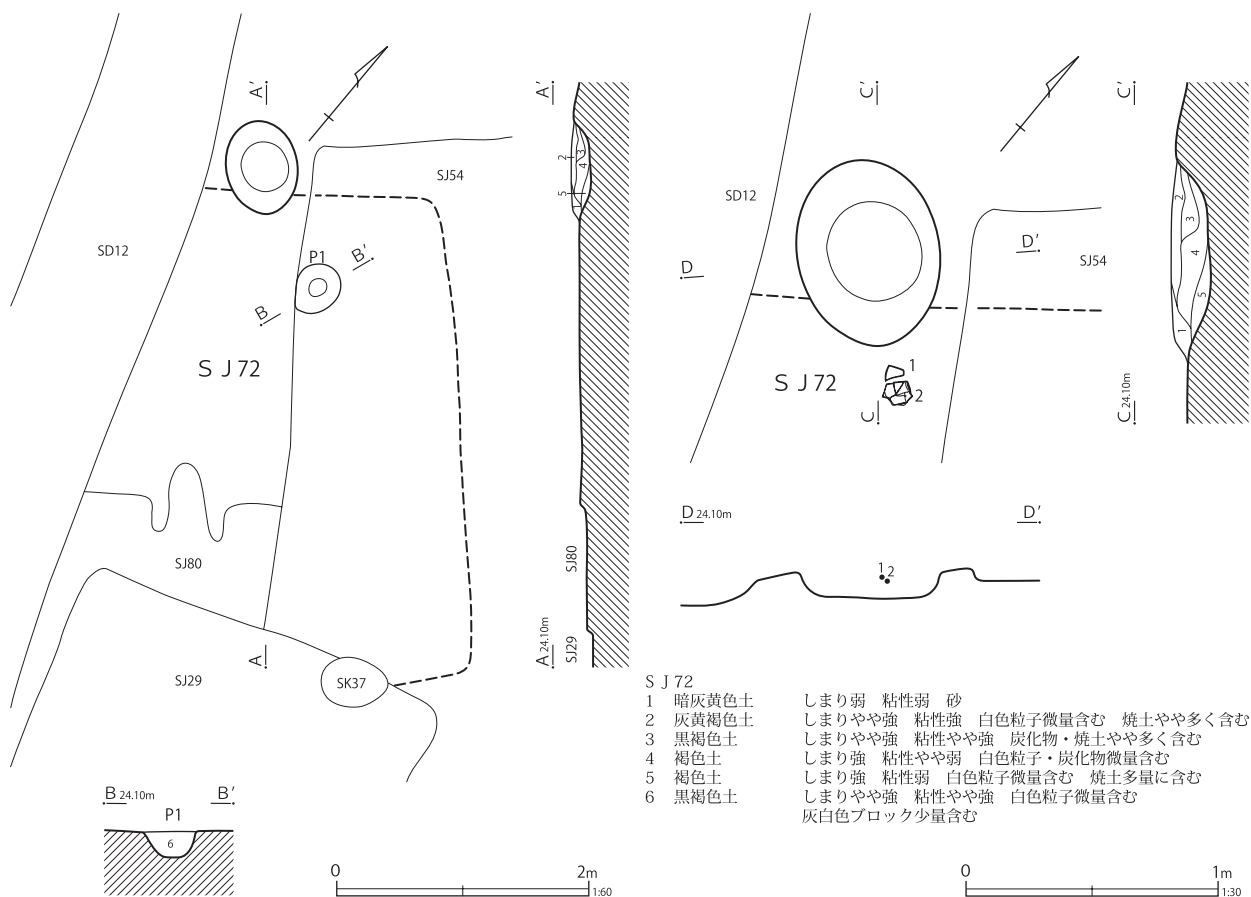
推定される規模は、北東辺が約 4m、北西辺は約 2m である。主軸方位は、N-41°-W と推定した。

カマドは北西辺に構築され、燃焼部のみが残っていた。楕円形の掘り込みで、長軸 0.75m、短軸 0.60m、深さは 0.17m である。覆土は灰層が判然としないが、全体にカマド構築土と考えられる白色粒子を含んでおり、第 2・3 層が天井部の崩落土、第 4 層が煙道からの流れ込みの可能性がある。

床面の状況は不明だが、推定される範囲からピットを 1 基検出した。不整形で、長径 0.42m、短径 0.35m、深さは 0.20m である。覆土は灰白色粘土を含む黒褐色土である。

出土遺物は、カマド脇やピットから土師器甕などの小破片が少量出土したのみである。

第 72 号住居跡の所属時期は、遺構の重複関係から、7 世紀中葉以前に位置づけられる。



第 83 図 第 72 号住居跡

第77号住居跡（第84図）

H-17・18グリッドに位置する。第39号土壌と重複し、これより古い。

平面形は、各辺が直線的で形の整った長方形である。規模は、長軸4.05m、短軸3.70mである。検出した時点で上面はかなり削平されていたため、床面が露出した状態であった。深さは最も深い箇所、0.03mほどが確認できたのみである。北東辺を基準とした方位は、N-45°-Wである。

覆土は、炭化物を含む黒褐色土である。

床面は、ほぼ平坦である。壁溝や貯蔵穴は検出されなかったが、ピットが5基検出された。配置からP1～P4が支柱穴と考えられる。P5は入口部の施設である可能性がある。各柱穴の規模は、P1が径0.30m、深さ0.33m、P2が径0.24m、深さ0.36m、P3が径0.25m、深さ0.27m。P4が径0.33m、深さ0.30m。P5が径0.22m、

深さ0.21mである。褐灰色土の第2層が柱痕、第4～6層が掘り方の埋め土と考えられる。

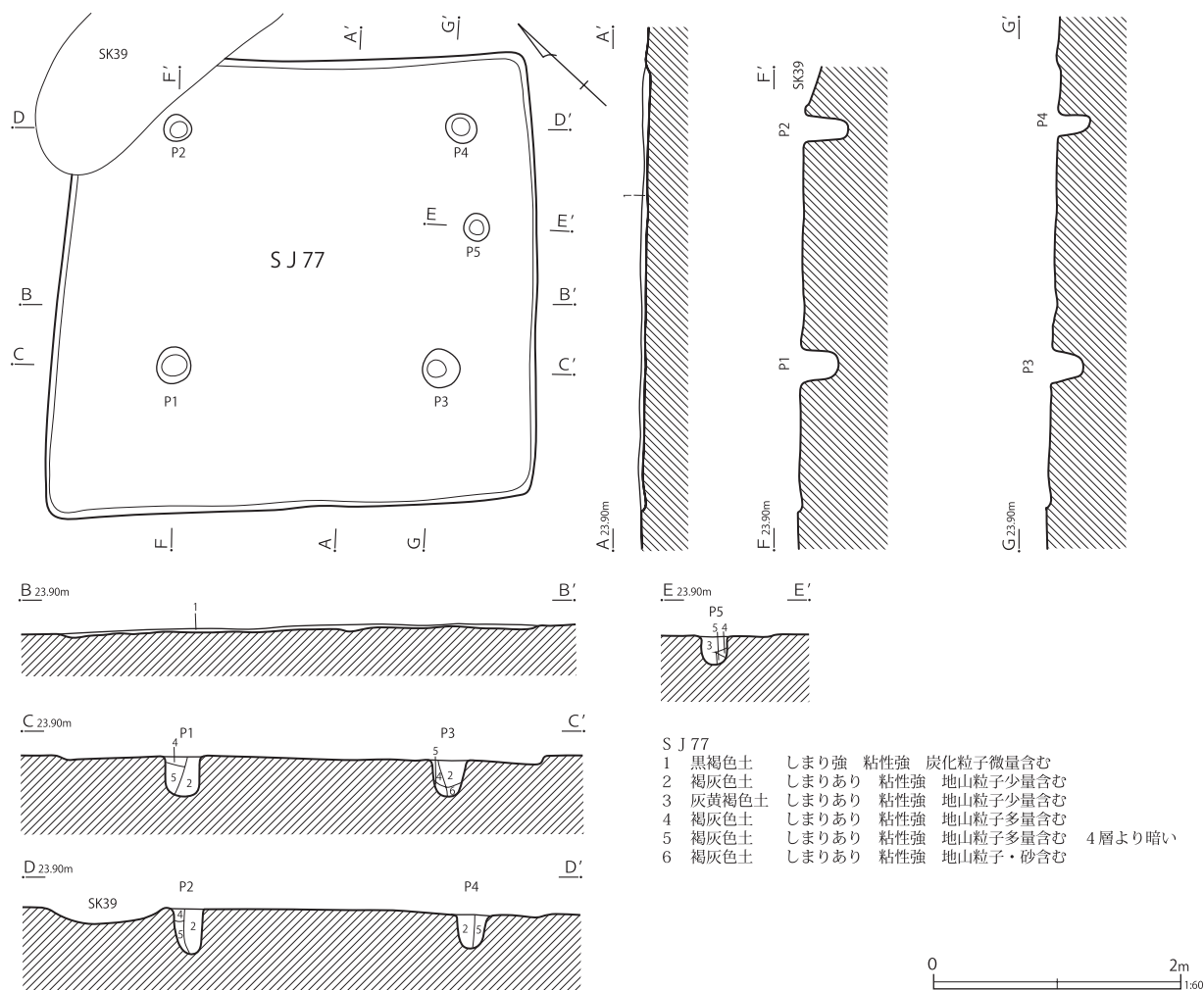
カマドは検出されなかった。第39号土壌によって壊されているのはごく一部であり、通常は壊された部分にカマドが構築されることは殆どないことから、第77号住居跡はカマドが構築される以前の時期である可能性が考えられる。

遺物は出土しなかったが、平面形態から古墳時代前期に遡る可能性がある。

第79号住居跡（第85図）

P-18グリッドに位置する。第31号住居跡、第3号溝跡と重複し、本遺構が最も古い。住居の中央を第3号溝跡が南北に横切っている。南西コーナーは、第31号住居跡によって、東側は調査区域外にかかる。

平面形はカマドの軸方向に沿った長方形である。規模は、主軸長2.50m、直交軸長1.79m、深さは



0.04mである。主軸方位はN-76°-Wになるが、カマドの軸を基準とした場合は、N-104°-Eになる。

検出した段階で上部がかなり削平されており、覆土はほとんど認められず、褐灰色土（第3層）の掘り方の埋土が残っているような状況であった。

床面からは、壁溝や貯蔵穴は検出されなかったが、3基のピットが検出された。P1・2は柱穴、P3は壁にかなり近いため、その他の性格が考えられる。P1はやや楕円形で、径0.15m、深さは0.05mである。P2は円形で、径0.17m、深さは0.06mである。P3はやや楕円形で、径0.17m、深さは0.07mである。

カマドは東壁の中央よりやや北寄りに構築され

ていた。袖は、左側が約0.15m残存していた。部分的であるため、カマド全体の構築方法は不明だが、検出範囲は削り出しであった。煙道部が失われているため詳細は不明だが、燃烧部は住居の壁が中央にかかる位置になると考えられる。残存長は0.62m、燃烧部の幅は0.36mである。煙道へは段を持たず、なだらかに移行する。

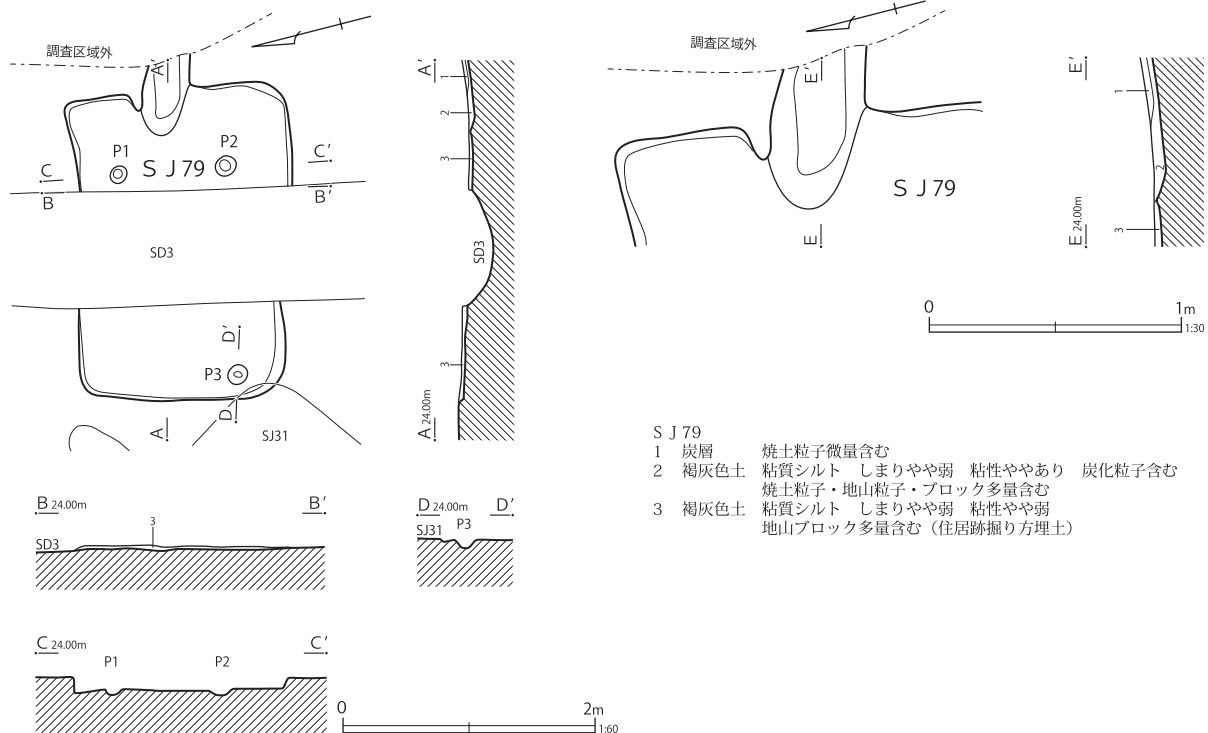
袖から煙道にかけての壁面、床面の焼土化は不明瞭であった。

遺物は、出土しなかった。

第79号住居跡の所属時期は、重複関係から7世紀中葉以前に位置づけられる。

第80号住居跡（第86図）

L-16・17グリッドに位置する。重複する第



第 85 図 第 79 号住居跡

29・54・72号住居跡、第12号溝跡より古い。東西と南側を他の住居跡によって壊されており、カマドとその周辺のみが残存していた。

平面形は不明であるが、方形ないしは長方形と考えられる。

残存する北西辺の長さは1.74mである。深さは最深部で0.04mである。主軸方位はN-47°-Wである。

覆土は白色粒子、炭化物を含む灰黄褐色土、暗褐色土で、自然堆積と考えられる。

床面に壁溝やピットなどは検出されなかった。

カマドは北西壁の中央と思われる位置に構築されていた。壁に対してやや斜めに設置されている。上面が削平されており、検出できたのは燃烧部と袖のみで、煙道は削平されたと考えられる。

袖は両袖を検出した。残存状態はあまりよくなかったが、右袖は長さ0.29m、左袖は0.28mである。地山の削り出しではなく、覆土中にみられる

白色の粘土を用いて造られたと考えられる。燃烧部は楕円形の掘り込みで、住居の壁が中央にかかる位置に設けられている。燃烧部の長さは0.64m、幅は0.31m、床面からの深さは0.10mである。覆土は天井部の崩落土、灰層は判然としないが、第4層が火床面、第5層がカマド掘り方の埋め土の可能性はある。袖の内側から燃烧部にかけて、被熱のため焼土化が進み、赤化していた。

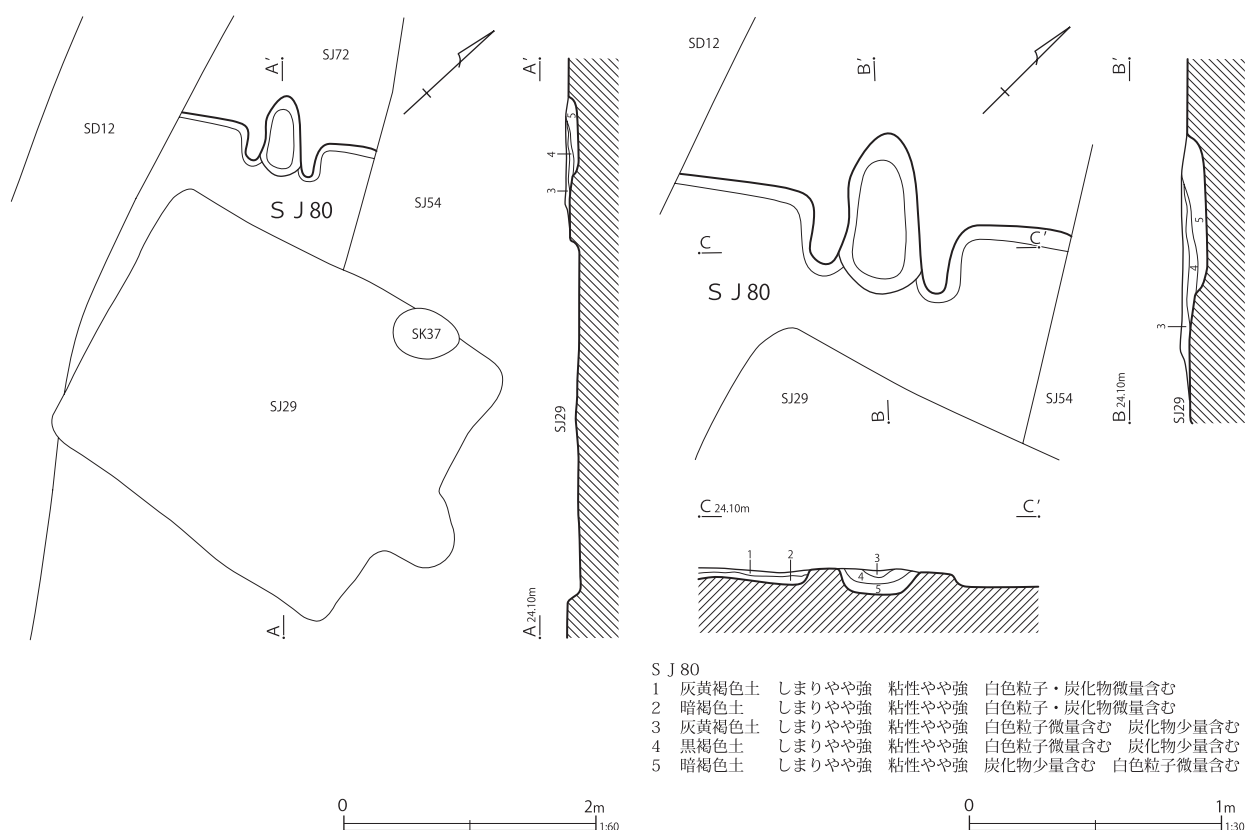
遺物は、土師器および須恵器の細片がごくわずかに出土したのみで図示できるものはない。

第80号住居跡の所属時期は、第54号住居跡との重複関係から7世紀と考えられる。

第81号住居跡（第87・88図）

C・D-15グリッドに位置する。第82号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。ほぼ同一の位置に、同様の平面形態で重複するため、第81号住居跡は第82号住居跡の拡張、建て直しと考えられる。

検出した段階でかなり削平され、床面がほとんど



第86図 第80号住居跡

ど出た状態であったため、掘り下げられたのは貼床、もしくは掘り方の埋め土と考えられる。

平面形は方形である。規模は、主軸長が3.82m、直交軸長が3.94mである。掘り方の深さは、深いところで0.10mである。主軸方位は、N-33° - Wである。

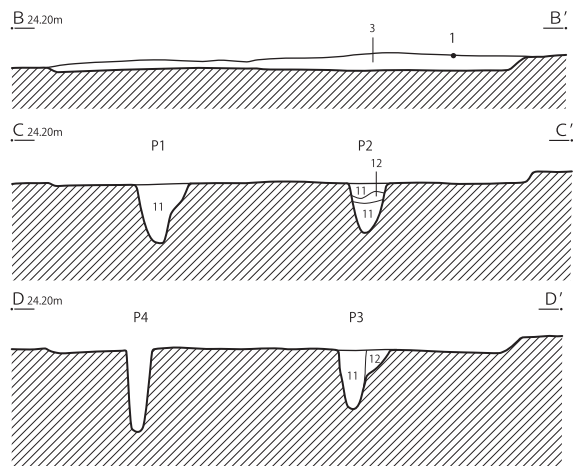
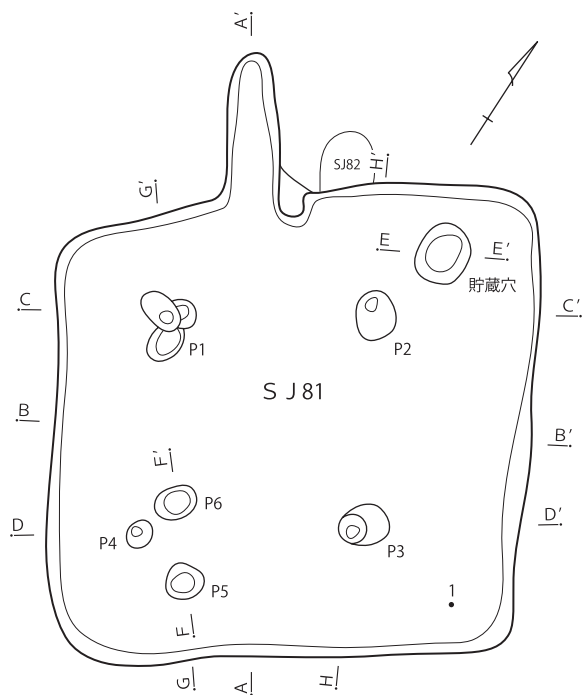
床面に削平が及んでいるため、全体の状況は不明であるが、壁溝は検出されず、貯蔵穴とピットが検出された。掘削した範囲は貼床と考えられる。埋め土は、炭化物・焼土を含む褐灰色シルトの単層である。

ピットは8基検出された。分布状況からP 1～4が主柱穴と考えられる。P 1とP 6は、周囲に2基のピットがあり、建て替えの可能性があり。平面形態は略円形、もしくは不整楕円形である。各ピットの規模は、P 1が長径0.35m、短

径0.22m、深さ0.46m、P 2が径0.36m、深さ0.36m、P 3が長径0.41m、短径0.32m、深さ0.39m、P 4が径0.24m、深さ0.58m、P 5が径0.28m、深さ0.10m、P 6が長径0.34m、短径0.25m、深さ0.07mである。覆土は地山ブロックを含む黒褐色土が主体で、第11層が柱抜き取り痕と考えられる。

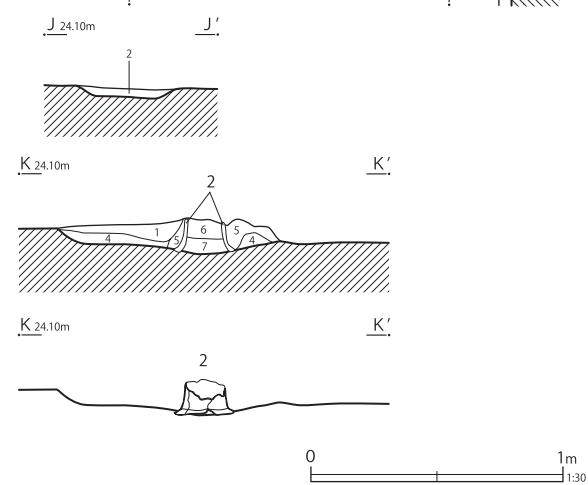
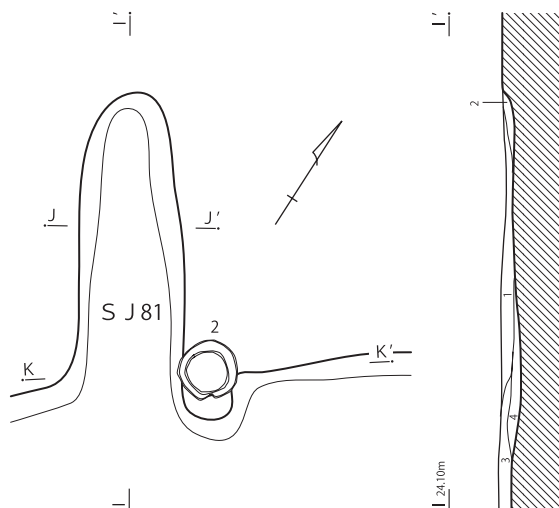
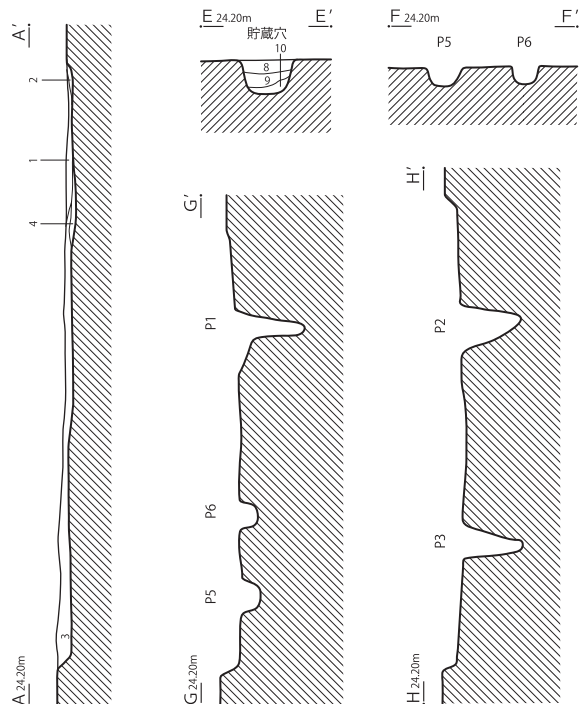
貯蔵穴はカマドに向かって右側に掘られていた。やや小規模で壁からも離れているため、貯蔵穴ではない可能性がある。平面形態は隅丸長方形で、規模は長径0.48m、短径0.41m、深さは0.26mである。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。覆土は褐色系の粘質土で地山粒子を多く含む。自然堆積である。遺物は出土しなかった。

カマドは、北壁のやや西寄りに構築されていた。燃焼部は住居の壁より、外側にある。規模は、全

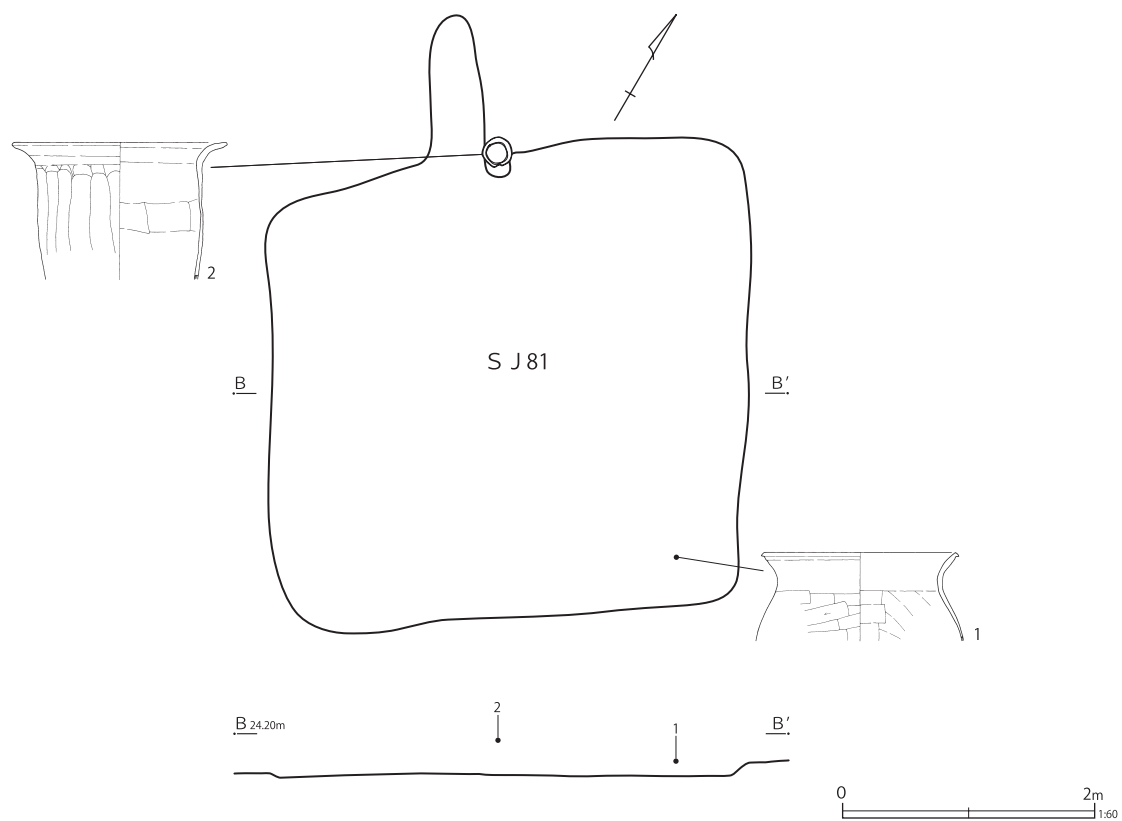


S J 81

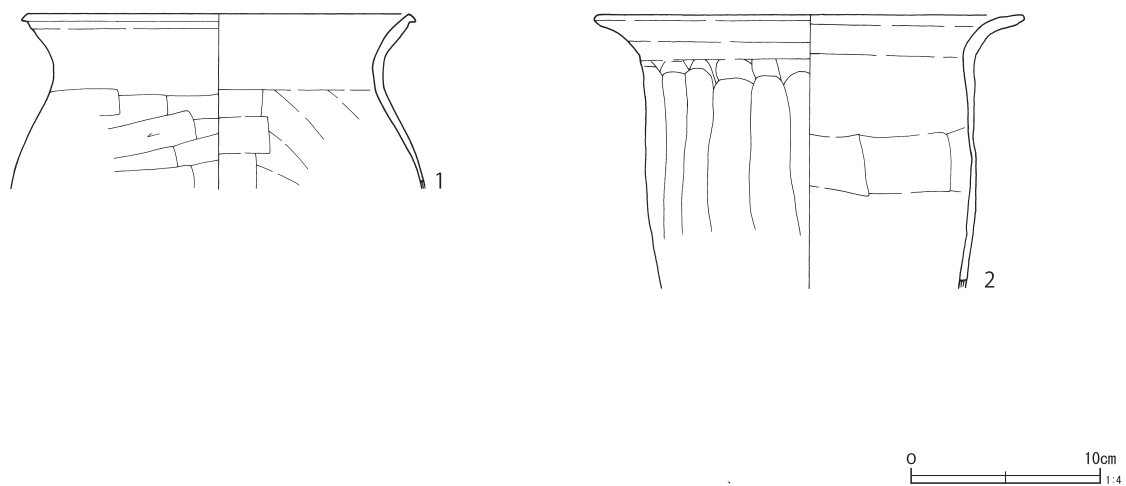
- | | |
|------------|---|
| 1 炭層 | 焼土粒子多量含む (カマド埋土) |
| 2 灰黄褐色土 | 粘質シルト しまりややあり 粘性ややあり
炭化粒子・焼土粒子多量含む (カマド埋土) |
| 3 褐灰色土 | 粘質シルト しまりあり 粘性ややあり |
| 4 褐灰色土 | 炭化粒子・焼土粒子微量含む
シルト しまり弱 粘性ややあり (地山) 酸化鉄含む
やや砂質 |
| 5 黒褐色土 | 粘質シルト しまり強 粘性あり 地山粒子多量含む
炭化粒子少量含む |
| 6 黒褐色土 | 粘質シルト しまり強 粘性あり 焼土粒子・地山粒子多量含む |
| 7 灰黄褐色土 | 粘質シルト しまり強 粘性あり 地山粒子多量含む |
| 8 黒褐色土 | 粘質土 地山粒子多量含む |
| 9 黒褐色土 | 粘質土 地山粒子多量含む やや砂質 |
| 10 灰黄褐色土 | 砂質 砂粒子多量含む |
| 11 黒褐色土 | 粘質土 地山ブロック多量含む |
| 12 にぶい黄褐色土 | 砂質 砂粒子多量含む |



第 87 図 第 81 号住居跡・遺物出土状況 (1)



第 88 図 第 81 号住居跡遺物出土状況（2）



第 89 図 第 81 号住居跡出土遺物

第 27 表 第 81 号住居跡出土遺物観察表（第 89 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(20.0)	[9.3]	—	EH	20	普通	橙	No. 1	—
2	土師器	甕	22.3	[14.5]	—	ADEGHK	70	普通	橙	カマド袖No. 1	45-1

長が1.40m、燃焼部の幅が0.44mである。袖は左側は検出されなかったが、右袖は約0.15m残存していた。褐灰色、黒褐色、灰黄褐色の粘質シルトを貼り付けて造られており、更に土師器甕が補強材として使用されていた。この甕は住居の壁と同じ位置に伏せて据えられていたため、本来は同様の粘土を用いて、更に内側に造り出されていたと推定される。そのため、焚口部は住居の壁よりわずかに内側に設けられていたと考えられる。

燃焼部は掘り込みが殆どなく、煙道との境は不明瞭であるが、土層断面の炭層の堆積範囲がやや細くなることから、ほぼ残存している袖の位置までが燃焼部と考えられる。長さは約0.6mである。第1層の炭化物層が使用時に機能していた面と考えられることから、燃焼部の底面は、実際の床面からは数cm以上下がっていたと考えられる。

煙道は、長さ約0.8m、幅は0.45mで燃焼部からほぼ同じ幅で続き、先端部は0.28mと徐々に細くなる。奥壁は残存していなかった。

袖や燃焼部の壁面、床面に、被熱はほとんど認められなかった。

遺物は、カマドの補強材として用いられた甕のほかは、住居跡東隅から土師器甕の破片が出土したのみである。

第81号住居跡の所属時期は、カマド袖に使用されていた長胴甕の形態的特徴から7世紀後半に位置づけられる。

第81号住居跡出土遺物（第89図）

出土遺物は、いずれも土師器の甕である。胎土には砂粒、白色粒子、赤色粒子の混入が目立つ。

1は口縁部が短く外反し、胴部は肩が張る形態である。頸部下には横方向のヘラケズリが施されている。2は大きく外反する口縁部に、直線的な胴部が付く。頸部下のヘラケズリは縦方向である。両者とも内面は横方向のヘラナデが施されている。

第82号住居跡（第90・91図）

C・D-15グリッドに位置する。第81号住居跡

と重複しこれより古い。第81号住居跡の項で述べたように、第82号住居跡は第81号住居跡の建て替え前と考えられる。

平面形は方形を基調とするが、北壁はカマドを境にして壁面が一段外側にある。更に北東コーナーの部分が一段突出している。検出された深度がほとんどなく、床面に近いので、棚状施設ではないと考えられる。

規模は、主軸方向3.46m、直交軸方向3.32mである。拡張のため、ほとんど深度がなく、残存していたのは深さ0.10mほどである。主軸方位はN-34°-Wである。

覆土は、灰黄褐色の粘質シルトのみが残存していた。

床面は比較的平坦であるが、壁溝やピットなどの施設は確認されなかった。

カマドは、北壁の中央から僅かに東寄りに構築されていた。袖は確認されなかった。全長は1.25mで、燃焼部の幅は0.31mとやや狭い。燃焼部の中央が壁にかかる位置になる。燃焼部は長方形の掘り込みで、長さは0.58mで、床面からの深さは0.04mと浅い。覆土は第3層が灰層で、使用により形成されたと考えられる。底面は、煙道に向かって緩やかに上がり、わずかな段を介して煙道へ続く。煙道は長さ0.67mで、幅は燃焼部とほとんど変わらず、煙出しに至る。底面は先端に向かってごく緩やかに上がっており、更に連続する可能性がある。

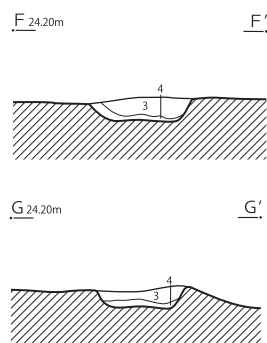
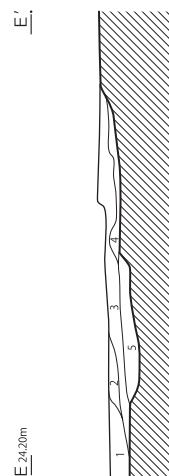
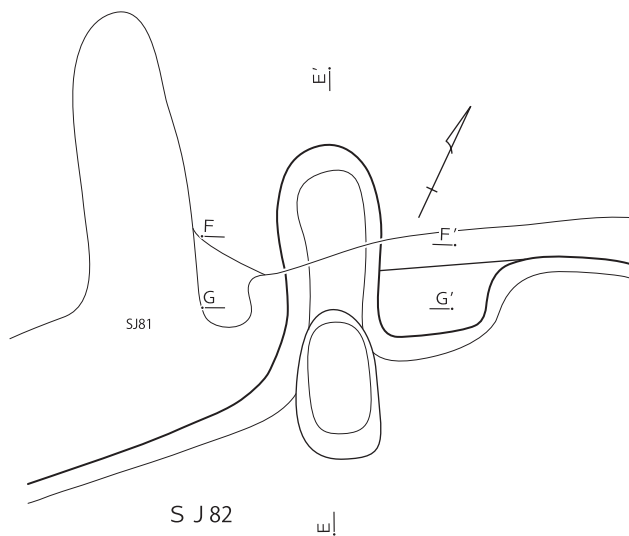
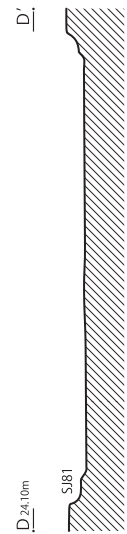
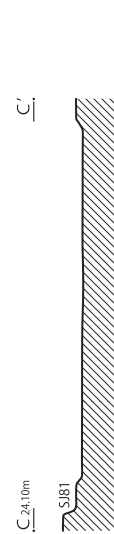
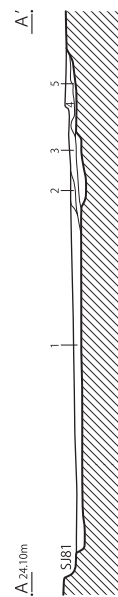
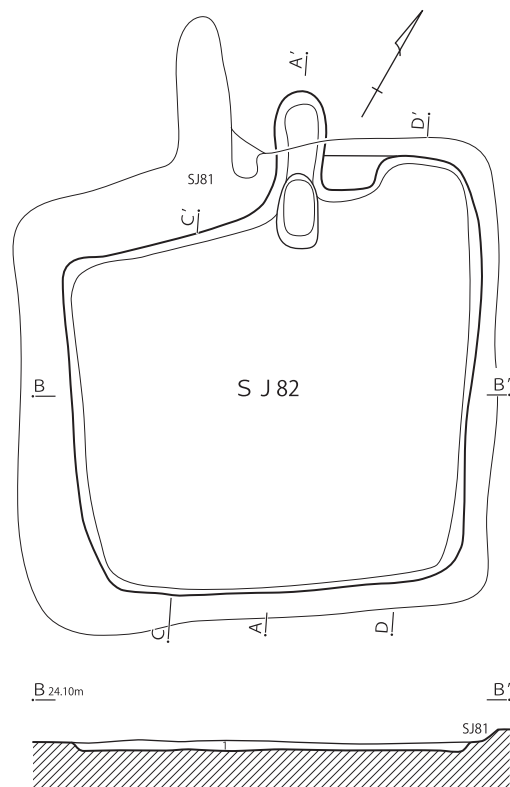
袖や燃焼部の壁面、床面に、被熱はほとんど認められなかった。

遺物は、須恵器、土師器の小破片が少量出土したのみである。

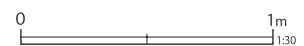
第82号住居跡の所属時期は、重複する第81号住居跡より古い7世紀中葉以前に位置づけられる。

第82号住居跡出土遺物（第92図）

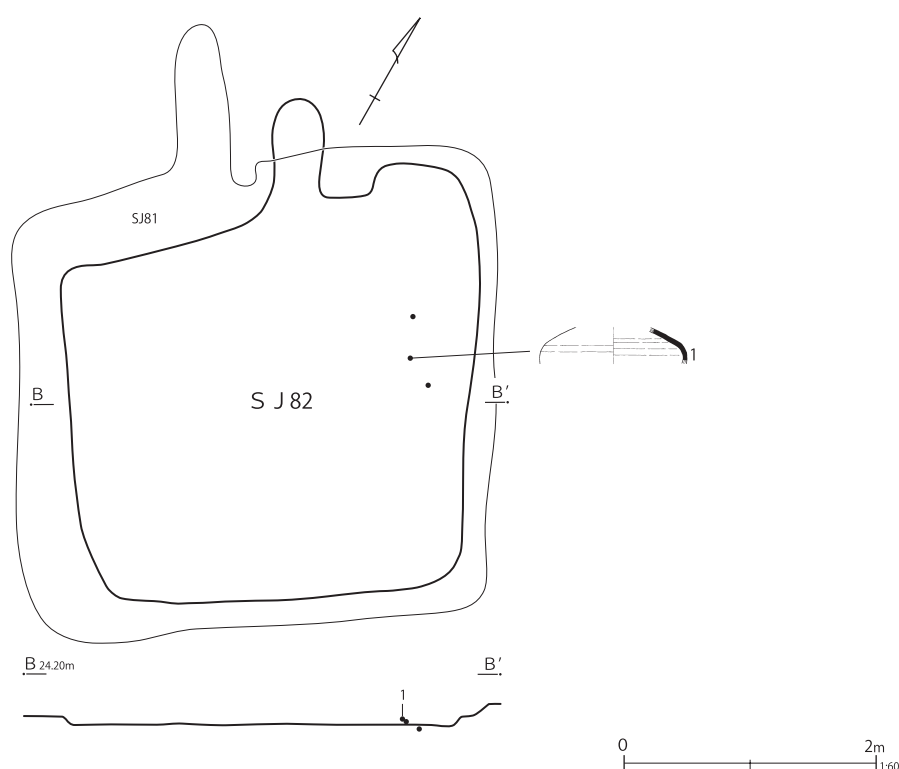
1は須恵器の瓶類である。肩に灰と窯壁片が付着する。湖西産である。



- S J 82
- | | | | | | |
|---|-------|---------|---------|--------|-------------------------|
| 1 | 灰黄褐色土 | 粘質シルト | しまりあり | 粘性ややあり | 炭化粒子微量含む |
| 2 | 灰黄褐色土 | 粘質シルト | しまりあり | 粘性ややあり | 炭化粒子・焼土粒子含む |
| 3 | 黒褐色土 | 粘質シルト | しまりやや弱 | 粘性弱 | 炭化粒子・灰・焼土粒子極多量含む |
| 4 | 褐灰色土 | 粘質シルト | しまりややあり | 粘性ややあり | 炭化粒子・焼土粒子少量含む |
| 5 | 褐灰色土 | 砂質土+粘質土 | しまりあり | 粘性弱 | 褐灰色の粘質土に砂質土ブロックが多量に混入する |



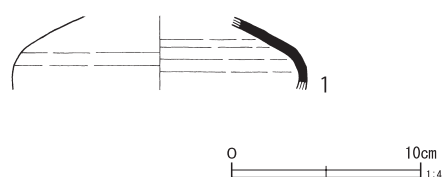
第 90 図 第 82 号住居跡



第 91 図 第 82 号住居跡遺物出土状況

第 28 表 第 82 号住居跡出土遺物観察表 (第 92 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	瓶	—	[3.8]	—	H I K	20	普通	灰白	B・No.2 湖西産	48-2



第 92 図 第 82 号住居跡出土遺物

第83号住居跡 (第93図)

L・M-17グリッドに位置する。第26・71・78号住居跡と重複し、第26・78号住居跡より古い。第71号住居跡との新旧関係は不明である。北側の大半を重複する住居跡によって壊されている。

平面形は、方形ないしは長方形と考えられる。

規模は、東西方向2.60m、残存していた南北方

向は1.42mである。深さは0.05mである。東辺の方位はN-10°-Eである。

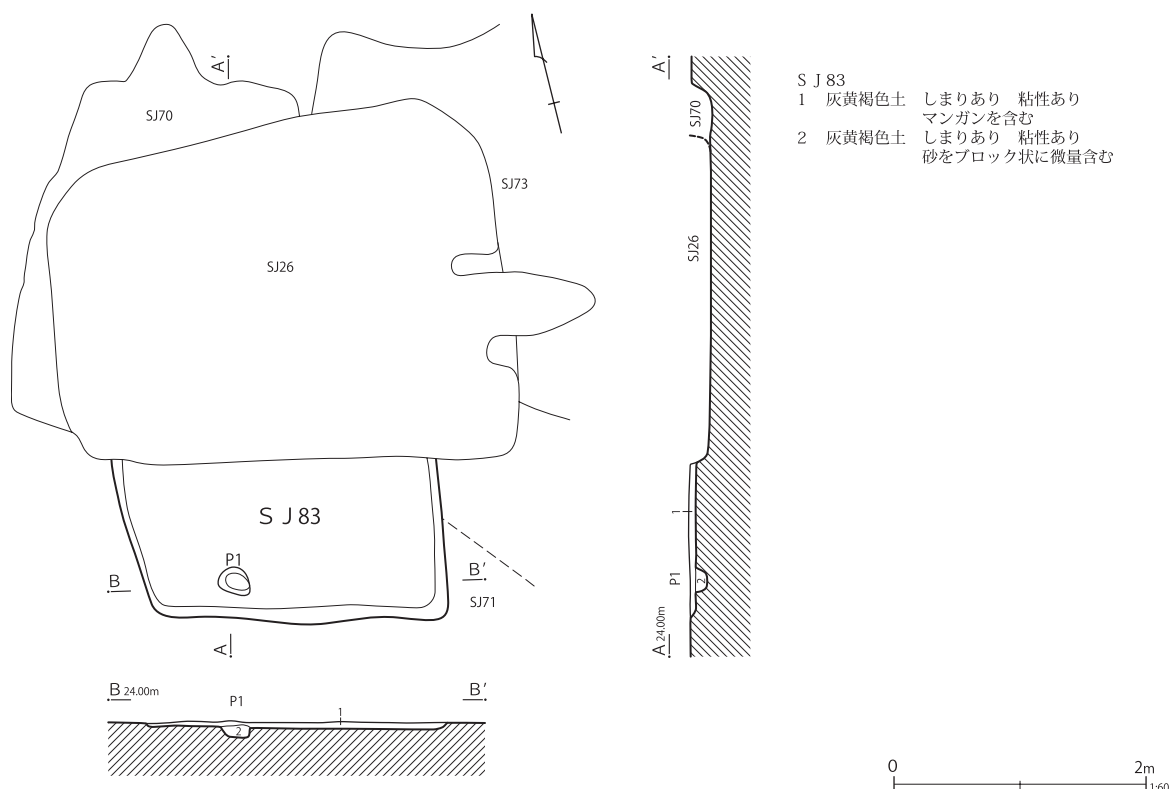
覆土は灰黄褐色土の単層である。

床面は比較的平坦であるが、壁溝やピットなどの施設は確認されなかった。

南壁際からピット1基が検出された。平面形は不整楕円形、長径0.27m、短径0.21m、深さは0.09mである。覆土は砂を含む灰黄褐色土である。

出土遺物は、土師器の細片がごく少量出土したのみで図示できるものはない。

第83号住居跡の所属時期は、遺構の重複関係、平面形態の様相から7世紀としておきたい。



第 93 図 第 83 号住居跡

(2) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、主に調査区南側の竪穴住居跡が密集する範囲に、他の遺構と重複して分布している。第5号掘立柱建物跡は、調査区北側で検出したが他の建物跡に比して柱穴規模が小さく、時期が新しい可能性がある。

第1号掘立柱建物跡 (第94図)

R-18グリッドに位置する。第2号掘立柱建物跡、第32号住居跡と重複し、第1号掘立柱建物跡が新しい。第2号掘立柱建物跡と位置が僅かにずらされており、建て替えと考えられる。

東西方向の建物と考えられるが、検出できたのは東側2間と北側1間分で、西側は調査区外(第26次調査区)に延びている。建物の企画は梁行2間、桁行2間以上と想定される。方位は、北側の桁行が、N-76°-Eである。柱間は梁行が、北から2.14m、1.94m、桁行は2.14mである。

柱穴の平面形は、不整な楕円形や土壌を二つ繋げたような形態である。柱抜き取りの作業に伴う

平面形と考えられる。柱穴の規模は、長径0.79～1.06m、短径0.59～0.73m、深さは0.46～0.61mである。P1は調査区域外にかかるため、残存値である。

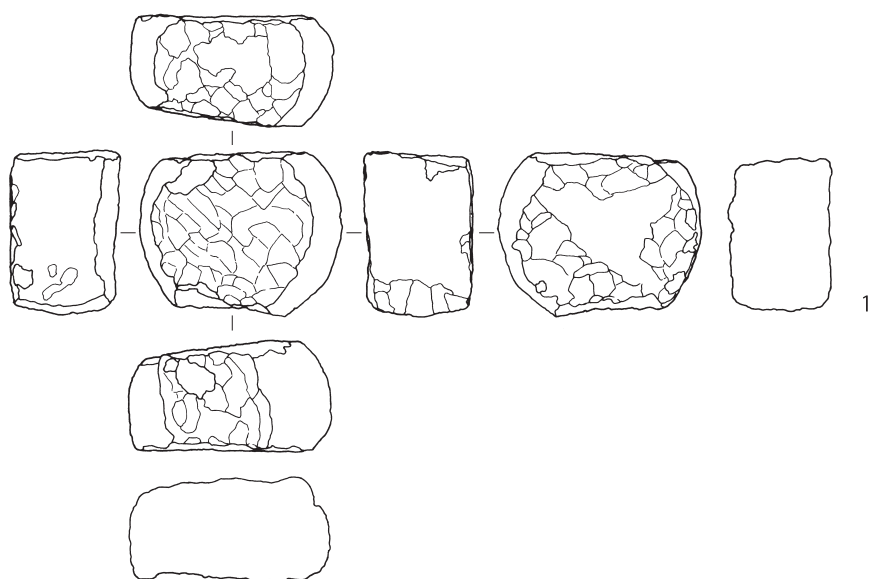
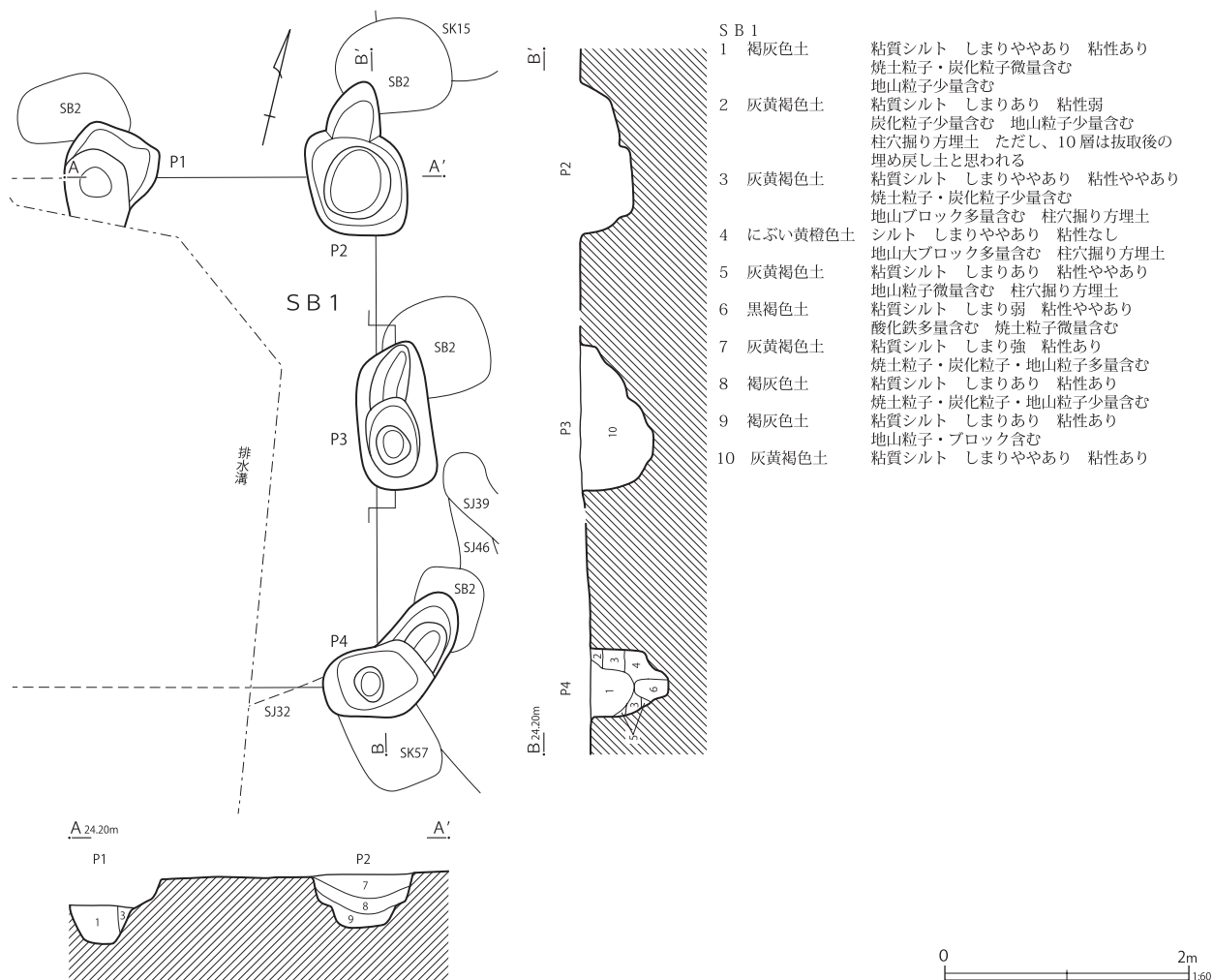
覆土は、P2～P4で、柱の抜き取り痕が認められた。第2層から第5層までは掘り方埋土と考えられる。第1・6層は抜き取り後の堆積層と考えられる。P3の灰黄褐色土は、柱抜き取り後に一度に埋め戻されたものである。

遺物は、P1から土師器甕の胴部や坏の破片が出土した。また、角閃石安山岩製の砥石が出土しており、根石として使われた可能性も考えられる。P3・P4からは土師器甕の小片が出土した。

時期は、重複関係と他の建物跡との関係から、7世紀と考えられる。

第1号掘立柱建物跡出土遺物 (第95図)

1は角閃石安山岩製の砥石である。上下、表裏は加工され、側面が平滑で使用面と考えられる。



第 29 表 第 1 号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第 95 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	石製品	砥石	長さ 17.3	幅 21.6	厚さ 11.6	重さ 3188.1 g				P 1 角閃石安山岩 完形	51-4

第 2 号掘立柱建物跡（第96図）

R-18グリッドに位置する。第 1 号掘立柱建物跡、第32号住居跡、第15号土壌と重複し、第 1 号掘立柱建物跡、第15号土壌より古く、2 軒の住居跡より新しい。前述のように、第1号掘立柱建物跡の建て替え前の建物と考えられる。

東西方向の建物と考えられるが、検出したのは東側 2 間と北側 1 間分で、西側は調査区外（第26 次調査区）に延びている。建物の規模は梁行 2 間、桁行 2 間以上と想定される。方位は、北側の桁行が N-70° -E である。柱間は梁行が、北から 2.16m、2.22m、桁行は 2.38m である。

柱穴の平面形は、不整な楕円形である。柱穴の

規模は、長径 0.79~1.06m、短径 0.59~0.82m、深さは 0.37~0.88m である。

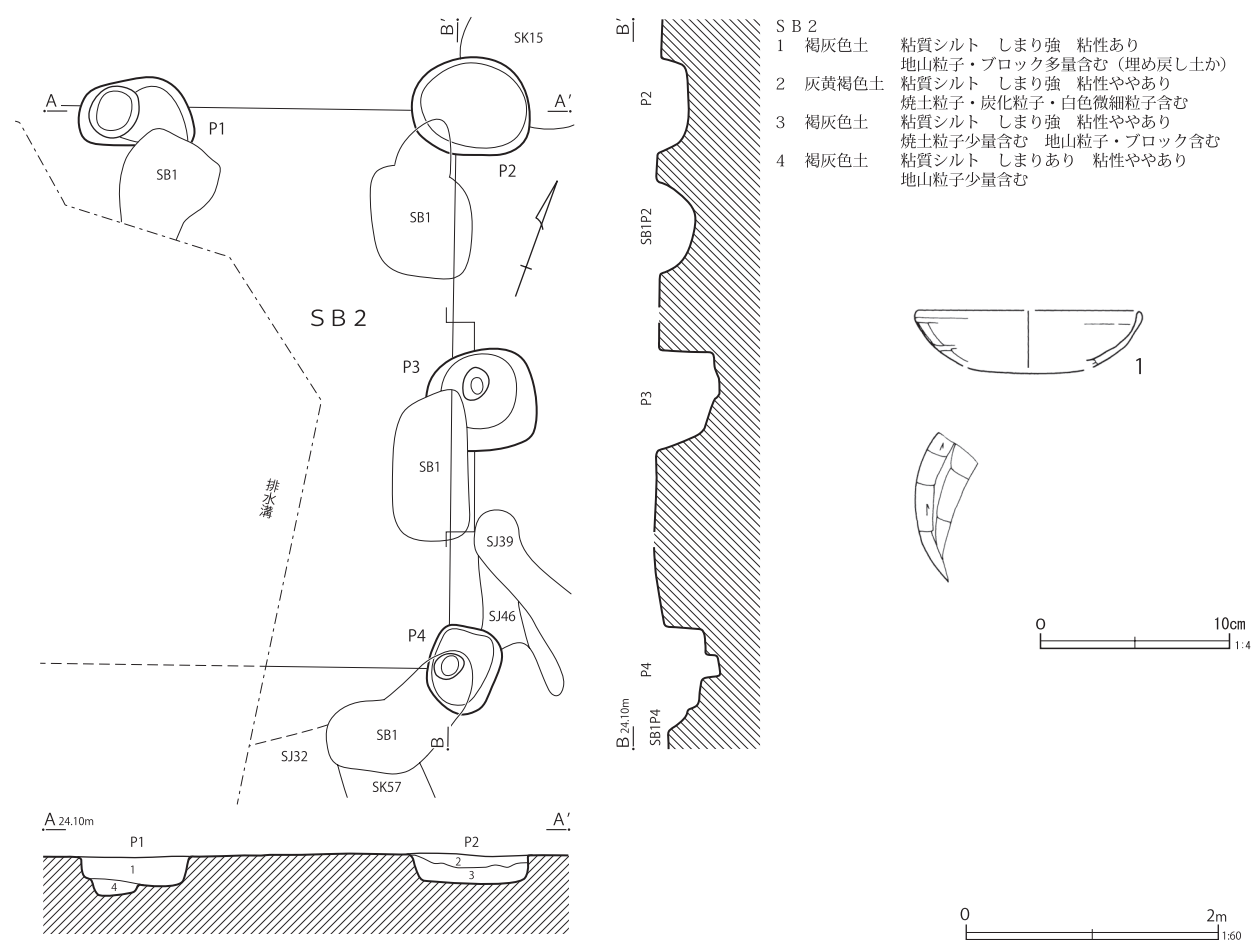
柱穴の覆土は、第 1 層が地山ブロックを多く含む。明確に抜き取り痕は確認できなかったが、全体が埋め戻されている印象を受ける。各柱穴は、第 1 号掘立柱建物跡の柱穴と重複し、部分的に壊されていた。

遺物は、P 2~4 から土師器甕・坏、須恵器甕の小破片が出土した。

時期は、重複関係と、P 3 出土の北武蔵型坏から古墳時代末から古代と推定される。

第 2 号掘立柱建物跡出土遺物（第96図）

1 は北武蔵型坏である。胎土には角閃石、砂粒、



第 96 図 第 2 号掘立柱建物跡・出土遺物

第30表 第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第96図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.6)	[3.0]	—	CGH	20	普通	橙	P 2	45-2

赤色粒子が多くみられる。風化が進み、調整は不明瞭である。

第3号掘立柱建物跡（第97・98図）

N・O-17・18グリッドに位置する。第13・14・21号住居跡、第1・3・5・6・12号溝跡と重複し、第3号掘立柱建物跡が最も古いと考えられる。

北北西から南南東方向の建物で、桁行4間、梁行2間である。方位は南西側の桁行でN-34°-Wである。建物の規模は、北東側桁行が9.83m、南西側がやや広く9.58m、梁行は北西側が5.65m、南東側は5.56mである。各柱穴底面には、所謂「当たり」が比較的明瞭に認められた。柱間は北東側桁行が北から2.55m、2.56m、2.31m、2.41m、南西側桁行が北から2.50m、2.24m、2.41m、2.43mである。北側梁行は西から2.70m、2.95m、南側は2.70m、2.86mである。

柱穴は、重複する遺構により上部を壊されているものが多く、原形をとどめているものは殆どない。平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形である。

P6・8・9には柱材が残存していた。柱材の樹種は、いずれもヒノキである（第V章参照）。

柱穴の平面形は、様々な形の不整な楕円形である。規模は、各柱穴の残存する規模は、長径が0.56～1.06m、短径が0.44～0.80m、深さは0.26～0.79mである。

遺物は、P1から石製紡錘車が出土した。他に土師器坏・甕の小片が出土している。

時期は、7世紀の住居跡より古いため、7世紀以前と考えられる。

第3号掘立柱建物跡出土遺物（第98図）

1は滑石製の紡錘車である。断面形は台形で、上下、側面に丁寧な研磨痕がみられる。特に側面が顕著である。石材は風化し、白色化している。

第4号掘立柱建物跡（第99図）

O-17・P-16・17グリッドに位置する。第3・10・22・50号住居跡、第10号溝跡と重複し、第4号掘立柱建物跡が最も古い。第3号住居跡の床面の精査中にP1の存在を確認した。

検出できたのは柱穴4基である。P1～P3は東西方向の2間分で梁方向と考えられる。方位はN-46°-Wである。柱間は、北から2.28m、2.46mである。北側は1間分で柱間は2.60mである。

柱穴の平面形は、隅丸方形と思われるが、P1は掘り上がりの形状から柱を抜き取られた結果の形態の可能性がある。各柱穴の規模は、P1が長径が0.68～1.06m、短径が0.49～0.74m、深さ0.37～0.62mである。

遺物は、土師器甕の小片が出土したが図示できるものはない。

時期は、重複関係から7世紀以前と考えられる。

第5号掘立柱建物跡（第99図）

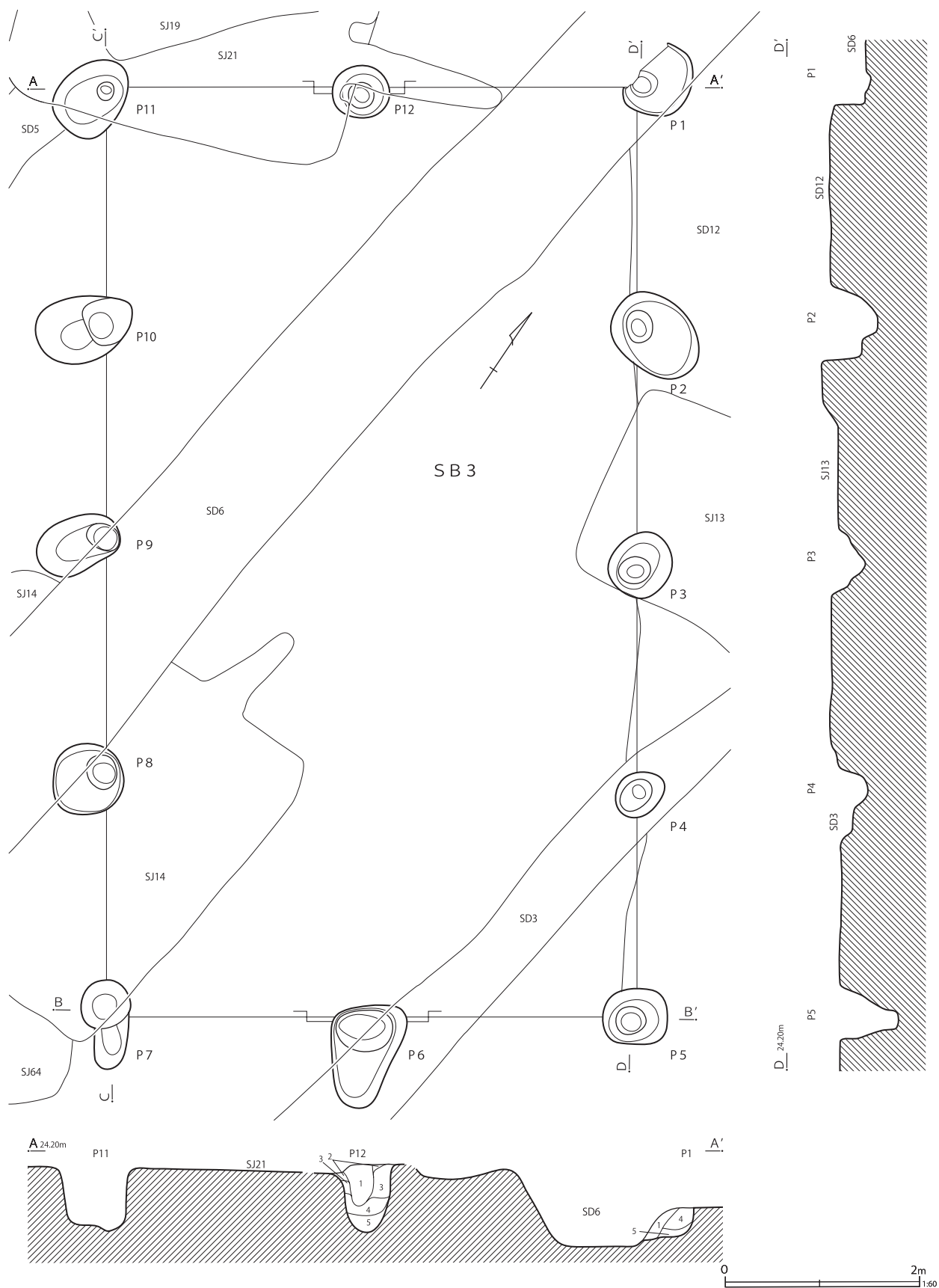
C・D-14・15グリッドに位置する。他の遺構との重複はない。

北北西から南南東方向の建物で、南側は調査区外に延びる。方位は北東側の桁行でN-28°-Wである。建物の規格は、梁行2間で桁行は2間以上である。柱間は、北東側桁行が北から2.34m、2.72m、南西側は2.29m、北西側梁行は西から1.56m、1.93mである。

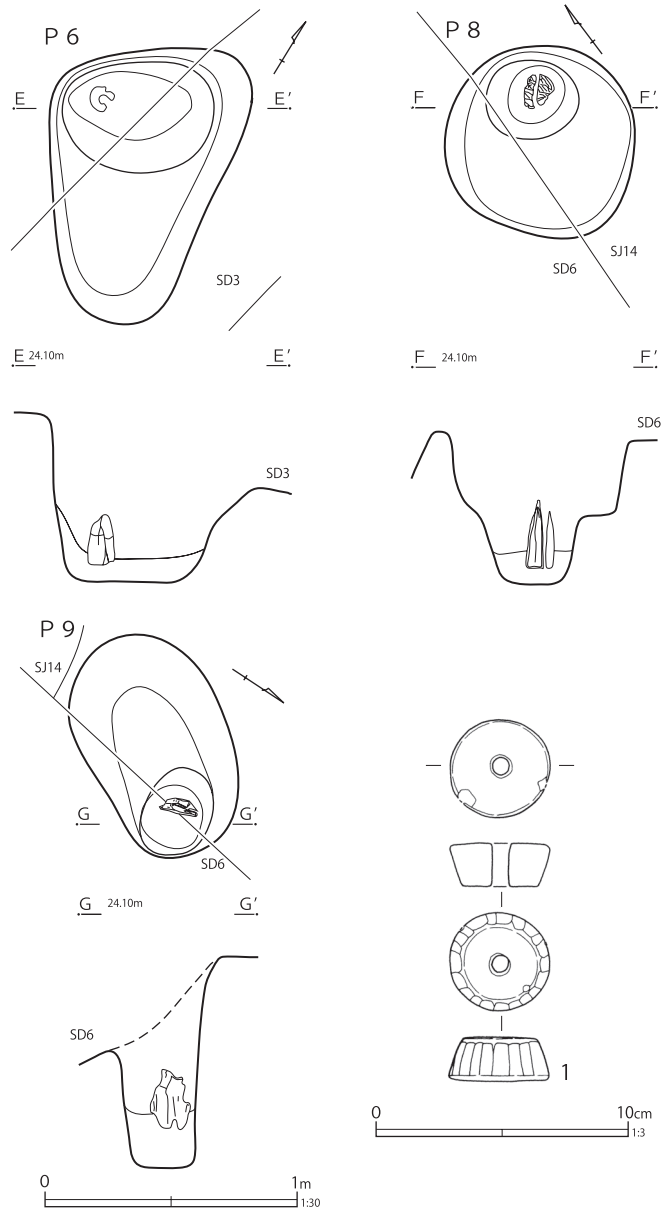
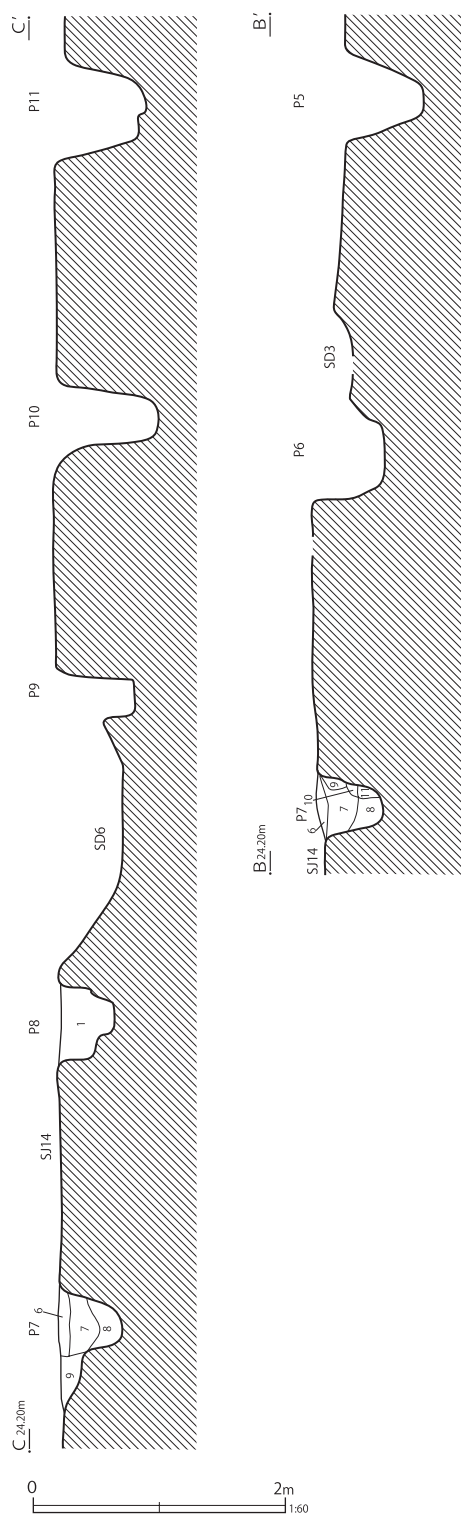
各柱穴の平面形は、略円形もしくは楕円形である。規模はP1が長径0.42m、短径0.33m、P2が長径0.45m、短径0.39m、P3が径0.26m、P4が径0.40m、P5が径0.40m、P6が径0.37m、深さは0.10～0.31mである。

遺物は出土しなかった。

時期は不明だが、他の建物とは柱穴の様相が異なるため、より新しい時期の可能性もある。



第 97 图 第 3 号掘立柱建物跡

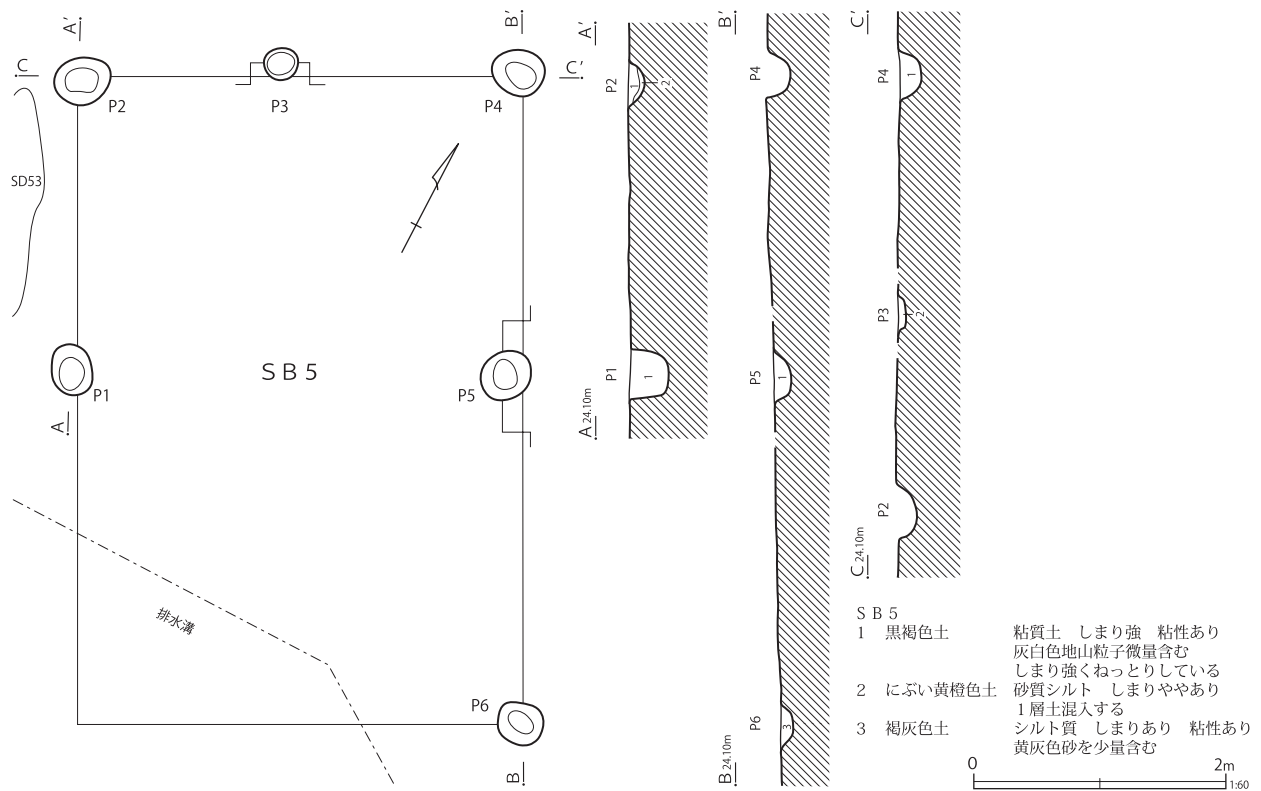
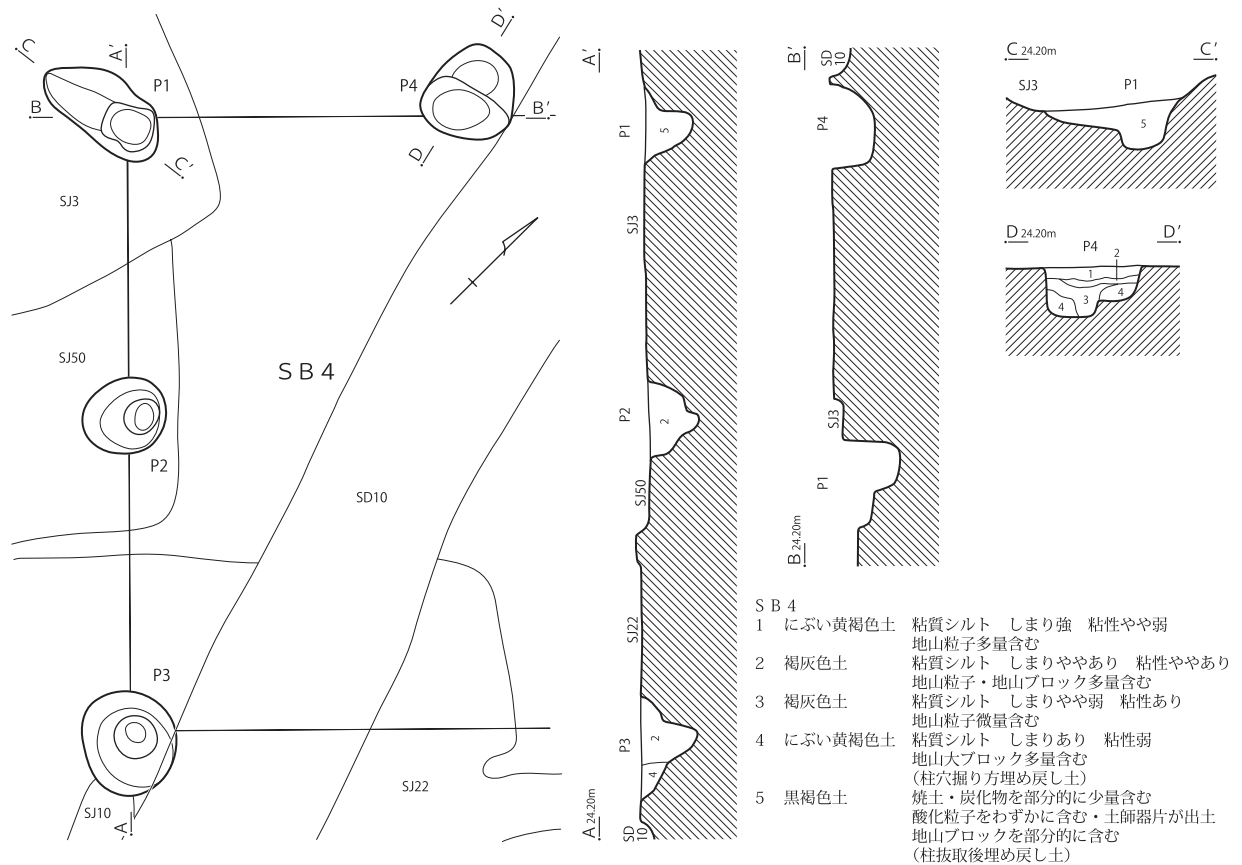


- S B 3
- | | | |
|----|---------|---|
| 1 | 褐灰色土 | 粘質シルト しまりあり 粘性ややあり
地山粒子多量含む 地山ブロック含む (埋め戻し土) |
| 2 | 褐灰色土 | 粘質シルト しまりあり 粘性弱
地山ブロック多量含む (柱穴掘り方埋土) |
| 3 | にぶい黄橙色土 | シルト しまりやや弱 粘性弱
褐灰色土微量含む (柱穴掘り方埋土) |
| 4 | 灰黄褐色土 | シルト しまりやや弱 粘性弱
褐灰色土微量含む (柱穴掘り方埋土) |
| 5 | 灰黄褐色土 | シルト しまりやや弱 粘性弱
褐灰色土少量含む (柱穴掘り方埋土) |
| 6 | 暗褐色土 | 焼土粒子・炭化粒子・褐灰色粘土ブロックを含む |
| 7 | 暗褐色土 | しまりややあり 褐灰色粘土ブロックを含む |
| 8 | 暗褐色土 | 褐灰色粘土ブロックを含む 2層に比べ暗い |
| 9 | 暗褐色土 | しまりややあり 焼土粒子・炭化粒子を含む |
| 10 | 褐灰色土 | しまりあり 褐灰色粘土ブロックを含む |
| 11 | 暗褐色土 | しまりややあり 褐灰色粘土ブロックをやや多く含む |

第 98 図 第 3 号掘立柱建物跡・出土遺物

第 31 表 第 3 号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第 98 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	石製品	紡錘車	長さ 3.9	幅 3.9	厚さ 1.7	重さ 42.8 g				P 1 滑石	51-3



第 99 図 第 4・5 号掘立柱建物跡

(3) 溝跡

溝跡は21条検出した。遺物は溝という遺構の性格上、多時期にわたるものが出土している。

第16・33号溝跡は欠番である。

第9号溝跡 (第100図)

M・N-17、N・O-16グリッドに位置する。北東から南西方向に直線的に延び、南西側は調査区外に続き、北東側は第12号溝跡に接続している。第15・16・20・30・62・65号住居跡、第5号土壌と重複し、第20・62号住居跡より新しく、第15・16・30・65号住居跡より古い。

検出した長さは20.80mで、幅は1.15～1.57mである。深さは0.35～0.47mである。断面形は鍋底形である。底面は南西から北東方向に0.10m低くなる。覆土は、3層に分層できた。いずれも灰褐色系の粘質シルトで一見自然堆積したような状況を示すが、第1層は地山ブロックを多量含んでおり、埋没の最終段階で埋め戻された可能性も考えられる。

遺物は、土師器片及び須恵器の小片が出土した。

第12号溝跡 (第101・102図)

K～M-16、M・N-17、N・O-18グリッドに位置する。北西から南東方向に延び、北西端は調査区外に、南東端は既調査の第5地点に続く。第13・29・30・55・65・67・72・80号住居跡、第3号掘立柱建物跡、第6・27・40号土壌、第3・6・9・11・32号溝跡と重複し、第13・30・65・67号住居跡、第27号土壌、第3・6・32号溝跡より古く、第55号住居跡、第3号掘立柱建物跡、第40号土壌より新しい。第9号溝跡は第4号溝跡に接続していることから、同時に存在していたと考えられる。

検出した長さは47.70mで、幅は0.80～1.73mである。深さは0.06～0.42mである。断面形は浅い部分では皿状となるが、深い部分では逆台形である。底面は南東から北西方向にやや低くなる。覆土は灰褐色系の粘質土で、堆積状況から自然堆

積と思われる。

遺物は、土師器坏・甕、須恵器蓋などが少量出土した。

第14号溝跡 (第103図)

G-15・16、H-15に位置する。北北東から南南西に延び、南側は調査区域外に続く。北側は第20号溝跡に接続する。第20号溝跡の北側の第17号溝跡に連続するよう見えるが、第20号溝跡を境としてずれがみられるため、第17号溝跡とは別の溝と判断した。他の遺構との重複はない。

検出した長さは12.04mで、幅は0.63～0.82mである。深さは0.08～0.23mである。断面形は逆台形である。底面は、北側の第20号溝跡から約1m南で0.15mの段差があり、更に南側が低くなる。覆土は、黒褐色土が主体である。層の下部ほど砂が多くなる。

遺物は出土しなかった。

第15号溝跡 (第103図)

D-17グリッドに位置する。北東から南西に延び、北東側は調査区外に続く。第13号溝跡と重複し、第15号溝跡が古い。南西側は、第13号溝跡に重複する。

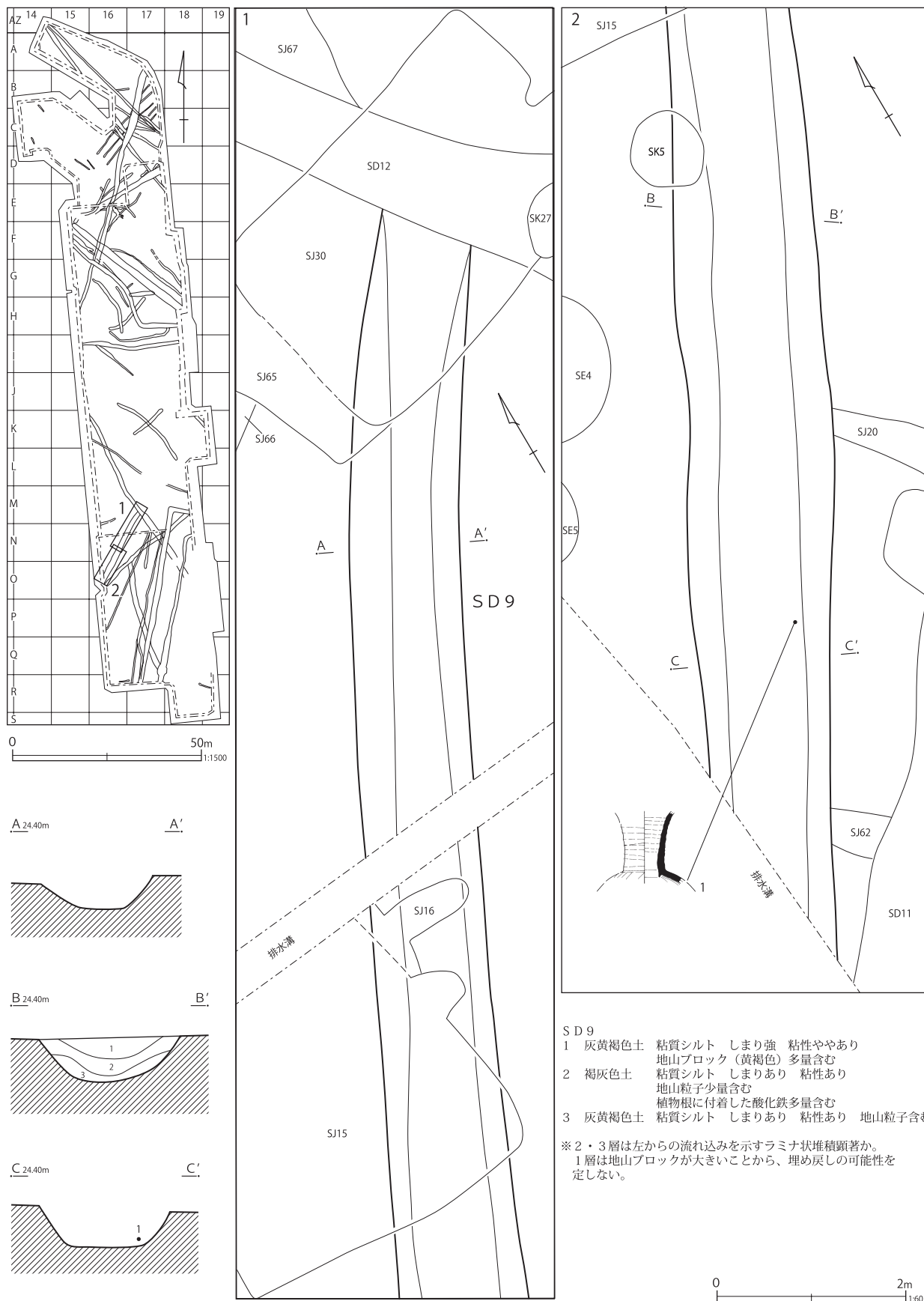
検出した長さは2.00mで、幅は0.39～0.61mである。深さは0.17～0.25mである。断面形は皿状である。底面は南西から北東方向にやや低くなる。

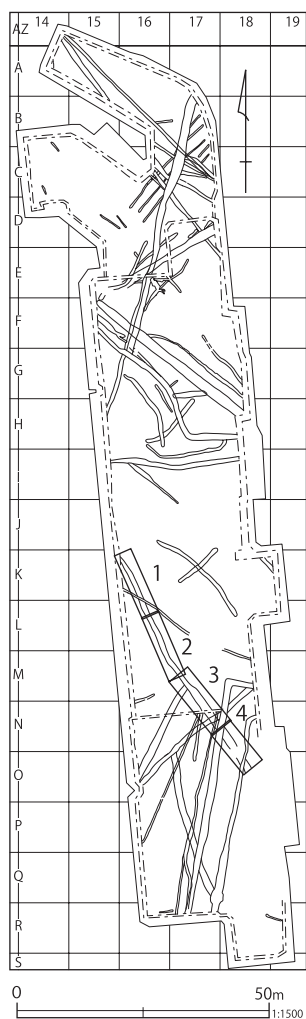
遺物は出土しなかった。

第21号溝跡 (第104図)

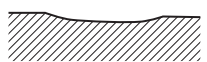
H-16・17グリッドに位置する。第20・24号溝跡と重複し、第20号溝跡より古い。第24号溝跡との新旧関係は捉えられなかった。北東から南西方向に延び、南側は西向きに緩く方向を変える。

規模は長さ13.00mで幅は0.59～0.88m、深さは0.07m～0.27mである。底面は殆ど高低差がないが第20号溝跡より東側はやや浅くなる。壁の立ち上がりは比較的緩い。覆土は、粘性のある黒色土の単層であった。





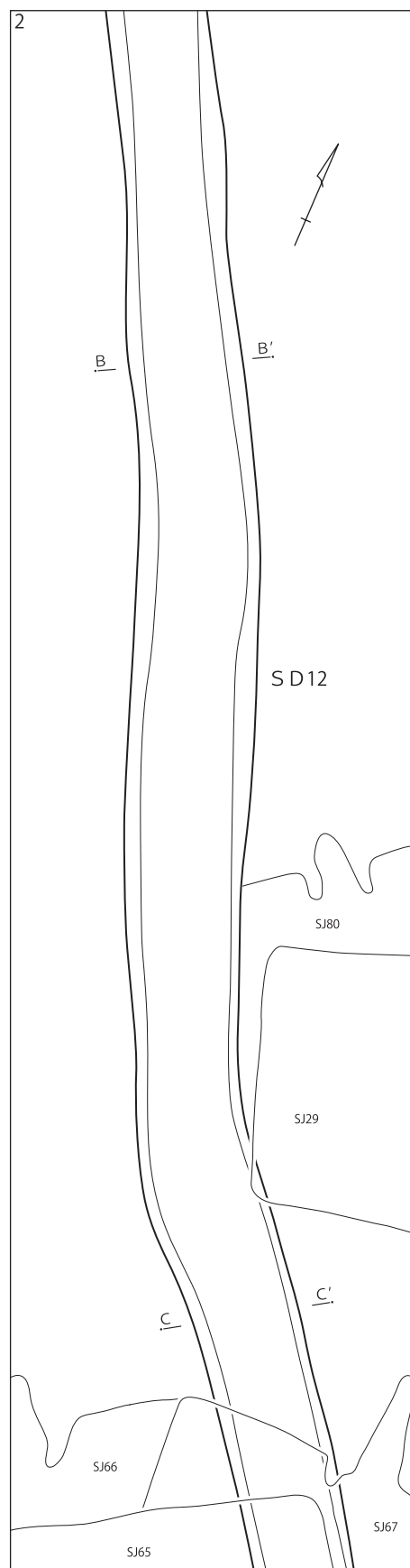
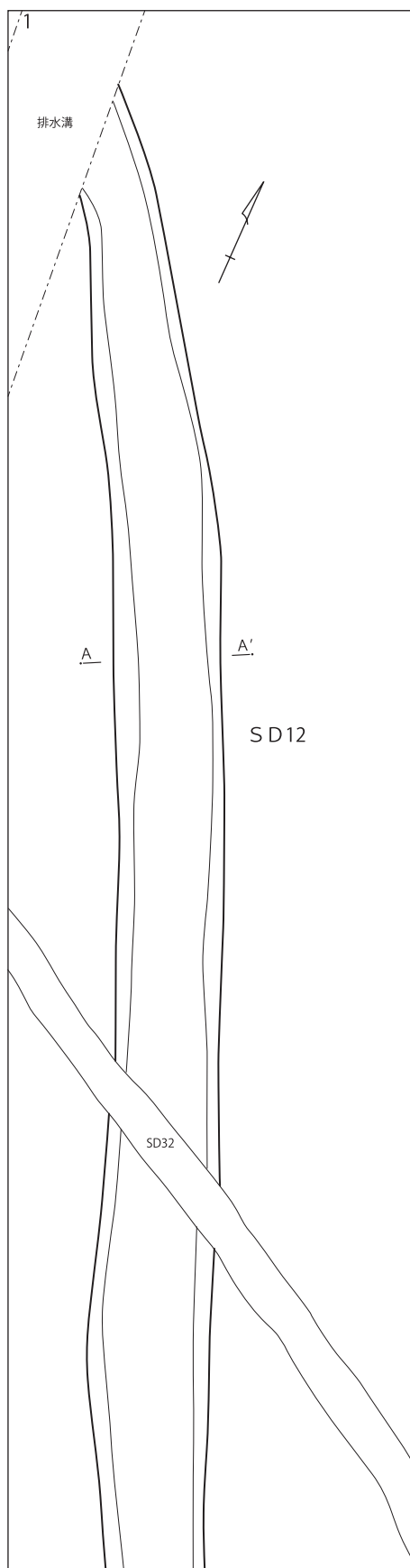
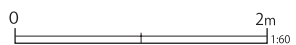
A 24.20m A'



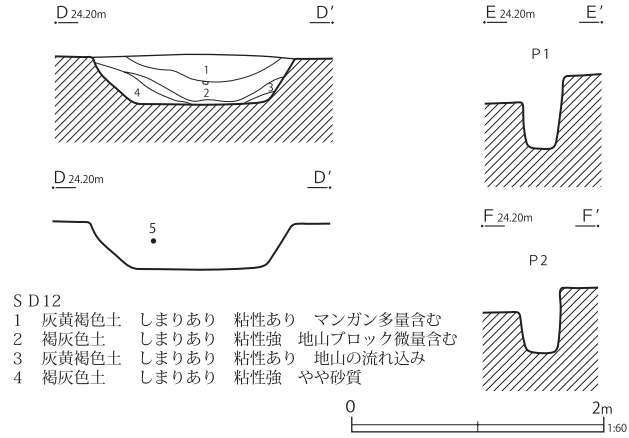
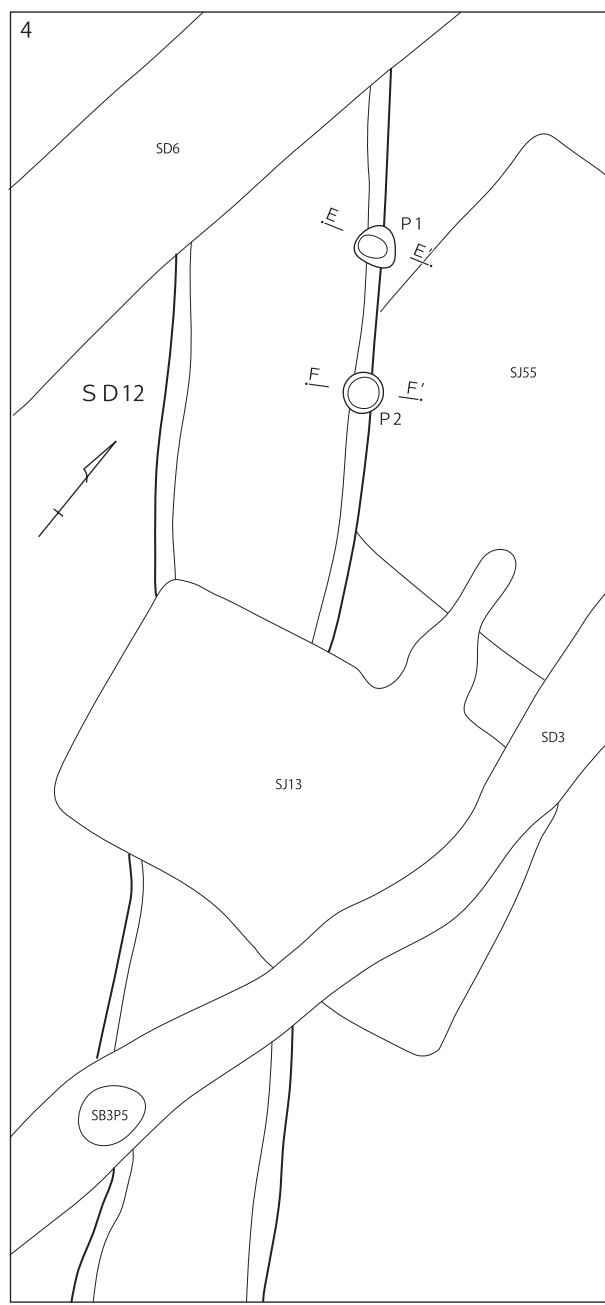
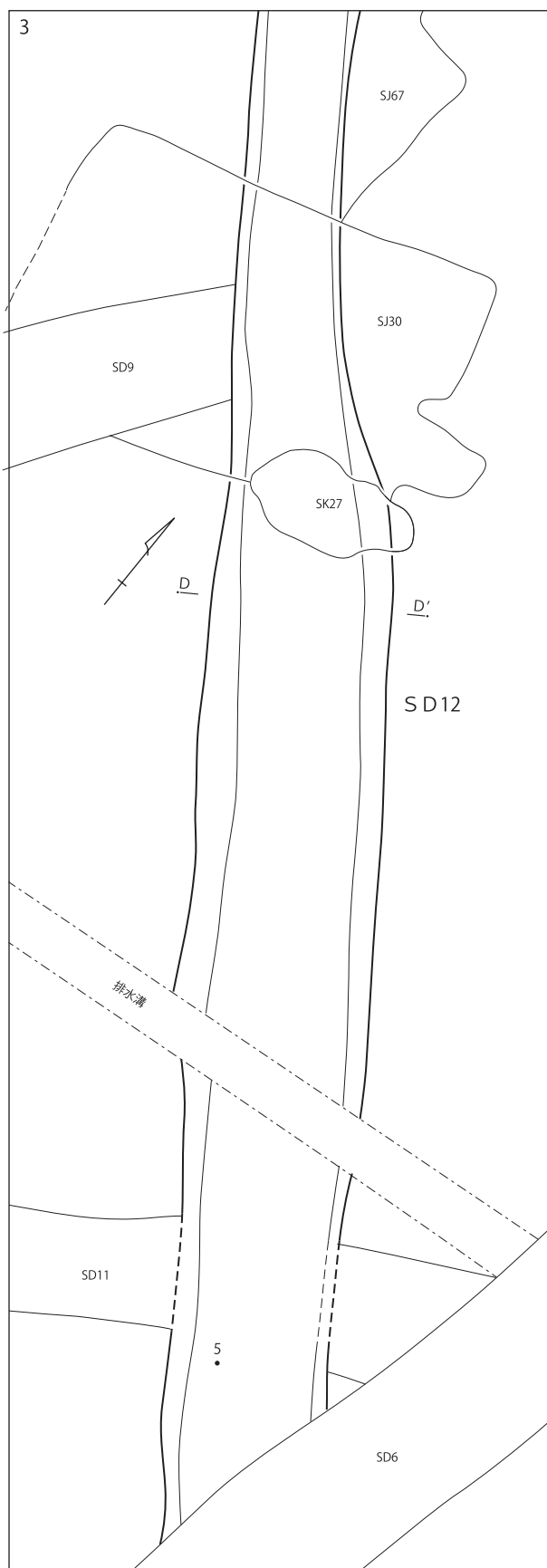
B 24.20m B'



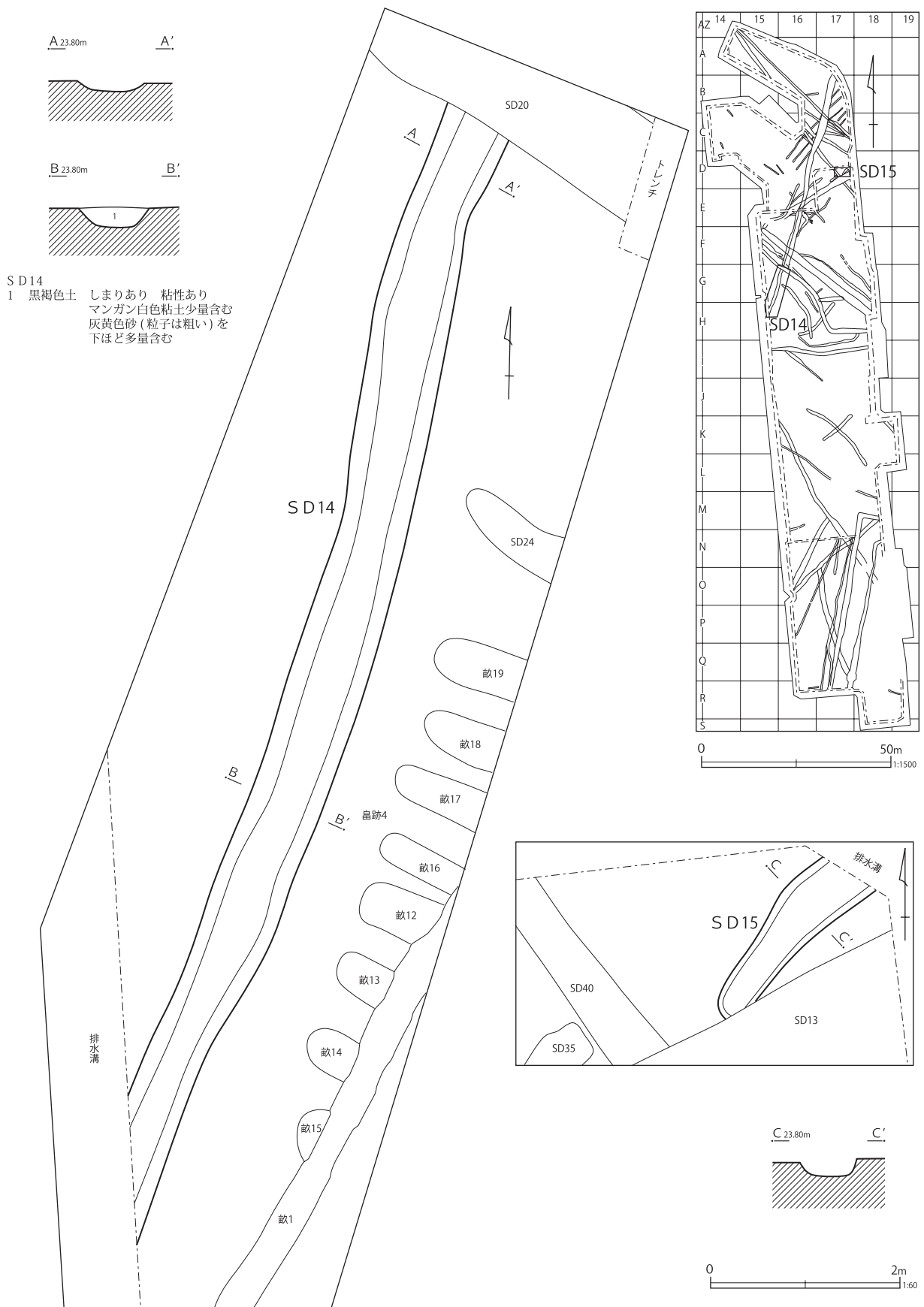
C 24.20m C'



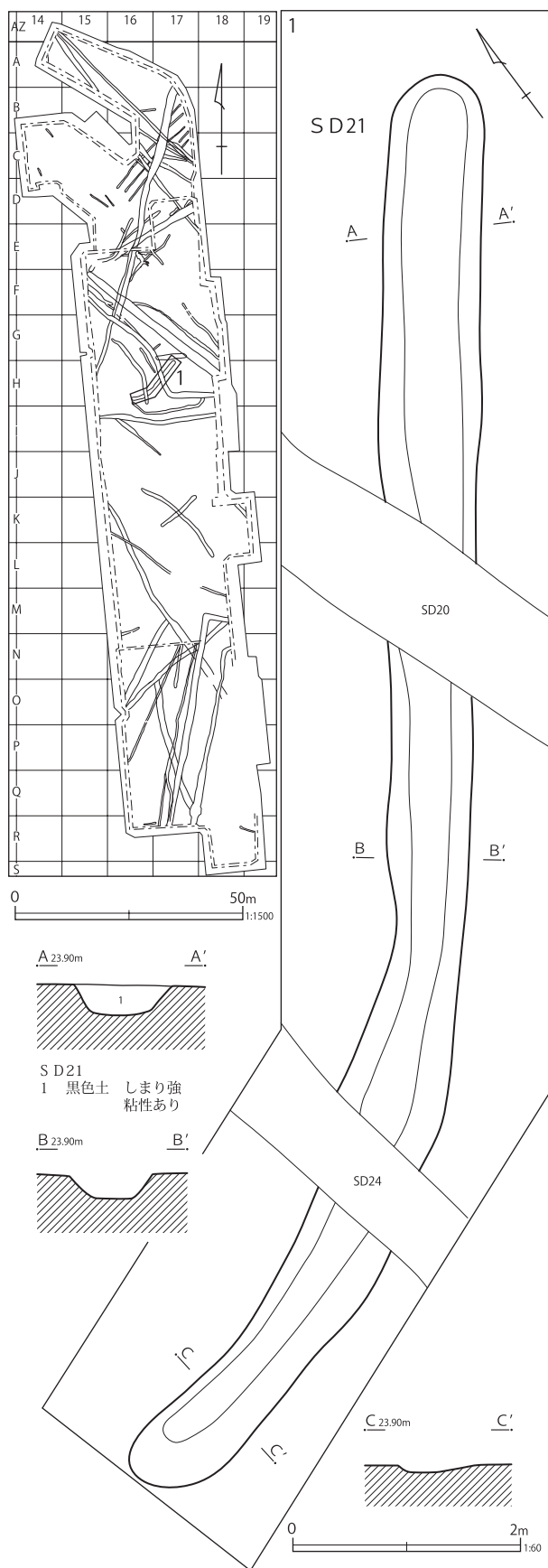
第 101 図 第 12 号溝跡 (1)



第 102 図 第 12 号溝跡 (2)



第 103 図 第 14・15 号溝跡



第104図 第21号溝跡

遺物は、土師器などの小片が少量出土した。

第30号溝跡 (第105・106図)

F-15・16、G-16~18、H-17・18グリッドにかけて位置する。北西から南東方向に直線的に延び、北西端は調査区内で壁が立ち上がっていた。南東側は調査区外に続く。溝の方向はN-52°-Wである。第39・52号土壇、第17・18・42・45号溝跡、第6号畠跡の畝溝と重複し、第52号土壇、第17・18号溝跡より古く、第45号溝跡、第6号畠跡より新しい。第42号溝跡との新旧関係は不明である。

規模は長さ36.50mで、幅は1.52~2.19mである。深さは0.25~0.47mである。断面形は浅い箱葉形もしくは鍋底形である。底面は殆ど高低差がないが、北西端部分は0.1mほど下がっている。覆土は、全体に多量の砂・粘土を含む灰色土・暗灰色土・黒色土などで自然堆積である。

遺物は、南東部分の覆土上層から土師器皿が単独で出土した。また、北西部分では土師器坏・甕、須恵器甕・瓶などが破片の状態で出土した。

第32号溝跡 (第107図)

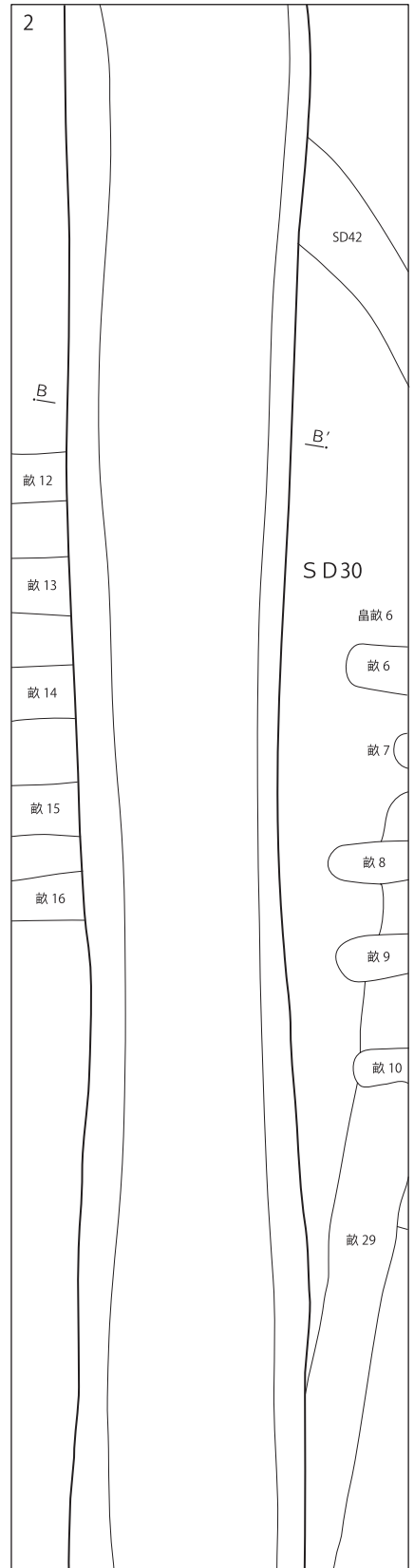
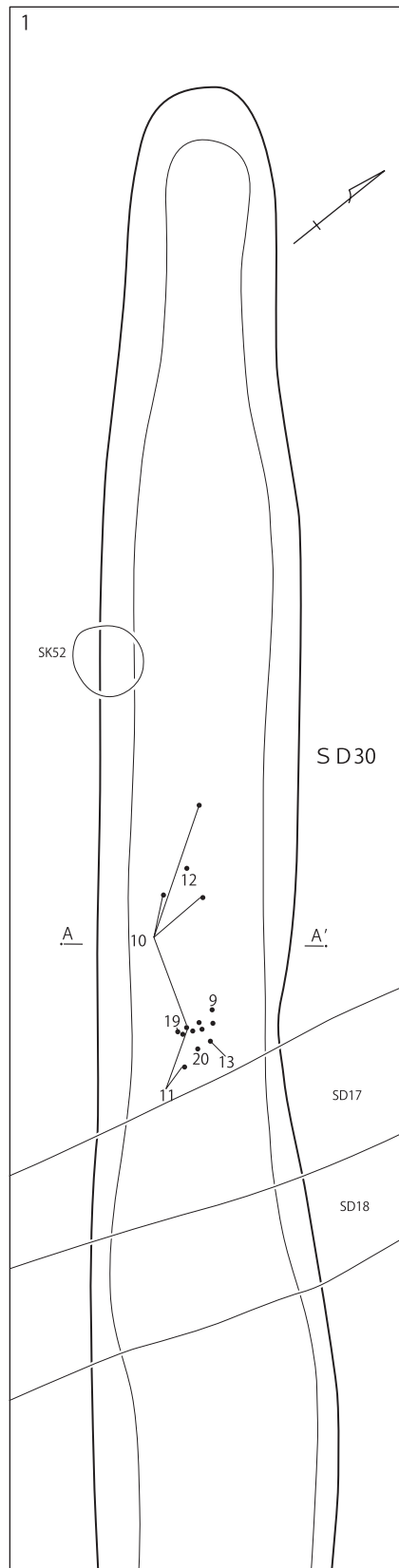
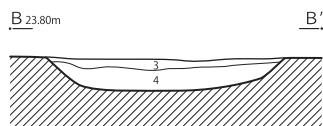
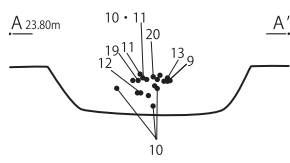
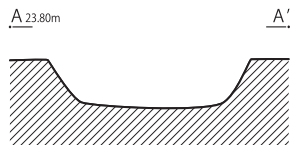
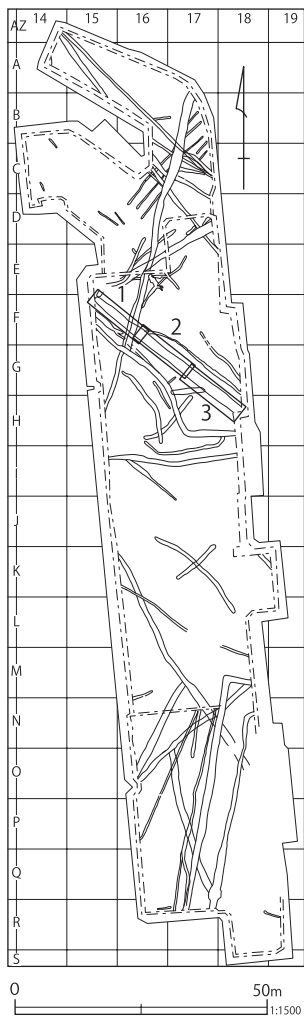
K-16、L-16~18、M-18グリッドにかけて位置する。西北西から東南東に緩く屈曲しながら調査区を横断し、両端とも調査区外に続く。第26・60・70・73・78号住居跡と重複し、さらに第74・83・84号住居跡とも重複している可能性がある。他に、第44・46・56号土壇、第12号溝跡と重複している。第46号土壇、第12号溝跡より新しく、各住居跡および第44・56号土壇より古い。

検出した長さは29.0mで、幅は0.30~0.46mである。深さは0.09~0.27mである。断面形はU字状である。底面は北西から南東に向かって低くなる高低差は約0.7mである。

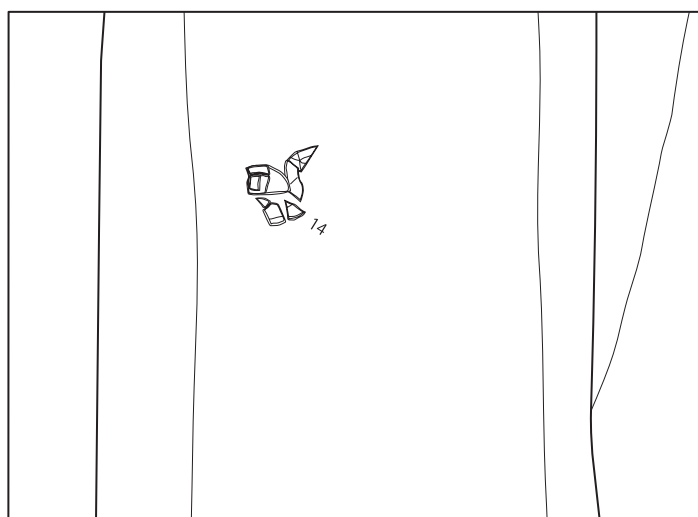
遺物は出土しなかった。

第40号溝跡 (第108図)

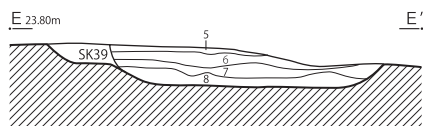
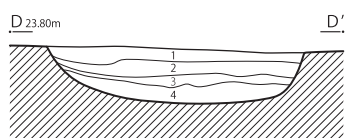
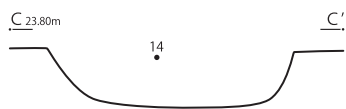
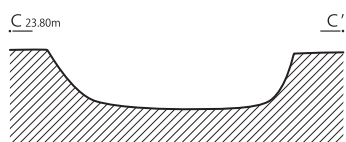
C-16・17、D-17、E-17グリッドにかけて位置する。北西から南東方向に直線的に延び、



第 105 図 第 30 号溝跡 (1)



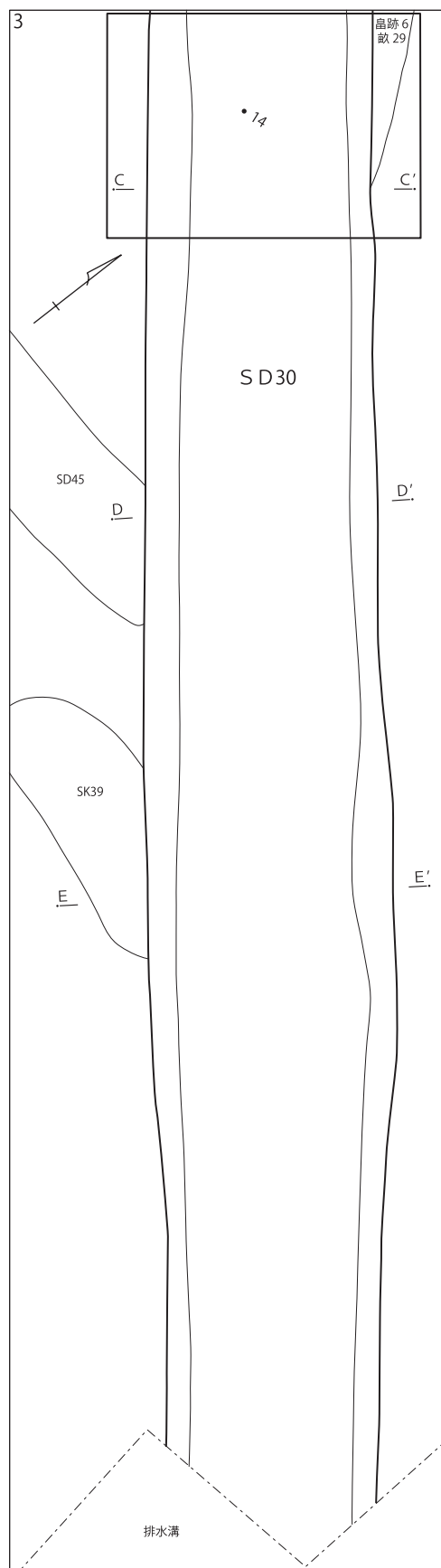
0 1m
1:30



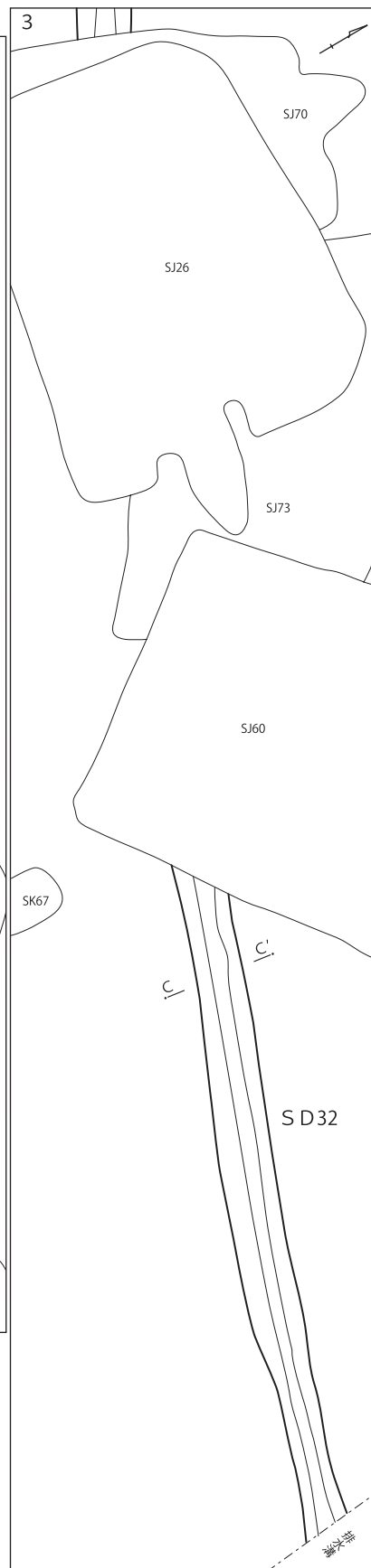
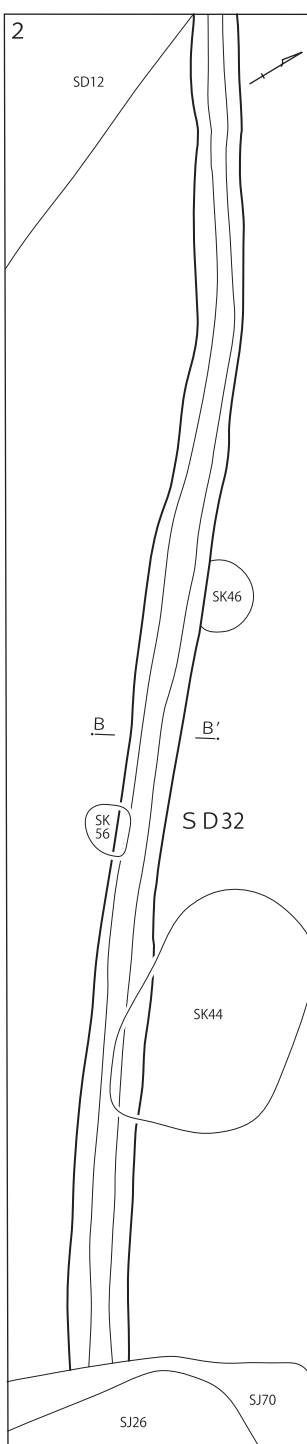
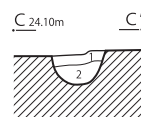
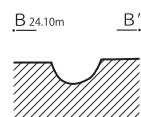
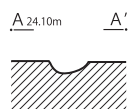
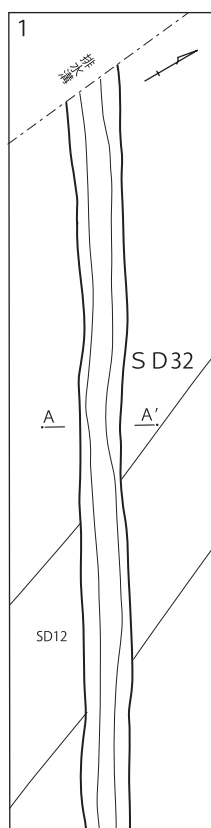
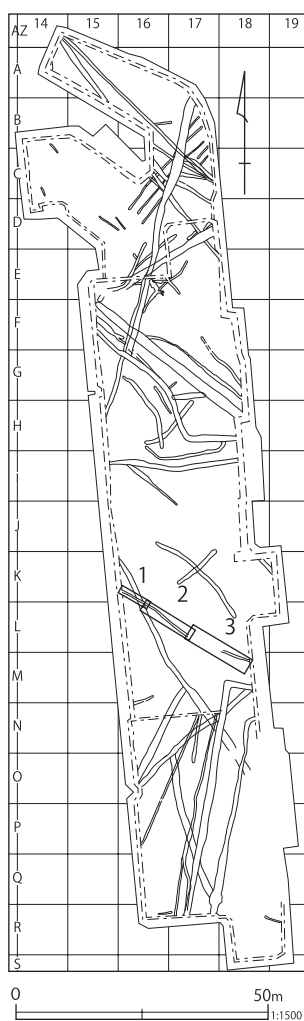
S D30

- | | |
|-----------|---------------------------------|
| 1 灰色土 | しまり強 粘性あり 灰色粘土 酸化鉄を多量に含む |
| 2 暗灰色土 | しまりあり 粘性あり 暗灰色粘土を主体にして灰色砂を多量に含む |
| 3 オリーブ黒色土 | しまりなし 粘性なし オリーブ黒色砂質土 |
| 4 暗灰色土 | しまり強 粘性強 暗灰色粘土 地山の青緑灰色砂質土を少量含む |
| 5 黒色土 | しまりあり 粘性ややあり 混入物なし |
| 6 オリーブ灰色土 | しまりややあり 粘性なし 灰色砂を層状に含む (砂層) |
| 7 オリーブ黒色土 | しまりややあり 粘性なし 暗灰色土を少量含む (砂層) |
| 8 暗灰色土 | しまりあり 粘性強 暗灰色粘土 4層の砂質土を含む |

0 2m
1:60



第 106 図 第 30 号溝跡 (2)



S D32
 1 暗黄褐色土 しまり強 粘性弱 白色粒子微量含む
 2 黒褐色土 しまりやや強 粘性やや強 白色粒子微量含む 黄褐色
 ブロック少量含む



第 107 図 第 32 号溝跡

両端とも調査区外に続く。第13・18・56・57・59号溝跡と重複し、第13・18号溝跡より古く、第56・57・59号溝跡より新しい。北西側のC-16グリッドは溝底が一段深くなっており、更に1条重複しているようであった。調査区際の土層断面でもその様相が確認できるため、本溝跡は掘り直されていると考えられる。検出した長さは20.90m、幅は0.44～0.94mである。深さは0.08～0.19mである。断面形はU字状の箇所から箱薬研状の箇所である。底面は北西から南東に向かって低くなり、高低差は0.09mである。

遺物は土師器坏、須恵器甕の破片が少量出土している。

第41号溝跡（第109図）

K-18・19グリッドに位置する。調査区中央部東側にあり、北西から南東方向に延び両端とも調査区外に続く。北西側はJグリッドまで延びていると想定していたが確認できなかった。第1号畠跡と重複し、第41号溝跡が新しい。

検出した長さは3.35mで、幅は0.83mである。深さは0.17mである。断面形は底面が平坦な鍋底形である。底面は北西から南東方向にわずかに低くなる。

遺物は出土しなかった。

第42号溝跡（第110図）

F-16・17、G-17・18に位置する。北西から南東方向に延び、西側は第30号溝跡に接続していた。西側から緩く湾曲して南東方向に向かい、その後直線状に調査区外に続く。第6号畠跡と重複し、第42号溝跡が新しい。第30号溝跡との新旧関係は確認できなかった。

検出した長さは22.8mで、幅は0.21～0.76mである。深さは0.18～0.19mである。断面形はU字状、箱薬研状である。底面は北西から南東方向に低くなり、高低差は0.16mである。

遺物は出土しなかった。

第48号溝跡（第111図）

C-16・17、D-17グリッドにかけて位置する。北西から緩く屈曲しながら南東方向に延び、両端は調査区外に続く。第18・56・59号溝跡と重複し、第18号溝跡より古く、第56・59号溝跡より新しい。

検出した長さは13.7mで、幅は0.49～0.93mである。深さは0.16～0.28mである。断面形は逆台形で、底面は北西から南東方向に低くなり、高低差は約0.2mである。

遺物は土師器坏、須恵器甕の破片が少量出土している。

第53号溝跡（第112図）

C-14グリッドに位置する。北西から南東方向に延びる。残存状況が悪く確認できた長さはわずかである。第5号掘立柱建物跡に沿うように見えたため、第5号掘立柱建物跡の雨落溝の可能性もあるが、柱穴にやや接近しすぎている感がある。他に重複する遺構はない。

検出した長さは1.87mで、幅は0.30mである。深さは0.06mである。断面形は残存状況が浅いため皿状である。

遺物は出土しなかった。

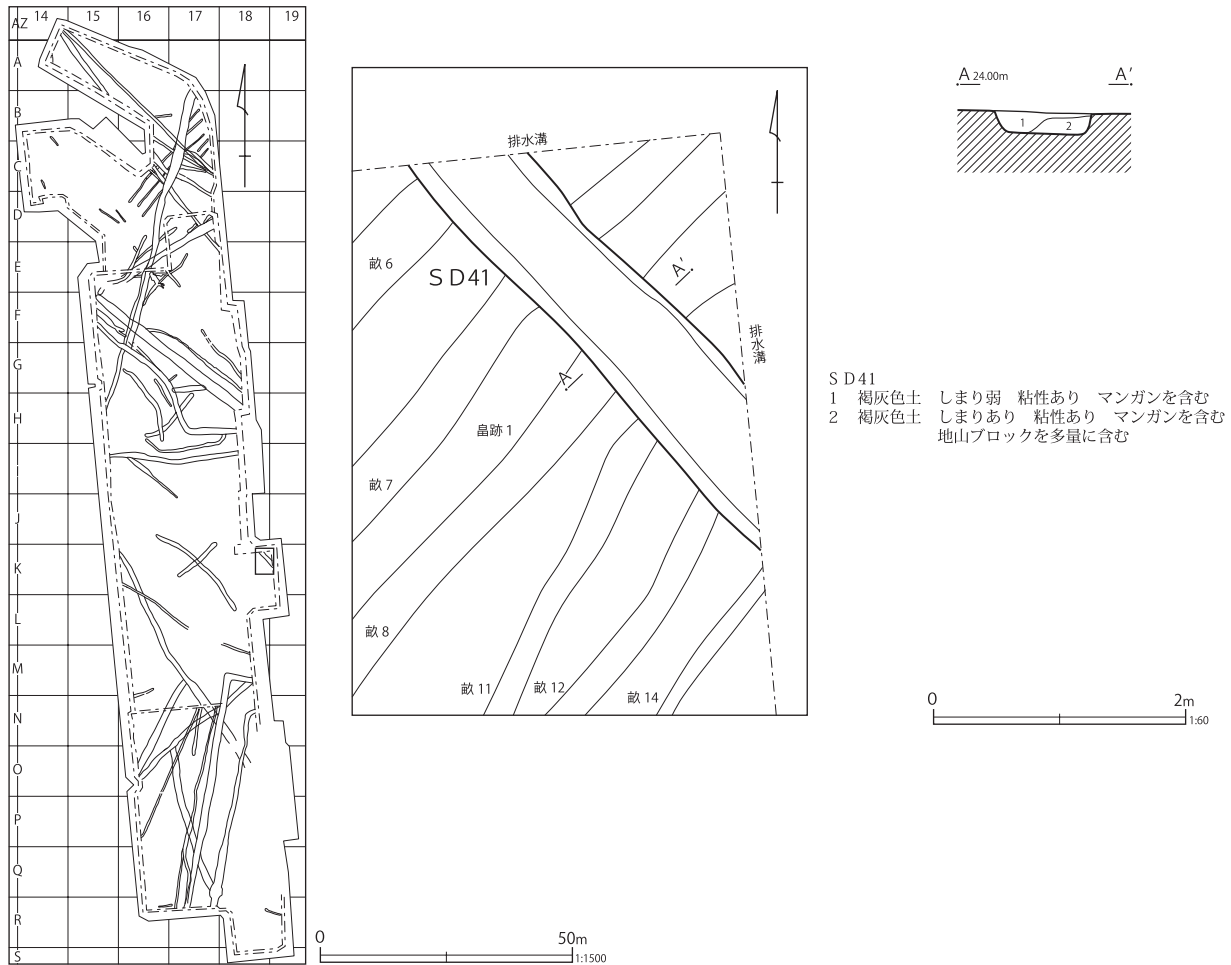
第56号溝跡（第113図）

B-17、C-16・17、D-16グリッドにかけて検出した。北東から南西方向に直線的に延び、両端とも調査区内で止まっていた。第18・34・40・48・50・57号溝跡と重複し、本遺構が最も古いと思われる。なお、第56・59・60・63・64号溝跡については、その規模や方向性が一致していることから畠の畝溝である可能性も考えられるが、ここでは調査時の所見に従って溝跡として報告する。

検出した長さは17.60mで、幅は0.24～0.38mである。深さは0.06～0.12mである。断面形は皿形である。底面は北東から南西方向に低くなり、高低差は0.37mである。

遺物は出土しなかった。

第57号溝跡（第108図）



第109図 第41号溝跡

C-16グリッドに位置する。北西から南東方向の溝である。第40号溝跡を調査していた際に確認したが、北西側は調査区外に続くため検出した長さは極めて短い。第40号溝跡より古い。南東側は第40号溝跡に重なっていたので、あるいは第40号溝跡は第57号溝跡を掘り返した可能性もあると思われる。他には第59号溝跡と重複し、これより新しいと考えられる。

検出した長さは3.69mで、幅は0.33～0.46mである。深さは検出面からは0.07mであるが、調査区際の壁で確認でき深さは約0.2mである。断面形は、壁の立ち上がりが緩く鍋底形に近い。底面は北西から南東方向にわずかに低くなる。

遺物は須恵器甕の破片が少量出土した。

第58号溝跡（第112図）

B・C-14グリッドに位置する。遺存状況が

悪く検出できた長さは短い。北西から南東方向に延び、両端は調査区内で消失していた。他の遺構との重複はない。

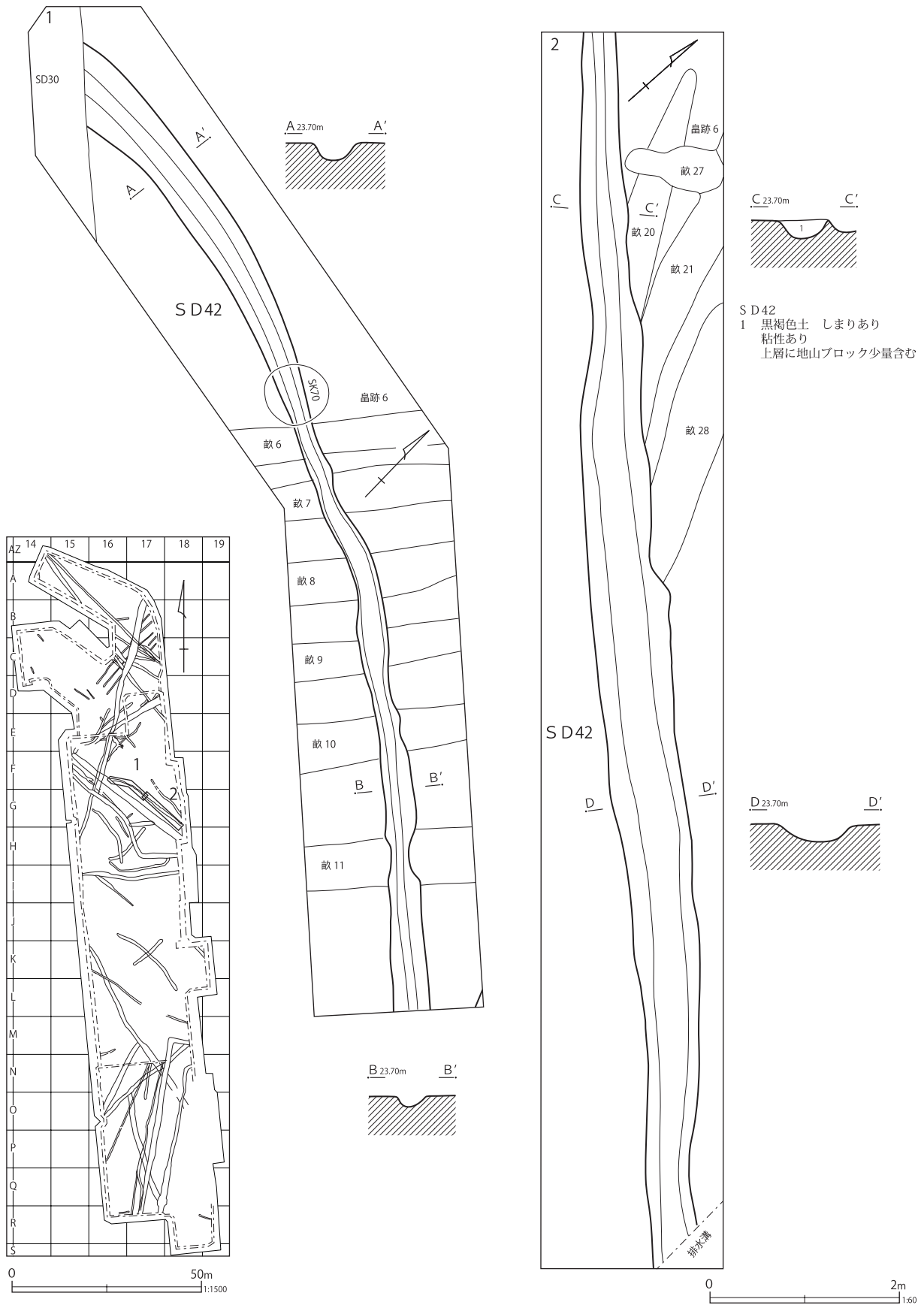
検出した長さは2.32mで、幅は0.23～0.34mである。深さは0.08mである。断面形は皿形で底面はほぼ平坦である。

遺物は出土しなかった。

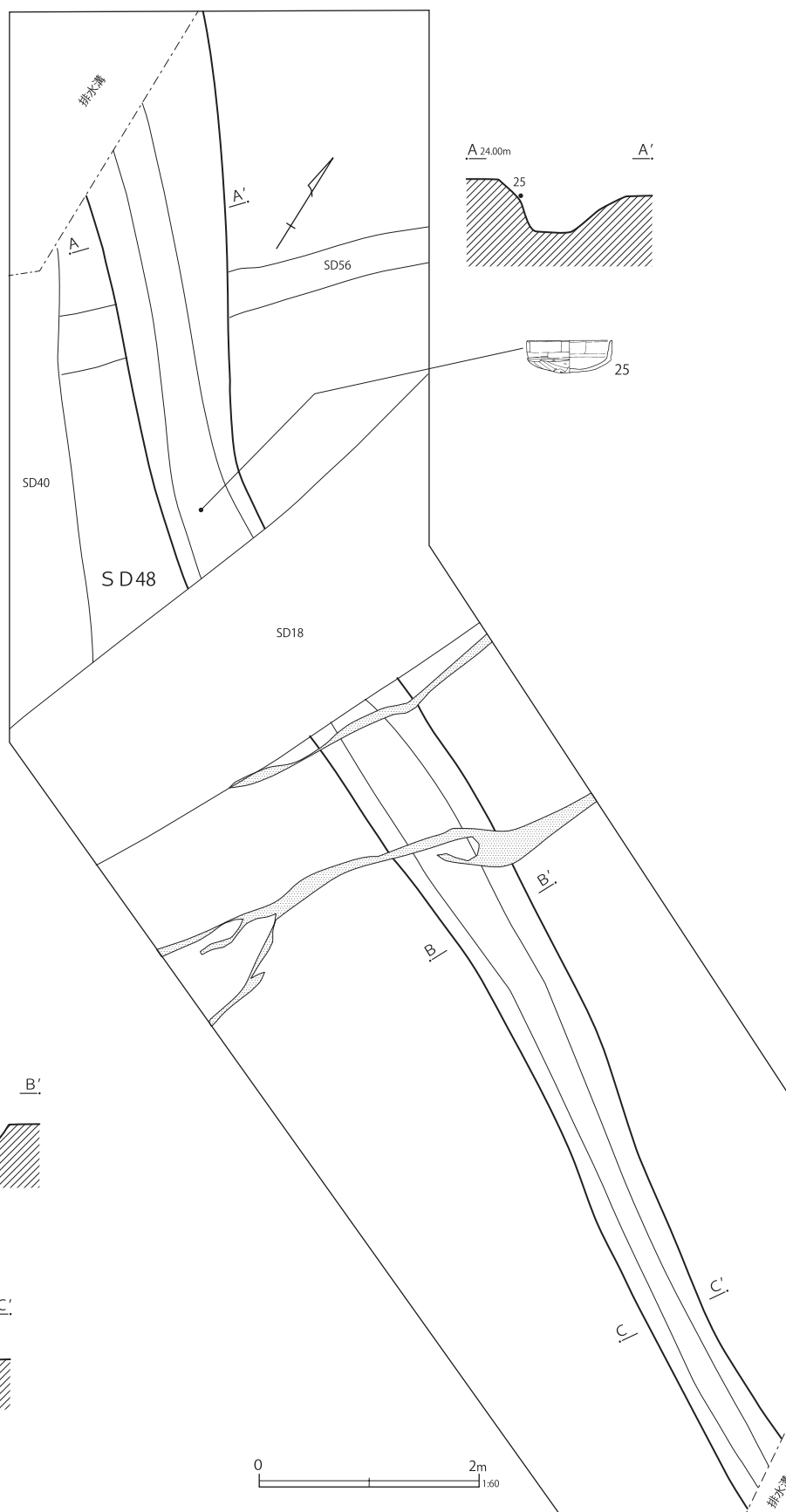
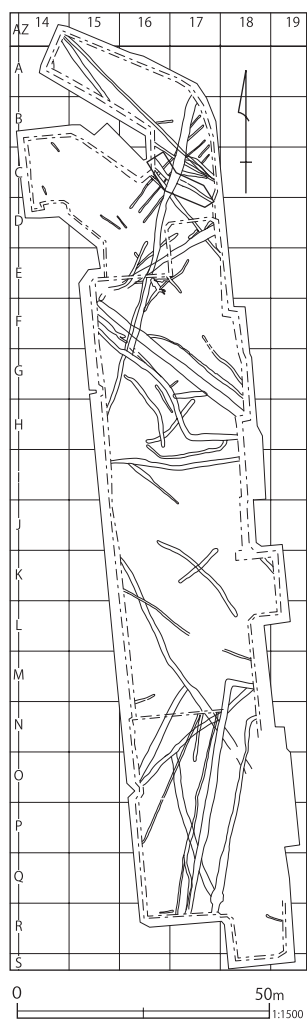
第59号溝跡（第114図）

B-17、C-16・17、D-16グリッドに位置する。北東から南西方向に直線的に延び、両端は調査区内で止まっていた。C-17グリッドで、一旦途切れているが、覆土と方向の共通性から南西に続いていると判断した。第18・40・48・57号溝跡と重複し、第59号溝跡が最も古い。

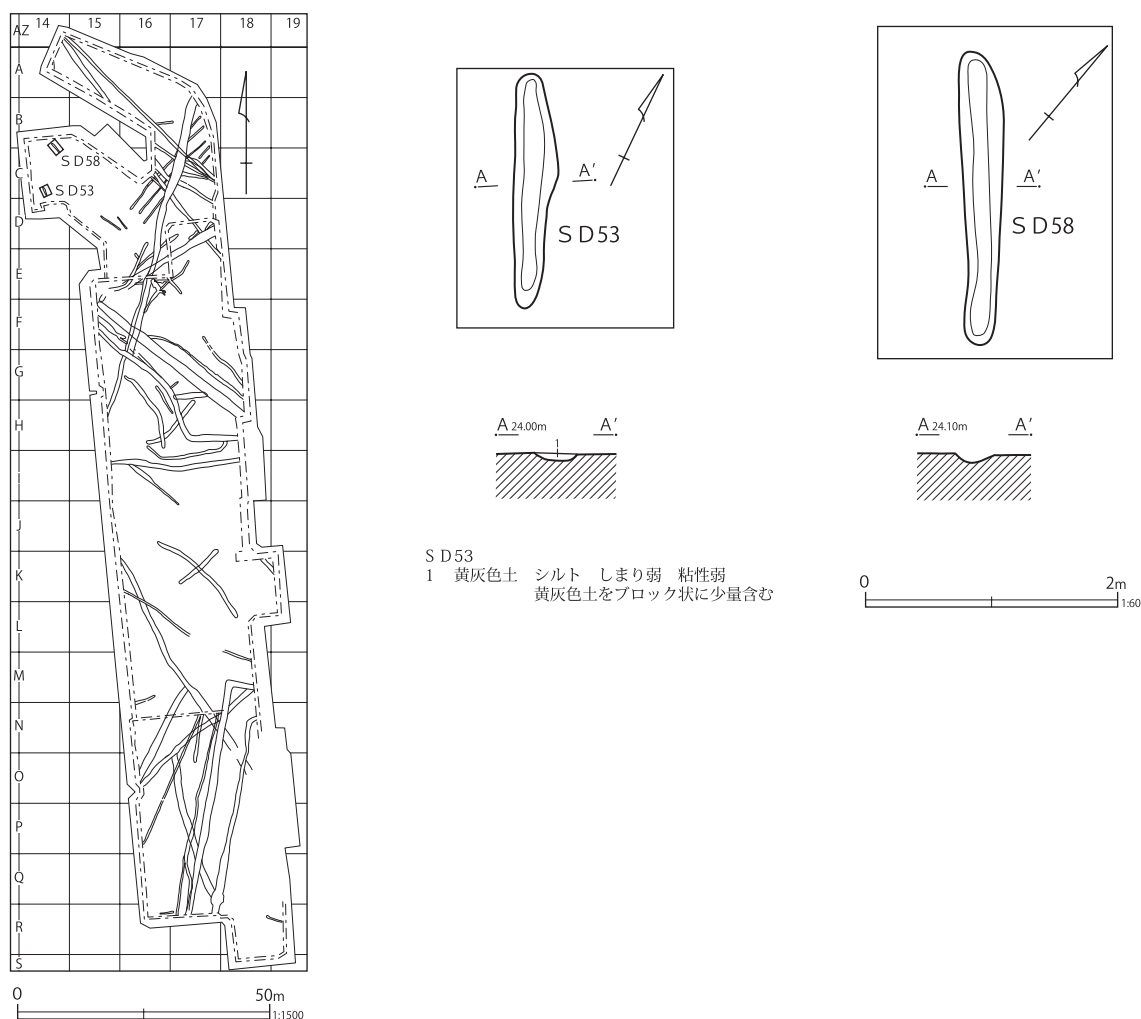
検出した長さは20.10mで、幅は0.17～0.36mである。深さは0.04～0.08mである。断面形は



第110図 第42号溝跡



第 111 図 第 48 号溝跡



第112図 第53・58号溝跡

皿形である。

遺物は出土しなかった。

第60号溝跡（第115図）

B-17、C-16・17、D-16グリッドにかけて検出した。第59号溝跡に並行し、規模等も同様である。第18号溝跡と重複し、第60号溝跡が古い。

検出した長さは20.40mで、幅は0.25～0.31mである。深さは0.04～0.09mである。断面形は皿形である。底面は北東部分より南西部分がやや高い。

遺物は出土しなかった。

第61号溝跡（第116図）

D-15・16グリッドに位置する。北西から南東に延び、両端とも調査区内で消失する。南端は

グリッドピットと重複しており、調査時の所見ではピットより古い。

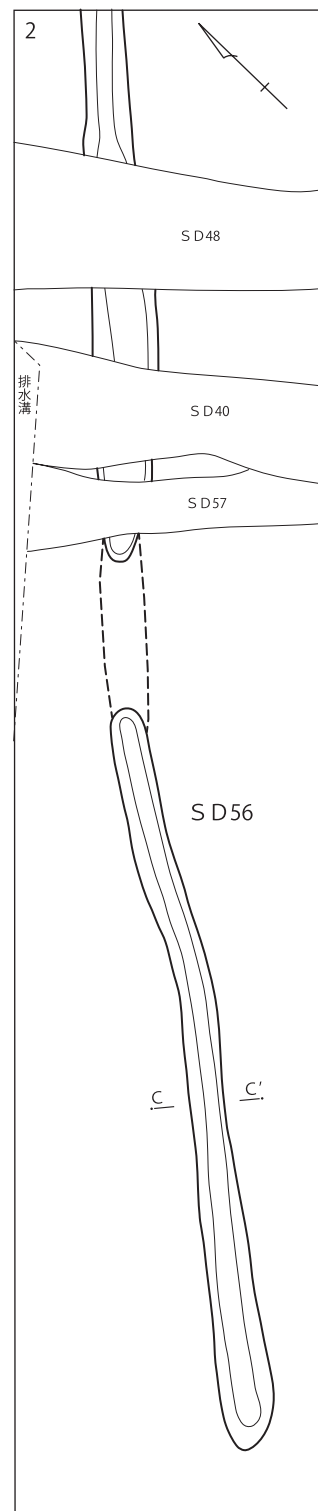
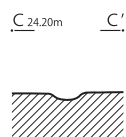
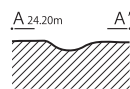
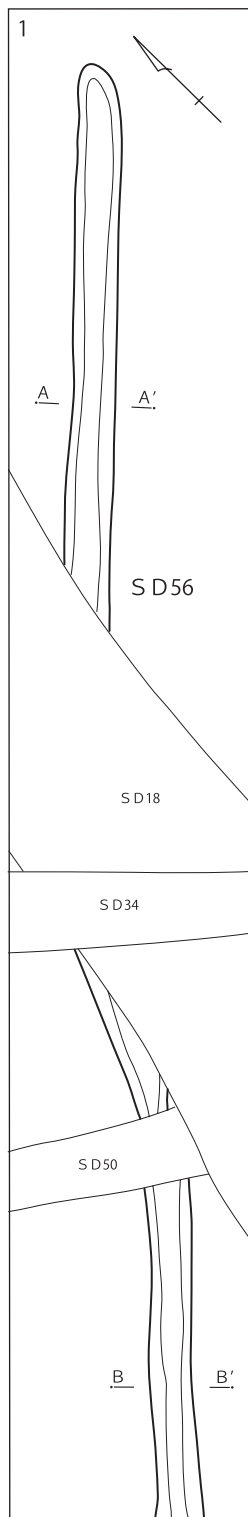
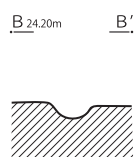
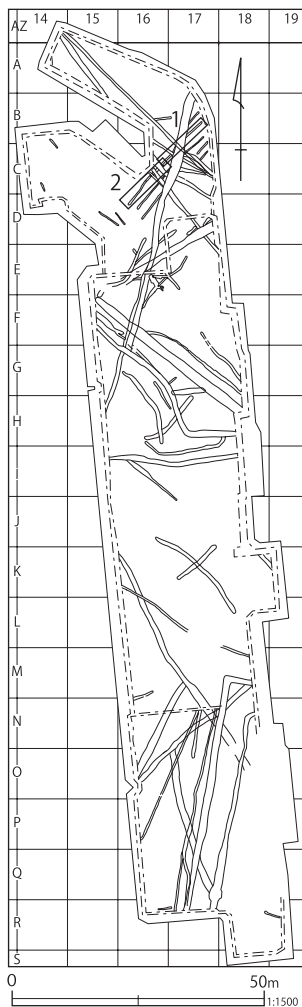
検出した長さは4.75mで、幅は0.21～0.29mである。深さは0.04mである。断面形は皿形である。底面はほぼ平坦である。

遺物は出土しなかった。

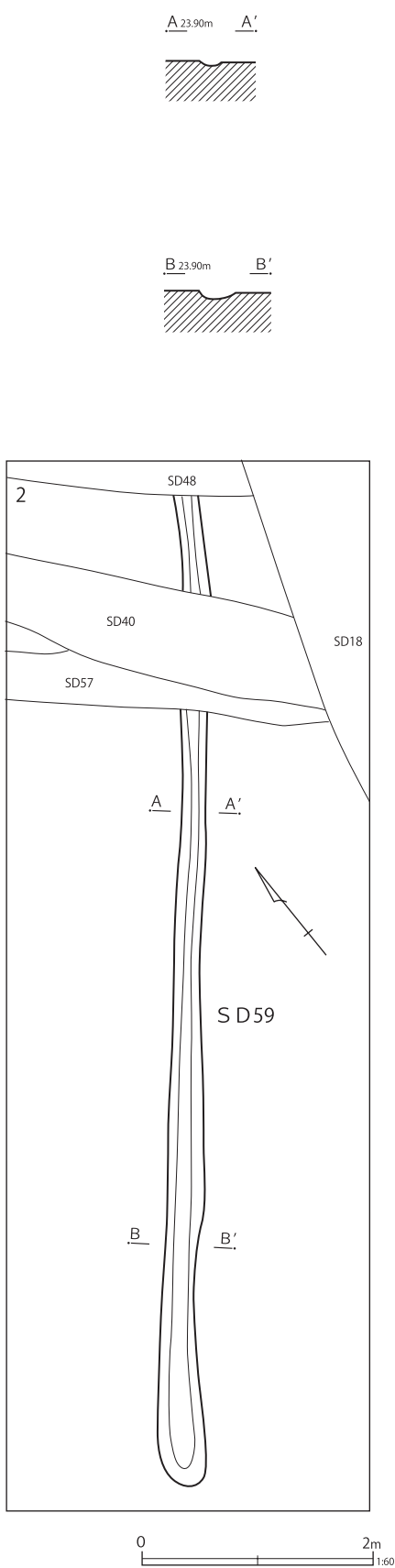
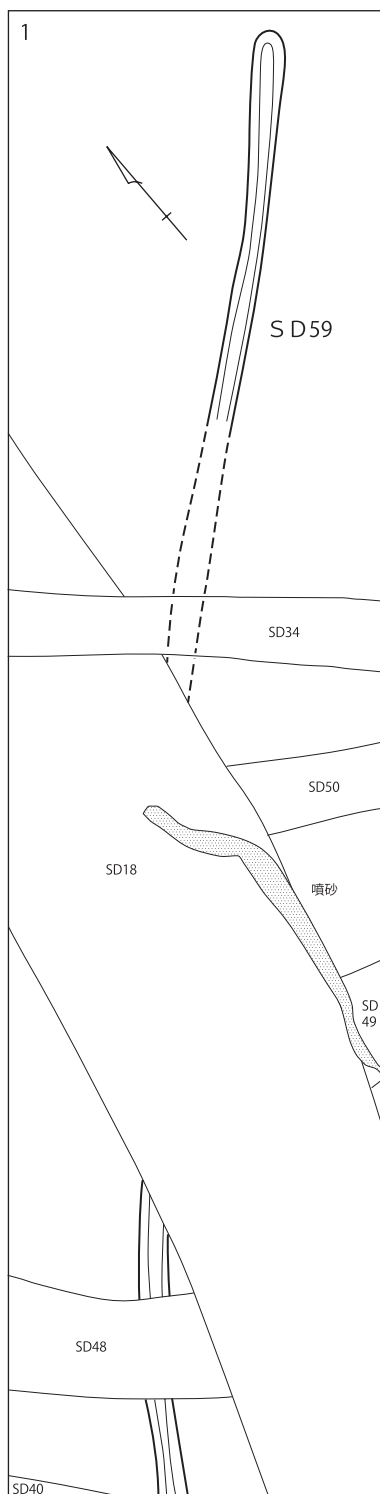
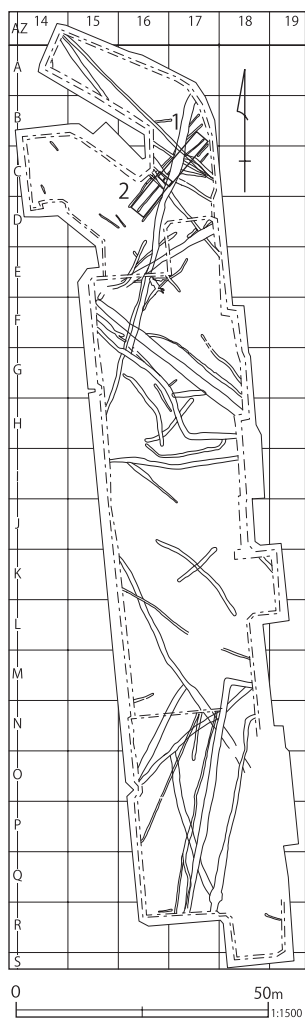
第62号溝跡（第116図）

D-15・16グリッドに位置する。第61号溝跡の東側に位置し、北西から南東方向に延びる。両端は調査区内で消失していた。重複する遺構はない。

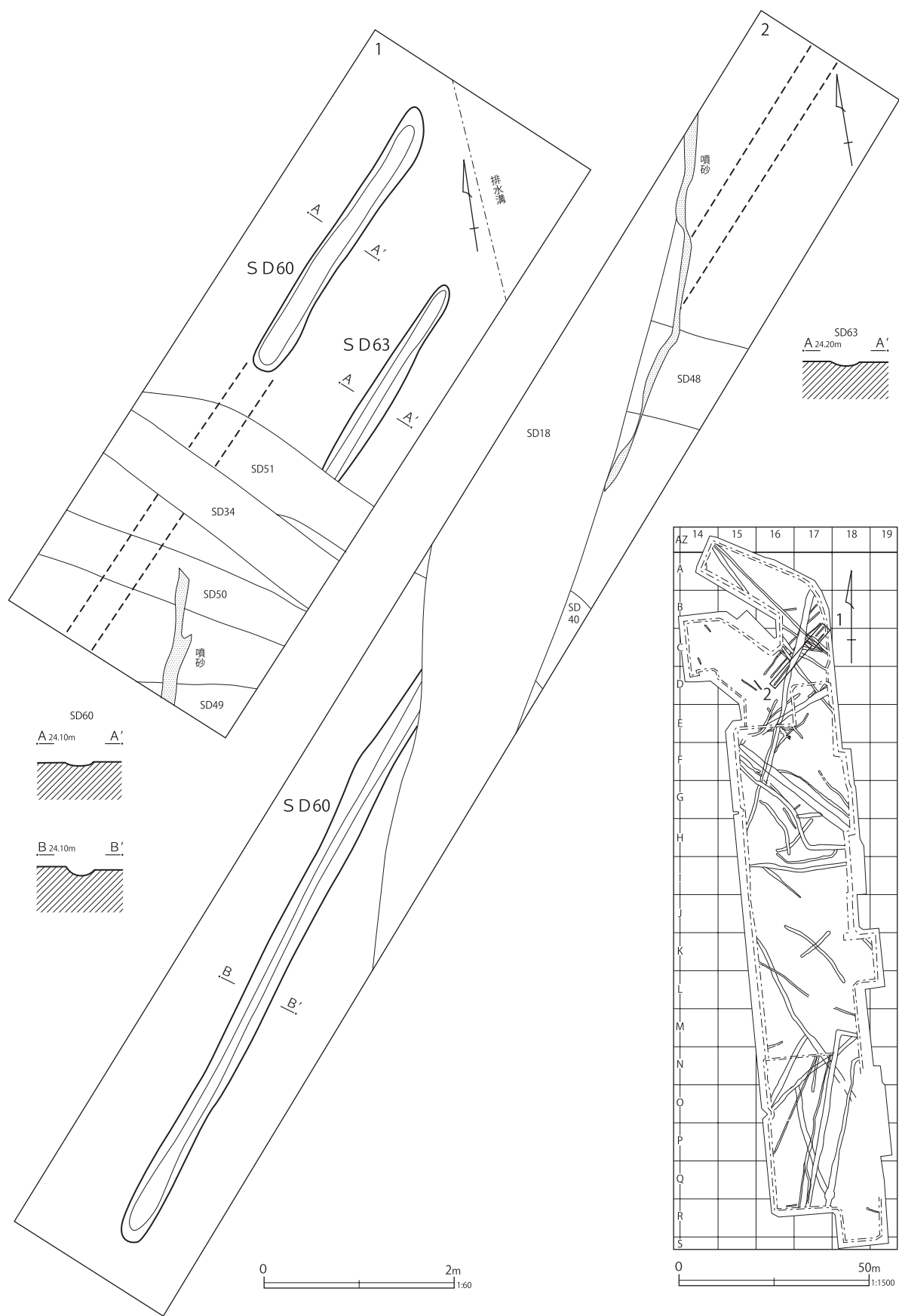
検出した長さは2.96mで、幅は0.14～0.25mである。深さは0.06mである。断面形は皿形で、底面はほぼ平坦であるが、北西側がやや低い。



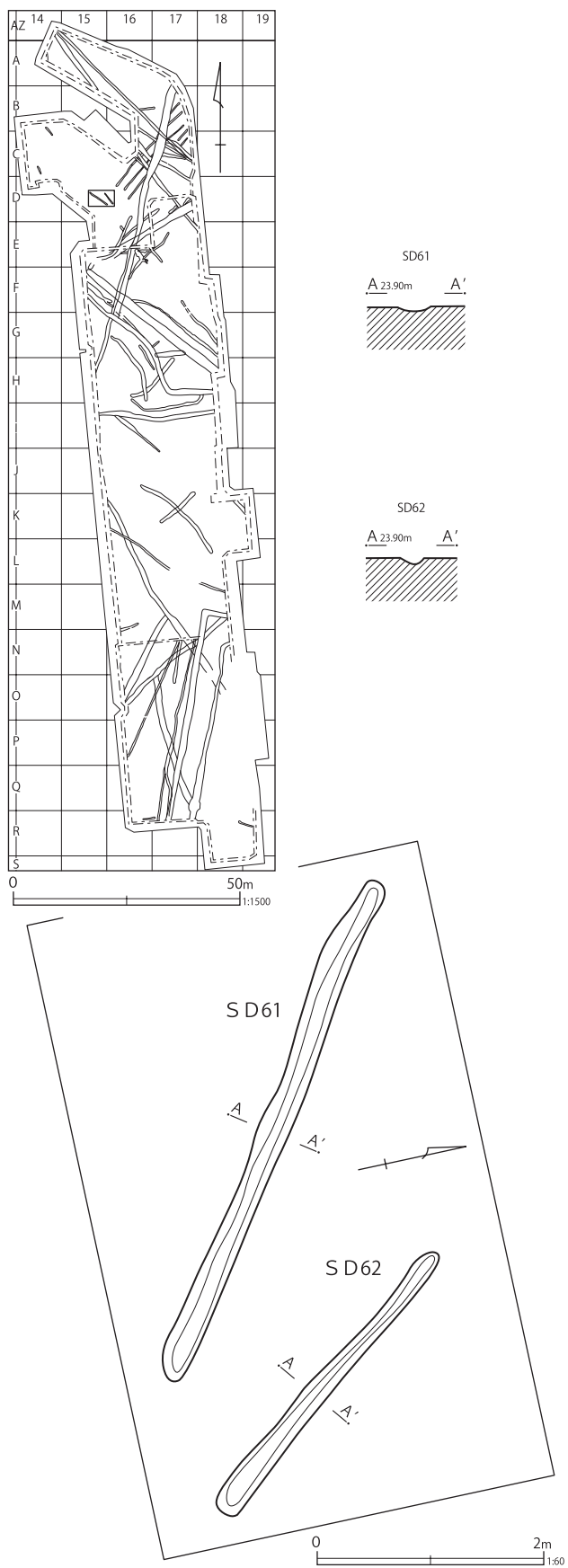
第 113 図 第 56 号溝跡



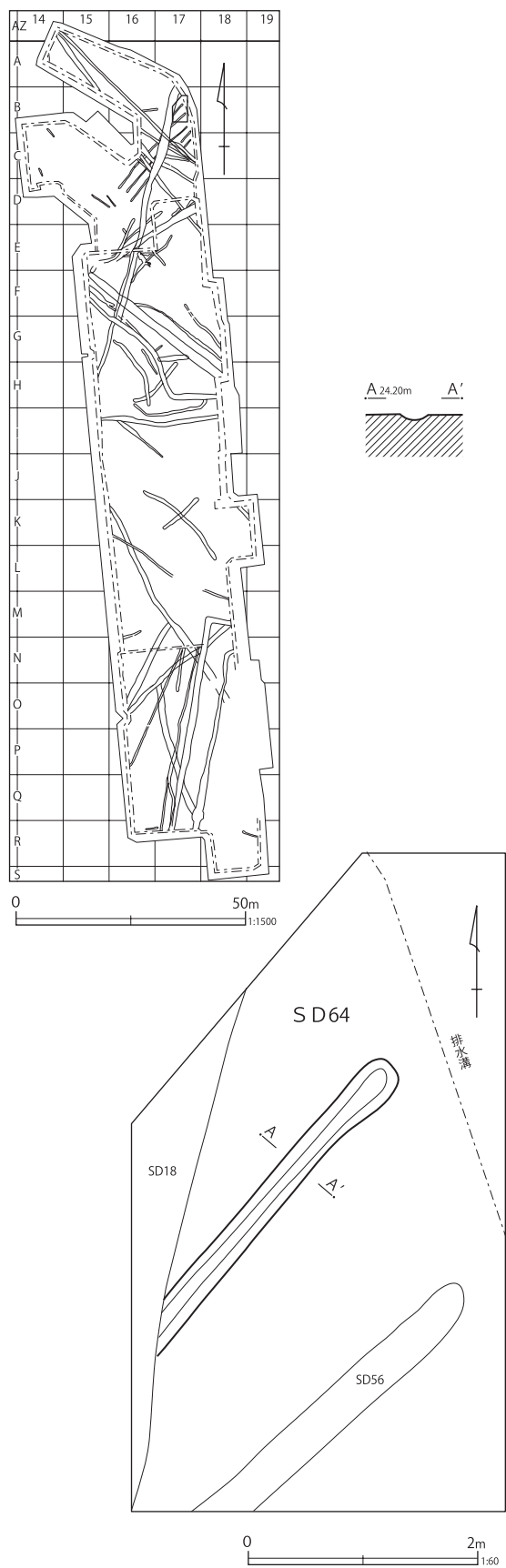
第 114 図 第 59 号溝跡



第 115 図 第 60・63 号溝跡



第116图 第61・62号溝跡



第117图 第64号溝跡

遺物は出土しなかった。

第63号溝跡（第115図）

C-17グリッドに位置する。北東から南西方向に延びる。第60号溝跡に並行し、第51号溝跡付近で消失していた。

検出した長さは2.30mで、幅は0.18～0.28mである。深さは0.05mである。断面形は皿形で、底面は北東から南西方向に僅かに低くなる。

遺物は出土しなかった。

第64号溝跡（第117図）

B-17グリッドに位置する。北東から南西方向に延び、北側は調査区内で消失し、南側は第18号溝跡に壊されていた。第18号溝跡より西側では確認されなかった。

検出した長さは3.03mで、幅は0.23～0.35m

第32表 溝跡出土遺物観察表（第118・119図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	フラスコ形瓶	—	[10.2]	—	I K	90	良好	灰白	S D 9 湖西産 降灰がかかる	45-3
2	須恵器	甕	—	[4.5]	—	I K	5	良好	暗灰	S D 9 湖西産	48-3
3	須恵器	甕	—	[7.1]	—	I K	5	良好	灰オリーブ	S D 9 上野産	48-3
4	須恵器	坏	(10.4)	[2.8]	—	I K	30	普通	灰	S D 12 回転ヘラケズリ 湖西産	45-4
5	土師器	坏	(13.0)	4.1	—	H L	60	普通	淡橙	S D 12 No.1	45-5
6	土師器	坏	(14.0)	[3.4]	4.0	C G H K	60	良好	灰	S D 12 湖西産	45-6
7	土師器	甕	—	[4.9]	4.8	C G H	100	普通	暗褐	S D 12 被熱発泡	45-7
8	土師器	甕	(18.0)	20.1	(4.4)	E G H	40	黒褐	普通	S D 21	45-8
9	須恵器	瓶	—	[4.5]	—	G K	20	普通	暗赤灰	S D 30 No.12 上野産	48-3
10	土師器	坏	10.4	2.5	—	C G H	90	普通	淡褐	S D 30 No.8・11・15	46-1
11	土師器	坏	0.2	3.1	—	C G H I	70	普通	淡褐	S D 30 No.1・8	46-2
12	土師器	坏	(13.6)	[3.4]	—	C E G H	10	普通	淡橙	S D 30 No.17	48-3
13	土師器	鉢	(8.0)	[4.1]	—	D G I	30	普通	橙褐	S D 30 No.3	46-3
14	土師器	盤	20.3	2.5	—	C G H	100	不良	淡橙	S D 30 No.20	46-4
15	土師器	甕	—	(14.4)	—	C G H	25	普通	淡褐	S D 30	—
16	土師器	甕	—	[4.5]	(9.2)	G H I	40	普通	にぶい橙	S D 30 底部煤付着	—
17	土師器	甕	—	[13.7]	—	G H I	20	普通	淡橙	S D 30	46-5
18	須恵器	甕	—	[5.0]	—	I K	5	良好	黒褐	S D 30 上野産か 全面に自然釉	48-3
19	土師器	甕	—	[5.4]	—	C G H	5	橙褐	普通	S D 30 No.7	48-3
20	土師器	甕	—	[9.0]	—	G H I	5	橙褐	普通	S D 30 No.2	48-3
21	土師器	甕	—	[3.3]	—	G H I	5	橙褐	普通	S D 30 No.1	48-3
22	土師器	坏	(11.2)	[3.6]	—	C G	40	不良	淡褐	S D 40	46-7
23	須恵器	甕	—	[10.2]	—	D I K	5	良好	黒褐	S D 40 上野産	48-3
24	須恵器	甕	—	[8.5]	—	I K	5	良好	灰	S D 40 上野産	48-3
25	土師器	坏	10.0	3.9	—	C G H	100	良好	橙	S D 48 No.1 ヘラ記号	46-6
26	須恵器	甕	—	[6.0]	—	D E I K	5	良好	灰	S D 48	48-3
27	須恵器	甕	—	[8.8]	—	E I K	5	良好	灰白	S D 57 No.1 西毛産か 28 と同一か	48-3
28	須恵器	甕	—	[11.0]	—	E I K	5	良好	灰白	S D 40・S D 57 No.1 西毛産か 27 と同一か	48-3

である。深さは0.05mである。断面形は皿形で、底面はほぼ平坦である。

遺物は出土しなかった。

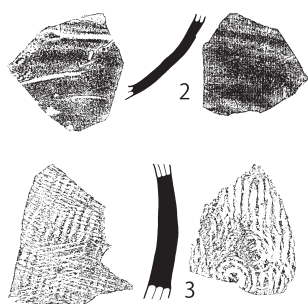
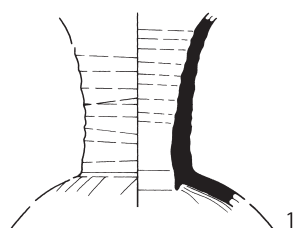
溝跡出土遺物（第118・119図）

古墳時代の溝跡からは、土師器、須恵器が多く出土している。

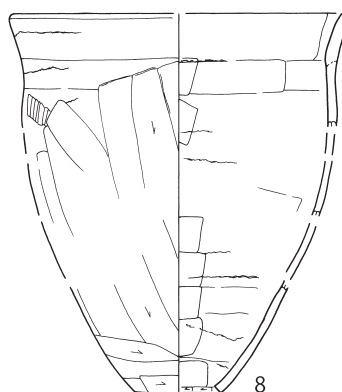
須恵器には、坏、フラスコ型瓶、瓶、甕があり、湖西産と上野産がある。1のフラスコ形瓶は、灰白色を呈する。胴部肩部、口縁部内面に灰がかかる。湖西産である。

土師器には、有段口縁坏・坏身模倣坏・北武蔵型坏・盤・甕が見られ、いずれも7世紀中葉から後半と考えられる。25の坏にはヘラ記号が施されている。

SD9 (1~3)



SD21 (8)



SD12 (4~7)



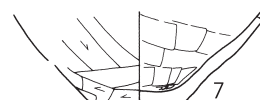
4



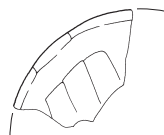
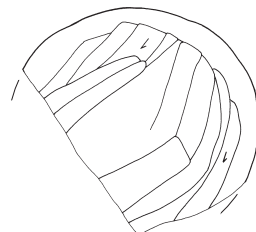
5



6



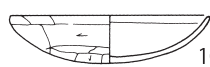
7



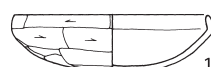
SD30 (9~16)



9



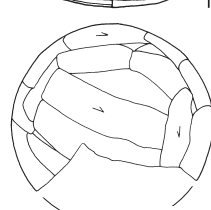
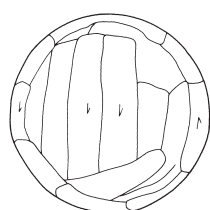
10



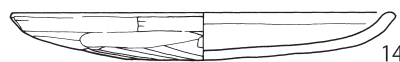
11



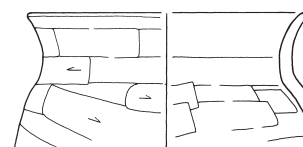
12



13



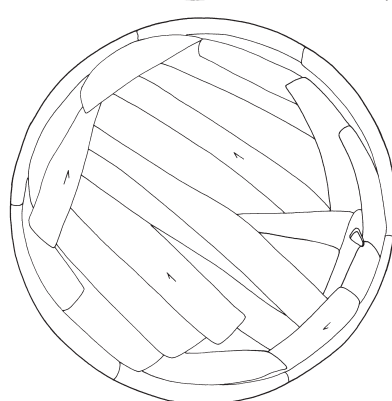
14



15



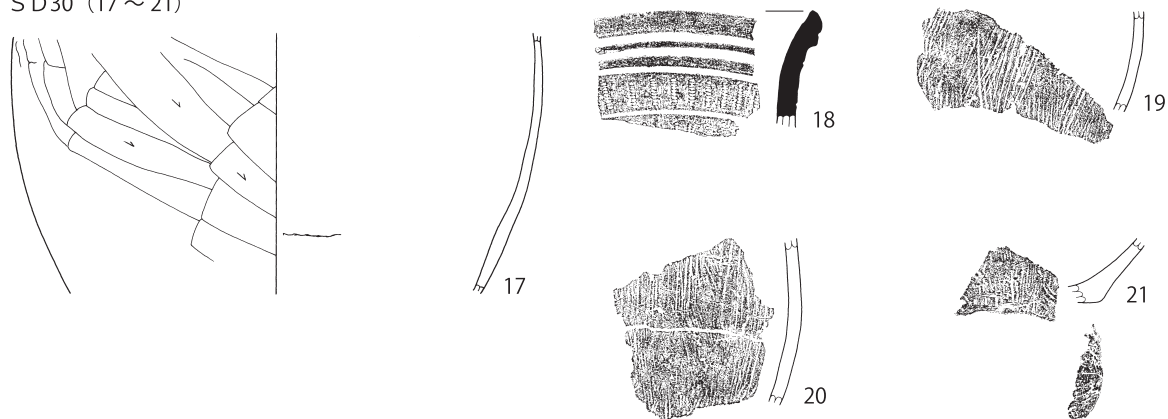
16



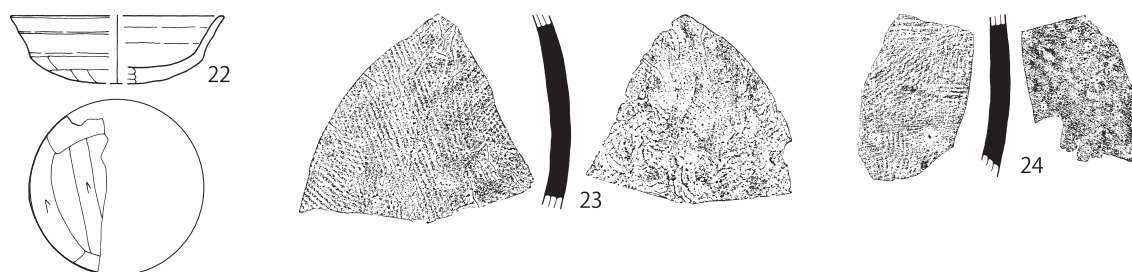
0 10cm
1:4

第118図 溝跡出土遺物(1)

S D30 (17 ~ 21)



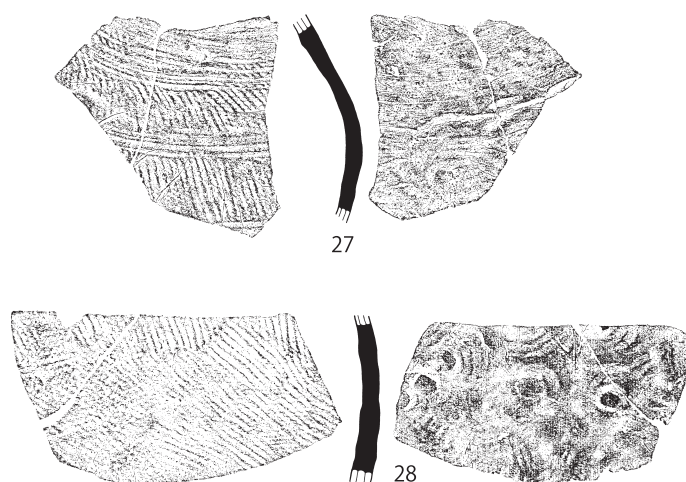
S D40 (22 ~ 24)



S D48 (25 ~ 26)



S D57 (27 • 28)



0 10cm
1:4

第 119 図 溝跡出土遺物 (2)

(4) 土壇

土壇は合計67基を検出し、このうち14基が古墳時代に属する(第120～121図)。

分布は主に、住居跡などが密集する調査区南側のLグリッドライン以南にまとまる傾向にあるが、第39号土壇は、調査区北側のHグリッドに位置する。調査区北側には主に畝跡が分布し、古墳時代に比定されている。

遺物がほとんど出土しないものが多かったため、それらの土壇については、覆土や重複遺構から時期を判断した。

第1号土壇(第120図)

O-16グリッドに位置する。第62号住居跡と重複し、本遺構が古い。第4号溝跡とは近接する位置関係にあり、重複はないものの相互の出土遺物の内容から、第1号土壇が古いと考えられる。

平面形は隅丸長方形である。底面は南東から北西方向に向かって下がっている。壁は緩く湾曲しながら外傾して立ち上がる。覆土は2層に分層できるが、第1層の黒色土が主体である。規模は長軸長1.03m、短軸長0.85m、深さ0.19mである。長軸方位はN-22°-Eを指す。覆土上～中位より、主に土師器甕の胴部破片など小片が出土した。遺構の検出面において既に遺物の一部が露出した状態であり、このことから、遺構の上部は削平されており、本来はさらに深い土壇であったものと推察される。

第122図1～4に出土遺物を示した。1は土師器有段口縁坏である。口縁部に2段を有するが、段部のつくりは甘く、やや不明瞭である。内外面ともに風化が著しい。2は土師器鉢である。口唇部に強いヨコナデが施されており、そのため口縁部中位にわずかに段を有する。また、口縁部と体部との境界の段部には沈線が巡る。体部の外面にはヘラケズリ、内面にはヘラ磨きを施す。内面は黒色を呈する。3・4は、土師器甕で、いずれも口縁部周辺の破片である。3は、口縁部内外面に、

ヨコナデを施す。胴部は、内面にヨコナデ、外面にヘラケズリを施すものと思われるが、風化が著しく不明瞭である。4の胴部は、長胴形を呈すると考えられる。焼成は良好で、焼き締まっている。いずれも、7世紀後半の所産と考えられる。

第23号土壇(第120図)

P-17グリッドに位置する。古墳時代に属する第31号住居跡と重複し南側を壊されており、第23号土壇が新しい。

平面形は不整方形と思われる。底面はやや楕円形を呈する。覆土は4層に分層できた。1層には地山ブロックが多量に含まれており、2～3層は地山によく似たシルト質の土と粘土ブロックの混合層であった。覆土の様相から、本土壇は人為的に埋め戻された可能性が高い。規模は長軸長0.78m、短軸長0.66m、深さ0.63mである。長軸方位はN-62°-Eを指す。

遺物は少なく、土師器の小片が出土したのみであった。

遺構の時期は、重複遺構や覆土から判断した。

第24号土壇(第120図)

P-17グリッドに位置する。平安時代に属する第63号住居跡・第10号溝跡と重複し、第24号土壇が最も古い。

平面形は隅丸長方形である。底面は平坦で壁の立ち上がりは急である。覆土は単層で、シルト質の暗褐色土を主体とするものであった。規模は長軸長0.89m、短軸長0.66m、深さ0.14mである。長軸方位はN-67°-Wを指す。

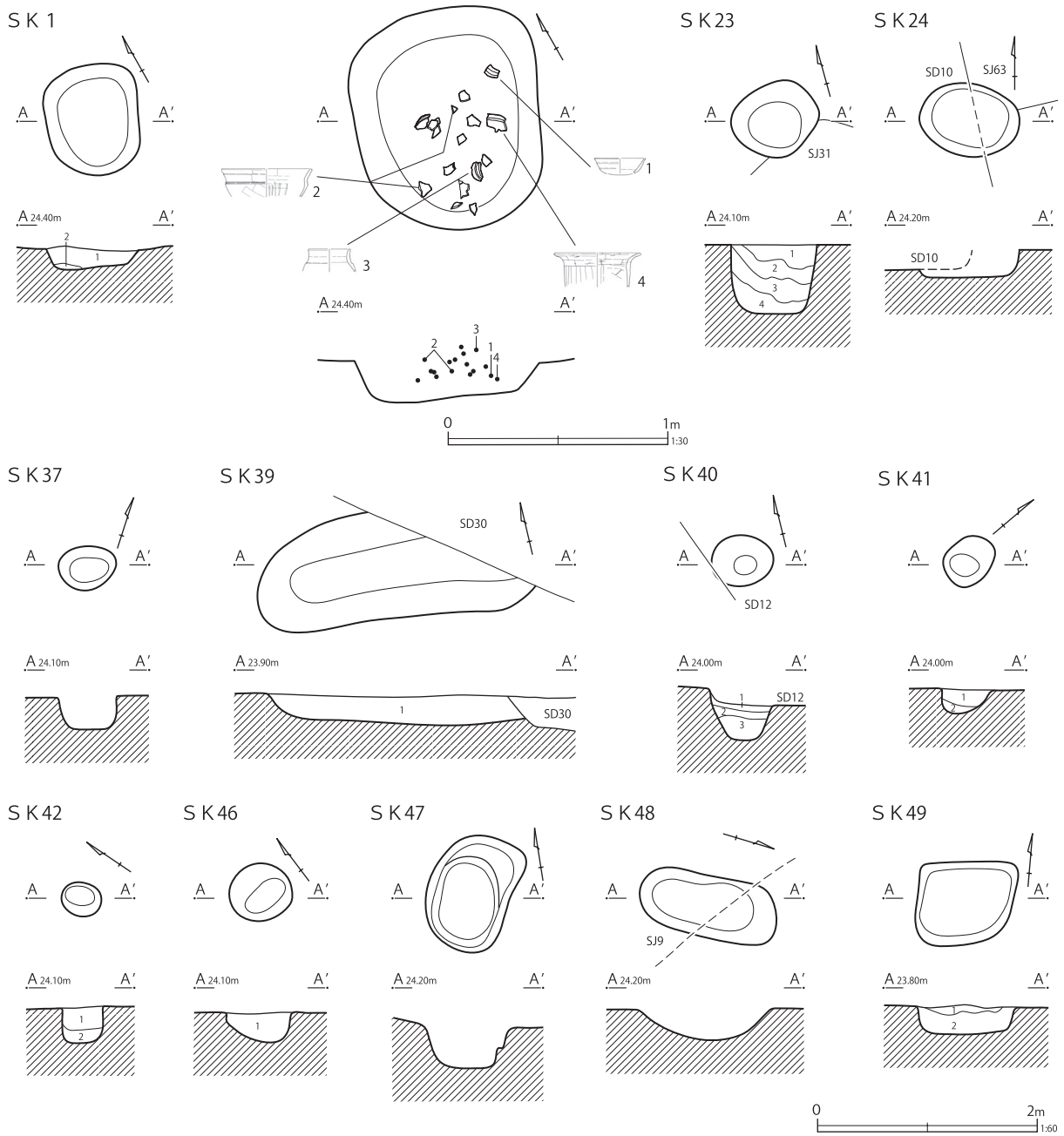
遺物は出土しなかった。

遺構の時期は、重複遺構や覆土から判断した。

第37号土壇(第120図)

L-17グリッドに位置する。第29・72号住居跡と重複し、第37号土壇が古いと思われる。

平面形は不整楕円形である。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長軸長0.52m、短軸長0.41m、深さ0.32mである。長軸方



SK 1
 1 黒色土 しまりあり 粘性強 焼土・炭化物少量含む
 灰黄褐色土 (地山土) 均等に含む
 2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性あり 地山土がブロック状に堆積 1層混入

SK 23
 1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 地山ブロック多量含む 炭化粒子微量含む
 2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性強 シルトと粘土ブロックの混合
 マンガン多量含む 地山に似るが粘土ブロックを含む
 3 灰白色土 しまりあり 粘性弱 シルトと粘土ブロックの混合
 2層より砂っぽい 地山に似るが粘土ブロックを含む
 4 褐灰色土 しまりあり 粘性強 炭化物粒子微量 地山に似るが粘土ブロックを含む

SK 39
 1 黒色土 灰色土を少量含む

SK 40
 1 黄灰色土 しまりあり 粘性あり 炭化粒子・土器片を含む
 2 褐灰色土 しまりは1層よりある 粘性は1層よりある 1層の土を斑状に含む
 3 灰色土 しまり強 粘性強

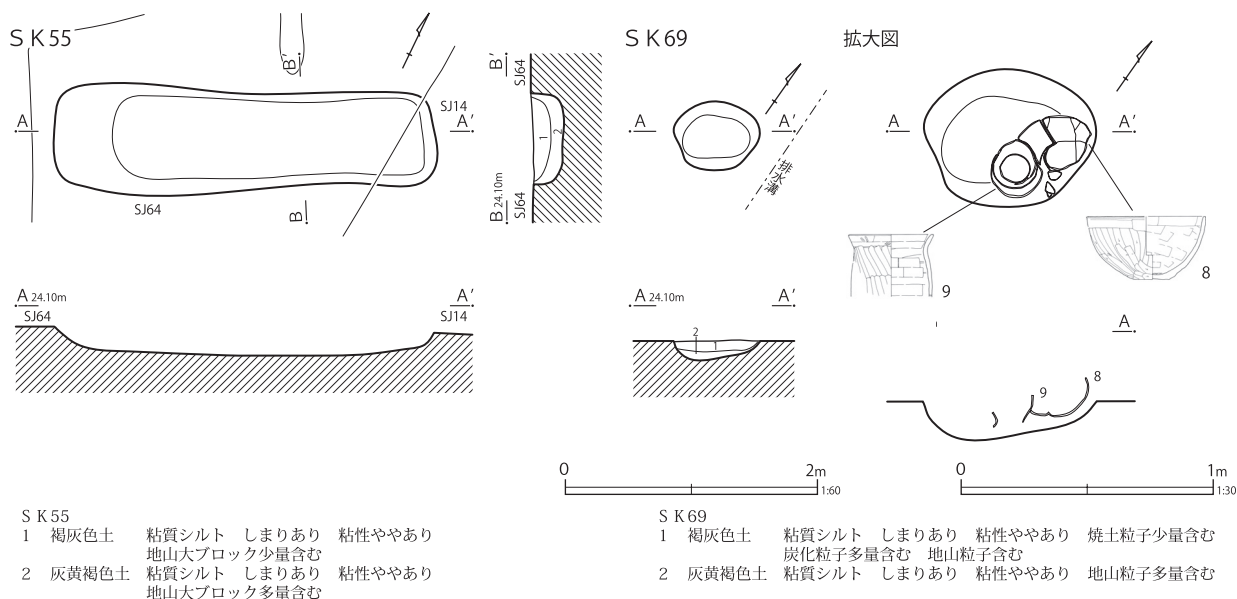
SK 41
 1 黄灰色土 しまりややあり 粘性ややあり 炭化粒子を微量含む
 2 褐灰色土 しまり強 粘性強 炭化粒子を微量含む

SK 42
 1 褐灰色土 しまりややあり 粘性ややあり 灰色粘土ブロックを含む
 炭化粒子・焼土粒子を微量含む
 2 黄灰色土 しまり強 粘性強 灰色粘土ブロックを微量含む

SK 46
 1 灰黄褐色土 炭化粒子微量含む 土器小破片を微量含む

SK 49
 1 黄灰色土 炭化物を全体に多量含む
 2 黄灰色土 しまり弱 粘性弱 青灰色砂を全体に含む 炭化物を微量含む

第 120 図 第 1・23・24・37・39～42・46～49 号土壌



第 121 図 第 55・69 号土坑

位はN-66°-Eを指す。

遺物は少なく、土師器細片が少量出土した。

遺構の時期は、重複遺構や覆土から判断した。

第39号土坑（第120図）

H-17・18グリッドに位置する。第77号住居跡、第30号溝跡と重複する。第77号住居跡より新しく、第30号溝跡より古いと思われる。

第30号溝跡に東側を壊されているため平面形は不明であるが、遺存部から、東西方向に長い不整楕円形と推察される。底面は緩やかな起伏があり、壁は外湾しながら立ち上がる。覆土は単層で、灰色土を少量含む黒色土を主体とする。規模は長軸長2.88m、短軸長1.00m、深さ0.30mである。長軸方位はN-85°-Wを指す。

遺物は少なく、土師器の小片が1点出土したのみであった。

遺構の時期は、重複遺構や覆土から判断した。

第40号土坑（第120図）

L-16グリッドに位置する。第12号溝跡と重複し、第40号土坑の方が古い。第12号溝跡完掘後、底面において検出された。

第12号溝跡に上面が壊されているため平面形

態は不明であるが、円形ないし楕円形と推察される。覆土は、3層に分層できた。いずれも粘性の強い灰色みをおびた土から成り、地山に近い覆土である。1層中には炭化物と土器の細片が含まれていた。底面はほぼ平坦で、壁は緩く湾曲しながら斜めに立ち上がる。

規模は長軸長0.56m、短軸長0.47m、深さ0.34mである。長軸方位はN-82°-Wを指す。前述のとおり覆土上層に土器細片が含まれていたが、遺物は出土しなかった。

遺構の時期は、重複遺構や覆土から判断した。

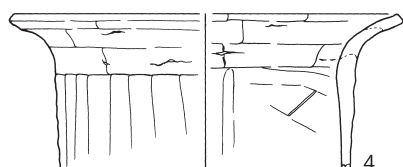
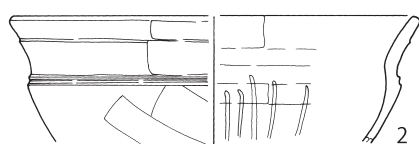
第41号土坑（第120図）

L-16グリッドに位置する。

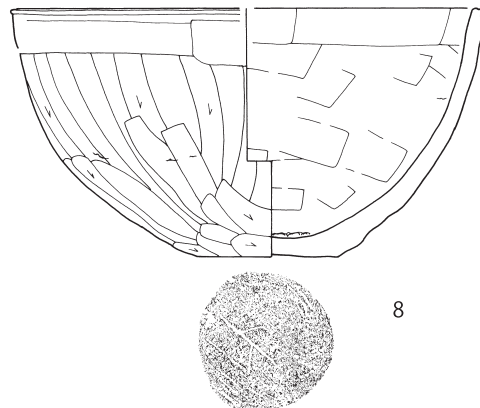
平面形は不整楕円形である。覆土は2層に分層できた。いずれも、地山に近い黄灰色土および、褐灰色土であり、全体に炭化粒子が微量含まれていた。底面は楕円形で、中央部がやや窪む。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、北側の傾斜は緩い。規模は長軸長0.50m、短軸長0.40m、深さ0.21mである。長軸方位はN-11°-Wを指す。

遺物は、古墳時代に比定される土師器甕・坏の小片が出土した。

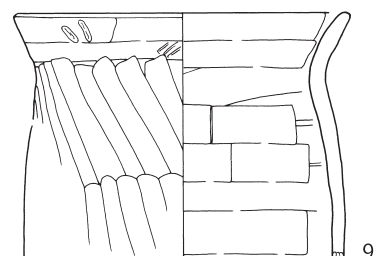
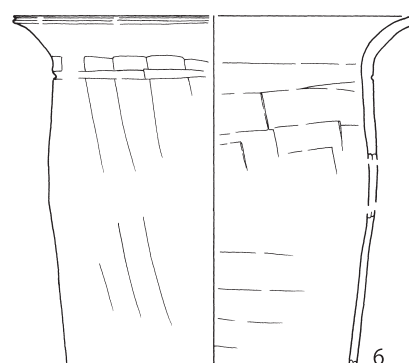
SK 1 (1~4)



SK 69 (7~9)



SK 55 (5・6)



0 10cm
1:4

第122図 土壌出土遺物

第33表 土壌出土遺物観察表 (第122図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.2)	[3.4]	—	ACGK	20	普通	黒褐	SK 1 No. 11	48-4
2	土師器	鉢	(21.6)	[6.7]	—	CGIK	10	普通	淡褐	SK 1 No. 1・No. 6・No. 13	48-4
3	土師器	甕	(10.2)	[5.1]	—	CGHK	10	普通	淡褐	SK 1 No. 3	48-4
4	土師器	甕	(20.8)	[8.2]	—	CEGHI	20	良好	黒褐	SK 1 No. 8	48-4
5	土師器	坏	(14.2)	[2.6]	—	CEGI	20	普通	淡褐	SK 55	48-4
6	土師器	甕	(21.0)	[18.6]	—	EGHI	25	普通	にぶい黄橙	SK 55	46-8
7	土師器	坏	(11.8)	[3.4]	—	CGHI	20	普通	橙褐	SK 69	46-9
8	土師器	鉢	(25.0)	13.0	7.3	GH	45	普通	明褐	SK 69 No. 1 底部木葉痕 煤付着	47-1
9	土師器	甕	17.8	[13.1]	—	GHI	100	普通	赤暗褐	SK 69 No. 2・No. 3	47-2

第42号土壌 (第120図)

M-16グリッドに位置する。平面形は楕円形である。覆土は2層で褐灰色のシルト質土を主体とし粘土ブロックを含むのが特徴である。底面は平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。規模は長軸長0.37m、短軸長0.32m、深さ0.30mである。長軸方位はN-24°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第46号土壌 (第120図)

L-16グリッドに位置する。第32号溝跡と重複し、第46号土壌の方が古い。

平面形は、南側が第32号溝跡に壊されているため不明であるが、円形ないしは楕円形と思われる。底面は楕円形を呈し、中央がやや窪む。壁は底面から緩く湾曲したのち、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は単層で、炭化物粒子を僅かに含む粘性

の強い灰黄褐色土であった。規模は長軸長0.56m、短軸長0.52m、深さ0.25mである。長軸方位はN-87°-Eを指す。

遺物は、土師器甕、須恵器坏の小片が出土した。

遺構の時期は、重複遺構や覆土から判断した。

第47号土壌（第120図）

Q-16グリッドに位置する。第8・69号住居跡と重複する。新旧関係は、第8号住居跡より古く、第69号住居跡より新しい。

平面形は不整隅丸長方形である。底面は皿状であり、南側に底面の3分の2ほどを占める窪みを有する。壁は外傾して立ち上がり、西側はなだらかであるが、東側は明瞭な段を持ち、テラス状である。規模は長軸長1.06m、短軸長0.76m、深さ0.35mである。長軸方位はN-29°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

遺構の時期は、重複遺構や覆土から判断した。

第48号土壌（第120図）

Q-17グリッドに位置する。第9号住居跡と重複し、第48号土壌の方が古い。

平面形は楕円形である。底面は北側が広がり、この部分が深くなる。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。規模は長軸長1.29m、短軸長0.57m、深さ0.29mである。長軸方位はN-3°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

遺構の時期は、重複遺構や覆土から判断した。

第49号土壌（第120図）

E-17グリッドに位置する。平面形は隅丸方形である。底面は中央部が僅かに低いほぼ平坦である。壁は急角度で直線的に立ち上がる。覆土は2層に分けられた。第1層は炭化物を多量に含むのが特徴である。規模は長軸長0.91m、短軸長0.76m、深さ0.20mである。長軸方位はN-84°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第55号土壌（第121図）

O-17グリッドに位置する。第64号住居跡の

床面を掘り下げたところで検出され、第55号土壌が古い。平面形は隅丸長方形である。底面はほぼ平坦で、壁は湾曲して立ち上がった後ほぼ垂直となるが、西壁は緩く立ち上がっている。覆土は2層に分層でき、埋め戻されたと考えられる。規模は長軸長3.04m、短軸長0.89m、深さ0.25mである。長軸方位はN-65°-Eを指す。

遺物は、土師器甕・坏、須恵器甕の小片が少量出土した。

第122図5・6に出土遺物を示した。5は土師器の坏である。器壁はやや薄手であり、表面の風化が激しい。口縁部にはヘラナデを施し、体部内面にヘラナデ、外面にヘラケズリの痕跡がわずかに認められる。7世紀後半の所産と考えられる。

6は土師器の甕である。口唇部には強いヨコナデを施す。胴部外面には縦方向のヘラケズリを施し、内面にはヘラナデを施す。

遺構の時期は、出土した遺物から古墳時代と考えられる。

第69号土壌（第121図）

R-19グリッドで検出した。第57号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形である。底面は平坦であるが西側がやや低くなる。壁は緩く湾曲してして立ち上がる。規模は長軸長0.70m、短軸長0.55m、深さ0.15mである。長軸方位はN-54°-Eを指す。遺物は、確認面で土師器甕が出土した。

第122図7～9に出土遺物を示した。7は、土師器の坏である。いわゆる模倣坏であり、底部にヘラケズリを施す。8は、土師器の鉢である。胴部外面には縦方向のヘラケズリ、内面にはヘラナデを施す。底部には木葉痕が認められるが、外周はヘラケズリによって痕跡を消している。9は、土師器の甕である。胴部に縦方向のヘラケズリを施す。胴部過半を欠損するが、おそらく長胴形を呈するものと考えられる。いずれも、7世紀後半の所産と考えられる。

(5) 円形周溝状遺構

円形周溝状遺構は2基検出した。1基は調査区南側の住居跡が密集する範囲にあり、他の1基は調査区中央で畝跡の広がる範囲にある。両者とも溝跡以外の遺構とは重複していない。

第1号円形周溝状遺構 (第123図)

　　〇ー16・17グリッドに位置する。第10号溝跡と重複し、これに壊されている。また、周溝区画内から第20号土壌が検出されているが、新旧関係は不明である。

周溝の平面形はほぼ円形である。北西側と北東側はやや湾曲がきつくなっている。

規模は、東西方向の周溝内側で3.98mである。
周溝は、幅が0.37～0.56m、深さは0.15mである。

断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。

覆土は、地山粒子を含む灰黄褐色土の単層で、

自然堆積と考えられる。

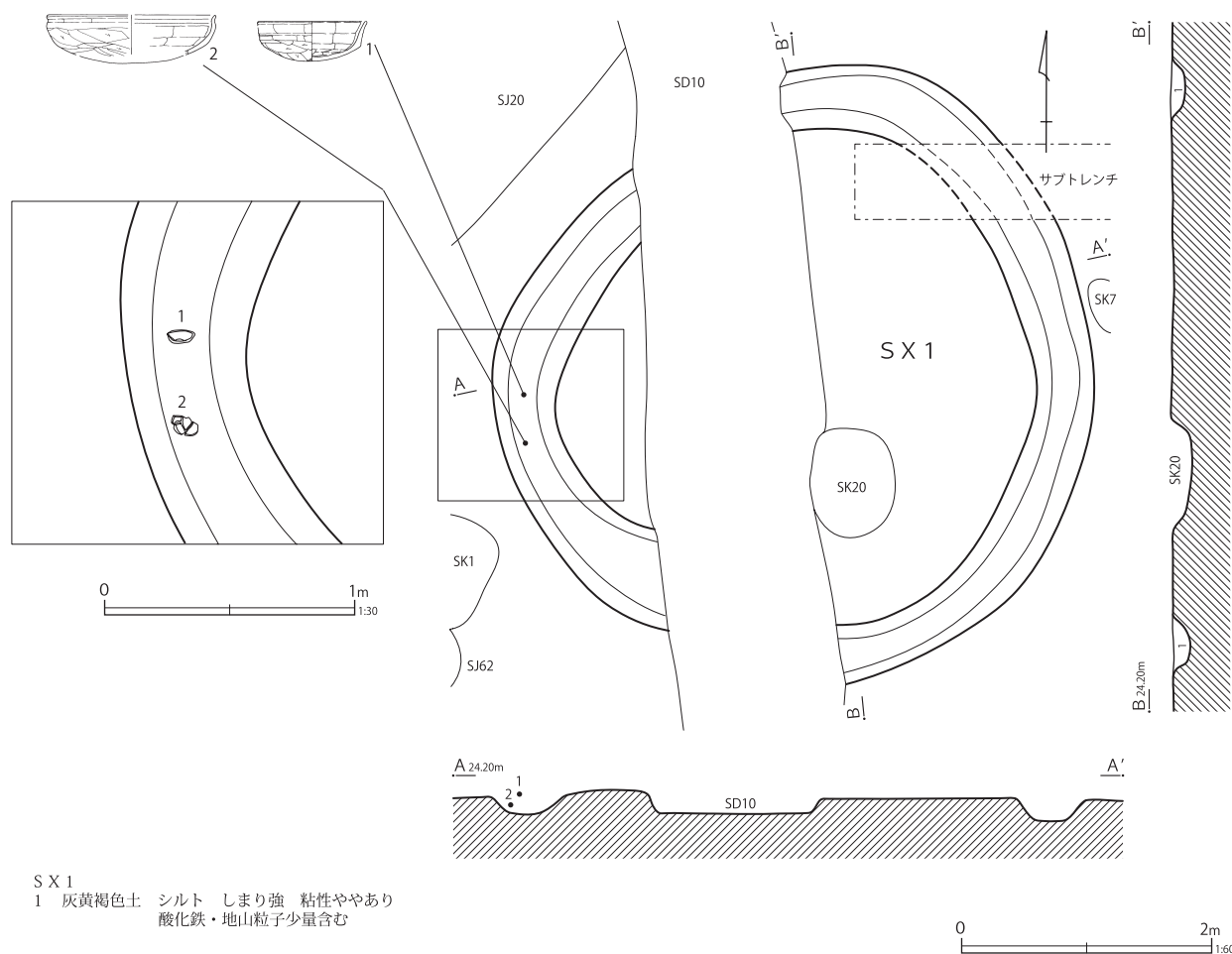
遺物は、土師器甕の小片や坏が周溝の西側部分から少量出土した。

時期は、有段口縁坏、比企型坏の形態から、7世紀前半に位置づけられる。

第1号円形周溝状遺構出土遺物 (第124図)

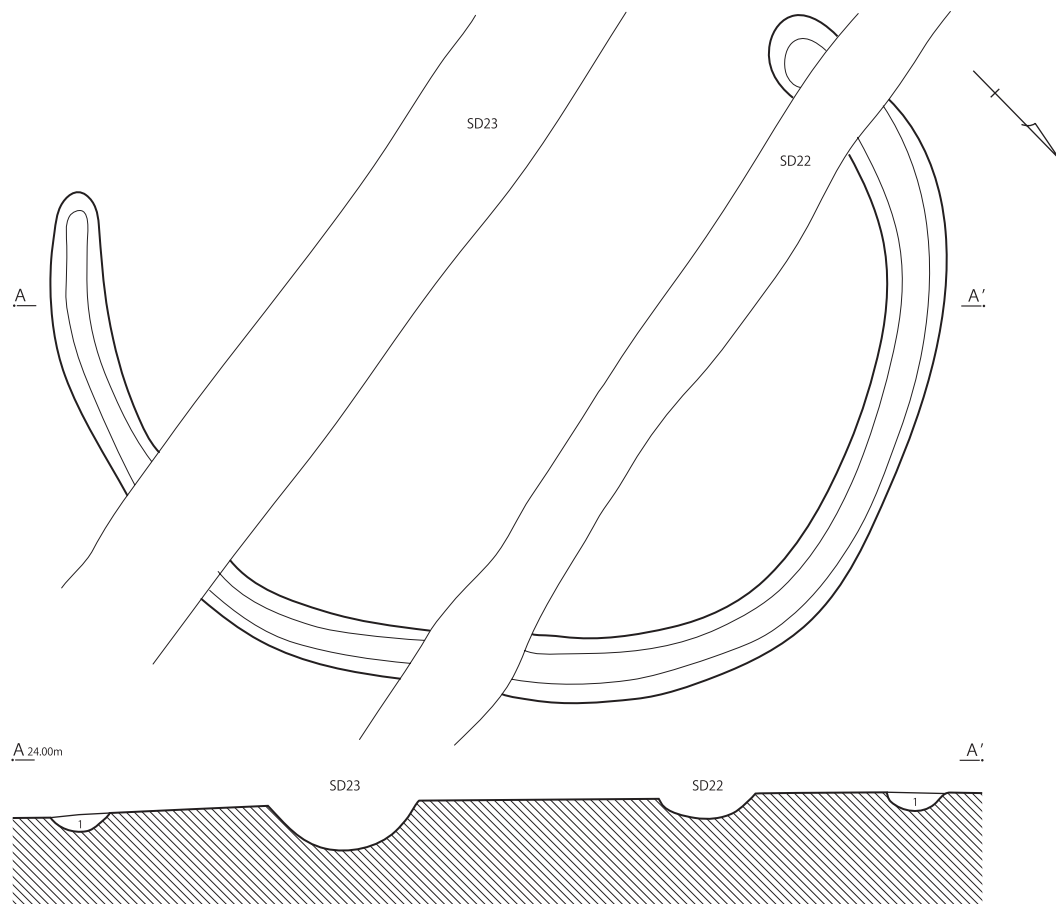
1・2は、土師器の坏である。

1は有段口縁坏である。内外面とも黒色処理されており、色調は黒褐色から暗褐色である。胎土には角閃石が多量含まれている。焼成は良好で、硬質。2は比企型坏である。口縁部は端部が摘ままれて、強く屈曲して外反する。色調は淡褐色から橙褐色で、外面は暗褐色が強い。胎土には角閃石のほか軟質の赤色粒子が多く含まれている。風化が進み、器表が荒れているため、赤彩の有無は確認できなかった。



第 123 図 第 1 号円形周溝状遺構

S X 2



S X 2

1 褐灰色土 しまりややあり 粘性ややあり 酸化鉄・炭化粒子を含む オリーブ灰色砂をブロック状に含む

0 2m 1:60

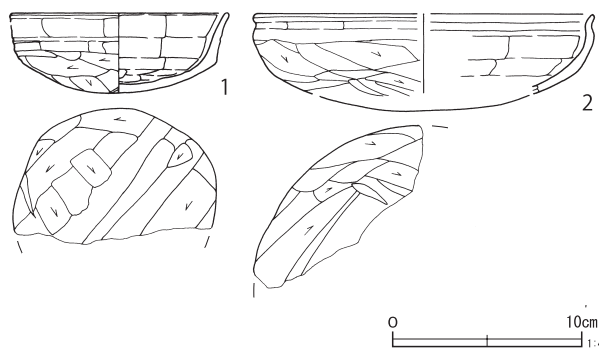
第 124 図 第 2 号円形周溝状遺構

第 2 号円形周溝状遺構（第125図）

H・I-17グリッドに位置する。周溝の南側は検出面がやや低かったために消失している。第20・22号溝跡と重複し、いずれよりも古い。周溝区画内に、土壌、施設は検出されなかった。平面形は半円形である。

規模は、北西-南東方向の周溝内側で6.09mである。周溝は幅0.37~0.54m、深さ0.13mである。

底面はほぼ平坦で、壁は内外側とも緩やかに内湾しながら立ち上る。覆土は単層で、炭化物粒子と砂粒をブロック状に含んでいた。自然堆積と考



第 125 図 第 1 号円形周溝状遺構出土遺物

えられる。遺物は出土しなかった。

時期は、第 1 号円形周溝状遺構と同時期の 7 世紀前半に位置づけておきたい。

第 34 表 第 1 号円形周溝状遺構出土遺物観察表（第 125 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.6)	4.3	—	C G K	50	良好	黒褐	No. 1	47-3
2	土師器	坏	(18.0)	[4.2]	—	C G H	15	普通	暗褐	N-18 P 2 比企型坏	47-4

(6) 畠跡

調査区の中央から北側にかけては、竪穴住居跡はほとんど検出されず、畠を耕作した際の畝跡が広がっていた。

畝跡のまとまりから任意に7箇所に分けたが、畝間の溝は深さが一定ではなく、浅いものは消失している可能性がある。したがって、残存していた遺構が、それぞれが当時の畠の単位を明確に表しているのかは確実ではない。

また、畠跡との想定の下に栽培植物を推定することを目的として花粉分析を行ったが、花粉化石

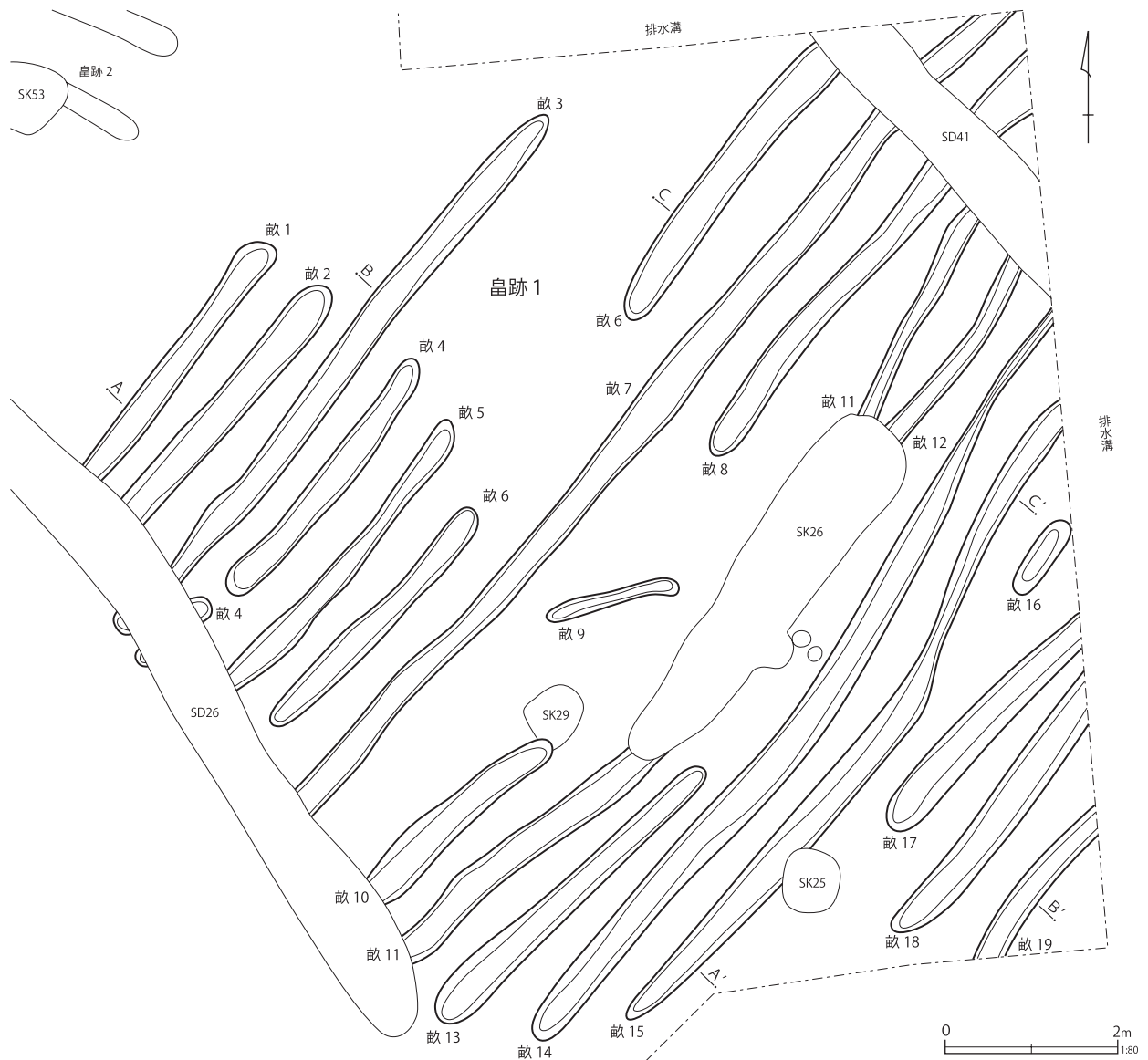
そのものがほとんど検出されず、栽培植物の検討には至らなかった(第V章参照)。

これらの畠跡の時期は、それを推定できる遺物が出土していないため、確実ではないが、重複関係から古墳時代と推定される。

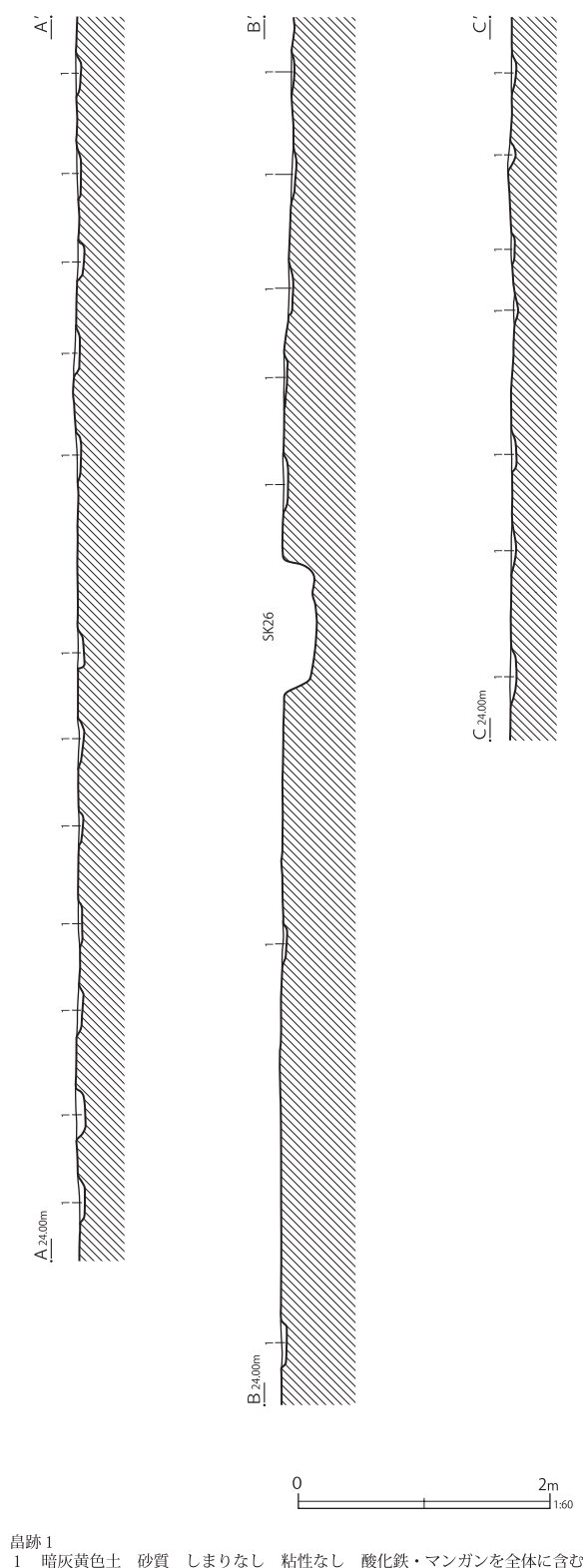
第1号畠跡(第126・127図)

K・L-17・18グリッドを中心に広がる。畠が広がる範囲の最南端で、竪穴住居跡の密集する範囲の北側に接している。重複する第26・41号溝跡、第25・26号土壇より古い。

畝跡は南西から北東方向に延び、東側は調査区



第126図 第1号畠跡(1)



第 127 図 第 1 号畠跡 (2)

外まで延びている。畝溝同士の重複はない。南西側と北東側で切れている畝溝があるが、残存状態が悪かったため、確認作業の際に削平してしまった部分も多い可能性がある。

畝溝は、19条検出した。規模は、長さ1.0m～12.13m、幅は0.14～0.51m、深さは0.01～0.08mである。ごく浅い。溝と溝との間隔は0.91m～0.22mであるが、殆どは0.3m～0.5mの間に収まる。

覆土は単層で、暗灰黄色の砂質土である。

第 1 号畠跡として認識した全体の範囲は、北東から南西方向が13.22m、北西から南東方向が12.80mで、169.96㎡に及ぶ。東側は更に調査区外に広がっている。耕地の広さとしては1.7畝程度であり、本来は2畝位の広さがあったと考えられる。

遺物は、土師器の小片が少量出土したのみで図示できるものはない。

第 2 号畠跡 (第128図)

J-16・17、K-18グリッドに位置する。この範囲は確認面をやや下げていたこともあり、特に残存状況がよくなかった。重複する第53号土壙、第27号溝跡よりも古い。

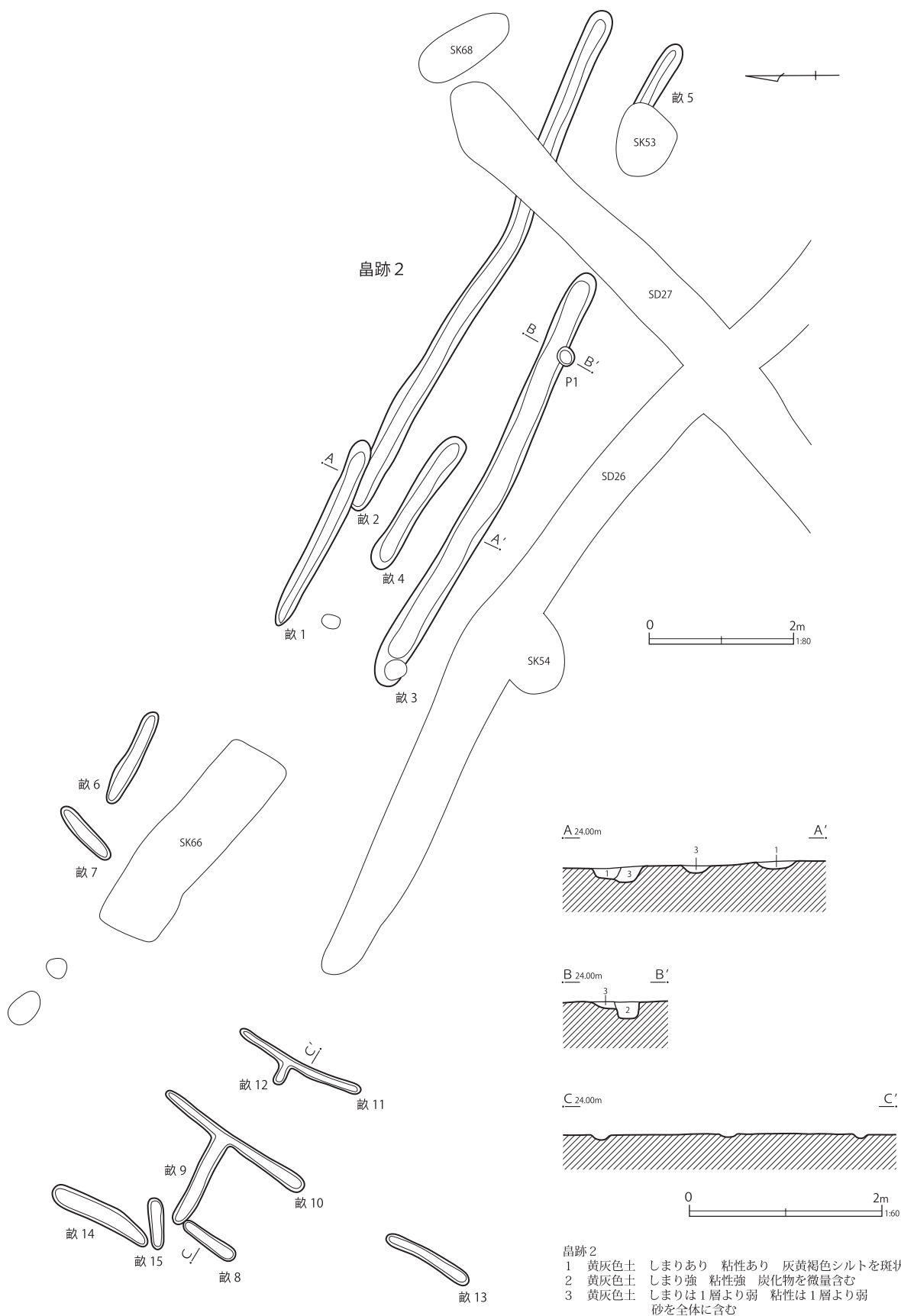
北西から南東方向に延びる畝溝と、北東から南西方向に延びる畝溝で構成されている。北東側の畝溝は途切れ途切れである。

畝溝の規模は、長さ0.32～7.70m、幅0.12～0.46m、深さは0.02～0.17mである。ごく浅い。溝と溝との間隔は、0.05m～0.86mである。

覆土は、灰黄褐色シルト、砂を含む黄灰色土で、自然堆積である。

第 2 号畠跡として認識した全体の範囲は、北西から南東方向に18.18m、北東から南西方向に8.03mで、145.98㎡に及ぶ。耕地の広さとしては1.47畝程度である。

遺物は土師器小片が1点出土したのみで図示できるものはない。



第 128 図 第 2 号畠跡

第3号畠跡（第129図）

I-15～17グリッドにかけて位置する。第23・25号溝跡に壊されている。

第23号溝跡の南北に広がり、畝溝の総数は27条である。南側は北西から南東方向の畝跡と北東から南西方向の畝跡が直交している。後者の畝跡の方が新しい。

規模は、長さ1.67～8.38mで、幅0.12～0.62m、深さは0.01～0.13mである。ごく浅い。溝と溝との間隔は、0.11～1.00mである。

覆土は青灰色砂を含む褐灰色土、黄灰色土で、自然堆積である。

第23号溝跡の南側は、畝溝の配置から西側と東側で、様相が異なる。

西側の畝溝は南北方向が長さも間隔もほぼ均等で8条あり、それを横切るように、東西方向の畝溝が4条掘られている。

東側の畝溝は南北方向がやや不揃いで9条、東西方向はほぼ均等な間隔で6条認められる。

第23号溝跡の北側はやや疎らで、一部方向が揃わないものがある。

第3号畠跡として認識した全体の範囲は、北東から南西方向が9.14m、北西から南東方向が15.85mで、面積は144.86㎡である。耕地の広さとしては1.46畝程度である。

遺物は出土しなかった。

第4号畠跡（第130図）

G・H-15・16グリッドに位置する。第14・24号溝跡に挟まれた位置にある。他の遺構との重複はない。

第3号畠跡と同じく、北西から南東方向の畝と北東から南西方向の畝が直交している。耕作の繰り返しによって筏状を呈している。

畝溝は、南北方向が11条、東西方向は8条認められた。規模は、長さ2.76～8.19m、幅0.20～0.69m、深さは0.05～0.17mである。溝と溝との間隔は0.08～0.74mである。

覆土は炭化物、地山粒子を含む黄灰色土、灰色土で、自然堆積である。

第4号畠跡として認識した全体の範囲は、北東から南西方向に8.25m、北西から南東方向に9.44mで、77.88㎡に及ぶ。耕地の広さとしては0.78畝程度である。

遺物は出土しなかった。

第5号畠跡（第130図）

I-17・18グリッドに位置する。他の遺構との重複はない。

第3・4号畠跡と同じく北西から南東方向の畝と、北東から南西方向の畝が直交しているが、畝の本数は3・4号に比してややまばらである。

畝溝は、南北方向が4条、東西方向は14条認められた。規模は、長さ0.83～5.53m、幅0.13～0.44m、深さは0.02～0.09mである。ごく浅い。溝と溝との間隔は0.14～0.38mである。

第5号畠跡として認識した全体の範囲は、北東から南西方向が8.12m、北西から南東方向が5.74mで、面積46.60㎡である。

遺物は出土しなかった。

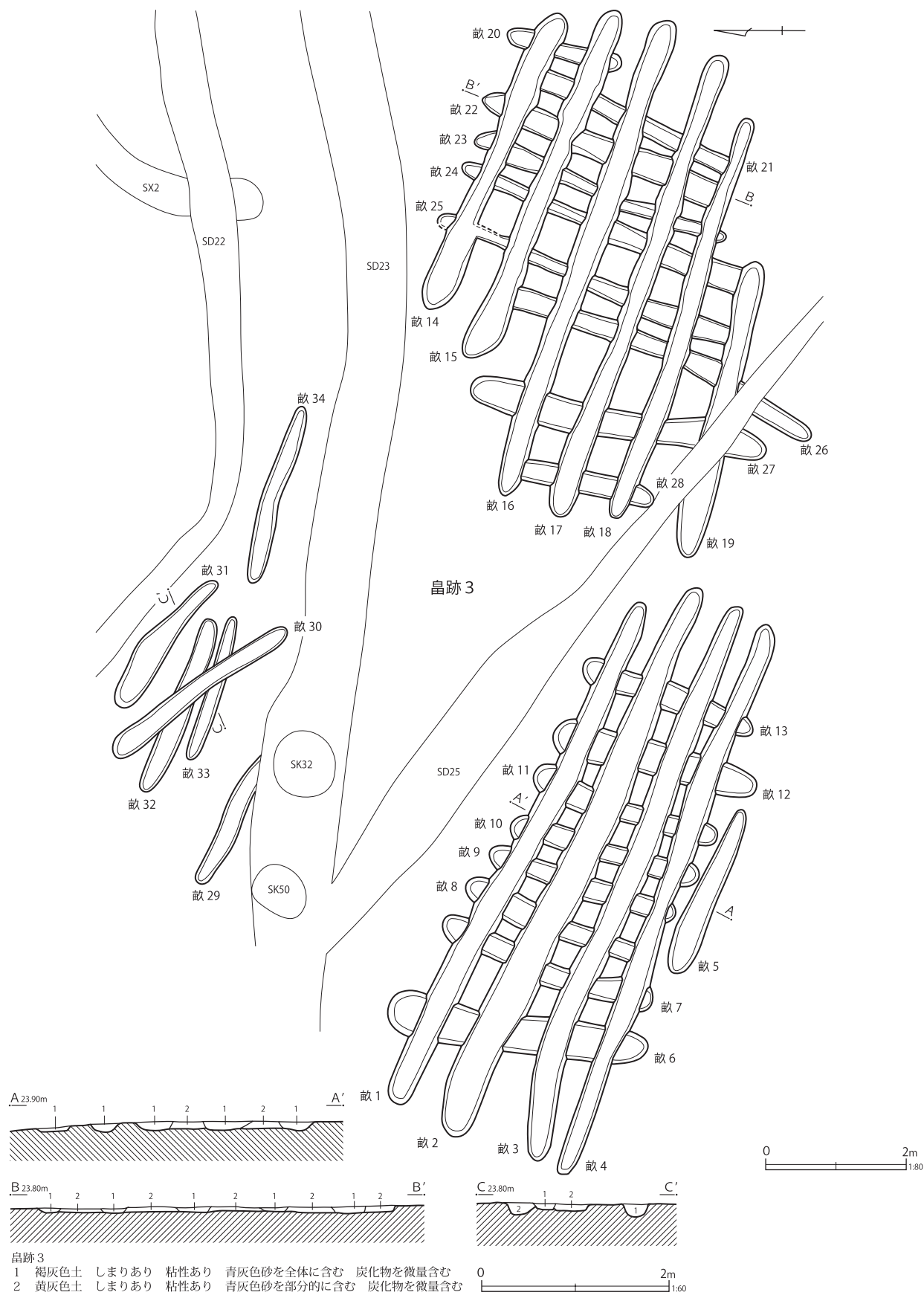
第6号畠跡（第131・132図）

E-18・F-16・17・18・G-16・17・18グリッドに位置する。重複する第30・42・43号溝跡よりも古い。

第3～5号畠跡同様に、北西から南東方向の畝と北東から南西方向の畝が直交している。

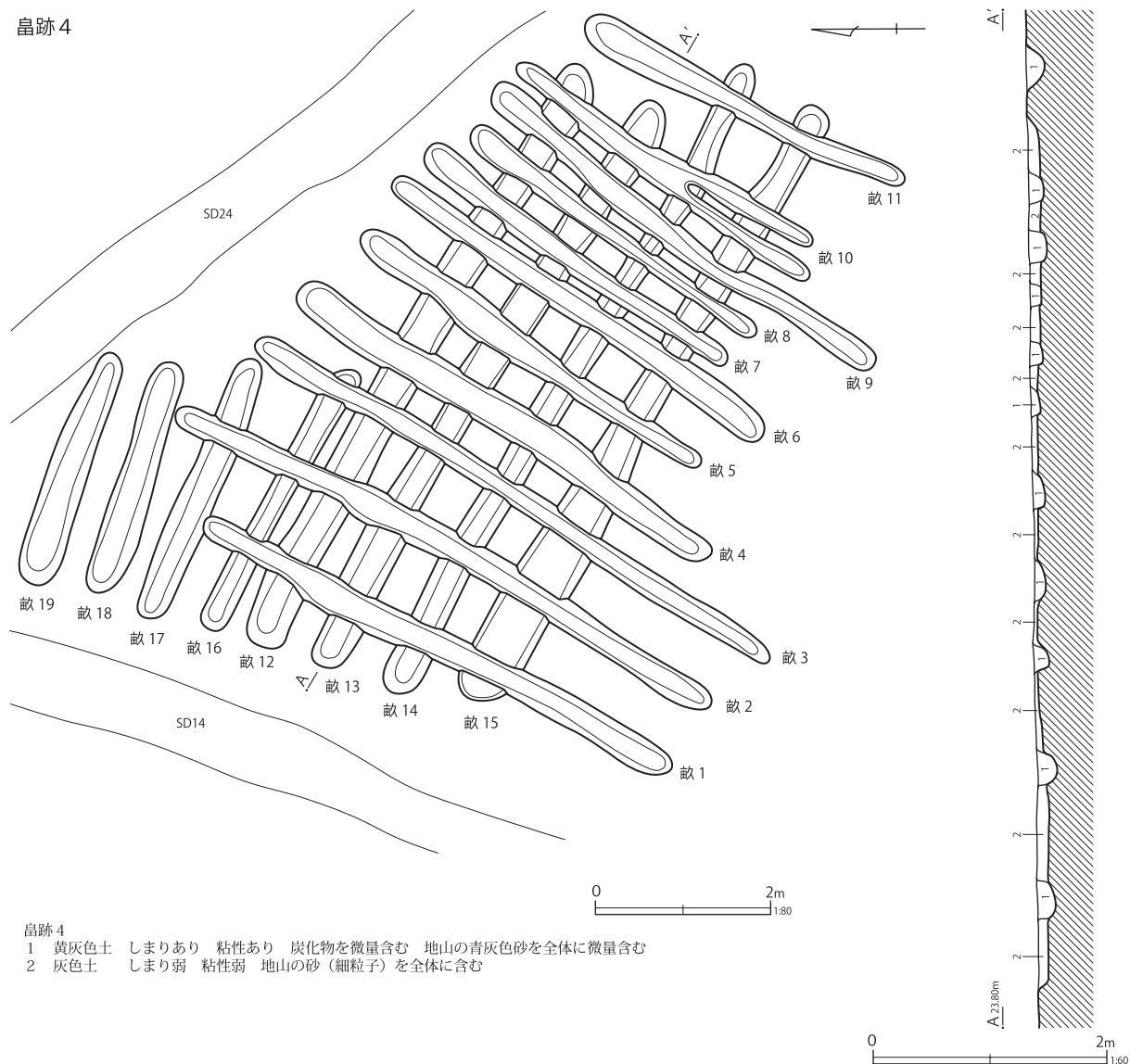
畝溝は、南北方向が14条、東西方向は16条認められた。規模は、長さ1.23～6.02m、幅0.20～0.65m、深さは0.02～0.35mである。浅深がある。溝と溝との間隔は0.70m～0.10mである。第6号畠跡として認識した全体の範囲は、北東から南西方向に7.91m、北西から南東方向に9.13mである。

遺物は土師器小片が3点出土したのみで図示できるものはない。

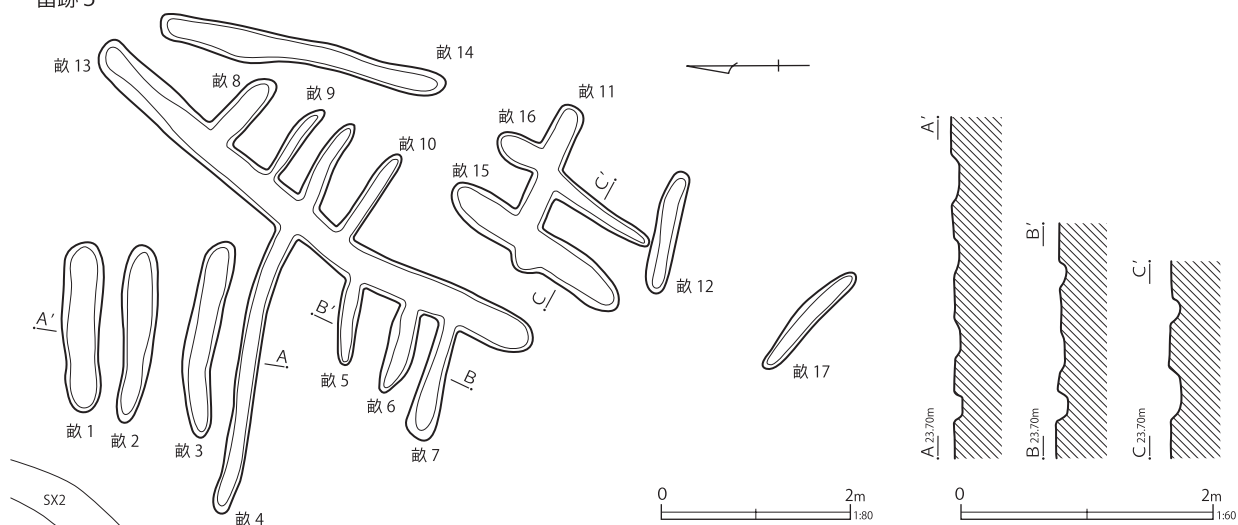


第129図 第3号畠跡

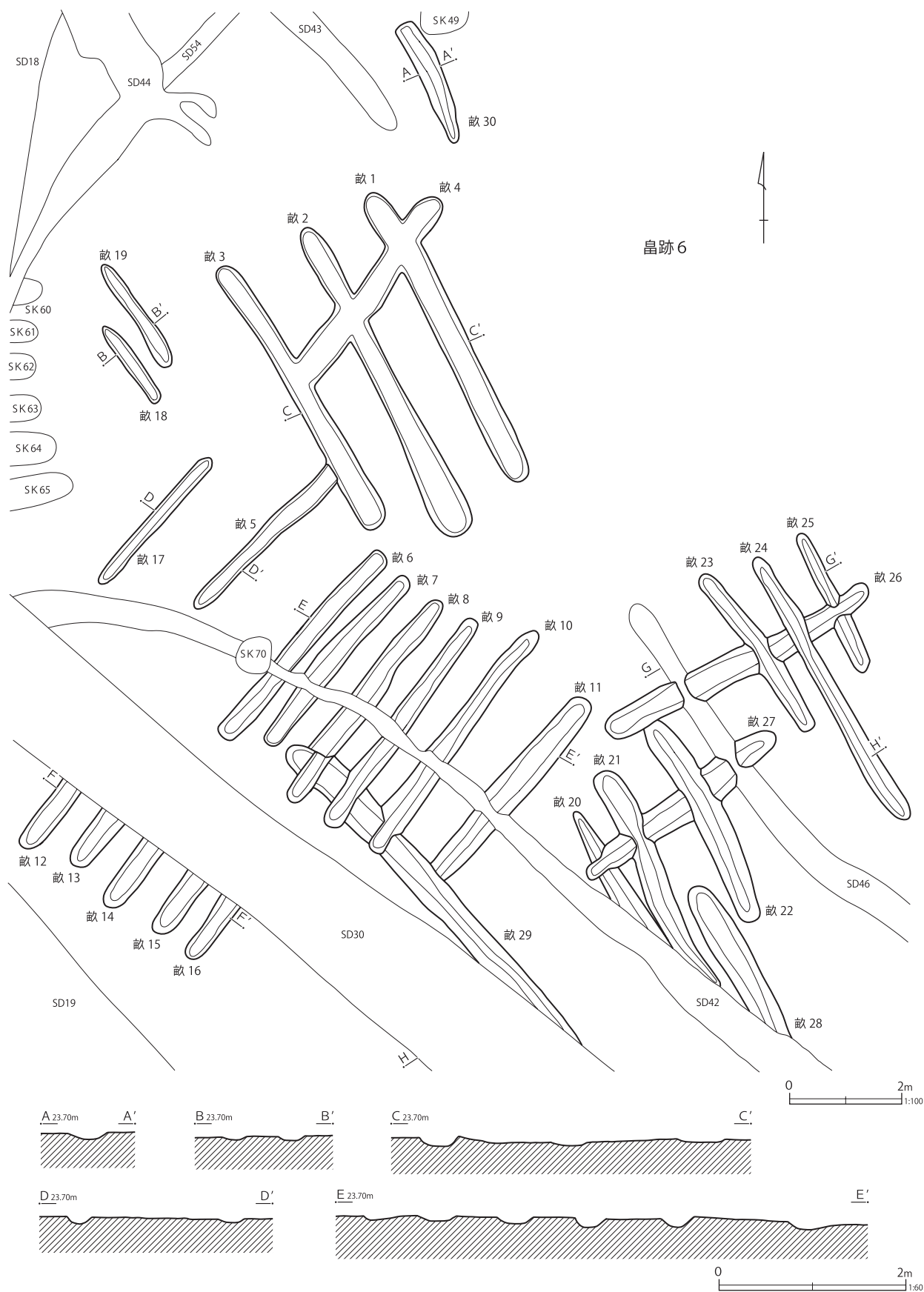
畝跡4



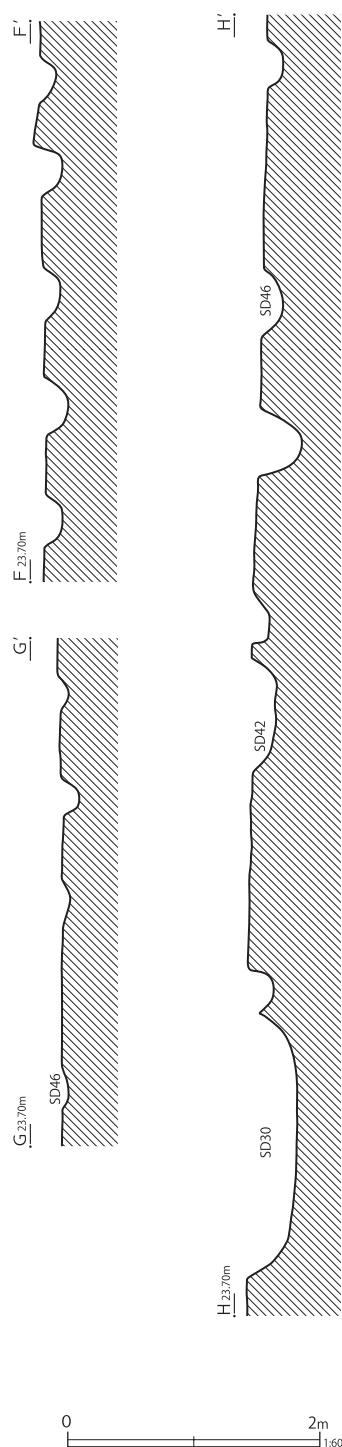
畝跡5



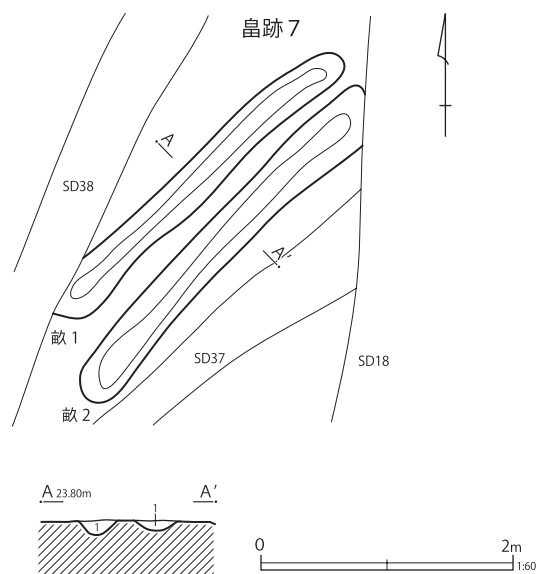
第130図 第4・5号畝跡



第131図 第6号畠跡(1)



第132図 第6号畠跡（2）



畠跡7
1 褐灰色土 しまりあり 粘性ややあり 地山灰色土を少量含む

第133図 第7号畠跡

第7号畠跡（第133図）

D・E-16グリッドに位置する。重複する第18・38号溝跡よりも古い。

検出した畝溝は2条である。規模は、長さ3.03～3.24m、幅は0.27～0.42m、深さは0.07～0.13mである。溝と溝との間隔は0.21m～0.12mである。

覆土は、地山土を含む褐灰色土で、自然堆積である。

第7号畠跡として認識した全体の範囲は、北東から南西方向が3.36m、北西から南東方向が0.88mで、面積2.95m²である。

遺物は、土師器小片が少量出土したのみで図示できるものはない。

3. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡42軒、井戸跡53基、土壇26基、溝跡24条を検出した。遺構の分布状況は、古墳時代と同じく調査区の南側に住居跡が集中し、調査区北側は遺構が希薄な状況となる。

住居跡は、調査区南側の全域に分布が認められるが、その中でも大きく3つのまとまりが認められる。L・Mグリッド周辺、O・Pグリッド周辺、R・Sグリッド周辺である。R・Sグリッドに見られる住居跡群は、さらに南の第26・27次調査区に続くものである。いずれのまとまりにおいても重複が激しい。

(1) 竪穴住居跡

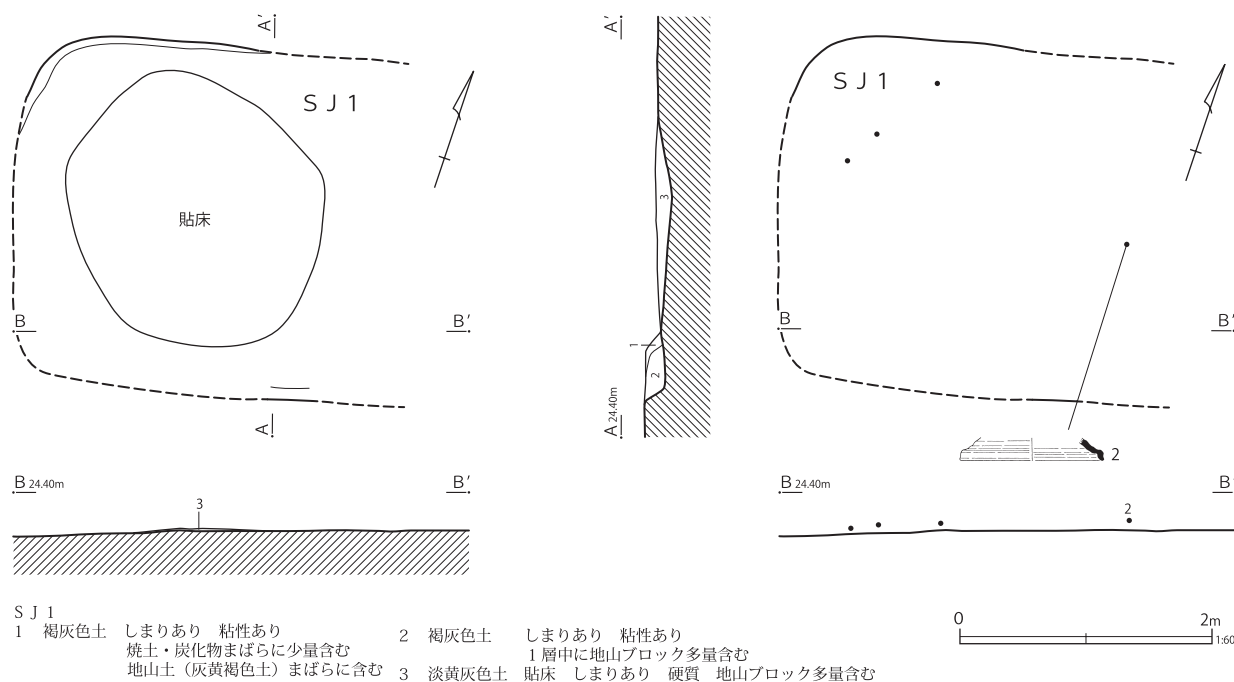
第1号住居跡（第134図）

O・P-16グリッドで検出した。住居跡の大部分は削平され、わずかに壁の一部と貼床の一部が残存していた。第3・5・58・59号住居跡と重複するが、これらの住居跡の最上面で検出したことから第1号住居跡が一番新しいと考えられる。

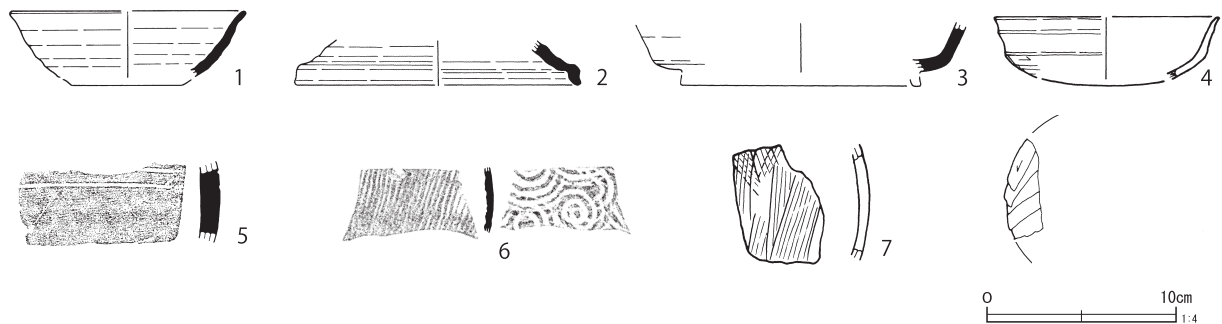
平面形は不明であるが、わずかに残った壁から、規模は、南北約2.8m、東西2.4m以上と判断される。カマドは検出されなかった。

貼床は硬化しており約2.3×2.0mの楕円形に残存していた。おそらく住居跡床面の中央部が残っていたものと考えられる。柱穴等は確認できなかった。

第1号住居跡は、下層から検出された第5号住居跡の範囲内に位置し、主軸方位もほぼ同一になるものと推察される。このことから、本住居跡は、第5号住居跡の建て替えの可能性がある。発掘調査において、第1号住居跡を検出した当初、第5号住居跡のカマドが伴うものと考えたが、貼床を掘削したところ、下層にさらに住居跡があることが明らかとなったため、第5号住居跡のカマドとした。このカマドは、燃焼部の掘り込みがかなり深く、堆積の様相から、使用する過程で次第に埋まっていったものと考えられる。2軒の住居跡はカマドを共有しており、確認されたカマドの最終



第134図 第1号住居跡・遺物出土状況



第 135 図 第 1 号住居跡出土遺物

第 35 表 第 1 号住居跡出土遺物観察表（第 135 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(12.4)	(3.4)	—	J	30	普通	灰	B 南比企産	51-5
2	須恵器	蓋	(14.8)	[2.4]	—	EH I J	5	普通	灰白	No. 4 南比企産	75-3
3	須恵器	高台付埴	—	[3.3]	—	C I K	5	普通	灰白	C 上野産	75-3
4	土師器	坏	(11.9)	[3.6]	—	C G H	20	普通	橙	C	75-3
5	須恵器	壺	—	[4.1]	—	CH I J	5	良好	灰白	C 南比企産	75-3
6	須恵器	壺	—	[3.4]	—	I K	5	良好	灰	C 東毛産か	75-3
7	土師器	甕	—	[4.6]	—	D G	5	普通	褐	A 古墳前期	75-3

使用面は、第 1 号住居跡に伴うものであった可能性を指摘しておきたい。

遺物は土師器および須恵器の坏などの小片が出土したが、中に五領期に属すると思われるハケ目のついた甕破片が含まれていた。周辺の遺構からの混入と思われる。

第135図に出土遺物を示した。1～3、5・6は須恵器である。1は坏である。胎土に白色針状物質を含み、南比企産である。2は蓋である。1と同様に白色針状物質を含み、南比企産と考えられる。3は高台付埴である。上野地域産と考えられる。5・6は、壺の胴部片である。5は、外面に2条の沈線が認められる。胎土に白色針状物質を含み、南比企産と考えられる。6は、やや薄手であり、内面に同心円状の当て具痕が認められる。東毛地域産の可能性がある。4は、土師器の有段口縁坏である。底部にヘラケズリを施す。内面の調整は、磨滅が激しく確認できない。7は、土師器の甕の胴部片である。内面に刷毛目が認められ、五領期に比定できる。本調査区内からは当該時期の遺構は検出されていないが、他の遺物の比較から混入したものであろう。遺物の多くは床

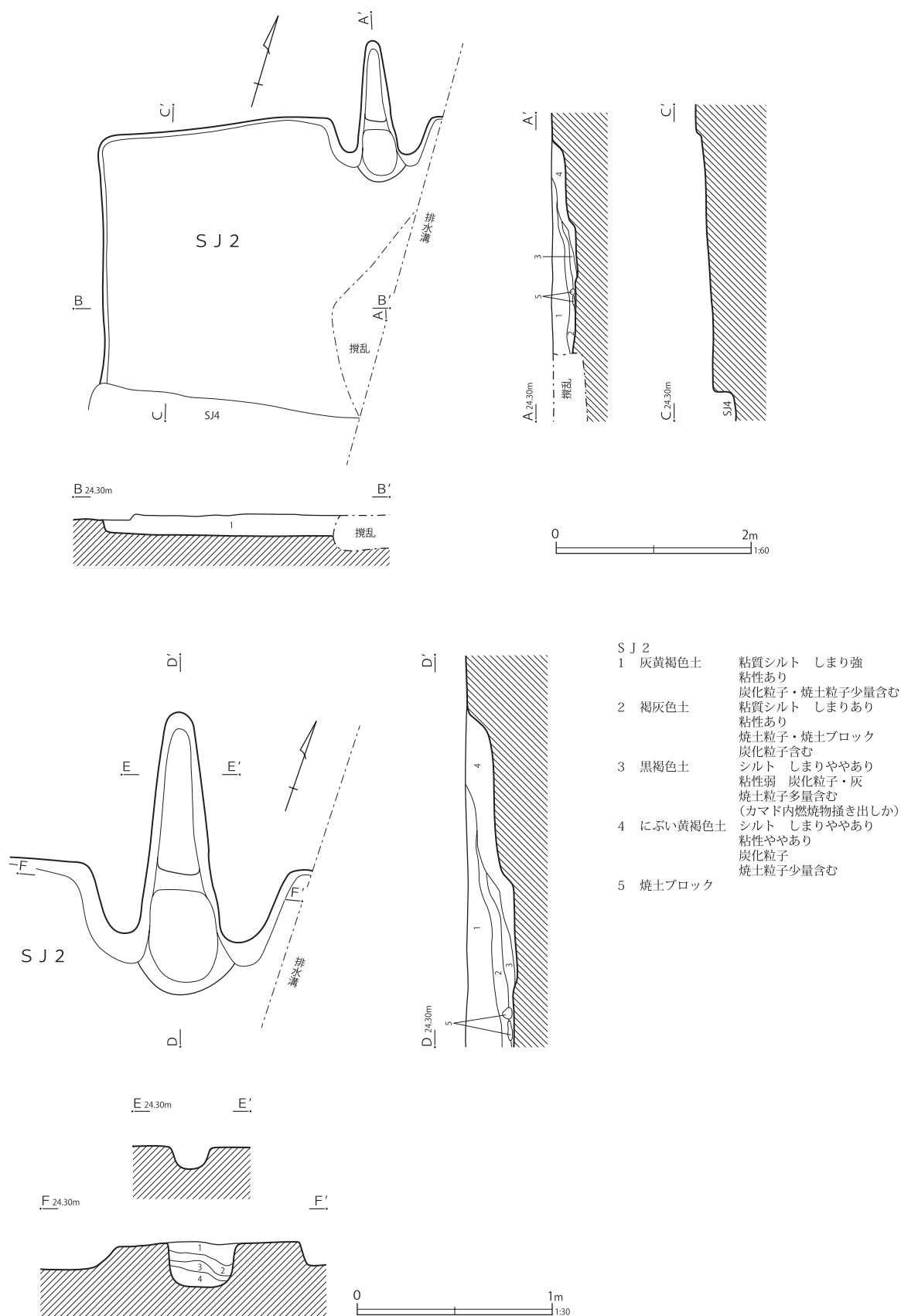
面の直上から出土しているが、いずれも小破片であり、遺構の上部が大きく削平されていると考えられること、混入が認められることから、遺構の詳細な時期は不明である。

第 2 号住居跡（第136・137図）

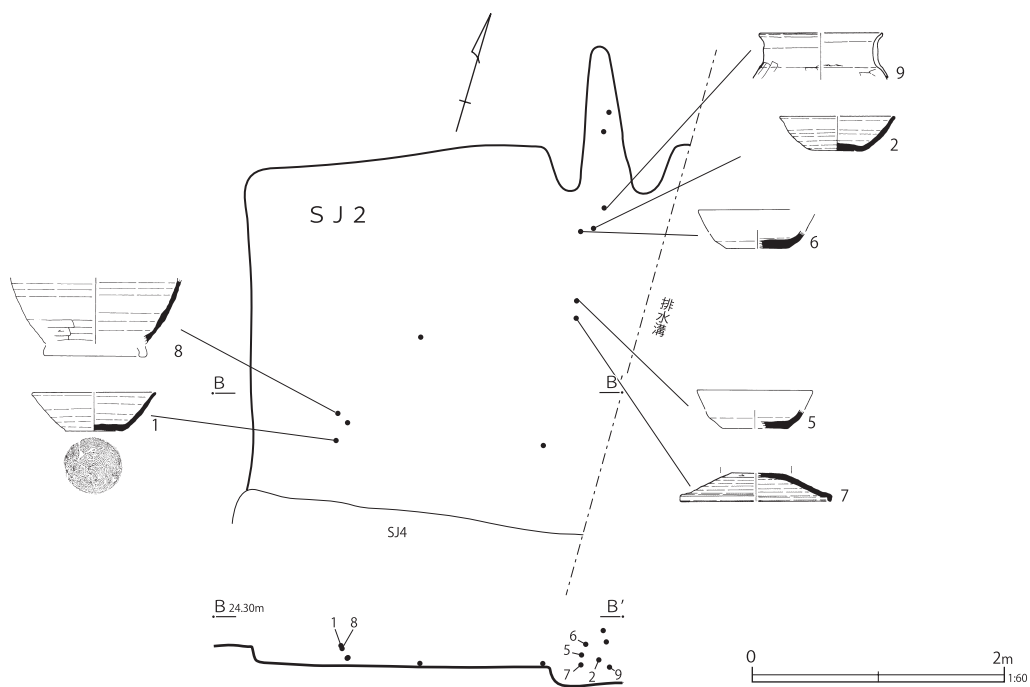
R-18・19グリッドで検出した。第4・24・40・41・57号住居跡と重複し、調査時の所見では第4号住居跡より古く他の住居跡より新しい。東側は調査区外に続いていた。調査区際は攪乱によって一部壊されていた。南側は第4号住居跡によって壊されていた。

全体を検出できなかったため平面形は不明であるが、方形あるいはカマドに対して横長の長方形を呈すると考えられる。

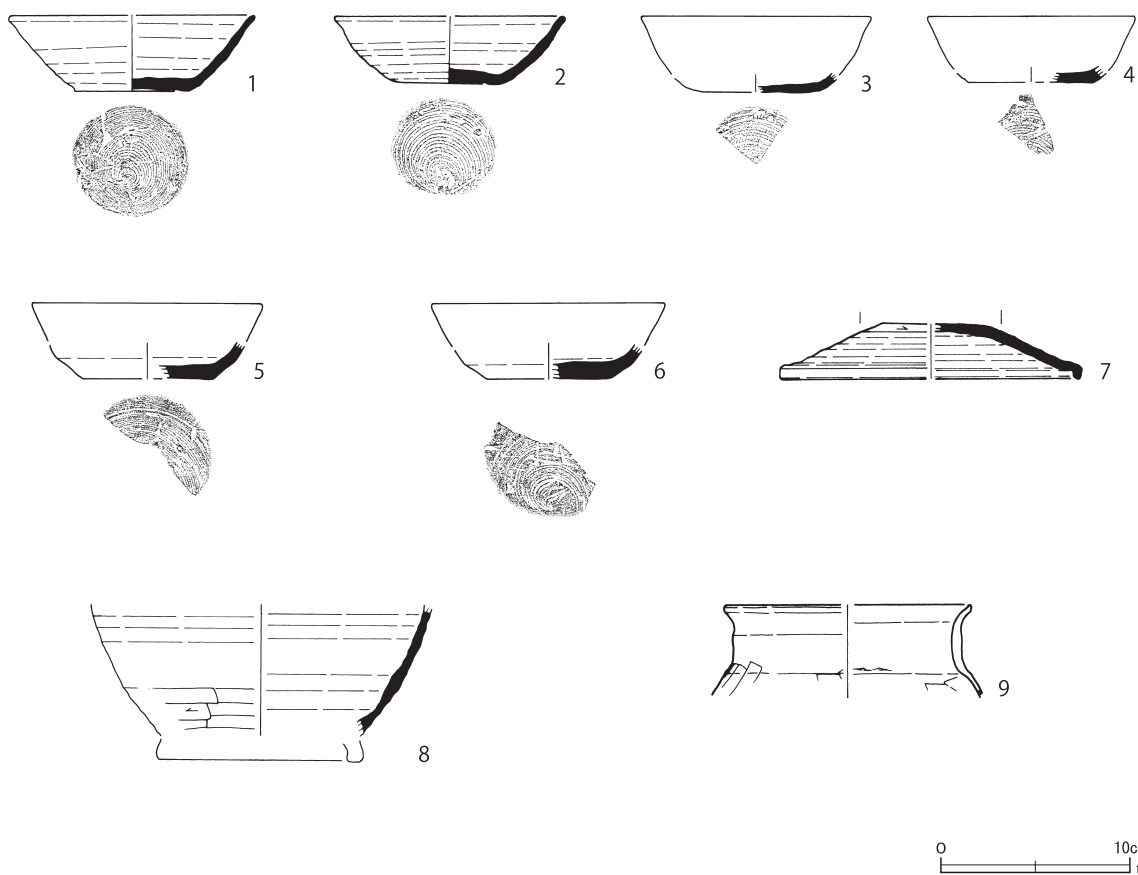
検出した規模は、南北辺長3.09m、東西辺長3.53m、深さは0.28mである。西辺を基準とした主軸方位はN-16°-Wを指す。床面は、ほぼ平坦であるが、明瞭な貼床は確認できず、下に第24号住居跡などが重複していたため、南半部分は床面が捉えにくかった。壁はほぼ垂直に立ち上がっていた。壁溝やピットは検出できなかった。貯蔵穴は検出されなかったが、カマド右側に掘り込ま



第 136 図 第 2 号住居跡



第 137 図 第 2 号住居跡遺物出土状況



第 138 図 第 2 号住居跡出土遺物

第 36 表 第 2 号住居跡出土遺物観察表（第 138 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(12.8)	[4.0]	(6.0)	E G I J K	70	普通	灰白	No. 1 底部回転糸切り	51-6
2	須恵器	坏	(11.8)	[3.7]	(5.2)	E G I J K	70	普通	灰白	No. 10 底部回転糸切り 鳩山 H 5 期	51-7
3	須恵器	坏	—	[1.0]	(6.6)	G I J K	10	普通	灰	底部回転糸切り 南比企産	75-3
4	須恵器	坏	—	[0.9]	(6.6)	E G J K	5	普通	黄灰	南比企産	75-3
5	須恵器	坏	—	[2.0]	(7.0)	E G J K	20	普通	灰白	No. 4 底部回転糸切り 南比企産	75-3
6	須恵器	坏	—	[1.9]	(6.4)	A E G J K	25	普通	灰白	No. 5 底部回転糸切り 南比企産	75-3
7	須恵器	蓋	(15.6)	2.9	—	I J K	5	良好	灰	No. 6 煤付着 鳩山産 天井 (5.2) cm	75-3
8	須恵器	甕	—	[7.0]	—	D I K	20	普通	黄灰	No. 2 東金子産	75-3
9	土師器	甕	(12.8)	[5.0]	—	A E G K	15	普通	にぶい黄橙	No. 11	75-3

れる例が多いため、本住居跡でも東側の調査区外にあるものと考えられる。

カマドは北壁に設けられていた。東側は調査区外にかかるため推測になるが、カマド西側が広いことから北壁の東寄りに造られていると推察される。カマドの規模は、全長1.43m、燃烧部幅0.38m、深さ0.26mで、燃烧部奥から煙道にかけては被熱により壁が部分的に赤色硬化していた。燃烧部は、長さ0.61mで焚口部から移行する段差は僅か3cmである。焚口部はごく浅く、緩やかに床面に移行するため平面図には示せなかった。煙道へは燃烧部から約10cmの段差で移行し底面は平坦なまま先端へ続いている。カマドの覆土は、第2層が焼土ブロックを多く含むことから天井崩落土と考えられる。袖は両袖とも長さ0.50m、幅0.35m遺存していた。構築土の状況から地山を掘り残したものではない。

遺物は、カマド左脇や焚口部周辺、西側中央の壁際などから、土師器坏・鉢・甕、須恵器甕が出土した。このうち図示できるものを、第138図に示した。1～8は須恵器で、1～6が坏、7が蓋、8が甕である。9は、土師器甕の口縁部破片で、コの字状を呈する。須恵器の産地は、ほとんどが南比企産であるが、8は東金子産と考えられる。遺物の多くは小破片で時期は不明であった。1・2・9は比較的遺存状態が良く、9世紀前半の所産と考えられる。住居跡の時期も同様であろう。

第4号住居跡（第139図）

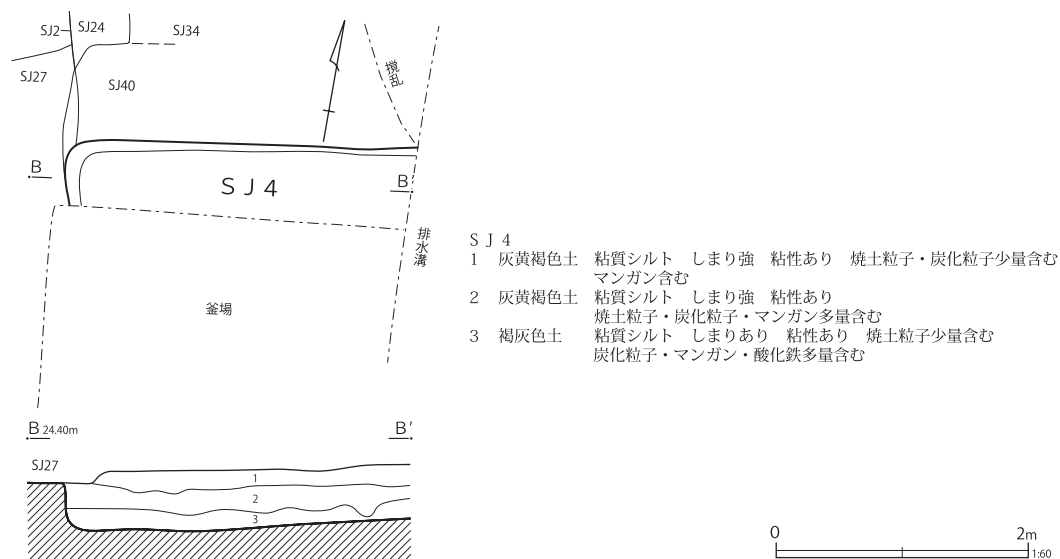
R-18・19グリッドで検出した。第2・24・27・40号住居跡と重複し、第4号住居跡が最も新しい。東側は調査区外に続き、南側の大部分は、調査開始時に排水用の釜場を先行して掘削したために削平された。

平面形は方形ないしは長方形になるものと推察される。残存する規模は、北辺長2.78m、西辺長0.51m、深さは0.28mである。北辺を基準とした方位はN-81°-Eを指す。

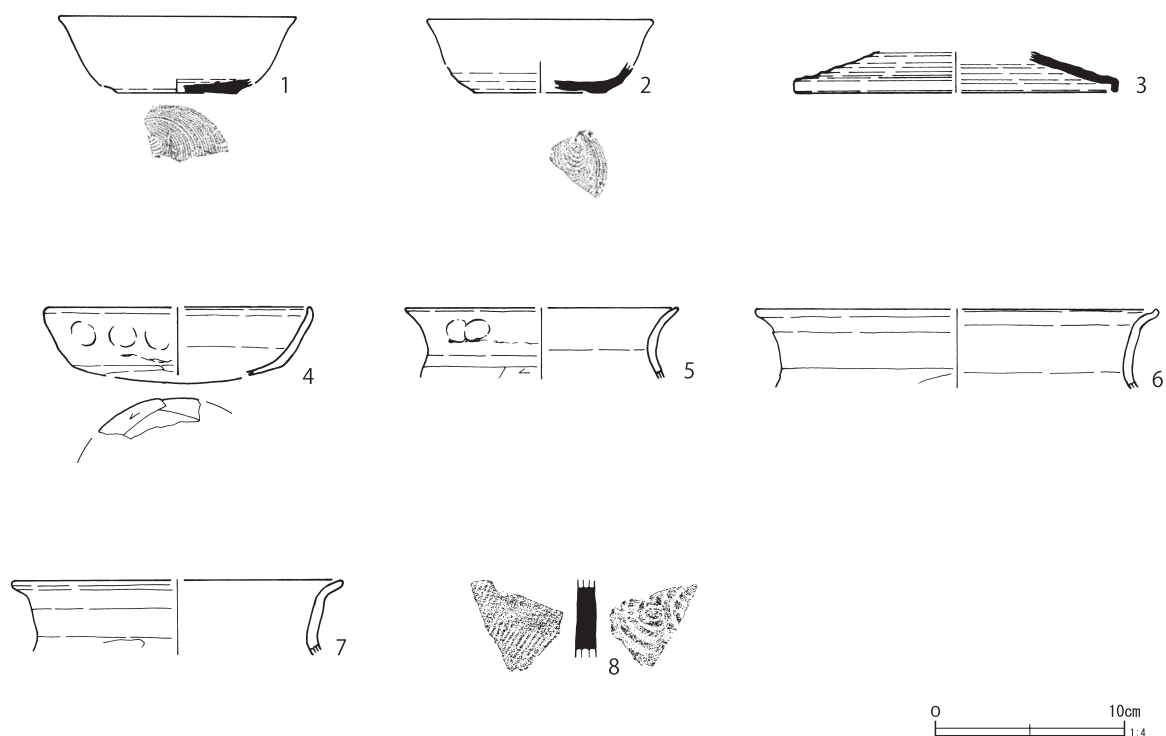
床面は西側に向かって僅かに下がっているもののほぼ平坦である。壁溝やピット、貯蔵穴などは検出されなかった。検出された範囲内では、貼床は確認できなかった。

覆土は3層に分層できたが、いずれもシルト質土であった。壁際に崩落土の堆積が確認できないことから、壁に崩れた様子は認められない。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。カマドは検出されておらず、調査区外に構築されているものと考えられる。

出土遺物を、第140図に示した。遺物は主に、西側の壁際周辺から出土した。1～3、8は須恵器で、1・2が坏、3が蓋、8が甕である。4～7は土師器で、4が坏、5～7が甕である。いずれも小破片であり、また、土師器は磨滅が著しく、遺存状態は良くない。4～7は、8世紀後半から9世紀前半頃の所産と考えられる。第4号住居跡も当該時期に属するものと想定しておきたい。



第 139 図 第 4 号住居跡



第 140 図 第 4 号住居跡出土遺物

第 37 表 第 4 号住居跡出土遺物観察表（第 140 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	—	[0.8]	(6.4)	E H I J	25	普通	灰	一括 鳩山産	75-4
2	須恵器	坏	—	[1.6]	(6.8)	B E H	15	普通	灰	一括 末野産	75-4
3	須恵器	蓋	(16.8)	[2.1]	—	E J	10	普通	褐灰	S J 4・S J 24 一括 南比企産	75-4
4	土師器	坏	(13.8)	[3.6]	—	C E H I	10	普通	橙	一括	75-4
5	土師器	甕	(14.2)	[3.7]	—	B E H I K	15	普通	橙	S J 4・S J 24 一括	75-4
6	土師器	甕	(21.0)	[4.2]	—	B C E H I K	5	普通	明赤褐	S J 4・S J 24 一括	75-4
7	土師器	甕	(17.2)	[4.0]	—	A C G H I K	20	普通	橙	S J 4・S J 24 一括	75-4
8	須恵器	甕	—	[4.1]	—	I K	5	良好	灰	S J 4・S J 24 一括 上野産か	75-4

第 5 号住居跡（第 141 図）

O・P-16 グリッドに位置する。第 1・3・50・58・59・62 号住居跡と重複し、第 5 号住居跡が最も新しい。

住居跡南東角は第 3 号住居跡によって壊されており、西角は調査区外に続く。

平面形は方形を呈するが、東辺より西辺がやや長めである。

規模は、南北方向は 4.61m、東西方向は 4.27m、深さは 0.15m である。東辺を基準とした主軸方位は N-19°-W を指す。

覆土は砂を含む灰黄褐色土で第 2・3 層は貼床である。床面は緩い起伏がある。壁溝は検出されなかった。

ピットは 3 基検出され、西側の P 1・P 2 が柱穴の可能性が高い。東側では検出されなかった。ピットの規模は P 1=0.45×0.43m、深さ 0.10m、P 2=0.42×0.36m、深さ 0.20m である。貯蔵穴はカマドの右側に位置し、住居の北東隅に掘られていた。隅丸方形で僅かに壁にかかっていた。規模は 0.59×0.57m、深さ 0.21m である。貯蔵穴からは遺物は出土しなかった。

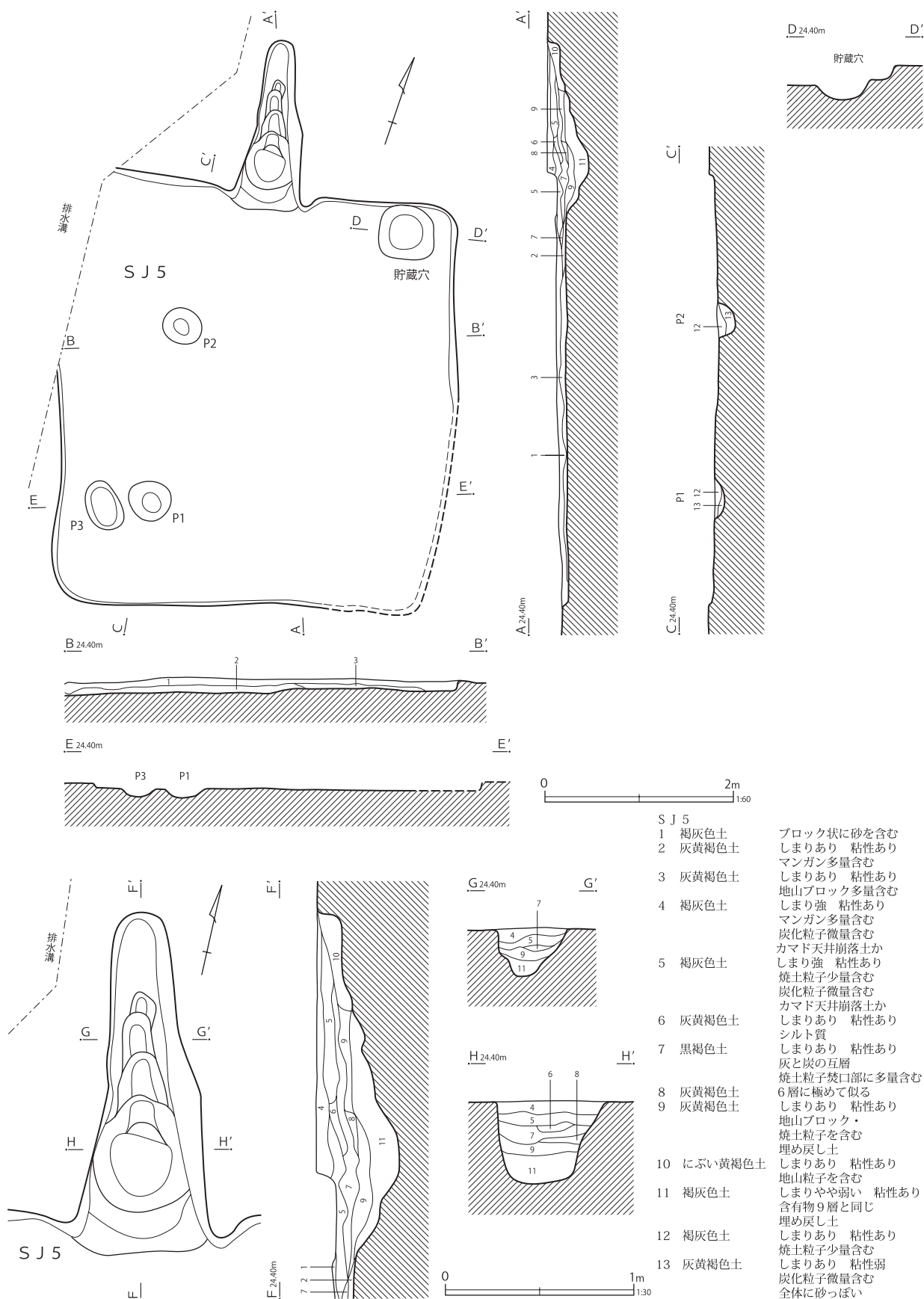
カマドは北壁の中央に設けられていた。燃焼部は住居本体の外側に出るもので、規模は長さ 1.82m、幅 0.69m である。燃焼部は深く掘り下げられており、奥行きは 0.85m、深さは床面から 0.24m である。焚口らしいくぼみは殆ど確認できなかった。煙道は長さ 0.97m で、燃焼部から先端に向

かって階段状に高くなっていた。袖は両側に僅かに残存する程度であり、残りの良い右側の袖で長さ 0.20m 程度である。

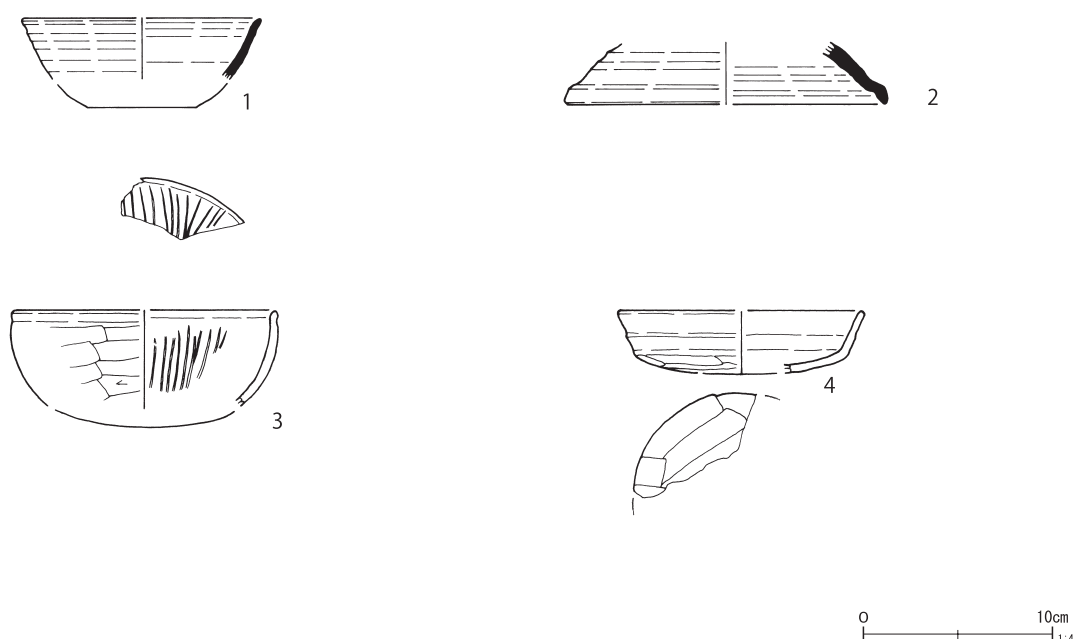
カマドの覆土は、第 4・5 層がカマドの天井崩落土にあたる。第 7 層は炭と灰の互層であり、カマド使用時の灰堆積と考えられる。第 9～11 層の堆積状況は、カマドの掘り方を埋めた土層に類する様相を示す。しかしながら、一定量の焼土を含んでいることから、カマドを継続して使用し、修復を繰り返す過程で、次第に埋まっていった可能性が考えられる。

第 1 号住居跡の項において既に述べたとおり、第 1 号住居跡は第 5 号住居跡の範囲内に位置し、主軸方位もかなり近いと想定されることから、建て替えの可能性がある。この場合、カマドの覆土第 7 層は第 1 号住居跡使用時に伴うものとも想定される。

出土遺物は、第 142 図に示した。1・2 は須恵器であり、1 が坏、2 が蓋である。3・4 は土師器であり、いずれも坏である。1・3・4 は、カマドの覆土中から出土した。須恵器は、胎土に白色針状物質を含んでおり、南比企窯産である。土師器は、含有物の多い粗い胎土である。破断面・器面ともに風化が著しく、施された調整は明瞭でないが、3 の内面の一部には暗文が確認できる。4 は、口縁部に 2 段の強いヨコナデを施し、底部にはヘラケズリが認められる。いずれも小破片であり、遺物の詳細な時期は不明である。



第 141 図 第 5 号住居跡



第 142 図 第 5 号住居跡出土遺物

第 38 表 第 5 号住居跡出土遺物観察表（第 142 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(12.4)	[3.2]	—	E H I J	15	普通	灰	S J 5 カマド・S J 1 B 南比企産	75-4
2	須恵器	蓋	(16.6)	[3.2]	—	I J K	15	普通	灰	B・一括 南比企産	52-1
3	土師器	坏	(13.5)	[5.1]	—	C E H I K	10	普通	にぶい黄褐	カマド 内面暗文	52-2
4	土師器	坏	(12.7)	[3.3]	—	C E H I K	25	普通	にぶい橙	カマド	52-3

第 6 号住居跡（第 143 図）

P・Q-16・17 グリッドで検出した。第 38 号住居跡と重複し、第 6 号住居跡が新しい。

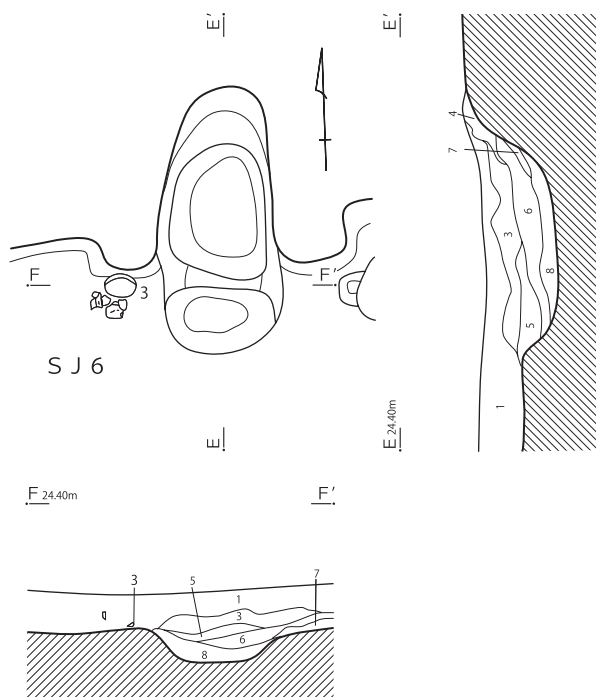
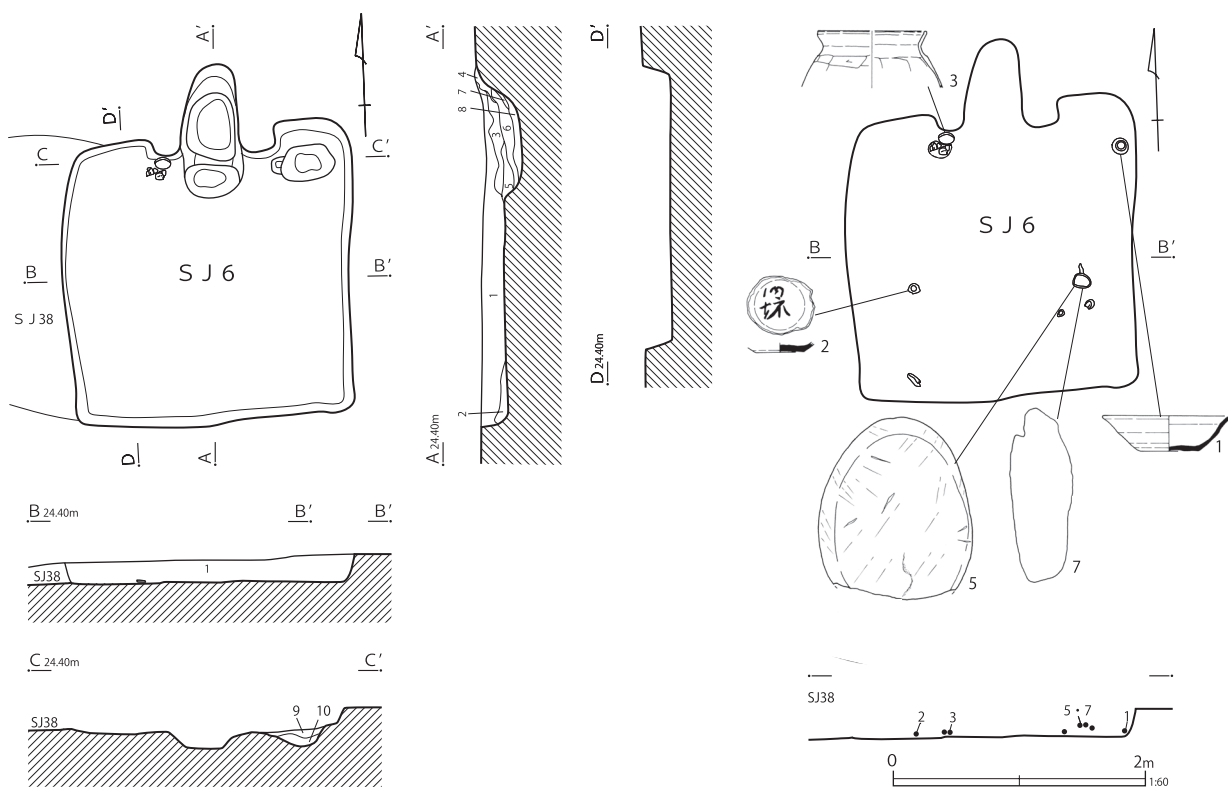
平面形は方形であるが、北辺はカマドの右側が左側より外側に張り出していた。これは、カマドの右側に貯蔵穴が掘り込まれていたこととの関連がうかがわれる。

規模は、南北 2.56m、東西 2.35m で、深さは 0.20m である。東辺を基準とした方位は N-5°-E を指す。覆土は、黄褐色の粘質シルトが主体である。カマド前面および貯蔵穴上面にかけては灰炭層が広がっていた。遺物の出土状態などから、自然堆積と考えられる。カマドの燃焼部や焚口に堆積していた灰炭層が流れ出したものであろう。

床面は平坦で、壁溝やピットは検出されなかった。貯蔵穴はカマド右側に掘り込まれていた。形状は長方形で、規模は長軸が 0.50m、短軸は 0.28m である。床面からの深さは 0.13m である。

カマドは北壁の中央に設けられていた。住居の壁が燃焼部の中間にかかるものである。上面が削平され煙道は殆ど残っていなかった。残存するカマドの全長は 1.05m で、燃焼部の幅は 0.47m である。燃焼部は、ほぼ方形の掘り込みで長さは 0.55m である。床面からの深さは 0.12m である。底面から検出面までは 0.38m あり、側壁は被熱により赤化していた。

カマドの覆土は第 6 層が使用時の灰炭層と考えられる。第 3 層～第 5 層は、焼土ブロックなどカ



S J 6

- 1 にぶい黄褐色土 粘質シルト しまり強 粘性あり 黄色土粒子多量含む
炭化粒子・焼土粒子微量含む 酸化鉄多量含む
マンガン少量含む（住居跡埋積土）
- 2 褐色土 粘質シルト しまりあり 粘性あり 酸化鉄・マンガン
多量含む（住居跡埋土）
- 3 明黄褐色土 粘質シルト しまりあり 粘性あり 焼土粒子・炭化粒子
微量含む 酸化鉄（カマド天井崩落土を含む）
- 4 灰黄褐色土 粘質シルト しまり強 粘性あり 焼土ブロック含む
（カマド天井崩落土を含む）
- 5 にぶい黄褐色土 粘質シルト しまり強 粘性あり 焼土粒子・炭化粒子
少量含む
- 6 黒褐色土 シルト しまりあり 粘性弱 灰・炭化粒子層
（カマド灰層）
- 7 黄灰色土 シルト しまりあり 粘性弱 焼土粒子・マンガンを含む
（カマド埋土か）
- 8 灰黄褐色土 粘質シルト しまりあり 粘性強 焼土粒子
・炭化物少量含む（カマド掘り方埋土か）
- 9 灰黄褐色土 粘質シルト しまりややあり 粘性ややあり 焼土粒子
微量含む 酸化鉄含む（貯蔵穴埋土）
- 10 褐灰色土 粘質シルト しまりややあり 粘性ややあり
地山ブロック多量含む（貯蔵穴埋土）

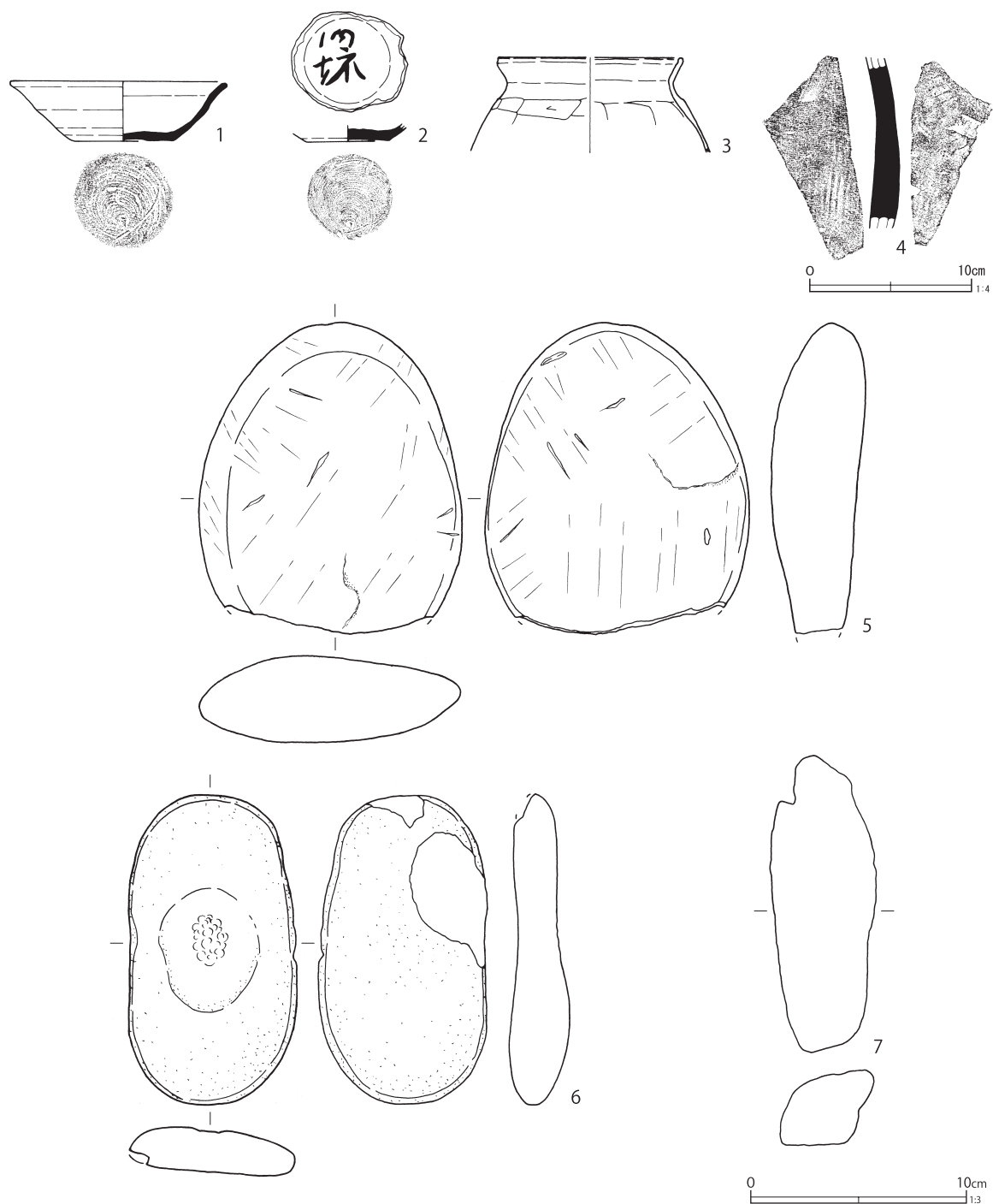


第 143 図 第 6 号住居跡・遺物出土状況

マドの天井崩落土を含んでいる。焚口部は、ピット状に掘り込まれていた。土層断面の観察では、ここまで灰炭層が延びており、実際にはここまで燃焼部として機能していたことが伺われる。燃焼部と煙道との境は明瞭で、0.28mの段を介して移行する。煙道は僅かに0.2mほどが残存していた。

先端は消失しているため形態などの詳細は不明である。

袖は両袖とも基部が僅かに掘り残されたような状態で検出された。左袖には、先端に補強材と考えられる土師器甕が伏位で据えられていた。このことから、使用時には土師器甕の位置まで袖が構



第 144 図 第 6 号住居跡出土遺物

第 39 表 第 6 号住居跡出土遺物観察表 (第 144 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	13.0	3.6	5.7	BEHIK	100	普通	灰	No. 4 末野産	52-4
2	須恵器	坏	—	[1.0]	5.0	EJ	80	普通	灰白	No. 3 見込み墨書「酒杯」 南比企産	52-5
3	土師器	甕	(11.0)	[5.9]	—	CHI	60	普通	にぶい橙	No. 1	52-6
4	須恵器	甕	—	[10.5]	—	IK	5	良好	灰	A 上野産か	75-4
5	石製品	砥石	長さ [14.3] 幅 12.2 厚さ 4.5 重さ 1010.9 g							No. 6 凝灰岩 被熱黒色化 欠損	—
6	石製品	敲石	長さ 14.4 幅 7.8 厚さ 2.8 重さ 454.7 g							A 砂岩 表面中央敲打痕 完形	79-5
7	石製品	編物石	長さ 13.8 幅 5.2 厚さ 3.7 重さ 328.5 g							No. 6 砂質凝灰岩	79-6

築され、前述したピット状の掘り込みが焚口部として対応するものと考えられる。

出土遺物は、第144図に示した。遺物は、住居跡内から分散しており、カマド袖の補強材である土師器甕のほか、貯蔵穴上面の壁際から須恵器坏が、住居跡南東隅周辺からは編み物石などが出土した。須恵器は、1・2・4であり、1・2が坏、4が甕である。土師器は、3で甕である。5は砥石、6は敲石、7は編み物石である。

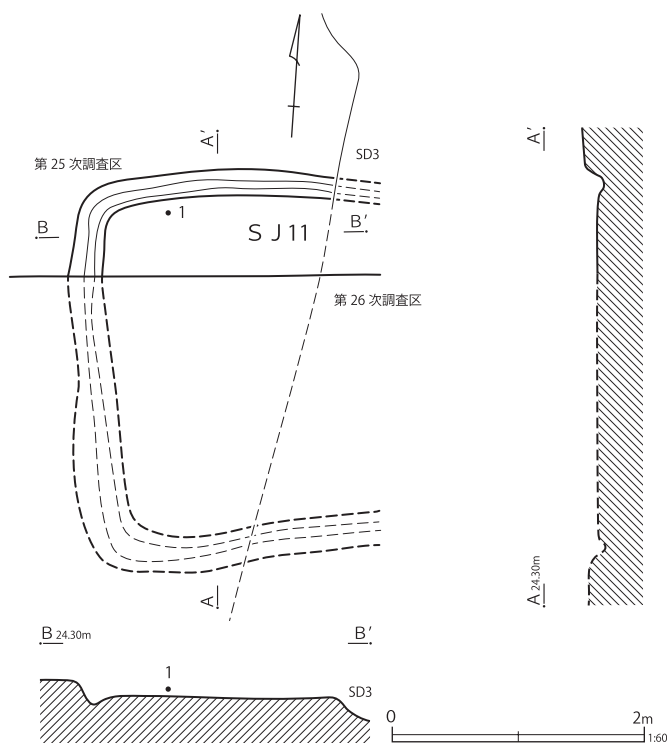
1は完形で、底部には、回転糸切りの後に周辺にヘラケズリを施す。内外面ともに風化による磨滅が著しい。胎土は、含有物がかなり多く粗い印象を受ける。片岩を含むことから、末野窯産である。2は、底部の破片である。底部には回転糸切痕が認められる。胎土は、含有物が少なく精緻であり、白色針状物質を多量に認めることから、南比企窯産である。見込み部には墨書があり、おそらく「酒杯」と書かれているものであろう。4は、胴部の破片である。風化のためか、全体が粉っぽく磨滅している。上野地域産と考えられる。3は口縁部周辺の破片であり、胴部の器壁は極めて薄手である。遺物は少なく、また小破片であるため詳細な時期は不明であるが、概ね9世紀代の所産と考えられる。

第11号住居跡 (第145図)

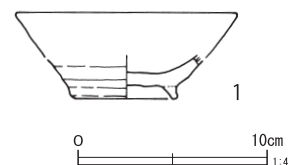
R-17グリッドで検出した。第3号溝跡と重複し、本住居跡が古い。また、第1・2号掘立柱建

第 40 表 第 11 号住居跡出土遺物観察表 (第 146 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	ロクロ土師器	高台付埴	—	[2.3]	5.6	EHI	90	普通	灰黄褐	底部回転糸切り	52-7



第 145 図 第 11 号住居跡



第 146 図 第 11 号住居跡出土遺物

物跡と重複する位置関係にあるが、直接の重複がなく、新旧関係は不明である。東側は第3号溝跡によって壊され、南側は調査区外に続く。検出できたのは住居跡北西隅の限られた範囲である。

平面形は、方形ないしは長方形と推察される。検出できたのは東西方向が2.12m、南北方向は0.88mにすぎない。西辺の方位はN-4°-Wである。

検出した範囲ではピットは確認できなかったが、壁溝が巡っていた。壁直下に掘り込まれており、幅は0.18~0.24mで、床面からの深さは0.06mである。

出土遺物は、土師器および須恵器の小片が少量出土した。第146図に出土遺物を示した。ロクロ土師器の高台付埴である。底部の破片で、胴部上半を欠損する。内外面ともに、風化による磨滅が著しい。含有物が多く、粗い胎土である。

第12号住居跡（第147・148図）

P・Q-17・18グリッドで検出した。第31・42号住居跡、第3・6号溝跡と重複し、溝跡より古く、住居跡より新しい。第6号溝跡によって西隅を、第3号溝跡により東の角を壊され、西辺の中央付近を後世の攪乱によって壊されていた。さらに、遺構の上部は大きく削平されているものと考えられる。

平面形は全体として形の整った方形を呈すると考えられる。

規模は、南北4.40m、東西4.24m、深さは0.07mである。東辺を基準とした主軸方位は、N-26°-Wを指す。

床面からは、ピットを複数検出した。このうち、P1~3・6を主柱穴と考えておきたい。各ピットの規模はP1=0.41×0.37m、深さ0.10m、P2=0.45×0.34m、深さ0.23m、P3=0.44×0.32m、深さ0.20m、P4=0.36×0.31m、深さ0.22m、P5=0.44×0.33m、深さ0.24m、P6=0.35×0.34m、深さ0.27m、P7=0.53×0.50

m、深さ0.33mである。壁溝は北辺と西辺で確認した。幅は0.14~0.22mで、深さは0.08m前後である。

西隅からは、土壇状のピット（P8）が検出され、貯蔵穴と考えられる。規模は0.56×0.46m、深さは0.17mである。

明瞭な貼床は確認されず、床面中央からは、床下土壇と考えられる掘り込みを検出した。楕円形を呈し、規模は1.19×1.11m、深さは0.10mである。

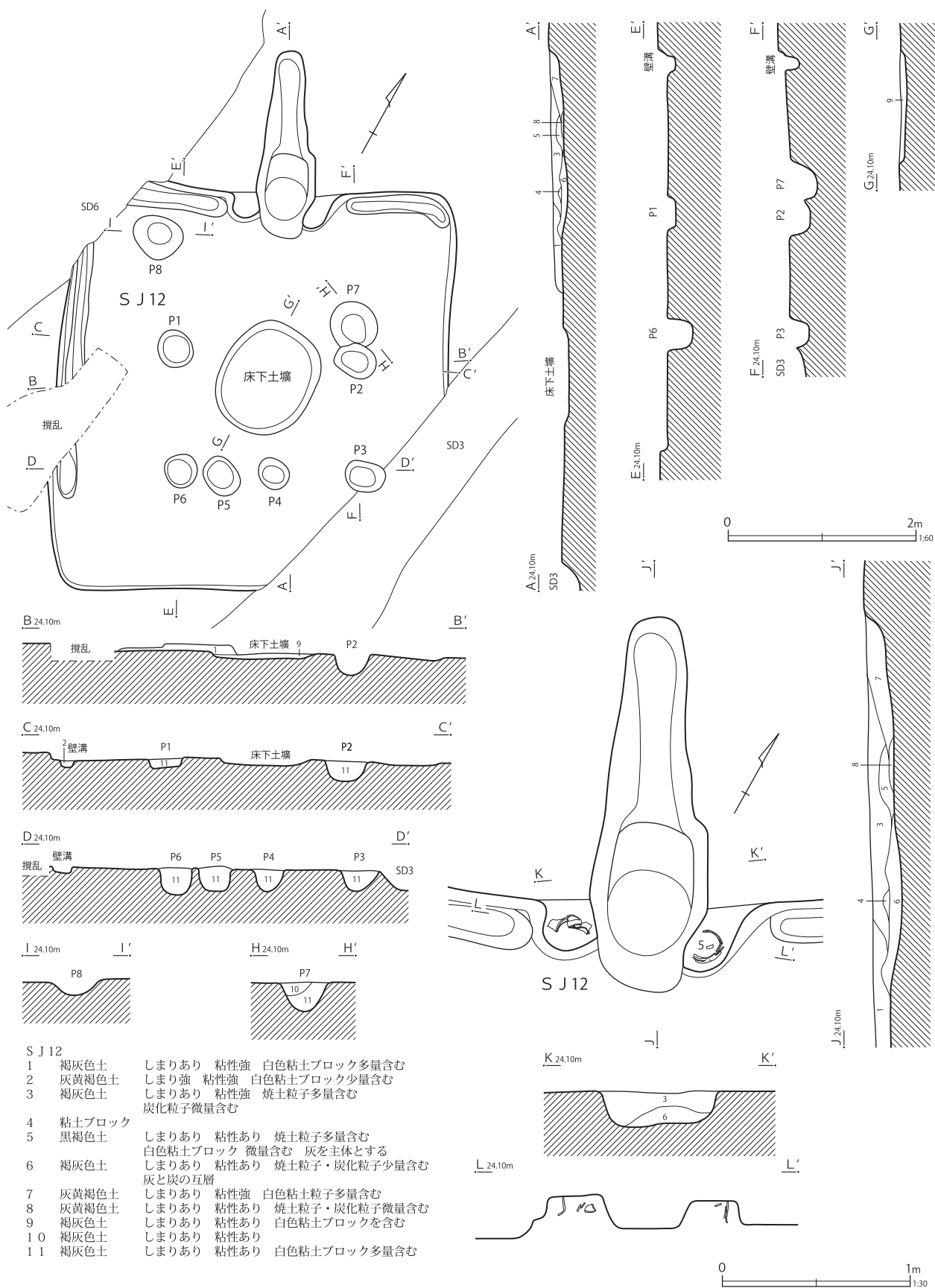
カマドは北壁の中央に設けられていた。燃烧部は、住居の壁が中間にかかるものである。カマド全体の長さは1.99mである。

カマドの覆土は、第3層がカマドの天井部崩落土を僅かに含む層と考えられ、第4層とした粘土ブロックは、カマドの構築材の可能性がある。第5層がカマド使用時の灰炭層である。燃烧部は、長さ0.89m、幅0.63mで、床面からの掘り込みは0.06mと浅い。煙道へは高さ0.06mの緩い段を持って移行する。煙道の長さは1.11mで、幅は0.47mから0.31mと先端に向かって細くなる。焚口部前面には、特に目立った窪みは認められなかった。

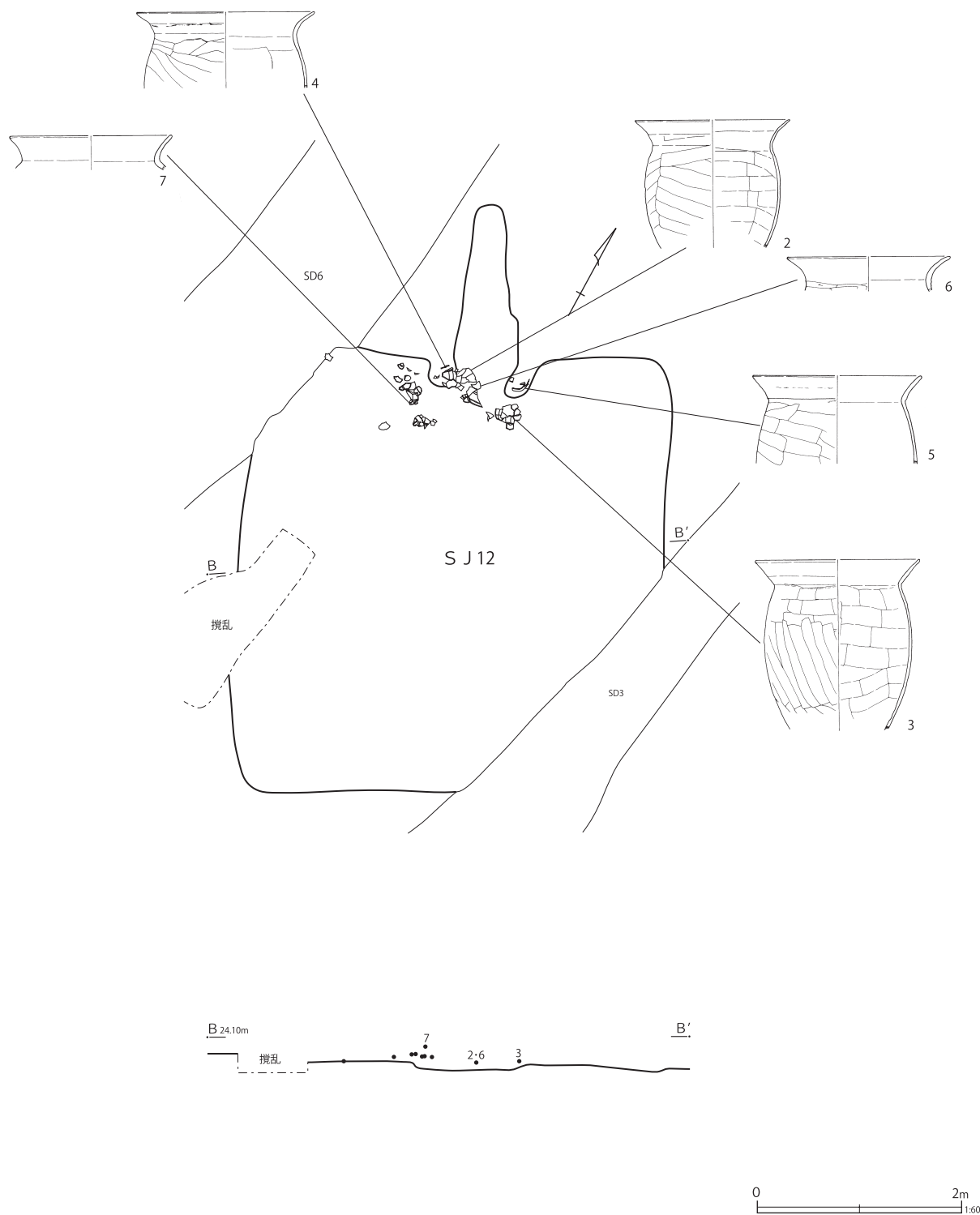
袖は地山を掘り残したものではなく、両袖とも先端に補強材として土師器甕が逆位に伏せて据えられていた。

遺物は主に、カマドの焚口部周辺から出土し、多くが土師器甕であった。第149図に出土遺物を示した。4・5がカマドの補強材である。

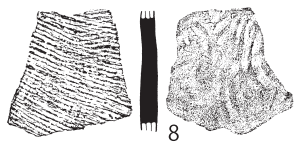
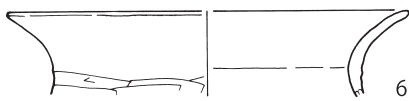
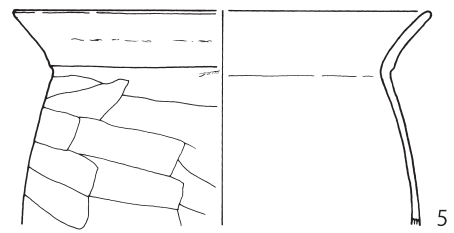
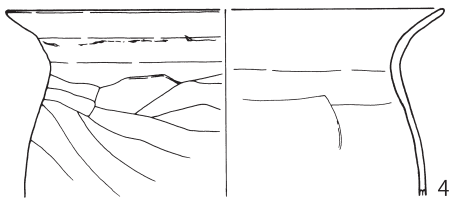
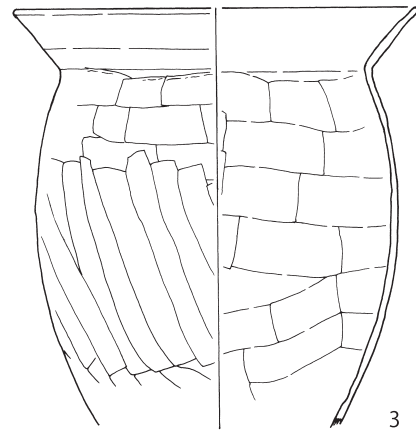
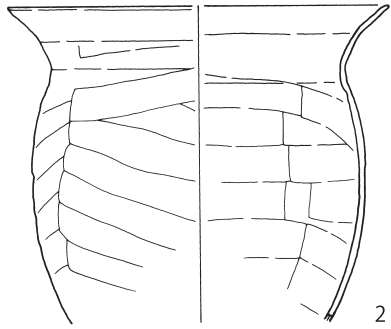
須恵器は、1・8であり、1が蓋、8が甕である。土師器は、2~7であり、いずれも甕である。1の胎土は、含有物は少ないが、4mm程度の小石を少量含む。8は胴部の破片であり、上野地域産と考えられる。土師器甕のうち、最も状態が良いのは3であり、胴部過半までが遺存する。胴部はやや丸みを帯びており、器壁はやや薄手である。胴部上位に横方向のヘラナデ、下半部には斜め方向のヘラナデを施す。遺物の多くは、8世紀代の所



第 147 図 第 12 号住居跡



第 148 図 第 12 号住居跡遺物出土状況



0 10cm
1:4

第 149 図 第 12 号住居跡出土遺物

第 41 表 第 12 号住居跡出土遺物観察表（第 149 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(20.8)	[2.5]	—	E G I	5	普通	灰白	カマド	75-4
2	土師器	甕	(20.0)	[16.8]	—	C D G	20	普通	橙	No. 2	52-8
3	土師器	甕	(21.0)	[22.2]	—	C D G H I	40	普通	橙	No. 1	52-9
4	土師器	甕	(12.6)	[9.9]	—	C D G H	25	普通	橙	カマドNo. 11	52-10
5	土師器	甕	(21.5)	[10.8]	—	A D G H I K	35	普通	橙	No. 12	53-1
6	土師器	甕	(20.8)	[4.6]	—	C E G H I	30	普通	明赤褐	No. 2	53-2
7	土師器	甕	(20.6)	[4.6]	—	A B C E H	10	普通	明赤褐	No. 4	75-4
8	須恵器	甕	—	[6.3]	—	A H I K	5	不良	黄灰	D 上野産	75-4

産と考えられる。

第13号住居跡（第150図）

N・O-18グリッドで検出した。第55号住居跡、第3号掘立柱建物跡、第3・12号溝跡と重複する。第3号溝跡より古く、他の遺構より新しいと考えられる。

平面形はカマドの軸に対して直行する長方形を呈しているが、南東部分が大きく膨らんでいる。

規模は、南北2.57m、東西3.73m、深さは0.28mである。東辺を基準とした主軸方位はN-13°-Wを指す。

覆土は、白色粘質土粒子が多く含まれるものが主体で、それに炭化粒子が混入する。第5層は壁崩壊土と思われるが、第4層は周囲から流入したことを窺わせる。全体的な状況から自然堆積と考えられる。

床面はほぼ平坦であるが中央部が僅かに高い。壁は僅かに外傾して立ち上がる。ピットは床面中央に1基検出した。平面形は不整形円で、規模は0.40×0.36m、深さは0.12mである。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩い。覆土は灰や焼土を主体とするもので、通常の柱穴の覆土とはかなり状況が違っていた。壁溝及び貯蔵穴は検出されなかった。

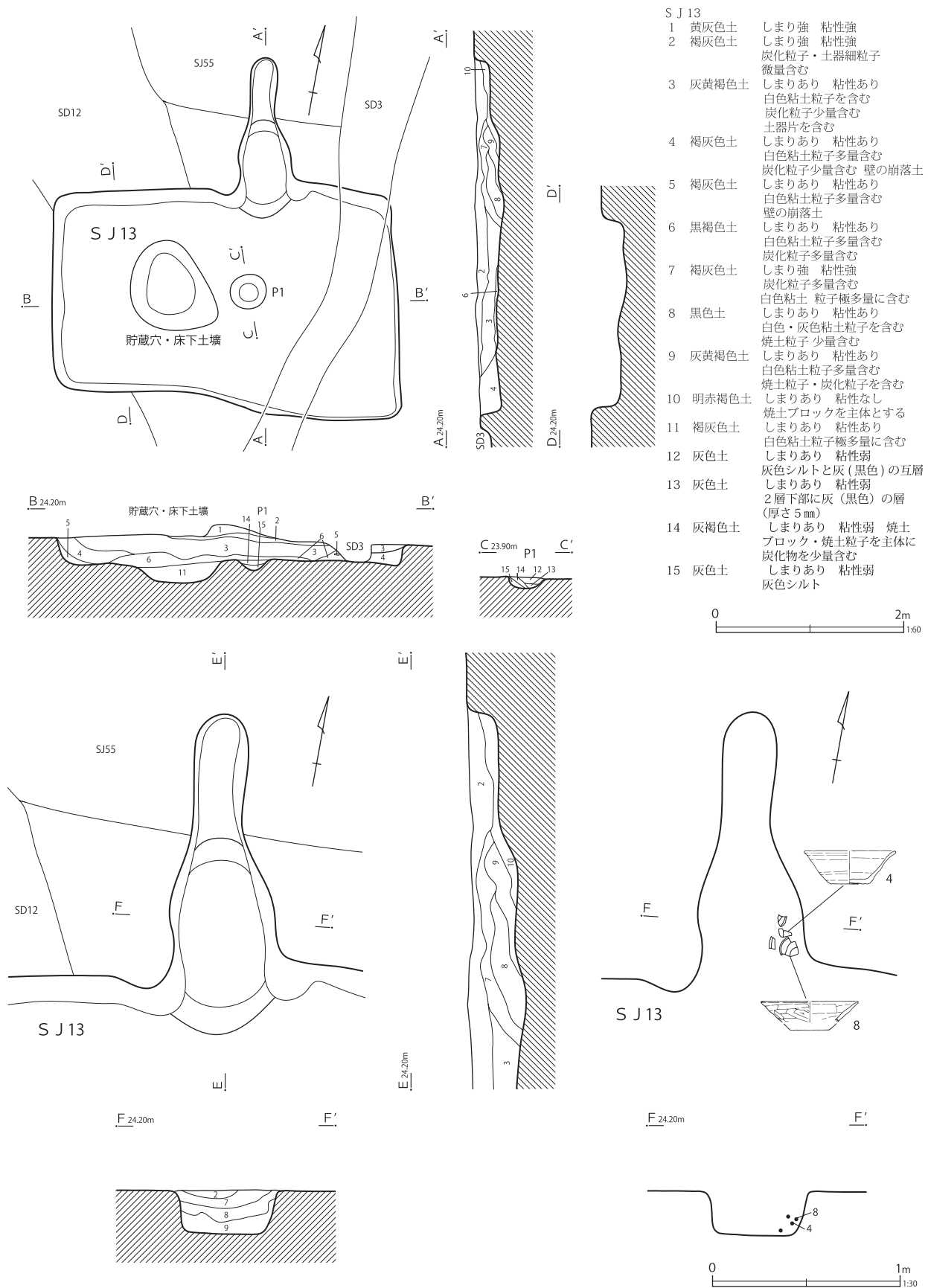
床面のやや西寄りに床下土壌と思われる掘り込みを検出した。平面形は不整形で、規模は南北0.95m、東西0.82m、深さは0.24mである。底面は中央部が皿状に窪み、壁は緩く湾曲しながら立ち上がる。覆土は、地山の灰白色土が詰まって

おり、明らかに埋め戻された状況であった。

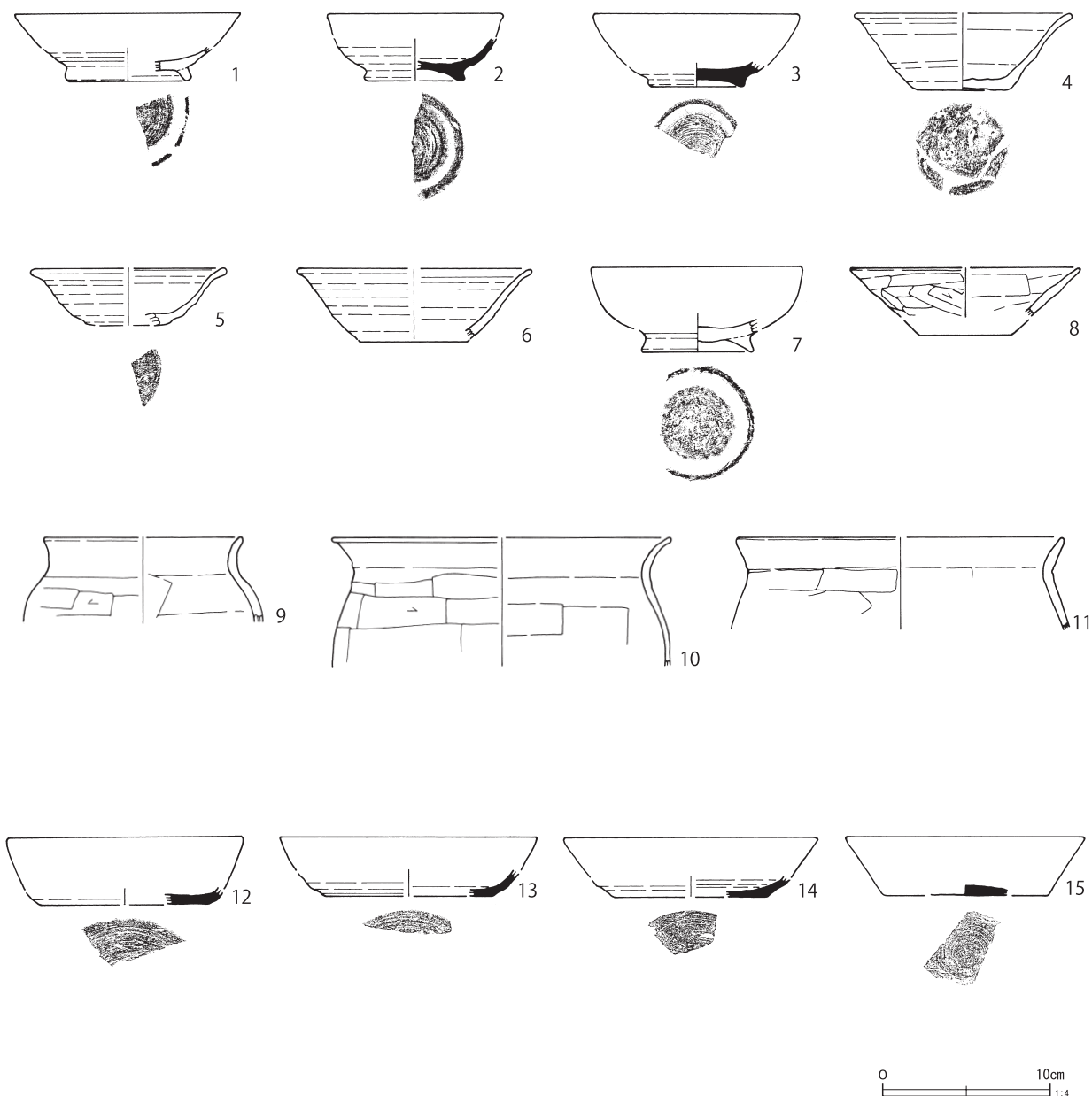
カマドは北壁のやや東寄りに設けられていた。燃焼部が住居本体から外側に出るものである。規模は全長1.71mである。燃焼部の幅は0.56mで、右袖の内側は被熱により赤色硬化していた。燃焼部は長さ1.04mで、深さは床面から0.06mである。外側に向かって高くなり、煙道との段差は0.10mである。焚口部は、床面中央のピットのあたりまで床面が焼土などによってやや汚れていたが、くぼみらしい落ち込みにはならなかった。煙道は、長さ0.68m、幅0.26mで、先端が僅かに円形に膨らむ。底面は燃焼部から先端向かってごく緩やかに上がり、煙出し部は急激に立ち上がる。

検出された袖は短く、約0.25m住居内側に張り出していた。袖が短いのは燃焼部が住居の外側に出ているという構造上の特徴と思われる。袖の構築は、地山掘り残しではない。

遺物は、カマド右袖の内側から土師器坏、住居跡からは土師器と須恵器の小片が出土した。出土遺物は、第151図に示した。3～5、11がカマドから出土した。1は、灰釉陶器の高台付埴である。底部の破片で、高台は低く、やや内湾する。遺存部には施釉は認められなかった。時期は、10世紀代と考えられる。2・3、12～15は須恵器である。このうち12～15は坏であり、小破片ではあるものの、底部の径や形態から7世紀後半から8世紀前半頃のものと考えられ、他の出土遺物より時期が古いものである。周辺の遺構からの混入と考えられる。2・3は高台付埴である。底部の破片であ



第 150 図 第 13 号住居跡・遺物出土状況



第 151 図 第 13 号住居跡出土遺物

り、高台はわずかに外反し、2では胴部との接続部に、ヘラケズリを施す。高台内面と底部との接続部には明瞭な段を作らず、丁寧にナデられている。時期は、10世紀前半頃と考えられる。4～7はロクロ土師器であり、4・5が坏、6が埴、7が高台付埴である。いずれも、風化による磨滅が著しい。4はほぼ完形に近く、全体の形態を確認できる。4～7mm程度の小石を多く含む粗い胎土である。底部はヘラ切りと思われるが、遺存状態が悪く明瞭でない。6は、胎土に角閃石を多量含

み須恵器に近い灰白色を呈する。7は、底部の破片で、高台を貼り付けする。見込み部はやや厚手であり、高台は外反する。8～11は土師器であり、8が埴、9～11が甕である。8は、外面をヘラケズリによって成形し、口縁端部に強いヨコナデを施す。甕はいずれも口縁部の破片であり、9は、やや小ぶりである。胴部は球形に近いものと推察される。遺構の時期は、遺物の形態などから10世紀前半頃に属するものと考えられる。

第 42 表 第 13 号住居跡出土遺物観察表 (第 151 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	灰釉陶器	高台付埴	—	[2.0]	(7.0)	E I	25	普通	灰白	底部回転ヘラ切り	75-5
2	須恵器	高台付埴	—	[2.5]	(5.7)	C E H I	40	普通	灰白	B・P 1	53-3
3	須恵器	高台付埴	—	[1.4]	(5.4)	B E H I	30	普通	灰	カマド 底部回転糸切り	75-5
4	ロクロ土師器	坏	12.6	4.6	5.7	E H I	70	普通	にぶい橙	カマド・カマドNo.1・カマド2・B	53-4
5	ロクロ土師器	坏	(11.2)	3.4	(5.0)	E H I K	20	普通	橙	カマド	53-5
6	ロクロ土師器	埴	(13.6)	[4.2]	—	C D H	25	普通	灰白		75-5
7	ロクロ土師器	高台付埴	—	[1.9]	6.4	C H I	80	普通	浅黄橙	B	75-5
8	土師器	埴	(13.6)	[2.9]	—	C E H I	25	普通	浅黄橙	No.1・D	75-5
9	土師器	甕	(11.5)	[5.1]	—	C E G H I	30	普通	にぶい橙	B	53-6
10	土師器	甕	(19.8)	[7.7]	—	E H I K	20	普通	浅黄橙	D	53-7
11	土師器	甕	(19.0)	[5.5]	—	C E I K	15	普通	浅黄橙	カマド	75-5
12	須恵器	坏	—	[1.0]	(10.0)	E I	15	普通	灰白	D 底部ヘラ切り痕	75-5
13	須恵器	坏	—	[1.5]	(10.0)	E I	10	普通	灰	D	75-5
14	須恵器	坏	—	[1.2]	(9.0)	E I	10	普通	褐灰	D	75-5
15	須恵器	坏	—	[0.6]	—	E I	30	普通	灰	D 底部回転ヘラ切り	75-5

第15号住居跡 (第152・153図)

N-16グリッドで検出した。第16号住居跡、第28号土壌、第9号溝跡と重複し、第15号住居跡が最も新しい。北側は調査開始時に予め掘削した排水用の溝によって失われた。

平面形は不整な方形であり、カマドのある東辺が反対側の西辺より長く、肩が張ったような形状で検出された。住居跡の上部は大部分が削平され遺存状態が不良であったことに加え、発掘調査時には南西隅側における壁は、明瞭に検出できなかったことから、本来の形態は正方形に近いものと想定される。

規模は、東側の南北辺は、残存値で2.92m、西側の南北辺は、2.50m、東西は3.59mである。深さは0.10mである。カマドを基準とした主軸方位はN-88°-Eを指す。

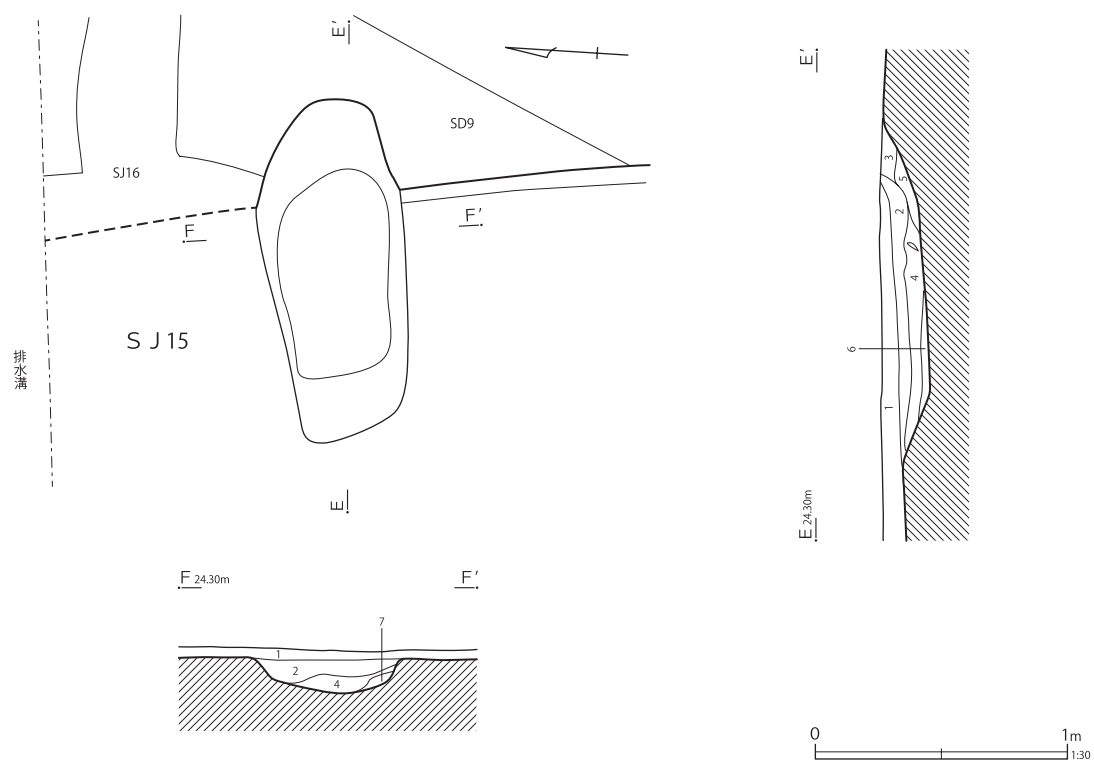
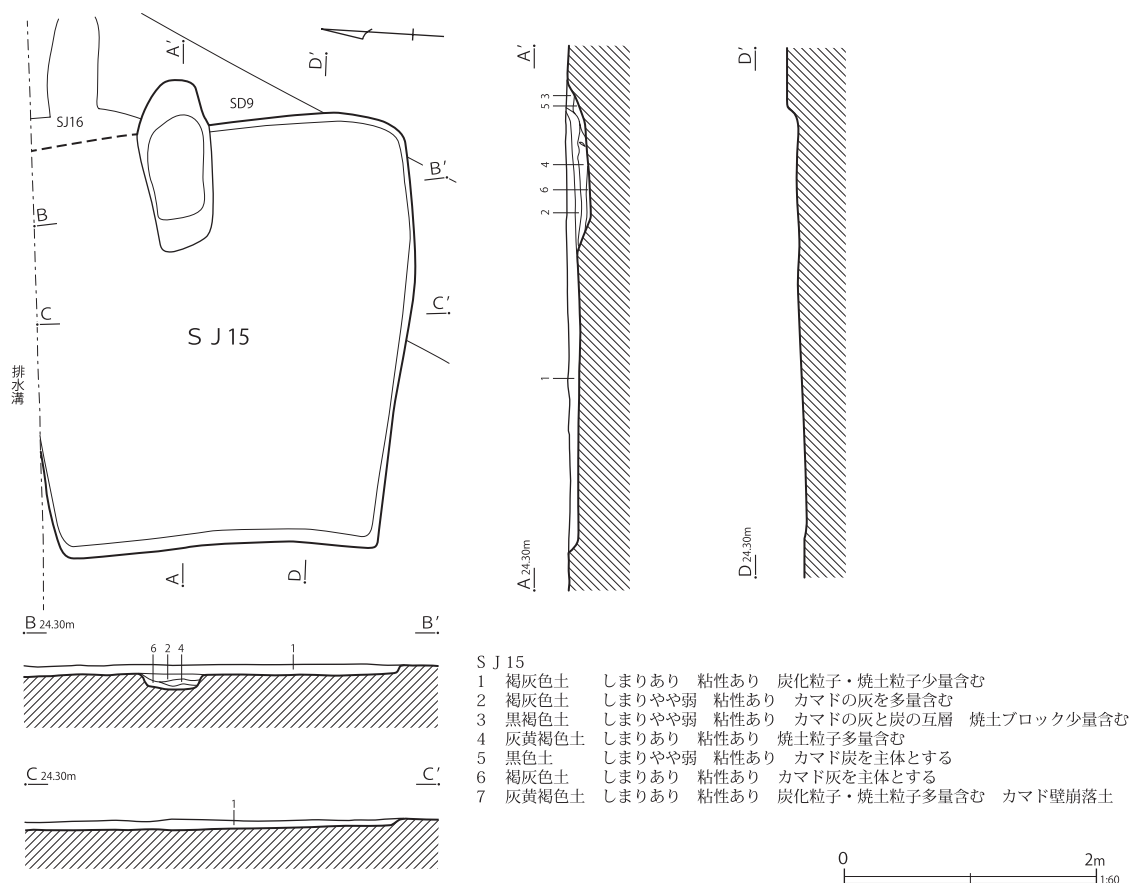
床面は、西側がやや下がっているが、ほぼ平坦である。貼床は検出されず、床面の硬化も不明瞭であった。ピットや壁溝は確認されなかった。

カマドは東壁の中央に設けられていた。上面がかなり削平されており、燃焼部だけが残存していた。燃焼部は住居の壁より内側に位置する。燃焼部の規模は、長さが1.34mで、幅は0.57mである。床面からの深さは0.15mである。

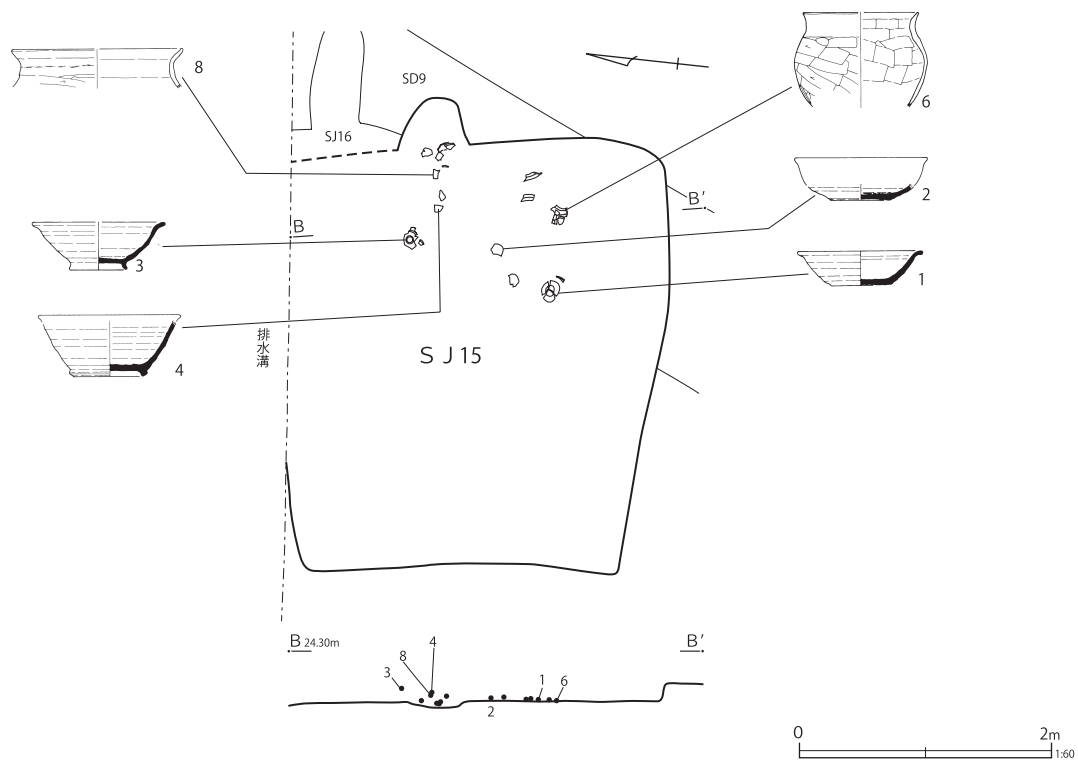
カマドの覆土は、焼土粒が多量に含まれていた第2層がカマドの天井崩落土の可能性もある。第5層は灰を主体とし、灰と焼土粒子の混合層である第4層を挟み、灰と炭の互層からなる第3層が堆積する。これらが使用時の灰炭層と考えられる。

焚口部分は、燃焼部への傾斜がやや緩く、前面に灰が薄く広がっていた。煙道は検出されず、既に削平されていると思われる。袖は確認されなかった。

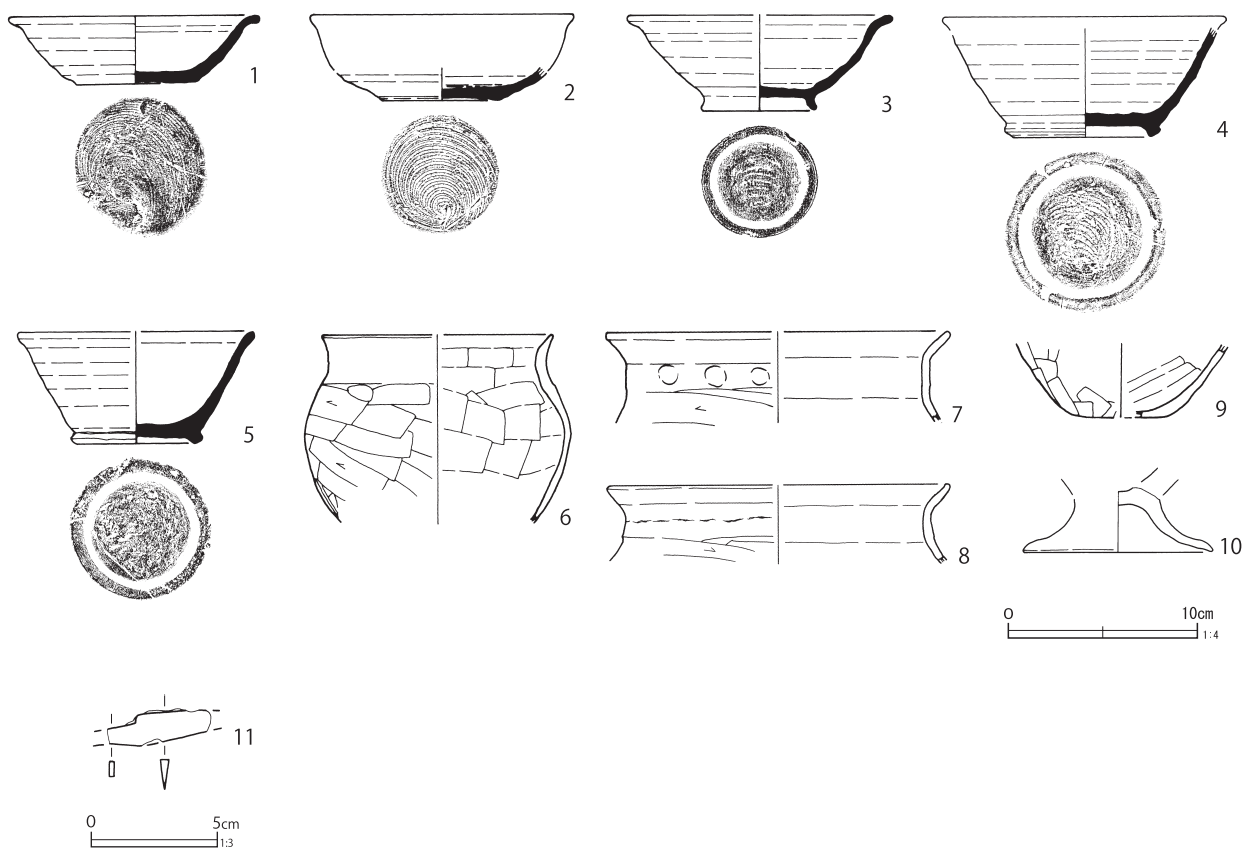
遺物は、カマド内とカマドの焚口部周辺を中心に出土した。殆どが床面直上に位置していた。出土遺物は第154図に示した。3・4・7・11がカマド内から出土した。遺物の量は少ないが、個々の残存率が高く、形態を確認できるものが多い。1～5は須恵器である。1・2が坏、3～5が高台付埴である。1は、カマドに向かって右側の床面直上から出土し、ほぼ完形であった。口縁部端部が強く開く形態である。底部は回転糸切りである。胎土は、黒色粒子を多量に含む。2は、底部の破片である。底部は回転糸切りである。胎土には、微小な白色粒子・黒色粒子を多量に含むが、1と比較して精緻な印象を受ける。片岩と思われる4mm程度の破片をごく微量含んでいることから、末野窯産の可能性もある。3は、カマドの



第 152 図 第 15 号住居跡



第 153 図 第 15 号住居跡遺物出土状況



第 154 図 第 15 号住居跡出土遺物

第 43 表 第 15 号住居跡出土遺物観察表（第 154 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	12.8	3.6	6.3	I K	95	普通	灰	No.6 底部回転糸切り	53-8
2	須恵器	坏	—	[1.7]	6.2	B I K	60	普通	灰	No.1 底部回転糸切り 末野産か	75-6
3	須恵器	高台付埴	(13.6)	5.0	5.9	B E I K	60	普通	青灰	カマド 2 No.1 末野産か	54-1
4	須恵器	高台付埴	—	[5.8]	7.2	B H I K	40	普通	にぶい赤褐	カマド・A・カマド 2 No.2 糸切り後 ヘラケズリか 末野産	53-9
5	須恵器	高台付埴	(12.2)	[5.3]	6.2	B I K	30	普通	灰	A 末野産か	54-2
6	土師器	甕	(11.8)	[10.0]	—	H I K	30	普通	にぶい橙	No.5 煤付着	54-3
7	土師器	甕	(17.8)	[4.9]	—	H I	10	普通	にぶい橙	カマド	75-6
8	土師器	甕	(17.5)	[4.2]	—	H I K	15	普通	にぶい橙	No.4	75-6
9	土師器	甕	—	[3.9]	(5.0)	C K I	20	普通	灰黄	一括	54-4
10	土師器	台付甕	—	[3.4]	(9.8)	C E H K I	35	普通	橙	B	54-5
11	鉄製品	刀子	長さ [3.95] 刃幅 1.25 背幅 0.3 重さ 3.4 g							カマド	79-1

焚口部から出土した。1と同様に、口縁部端部が強く開く形態である。高台部は外反し、高台端部と、高台と胴部の接続部にはヘラナデを施す。胎土は、含有物が少なく精緻であるが、4～7mm程度の小石を微量含む。青灰色を呈し、良く焼き締まっている。末野窯産と考えられる。4は、カマドの焚口部から出土した。高台部はやや外反気味で、高台端部はヘラケズリによって成形する。胎土に片岩を微量含んでおり、にぶい赤褐色で焼成は不良気味である。末野窯産である。5は、口縁部端部がわずかに外反する。高台は低めで外反する。高台端部をヘラケズリによって成形し、高台部と胴部、底部の接続部にはヘラナデを施す。胎土は、含有物が多く粗いものである。末野窯産と考えられる。

6～10は土師器であり、6～9が甕、10が台付甕である。6は、小形で胴部は球形を呈する。口縁部と胴部の接続部は厚く、胴部外面にはヘラケズリを施し薄く仕上げている。7・8は口縁部の破片である。コの字状に近い形態である。9は、底部の破片である。底部の径が小さく、胴部は長胴形を呈するものと考えられる。10は、台部の破片である。高さは扁平で低く、接地面が広い。11は刀子で、カマド内から出土した。両端部を欠損する。

出土遺物は、形態から概ね8世紀末から9世紀前半頃のものと考えられる。

第16号住居跡（第155図）

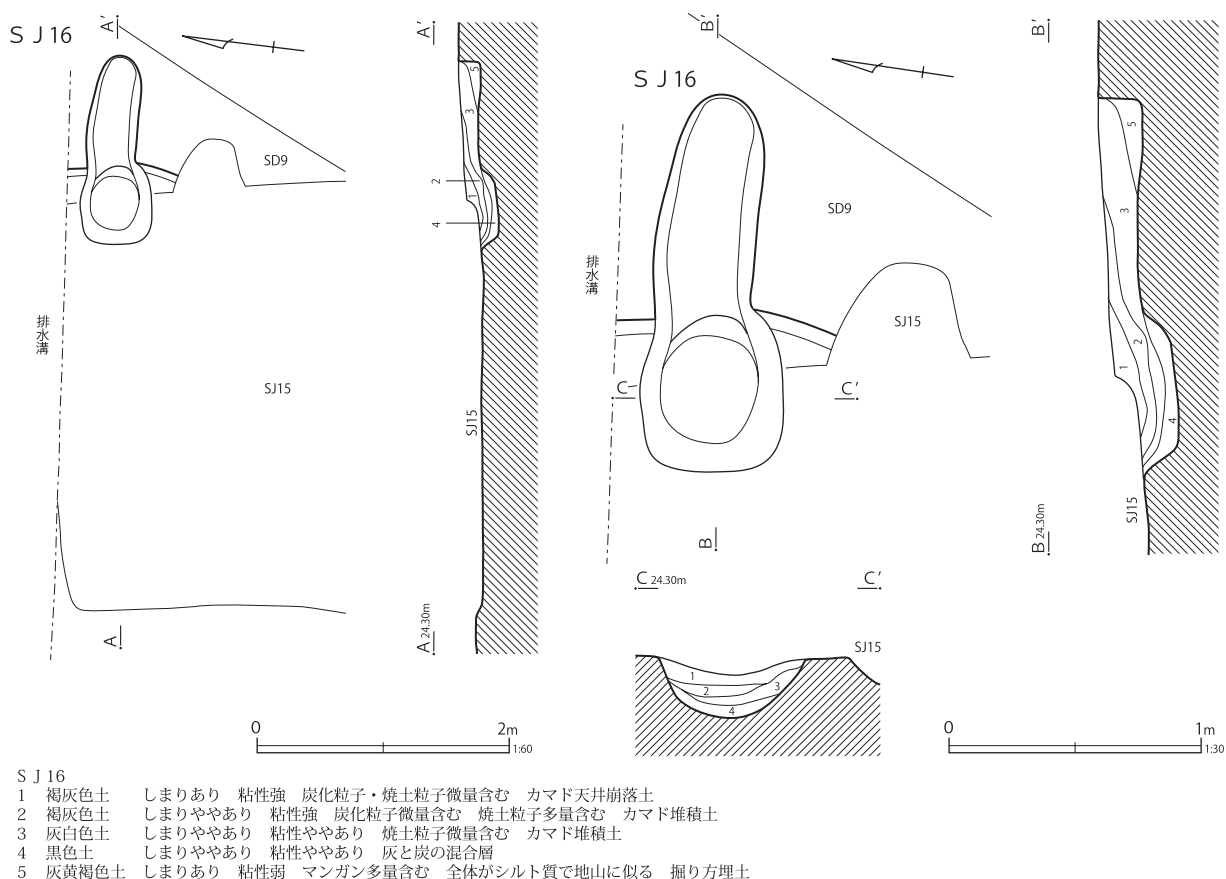
N-16・17グリッドで検出した。第15号住居跡、第28号土壇、第9号溝跡と重複し、第15号住居跡より古く、第28号土壇、第9号溝跡より新しい。大部分が第15号住居跡によって壊されており、検出されたのはカマドのみである。

平面形は不明であるが、住居跡の北側に掘削した排水溝より北側で検出されないことから、住居跡のプランは第15号住居跡とほぼ重なるものと考えられる。排水溝の南側壁において、北側の壁の一部が第15号住居跡の北東隅部とほぼ重なって確認された。

規模は不明であり、深さは0.10mである。カマドを基準とした主軸方位は、N-85°-Eを指す。床面は、第15号住居跡とほぼ同じ高さであり、壁溝やピットは検出されなかった。

カマドは、東壁に設けられていた。規模は、全長1.50m、燃焼部幅0.56m、床面からの深さは、0.13mである。底面は燃焼部奥に向かって緩やかに上がり、約0.10mの段を介して煙道へと続いている。煙道の幅は先端に向かって細くなり、先端の立ち上がりはややオーバーハング気味である。袖は検出されなかった。カマドの覆土は、第1層が天井崩落土である。第4層は、灰と炭の混合層で、第2・3層には炭化物粒子等が含まれることから、使用時の堆積層と考えられる。

遺物は出土しなかった。



第 155 図 第 16 号住居跡

第17号住居跡（第156図）

P-16グリッドで検出した。第44号住居跡と重複し、第17号住居跡が新しい。第44号住居跡と同じ位置で一回り大きいことから、第44号住居跡を作り変えている可能性もある。遺構の上部は削平されている可能性がある。

平面形は、形の整った長方形である。規模は、南北が長さ3.00m、東西は長さ3.81mで、深さは0.10mである。東辺を基準とした主軸方位はN-24°-Eを指し、カマドを軸とした方位はN-116°-Eである。

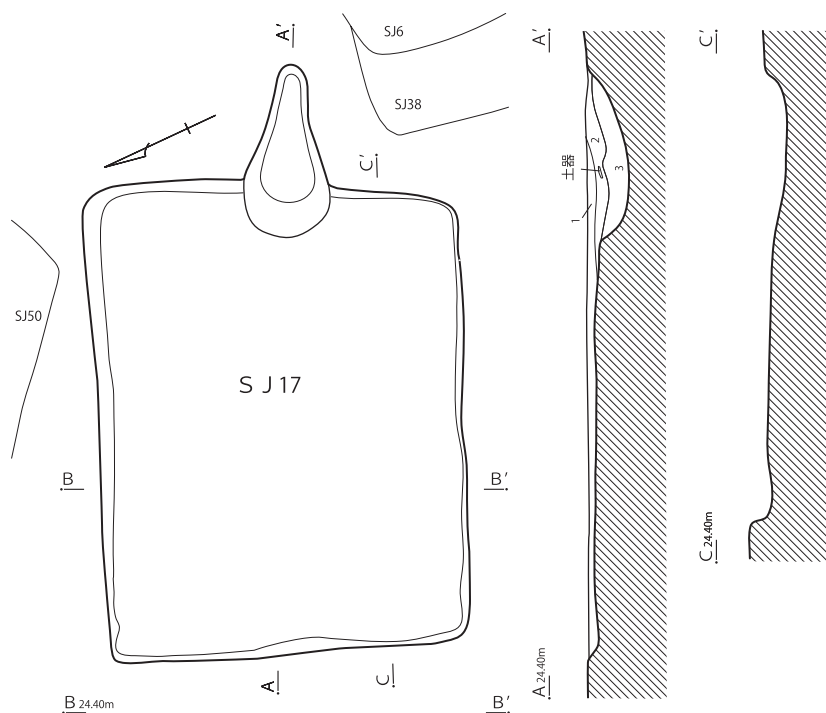
覆土は、残存状況が浅く床面直上の1層が確認されたのみである。灰黄褐色土が主体である。床面は平坦であり、壁溝やピット、貯蔵穴は確認されなかった。

カマドは東壁の中央に設けられていた。全長は0.96mで、燃焼部が住居の壁の外側に出るもので

ある。燃焼部は煙道との境が明確でなく、煙道そのものが削平され消失している可能性がある。幅は0.71mで、床面からの深さは0.25mである。

カマドの覆土は、第3層が灰と炭を主体とする層であり、使用時の堆積層と考えられる。袖は検出されなかった。

出土遺物は、第157図に示した。2・7がカマドから出土した。1～4は須恵器の坏である。1は、底部が回転糸切りで、胎土に白色針状物質を含み南比企窯産である。2は、底部が回転糸切りで、不明瞭ながら体部下端にヘラケズリが施されたと思われる。胎土は、含有物が少なく精緻である。3は、ほぼ完形で底部は回転糸切である。体部下端にヘラケズリが施される。胎土は、多量の3～8mm程度の長石のほか、片岩を微量含む。末野窯産と考えられる。4は、口縁部の破片である。胎土は、含有物が少なく精緻である。5は、ロク



S J 17

1 灰黄褐色土

粘質シルト しまり強

粘性ややあり 炭化粒子微量含む

2 褐灰色土

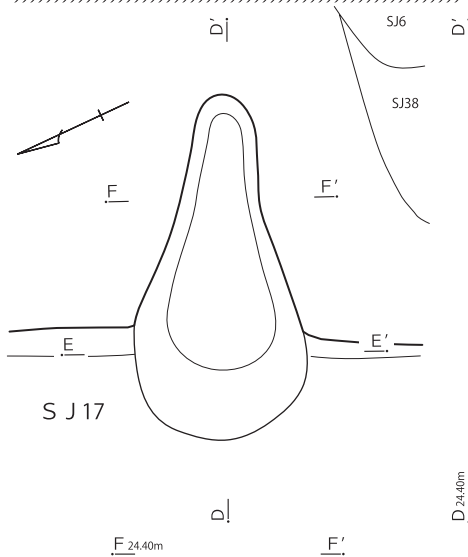
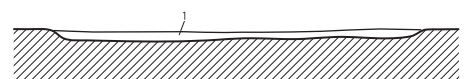
粘質シルト しまり強 粘性あり

炭化粒子・焼土粒子含む

3 黒褐色土

炭・灰層 しまり弱 粘性なし

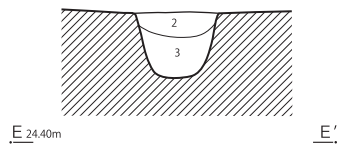
焼土ブロック含む



S J 17

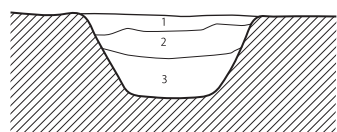
F 24.40m

F'



E 24.40m

E'

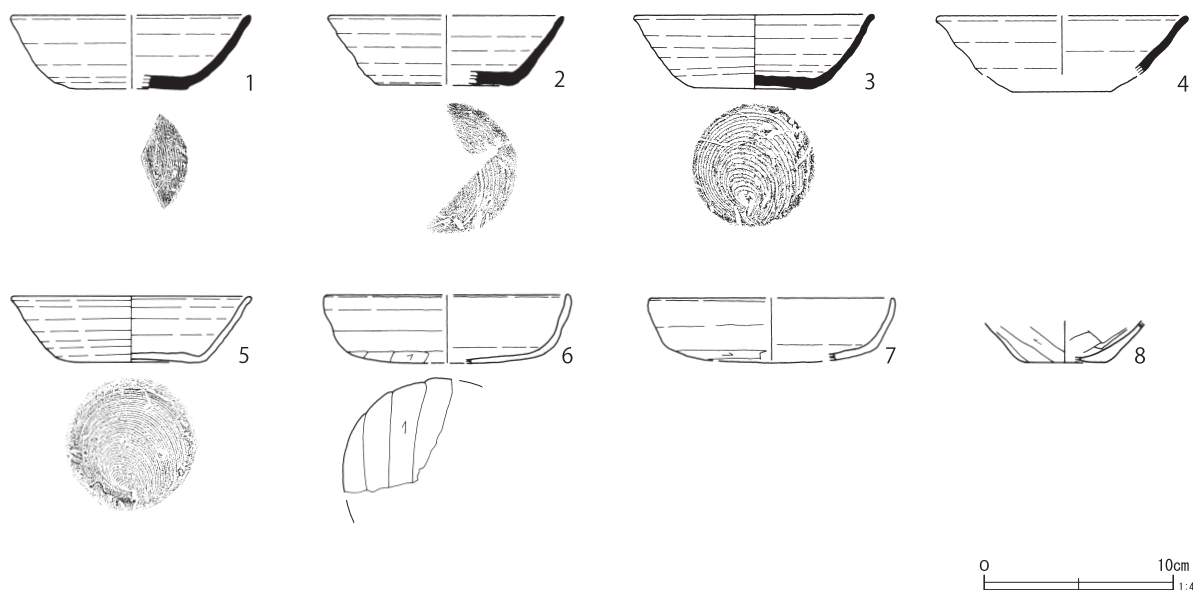


F 24.40m

F'



第 156 図 第 17 号住居跡



第 157 図 第 17 号住居跡出土遺物

第 44 表 第 17 号住居跡出土遺物観察表 (第 157 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	12.6	3.9	(6.0)	DHJK	70	普通	灰	A 底部回転糸切り 南比企産	54-6
2	須恵器	坏	(12.2)	[3.7]	(7.2)	EH	40	普通	灰白	カマド・B 底部回転糸切り	54-7
3	須恵器	坏	12.4	3.8	6.3	BDEHL	80	普通	灰	S J 44 No. 1 (S J 17 扱い) 底部回転糸切り 末野産	54-8
4	須恵器	坏	(12.9)	[3.1]	—	EHKJ	20	普通	灰白	一括	54-9
5	ロクロ土師器	坏	12.6	3.5	6.2	EHIJK	95	普通	橙	C・一括 底部回転糸切り 南比企産	75-6
6	土師器	坏	(12.6)	[3.6]	—	CEH	30	普通	橙	一括	75-6
7	土師器	坏	(12.8)	[3.3]	—	CEHIK	30	普通	明赤褐	カマド	75-6
8	土師器	甕	—	[2.3]	(4.4)	CEK	45	普通	にぶい橙	C	75-6

ロ土師器の坏である。底部は、回転糸切後、周辺をヘラケズリする。胎土に白色針状物質を多量に含むことから、南比企地域において作成されたものと考えられる。いずれも 9 世紀前半の所産と考えられる。6～8 は土師器であり、6・7 が坏、8 が甕である。6・7 は薄手で、体部は直立気味に立ち上がり、口縁部端部がごく僅かに内湾する。風化による磨滅が著しく、器面の調整は不明瞭である。8 は、底部の破片である。胴部に縦方向のヘラナデを施す。胎土に角閃石が多量に含まれる。

第19号住居跡 (第158図)

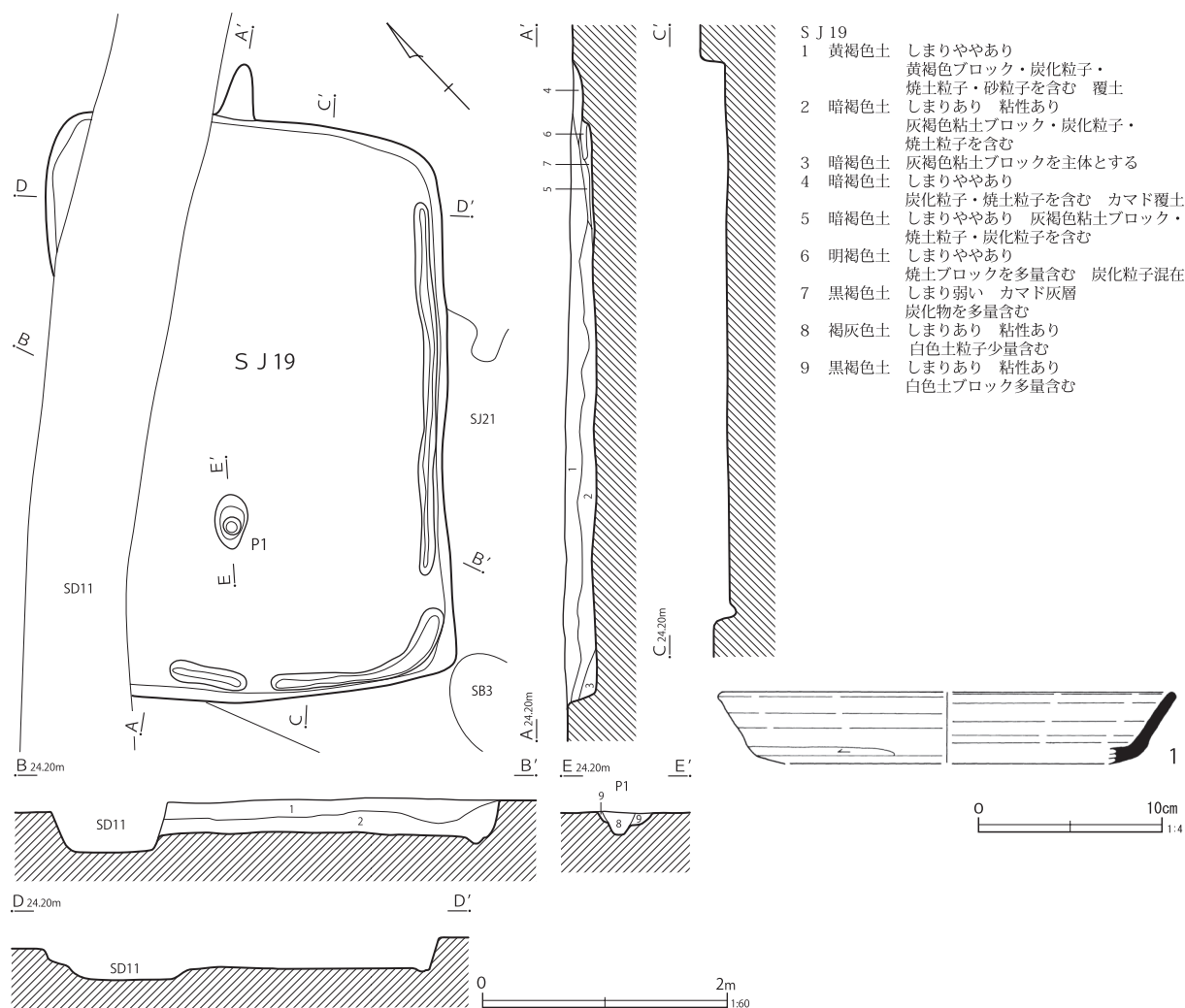
N-17グリッドで検出した。第21号住居跡、第11号溝跡、第10号土壌と重複し、第21号住居跡よ

り新しく他の遺構より古い。住居の北辺は殆ど第11号溝跡によって壊されている。

平面形は長方形を呈し、規模は長軸が4.86m、短軸は3.26m、深さは0.30mである。南壁を基準とした主軸方位はN-45°-Eである。

覆土は、黄褐色から暗褐色土が主体で地山の灰褐色粘質土ブロックと焼土粒子や炭化粒子を含む。

床面は平坦で、壁はやや斜めに立ち上がる。壁溝は南東と北西側で検出した。全周はしておらず、幅0.08～0.17m、深さは0.06mほどである。ピットは、中央からやや南西寄りに1基検出した。住居跡長軸の中心線上に位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長軸0.46m、短軸0.27m、深さ



第 158 図 第 19 号住居跡・出土遺物

は0.18mである。貯蔵穴は検出されなかった。

カマドは北東壁の中央に造られていた。カマドの掘り込みは極めて浅く、煙道も短く立ち上がる。焚口に相当する位置には炭化物が残っていたが、落ち込みとして図化できるほどではなかった。煙道として認識できる部分は長さ0.45mである。検出状況から、上部が大きく削平されていると考えられる。

カマドの覆土は、第5層に灰褐色の粘土ブロックが、第6層には焼土ブロックが含まれており、

天井の崩落土と考えられる。第7層は炭化物を多量に含む灰層であり、使用時の灰炭層の堆積と考えられる。

遺物は、覆土中から土師器坏・甕、須恵器坏の小片が少量出土した。第158図に出土遺物を示した。須恵器の盤である。体部は外反し下端にはヘラケズリを施す。体部は内外面ともに丁寧なナデによってロクロ成形時の稜線を整える。胎土は、黒色粒子、白色粒子と長石が多量に含む。末野窯産と考えられる。小破片のため時期は不明である。

第 45 表 第 19 号住居跡出土遺物観察表（第 158 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	盤	(24.2)	3.9	—	D I K	15	普通	灰	C 末野産か	75-6

第24号住居跡（第159図）

R-18・19グリッドで検出した。第2・4・27・34・40・41号住居跡と重複する。第2・4号住居跡より古く、第27・34・41号住居跡より新しい。また、第40号住居跡より新しいと思われる。上面を第2号住居跡に、南半部は第4号住居跡によって壊され、カマドの前面は床面直上まで攪乱により壊されていた。東側は調査区外に続いている。このため、検出できたのは、カマド周辺に限られる。平面形は不明である。

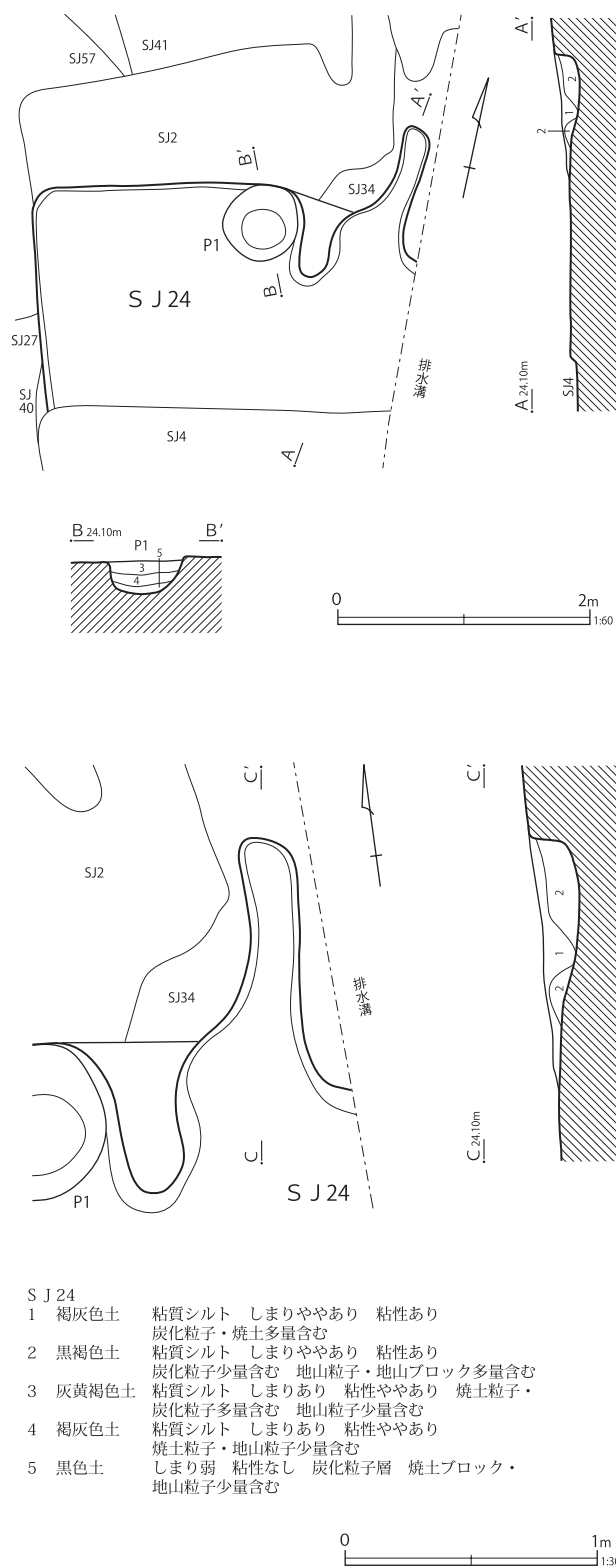
規模は、北辺が検出値で3.05m、西辺の残存値が1.80m、深さは残存値で0.32mである。西辺を基準とした主軸方位はN-12°-Wを指す。

床面はほぼ平坦であった。壁は垂直に立ち上がり、壁溝や、柱穴として使用されたピットは検出されなかった。左袖の脇にP1とした土壌状の掘り込みが確認された。カマドの右側は未調査のため断定はできないが、貯蔵穴状の掘り込みである。平面形は円形で、規模は直径0.60m、深さは床面から0.26mである。

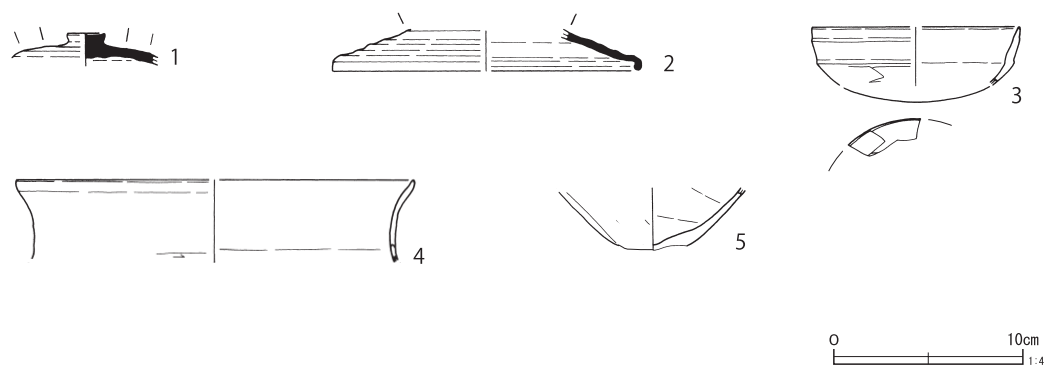
カマドは北壁に設けられていた。東側が調査区外のため、右袖はおよそ半分が未調査である。カマドの全長は1.52mである。燃烧部は住居の壁より内側に位置する。底面は奥に向かってやや低くなる。壁は、燃烧部奥から煙道に移行する付近が被熱により赤色に硬化していた。煙道は住居の壁に対して右斜め方向に延びている。長さは0.50mで、幅は0.20mである。煙出し部は、ほぼ垂直に立ち上がる。

カマドの覆土は、灰や炭からなる層は検出されなかった。

出土遺物は、第160図に示した。1・3はP1から、2・4はカマドから出土した。1・2は須恵器の蓋である。白色針状物質を含み、南比企窯産である。3～5は土師器であり、3は坏、4・5は甕である。遺物はいずれも小破片であり、詳細な時期は不明である。



第159図 第24号住居跡



第 160 図 第 24 号住居跡出土遺物

第 46 表 第 24 号住居跡出土遺物観察表（第 160 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	—	[1.6]	—	E J	30	普通	灰	P 1 つまみ径 2.0 cm 南比企産	54-10
2	須恵器	蓋	(16.0)	[2.2]	—	E J	10	普通	褐灰	カマド 南比企産	75-7
3	土師器	坏	(10.9)	[3.1]	—	E I K	10	普通	橙	P 1	75-7
4	土師器	甕	(20.8)	[4.4]	—	C E H I	20	普通	にぶい赤褐	S J 34 (S J 24 扱い) カマド	75-7
5	土師器	甕	—	[3.0]	(3.6)	C I K	25	普通	浅黄		75-7

第26号住居跡（第161・162図）

L-17グリッドで検出した。第70・73・74・76・78・83・84号住居跡、第32号溝跡と重複し、第26号住居跡が最も新しい。

平面形はカマドの軸に沿った長方形であるが、カマドのある東壁が西壁よりやや長く、不整形を呈する。

規模は、東西方向が3.63m、南北方向は2.87mである。深さは0.24mである。カマドの軸を基準とした主軸方位はN-101°-Eを指す。

覆土は暗褐色土が主体である。第3層と第8層の境に炭を主体とする層が一部広がっており、この面が、床と推定できる。第8・9層は住居跡の掘方を埋め戻した層であろう。

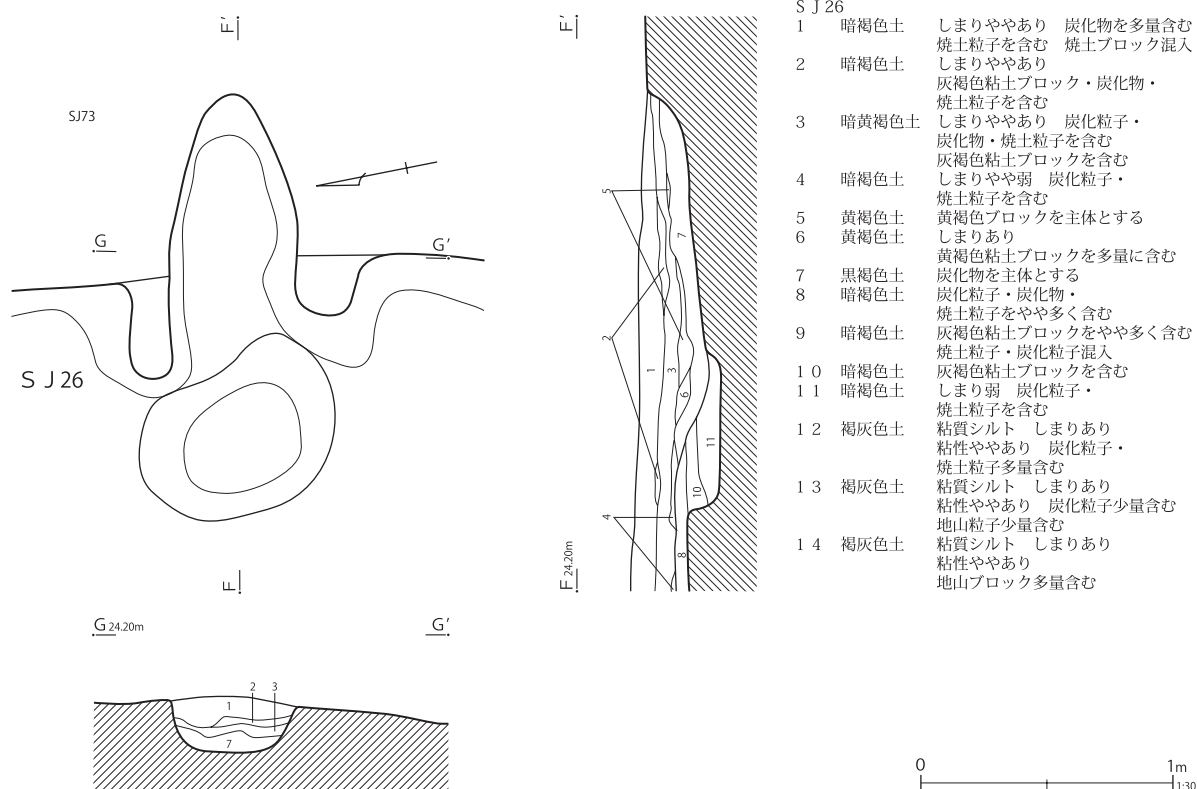
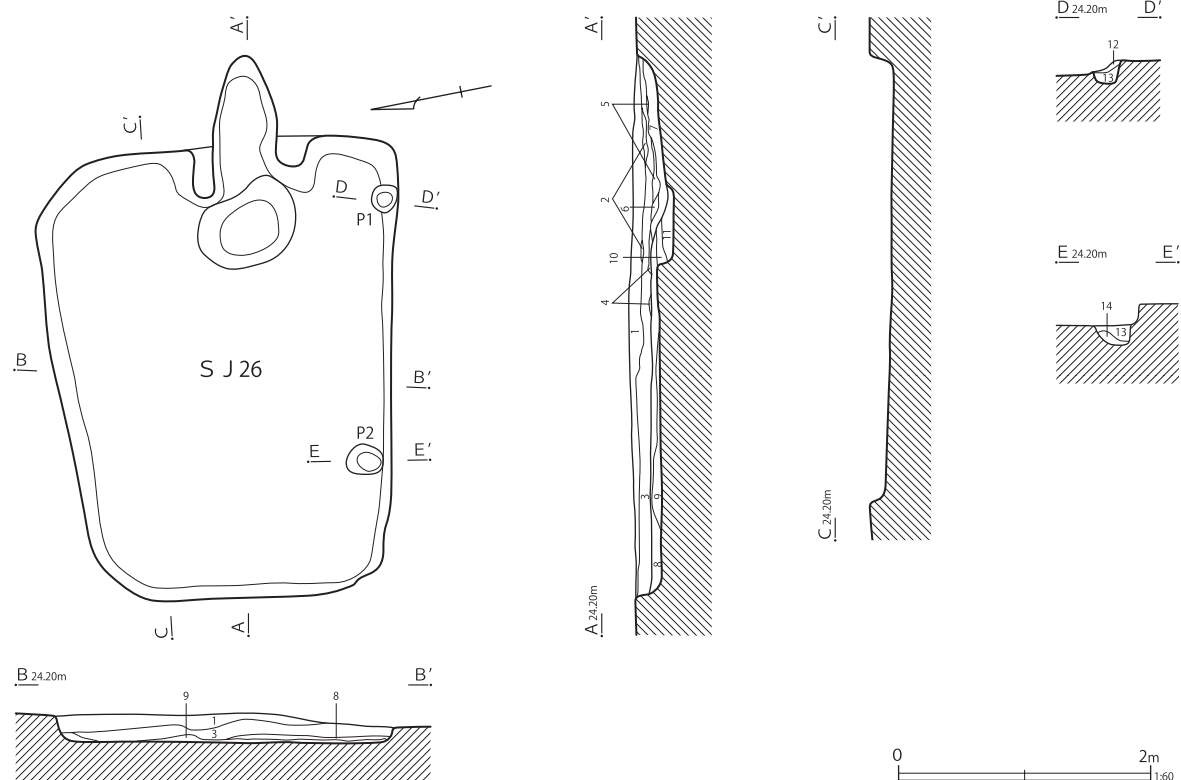
床面からは壁溝や貯蔵穴は検出されなかった。南壁にかかるようにピットが2基検出されたが、住居跡に伴うものかどうか明確ではない。平面形はいずれも不整円形でP1の大きさは0.22m×0.21m、床面からの深さは0.06mである。P2は0.32m×0.23m、深さは0.13mである。

カマドは東壁のやや南寄りに構築されていた。

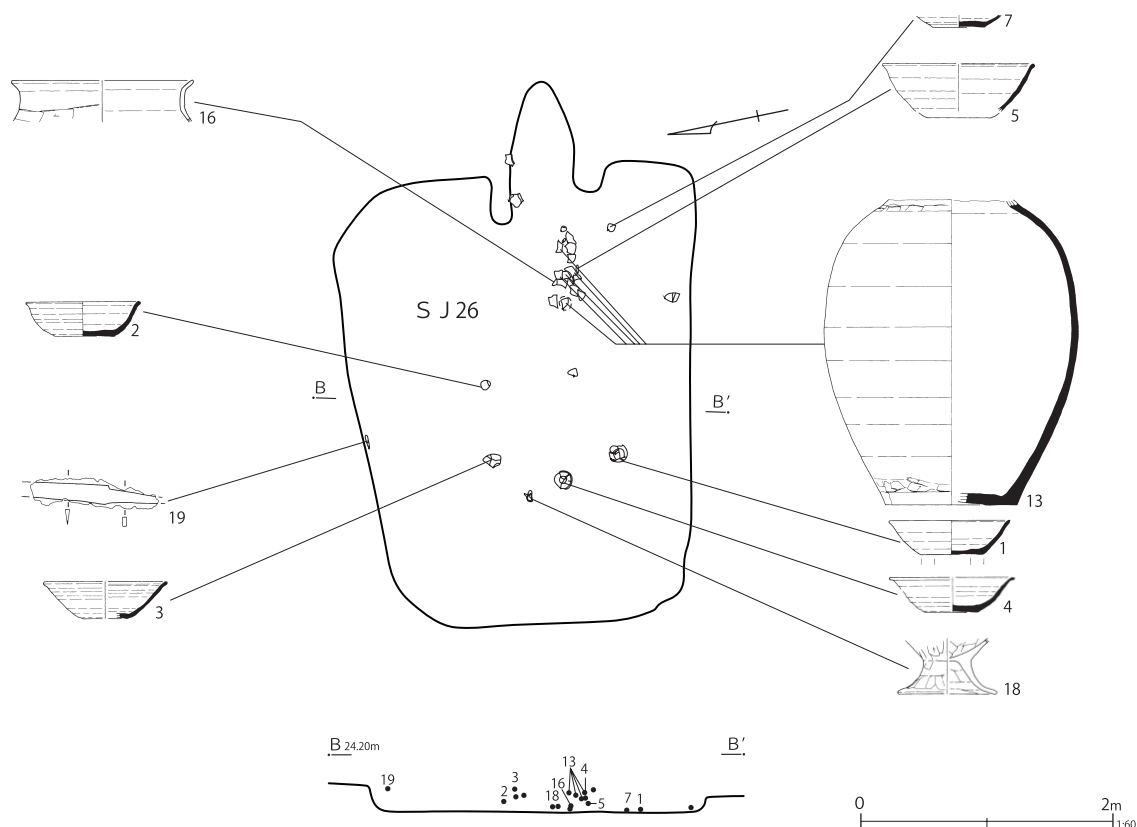
住居の壁が燃焼部の中間にかかるものと考えられる。残存するカマドの長さは袖の先端までで1.22mである。燃焼部は煙道との境が明瞭でなく、底面は煙道先端に向かって緩やかに上がっていく。幅は0.45mである。煙道は燃焼部との境が明瞭でなく、幅も燃焼部の幅のまま延びる。先端は湾曲して立ち上がる。

カマド前の不整楕円形の掘り込みは、土層断面で見ると、住居構築時に掘削したものと思われる。燃焼部の掘り方とも捉えられるが、検出された限りでは袖は掘り込みより手前で途切れている。さらに、カマドの覆土は、第5層が使用時の灰層と考えられ、第5層の落込みが最終的に使用されていた燃焼部の位置と考えられる。カマド前面に認められる第4層は、炭化物粒子・焼土粒子を含む灰層で、カマドの堆積物が広がったものと推察される。

袖は両袖ともに確認された。左袖は長さ0.49m、幅は基部の上端で0.18m、右袖は長さ0.43m、幅は同じく0.30mである。袖は、粘質土を後から貼りつけたものと考えられる。



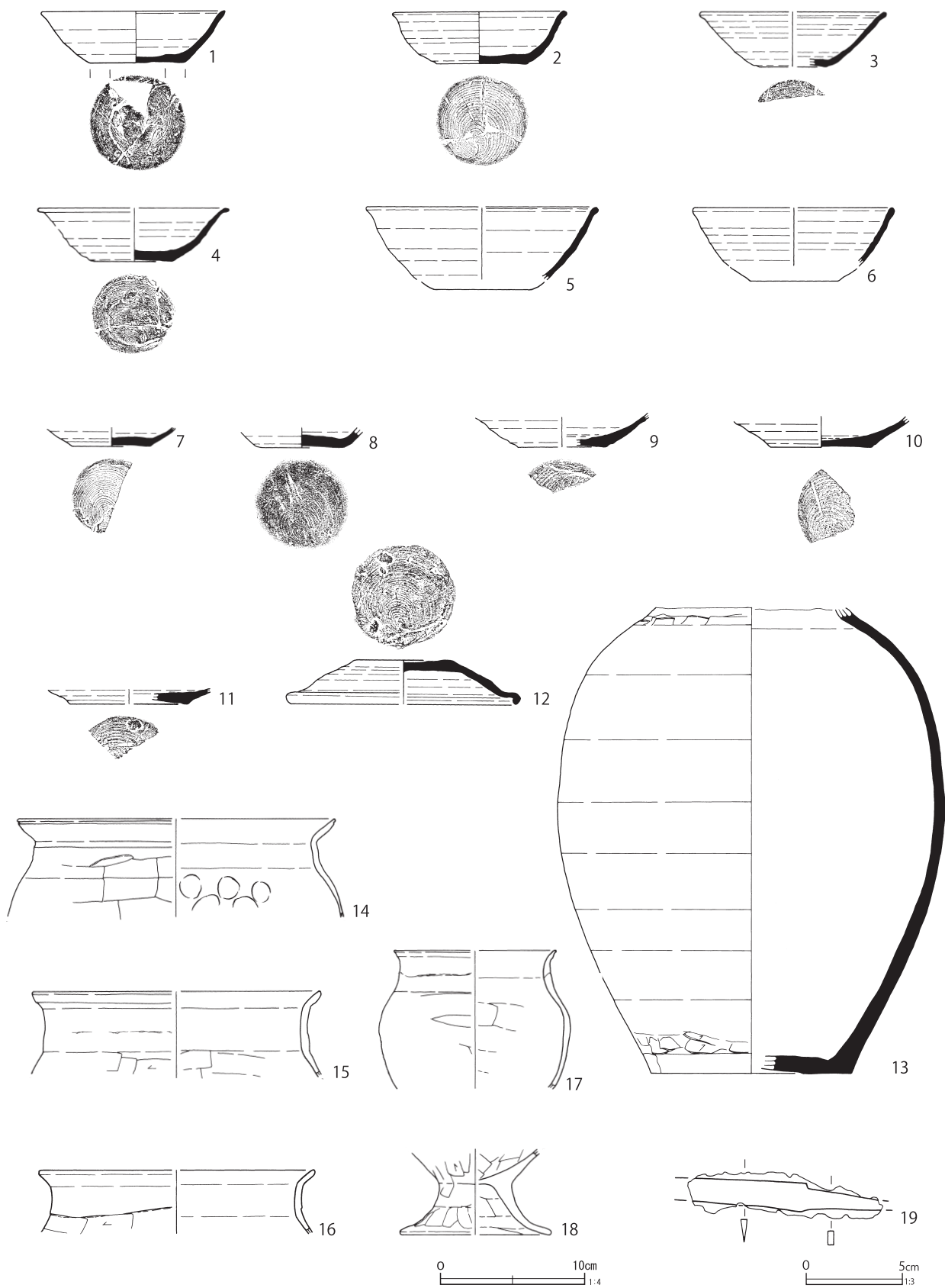
第 161 図 第 26 号住居跡



第 162 図 第 26 号住居跡遺物出土状況

遺物はカマドの前面を中心に土師器坏・甕、須恵器坏・甕のほか刀子が出土した。出土遺物は第 163 図に示した。1～13 は須恵器であり、1～11 が坏、12 が蓋、13 が甕である。1 は、ほぼ完形である。体部が逆ハの字状に立ち上がり、口縁部端部がやや膨らみを持つ。底部は回転ヘラ切りである。胎土は、2～6mm 程度の黒色粒子が多量に含まれる。末野窯産と考えられる。2 も、ほぼ完形である。体部中位に膨らみを持ち、口縁部端部が外反する。器壁はやや厚手での印象を受ける。底部は、回転糸切りである。胎土は、含有物が少なく精緻である。3 は、体部が強く外反し、体部下端に、幅の狭いヘラケズリが認められる。底部は、回転糸切りである。胎土の含有物はい多いものの、粒子の大きいものは少ない。1・2 と比較して暗い灰色を呈し、良く焼き締まる。4 は、体部下位に膨らみをもち、口縁部端部が強く外反する。体部下端には、弱いヘラケズリを施す。底部は回転

糸切りである。胎土は、片岩をごく微量含む。橙色を呈し、焼成は不良である。末野窯産である。5・6 は口縁部の破片である。5 は、口縁部端部がやや外反する。胎土は、含有物が多くやや粗い印象で、良く焼き締まっている。末野窯産と考えられる。使用か、風化によるものかは不明だが、内面の磨滅が著しい。6 は、胎土に白色針状物質を多量に含み、南比企窯産である。7～11 は底部の破片である。7 の底部は、回転糸切りと考えられるが、体部外面と底部の磨滅が激しく、不明瞭である。磨滅は、二次利用によるものの可能性がある。体部下端にはヘラケズリを施す。末野窯産と考えられる。8 の底部は回転糸切りで、胎土は、含有物が極めて少なく精緻である。9・10 は、胎土や器形の類似性が高く、同一個体の可能性がある。底部は、回転糸切である。胎土は含有物が多く、良く焼き締まっている。末野窯産と考えられる。11 の底部は回転糸切りで、植物の茎によると



第 163 図 第 26 号住居跡出土遺物

第 47 表 第 26 号住居跡出土遺物観察表 (第 163 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	12.6	3.6	6.5	BEHK	80	普通	灰	No. 7 回転ヘラ切り 末野産か	55-1
2	須恵器	坏	11.6	3.6	6.2	E	80	普通	灰	No. 4 A・D 底部回転糸切り	55-2
3	須恵器	坏	(12.7)	3.9	[4.7]	E	25	普通	灰	No. 5 底部回転糸切り	55-3
4	須恵器	坏	(13.0)	3.7	5.5	BEH	70	不良	橙	No. 19 底部回転糸切り 末野産	55-4
5	須恵器	碗	(15.8)	[5.0]	—	EHIK	25	普通	灰白	No. 12 末野産か	76-1
6	須恵器	坏	(13.7)	[4.1]	—	E I J K	10	普通	褐灰	B 南比企産	76-1
7	須恵器	坏	—	[1.3]	5.3	D	50	普通	褐灰	No. 17 底部回転糸切り 末野産か	76-1
8	須恵器	坏	—	[1.4]	5.6	BEI	80	普通	灰	D 底部回転糸切り	76-1
9	須恵器	坏	—	[2.3]	(6.0)	EI	25	普通	灰	D 底部回転糸切り 末野産か	76-1
10	須恵器	坏	—	[2.1]	(7.0)	EI	25	普通	灰	D 底部回転糸切り 末野産か	76-1
11	須恵器	坏	—	[1.0]	(8.2)	EK	25	普通	灰	A 底部回転糸切り 底部植物の茎の 圧痕あり 末野産か	76-1
12	須恵器	蓋	(15.6)	3.0	—	BEK	40	普通	褐灰	C・S J 78 掘方・S J 78 床下土壌No.1 天井径 6.8 cm 天井部外面粘土付着 末野産	55-5
13	須恵器	甕	—	[32.3]	(14.0)	DEK	20	普通	灰		55-6
14	土師器	甕	(20.8)	[6.9]	—	CEGHK	20	普通	明黄褐	D	55-7
15	土師器	甕	(19.8)	[5.9]	—	CEHI	15	普通	橙	D	76-1
16	土師器	甕	(18.8)	[4.4]	—	CEHIK	25	普通	橙	No. 16	76-1
17	土師器	甕	(10.5)	[9.6]	—	CHIK	20	普通	明褐	D	—
18	土師器	台付甕	—	[6.0]	(10.2)	ACDEGH	55	普通	明赤褐	No. 3	55-8
19	鉄製品	刀子	長さ [9.85] 刃幅 1.2 背幅 0.3 重さ 22.9 g							No. 3	79-1

思われる圧痕が遺存している。胎土は含有物が多く粗い。末野窯産と考えられる。

12は、つまみを持たない蓋である。天井部が回転糸切りであり、天井部における切り離し後の調整は認められない。また、10mm程度の粘土塊の付着がわずかに認められる。胎土は含有物が多く、片岩をごく微量含む。よく焼き締まっている。末野窯産である。

13は、胴部の破片である。口縁部を欠損する。底部の中央は内側にへこんでおり、体部の上端と下端はヘラケズリとヘラナデを施す。

14～18は土師器であり、14～17が甕、18が台付甕である。

14～16は口縁部の破片である。14は、口縁部上位がやや厚手であるが、全体の器壁は薄く、断面形態はコの字状に近いものである。口縁部端部の外面に、沈線上の溝が巡る。胴部内面はヘラナデによって仕上げるものと考えられ、指頭痕がかすかに認められる。15は、口縁部が厚手で、胴部の

器壁は口縁部よりも薄くなる。断面形態は、コの字状に近いものである。風化のためか、内外面ともに磨滅が著しく、器面の調整は不明瞭である。胎土は含有物が多く、角閃石を多量含む。16は、口縁部下端を欠損するため確証はないが、口縁部中位に強いヨコナデによって面を造っており、断面形態はコの字状に近いものと推察される。内外面ともに風化による磨滅が著しい。胎土は、15と同様に角閃石を多量に含む。17は口縁部から胴部にかけての破片であり、14～16と比較して小型である。口縁部にはヨコナデ、胴部には、内外面ともにヘラナデを施す。18は、台部の破片であり、胴部も一部遺存する。胴部外面には、ヘラケズリを施す。全体の調整は内外面ともに丁寧であり、胴部と台部の接続部も丁寧なナデによって成形痕を消している。胎土は、含有物が多く、器面はざらついている。

19は刀子で、柄の一部が遺存するが、両端部を欠損する。

第27号住居跡（第164図）

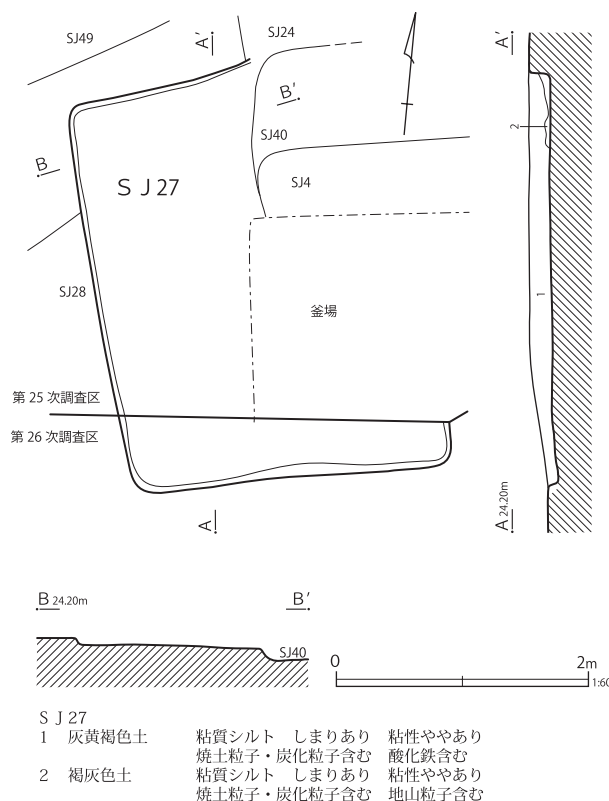
R・S-18・19グリッドで検出した。第2・4・24・28・40号住居跡と重複し、第2・4・24号住居跡より古く、第28号住居跡より新しい。第40号住居跡との新旧関係は捉えられなかった。東側は重複する住居跡によって壊されており、南側は調査区外に続く。

第26次調査によって南辺が検出されたことにより、北東隅以外の3隅が確認された。平面形は長方形である。規模は、西辺は3.1m、南辺は2.65mである。深さは、0.19mである。西辺を基準とした主軸方位は、N-15°-Wを指す。

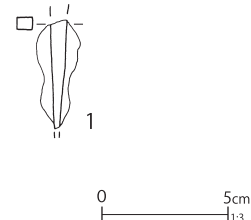
覆土は、灰黄褐色土が主体であり、壁際の一部で地山粒子を含む褐灰色土が認められることから、部分的に壁の崩落があるものと考えられる。

床面は平坦で、壁溝やピットは検出されなかった。カマドも検出されず、重複する遺構によって壊されたものと推定される。

遺物は総じて少なく、いずれも小破片である。第165図に、出土遺物を示した。釘と考えられる。断面形態は方形で両端部を欠損する。



第164図 第27号住居跡



第165図 第27号住居跡出土遺物

第48表 第27号住居跡出土遺物観察表（第165図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	鉄製品	釘	長さ [4.25]	幅 0.6	厚さ 0.5	重さ 7.2 g					79-1

第28号住居跡（第166図）

R・S-18グリッドで検出した。第27号住居跡と重複し、第28号住居跡が古い。東側を第27号住居跡によって壊され、南側は調査区外に続く。検出できたのは西辺と北辺のごく一部である。そのため、平面形は不明である。

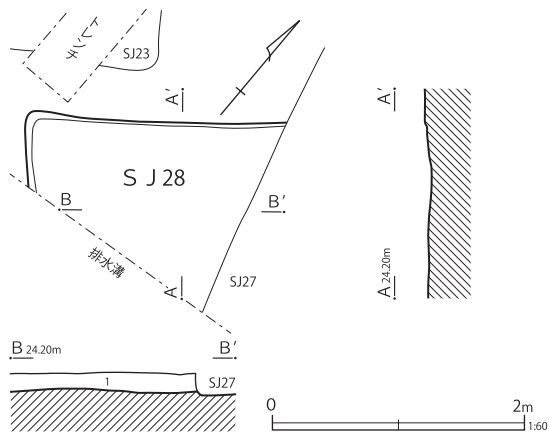
規模は、南北方向に検出値で1.48m、東西方向に2.08mである。深さは0.15mである。主軸方位は、最も残りのいい北辺を基準とすると、N

-52°-Eを指す。

覆土は、にぶい黄褐色のシルト質土が主体であり、焼土粒子や地山ブロックを含む。

床面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。ピットや壁溝などは検出されなかった。カマドも未検出である。

遺物は、土師器の小片がわずかに出土したのみで、図示できるものはない。このため、遺構の詳細な時期は不明である。



S J 28
1 にぶい黄褐色土 粘質シルト しまり強 粘性やや弱 地山ブロック含む
焼土粒子少量含む

第 166 図 第 28 号住居跡

第29号住居跡（第167図）

M・L-16・17グリッドで検出した。第37・54・71・72・80号住居跡、第37号土壇、第12号溝跡と重複し、第29号住居跡が最も新しいと思われる。

平面形は、東西方向の長い長方形である。

規模は、南北辺が2.55m、東西辺が3.06m、深さは壁の最も深い所で0.15mである。北西辺を基準とした主軸方位はN-74°-Eを指す。

覆土は褐灰色のシルト質土が主体である。第2層は、炭化物と地山ブロックを含む褐灰色土で、貼床と考えられる。

床面で、壁溝やピットは確認されなかった。カマドは東壁のやや南寄りに設けられていた。煙道は検出されず、上面が削平されたことにより失われたものと考えられる。残存する長さは0.93mである。燃烧部は住居の壁の内側に入るもので、掘り込みは円形である。燃烧部の範囲は、土層断面で、カマドの堆積物に由来する第5層が奥の立ち上がりまで広がっていることから、ここまでを燃烧部と考えておきたい。幅は0.63mで、床面からの深さは0.18mである。

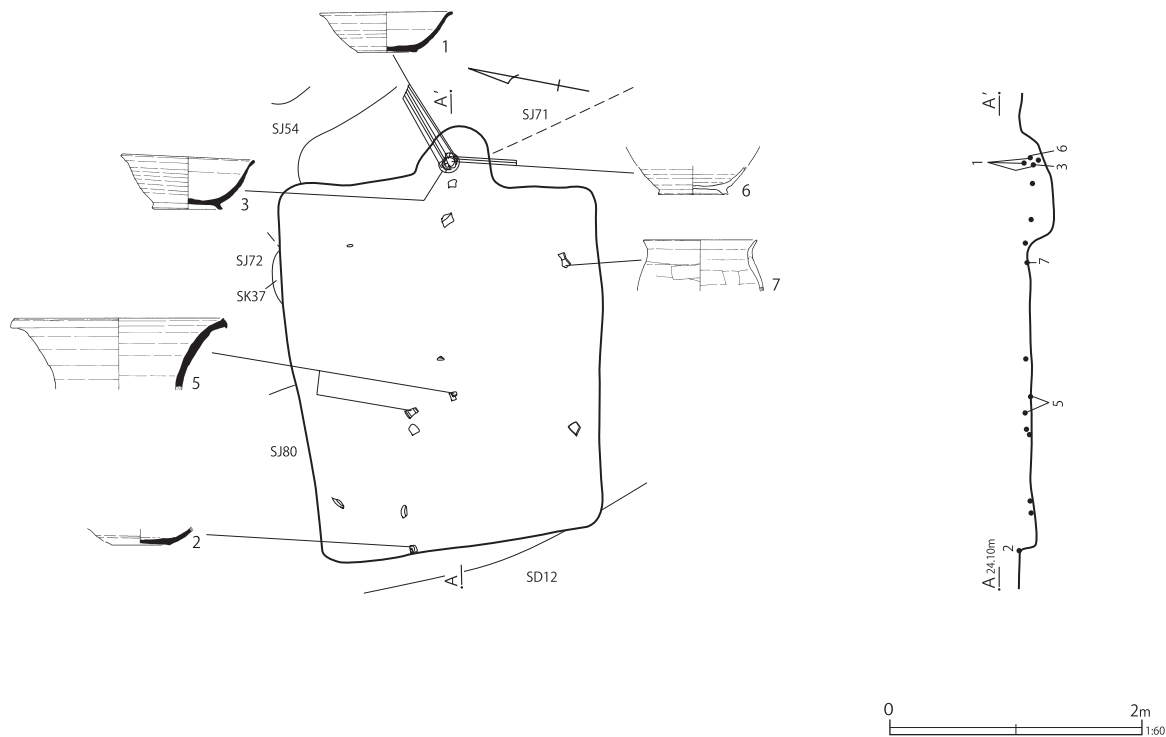
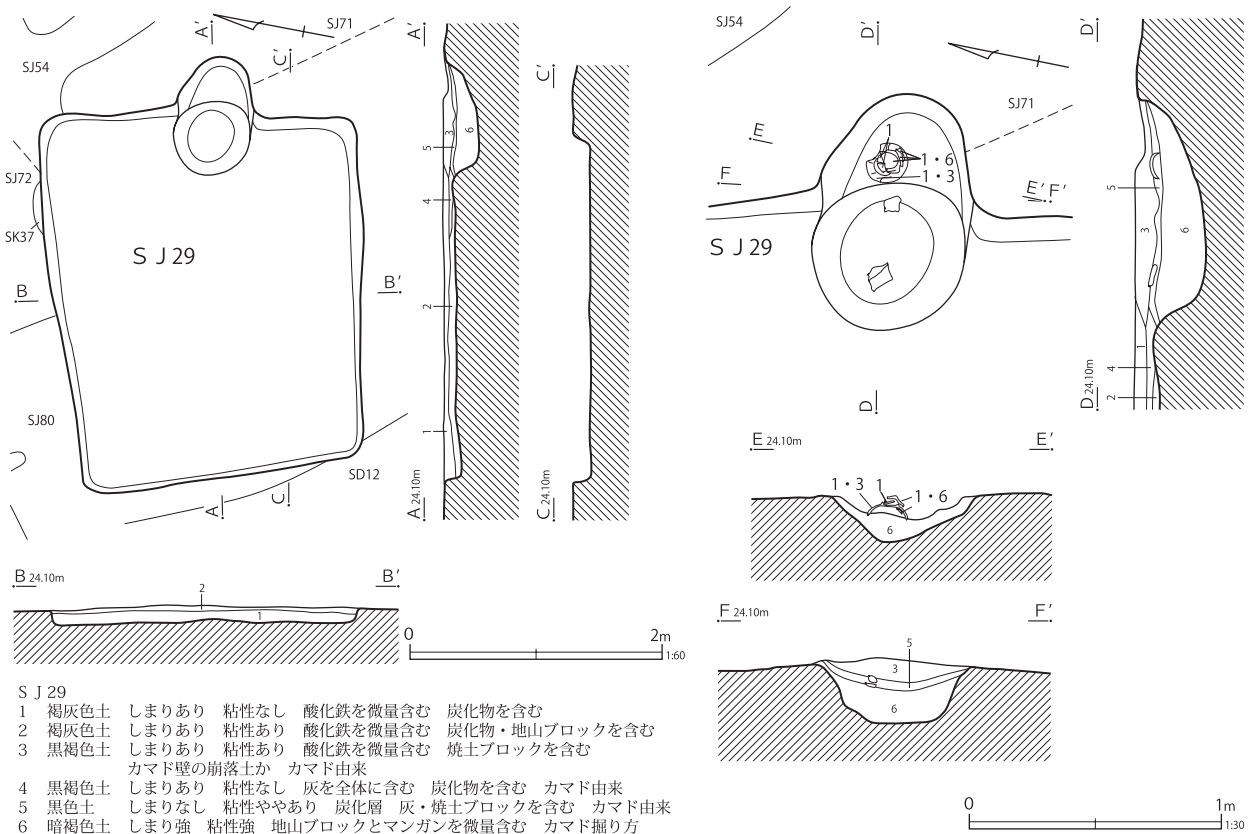
カマドの覆土は、第3層は焼土ブロックを含む黒褐色土で、カマドの天井あるいは壁の崩落土と

考えられる。第5層は灰・焼土粒子を含む炭化物主体の黒色土層で、カマド使用時の灰炭の堆積層であろう。第6層は、地山ブロックを含むしまりの強い暗褐色土で、カマドの掘り方の埋土である。カマドの前面に分布する第4層は、灰を含んだ黒褐色土であり、カマドに由来する灰炭層が広がったものと考えられる。袖は確認できなかった。

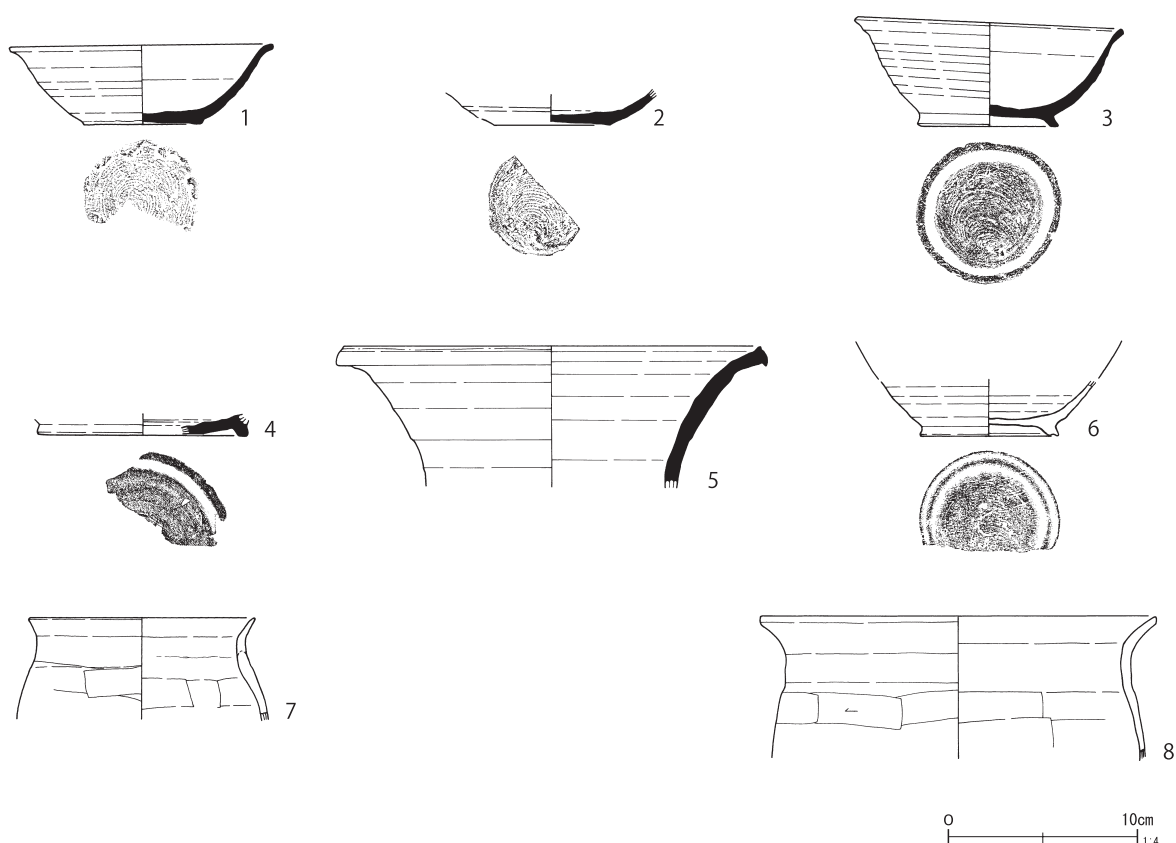
出土遺物は、カマド内のほか、住居跡全体に分布し、土師器坏・甕、須恵器坏、土錘などが出土した。

出土遺物は、第168図に示した。このうち1・3は、第167図に示すとおり、カマド燃烧部から2個体が重なって、伏せた状態で検出された。検出状態から、これらの遺物は支脚として使用されたものと考えられる。1～5は須恵器であり、1・2が坏、3・4が高台付埴、5が甕である。1は、体部中位がやや膨らみを持ち、口縁部端部が外反する。底部は回転糸切りであり、底部周辺には粘土の付着が認められる。胎土は含有物が多く、良く焼き締まっている。末野窯産である。2は、底部の破片である。底部を回転糸切り後、周辺がヘラケズリされる。また、体部下端にヘラケズリが施される。末野窯産である。3は、体部中位から下位にかけて膨らみをもち、体部上位から口縁部端部にかけてやや外反する。高台は外反する。底部は回転糸切りである。含有物が多く、粗い胎土である。焼成は不良で橙色を呈し、ロクロ土師器とした6に近いものである。末野窯産である。4は、底部の破片である。底部の径はやや大きく、高台は外反する。底部は痕跡がナデ消されている。胎土は、含有物が少なく精緻である。上野地域産と考えられる。5は、口縁部の破片である。胎土に、白色針状物質を含み、南比企窯産である。

6は、ロクロ土師器の高台付埴で、底部の破片である。高台は外反し、高台端部の中央にヘラケズリが施される。底部と高台内側の接続は明瞭な



第 167 図 第 29 号住居跡・遺物出土状況



第 168 図 第 29 号住居跡出土遺物

第 49 表 第 29 号住居跡出土遺物観察表（第 168 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(13.7)	4.2	(6.0)	B E K	30	普通	灰	カマド・No.4・5・6 底部回転糸切り 末野産	55-9
2	須恵器	坏	—	[1.9]	6.0	B E K	50	普通	灰	No.14 底部周辺ヘラケズリ 末野産	75-7
3	須恵器	高台付埴	13.8	5.5	7.1	B E K	90	不良	橙	No.6 底部回転糸切り 末野産	55-10
4	須恵器	高台付埴	—	[1.1]	(10.8)	E I K	20	普通	灰白	A 上野産か	75-7
5	須恵器	甕	(22.0)	[7.5]	—	I J K	10	普通	灰	No.9・10 南比企産	75-7
6	ロクロ土師器	高台付埴	—	[2.9]	7.2	B C E H I	40	良好	明赤褐	No.4 底部回転糸切り	56-1
7	土師器	甕	(11.8)	[5.4]	—	H I	30	普通	橙	No.7	75-7
8	土師器	甕	(20.9)	[7.5]	—	C G H I	25	普通	橙	A	56-2

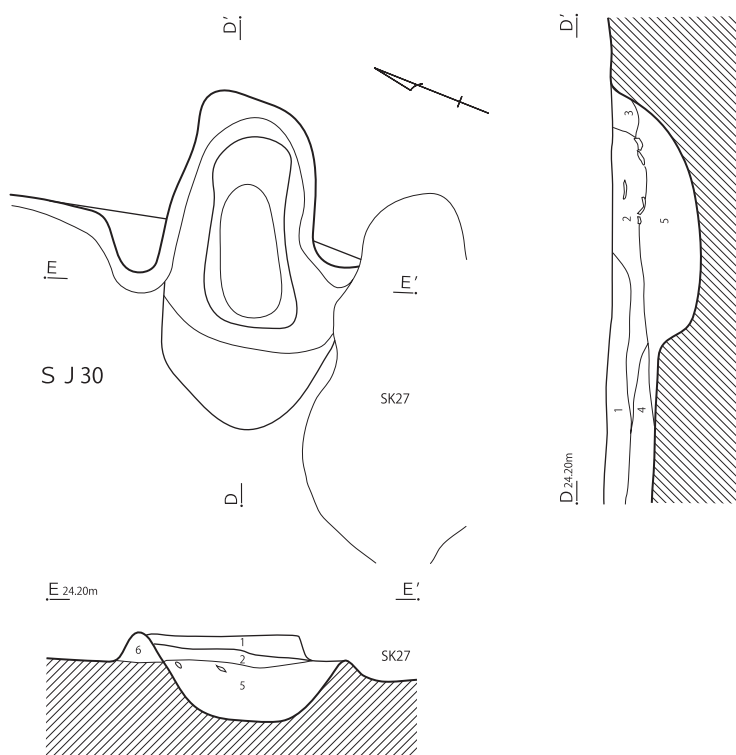
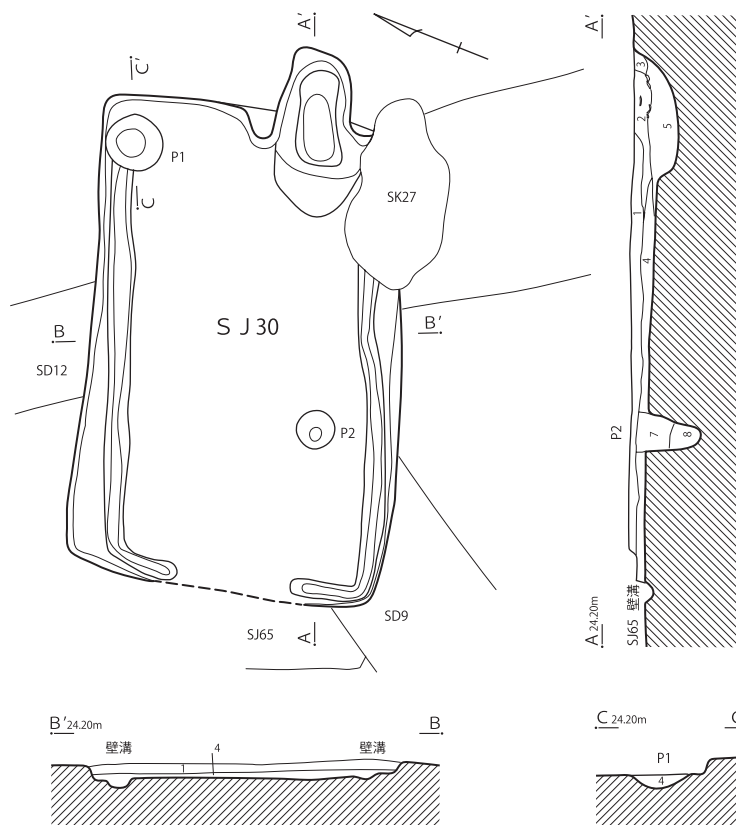
段を持たず、底部はヘラナデによって痕跡が消されている。焼成は良好で、良く焼き締まっている。

7・8は、土師器の甕で、口縁部の破片である。いずれも、内外面ともに風化による磨滅が著しい。7は小型で、胴部はやや丸みを帯びると考えられる。8は、コの字状に近い断面形態と思われるが、磨滅が激しく、不明瞭である。

第30号住居跡（第169・170図）

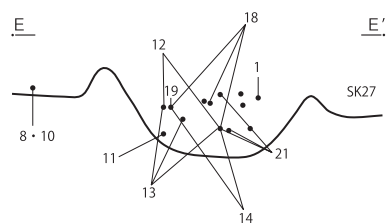
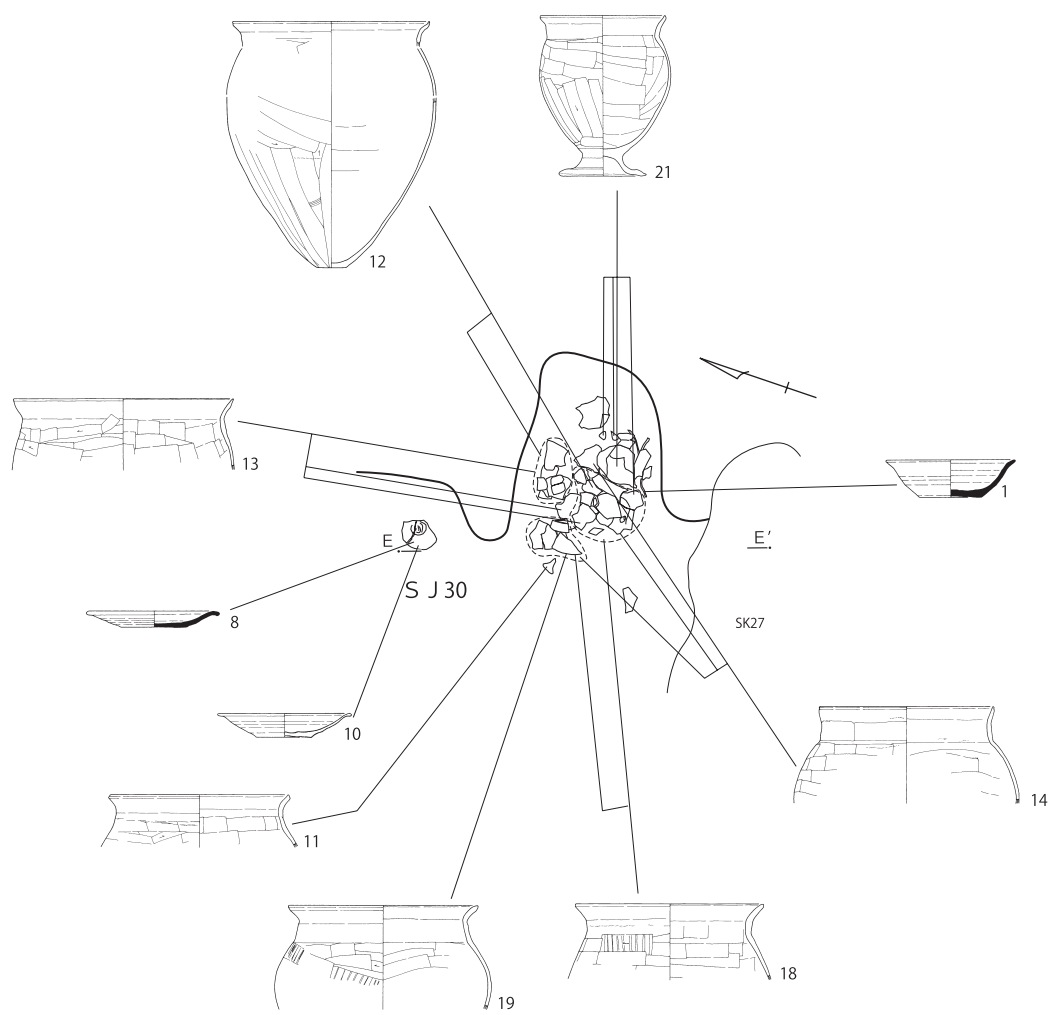
M-17グリッドで検出した。第65・66・67号住居跡、第27号土壌、第9・12号溝跡と重複し、第27号土壌より古く、他の遺構より新しいと思われる。

平面形は、カマドの軸に対して縦長の長方形を呈する。

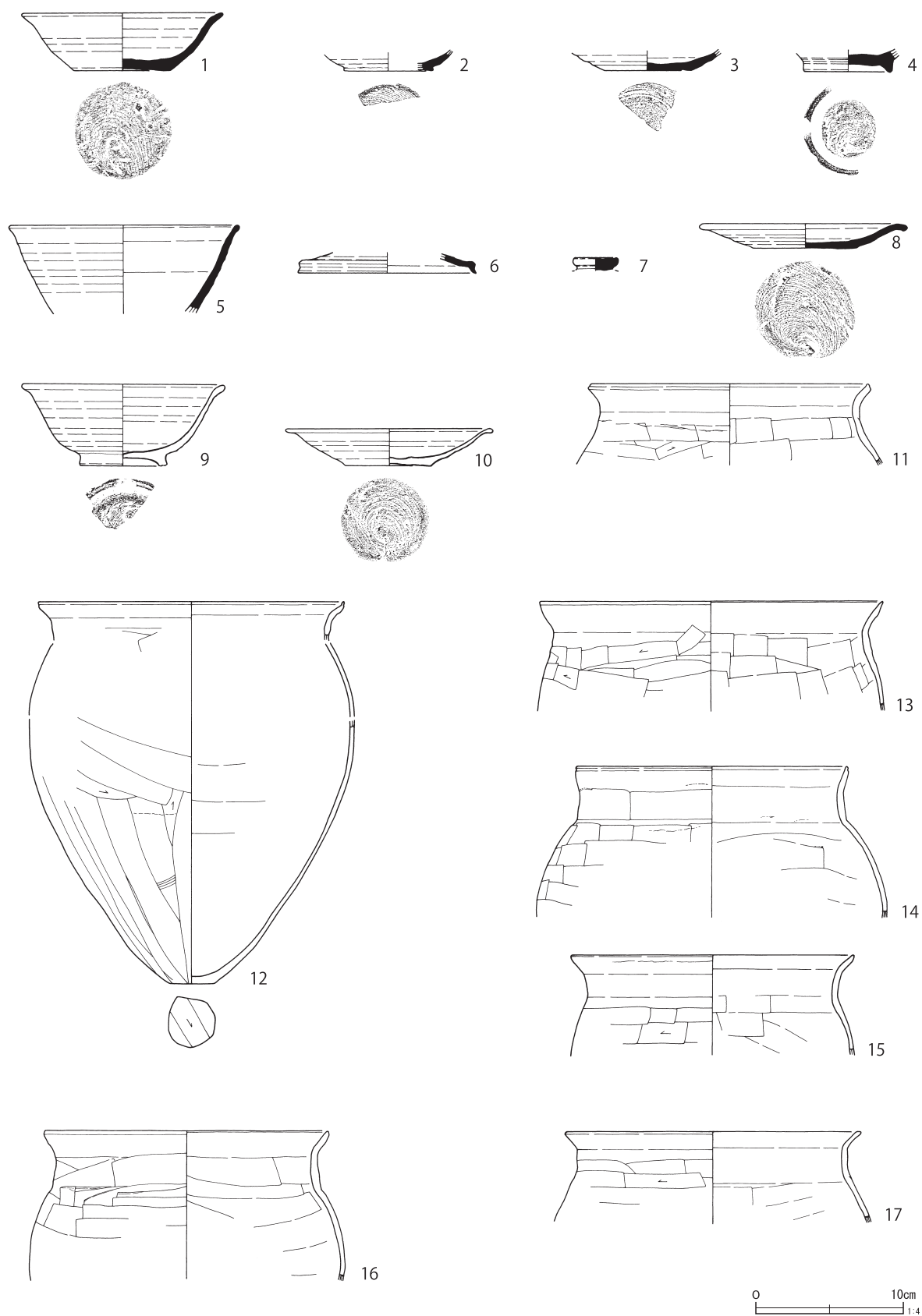


- S J 30
- | | | |
|---|------|---|
| 1 | 褐灰色土 | しまりあり 粘性あり 焼土粒子・炭化粒子微量含む |
| 2 | 褐灰色土 | しまりあり 粘性あり 炭化粒子微量含む |
| 3 | 暗灰色土 | しまりやや弱 粘性強 地山粒子少量含む |
| 4 | 黒褐色土 | シルト しまりあり 粘性あり 炭化粒子・焼土粒子微量含む 地山ブロック多量含む 掘り方埋土 |
| 5 | 黒褐色土 | しまりやや弱 粘性強 炭化粒子微量含む 地山粒子多量含む 埋め戻し土か |
| 6 | 灰褐色土 | しまりあり 粘性あり カマド袖 |
| 7 | 黒褐色土 | しまりあり 粘性あり 地山粒子多量含む |
| 8 | 褐灰色土 | しまりあり 粘性強 砂を少量含む |

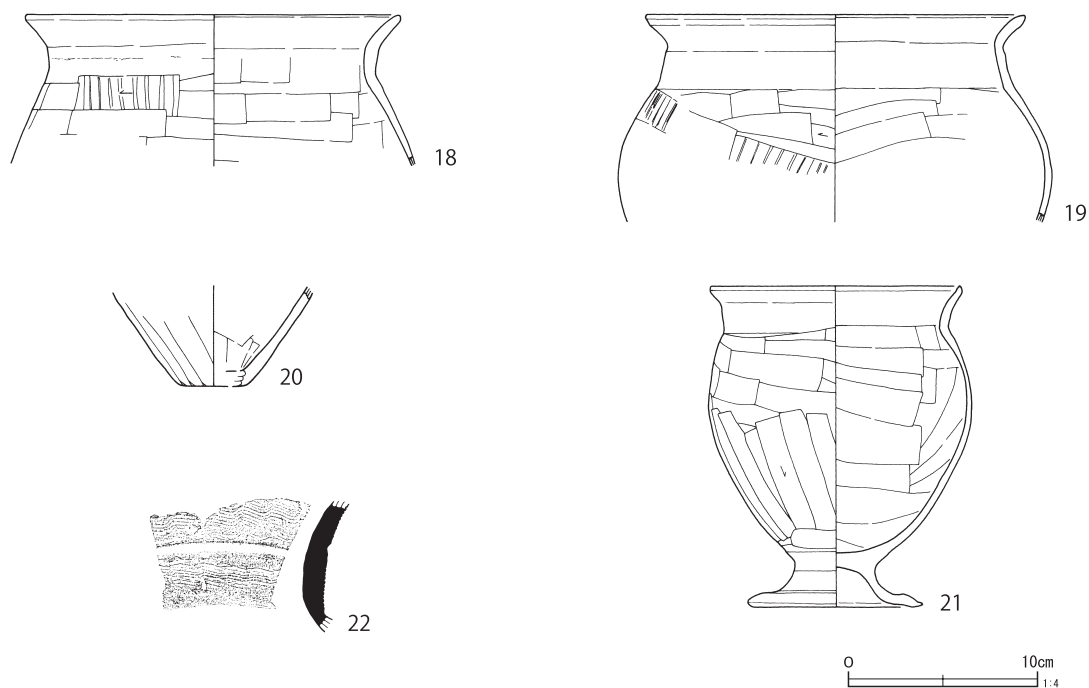
第 169 図 第 30 号住居跡



第 170 図 第 30 号住居跡遺物出土状況



第 171 図 第 30 号住居跡出土遺物（1）



第 172 図 第 30 号住居跡出土遺物（2）

第 50 表 第 30 号住居跡出土遺物観察表（第 171・172 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(13.4)	3.9	6.6	EH	25	普通	灰	カマド・カマドNo.4 底部回転糸切り 末野産か	56-3
2	須恵器	坏	—	[1.5]	(6.0)	CHI	10	普通	褐灰	B 底部回転糸切り	76-2
3	須恵器	坏	—	[1.4]	(5.7)	EJ	25	普通	褐灰	底部回転糸切り 南比企産	76-2
4	須恵器	高台付埴	—	[1.6]	5.8	DEIK	100	普通	褐灰	底部回転糸切り	76-2
5	須恵器	高台付埴	(15.2)	[6.0]	—	BEI	15	普通	灰	B 末野産	76-2
6	須恵器	蓋	(11.9)	[1.4]	—	EIK	10	普通	灰白	A 内面全体に灰付着	76-2
7	須恵器	蓋	—	[0.8]	—	DIKJ	80	普通	灰	B つまみ径 2.8 cm 南比企産	76-2
8	須恵器	皿	13.0	1.7	7.0	EHIK	100	普通	灰	カマドNo.13 底部回転糸切り	56-4
9	ロクロ土師器	高台付埴	(13.6)	5.5	(5.7)	EGHL	25	不良	にぶい黄橙	カマド 底部回転糸切り	56-5
10	ロクロ土師器	皿	13.6	2.5	5.8	BCEHIL	60	普通	黒	カマドNo.13 底部回転糸切り 煤付着	56-6
11	土師器	甕	(18.6)	[5.5]	—	CHIK	30	普通	橙	カマドNo.11	56-7
12	土師器	甕	(22.7)	(25.8)	3.2	CHIK	30	普通	橙	カマド・カマドNo.7・8	56-8
13	土師器	甕	(23.1)	[7.4]	—	CEHIK	35	普通	にぶい黄橙	B・カマドNo.7・8・10	56-9
14	土師器	甕	(18.0)	[10.2]	—	CEGHIK	30	普通	にぶい黄橙	カマドNo.5・7・9 上野産か	56-10
15	土師器	甕	(19.0)	[6.8]	—	CEHIK	10	普通	明赤褐	B	76-2
16	土師器	甕	19.2	[10.1]	—	ACHIK	60	普通	にぶい橙	B 外面煤付着	57-1
17	土師器	甕	(19.8)	[5.2]	—	EHIK	25	普通	にぶい黄橙	B 外面口端部煤付着	76-2
18	土師器	甕	19.6	[7.9]	—	CHIK	50	普通	橙	カマドNo.7・9	57-2
19	土師器	甕	(19.8)	[11.0]	—	CHIK	25	普通	淡橙	A・B・カマドNo.9	57-3
20	土師器	甕	—	5.2	(3.8)	H IK	45	普通	にぶい橙		57-4
21	土師器	台付甕	13.1	17.0	8.5	CEHIK	85	普通	橙	カマドNo.1・3・7	57-5
22	須恵器	甕	—	[6.9]	—	ABIEK	5	良好	灰	B・D 末野産	76-2

規模は、長軸3.93m、短軸2.57m、深さは0.20mである。南辺を基準とした主軸方位は、N-72°-Eを指す。

覆土は灰褐色のシルト質土層が主体である。第4層の上面においてP2を検出しており、第4層は貼床と考えられる。

床面は、ほぼ平坦である。壁溝は、壁直下および壁からやや離れて検出し、住居跡の短辺では確認できなかった。ピットは2基検出した。P1は住居の北隅にあり、形状と位置から貯蔵穴の可能性がある。

カマドは、東壁の南寄りに設けられていた。南東隅にかなり近い位置である。燃焼部は住居の内側に位置する。煙道は、削平されていると考えられる。袖はわずかに遺存しており、灰褐色土によって形成されていた。

カマド覆土は、第5層が燃焼部掘方の埋土と考えられる。使用に伴う灰炭層は確認できなかった。カマドの南側に位置する第27号土壌の覆土は、焼土粒子を多量に含む灰炭から成り、カマドの堆積物に極めて近いものであったが、第36号住居跡との関連は不明である。

出土遺物は、第171・172図に示した。1～8、22が須恵器であり、1～3が坏、4・5が高台付碗、6・7が蓋、8が皿、22が甕である。1は、体部上位が背反し、底部は回転糸切りである。胎土は、含有物が多く粗く、末野窯産の可能性がある。2～4は、底部の破片である。2の底部は回転糸切りで、胎土は含有物が少なく、精緻である。3の底部も回転糸切りであり、体部下端にヘラケズリを施す。胎土に白色針状物質を多量に含み、南比企窯産である。8は、完形であり、口縁部端部が外反する。含有物が多く粗い胎土である。9・10はロクロ土師器であり、9が高台付碗、10が皿である。11～21は土師器であり、21が台付甕、それ以外は甕である。甕は多くが破片であるが、12は全体の形態を知ることができる。底部の径は

小さく、口縁部端部は直立気味に立ち上がる。胴部外面中位には斜め方向、下位には縦方向のヘラケズリが施される。21の台付甕もほぼ完形である。甕部に対して台部の高さが低く、台部の接地面が広い。甕類と比較して、器壁は厚手である。

第34号住居跡（第173図）

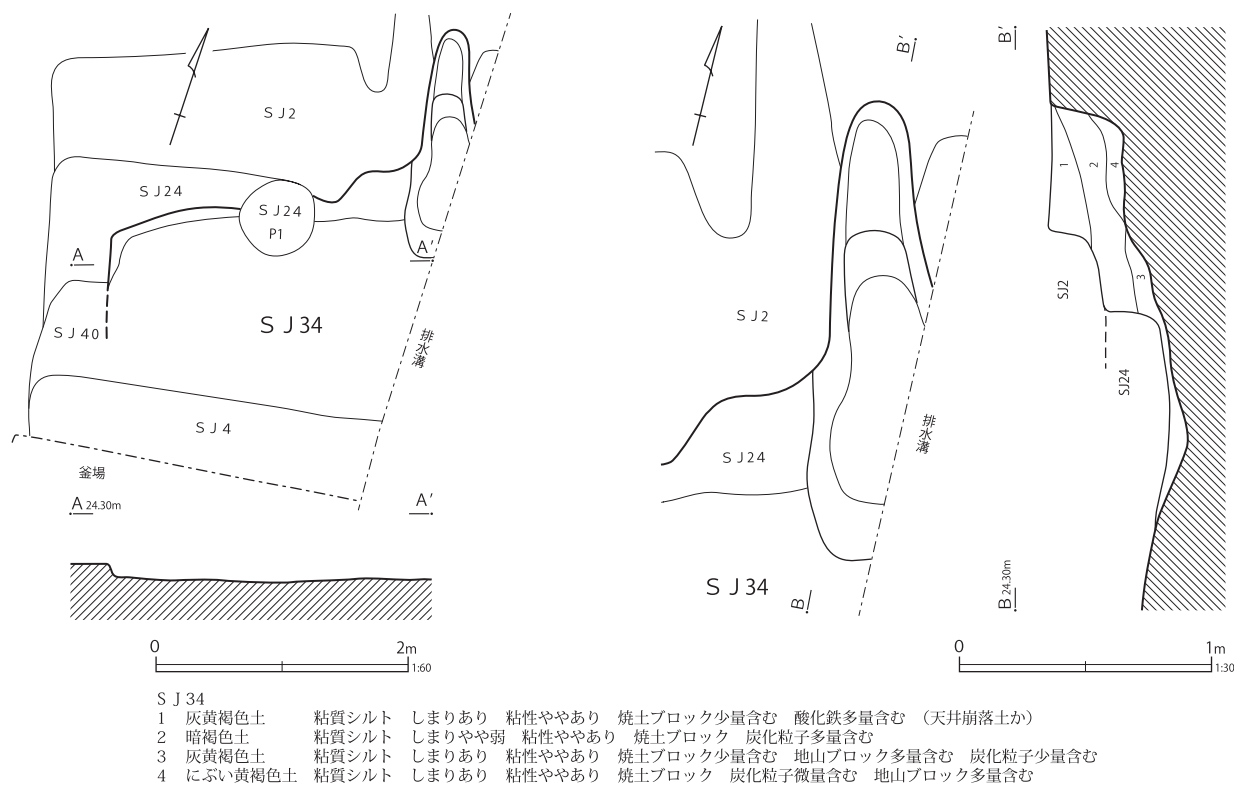
R-19グリッドで検出した。第2・4・24・40号住居跡と重複し、第2・4・24号住居跡より古い。第40号住居跡との新旧関係は、残存状況から第34号住居跡が新しいと思われる。上面は第2・24号住居跡、南側は第4号住居跡によって壊されている。カマドの中ほどから東側は調査区外に延びる。

平面形は検出範囲が狭く不明である。規模は、検出した長さで、北辺2.36m、西辺1.13m、深さは0.32mである。西辺を基準とした主軸方位はN-16°-Wを指す。

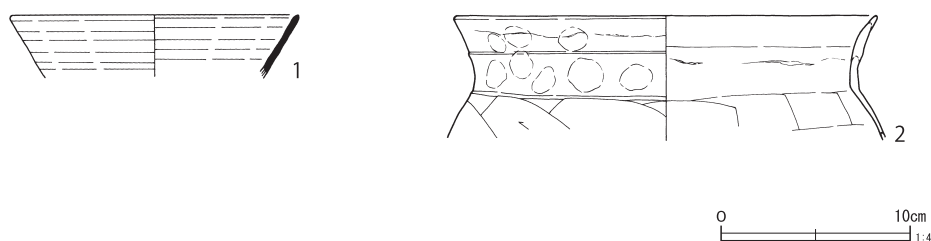
床面はカマドの前面がやや低くなっているものの、全体としてはほぼ平坦である。壁溝やピットなどは確認されなかった。

カマドは北壁に設けられていた。燃焼部は住居の壁が中間にかかるものである。長さは1.82mである。袖は検出できず、想定される部分は、上にあった遺構が影響したためか壁の線が大きく乱れていた。燃焼奥の右側壁は、一部が被熱により赤色に硬化していた。底面は、奥に向かって緩い傾斜で上がり煙道へ続き、先端に向かって細くなる。

遺物は、カマドから土師器などの破片が少量出土した。出土遺物は、第174図に示した。1は、須恵器の坏である。胎土に、白色針状物質とごく微量の角閃石を含む。南比企窯産である。2は、土師器の甕である。口縁部の破片である。内外面ともに風化による磨滅が著しい。口縁部外面には指頭痕が認められ、胴部外面には斜め方向のヘラケズリが施される。胎土は、砂粒子を多く含み、ざらついている。いずれも小破片であり、詳細な時期は不明である。



第 173 図 第 34 号住居跡



第 174 図 第 34 号住居跡出土遺物

第 51 表 第 34 号住居跡出土遺物観察表 (第 174 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(15.0)	[3.3]	—	C E J	5	普通	褐灰	カマド 南比企産	76-3
2	土師器	甕	(22.0)	[6.6]	—	C G H I K	20	普通	にぶい黄橙	カマド 指頭痕	76-3

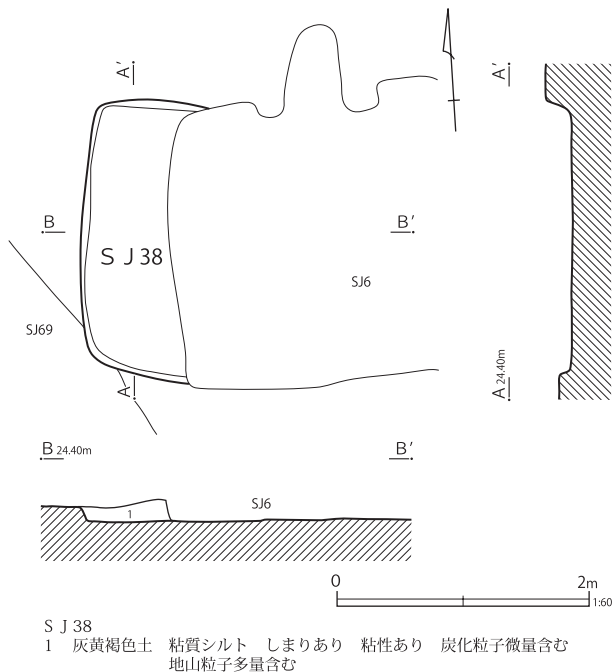
第38号住居跡 (第175図)

P・Q-16グリッドで検出した。第6・69号住居跡と重複し、第6号住居跡より古く第69号住居跡より新しい。住居跡の大半は第6号住居跡によって壊されている。平面形は方形であるが、検出範囲が少なく詳細は不明である。

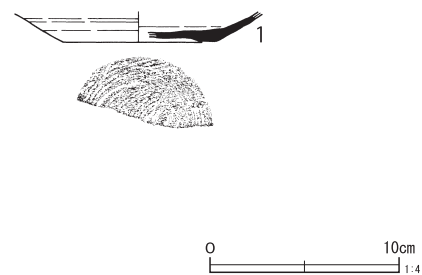
規模は、北西隅から南西隅までを検出した西辺で2.22mあり、南辺は残存値で0.98mの残存

である。深さは、最も深い部分で0.20mである。西辺を基準とした主軸方位はN-6°-Eを指す。床面はほぼ平坦で、壁溝やピット、カマドは検出されなかった。

出土遺物は少なく、図示できるものを第176図に示した。須恵器の坏である。器面の磨滅が著しい。底部は回転糸切りであるが、糸切り後の調整の有無は不明である。



第175図 第38号住居跡



第176図 第38号住居跡出土遺物

第52表 第38号住居跡出土遺物観察表（第176図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	—	[1.6]	(8.0)	E K	30	普通	灰白	底部回転糸切り	76-3

第40号住居跡（第177図）

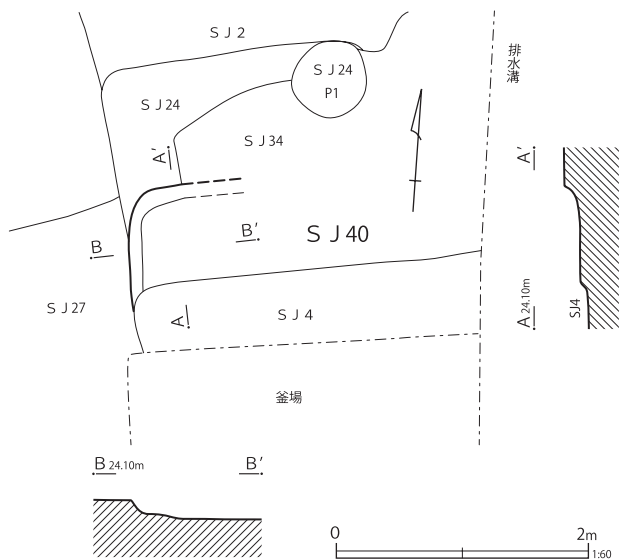
R-18・19グリッドで検出した。第2・4・24・27・34号住居跡と重複し、第2・4・24号住居跡より古い。第27号住居跡との新旧関係は捉えられなかったが、調査時の所見で第40号住居跡が古い可能性が高い。

住居跡の殆どをこれらの遺構によって壊されており、残存していたのは住居跡北西隅の一部だけである。

残存する規模は、西辺が0.97m、北辺は0.35mである。深さは0.15mである。西辺の方位はN-11°-Wを指す。

床面の施設やカマドなどは検出されなかった。

出土遺物は、第178図に示した。須恵器の蓋である。端部と内面の一部に自然降灰の付着が認められる。



第177図 第40号住居跡



第178図 第40号住居跡出土遺物

第 53 表 第 40 号住居跡出土遺物観察表（第 178 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(14.8)	[2.0]	—	D J K	5	普通	灰	一括 内面灰かかる	76-3

第41号住居跡（第179・180図）

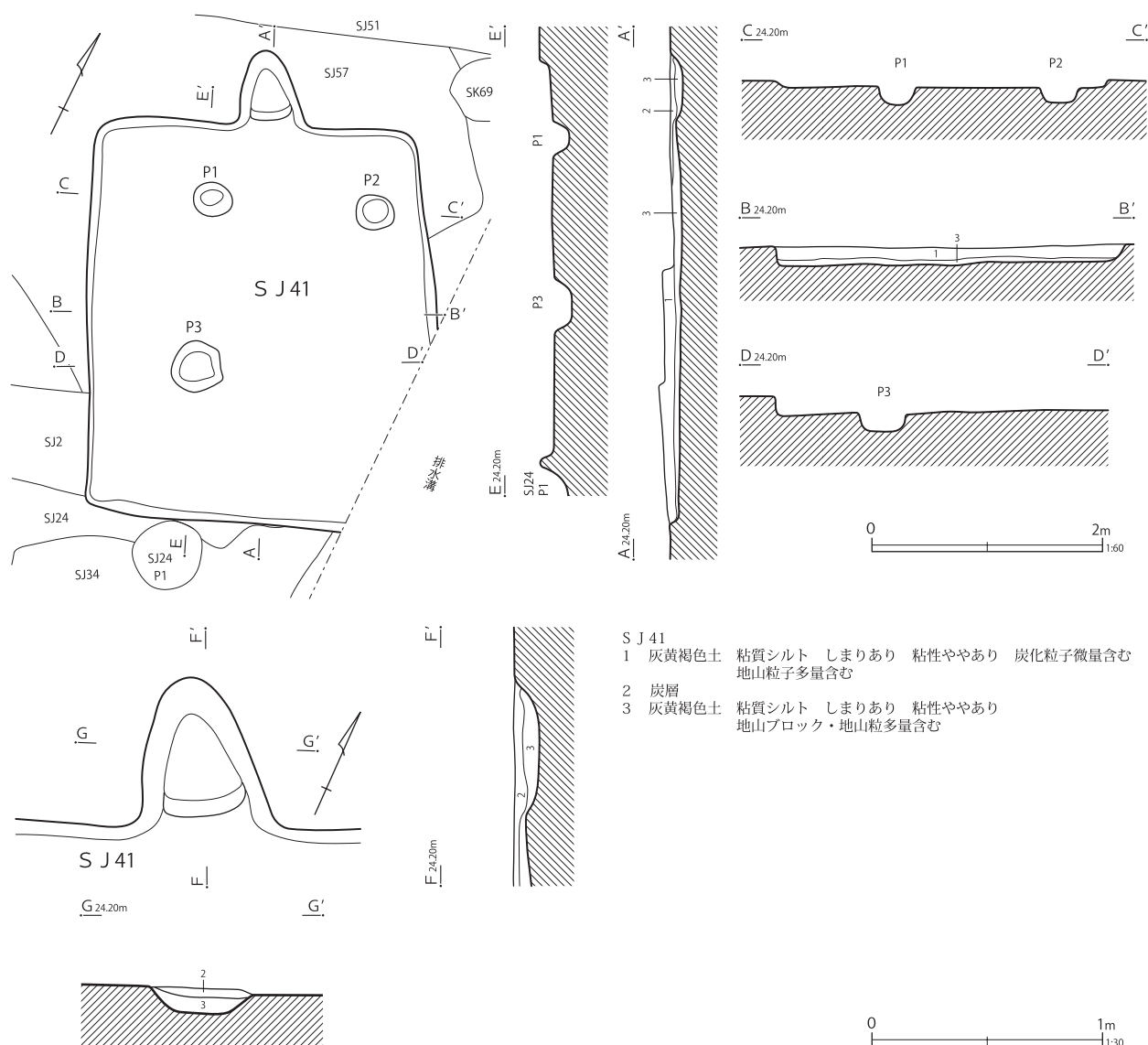
R-18・19グリッドで検出した。第2・24・34・57号住居跡と重複し、第2・24・34号住居跡より古く、第57号住居跡より新しい。南東隅は調査区外に続く。

平面形はカマドの軸方向に長い長方形である。規模は南北方向が3.52m、東西方向が3.08m、深さは0.13mである。西辺を基準とした主軸方

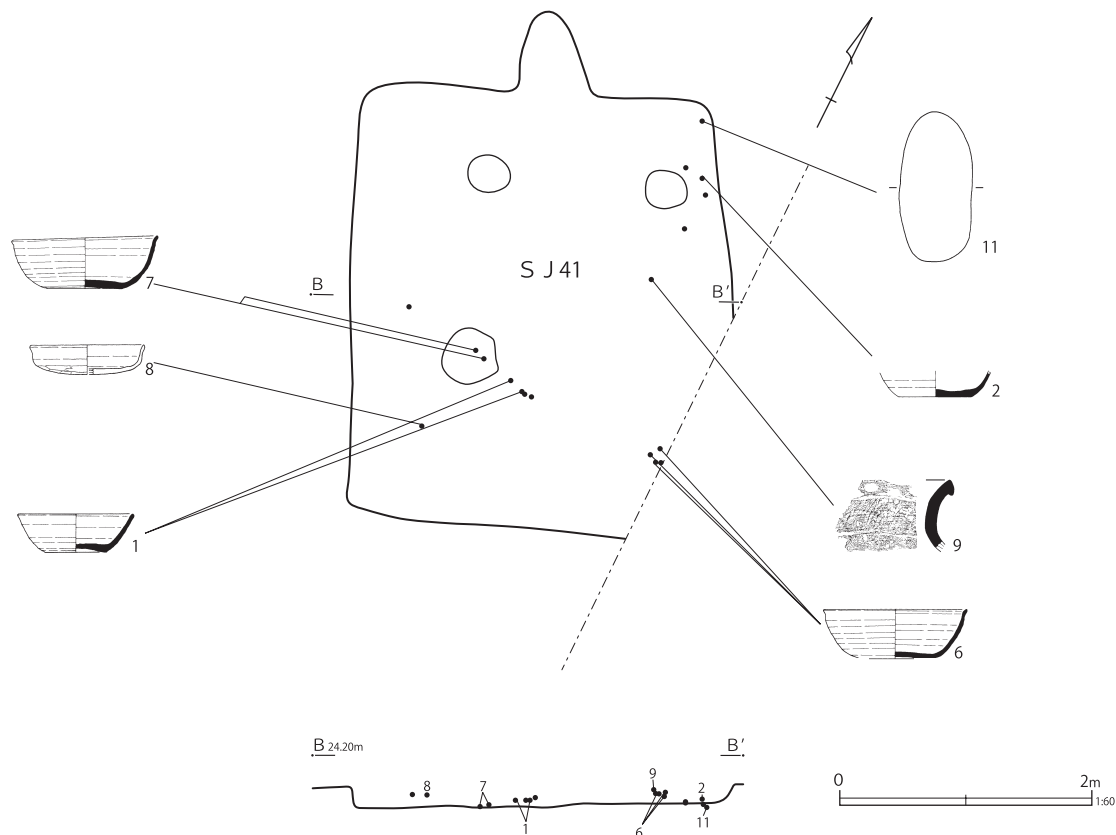
位はN-23°-Wを指す。

覆土は、第1層が住居の堆積土であり、灰黄褐色のシルト質土である。第3層は地山ブロックと地山粒を多量に含む灰黄褐色土で、掘り方埋土と解釈できる。よって、この上面が床面である。

床面は平坦で、壁溝及び貯蔵穴は検出されなかった。柱穴と考えられるピットを3基検出した。いずれも平面形はやや不整な円形で、深さは、



第 179 図 第 41 号住居跡



第 180 図 第 41 号住居跡遺物出土状況

0.13～0.16mである。

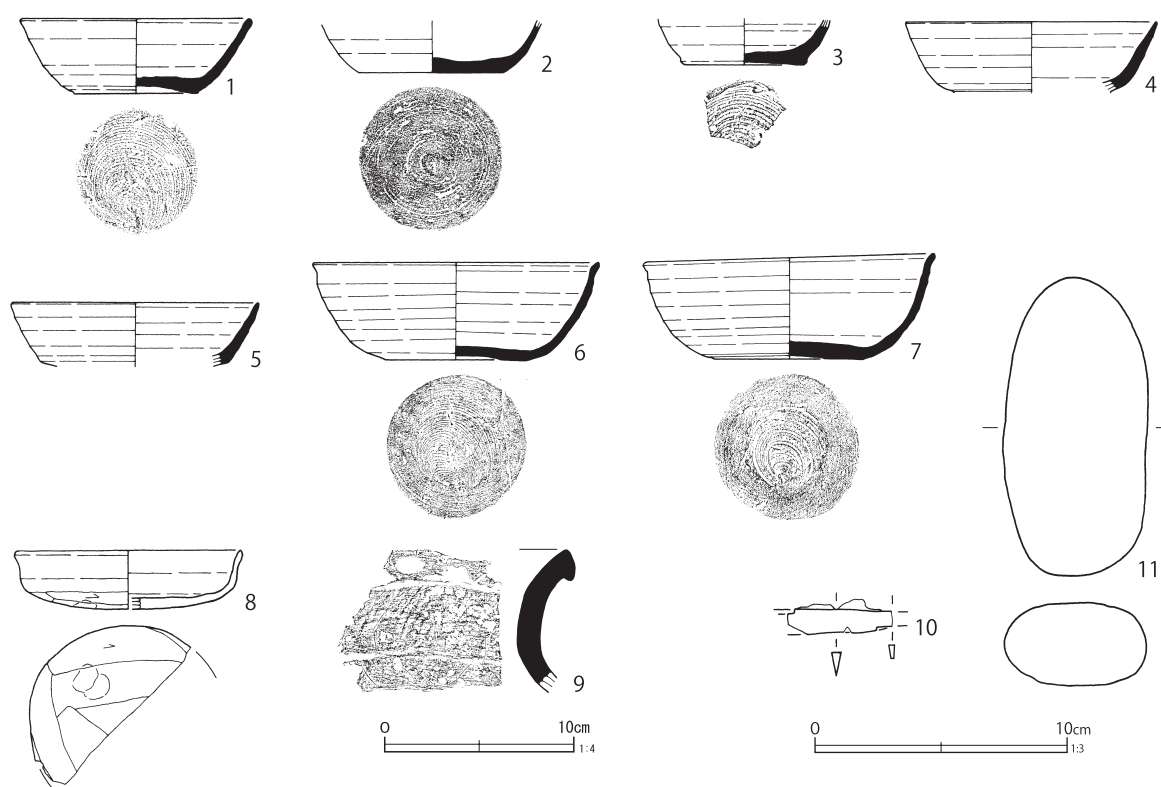
カマドは北壁の中央に設けられていた。燃烧部が住居の壁より外側にある。燃烧部の奥から焚口の手前まで炭の広がり認められる。上面が削平されているため、煙道は検出されなかった。

残存するカマドの規模は、長さ0.63m、幅0.58mである。燃烧部の掘り込みは住居の壁より約0.1m奥にあり、掘り込みの深さは床面から0.1mほどである。袖は検出されなかった。

カマドの覆土は、炭層である第2層が、カマド使用時の堆積層と考えられる。第3層は、住居跡と同様に掘方の埋め土である。

遺物は主に、P2・P3周辺と、住居跡の南東隅部から多く検出された。

出土遺物は、第181図に示した。1～7・9が須恵器であり、1～3が坏、4・5が高台付坏、6・7が埴、9が甕である。1は、ほぼ完形で、底部中央が内湾する。底部は回転糸切りである。胎土に白色針状物質を含み、良く焼き締まる。南比企窯産である。2は、底部を回転ヘラ切り後に、ヘラナデが施される。3は、底部回転糸切りである。胎土は、白色粒子などを含むものの精緻である。4は体部の破片であり、胎土は黒色粒子を多量に含み、比重が軽い印象を受ける。磨滅が著しい。5は、器形、胎土ともに4と類似する。接合点が認められないが、同一個体の可能性が高い。6・7は、底部を回転糸切り後、周辺にヘラケズリが施される。また、体部下端にもヘラ



第 181 図 第 41 号住居跡出土遺物

第 54 表 第 41 号住居跡出土遺物観察表 (第 181 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	12.0	4.0	6.4	E J L	70	普通	灰	底部回転糸切り 南比企産	57-6
2	須恵器	坏	—	[2.8]	7.6	E I K	60	普通	褐灰	B・No.16 底部回転ヘラ切り	57-7
3	須恵器	坏	—	(2.4)	(6.1)	E I K L	25	普通	灰白	D 底部回転糸切り	76-3
4	須恵器	高台付坏	(13.1)	[3.8]	—	E I K	25	普通	灰白	D	76-3
5	須恵器	高台付坏	(12.8)	[3.4]	—	E I K	30	普通	灰白	A・C・D	76-3
6	須恵器	埴	14.8	5.2	7.4	E J K	80	普通	灰	No.9・10・11 底部回転糸切り後周辺ヘラケズリ 南比企産	57-8
7	須恵器	埴	15.2	5.3	7.8	E J K	70	普通	灰	B・D・No.3・4 底部回転糸切り後周辺ヘラケズリ 南比企産	57-9
8	土師器	坏	(11.7)	[3.1]	—	C H I K	40	普通	にぶい黄橙	No.1	57-10
9	須恵器	甕	—	[7.5]	—	A B I K	5	不良	灰	No.13	76-3
10	鉄製品	刀子	長さ [3.8] 刃幅 0.95 背幅 0.4 重さ 2.9 g								79-1
11	石製品	編物石	長さ 11.6 幅 5.4 厚さ 3.9 重さ 361.0 g								79-6

ケズリが認められる。胎土に、白色針状物質を多量含み、良く焼き締まる。南比企産である。9は、口縁部の破片である。焼成が不良で、風化が著しく、器面の調整痕は不明瞭である。

8は、土師器の坏である。体部は薄手で浅く、

底部にヘラケズリが施される。風化による磨滅が著しい。10は、刀子である。両端部を欠損する。柄の一部が遺存する。11は、編み物石である。

遺物の時期は、須恵器の器形や調整から、8世紀末葉と考えられる。

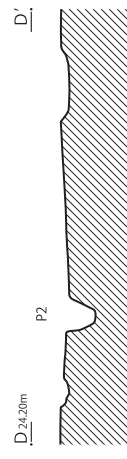
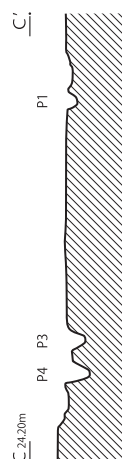
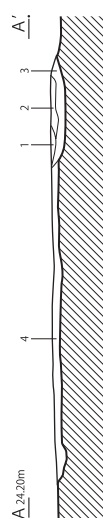
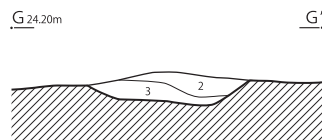
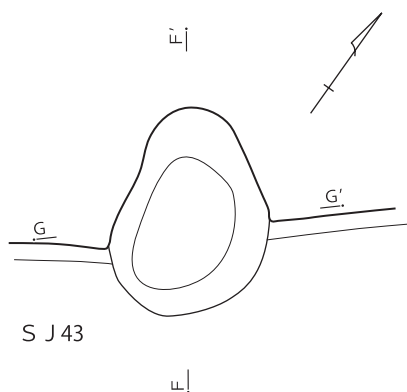
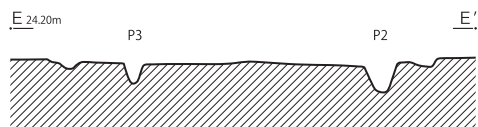
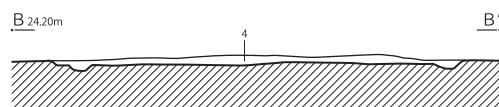
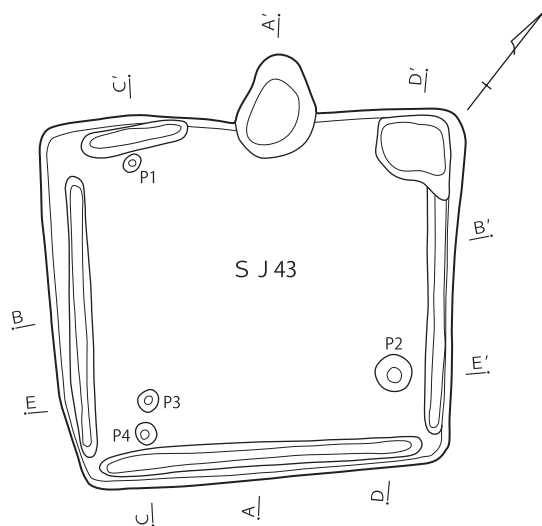
第43号住居跡（第182・183図）

M・N-16グリッドで検出した。第65号溝跡と重複し、第43号住居跡の方が新しい。

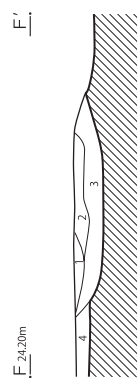
平面形は、北辺がやや長く不整ではあるが、正方形に近い。

規模は、南北辺長3.39m、東西辺長3.00m、深さは0.07mである。西辺を基準とした主軸方位はN-44°-Wを指す。

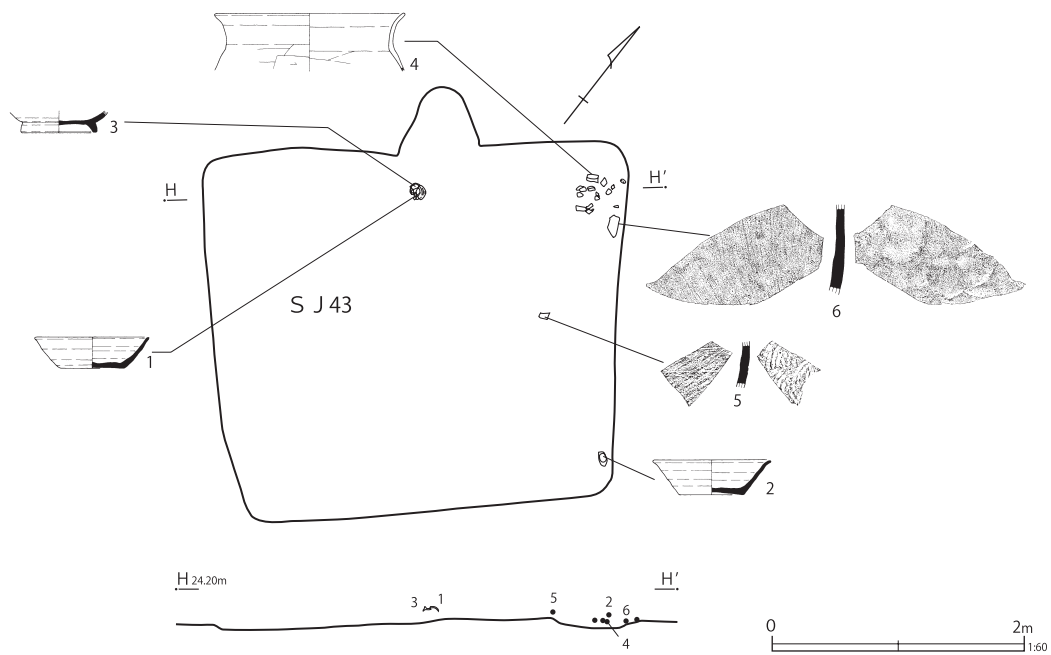
遺構の上面は大きく削平されており、検出面で既に床面が露出している状況であった。そのため、



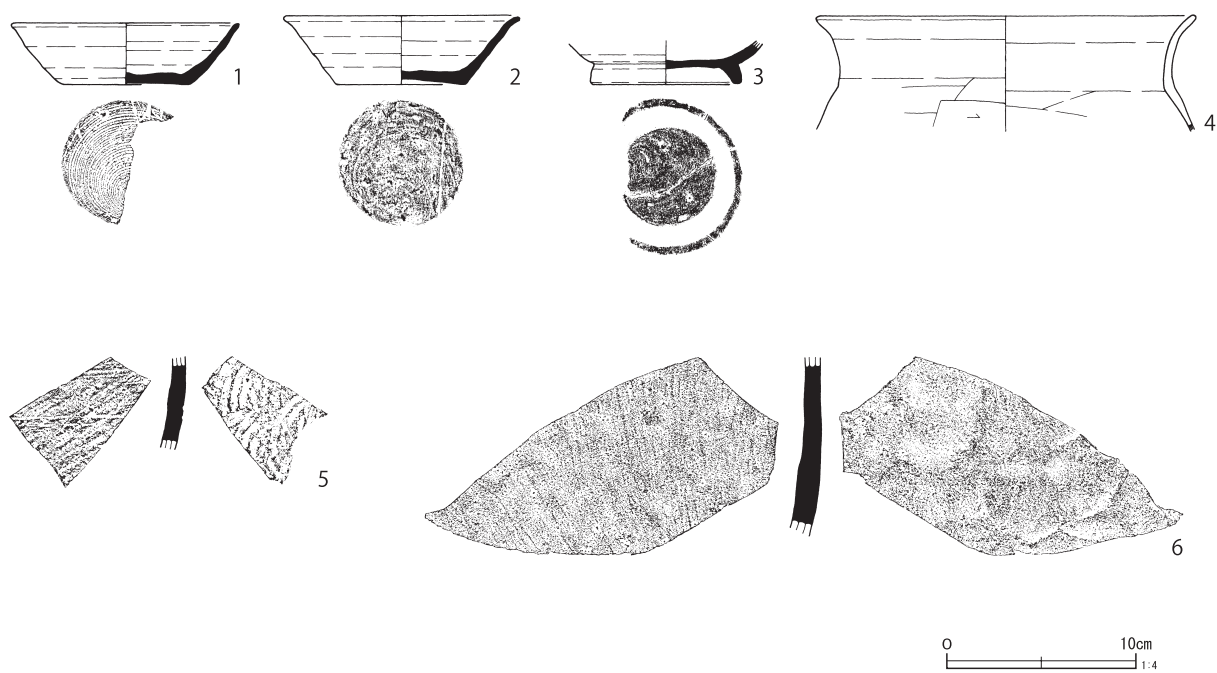
S J 43			
1	黒褐色土	しまりあり 粘性あり 灰を層状に含む	焼土粒子少量含む
2	褐灰色土	しまりあり 粘性あり	焼土粒子を含む
3	褐灰色土	しまりあり 粘性あり	掘り方
4	褐灰色土	しまりあり 粘性あり	焼土粒子・炭化粒子微量含む 掘り方



第 182 図 第 43 号住居跡



第 183 図 第 43 号住居跡遺物出土状況



第 184 図 第 43 号住居跡出土遺物

第 55 表 第 43 号住居跡出土遺物観察表（第 184 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	11.8	3.2	6.5	E J	60	普通	灰	No. 6 底部回転糸切り 南比企産	58-1
2	須恵器	坏	(12.1)	3.6	6.8	C E J K	60	普通	灰白	南比企産 底部回転糸切り	58-2
3	須恵器	高台付埴	—	[2.3]	7.8	E H	60	普通	灰白	No. 7 底部回転糸切り 末野産か	76-4
4	土師器	甕	(19.6)	[6.1]	—	C H I K	10	普通	橙	No. 1	76-4
5	須恵器	甕	—	[4.8]	—	I J K	5	良好	灰	No. 8 南比企産	76-4
6	須恵器	甕	—	[9.4]	—	I J K	5	良好	灰	No. 5 南比企産	76-4

覆土の第4層は、掘り方の埋め土に相当する。褐灰色土を主体とし、焼土粒や炭化物粒が微量混入していた。

床面は、ほぼ平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。壁溝は住居跡北壁の東側を除いたほぼ全周で検出し、幅は最も広い部分で0.21m、深さは最も深い部分で、0.04mである。ピットは4基検出した。いずれも不整な円形を呈し、深さは、0.09～0.22mである。P 1～3が柱穴の可能性が高いが、北東隅の柱穴は検出できなかった。北東隅において、土壌状の落込みを確認し遺物破片の集中が認められた。貯蔵穴と思われるが、掘り込みが浅いことや、壁溝と接続することなど疑問が残る。

カマドは北壁の中央に設けられていた。残存状態は悪く、燃焼部のみが確認できる程度であった。燃焼部は、住居の壁が中ほどにかかるものである。規模は、残存値で長さ0.84m、幅0.62mであり、床面からの深さは0.06mである。

カマドの覆土は、第1層に灰が層状に含まれており、使用時の堆積層である。第3層はカマド掘方の埋め土と考えられ、第3層上面が使用面と想定される、袖は検出されなかった。

遺物は、カマドの焚口部や北東隅部から多く出土した。第184図に出土遺物を示した。1～3、5・6が須恵器であり、1・2が坏、3が高台付埴、5・6が甕である。1の底部は回転糸切りである。胎土は、含有物が少なく白色針状物質を微量含む。南比企産である。2は、風化が激しく調整が不明瞭である。底部は、回転糸切り後、無調整と思われる。胎土は、4mm程度の黒色粒子の

混入が目立ち、白色針状物質を少量含む。焼成は不良気味である。南比企産である。3も、器面の風化が激しく調整は確認できない。胎土は、含有物が多く粗い印象を受ける。末野産と考えられる。5・6は、胴部の破片であり、いずれも南比企産である。4は、土師器の甕である。口縁部端部を含め、全体の風化が著しい。

第44号住居跡（第185図）

P－16グリッドで検出した。第17号住居跡と重複し、第44号住居跡が古い。カマドを除いて、第17号住居跡の中に入れ子状に収まっているため、上面は第17号住居跡によって壊されている。

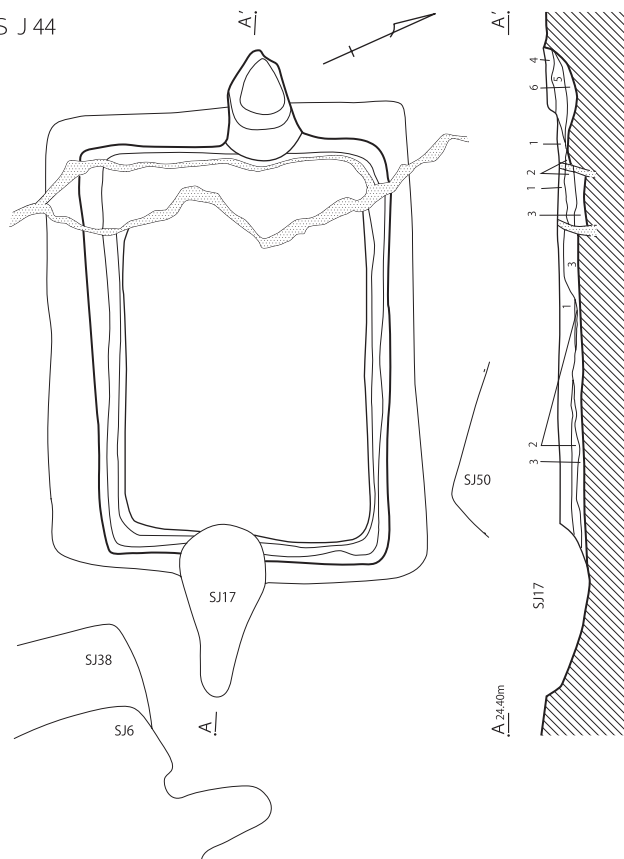
平面形は長方形を呈する。北西辺はカマド前面の床が地震の地割れによって大きく陥没している。土層断面の観察により、地震は、住居が完全に埋没してから起きたことがわかる。規模は、南西辺長3.35m、北西辺長2.46mである。深さは0.10mほどと考えられるが、地盤の陥没によって、一部が最大0.20mまで下がっている。北東辺を基準とした主軸方位はN－25°－Eを指す。

覆土は、灰黄褐色土が主体であり、第2層は貼床と考えられる。

壁溝は、全周していたと考えられるが、貯蔵穴およびピットは検出されなかった。

カマドは北西壁の中央に設けられていた。燃焼部のみが残存する。燃焼部は住居の壁の外側に出るものである。長さは0.89m、幅は0.60mで、床面からの深さは0.07mである。焚口部底面はごく緩い傾斜で床面に続く。袖は検出されなかった。遺物は出土しなかった。

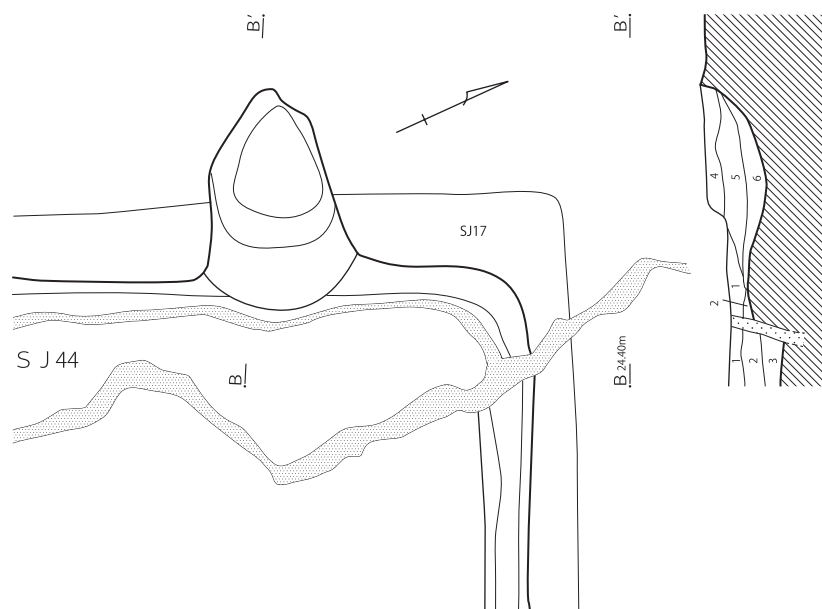
S J 44



S J 44

- | | | | | | | | |
|---|---------|-------|-------|--------|---------------|----------|--------|
| 1 | 灰黄褐色土 | 粘質シルト | しまり強 | 粘性ややあり | 炭化粒子微量含む | 酸化鉄多量含む | 地山粒子含む |
| 2 | にぶい黄褐色土 | 粘質シルト | しまり強 | 粘性弱 | 地山粒子・ブロック多量含む | 貼床 | |
| 3 | 褐灰色土 | 粘質シルト | しまりあり | 粘性ややあり | 地山粒子含む | | |
| 4 | 灰黄褐色土 | 粘質シルト | しまりあり | 粘性ややあり | 焼土粒子少量含む | | |
| 5 | 灰黄褐色土 | 粘質シルト | しまりあり | 粘性ややあり | 焼土ブロック多量含む | 炭化粒子少量含む | |
| 6 | 褐灰色土 | 粘質シルト | しまりあり | 粘性ややあり | 地山ブロック多量含む | | |

0 2m 1:60



0 1m 1:30

第 185 図 第 44 号住居跡

第45号住居跡（第186図）

K・L-16・17グリッドで検出した。重複する遺構はない。

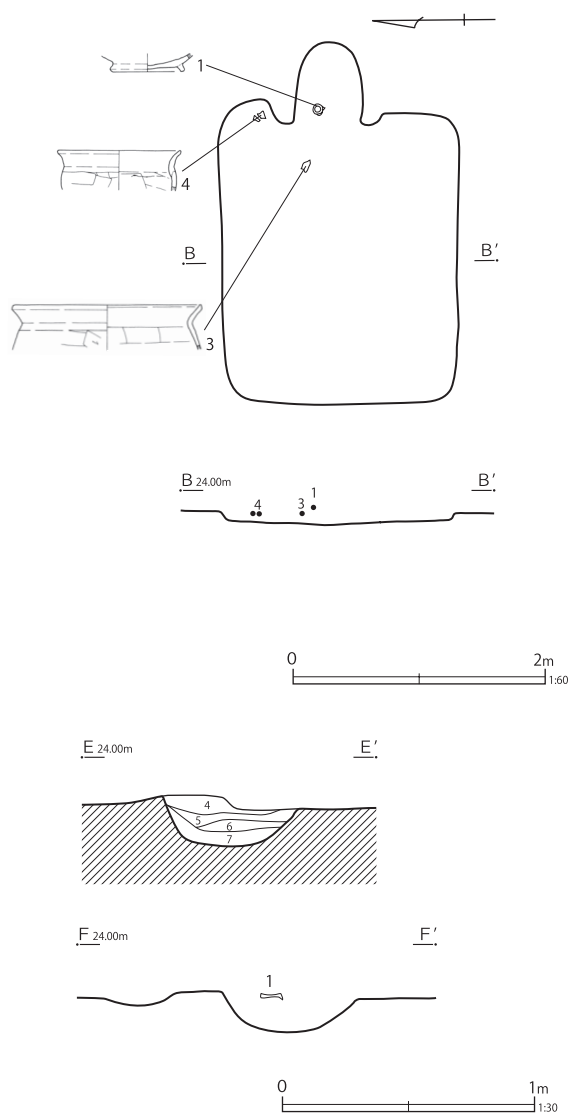
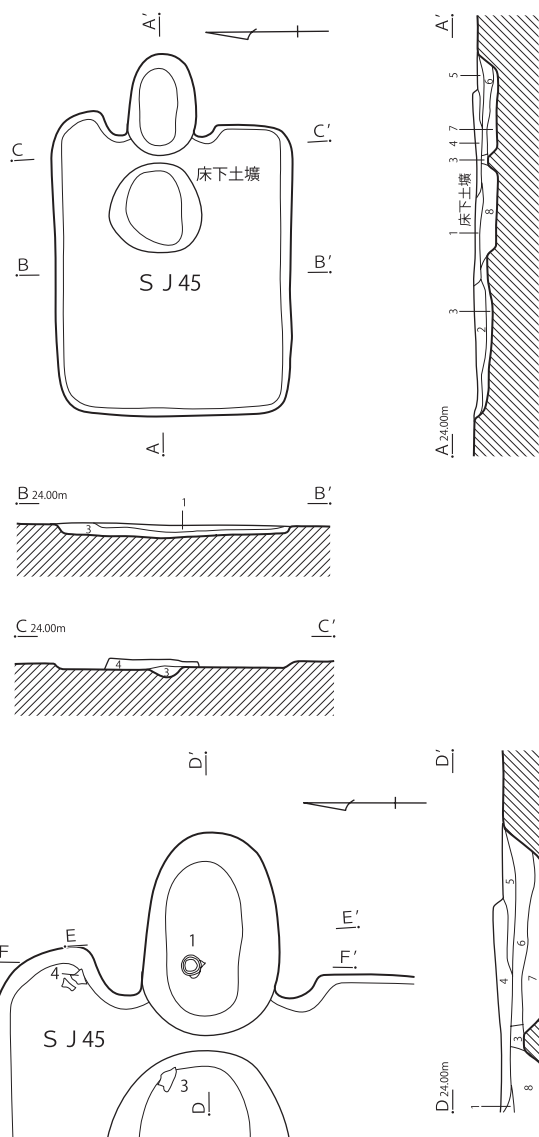
平面形は形の整った長方形である。東西方向を長軸とする。

規模は、東西方向が2.38m、南北方向が1.92mであり、本調査区から検出された住居跡と比較して小形である。検出面で殆ど床面が失われており、掘り方の埋め土が残っている程度であった。北辺

を基準とした主軸方位はN-89°-Eを指す。

前述のとおり、住居跡本体の覆土は消失しており、第1～3層は、掘り方の埋め土であり、砂を多く含むのが特徴である。

壁溝やピットなどは検出されなかったが、床下土壌と思われる掘り込みを確認した。カマドの前で住居の中心軸にかかる位置にある。平面形は不整円形で、規模は0.74×0.73mで、深さは0.12mである。掘り方の埋め土を掘り込んでいる。

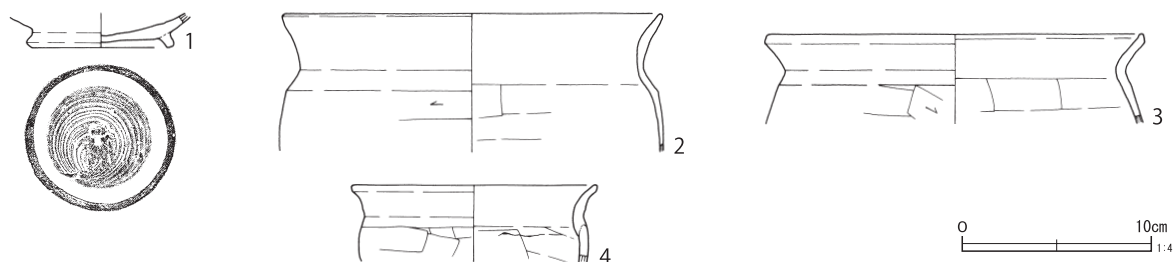


S J 45

- 1 褐灰色土 しまりややあり 粘性なし 炭化物和酸化鉄を微量含む
青灰色砂を含む
- 2 黄灰色土 しまりなし 粘性なし マンガンを微量含む 灰色砂を多量に含む
- 3 灰色土 しまり強 粘性強 酸化鉄・マンガンを含む 住居面の掘り方
- 4 褐灰色土 しまり弱 粘性弱 炭化物・焼土粒子・灰を多量に含む
- 5 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 炭化物・焼土粒子・シルト質・マンガンを含む

- 6 黄灰色土 しまりやや強 粘性やや強 酸化鉄・マンガンを含む
カマド壁面の粘土を含む
- 7 褐灰色土 しまり強 粘性強（3層と同じくらい） 炭化物をブロック状に含む
カマドの底面
- 8 褐灰色土 しまりなし 粘性ややあり 炭化物・マンガンを含む 土器破片出土
床下土壌 地山砂層の粒子を全体に含む

第186図 第45号住居跡・遺物出土状況



第 187 図 第 45 号住居跡出土遺物

第 56 表 第 45 号住居跡出土遺物観察表（第 187 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	灰釉陶器 (転用硯)	埴	—	[1.9]	7.0	E K	90	普通	灰黄	カマドNo. 1 内外面漬け掛けにより施釉 見込み部に墨・底部に朱墨付着	76-4
2	土師器	甕	(19.8)	[7.3]	—	CH I	10	普通	灰褐		76-4
3	土師器	甕	(19.8)	[4.8]	—	CH I	10	普通	浅黄橙	No. 3	76-4
4	土師器	甕	(12.8)	[4.2]	—	EHK	10	普通	にぶい黄橙	No. 1	76-4

カマドは東壁の中央に設けられていた。燃烧部は住居の壁が中間にかかるものである。煙道は、削平されていた。規模は、長軸が0.82m、短軸が0.57mである。

カマドの覆土は、土層断面から第4・5層が使用時の堆積物層と考えられ、第6・7層は、カマド掘方の埋め土である。第4層は、灰を多量に含んでいた。袖は、ごくわずかに基部が検出されたのみである。

出土遺物は、第187図に示した。1が、灰釉陶器の碗であり、2～4が、土師器の甕である。1は、カマド燃烧部の灰層中から出土した。底部を回転糸切り後、高台を張り付けする。高台は外反し、端部をヘラケズリする。体部の内外面に刷毛塗りによる施釉が認められる。見込み部は磨滅が著しく、墨の付着が認められるほか、底部の一部でも磨滅が認められ、赤褐色の付着物が確認できる。転用硯として使用されていたものと考えられる。2・4は、外面の胴部接続部に強いヘラナデを施し、胴部上端に稜が認められる。対して、3では、なだらかに胴部へと接続する。

遺物の時期は、10世紀前半頃と考えられる。

第47号住居跡（第188・189図）

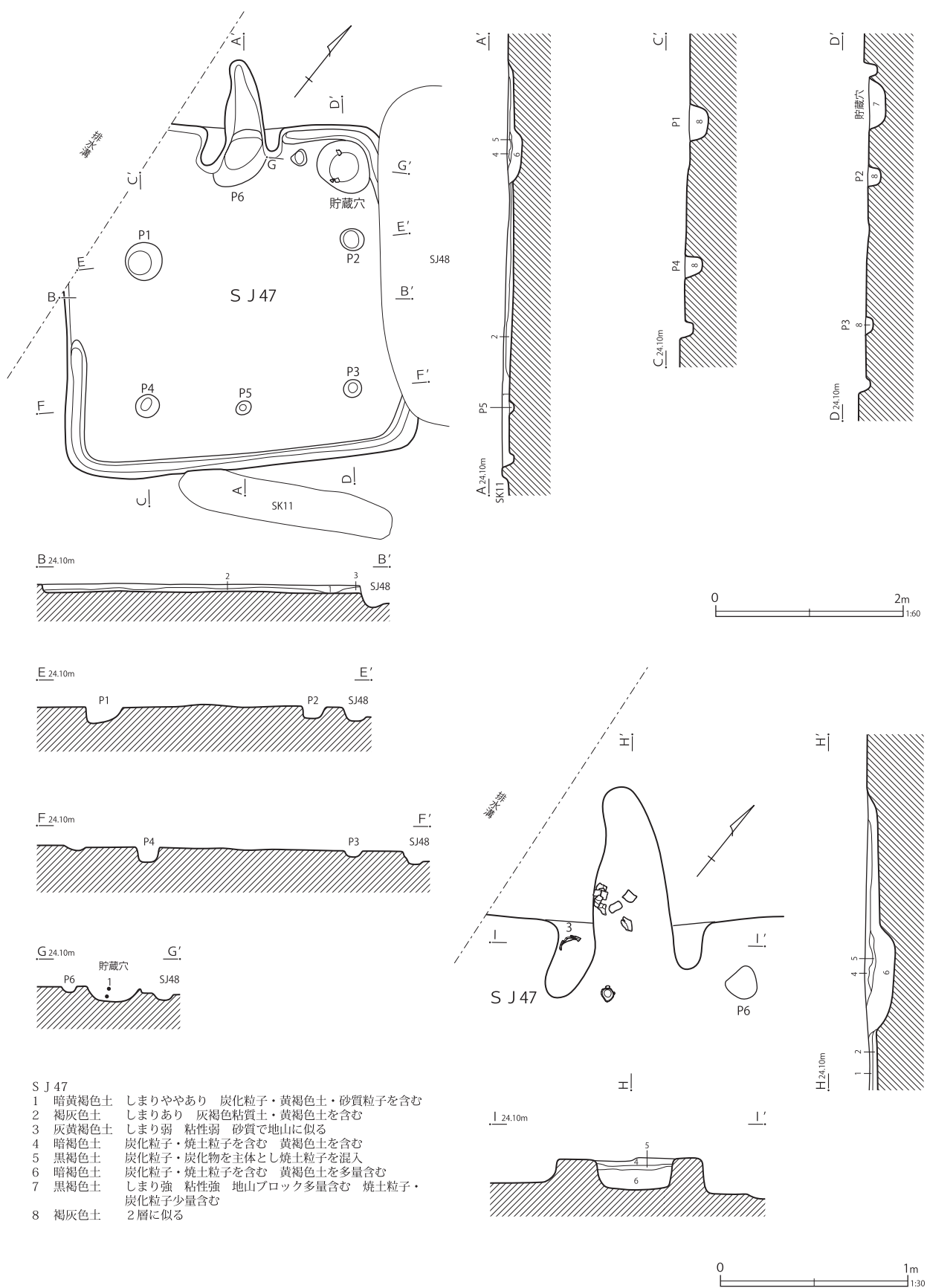
M-16グリッドで検出した。第48号住居跡、第11号土壌と重複し、第48号住居跡より、第47号住居跡の方が古い。第11号土壌との重複はわずかで、新旧関係は捉えられなかった。西角は調査区外に続く。北東辺は第48号住居跡によって殆ど壊されている。

平面形は方形であるが、北東辺は僅かに外側に膨らんでいたようである。

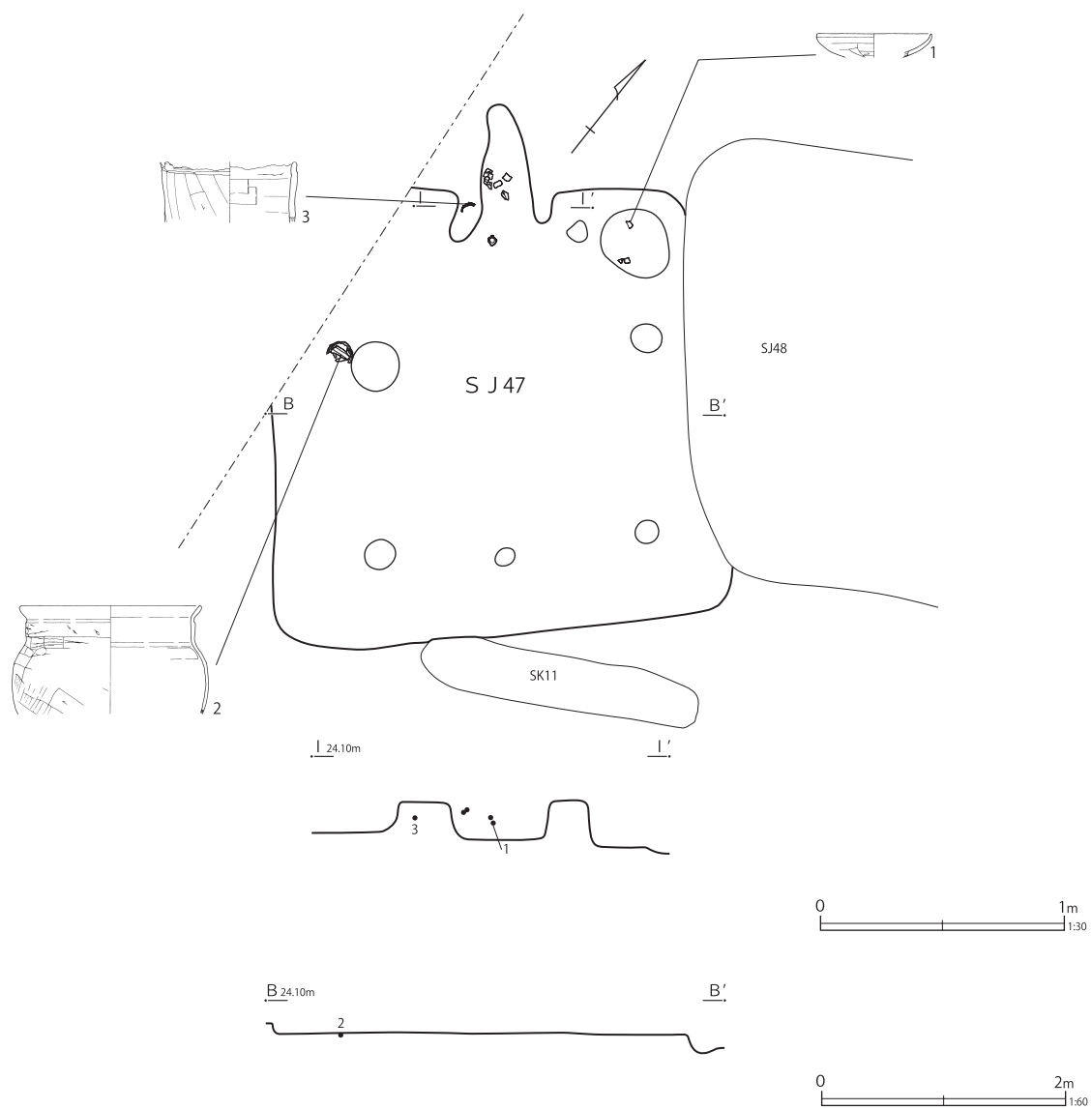
規模は、東西方向が3.80m、南北方向が3.78mである。深さは、最も深い所で0.08mである。南西辺を基準とした主軸方位はN-39°-Wを指す。

住居跡の上面は削平されており、検出状況で既に床の一部が露出している状況と考えられる。覆土の第1～3層が、貼床および掘り方の埋め土に相当する。

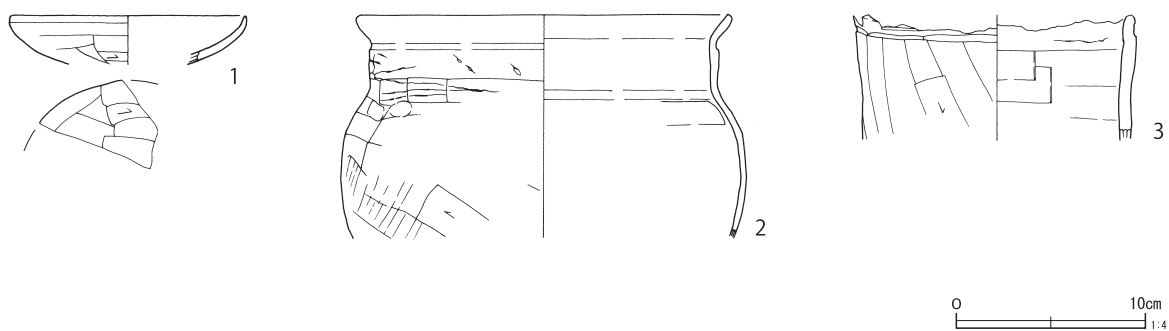
床面で、壁溝、ピット、貯蔵穴を検出した。壁溝は、カマド左側及び南西壁の北半分を除いて壁直下に巡らされていた。幅は0.16～0.21mで、深さは0.03～0.08mである。ピットは6基検出した。ピットの配置からP1～P4が支柱穴と考



第 188 図 第 47 号住居跡



第 189 図 第 47 号住居跡遺物出土状況



第 190 図 第 47 号住居跡出土遺物

第 57 表 第 47 号住居跡出土遺物観察表（第 190 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.4)	[2.4]	—	C D E G	10	普通	橙	貯No. 1	76-5
2	土師器	甕	(19.2)	[11.8]	—	C D G H	40	普通	橙		58-3
3	土師器	甕	—	[6.5]	—	C E G	30	普通	灰褐	No. 4 ・ カマドNo. 4 外面被熱痕	—

えられる。P 5 はカマドの反対側に位置し、出入口施設の可能性がある。いずれも円形で、深さは、0.04～0.19m である。貯蔵穴はカマドの右側に位置し、住居跡北東隅の壁に接して掘り込まれていた。覆土は、地山ブロックを多量含む黒褐色土の単層で、土師器片が出土した。

カマドは北西壁のほぼ中央に設けられていた。燃焼部は住居の壁より内側にある。検出されたカマドの全長は1.41m である。燃焼部の掘り込みは不整長方形で、長さは0.60m、幅は0.58m、床面からの深さは0.14m である。煙道は長さ0.81m で、幅は、先端に向かって細くなる。煙道底面は燃焼部底面から0.07m 高く、ほぼ平坦に延び先端付近で緩やかに立ち上がる。

カマドの覆土は、第5層が使用時の灰層と思われる、第6層上面が燃焼部底面に位置づけられる。このことから、カマドの上部も大部分が削平されていると考えられる。袖は、右袖が0.32m、左袖が0.48m 残存しており、土を張り付けて形成していた。左袖の基部には、土師器甕が補強材として逆さに埋められていた。

出土遺物は、主にカマドや貯蔵穴から、土師器坏・甕などが出土した。

出土遺物を、第190図に示した。いずれも土師器であり、1 が坏、2・3 が甕である。1 は、貯蔵穴から出土した。口縁部端部短く立ち上がり、底部にはヘラケズリを施す。2 は、口縁部上位と胴部との接続部に強いヨコナデを施し、胴部外面にヘラケズリを施す。3 は、カマド袖の補強材として使用されていた。胴部の破片である。カマドの構築時期を示すものと考えられるが、依存状態が悪く時期は不明である。

第48号住居跡（第191図）

M-16 グリッドで検出した。第47・53号住居跡、M-16 グリッドP 6 と重複し、第47号住居跡より新しく、第53号住居跡、グリッドピットより古い。カマドの先端を第53号住居跡によって壊されている。

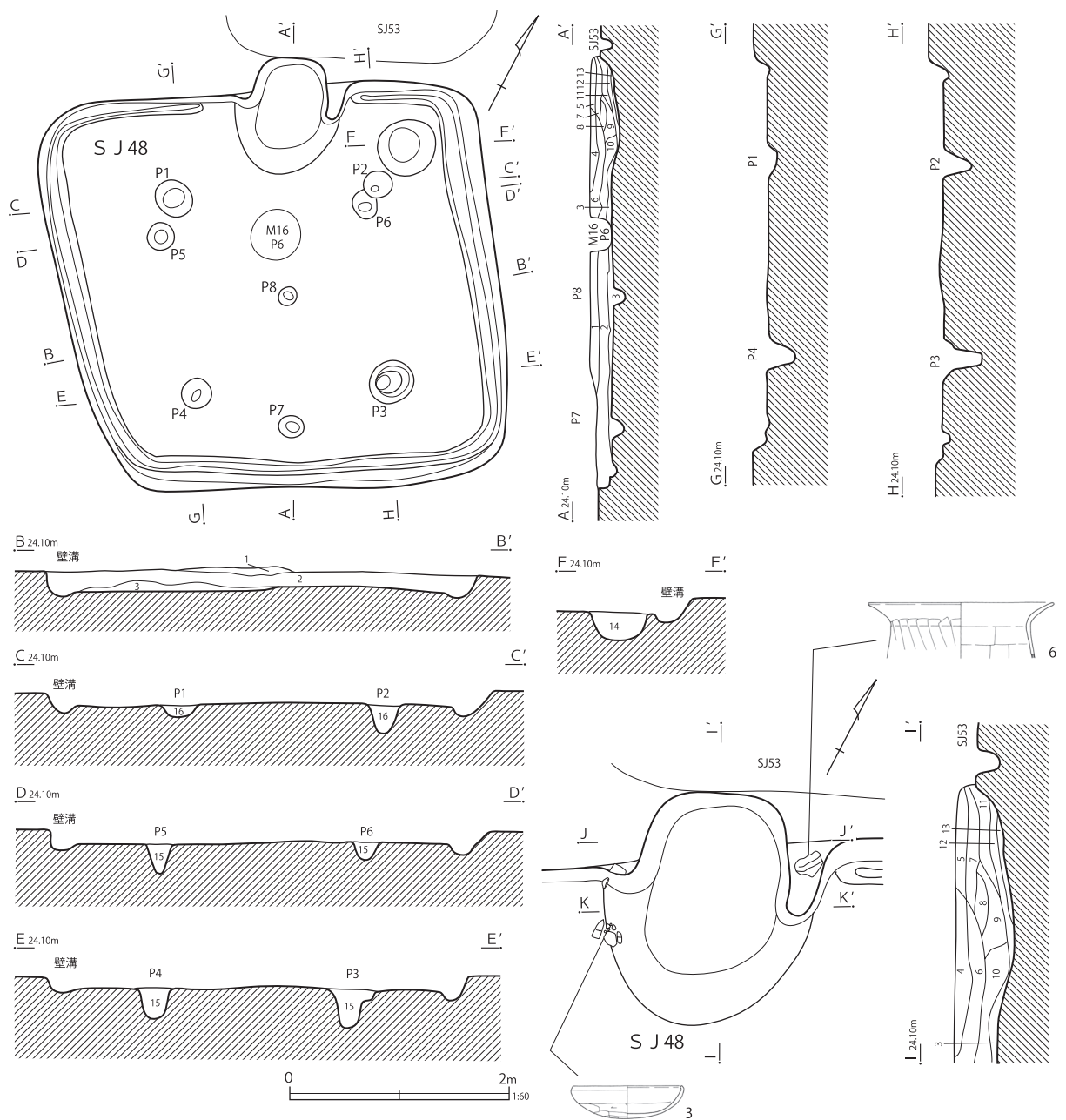
平面形は、南北辺がやや短い、不整な長方形を呈する。

規模は、カマドの軸に沿った南北方向は3.72m で、東西方向はカマドのある北辺が4.05m、南辺は3.50m である。深さは0.22m である。北東辺を基準とした主軸方位はN-29° -W を指す。

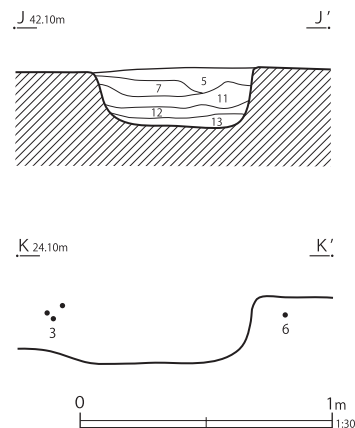
覆土は、第1～3層が住居跡の堆積土であり、黒褐色から灰褐色の粘質土が主体である。掘り方や、貼床は検出されなかった。

床面からは、壁溝・ピット・貯蔵穴が検出された。壁溝は、カマド部分を除いて全周するように巡らされていた。幅は0.14～0.38m で、深さは0.05m 前後である。ピットは8基検出した。P 1～P 4 が支柱穴と考えられる。P 5 及びP 6 も位置的に柱穴と考えられることから、P 1 とP 2 は建て替え後の柱穴の可能性がある。いずれもほぼ対角線上に配置されている。平面形は円形もしくは楕円形を呈し、深さは、0.10～0.34m である。

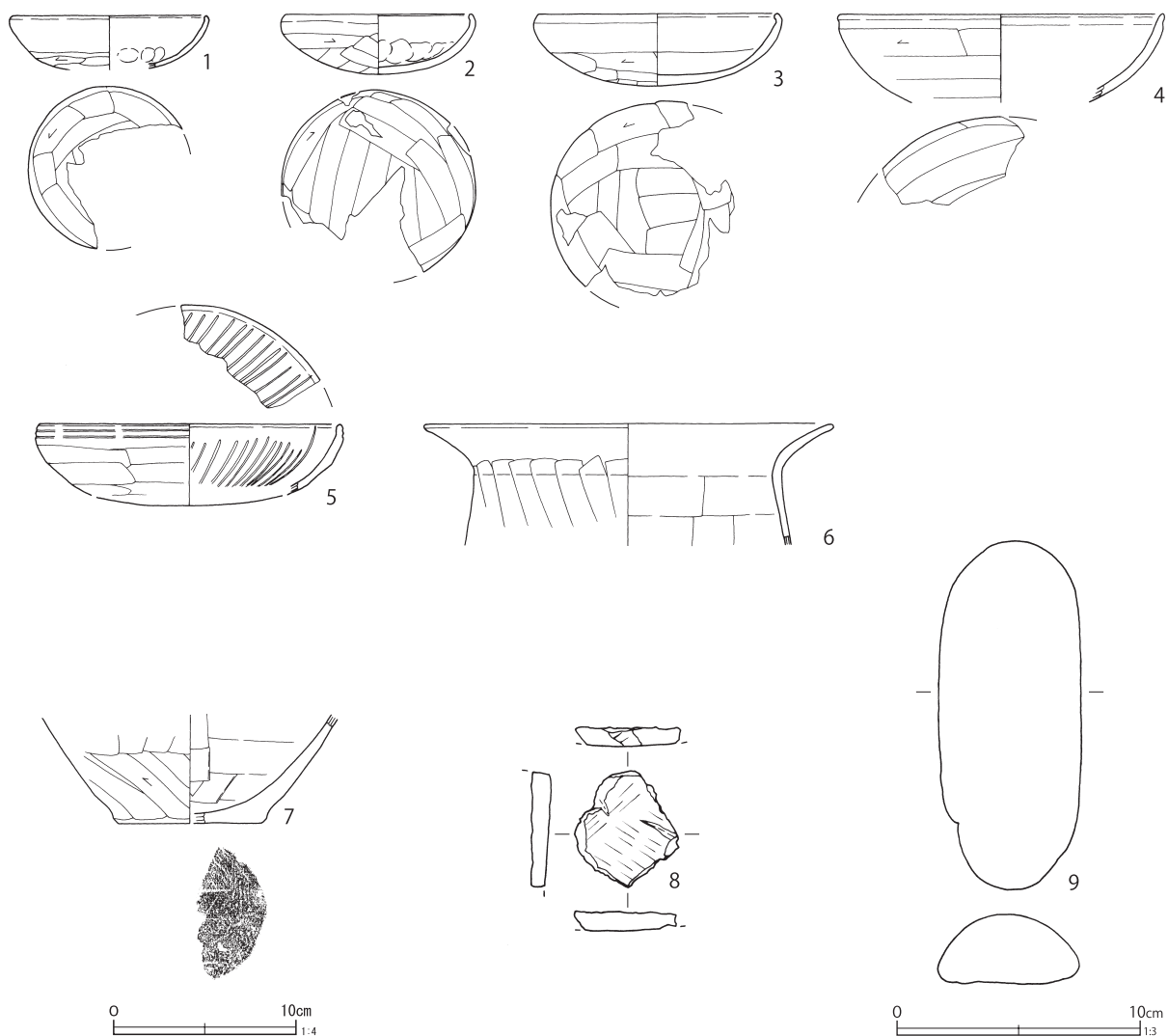
P 7 は、南側の壁に近い位置に掘り込まれており、出入口に関する施設の可能性があると考えられる。平面形は楕円形で、深さは0.15m である。P 8 は住居の中央で検出された。その性格や機能は不明であるが、4本の支柱穴の中心に位置すること、P 7 とカマドを結ぶ直線状に位置することなどから住居に伴う施設と考えられる。貯蔵穴はカマドの右側で検出した。壁からやや離れて不整円形に掘り



S J 48			
1 黒褐色土	しまりあり	粘性あり	白色粘土粒子少量含む
2 褐灰色土	しまりあり	粘性あり	白色粘土粒子多量含む
3 褐灰色土	しまりあり	粘性あり	白色粘土ブロックを主体とする 全体が砂っぽい
4 褐灰色土	しまりあり	粘性あり	炭化粒子含む
5 褐灰色土	しまりあり	粘性あり	炭化粒子・焼土ブロック含む
6 褐灰色土	しまりあり	粘性あり	炭化粒子・焼土ブロックを少量含む
7 黒褐色土	しまりあり	粘性あり	灰を全体に含む 焼土ブロック少量含む
8 褐灰色土	しまりあり	粘性強	炭化粒子・焼土粒子・白色粘土ブロック少量含む
9 褐灰色土	しまりあり	粘性あり	白色粘土ブロック全体に含む土
10 褐灰色土	しまりあり	粘性あり	白色粘土ブロック・粒子を主体とする 砂質
11 灰黄褐色土	しまりあり	粘性あり	7層に似る 一部被熱し赤色化している
12 黒色土	しまりあり	粘性あり	カマド灰・焼土ブロック少量含む
13 褐灰色土	しまりあり	粘性あり	地山(白色粘土)に似るが全体が砂っぽい
14 褐灰色土	しまり弱	粘性弱	灰黄褐色粘土ブロック・炭化物を含む
15 暗灰色土	しまりややあり	粘性あり	灰黄褐色粘土ブロックをやや多く含む
16 暗褐色土	しまりややあり	粘性ややあり	炭化粒子少量混在 S J 48の主柱穴
			炭化粒子・焼土粒子混入



第 191 図 第 48 号住居跡・遺物出土状況



第 192 図 第 48 号住居跡出土遺物

第 58 表 第 48 号住居跡出土遺物観察表 (第 192 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(10.0)	[2.7]	—	C E I	50	普通	橙	カマド 指頭痕	58-4
2	土師器	坏	10.0	3.3	—	C E H I	70	普通	橙	B 指頭痕	58-5
3	土師器	坏	(12.4)	3.8	—	C H I	40	普通	にぶい黄橙	No.1 A	58-6
4	土師器	坏	(17.8)	[4.9]	—	E I	10	普通	橙	カマド	76-5
5	土師器	埴	(16.4)	[3.9]	—	C H I	10	普通	橙	A 内面暗文	58-7
6	土師器	甕	(21.6)	[6.5]	—	B E G H	20	普通	にぶい橙	No.2	76-5
7	土師器	甕	—	[5.9]	(7.8)	H I K	25	普通	にぶい黄橙	A 木葉痕	76-5
8	石製品	砥石	長さ [4.2] 幅 [4.8] 厚さ [0.8] 重さ 16.7 g						D 凝灰岩？ 周縁部欠損		79-3
9	石製品	編物石	長さ 14.2 幅 5.6 厚さ 3.1 重さ 416.3 g						A 砂岩		79-6

込まれていた。深さは0.22mである。

カマドは北壁の中央からやや東寄りに設けられており、煙道部分は第53号住居跡によって壊されていた。住居跡の壁が燃焼部の中間に位置する。残存する長さは1.07mである。燃焼部の掘り込みは長方形で、長さは1.05m、幅は0.72m、床面からの深さは0.05mである。燃焼部底面は煙道部へ向かって緩やかに高くなり、煙道へは高低差0.15mの段を持って続く。焚口部分の立ち上がりは緩やかである。

カマドの覆土は、第7層及び第12層がカマドの使用に伴う灰層と考えられ、使用面が2枚の可能性がある。袖はほぼ欠損しており、右袖の基部が確認できた。左袖は僅かに張り出す程度である。

カマド灰層の堆積状況や、柱穴の配置から、建て替えが行われている可能性がある。

遺物は、主にカマド周辺から、土師器坏・甕が出土した。出土遺物を、第192図に示した。

1～7は土師器であり、1～5が坏、6・7が甕である。1は、カマドから出土した。口縁部端部がわずかに内湾する。底部には、ヘラケズリが施され、見込み部には指頭痕が認められる。磨滅が著しく、器面の調整は不明瞭であるが、体部にはヨコナデが施されると思われる。2は、規模や口縁部端部の形態が1に近いが、1と比較して体部の張り出しがやや顕著である。器面の磨滅が著しい。3は、カマドの焚口部から出土した。器形は2に近いが、口径は大きい。胎土には、多量の角閃石が混入する。4は、カマドから出土した。口縁部端部外面に強いヨコナデが施される。5は、口縁部端部外面に強いヨコナデが施される。内面に暗文が施されているように思われるが、器面の磨滅が著しく不明瞭である。6は、口縁部が大きく外反する。口縁部下端から胴部に向かって、縦方向のヘラナデが施される。7は、厚手で、底部に木葉痕が認められる。8は砥石であり、周辺を欠損する。9は、編み物石である。

第51号住居跡（第193～195図）

Q・R-18・19グリッドで検出した。第57号住居跡と重複し、第51号住居跡が新しい。

平面形は、カマドの軸に対して横長の長方形を呈する。北東隅は、攪乱によりわずかに壊されている。

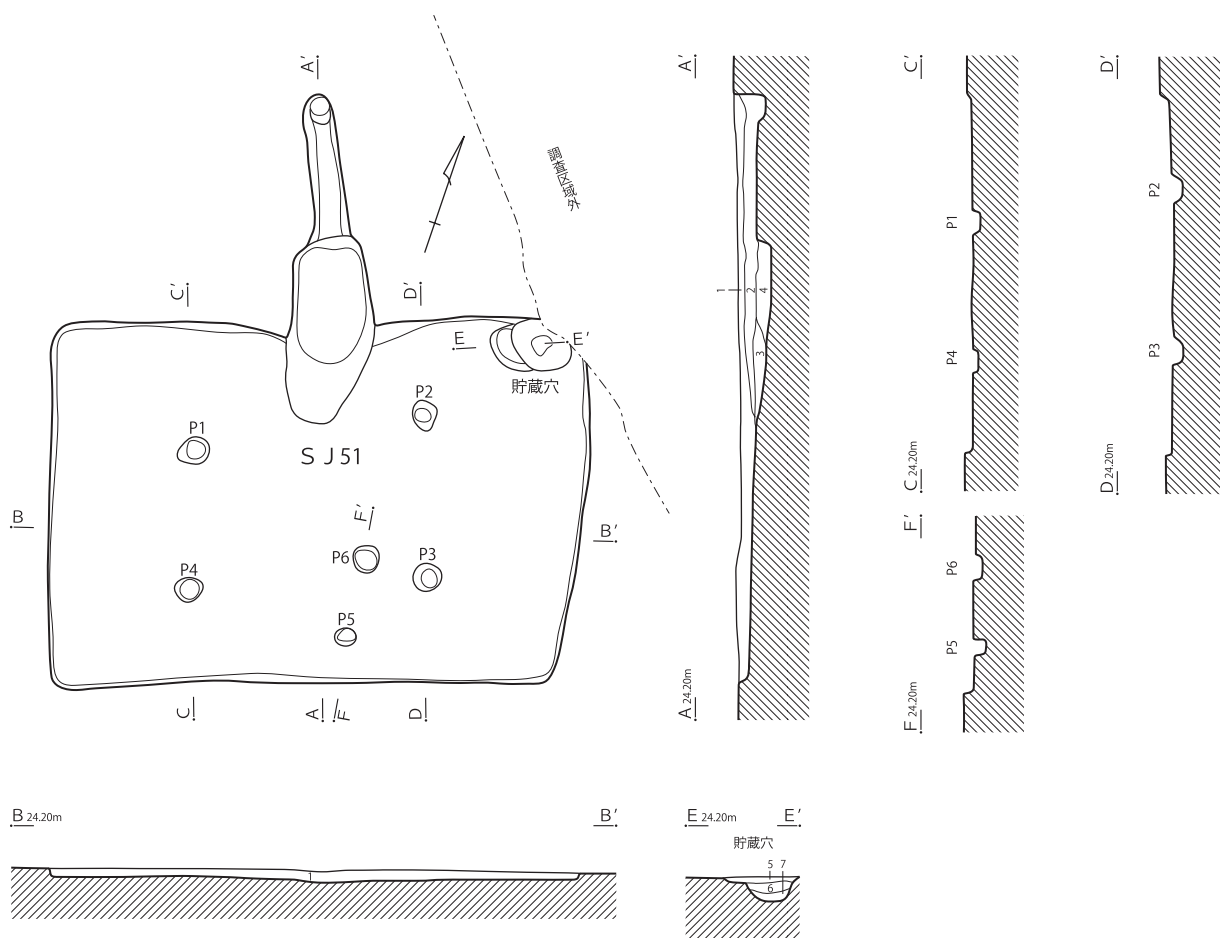
規模は、東西4.30m、南北3.05m、深さは最も深いところで0.21mである。西辺を基準とした主軸方位はN-17°-Wを示す。

覆土は、褐灰色土を主体とするものである。住居跡を埋める第1層は、カマド煙道の先端部までを覆っている。

床面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は検出されなかった。ピットは6基を検出し、P1～P4が柱穴と考えられる。平面形は、いずれもやや不整な円形で、深さは、0.06～0.09mである。P5は住居跡南辺のほぼ中央に位置し、壁に近いこと、掘り込みは住居跡の壁側がやや斜めになるところから、出入口に関する施設の可能性があると考えられる。P6の性格は不明であるが、P1～5とほぼ同規模であり、第51号住居跡に伴うものと考えておきたい。北東隅の掘り込み、攪乱によって検出面が乱れており、残存状態は悪かった。住居跡より新しい可能性もあるが、ここでは貯蔵穴として扱うこととする。深さは、0.20mである。

カマドは北壁の中央に設けられており、燃焼部、煙道ともに残存状態は良好であった。

カマドの全長は2.10mである。燃焼部は住居の壁より外側に出るもので、掘り込みは長方形を呈し、焚口側は丸みを帯びる。燃焼部の長さは1.47m、幅0.63m、深さ0.32mを測る。底面は、焚口部から中央に向かって緩やかに下がり、そこから奥まではほぼ平坦である。煙道へは高さ0.12mの段を形成して移行する。側壁はほぼ垂直に立ち上がり、中央付近から奥は被熱により僅かに赤色に硬化していた。焚口前面の0.6～0.7mの範囲は、燃焼部に向かって緩やかに下がっている。



S J 51

- | | | | | | |
|---|-------|-------|---------|--------|-------------------|
| 1 | 褐灰色土 | 粘質シルト | しまりあり | 粘性ややあり | 焼土粒子・炭化粒子微量含む |
| 2 | 灰黄褐色土 | 粘質シルト | しまりあり | 粘性ややあり | 焼土粒子・炭化粒子少量含む |
| 3 | 褐灰色土 | 粘質シルト | しまりややあり | 粘性ややあり | 炭化粒子・地山粒子多量含む |
| 4 | 黒色土 | 灰炭層 | | | |
| 5 | 灰黄褐色土 | 粘質シルト | しまりややあり | 粘性ややあり | 炭化粒子・焼土ブロック含む |
| 6 | 褐灰色土 | 粘質シルト | しまりややあり | 粘性ややあり | 焼土粒子微量含む 地山粒子少量含む |
| 7 | 褐灰色土 | 砂質シルト | しまり弱 | 粘性なし | 炭化粒子微量含む |

0 2m
1:60

第 193 図 第 51 号住居跡

煙道は長さが0.63mである。幅は燃焼部との接続部分が0.33mであるが、その先は0.25mとほぼ一定の幅で先端まで続く。先端には明瞭に煙出しが確認できた。煙出し部は、直径0.25mの円形のピットを垂直に穿ったもので、煙道の底面より0.05m低く掘り下げていた。

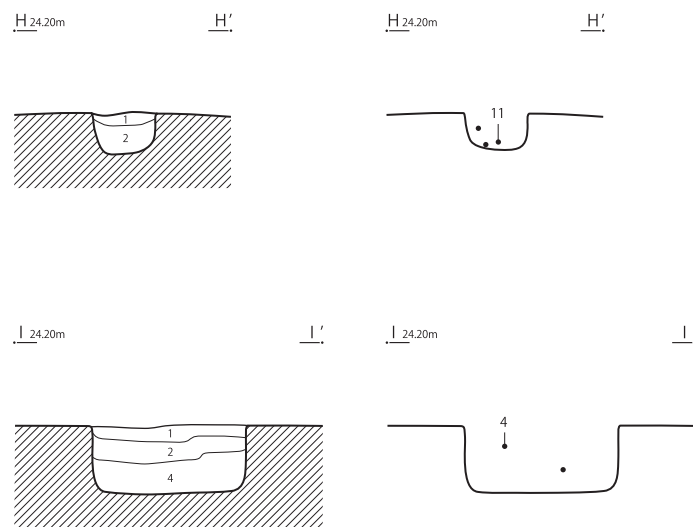
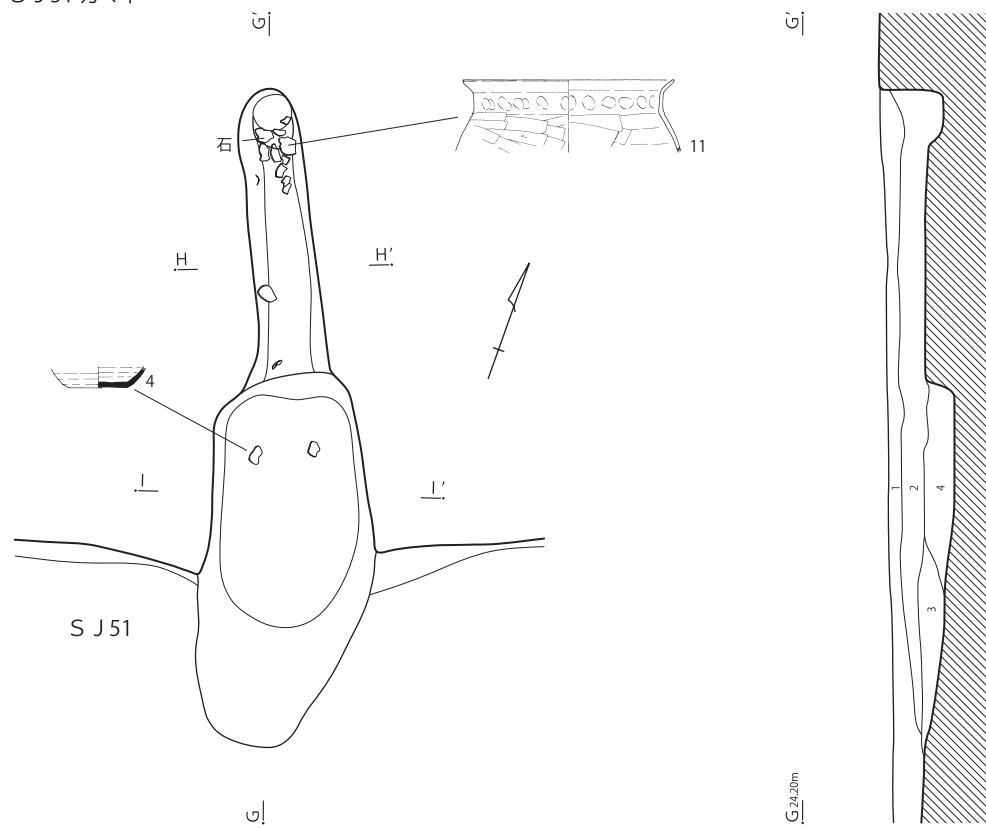
煙道は、カマド焚口部までを覆う灰黄褐色の第2層によって埋没しており、焚口部には、第2層下に褐灰色の第3層が堆積していた。堆積状況から、第2・3層はカマドの構築材が崩落したものと思われるが、シルト質土であり、焼土粒・炭化

物粒がほとんど含まれない点で、カマドの構築材とするには不適當と思われる。第4層は、灰炭の純層であり、カマド使用時の堆積層と考えられる。カマド前面の床面には壁際まで、カマドに由来する灰が広がっていた。袖は検出されなかった。

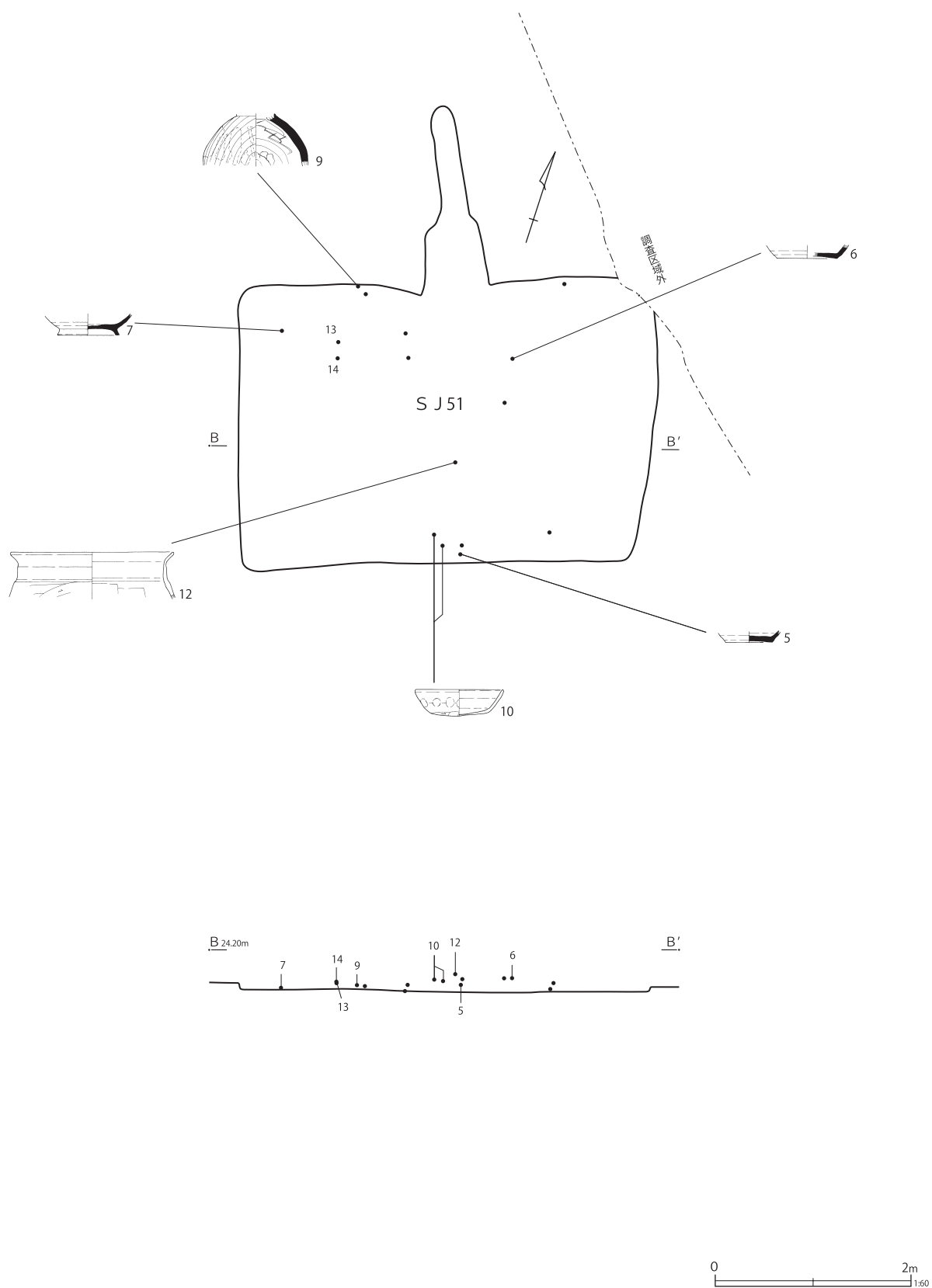
遺物は、覆土中から散在して、土師器坏・甕、須恵器坏が出土したほか、カマドの煙道先端付近からは土師器甕が出土した。出土遺物は、第196図に示した。1～9は須恵器であり、1～6が坏、7が高台付埴、8が蓋、9がフラスコ形瓶である。

1の底部は回転糸切りで、中央がわずかに内湾

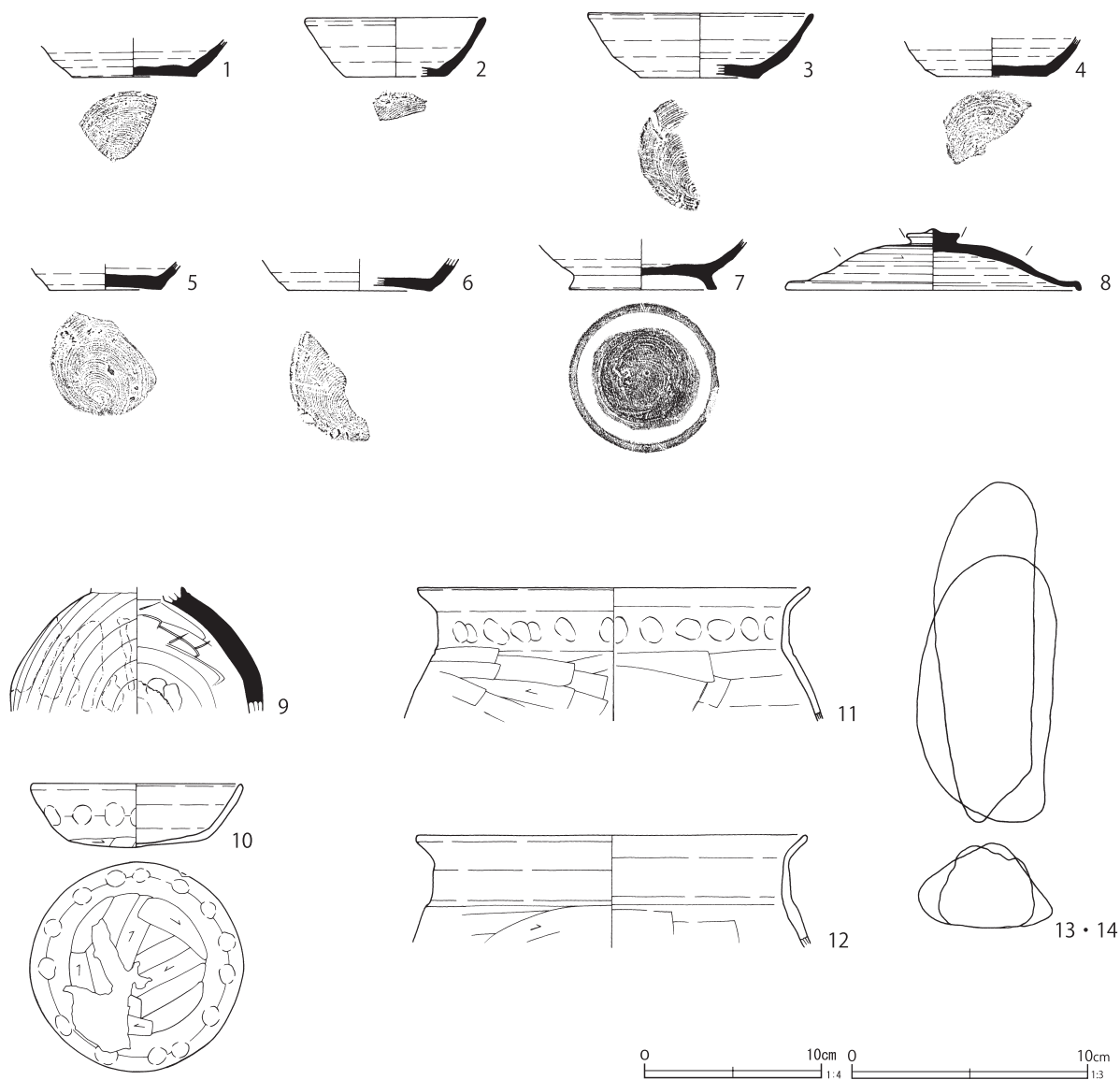
S J 51 カマド



第 194 図 第 51 号住居跡遺物出土状況 (1)



第 195 図 第 51 号住居跡遺物出土状況（2）



第 196 図 第 51 号住居跡出土遺物

する。胎土は、黒色粒子を多量に含み、良く焼き締まる。内面全体に自然降灰が認められる。2も同様に、自然降灰が内面全体と口縁部端部まで認められる。胎土や焼成状態が極めて似ており、1と同一個体の可能性がある。3は、カマドから出土した。底部を回転糸切りし、体部下端にヘラケズリが施される。胎土に白色針状物質を含み、南比企産である。4は、カマドから出土した。底部を回転糸切りするが、磨滅のためその後の調整の有無は不明瞭である。胎土に、角閃石の混入が目

立つ。6の底部は回転糸切りで、良く焼き締まる。末野産と考えられる。7の底部は、回転糸切り後に高台が貼り付けられ、ヘラナデが施される。高台は外反し、端部にヘラケズリが施される。9は、外面に自然降灰が認められる。他の遺物よりも時期の古いもので、混入と考えられる。10～12は土師器であり、10が坏、11・12は甕であり、11はカマドから出土した。10はほぼ完形で、体部中央に全周して指頭痕が認められる。底部にはヘラケズリが施される。13・14は、編み物石である。

第59表 第51号住居跡出土遺物観察表（第196図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	—	[2.1]	(6.8)	I K	10	普通	灰	A 底部回転糸切り 内面灰かかる	76-6
2	須恵器	坏	(10.0)	[3.8]	(5.6)	I K	10	普通	灰	A・D 灰かかる 1と同一か	76-6
3	須恵器	坏	(12.4)	3.6	(6.6)	H J	40	普通	灰白	B・カマド 底部回転糸切り 南比企産	58-8
4	須恵器	坏	—	[2.2]	(6.0)	C E I K	20	普通	褐灰	No.4 カマド 底部回転糸切り 上野産	76-6
5	須恵器	坏	—	[1.6]	6.2	E J	60	普通	灰	No.4 底部回転糸切り 南比企産	76-6
6	須恵器	坏	—	[1.8]	(8.0)	C E H	30	普通	灰	No.16 底部回転糸切り 末野産	76-6
7	須恵器	高台付埴	—	[2.8]	8.2	I K	70	普通	灰白	No.10 底部回転糸切り	76-6
8	須恵器	蓋	(16.4)	3.4	—	D I K	20	普通	灰白	A・一括 つまみ径 3.0 cm	58-9
9	須恵器	フラスコ型瓶	—	[7.0]	—	I	5	普通	灰	No.1 自然降灰 湖西産	76-6
10	土師器	坏	11.6	3.6	7.8	C E H I	90	普通	にぶい橙	No.14・No.15 一括 指頭痕	58-10
11	土師器	甕	(22.0)	[7.5]	—	C H I	15	普通	にぶい橙	No.1 カマド 指頭痕	76-6
12	土師器	甕	(21.8)	[6.3]	—	C E H I	10	普通	橙	No.6	76-6
13	石製品	編物石	長さ 14.2	幅 4.6	厚さ 3.7	重さ 335.5 g				No.11 緑泥片岩	79-7
14	石製品	編物石	長さ 11.2	幅 5.1	厚さ 4.8	重さ 331.5 g				No.12 砂岩	79-7

第53号住居跡（第197図）

L・M-16グリッドで検出した。第48・52号住居跡、第34号土塋と重複し、第34号土塋より古く、第48・52号住居跡より新しい。上部は大きく削平されているものと考えられ、検出された深さはごく浅い。

重複する第52号住居跡と同時に掘り下げたために北西側の重複部分が失われてしまった。平面形は方形である。

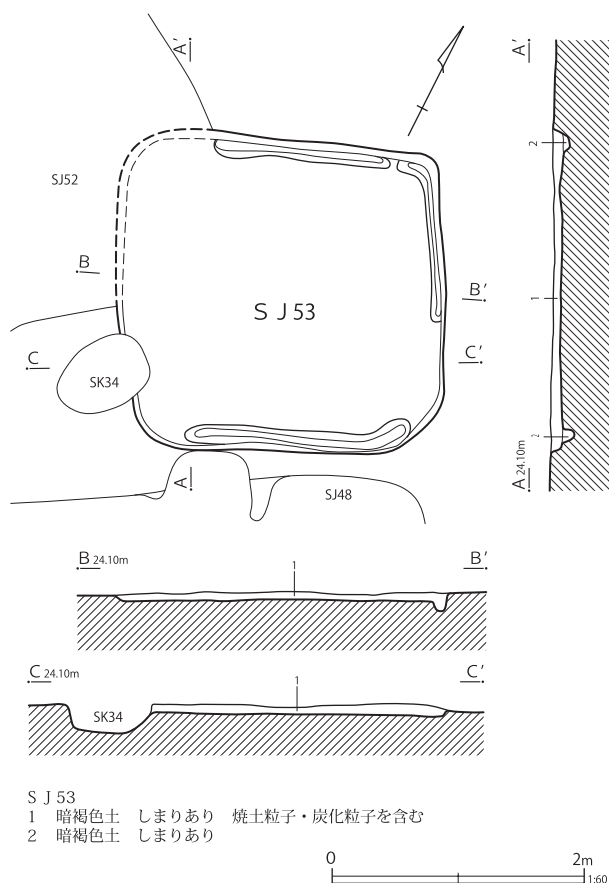
規模は、南北方向が2.54m、東西方向が2.75mで、深さは0.10m前後である。西辺を基準とした主軸方位はN-21°-Wを指す。

覆土は、暗褐色土が主体であり、地山ブロックを多量に含んでいることから、埋め戻された可能性がある。

床面はほぼ平坦である。床面からは、壁溝が検出された。壁溝は、南東隅と南西隅からは検出されなかった。幅は、0.11～0.19mで、深さは0.05～0.10mである。ピットは検出されなかった。

カマドは検出されなかった。第52号住居跡との重複部分に存在していた可能性はあるが、痕跡は認められなかった。

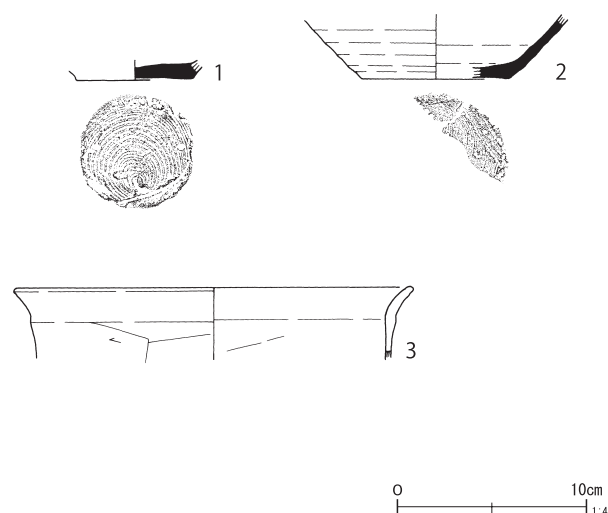
遺物は、土師器坏・甕、須恵器坏が少量出土した。出土遺物は、第198図に示した。1・2は、須恵器の坏であり、3は、土師器の甕である。



第197図 第53号住居跡

1は、底部のみの破片である。底部は、回転糸切り後無調整である。胎土に、白色針状物質を多量含むことから、南比企窯である。2は、底部から体部中位までの破片である。底部は、回転糸切りし、周辺の一部に直線的なヘラナデが認められる。胎土に、黒色粒子、白色粒子を多量含む。

3は、口縁部の破片である。口縁部は外反する。上部外面には、強いヨコナデが施される。胎土は、含有物が多く、粗い印象を受ける。器面はざらついている。角閃石と砂粒子の混入が目立つ。遺物はいずれも小破片であり、詳細な時期は不明である。



第198図 第53号住居跡出土遺物

第60表 第53号住居跡出土遺物観察表（第198図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	—	[0.9]	6.0	E J	100	普通	褐灰	一括 底部回転糸切り 南比企産	76-5
2	須恵器	坏	—	[3.4]	(7.6)	H I K	15	普通	褐灰	一括 底部回転糸切り	76-5
3	土師器	甕	(20.6)	[3.9]	—	C E G H I	10	普通	明赤褐	一括	76-5

第60号住居跡（第199・200図）

L・M-17・18グリッドで検出した。第73・74・75号住居跡、第32号溝跡と重複し、第60号住居跡が最も新しい。

平面形はカマドの軸に沿った長方形である。

規模は、長軸3.47m、短軸3.13mであり、深さは0.17mである。南東辺を基準とする主軸方位はN-56°-Eを指す。

覆土は、地山粒子を含む褐灰色土が主体である。カマド覆土である、第5層の堆積状況から、第8層上面が床面と考えられる。貼床は検出されなかった。

住居跡からは、壁溝、ピット、貯蔵穴が検出された。壁溝は、北西から南西にかけてと、南東壁の中央部で検出した。幅は0.11～0.18mで、深さは0.05m前後である。ピットは6基を検出した。P1～P3は対角線上に配置され柱穴と考えられる。北側の4本目の柱穴は確認できなかった。P4は住居の中央にあり第48号住居跡の配置と類似する。いずれも円形で、深さは、0.05～0.35mで

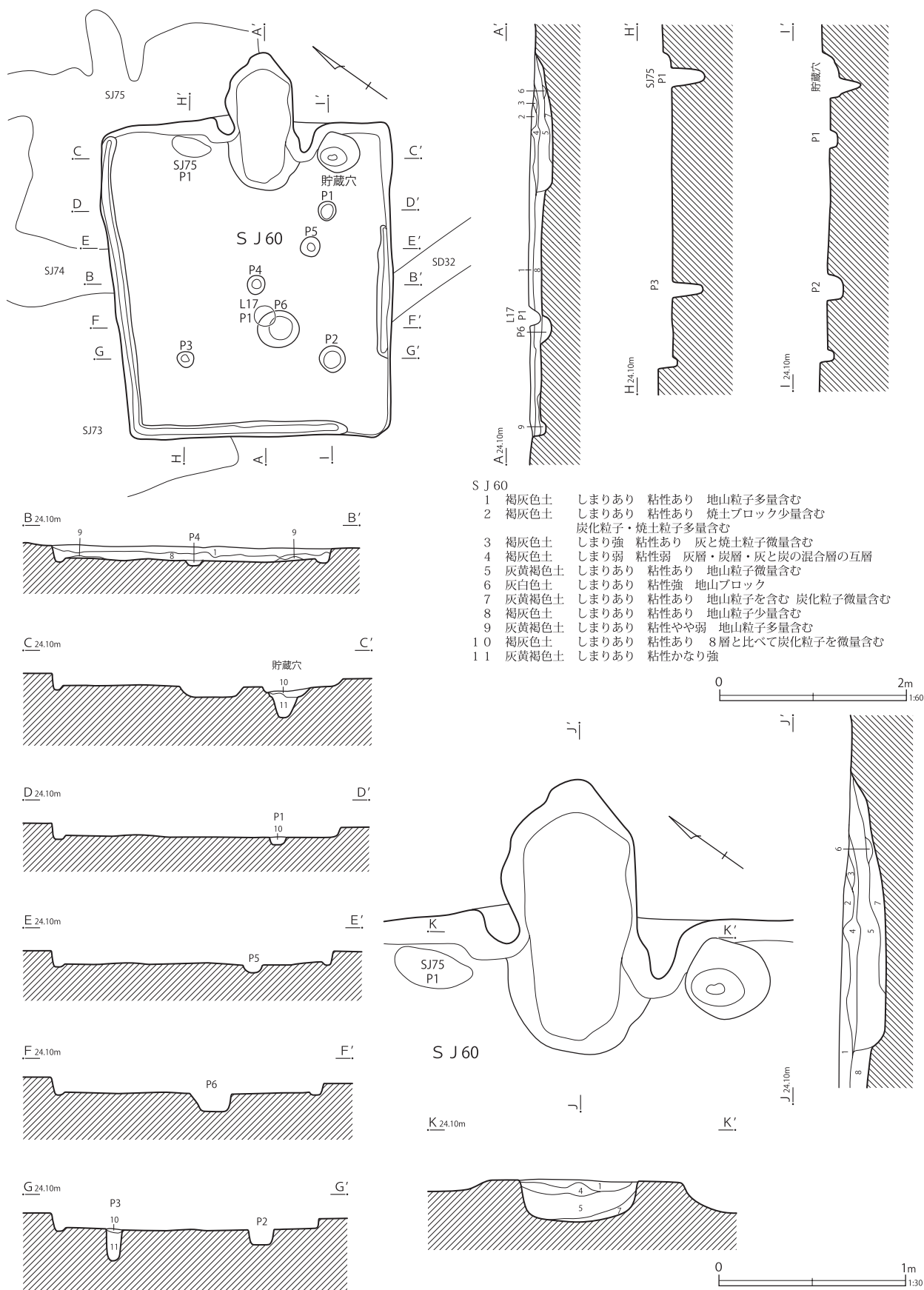
ある。貯蔵穴はカマドの右側で検出した。袖に接して掘り込まれていた。不整楕円形の掘り込みで、深さは0.03mである。

カマドは北東壁の中央からやや右よりに設けられていた。燃焼部の中間に住居跡の壁が位置するものである。煙道は検出されておらず、削平されたものと思われる。燃焼部は長方形の掘り込みで、長さは1.47m、幅は0.74mである。底面はなだらかに上がり、煙道部との境は不明瞭である。

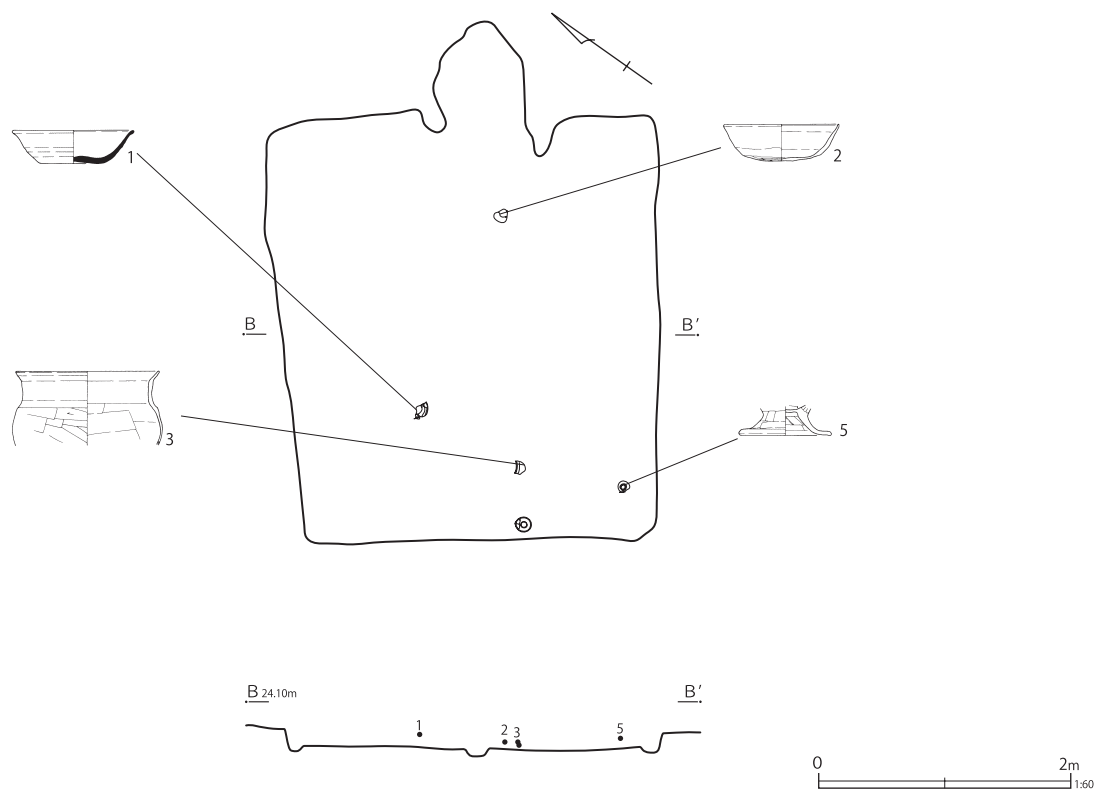
カマドの覆土は、第4層が灰層と炭層の互層であり、カマド使用時の堆積層と考えられる。第5～7層は、カマド掘り方の埋め土である。

袖は両袖ともに基部を検出した。袖の構造は、粘質土の作り付けであった。

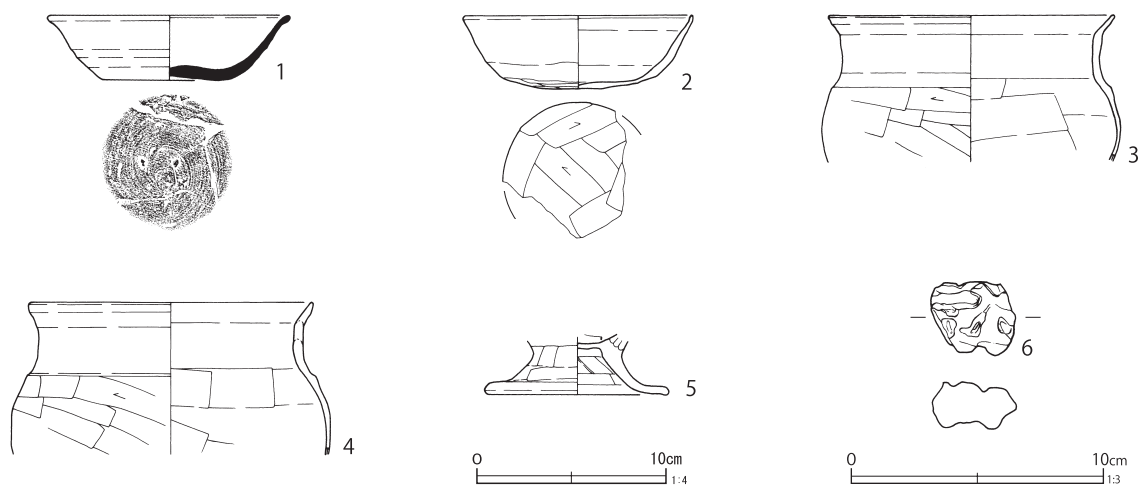
出土遺物は、第201図に示した。1は須恵器の坏である。2～5は土師器であり、2が坏、3・4が甕、5が台付甕である。6は鉄滓である。土師器は、他の遺構から出土したものと比較して、風化があまり進んでおらず、遺存状態は良いものが多かった。



第 199 図 第 60 号住居跡



第 200 図 第 60 号住居跡遺物出土状況



第 201 図 第 60 号住居跡出土遺物

第 61 表 第 60 号住居跡出土遺物観察表（第 201 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(12.4)	3.4	6.1	BEHIK	70	不良	にぶい黄橙	底部回転糸切り 末野産	59-1
2	土師器	坏	(11.9)	3.9	—	CE	25	普通	にぶい褐	No.5	—
3	土師器	甕	(14.9)	[7.8]	—	CEHI	20	普通	明赤褐	No.3 胴部内面に靱圧痕 4 と同一か	76-5
4	土師器	甕	(14.8)	[8.1]	—	CGHI	20	普通	にぶい赤褐	カマド・C・D・一括 3 と同一か	59-2
5	土師器	台付甕	—	[3.2]	9.2	CGHI	80	普通	明赤褐	No.2	59-3
6	鉄滓	鍛冶滓	長さ 2.8 幅 3.3 厚さ 1.8 重さ 19.6 g						A	錆化した鉄付着、磁力なし	79-1

1は、口縁部端部がやや外反する。底部は、回転糸切り後無調整と思われるが、器面の磨滅により不明瞭である。胎土に、片岩を含む。焼成は不良で、器面は粉っぽい。末野産である。

2は、口縁部端部内面に強いヨコナデが施される。胎土は、含有物が多く角閃石の混入が目立つ。3は、口縁部上位を指オサエによって成形され、ヘラナデによって整えられている。胴部の内面に、靱の圧痕が認められる。4は、3と同一個体の可能性がある。5は、台部の破片で、高さが低く、やや扁平である。胎土に、砂粒子を多量含み、器面はざらついている。

遺物の時期は、概ね9世紀後半頃と考えられる。

第62号住居跡（第202図）

O-16グリッドで検出した。第5号住居跡、第9・11号溝跡、第1号土壇と重複し、第1号土壇より新しく、他の遺構よりも古い。煙道先端部、カマドの主要部分及び北壁、住居跡南隅を重複する遺構によって壊されていた。また、住居跡東壁から南壁にかけては地震による地割れが認められ、床面の南東部分は0.12mほど陥没していた。

平面形は、カマドの軸に沿って縦長のやや不整な長方形を呈する。規模は、残存値で、長辺が3.69mであり、短辺が3.32mである。深さは最も深い部分で0.1mである。東辺を基準とした主軸方位はN-40°-Wを指す。

遺構の上面は削平されており、覆土はわずかに遺存するのみであった。褐灰色の粘質シルト土が主体である。貼り床は検出されなかった。

床面はほぼ平坦であり、壁溝、ピット、貯蔵穴が検出された。

壁溝は、壁直下に巡らされており、西辺では一部で途切れていた。幅0.13~0.25m、深さ0.06~0.12mである。

ピットは2基を検出した。いずれも柱穴と考えられるが、西側の2基は確認できなかった。平面形は楕円形を呈し、規模は、P1が0.48m×0.42

m、深さ0.26m、P2が径0.53×0.44m、深さ0.43mである。P2では柱痕と思われる黒褐色土層が確認された。

貯蔵穴はカマド右側に位置し、P1と近接する。円形で、規模は0.59m×0.55m、深さ0.28mである。

カマドは北壁に設けられていた。やや西寄りに位置すると考えられるが、燃烧部が第11号溝跡により壊されていたため詳細は不明である。煙道は一部が残存する。規模は長さ0.72m、幅0.50m、深さ0.14mである。

出土遺物は、第203図に示した。1~3が須恵器であり、1が埴、2が高台付埴、3が蓋である。4~8は土師器であり、4~7が坏、8が甕である。9~11は編み物石である。

1は、体部下位に膨らみを持ち口縁部端部が強く外反する。底部は回転糸切りと思われ、わずかにヘラナデのような痕跡が認められる。胎土は、含有物が少なく、良く焼き締まる。2の高台は外反し、端部をヘラケズリする。胎土は、4mm程度の黒色粒子を多く含む。焼成は不良気味で器面は粉っぽく、風化による磨滅が著しい。

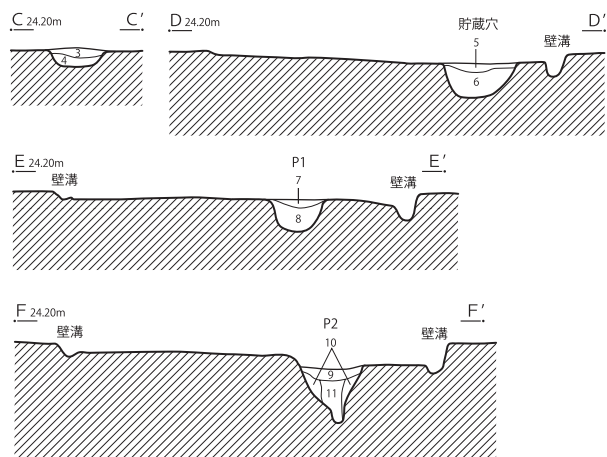
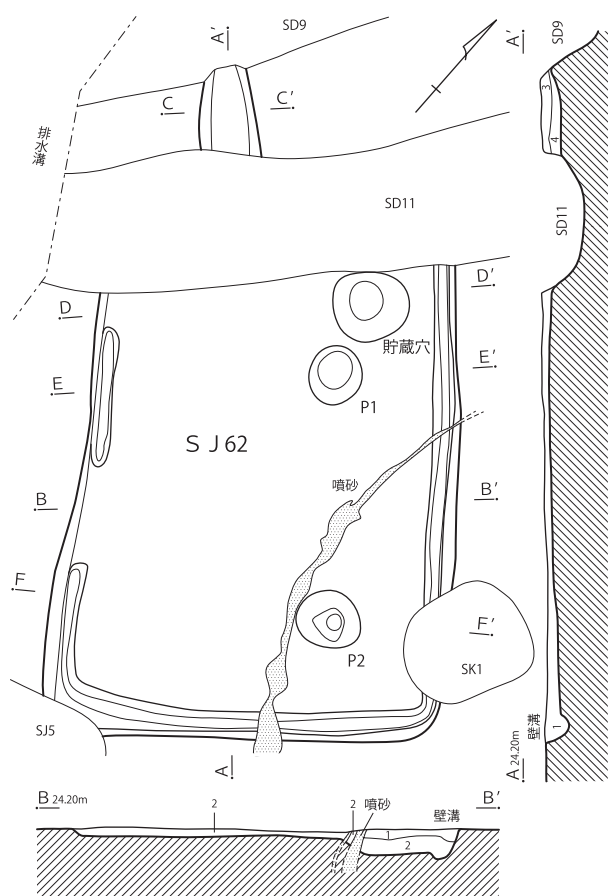
4の胎土は、砂粒子の含有が少なく精緻である。赤色粒子の混入が目立つ。5は、ほぼ完形であり、器形のゆがみが激しい。器壁は厚手で、胎土は精緻である。微細な白色粒子が多量に混入する。6・7はいわゆる模倣坏であり、他の遺構から混入したものと考えられる。8は、器壁がかなり厚手である。胎土に、砂粒子を多量含み、器面がざらついている。

遺構の時期は、出土遺物から9世紀後半頃と考えられる。

第63号住居跡（第204・205図）

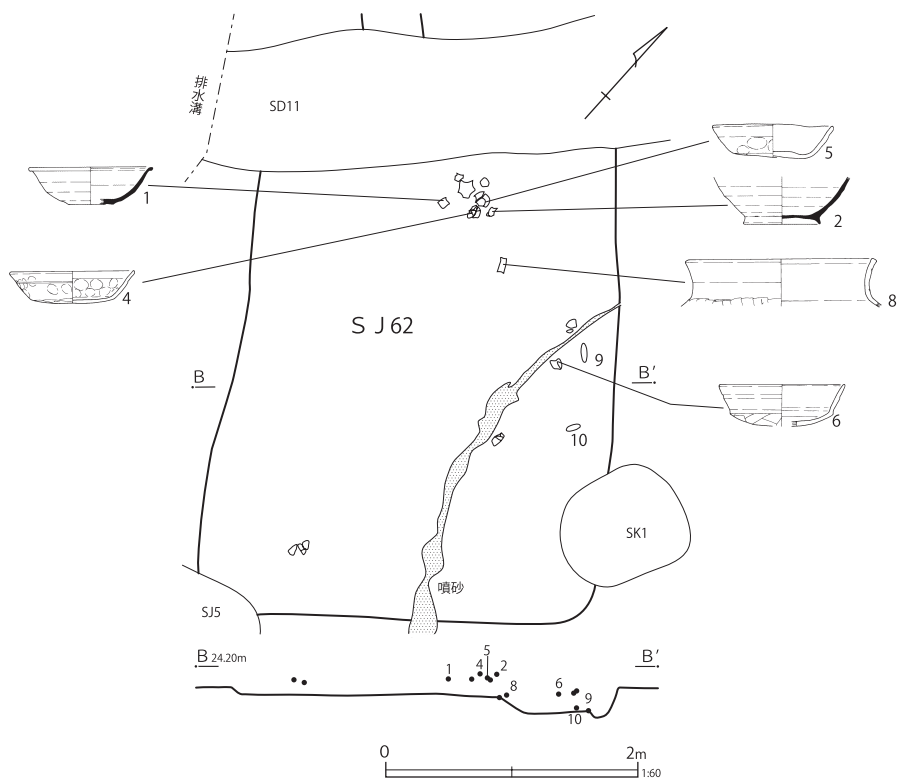
O・P-17グリッドで検出した。第24号土壇、第10号溝跡と重複し、第10号溝跡より古く、第24号土壇より新しい。

西側は第10号溝跡によって壊されており、西側

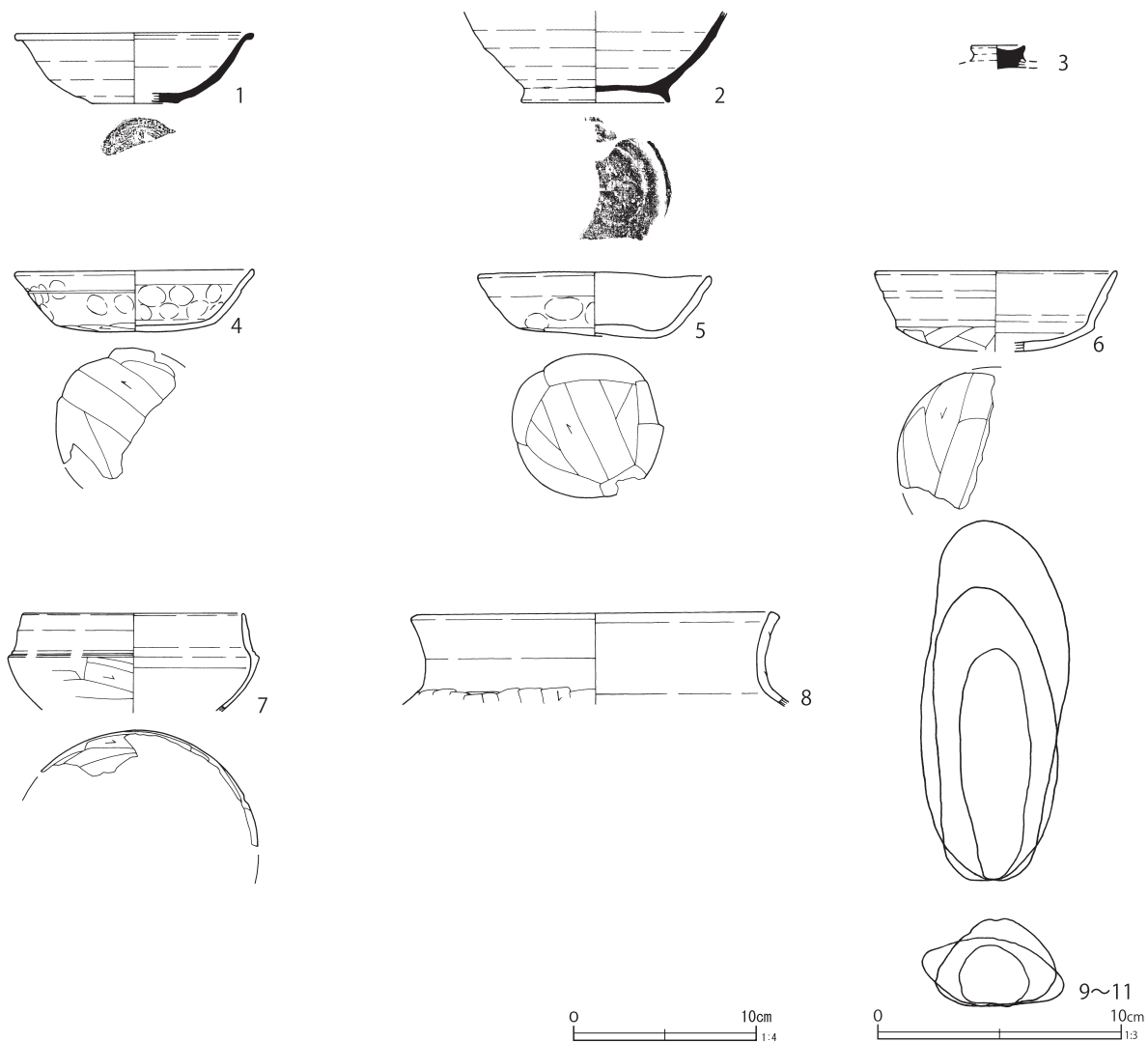


S J 62

- | | | | | |
|---------|---------------|----------|--------|-------------|
| 1 褐灰色土 | 粘質シルト | しまり強 | 粘性ややあり | |
| | 炭化粒子・焼土粒子微量含む | 地山粒子少量含む | | |
| 2 褐灰色土 | 粘質シルト | しまりあり | 粘性ややあり | |
| | 地山ブロック多量含む | | | |
| 3 灰黄褐色土 | 粘質シルト | しまりあり | 粘性ややあり | |
| | 炭化粒子・地山粒子多量含む | 煙道 | | |
| 4 灰黄褐色土 | 粘質シルト | しまりあり | 粘性ややあり | |
| | 地山ブロック・粒子多量含む | 煙道 | | |
| 5 灰黄褐色土 | 粘質シルト | しまりあり | 粘性ややあり | ロームブロック含む |
| 6 褐灰色土 | 粘質シルト | しまりあり | 粘性ややあり | ローム粒子多量含む |
| | 焼土粒子・炭化粒子少量含む | | | |
| 7 褐灰色土 | 粘質シルト | しまりあり | 粘性ややあり | |
| | 焼土粒子・地山粒子含む | | | |
| 8 褐灰色土 | 粘質シルト | しまりあり | 粘性ややあり | 焼土粒子やや多く含む |
| | 炭化粒子・地山粒子少量含む | | | |
| 9 灰黄褐色土 | 粘質シルト | しまりあり | 粘性ややあり | 地山粒子含む |
| 10 褐灰色土 | 粘質シルト | しまりあり | 粘性あり | 地山大ブロック多量含む |
| 11 黒褐色土 | 粘質土 | しまりやや弱 | 粘性あり | 柱痕跡か |



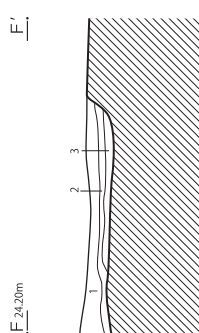
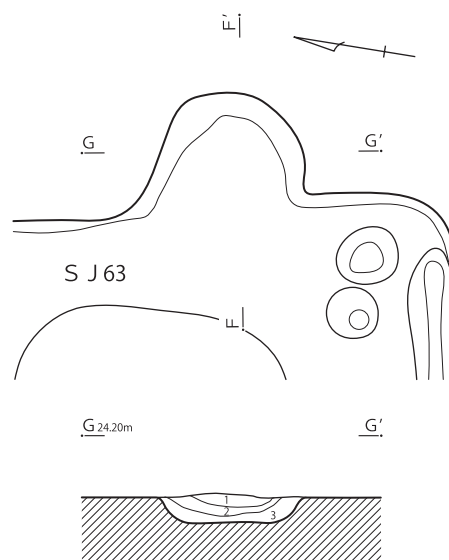
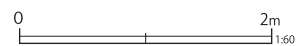
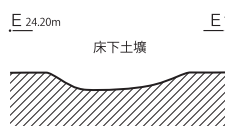
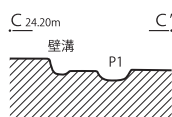
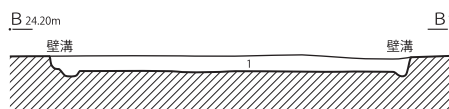
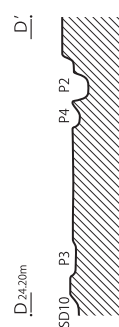
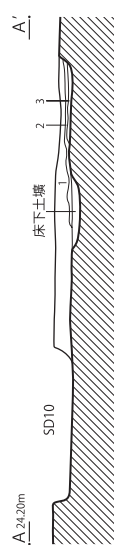
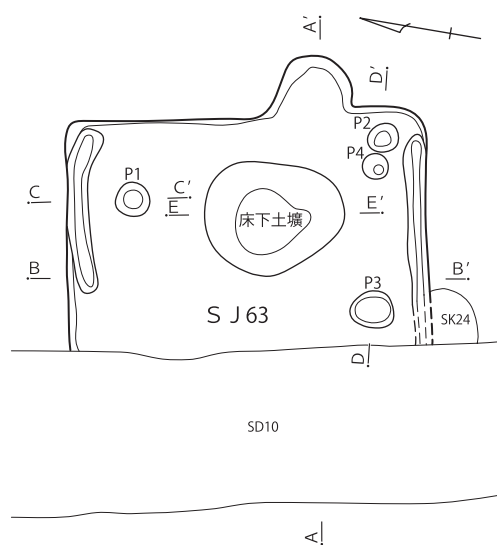
第 202 図 第 62 号住居跡・遺物出土状況



第 203 図 第 62 号住居跡出土遺物

第 62 表 第 62 号住居跡出土遺物観察表（第 203 図）

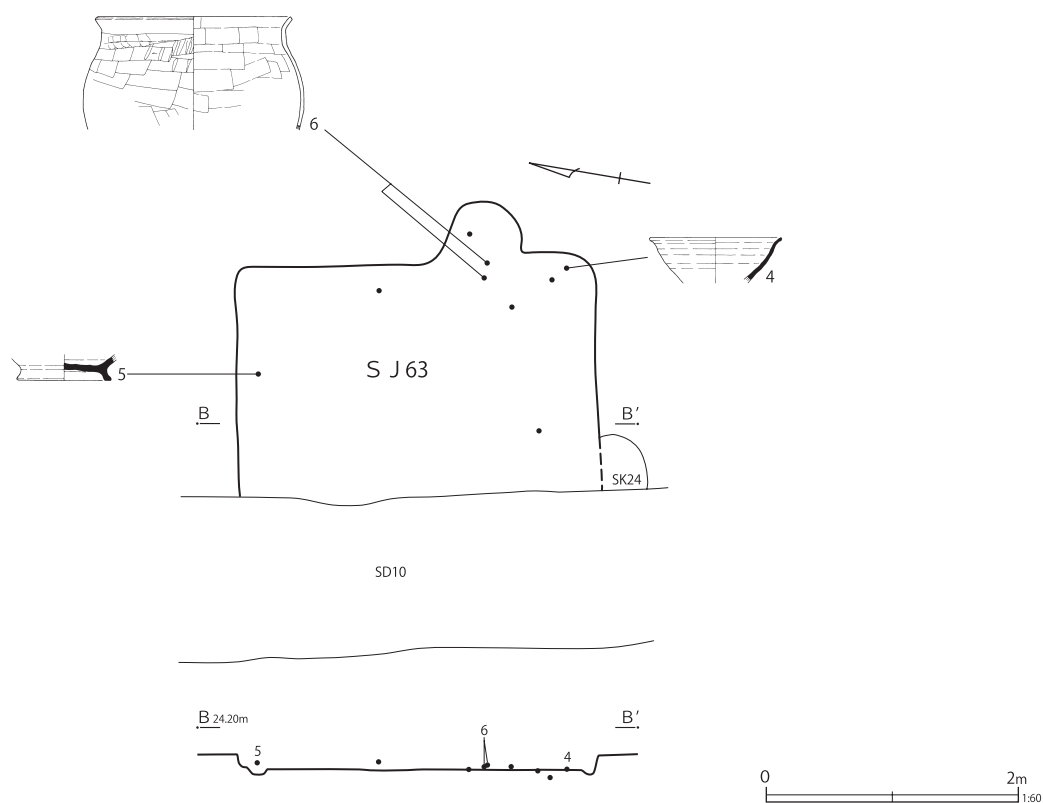
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	埵	(12.8)	3.8	(4.7)	E	10	普通	灰	No. 2 底部回転糸切りか	77-1
2	須恵器	高台付埵	—	[5.0]	(8.0)	HK	20	普通	灰白	No. 6・SD 11	59-4
3	須恵器	蓋	—	[1.3]	—	EK	100	普通	灰白	カマド つまみ径 2.9 cm	77-1
4	土師器	坏	(12.8)	3.3	—	HK	30	普通	にぶい橙	No. 5	59-5
5	土師器	坏	12.8	3.6	7.7	E I HK	80	普通	橙		59-6
6	土師器	坏	(12.9)	[4.4]	—	CH I	20	普通	にぶい黄橙	No. 11	59-7
7	土師器	坏	(12.0)	[5.4]	—	EGH I K	30	普通	橙	A・C・D	59-8
8	土師器	甕	(19.2)	[5.1]	—	EGH I	20	普通	にぶい赤褐	No. 7	77-1
9	石製品	編物石	長さ 14.4 幅 5.7 厚さ 2.8 重さ 329.9 g							No. 10 砂岩	79-7
10	石製品	編物石	長さ 11.8 幅 4.6 厚さ 3.8 重さ 306.3 g							No. 12 花崗閃緑岩	79-7
11	石製品	編物石	長さ 9.4 幅 2.7 厚さ 2.8 重さ 97.8 g							カマド 片岩	79-7



S J 63

- 1 灰黄褐色土 粘質シルト しまり強 粘性ややあり 焼土粒子少量含む 地山粒子含む
- 2 黒褐色土 粘質シルト しまりあり 粘性弱 焼土粒子・ブロック多量含む 炭化粒子含む
- 3 炭層

第 204 図 第 63 号住居跡



第 205 図 第 63 号住居跡遺物出土状況

の両隅部とカマドの大部分が失われていた。

平面形は、方形である。規模は、南北辺が2.91mであり、東西辺は残存値で1.90mである。深さはおよそ0.13mである。北辺を基準とした主軸方位はN-81°-Eを指す。

遺構の上面は削平されているものと考えられる。覆土は、灰黄褐色の粘質シルト土が主体である。床面はほぼ平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面で、壁溝とピットを確認した。貯蔵穴は、検出されなかった。

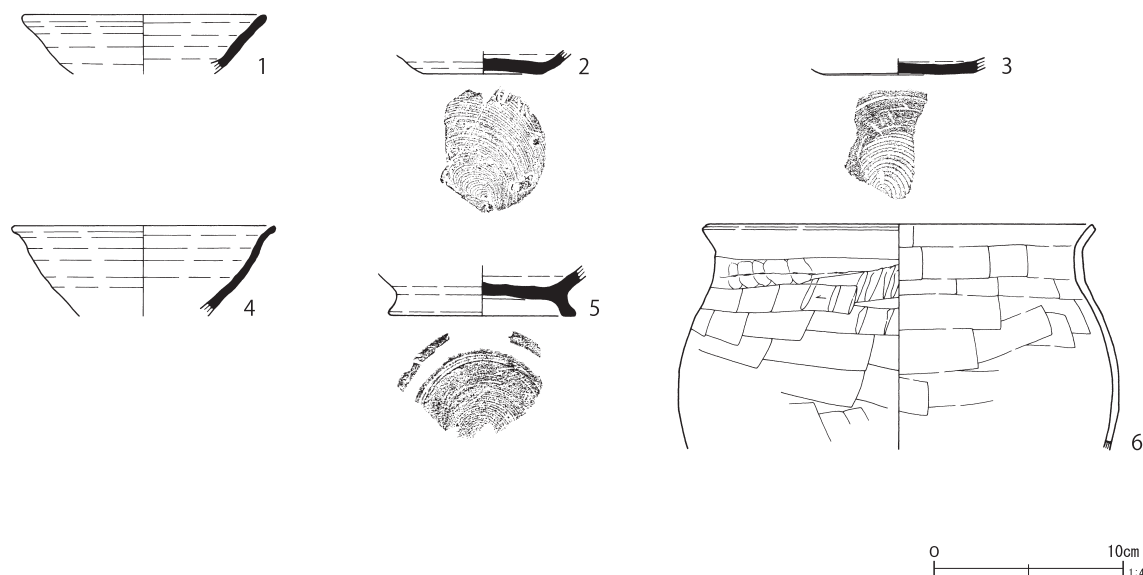
壁溝は、壁直下に掘り込まれており、北・南壁の一部で検出された。幅は0.15~0.18mで、床面からの深さは0.05m前後である。

ピットは4基を検出した。配置状況から、P 1及びP 3が柱穴の可能性が高いと思われる。平面形は、円形および楕円形を呈し、深さは、0.04~0.09mである。P 2・P 4は、住居跡の南東隅部に近接して位置する。

カマドの前面から、床下土壌と考えられる掘り込みが検出された。形状は不整楕円形で、深さは0.15mである。第1・2層に覆われている。

カマドは東壁の中央より南寄りに設けられていた。残存しているのは燃焼部のみである。

燃焼部は、住居の床面より下への掘り込みは認められず、燃焼部の範囲は明確でない。カマド覆土は、第3層が炭層であり、使用時の堆積層と考



第 206 図 第 63 号住居跡出土遺物

第 63 表 第 63 号住居跡出土遺物観察表（第 206 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(12.6)	[3.1]	—	E J	20	普通	灰	C 南比企産 2 と同一か	77-1
2	須恵器	坏	—	[1.2]	6.3	E J	70	普通	灰	底部回転糸切り 南比企産	77-1
3	須恵器	坏	—	[0.8]	(8.0)	E J	10	不良	にぶい褐	C 底部回転糸切り 南比企産	77-1
4	須恵器	高台付碗	(13.6)	[4.7]	—	B E H K	10	不良	にぶい橙	No. 1 末野産	77-1
5	須恵器	高台付碗	—	[2.6]	(9.8)	E J	25	普通	灰	No. 4 底部回転糸切り 南比企産	77-1
6	土師器	甕	(20.2)	[11.9]	—	C H I	30	普通	にぶい黄橙	B・No. 1・2	59-9

えられる。袖は確認できなかった。

遺物は主に、カマドから出土した。また、燃焼部からは、礫が立った状態で検出されており、支脚として使用されていた可能性が考えられる。

出土遺物は、第206図に示した。1～5は須恵器であり、1～3が坏、4・5が高台付碗である。6は土師器の甕である。

1・2は、胎土が近く同一個体であろう。底部は回転糸切りで、体部下端にヘラケズリが施される。口縁部端部は外反せずに立ち上がる。胎土に、極めて多量の白色針状物質を含む。南比企産である。3は、底部の破片である。回転糸切り後に、周辺はヘラケズリされる。焼成は不良で、にぶい褐色を呈する。胎土に、白色針状物質を含み、南比企産である。4は、南東隅の床面から出土した。口縁部の破片である。端部が外反し、体部中位にやや膨らみをもつ。胎土は、2～4mm程度の

含有物が多く、粗い印象を受ける。片岩が微量含まれる。焼成は不良で、にぶい橙色を呈する。末野産である。風化による器面の磨滅が著しい。

5は、北壁の壁溝埋没土上から出土した。底部の破片である。回転糸切り後に、高台部が貼り付けられる。高台部は外反し、高台端部にヘラケズリが施される。器壁は厚手である。胎土に、白色針状物質を少量含む。南比企産である。

6は、カマドから出土した。口縁部から胴部の破片である。口縁部は、コの字状に近い形である。口縁部端部の外側にナデが施され、外反する稜をつくる。胴部外面はヘラケズリによって成形され、内面にはヘラナデが施される。口縁部と胴部の接続部には指頭痕が認められ、一部には強いヘラ状工具の当たりが残る。その後ヘラナデが施されるものと考えられる。遺物の時期は、8世紀末から9世紀後半頃と考えられる。

第65号住居跡（第207図）

M-16・17グリッドで検出した。第30・66・67号住居跡、第9・12号溝跡と重複し、第30号住居跡より古く、他の遺構より新しいと思われる。

第30号住居跡によって南東部分を大きく壊されている。

平面形は方形であるが、西辺は、カマドの左側の壁溝が途切れる位置から住居跡の外方向に開く不整形なもので、やや違和感がある。南西隅部周辺は、第9号土壇と近接・重複する位置であり、発掘調査の際は、遺構がかなり検出しにくい状況であった。

規模は、東西方向が3.68m、南北方向が2.99mで、深さは0.14mである。北辺を基準とした主軸方位はN-60°-Eを指す。カマドは、住居に対して南西に傾いており、カマドを軸とした場合の主軸方位はN-120°-Wとなる。

遺構の上面は削平されているものと考えられる。覆土は薄く、第1層がわずかに検出されたのみである。灰黄褐色土を主体とする。堆積状況から自然堆積と思われる。カマドの土層断面から、第1層下が床面に相当すると考えられる。貼床は検出されなかった。床面はほぼ平坦であり、カマドの前面が、焚口部に向かってわずかにくぼんでいる。壁は、斜めに立ち上がる。

床面からは、壁溝が検出されたが、ピット、貯蔵穴は検出されなかった。

壁溝は、壁の直下に掘り込まれていた。カマドの右側では、カマドに接して住居跡の北西隅から北壁の中央付近までの範囲で確認された。左側も同様に、西壁の中央付近までの範囲で確認された。幅は0.12～0.15mで、床面からの深さは0.05m前後である。

カマドは、西壁に設けられていた。住居跡の壁が燃焼部の中間にかかるものである。煙道は削平され、大部分が欠損していた。残存する規模は、長さ1.19mである。

燃焼部の掘り込みは長方形を呈し、長さは0.89m、幅は0.50mである。床面からの深さは0.09mである。被熱により燃焼部壁の上部は僅かに赤色硬化していた。燃焼部底面から高さ0.07mの段を介して約0.2m平坦面を造り、煙道へとつづくものと考えられる。遺存する先端部の立ち上がりは緩やかである。煙道は長さ0.3m程度が遺存していた。

カマドの覆土は、灰を主体とする黒褐色土の第5層が、使用時の堆積層と考えられる。第3・4層は、堆積状況からカマド天井部の崩落土とも考えられるが、積極的にカマドの構築土とする所見は得られなかった。

燃焼部の底面には、ピット状の掘り込みが確認された。楕円形で、規模は0.29m×0.25m、深さは0.10mである。袖は検出されなかった。

遺物は、土師器、須恵器の小片が、重み覆土中から少量出土した。

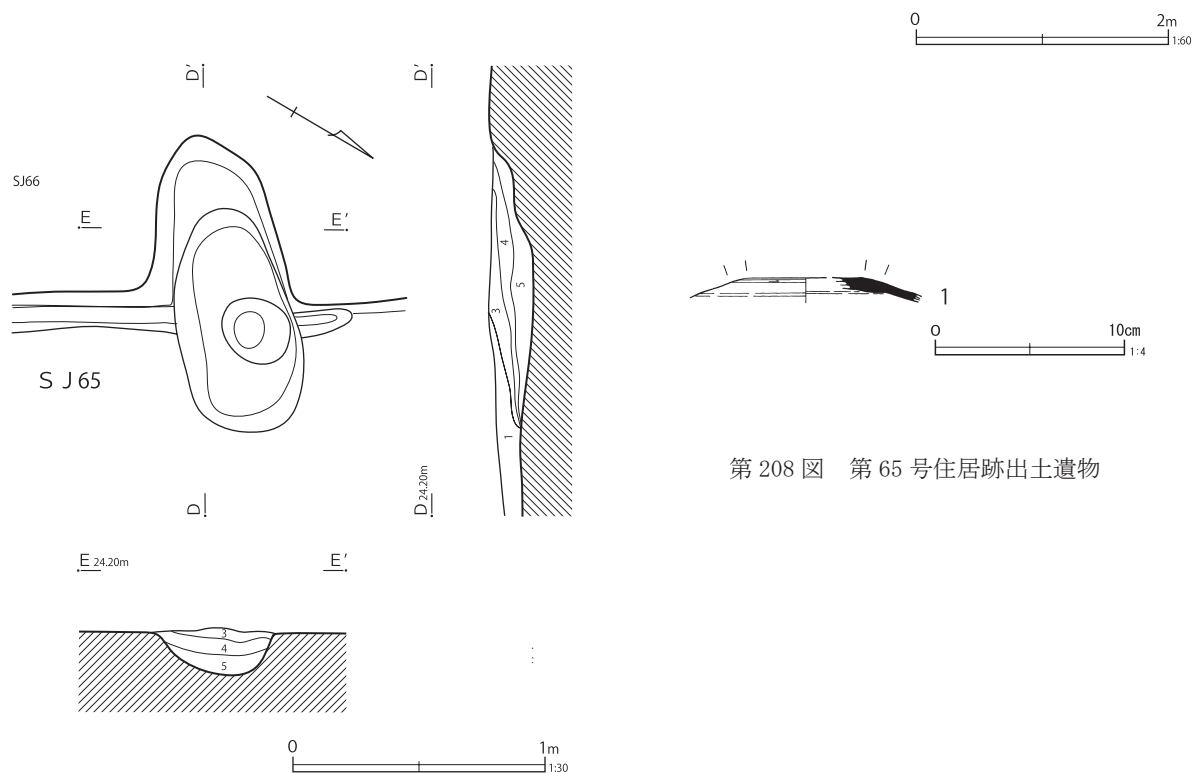
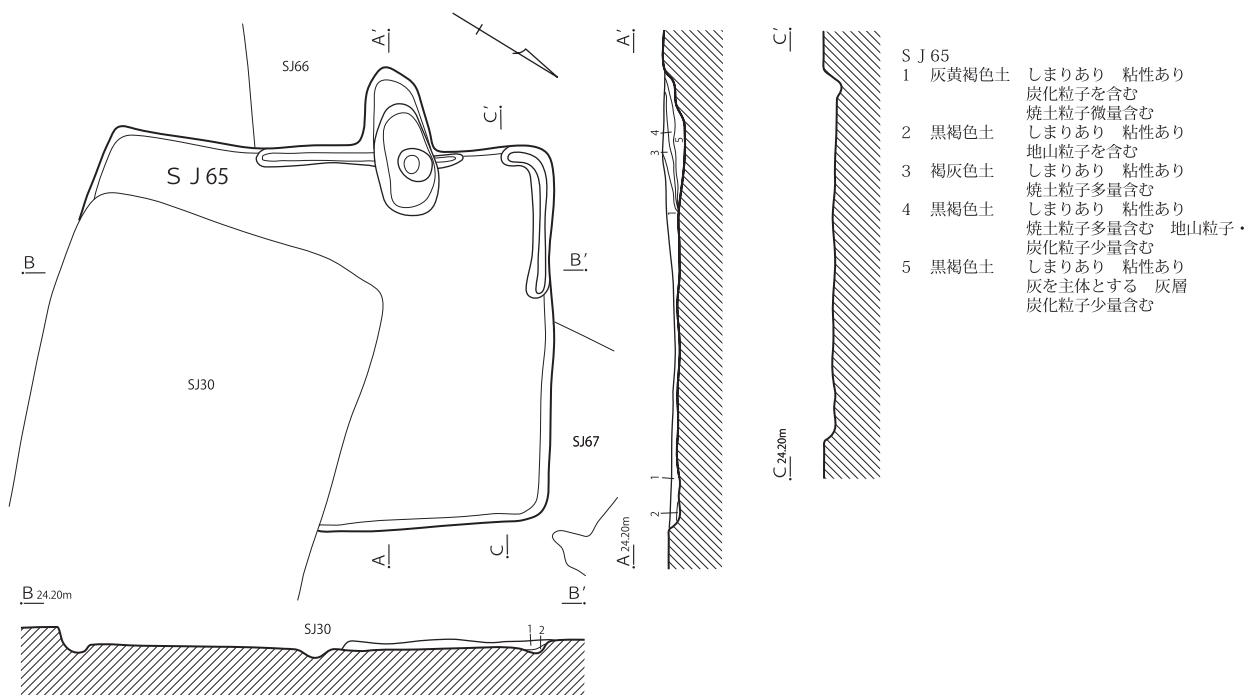
出土遺物は、第208図に示した。須恵器の蓋である。1は、天井部が回転糸切りされる。胎土は、含有物が多く粗い印象を受ける。2mm程度の石英と、赤色粒子の混入が目立つ。角閃石をごく微量含む。焼成は不良であり、灰黄褐色を呈する。小破片であり、遺物の時期は不明である。

出土遺物が少ないため、遺構の時期は不明であるが、重複し、第65号住居跡を壊す第30号住居跡から出土した遺物は、主に9世紀後半頃のものと考えられ、9世紀前半以前に位置づけられる。

第66号住居跡（第209図）

M-16・17グリッドで検出した。第30・65・67号住居跡と重複し、第30・65号住居跡より古い。第67号住居跡との新旧関係は捉えられなかった。東側半分は第65号住居跡によって大部分が壊されていた。

平面形は、カマドの軸に対して横長の長方形である。規模は、南北が3.50mで、東西は残存値で3.99mである。深さは最も深いところで、0.06mである。西辺を基準とした主軸方位は、N-32°

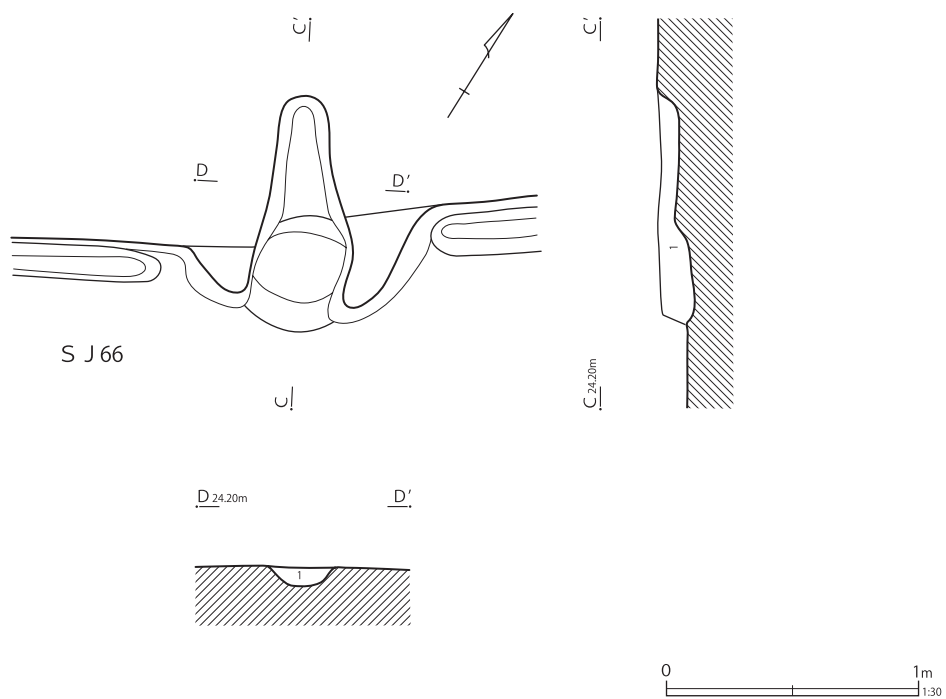
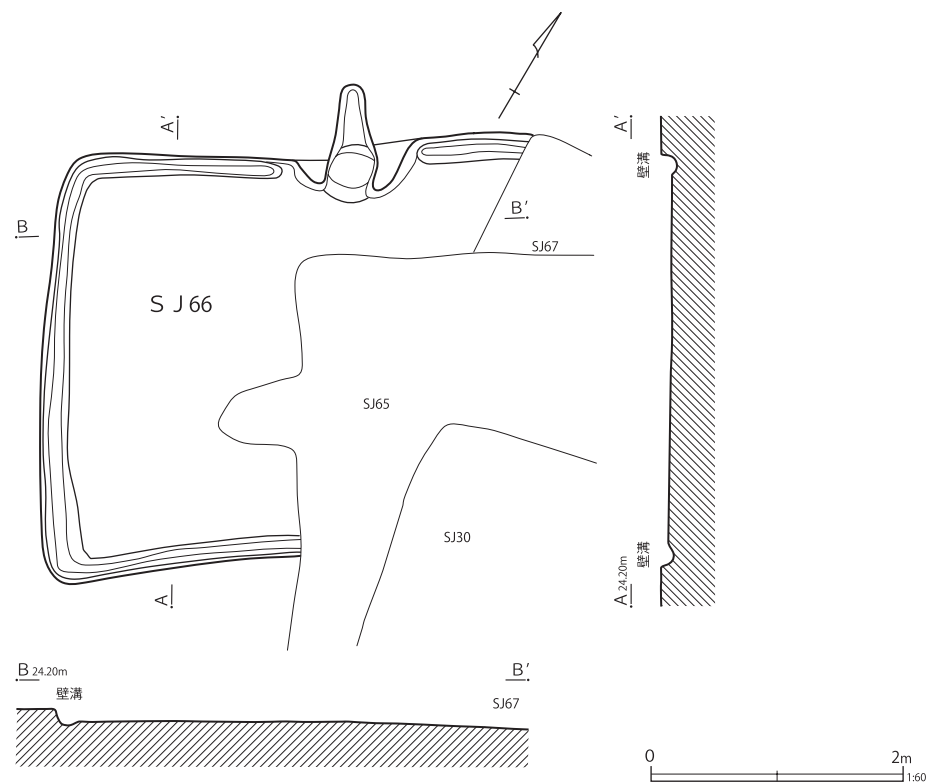


第 208 図 第 65 号住居跡出土遺物

第 207 図 第 65 号住居跡

第 64 表 第 65 号住居跡出土遺物観察表（第 208 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	—	[1.3]	—	EH	10	不良	灰黄褐	A 回転糸切り 天井部径 (6.0) cm	77-1



S J 66

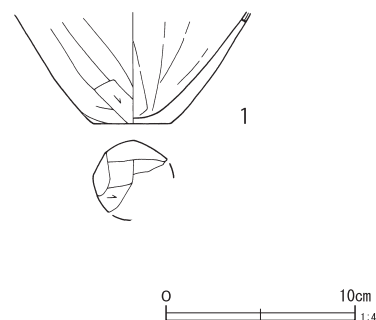
1 褐灰色土 しまり弱 粘性弱 土器破片を含む 焼土粒子を微量含む 炭化物を含む

第 209 図 第 66 号住居跡

－Wを指す。

大部分が削平されており、覆土は検出されなかった。壁溝は、壁の直下に掘り込まれており、検出した限りではカマド部分を除いて全周する。幅は0.12～0.17mで、深さは0.05m前後である。ピット、貯蔵穴は検出されなかった。

カマドは北壁に設けられており、北壁のほぼ中央に位置する。燃焼部は、住居跡の壁より内側に位置する。煙道部は一部削平されていると考えられる。カマドの全長は0.93mである。燃焼部は方形の掘り込みで、住長さは0.45m、幅は0.41mで、床面からの深さは0.02mである。煙道は長さ0.48mで、幅は先端に向かって細くなる。袖は、両袖



第 210 図 第 66 号住居跡出土遺物

とも検出され、地山を掘り残して作られていた。

出土遺物は、第210図に示した。土師器甕の底部である。

遺構の時期は、第65号住居跡と同様の理由から、9世紀前半以前と考えられる。

第 65 表 第 66 号住居跡出土遺物観察表（第 210 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	—	[5.9]	4.0	CHI	20	普通	橙	カマド・一括	60-1

第67号住居跡（第211図）

M-17グリッドで検出した。第30・65・66号住居跡、第12号溝跡と重複し、第30・65号住居跡より古く、第12号溝跡より新しい。第66号住居跡との新旧関係は捉えられなかった。南半分は第30号住居跡と第65号住居跡によって壊されている。

平面形は方形ないしは長方形と思われる。規模は、南北辺が残存値で1.90mであり、東西辺が2.72mである。深さは0.16mである。西辺を基準とした主軸方位はN-4°-Wを指す。

遺構の上部が削平されていたため、検出面で既に大部分が失われており、住居跡の覆土は確認できなかった。

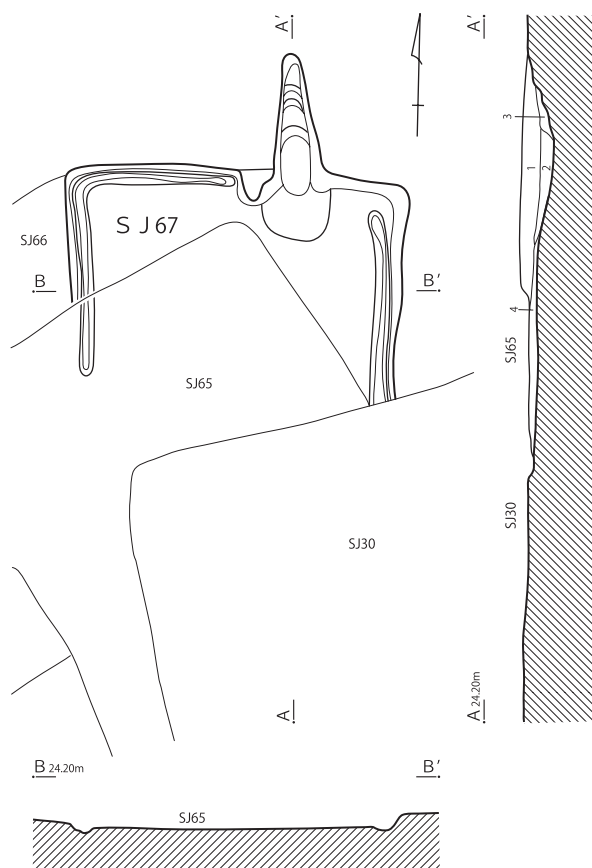
壁溝は、検出された限りで、カマドの右側以外ほぼ全周する。幅は0.07～0.13mで、深さは0.04m前後である。ピット、貯蔵穴は検出されなかった。第65号住居跡との重複範囲においても、壁溝の掘り込みは一部遺存していた。

カマドは北壁の東寄りに設けられていた。燃焼部の中間に住居の壁がかかるものである。カマドの規模は、全長1.49mである。

燃焼部は、隅丸長方形の掘り込みで、長さ0.90m、幅0.38m、床面からの深さは0.16mである。焚口部はごく緩い傾斜で住居の床面まで上がる。奥は高さ5cmほどの段を介して煙道に続く。煙道は先端に向かって階段状に浅くなる。段は高さ5cm前後で平坦面は10～15cmである。検出面まで3段を有する。煙道の長さは0.59mで、幅は燃焼部との境が0.32mで、先端に向かって細くなる。

カマドの覆土は、第1層は炭化物粒子を多量に含む褐灰色土で、天井の崩落土と考えられる。第3層は、炭を主体とするカマド使用時の堆積層である。燃焼部の手前には第3層の堆積が認められず、使用后、灰を掻き出すなどの手入れが行われていたためと推察される。

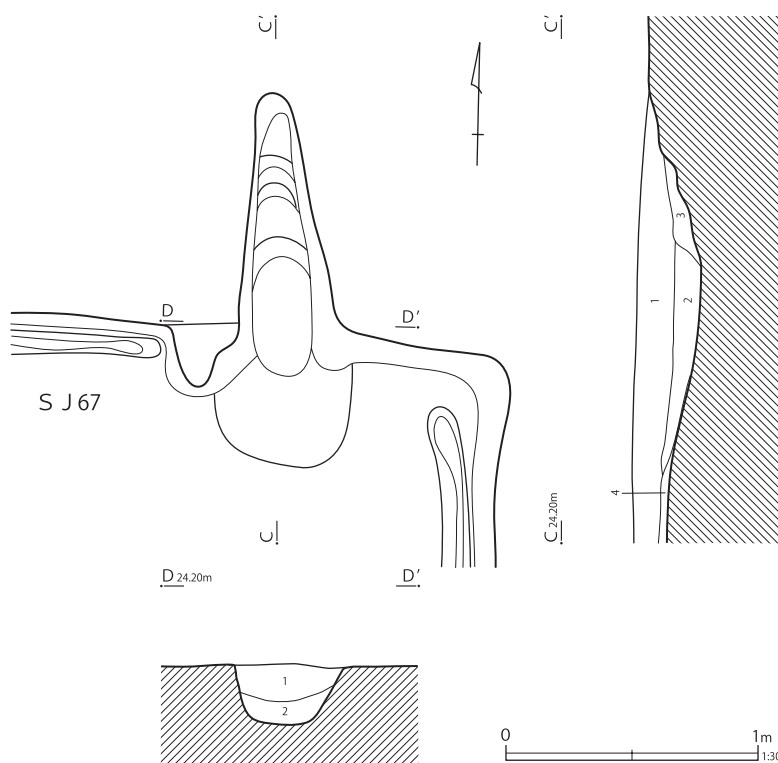
袖は、粘土を貼り付けて作られており、左袖が0.25mほど検出された。右袖は基部が僅かに掘り



S J 67

- | | | | | |
|--------|-------|------|---------------|----------|
| 1 褐色土 | しまりあり | 粘性あり | 炭化粒子多量含む | 天井崩落土 |
| 2 褐色土 | しまりあり | 粘性あり | 地山粒子多量含む | 炭化粒子微量含む |
| 3 黒色土 | しまりあり | 粘性あり | 炭化粒子・地山粒子多量含む | 灰層 |
| 4 黒褐色土 | しまりあり | 粘性あり | 炭化粒子・地山粒子多量含む | |

0 2m 1:60



0 1m 1:30

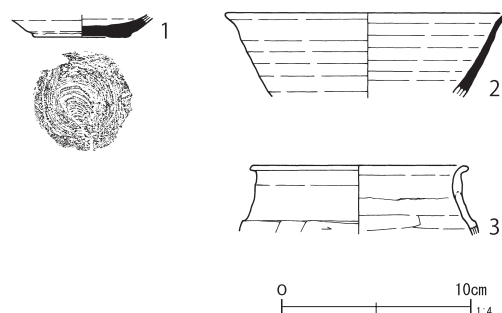
第 211 図 第 67 号住居跡

残されていたのみである。

出土遺物は、第212図に示した。1・2は須恵器であり、1が坏、2が埴である。3は、土師器の甕である。

1は、底部の破片である。回転糸切り後に、周辺にヘラケズリが施されるが、体部下端は無調整である。胎土は含有物が少なく、2mm程度の石英、黒色粒子が少量含まれる。2は、体部の破片である。口縁部端部が外反する。胎土は、含有物が多く粗い印象を受ける。2～4mm程度の石英、黒色粒子の混入が目立つ。器面の磨滅が著しい。

3は、口縁部の破片である。磨滅が少なく、器面の遺存状態は良好である。口縁部には、強いヨコナデが施され、胴部との接続部には、明瞭な稜が作られる。口縁部端部は外反し口唇部は水平に



第 212 図 第 67 号住居跡出土遺物

近い。胎土は精緻であり、ごく微細な赤色粒子が多量に混入する。

遺物の出土量は少なく、いずれも小破片であったため、時期は不明である。

遺構の時期は重複関係から、9世紀前半と考えられる。

第 66 表 第 67 号住居跡出土遺物観察表（第 212 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	—	[1. 2]	5. 0	E I K	80	普通	褐灰	一括 底部回転糸切り	77-2
2	須恵器	埴	(14. 7)	[4. 5]	—	E K	10	普通	灰黄褐	一括	77-2
3	土師器	甕	(11. 2)	[3. 6]	—	E H	10	普通	橙		77-2

第70号住居跡（第213図）

L-17グリッドで検出した。第26・78・84号住居跡、第32号溝跡と重複し、第26号住居跡より古く、他の遺構より新しいと思われる。住居跡の大部分を第26号住居跡によって壊されており、残存しているのはカマドと西壁周辺である。

ごく狭い範囲に、10軒程度の住居跡が激しく重複していたため、検出は非常に困難で、遺構の遺存状態も極めて悪かった。

平面形は、カマドの軸方向に長い長方形である。規模は、南北方向が2.98m、東西方向は約2.00mである。深さは0.10m前後である。西辺を基準とした主軸方位はN-24°-Eを指す。

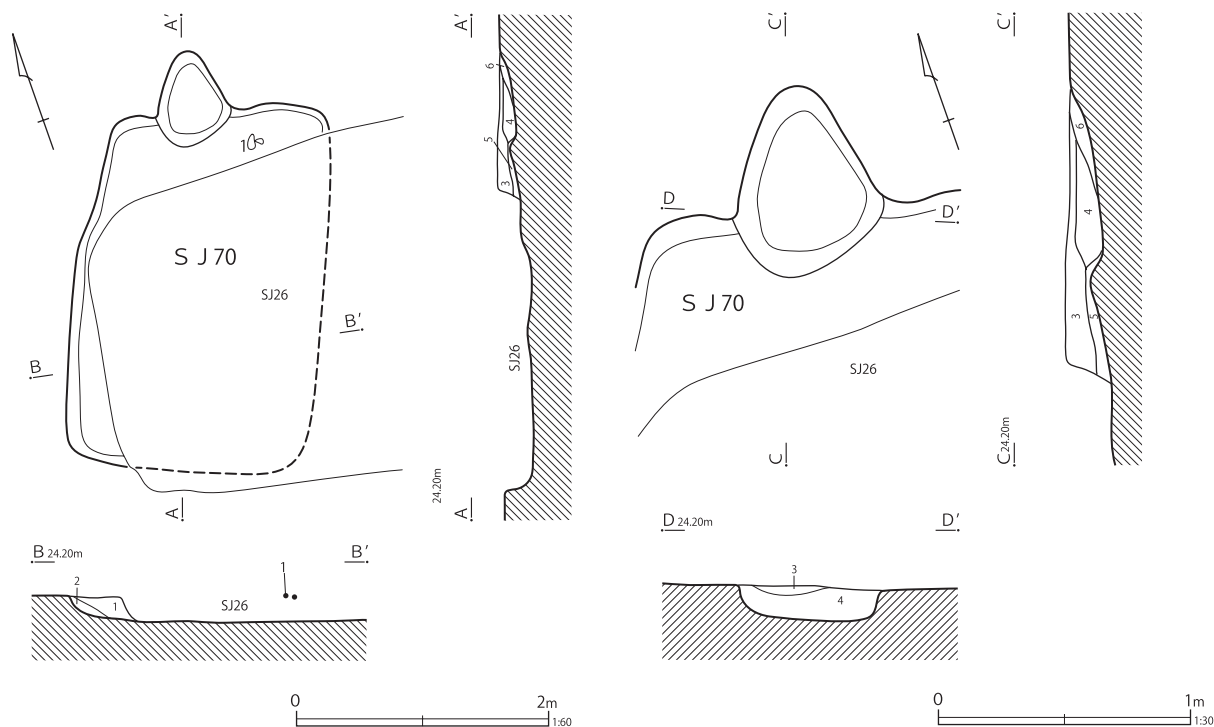
西側の壁際でわずかに検出された覆土は、褐色土を主体とする。壁はなだらかに立ち上がるが、

土層断面から、壁の崩落が認められる。壁溝、ピット、貯蔵穴は検出されなかった。

カマドは北壁の中央からやや左寄りに設けられていた。燃烧部は住居の壁より外側に出るものと考えられる。煙道は削平されて消失している。燃烧部の平面形は三角形を呈し、長辺は0.77m、短辺は0.58mである。

カマドの覆土は、炭を主体とする第3層が、カマド使用時の堆積層と考えられる。袖は検出されなかった。土層断面から、第3層下に堆積する第4～6層は、カマド掘り方の埋め土か、カマドの壁の崩落土と考えられる。

床面が不明瞭であったため、カマド前面周辺は床面より深く掘削してしまった可能性が高い。第3層下面を燃烧部の底面と仮定すると、焚口部は



SJ70

- | | |
|---------|--|
| 1 暗褐色土 | しまりややあり 炭化粒子・焼土粒子混入 |
| 2 暗褐色土 | しまりややあり 焼土ブロック・炭化粒子を含む 灰褐色粘土ブロック混入 |
| 3 黒褐色土 | 炭層 焼土ブロック少量含む |
| 4 灰黄褐色土 | 粘質シルト しまりあり 粘性やや弱 焼土粒子微量含む 地山粒子多量含む |
| 5 褐灰色土 | 粘質シルト しまり強 粘性あり 地山ブロック含む 焼土粒子・炭化粒子微量含む |
| 6 褐色土 | 粘質シルト しまりややあり 粘性やや弱 地山粒子少量含む |

第 213 図 第 70 号住居跡

第3層下面の位置から床面まで立ち上がるものと考えられ、焚口部の掘り込み開始位置はさらに住居側に入るものと考えられる。

出土遺物は、第214図に示した。須恵器の坏である。胎土は、4mm程度の石英の混入が目立つ。角閃石をごく微量含む。

遺構の時期は、第26号住居跡との重複関係から、9世紀前半以前と考えられる。



第 214 図 第 70 号住居跡出土遺物

第 67 表 第 70 号住居跡出土遺物観察表（第 214 図）

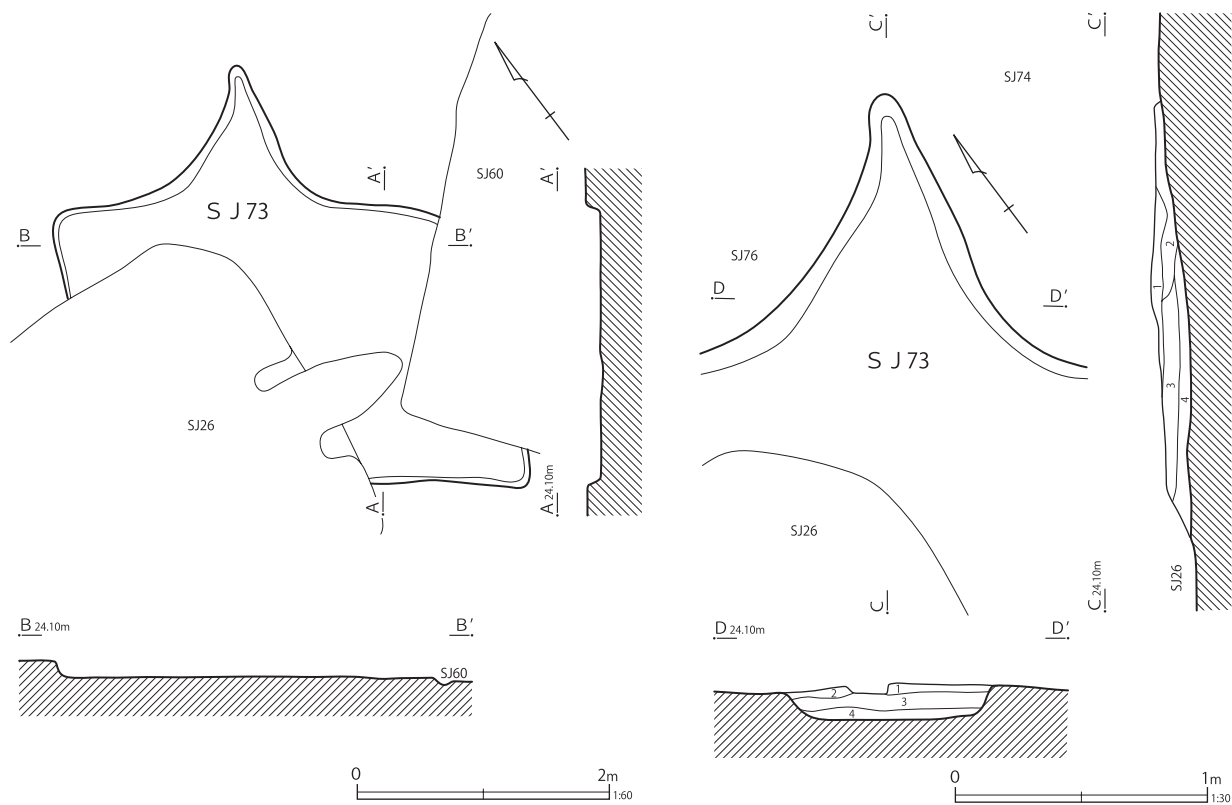
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(13.6)	3.8	(6.8)	C E H	30	普通	灰	S J 26 No.1 損壊後二次被熱 底部回転糸切り?	60-2

第73号住居跡（第215図）

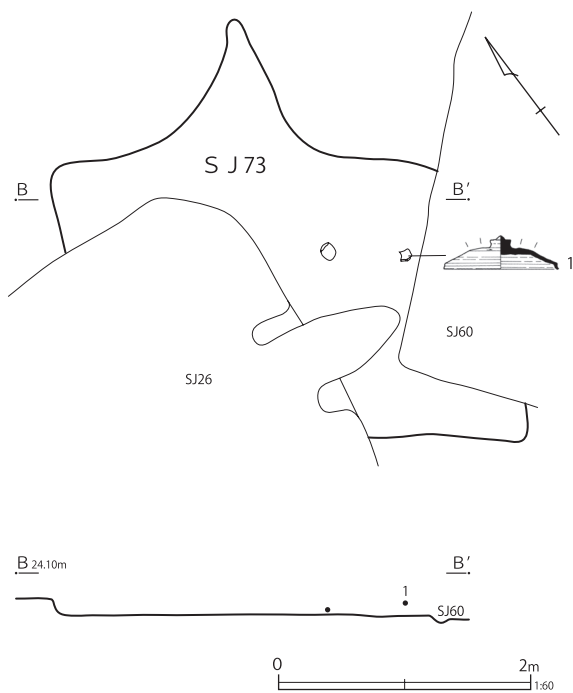
L-17グリッドで検出した。第26・60・70・74・75・76・78・84号住居跡、第32号溝跡と重複し、第26・60号住居跡より古く、第74・84号住

居跡、第32号溝跡より新しい。

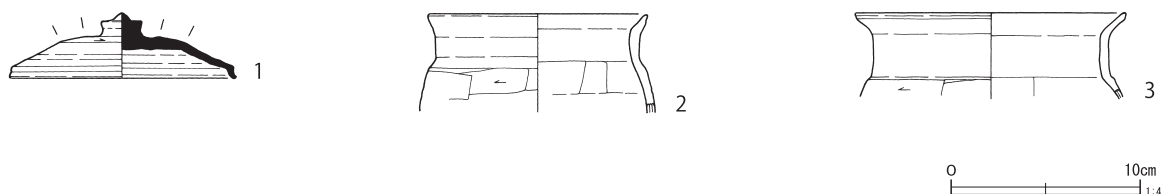
東側は第60号住居跡、南西側は第26号住居跡によって、大きく壊されている。重複が激しく、検出は非常に困難であった。



- S J 73
- | | | | | | | |
|-----------|--------|-------|-----------------|--------------|---------------|----|
| 1 黒褐色土 | しまりやや強 | 粘性やや強 | 炭化物微量含む | 白色粒子微量含む | 焼土ブロックやや多量に含む | 煙道 |
| 2 にぶい黄褐色土 | しまりやや強 | 粘性やや強 | 白色粒子微量含む | | | |
| 3 灰黄褐色土 | しまり強 | 粘性やや強 | 赤褐色ブロック少量含む | 白色粒子・炭化物微量含む | | |
| 4 黒褐色土 | しまりやや強 | 粘性やや強 | 灰白色ブロック・炭化物少量含む | 白色粒子微量含む | | |



第 215 図 第 73 号住居跡・遺物出土状況



第 216 図 第 73 号住居跡出土遺物

第 68 表 第 73 号住居跡出土遺物観察表（第 216 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(11.7)	2.9	—	D J K	30	普通	灰	No. 4 つまみ径 2.2 cm 南比企産	60-3
2	土師器	甕	(11.4)	[5.2]	—	C G H I	20	普通	橙	一括	77-2
3	土師器	甕	(14.2)	[4.5]	—	C E G H I	20	普通	にぶい褐		77-2

平面形は、カマドの軸に対して横長の長方形である。規模は、長軸が3.88m、短軸は2.22mで、深さは0.17mである。カマドの軸を基準とした主軸方位はN-39°-Eを指す。

覆土は検出できなかった。また、壁溝、ピット、貯蔵穴も確認できなかった。

北壁の中央周辺においてわずかな焼土の広がりが見出されたため、カマドと考えたが、平面形はかなり不整形であり、燃焼部の掘り込みは殆ど確認できなかった。

カマドの覆土には、灰や炭などからなる使用時の堆積物層は認められなかった。第4・5層は、灰白色土ブロックを含む黒褐色土であり、灰白色土は、カマドの構築材に由来する可能性もわずかながら考えられる。

遺物は、土師器甕、須恵器蓋などが少量出土した。いずれも小破片である。

出土遺物は、第216図に示した。1は、須恵器の蓋であり、2・3は、土師器の甕である。

1は、床面から出土した。つまみを有する。つまみは扁平な擬宝珠形であり、口縁部は短く屈曲する。蓋の天井部は丁寧にナデられており、切り離し痕は認められない。胎土は含有物が少なく、

白色針状物質が微量含まれる。良く焼き締まる。南比企産である。

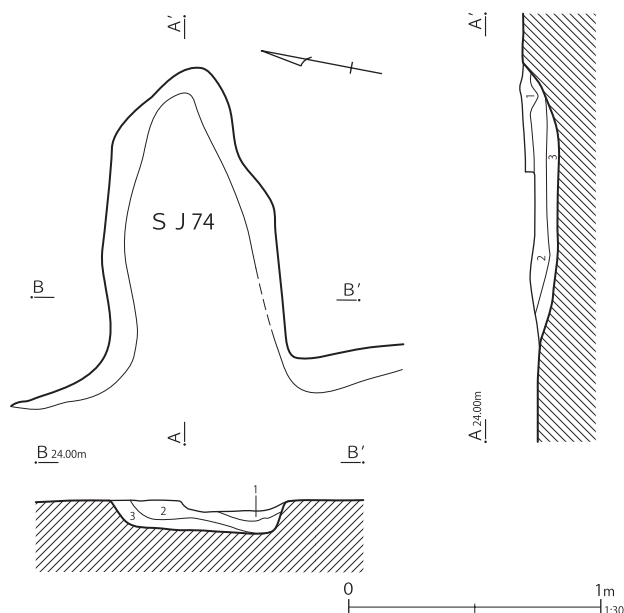
2・3は、口縁部の破片である。2は、やや厚手である。口縁部に強いヨコナデが施され、胴部との接続部に稜が認められる。胎土は、微細な赤色粒子の混入が目立つ。3は、口縁端部に強いナデが施され、端部外面には沈線上の工具の当たりが認められる。胎土に、微細な白色粒子と、砂粒子を多量に含む。

第74号住居跡（第217図）

L-17グリッドで検出した。第60・73・75号住居跡と重複する。第60・73号住居跡より古く第75号住居跡より新しいと思われる。第26・76・78・84号住居跡とも重複するが、第74号住居跡の遺存状態が悪く新旧関係は不明である。

残存していたのはカマド部分のみである。カマドの右側は第60号住居跡によって壊されており、左側は削平され消滅していた。

カマドは東壁に構築されていたと考えられる。検出したのは燃焼部の底面付近のみに限られる。燃焼部は長方形の掘り込みと考えられる。煙道は削平されて、確認できなかった。残存する規模は、長辺1.33m、短辺0.72mであり、深さは約0.1m



S J 74
 1 にぶい黄褐色土 しまりやや強 粘性やや強 焼土ブロック多量に含む
 炭化物少量含む
 2 灰黄褐色土 しまりやや強 粘性やや強 白色粒子微量含む
 3 黒褐色土 しまりやや強 粘性やや強 白色粒子微量含む

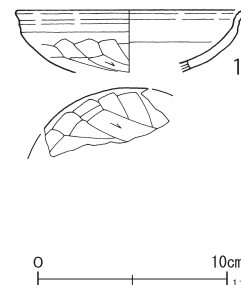
第 217 図 第 74 号住居跡

である。

カマドの覆土は、第1層が焼土ブロックを多量に含んでいるものの、灰や炭からなるカマド使用時の堆積物層は認められなかった。カマド上部を大きく欠損するためと考えられる。

カマドの底面からはピットが検出されたが、第75号住居跡にともなうものと判断した。

出土遺物は、土師器坏などの小片が、少量出土した。出土遺物は、第218図に示した。土師器の



第 218 図 第 74 号住居跡出土遺物

坏である。1は、口縁部がまっすぐに立ち上がり、端部は外反する。底部は、ヘラケズリによって成形される。口縁部にはヨコナデが施される。内面はナデによって滑らかに仕上げている。胎土には、微細な含有物が多いものの、器面はなめらかである。

遺物は、8世紀後半のものと考えられるが、前述のとおり遺構の重複がかなり激しく、第74号住居跡の時期を示すものであるかは不明である。

第 69 表 第 74 号住居跡出土遺物観察表（第 218 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.8)	[3.3]	—	C G H K	15	普通	にぶい橙	一括	77-2

第75号住居跡（第219図）

L-17・18グリッドで検出した。第60・73・74・76号住居跡と重複し、第60・73・74号住居跡より古い。第76号住居跡との新旧関係は不明である。東側から南側にかけて、重複する住居跡によって壊されている。

平面形は方形ないしは長方形と推定される。規

模は、北東辺が4.17mであり、北西辺は残存値で1.98mである。深さは0.10m前後である。西辺を基準とした主軸方位はN-47°-Eを指す。

遺構の上面は削平されており、貼床、あるいは掘り方の埋土が露出していると思われる。覆土は、黄褐色土が主体である。

床面からは、壁溝、ピット、貯蔵穴が検出され

た。壁溝は、壁の直下に掘り込まれており、西壁の一部で検出された。幅0.17～0.23m、深さは0.03m前後である。

貯蔵穴はカマド右側に位置し、平面形は不整円形である。規模は直径0.40m、深さは0.11mである。覆土は、暗褐色土を主体とする。土師器甕の破片が出土した。

ピットは1基を検出した。P 1は第60号住居跡の床面で検出した。また、カマド底面でピットを1基検出したが、こちらはグリッドピットとして扱った。平面形はいずれも楕円形で、深さは、0.15～0.37mである。

カマドは北東壁の中央からやや右寄りに設けられていた。住居の壁が燃焼部の中間に位置する。

第70表 第75号住居跡出土遺物観察表（第220図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(15.8)	[6.4]	—	C E G H I	10	普通	にぶい褐	貯穴	77-2

第76号住居跡（第221図）

L-17グリッドで検出した。第73・74・75・84号住居跡と重複する。第84号住居跡より新しく、他の住居跡より古いと思われる。

遺構の重複が極めて激しく、平面プランの確認が困難であった。第76号住居跡も、検出面においては確認できず、重複する第73・74号住居跡を掘削中に、焼土を含むピット状の落ち込みが検出され、カマドの存在が認識できた。重複するいずれかの住居跡に伴うカマドの可能性もあるが、検出状況からは判断できなかった。

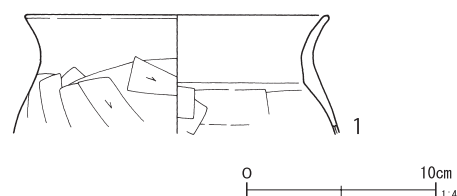
遺構の遺存状態は極めて悪く、確認できたのはカマドの一部に限られる。カマドの上部も削平が激しく、燃焼部の使用面はすでに消失していると考えられる。

残存していたのは長さ0.87m、幅0.45mで、検出面からの深さは0.14mである。北西側の楕円形の掘り込みを煙道、南東側の不正円形の掘り込みを燃焼部掘り方と捉えておきたい。

残存する長さは1.02mである。燃焼部の幅は0.37m、深さ0.12mである。袖は地山の掘り残しで、基部がわずかに遺存していた。

出土遺物は、第220図に示した。土師器の甕である。1は、口縁部の破片でやや厚手である。胎土には、角閃石と白色粒子を多量に含む。

出土遺物が少なく、遺構の残存状態もきわめて不良であったため、時期は不明である。



第220図 第75号住居跡出土遺物

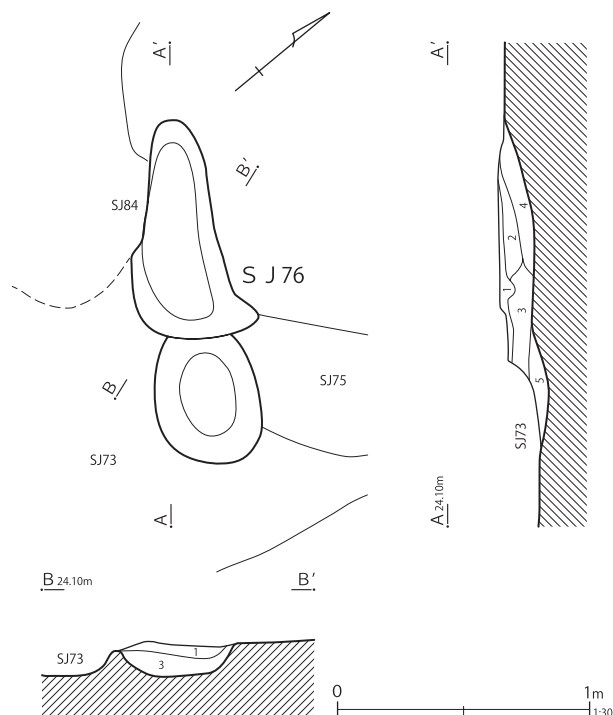
煙道部を埋める、第1～4層は、焼土ブロック、炭化物粒子を含んでおり、カマドの壁や、カマド使用時の灰炭層の二次的な堆積に由来するものと考えられる。第1層は、焼土ブロックを少量含む灰黄褐色土である。第1層の検出によって、本遺構の存在が認識された。第5層は、炭化物粒子を少量含む黒褐色土で燃焼部掘り方の埋め土である。

出土遺物は、第222図に示した。土師器の坏である。体部はやや外反して立ち上がる。器壁は薄く、底部はヘラケズリによって成形される。体部下端に指頭痕が認められる。体部上位にはヨコナデが施される。内面はヘラナデによって滑らかに仕上げている。胎土には、微細な含有物を多量含む、角閃石の混入が目立つ。

第78号住居跡（第223・224図）

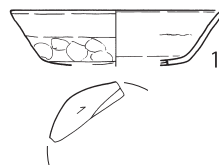
L-17グリッドで検出した。第26・70・73・83・84号住居跡と重複する。第26・70号住居跡より古く、他の住居跡よりは新しいと思われる。

住居跡の範囲は、殆どが本住居跡より新しい第



第 221 図 第 76 号住居跡

- S J 76
- | | | | |
|-----------|--------|-------|---|
| 1 灰黄褐色土 | しまりやや強 | 粘性やや強 | 白色粒子微量含む |
| 2 にぶい黄褐色土 | しまりやや強 | 粘性やや強 | 焼土ブロック少量含む カマド煙道
白色粒子微量含む カマド煙道 |
| 3 褐灰色土 | しまりやや強 | 粘性やや強 | 白色粒子微量含む |
| 4 黒褐色土 | しまりやや強 | 粘性やや強 | 白色粒子・炭化物微量含む |
| 5 黒褐色土 | しまりやや強 | 粘性やや強 | カマド煙道
しまりやや強 粘性やや強 白色粒子微量含む
炭化物少量含む |



第 222 図 第 76 号住居跡出土遺物

第 71 表 第 76 号住居跡出土遺物観察表 (第 222 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.2)	[2.9]	(7.2)	C I K	5	普通	にぶい黄橙	カマド	77-2

26号住居跡と重複しており、上面はかなり削平されている。特に、南東隅は第26号住居跡のカマド燃焼部の掘り込みによって失われている。

平面形は、カマドの軸方向に対して縦長の長方形を呈する。規模は、長軸3.13m、短軸2.73mで、残存する深さは0.09mである。南東辺を基準とした方位はN-65°-Eを指す。

第1層が住居跡の覆土に相当し、カマドの土層断面から、床面は第1層下面と考えられる。灰褐色の粘質土ブロック多量に含む暗褐色土からなり、人為的に埋め戻された可能性も考えられる。

床面では、壁溝やピット、貯蔵穴は検出されなかったが、床面をやや掘り下げた段階で床下土壌と考えられる掘り込みを確認した。位置は、カマドの軸線上で中央よりやや西寄りである。平面形は不整楕円形である深さは0.16mである。覆土は黄褐色土が主体で、埋め戻されている。

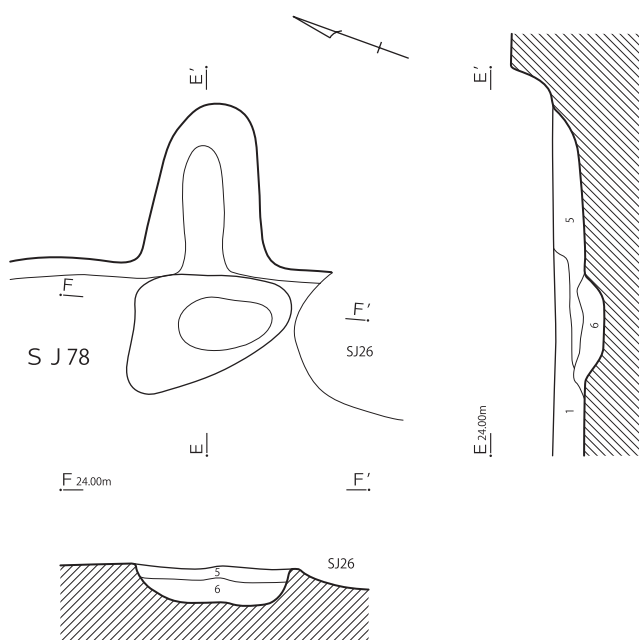
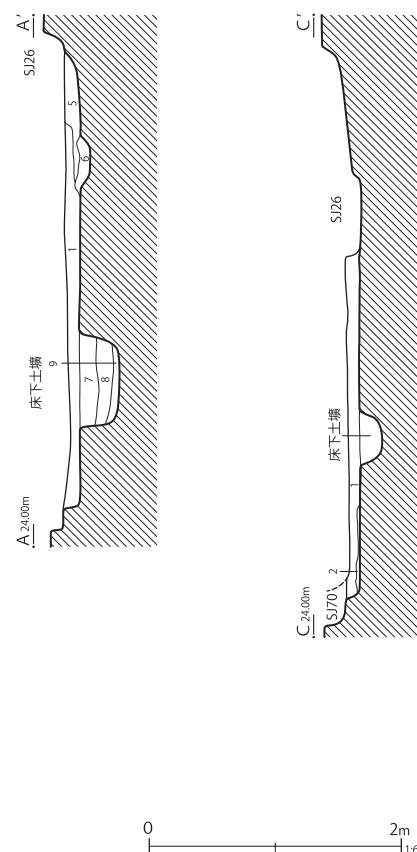
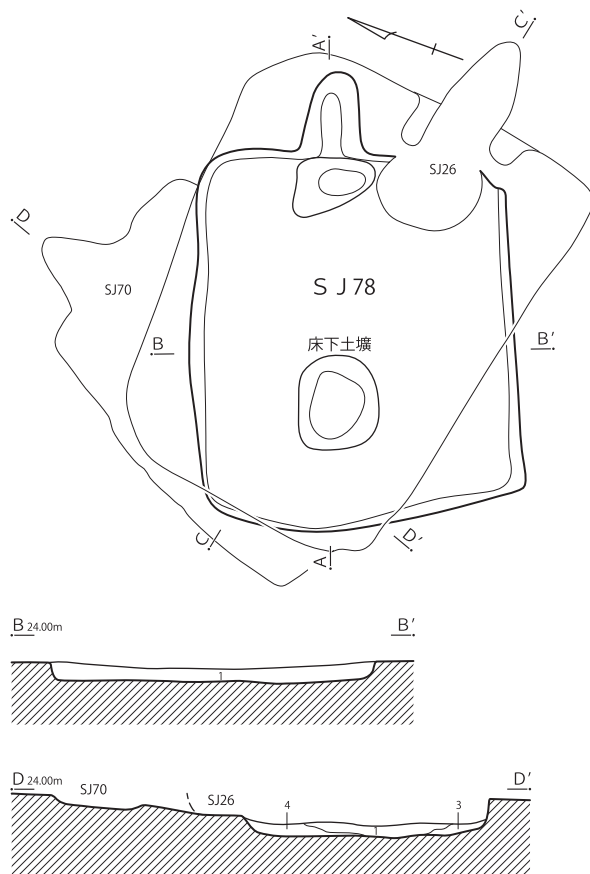
カマドは東壁の中央からやや北寄りに設けられていた。燃焼部は住居の壁にかかるものと思われる。煙道は、重複する遺構により削平されている。規模は、残存値で長さ1.17m、幅0.52mである。

カマドの覆土は、灰を多量に含む第5層が使用時の堆積層と考えられる。軸は検出されなかった。

出土遺物は、第225図に示した。1・2は須恵器の坏であり、3は土師器の坏である。

1は、口縁部の破片である。端部がわずかに外反する。胎土は、含有物の多い粗いもので、片岩を含む。末野窯産である。2は、底部の破片である。底部は回転糸切りである。胎土は、含有物が多く、2~4mm程度の黒色粒子と、石英の混入が目立つ。片岩をごく微量含む。末野窯産である。

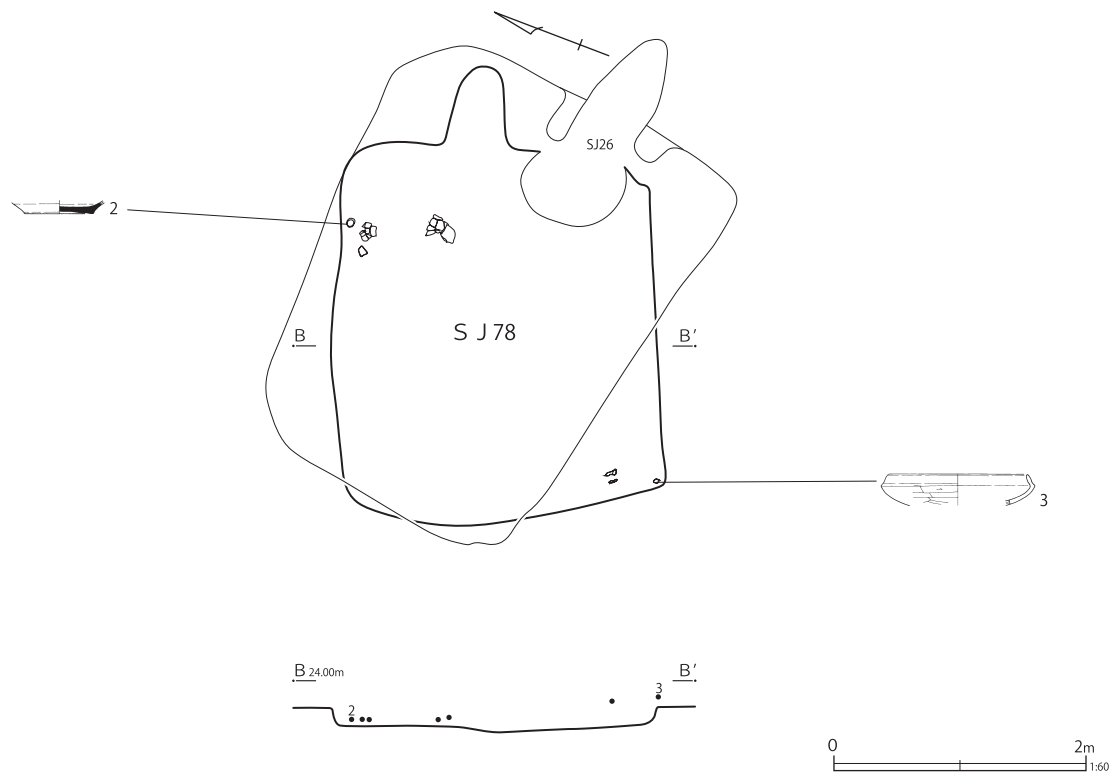
3は、体部が強く内湾しながら立ち上がる。底部はヘラケズリによって成形される。胎土は、含有物が少なく精緻である。



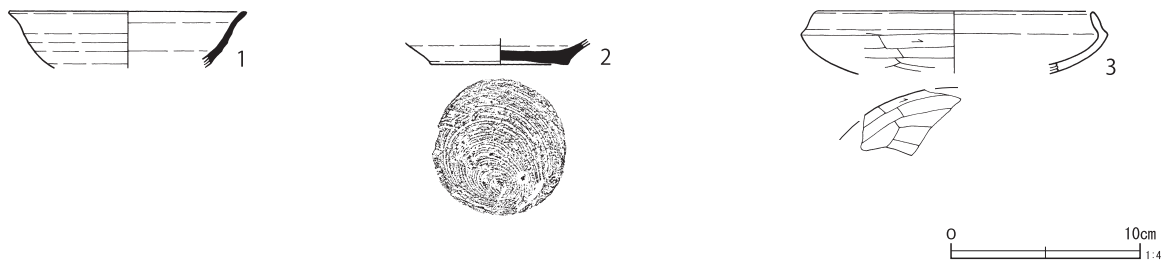
- S J 78
- | | |
|-----------|------------------------------------|
| 1 暗褐色土 | 灰褐色粘土ブロックを多量含む
炭化粒子・焼土粒子混入 |
| 2 褐灰色土 | しまりあり 粘性あり
灰褐色粘土を主体とする |
| 3 褐灰色土 | 粘質シルト しまりあり 粘性ややあり
地山ブロック多量含む |
| 4 にぶい黄褐色土 | 粘質シルト しまりややあり
粘性やや弱 地山大ブロック多量含む |
| 5 にぶい黄褐色土 | しまり強 粘性やや強 焼土少量含む
炭化物少量含む 灰多量含む |
| 6 灰黄褐色土 | しまりやや強 粘性やや強
灰白色土少量含む 焼土微量含む |
| 7 灰黄褐色土 | しまりやや強 粘性やや強
炭化物少量含む 白色粒子微量含む |
| 8 灰黄褐色土 | しまりやや強 粘性やや強
白色粒子微量含む 炭化物微量含む |
| 9 にぶい黄褐色土 | しまりやや強 粘性やや強
白色粒子微量含む |



第 223 図 第 78 号住居跡



第 224 図 第 78 号住居跡遺物出土状況



第 225 図 第 78 号住居跡出土遺物

第 72 表 第 78 号住居跡出土遺物観察表 (第 225 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(12.3)	[3.0]	—	BEH	25	普通	褐灰	A・カマド 末野産	77-2
2	須恵器	坏	—	[1.3]	7.2	BEH	80	普通	褐灰	底部回転糸切り 末野産	77-2
3	土師器	坏	(14.6)	[3.3]	—	CDGHI	10	普通	黒褐	No.5	60-4

第84号住居跡（第226図）

L-17グリッドで検出した。第26・70・73・76号住居跡と重複し、第84号住居跡が最も古いと思われる。重複する遺構に大部分を壊されており、残存しているのは住居跡北隅とカマドの一部だけである。

覆土と広がりから、西側の範囲を確認したが、覆土は薄く西側に行くにしたがって次第に消滅しており、推定した範囲よりさらに広がる可能性がある。

平面形は方形ないしは長方形と推定する。規模は、残存値で、東西方向が2.15m、南北方向は1.20mである。深さは最も深い所で0.06mである。北辺を基準とした主軸方位はN-64°-Eを指す。

カマドは東壁に設けられていたと思われるが、第73号住居跡によって大部分が壊されて詳細は不

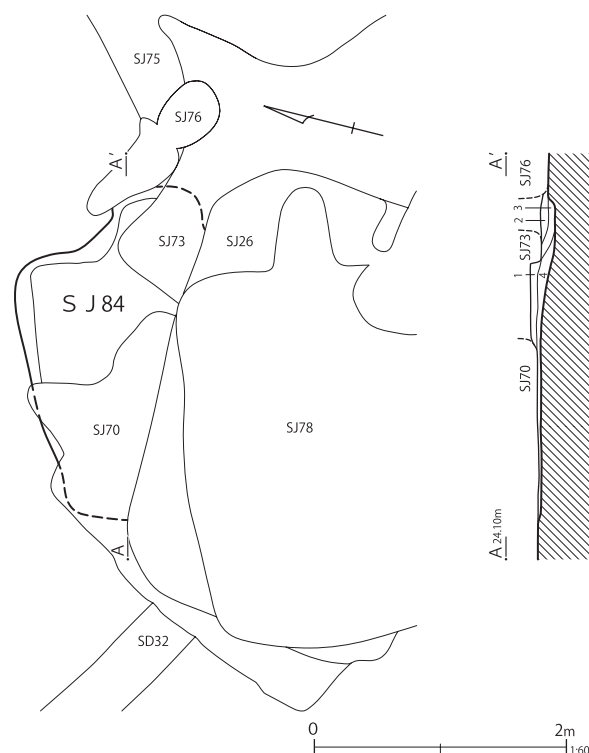
明である。第2層は、粘性のやや強い黒褐色土で、焼土ブロックをやや多量含んでいた。カマドの堆積物に由来する層の可能性が考えられる。

出土遺物は、第227図に示した。1は須恵器の坏であり、2は土師器の坏である。

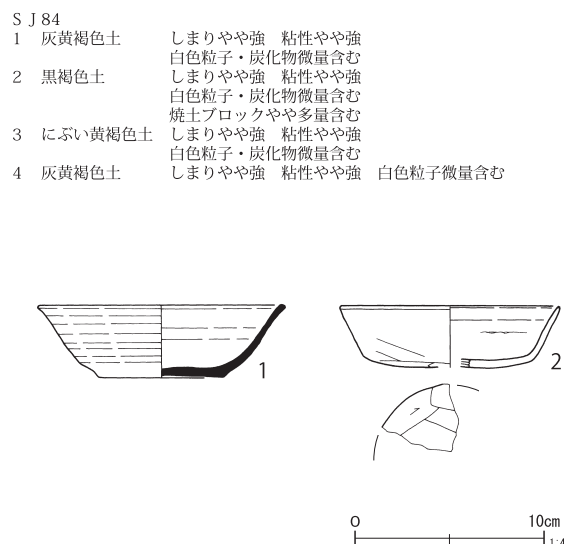
1は、口縁部端部がやや薄手であり、わずかに外反する。底部は回転糸切りで、体部下端にヘラケズリが施される。胎土には、極めて多量の白色針状物質を含む。焼成は不良で、にぶい黄橙色を呈する。南比企窯産である。

2は、カマドから出土した。器面の調整は不明瞭であるが、体部はヘラナデが施されるものと思われる。底部は、ヘラケズリによって成形される。胎土は、微細な含有物を多く含み、角閃石の混入が目立つ。

遺物は主に小破片であり、また、遺構の重複が激しいことから、時期は不明である。



第226図 第84号住居跡



第227図 第84号住居跡出土遺物

第73表 第84号住居跡出土遺物観察表（第227図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(12.8)	3.8	6.5	H J	40	不良	にぶい黄橙	一括 底部回転糸切り 南比企産	60-5
2	土師器	坏	(11.6)	[3.2]	—	C D E G	20	普通	橙	カマド	—

(2) 溝跡

第3号溝跡 (第228・229図)

N～Q-18、Q・R-17グリッドに位置する。南端は調査区外に延び、北端はN-18グリッドで東に屈曲し調査区外に続く。西側に第6号溝跡が並行しており、密接な関連があると考えられる。第11・12・13・55・79号住居跡、第1～3号掘立柱建物跡、第10・12号溝跡と重複し、調査時の所見では第3号溝跡が最も新しいと考えられる。

検出した長さは40.20mで、幅は0.44～2.54mである。深さは0.20～0.40mである。

断面形は逆台形である。底面は、ほぼ平坦で、南から北に向かって約0.1m低くなる。南側は底面に段差があり、溝を掘り直している可能性がある。

遺物は、土師器甕、須恵器坏・甕・瓶、灰釉陶器皿・埴などが出土した。

第6号溝跡 (第230～232図)

M・N-18、N～R-17グリッドに位置する。南端は調査区外に延び、北端はM-18グリッドで東に直角に曲がり、調査区外に続く。東側に第3号溝跡が並行しており、密接な関連があると考えられる。第10・12・14・21・22・31・42・64号住居跡、第3号掘立柱建物跡、第1号井戸跡、第10～12号溝跡と重複し、第1号井戸跡より古く、他の遺構より新しい。

検出した長さは51.50mで、幅は0.82～1.61mである。深さは0.58～0.79mである。

断面形は逆台形あるいは箱薬研状で、底面は南から北に向かって0.28m低くなる。

覆土は、褐灰色系の粘質土で、自然堆積と思われる。

遺物は、土師器坏、須恵器坏・甕、土錘などが出土した。

第10号溝跡 (第233・234図)

O～Q-17グリッドに位置する。北北西から南南東に延び南端は第3号溝跡、北端は第11号溝跡

で止まっている。第10・22・42・63号住居跡、第20・24号土壇、第1号周溝状遺構、第3・6号溝跡と重複している。住居跡および第1号周溝状遺構より新しく、第6号溝跡より古い。

検出した長さは28.70mで、幅は1.05～1.48mである。深さは0.17～0.29mである。断面形は逆台形である。底面は北から南に約0.2m低くなる。

覆土は、地山土を含む灰黄褐色もしくは褐色の粘質シルトで、自然堆積である。

遺物は、土師器や須恵器の破片が出土した。

第11号溝跡 (第235・236図)

M・N-18、O-16、N・O-17グリッドに位置する。北東から南西方向に延び、両端とも調査区外に続く。第19・20・62号住居跡、第1号井戸跡、第10号土壇、第6・12号溝跡と重複し、第1号井戸跡、第6号溝跡より古く、第19・20・62号住居跡より新しい。第10号溝跡は本遺構に接続していることから、同時に存在していたと考えられる。

検出した長さは28.40mで、幅は0.76～1.14mである。深さは0.25～0.34mである。

断面形逆台形で、底面は南西から北東に向かって0.20m低くなる。

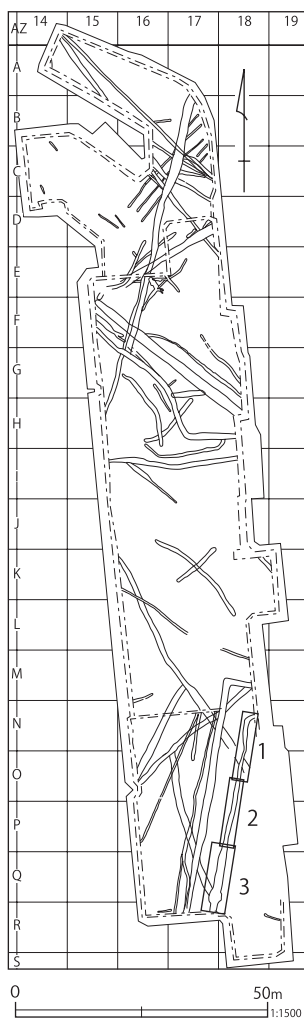
覆土は、灰色土ブロックを含む灰黄褐色である。

遺物は、土師器坏・甕、須恵器坏・甕などの破片が出土したが、住居跡との重複が多いため、これらの遺構からの流れ込みが多いと考えられる。

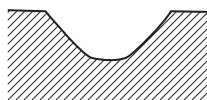
第17号溝跡 (第237図)

E～G-16、G-15グリッドに位置する。北北東から南南西に延び、南側は第20号溝跡で止まる。北側は、調査用の排水溝の北側で第18号溝跡と重なるようである。第13・18～20・30・31・47号溝跡と重複し、第18・30・31号溝跡より新しく、第13号溝跡より古い。

検出した長さは16.00mで、残存する幅は0.35～0.77mである。深さは0.13～0.25mである。断面形は皿形である。底面は北から南に向かって



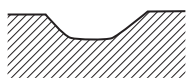
A 23.70m A'



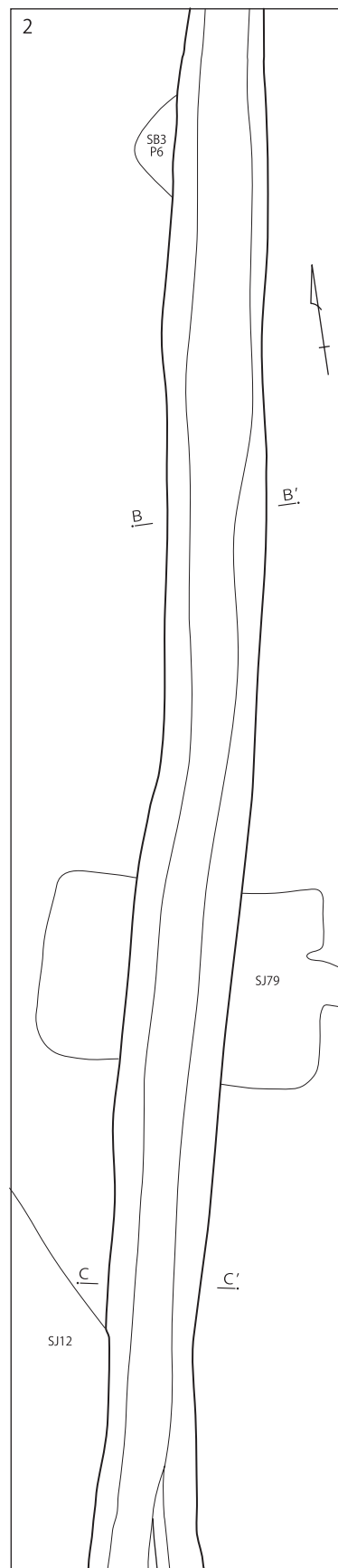
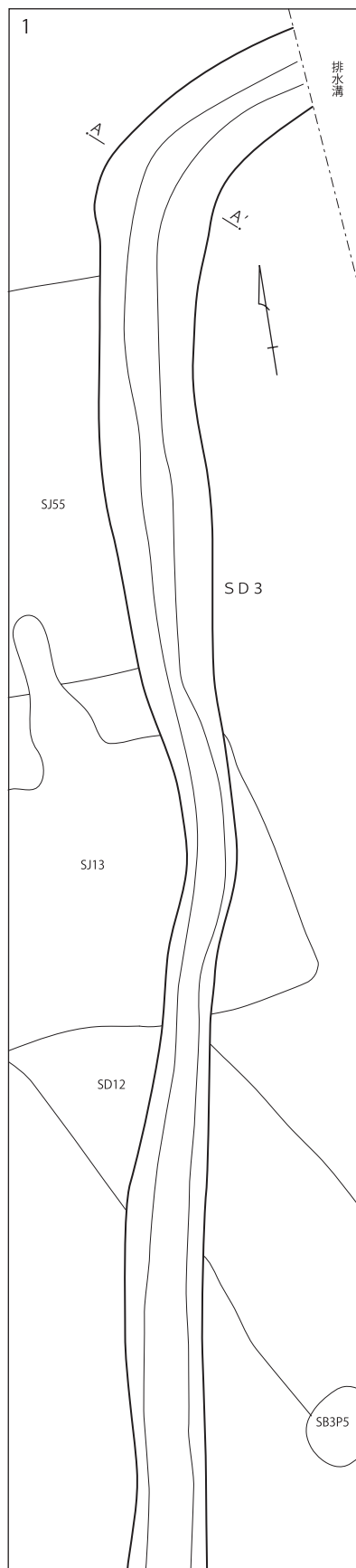
B 23.70m B'



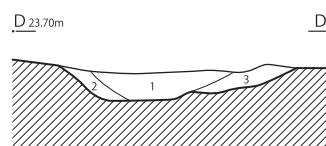
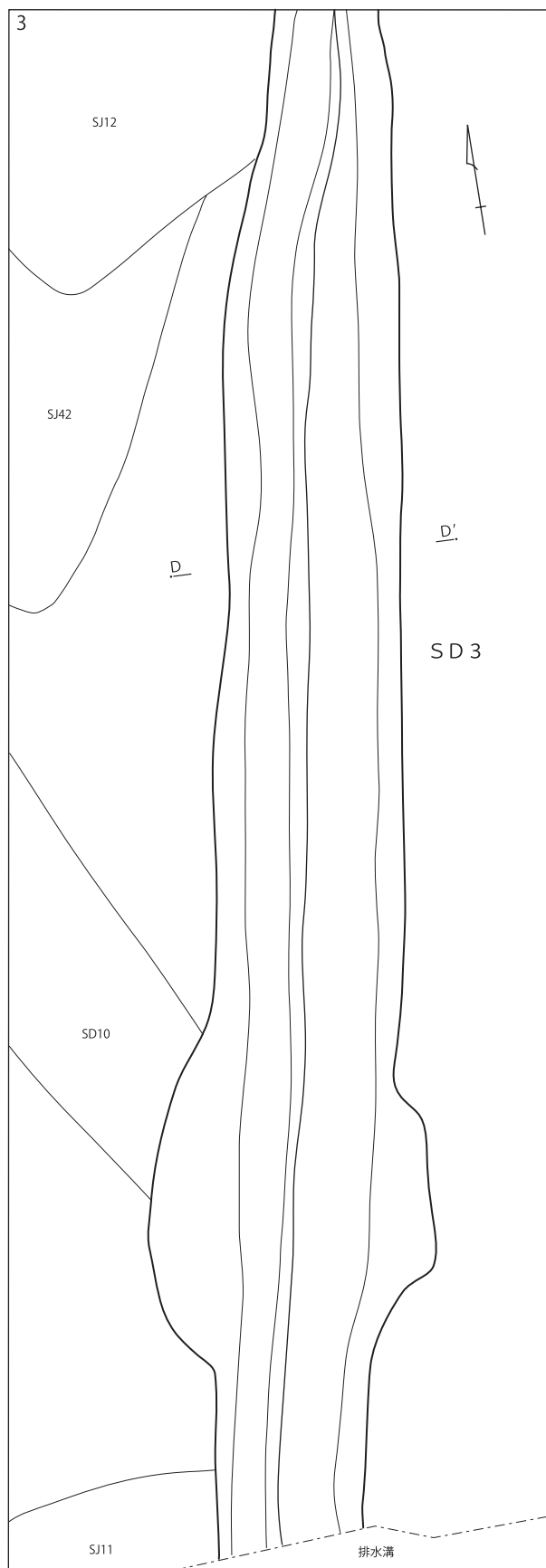
C 23.70m C'



0 2m 1:50



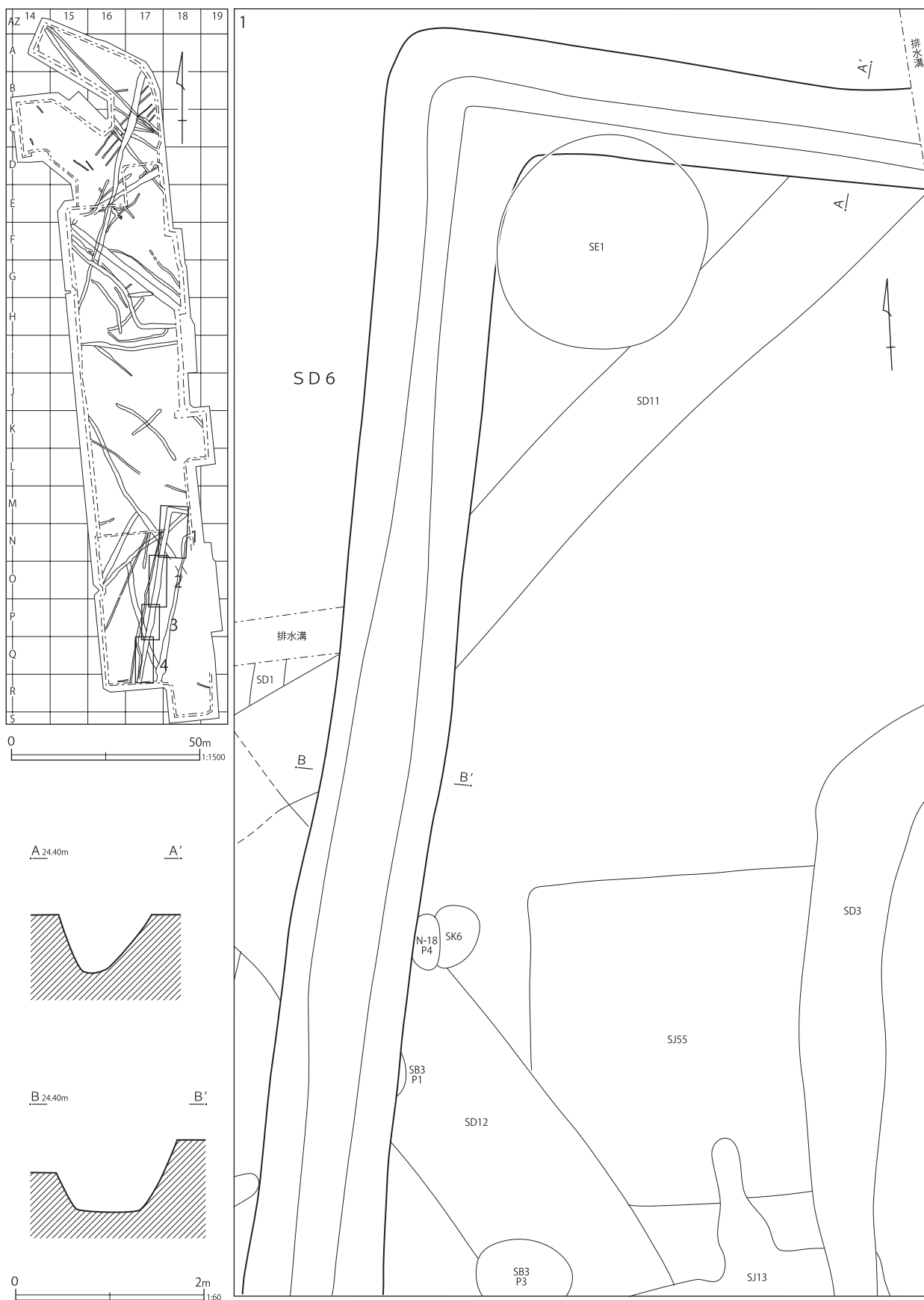
第 228 図 第 3 号溝跡 (1)



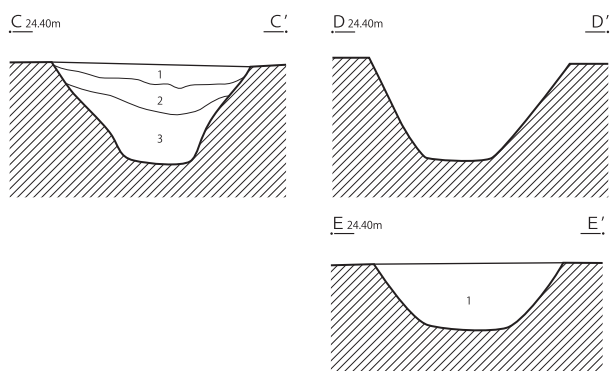
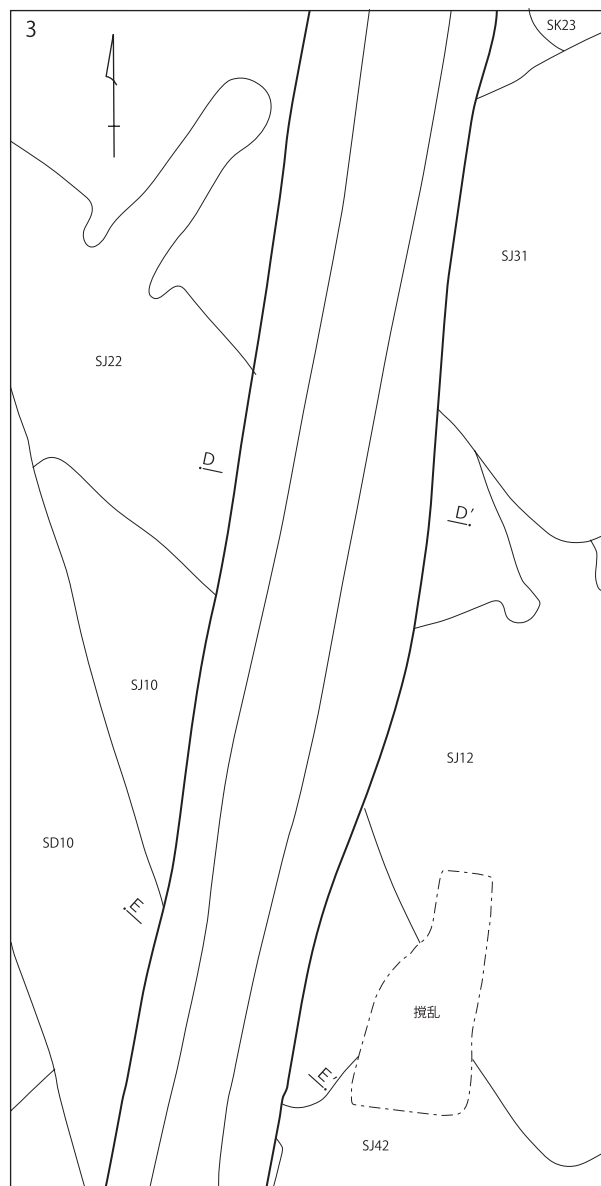
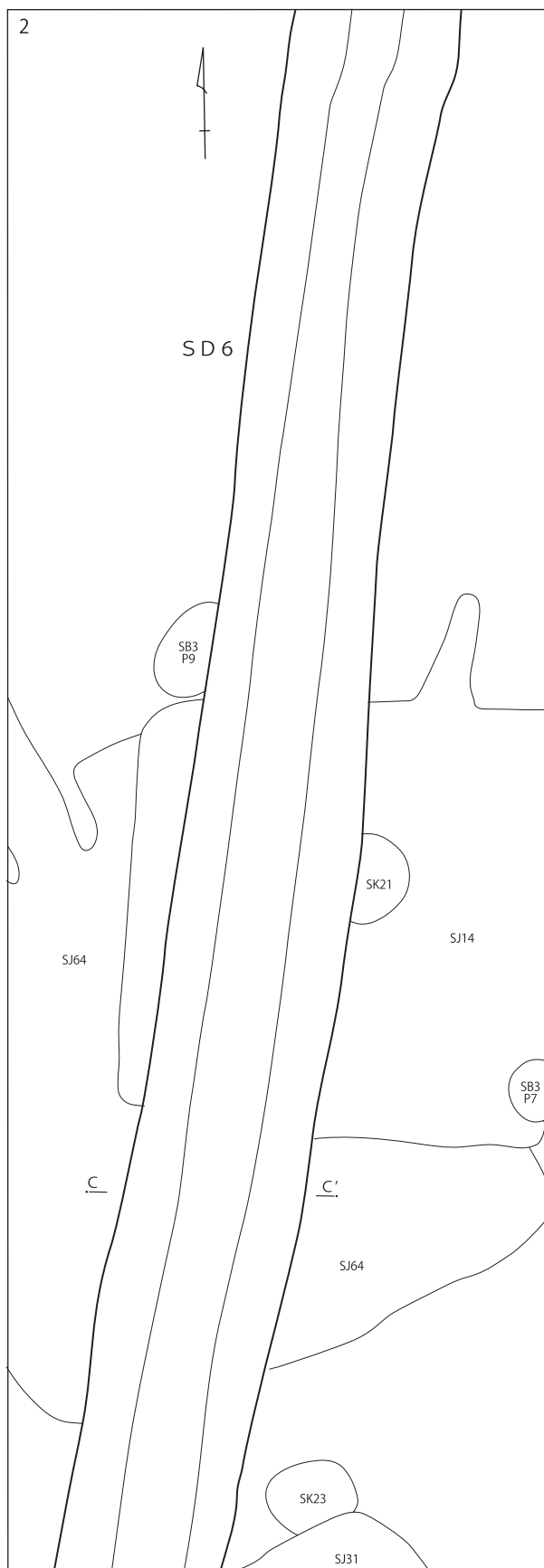
- SD3
- | | | | | | |
|---|------|-------|------|----------|----------------|
| 1 | 褐灰色土 | しまりあり | 粘性あり | 砂粒子少量 | マンガン多量含む |
| 2 | 褐灰色土 | しまりあり | 粘性あり | マンガン多量含む | 壁の崩落土を主体とする |
| 3 | 褐灰色土 | しまりあり | 粘性あり | マンガン多量含む | 壁の崩落土をブロック状に含む |



第 229 図 第 3 号溝跡 (2)



第 230 图 第 6 号沟迹 (1)

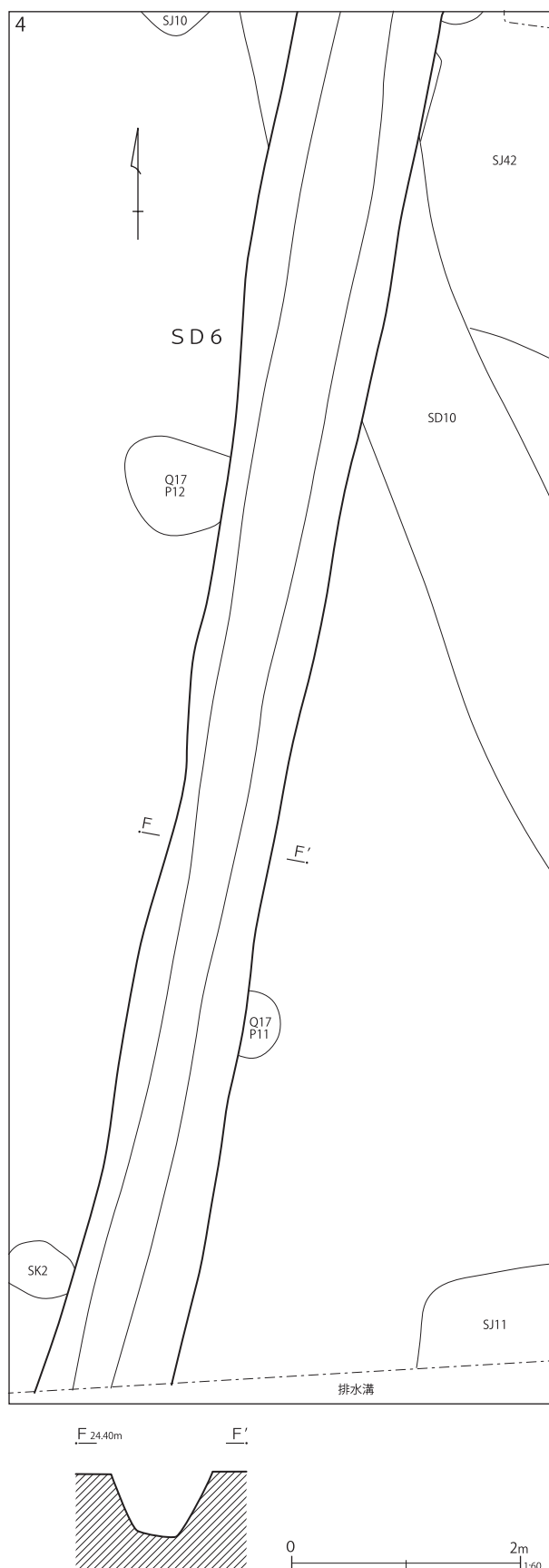


SD 6

1 褐灰色土	しまり強	粘性あり	白色粒子含む	全体にマンガン多量含む
2 灰黄褐色土	しまり強	粘性あり	白色粒子多量含む	全体にマンガン多量含む
3 褐灰色土	しまりあり	粘性強	黒色粒子少量含む	全体にマンガン多量含む

0 2m 1:60

第 231 図 第 6 号溝跡 (2)



第 232 図 第 6 号溝跡 (3)

僅かに低くなる。

覆土は、炭化物粒子を含む暗オリーブ灰色土である。

溝の位置や断面の観察から、第18号溝跡を掘り直した遺構である可能性がある。

遺物は、土師器坏、須恵器坏・甕の破片が出土した。

第18号溝跡 (第238～240図)

A～C-17、C～G-16グリッドに位置する。北北東から南南西に延び、北側は調査区外に続き、南側は第20号溝跡で止まる。第13・17・19・20・30・34・37・40・48～51・56・60・64号溝跡と重複し、第13・17・19・34号溝跡より古く、第20号溝跡との新旧関係は不明である。それ以外の遺構より新しいと思われる。

調査区北端の基本土層の観察では、本溝跡は、浅間B火山灰を含むⅢ層の直上から掘り込まれている。

検出した長さは52.90mで、幅は1.32～2.18m、深さは0.27～0.59mである。

断面形は逆台形である。底面は南北で殆ど高低差がない。

覆土は、場所によって多少の違いはあるが、灰色の粘質シルトが主体で、上層から中層にかけて焼土粒を少量含み、下層にかけて砂の含有が多くなる。

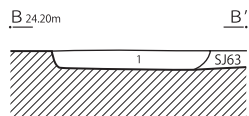
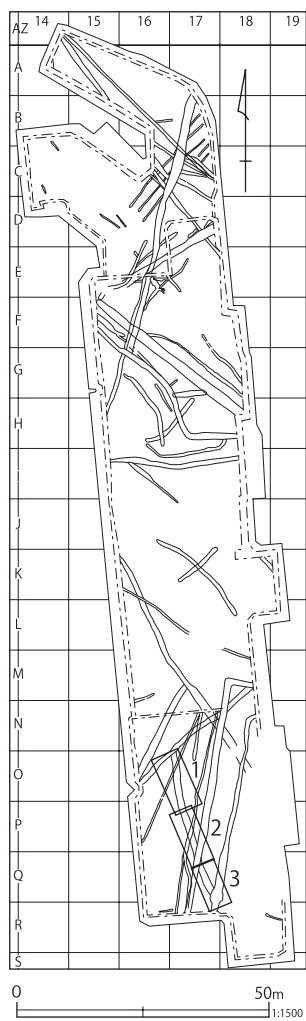
遺物は、土師器甕と須恵器甕の細片が各1点出土したのみである。いずれも混入と考えられる。

第18号溝跡の時期は、基本土層の観察から浅間B火山灰降下(1108年)以降であるが、中世に属する遺物は出土していないことから、古代末と考えておきたい。

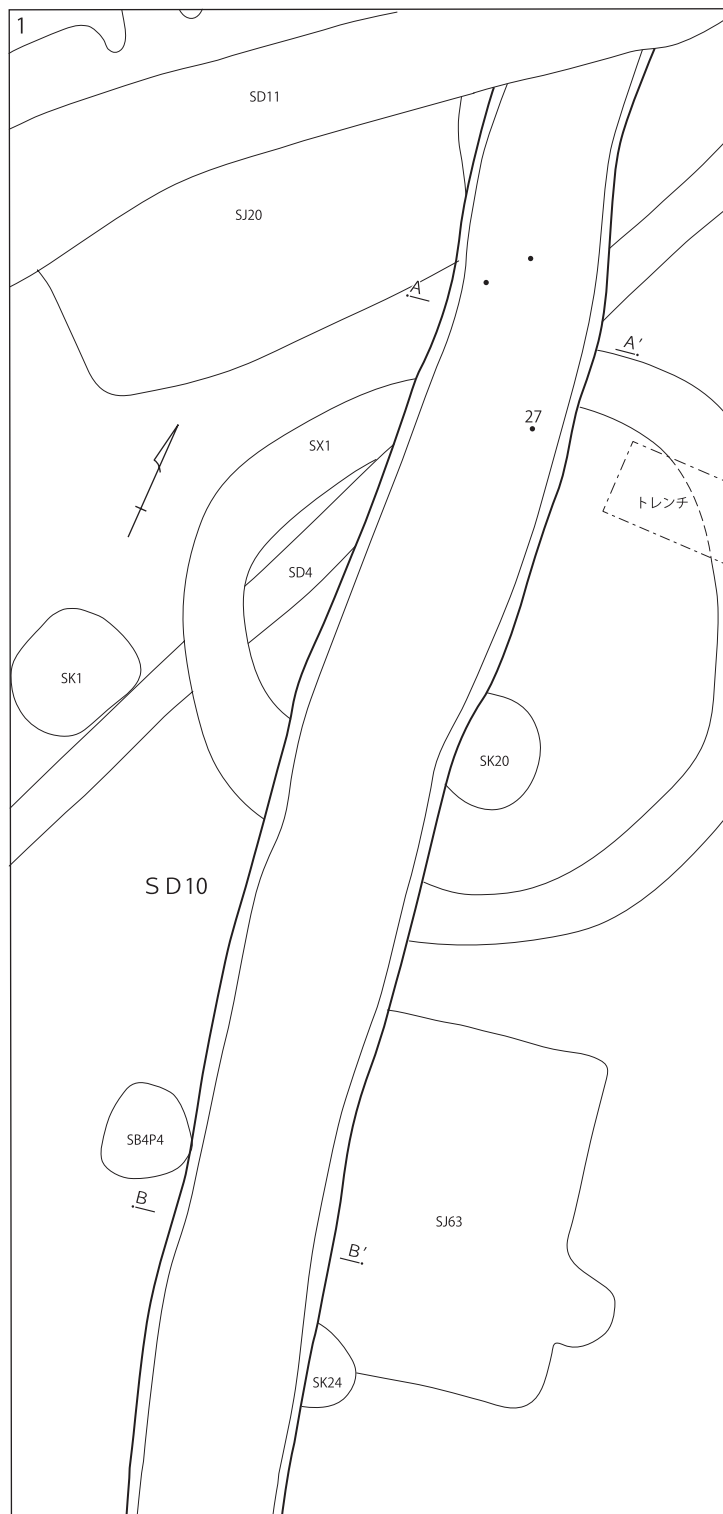
第19号溝跡 (第241図)

G-16グリッドに位置する。重複する第17・18・20号溝跡よりも新しい。

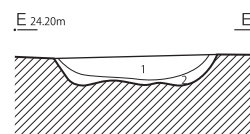
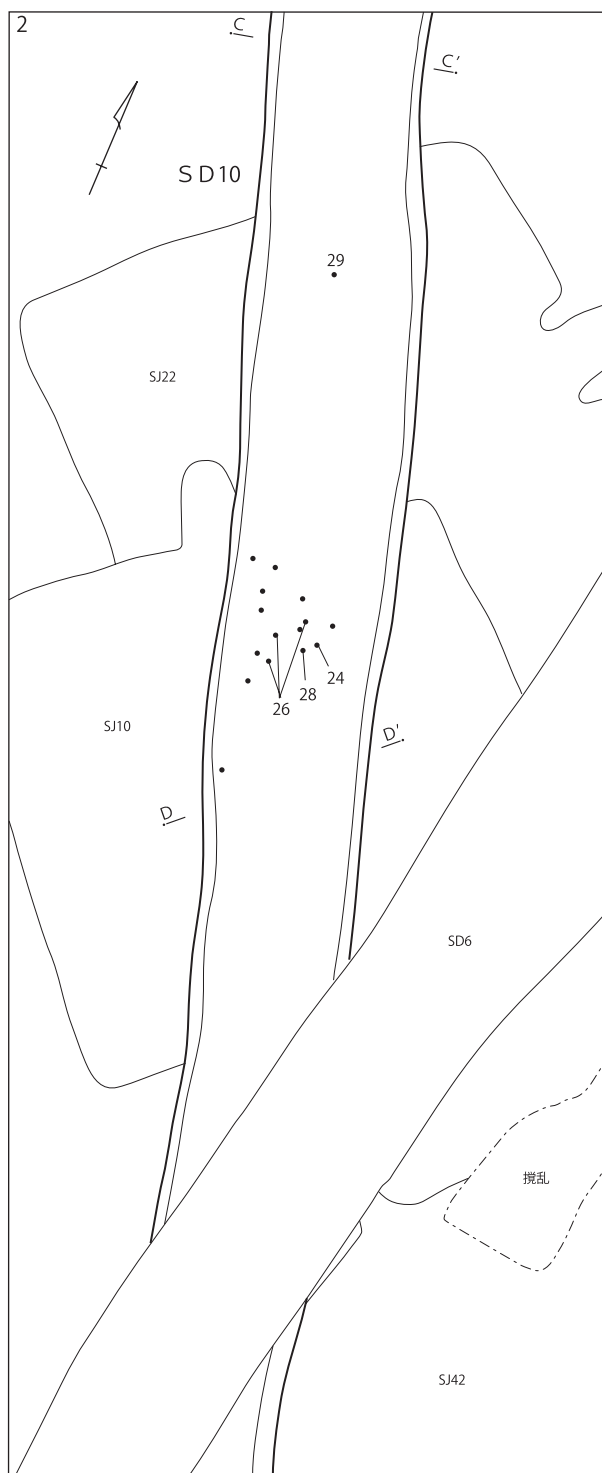
検出した長さは7.40mで、幅は0.32～0.93mである。深さは0.07～0.12mである。断面形は皿



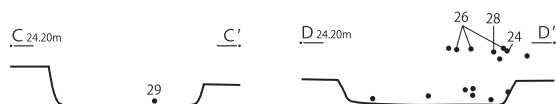
S D 10
1 灰黄褐色土 粘質シルト しまり強 粘性ややあり
地山粒子少量含む



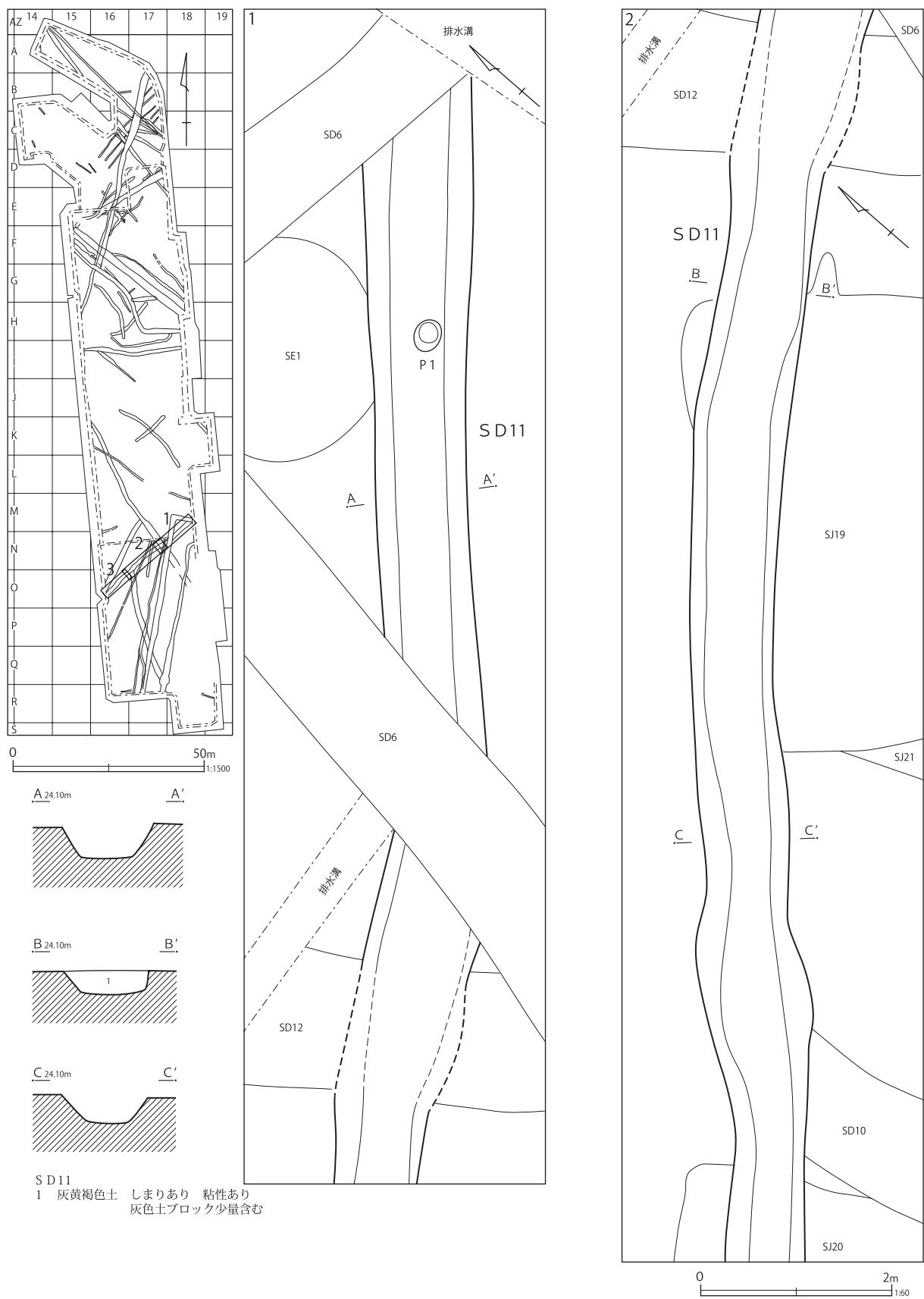
第 233 図 第 10 号溝跡 (1)



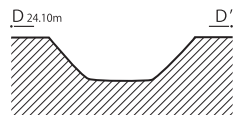
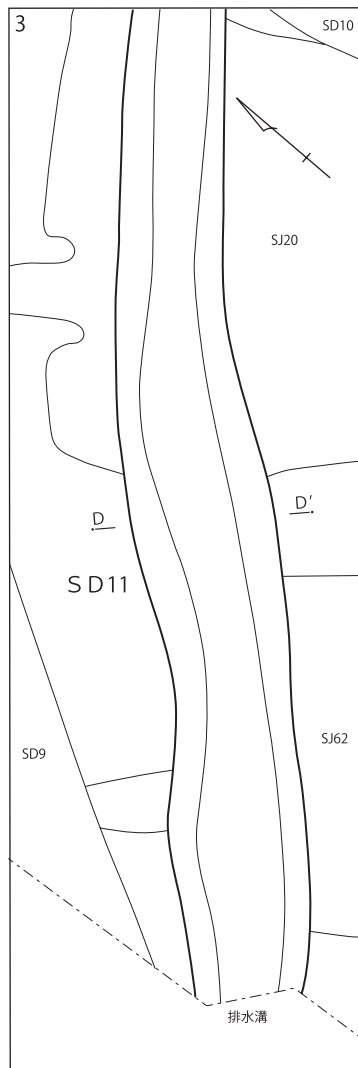
- SD10
 1 灰黄褐色土 粘質シルト しまりあり 粘性あり
 地山(黄褐色土) 粒子少量含む 酸化鉄含む
 2 褐色土 粘質シルト しまりあり 粘性ややあり
 地山ブロック多量含む



第 234 図 第 10 号溝跡 (2)



第 235 図 第 11 号溝跡 (1)



第 236 図 第 11 号溝跡 (2)

状である。

覆土は、砂を含む暗オリーブ灰色土である。

重複関係から第18号溝跡の掘り直しの可能性がある。

遺物は出土しなかった。

第20号溝跡 (第242～244図)

F・G-15、G-16・17、H-17・18グリッドに位置する。北西から南東方向に緩く湾曲しながら延び、H-17グリッドで東西方向に向きを変える。両端とも調査区外に続く。第14・17～21・22・28・45号溝跡と重複し、第21号溝跡より新しく、第19・28号溝跡より古い。また他の溝跡との新旧関係は不明である。

検出した長さは37.90mで、幅は0.63～1.38mである。深さは0.18～0.54mである。

断面形は逆台形である。底面は、北西から南東に向かって0.23m低くなり、高低差が大きい。

覆土は暗灰色の粘質シルトが主体で、砂を含むのが特徴である。

遺物は、土師器坏・甕、須恵器坏などが出土した。

第22号溝跡 (第245図)

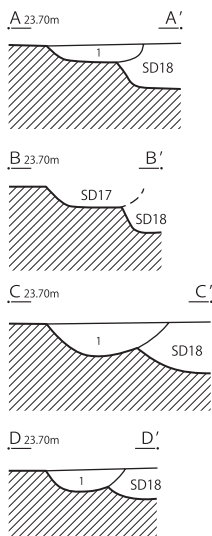
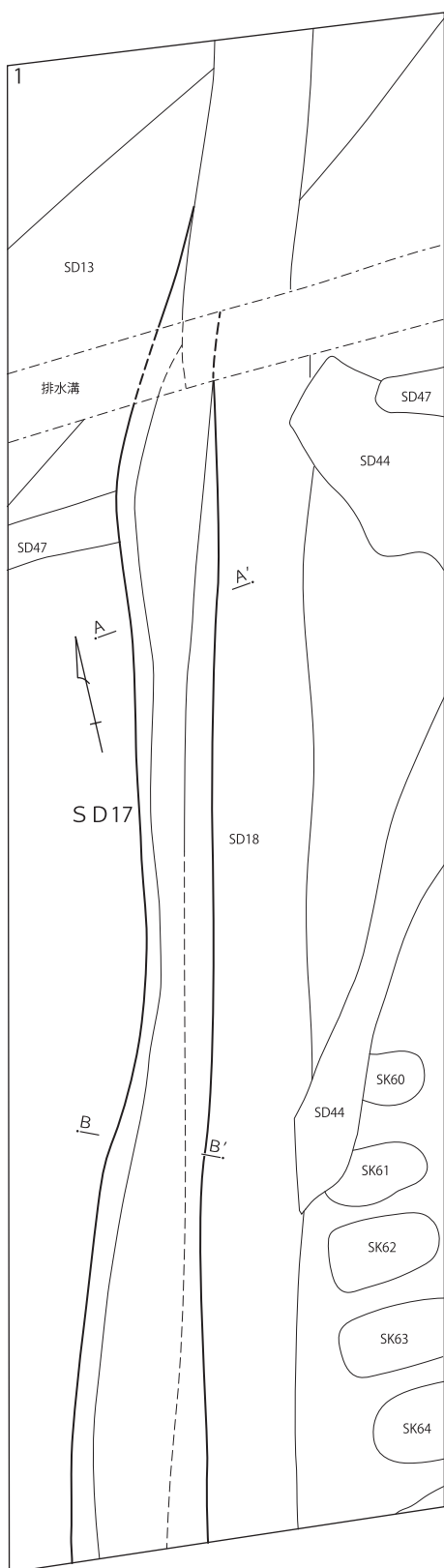
H-16～18・I-16～18グリッドに位置する。東西方向に延び、西側は北西向きに、東側は北東方向に曲がる。西端は調査区内で消失しており、東端は第20号溝跡に接続し止まっていた。第2号円形周溝状遺構と重複し、これより新しい。

規模は長さ17.40mで、幅は0.32～0.76mである。深さは0.05～0.19mである。断面形は逆台形に近い。底面は西から東方の第20号溝跡に向かって低くなり、その高低差は0.2mである。第20号溝跡との重複は認められなかったことから、同時期と考えられる。

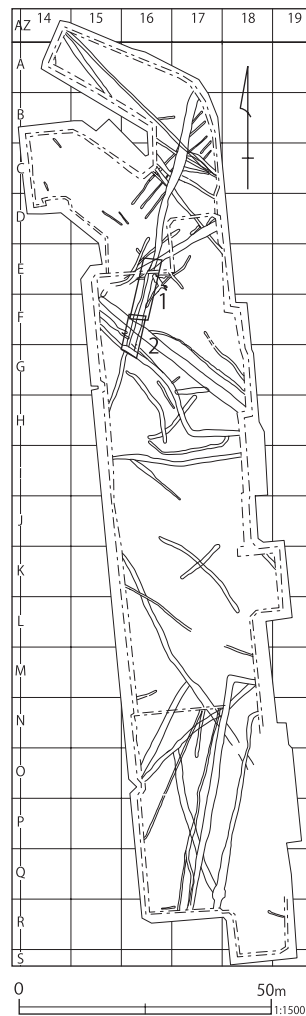
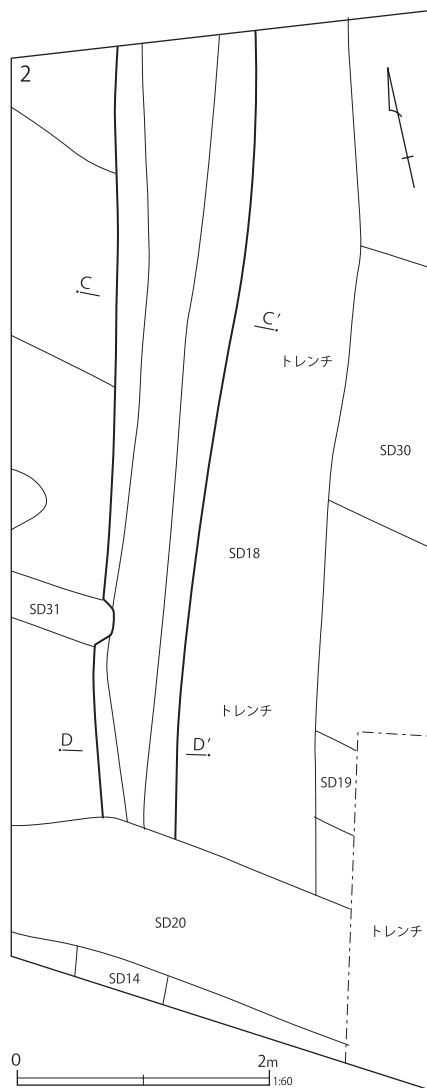
覆土は、暗灰色粘土をブロック状に含む褐灰色土で、埋め戻しの可能性がある。

遺物は出土しなかった。

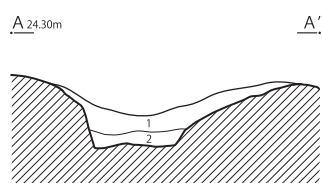
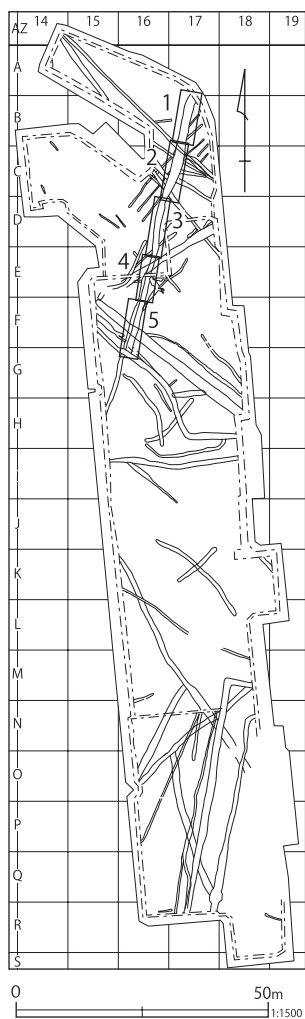
第23号溝跡 (第246図)



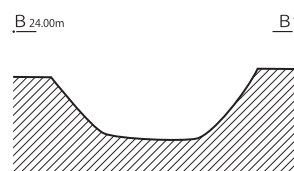
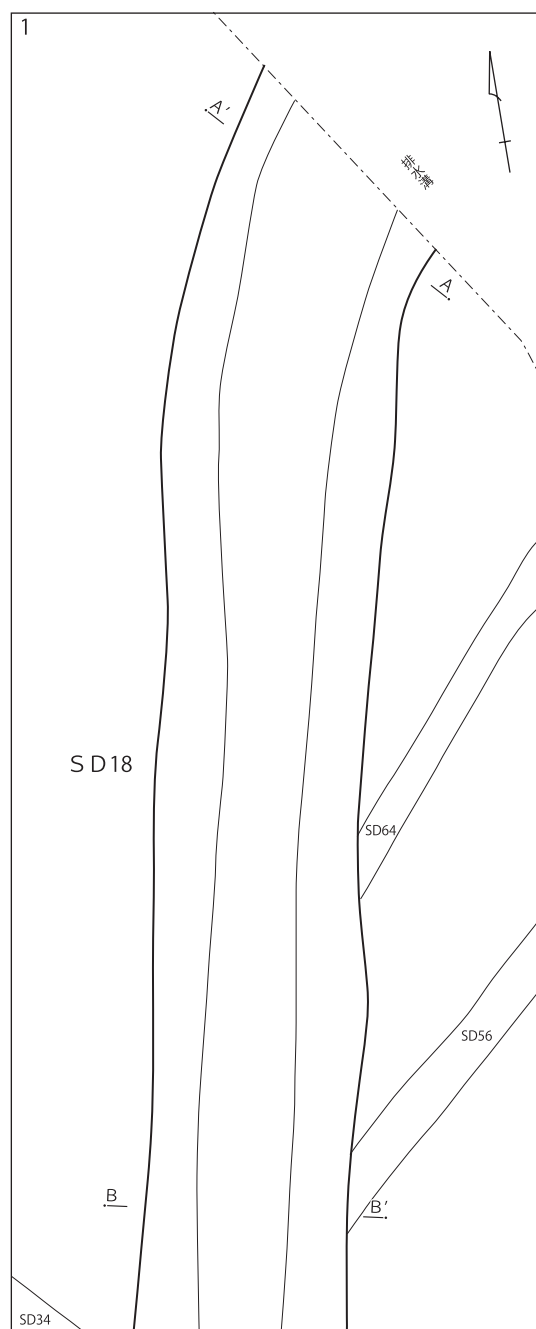
S D 17
1 暗オリーブ灰色土 しまりあり 粘性あり
炭化粒子極少量含む



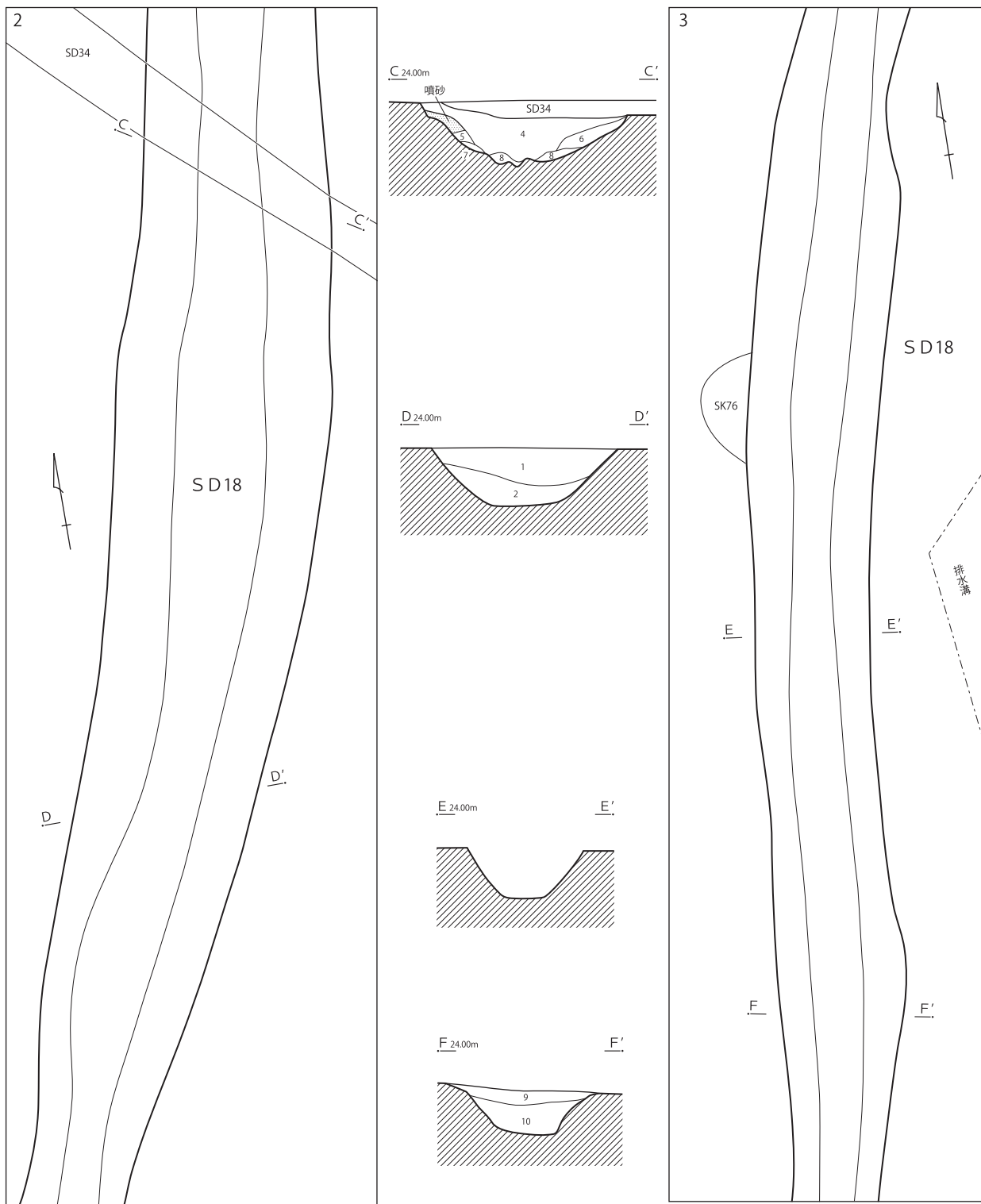
第 237 図 第 17 号溝跡



- SD18
 1 灰黄褐色土 粘質シルト しまり強 粘性強 炭化粒子少量含む
 2 褐灰色土 VI層ブロック多量含む 砂粒子少量含む
 ※噴砂は、部分的に礫を混入する。



第 238 図 第 18 号溝跡 (1)



SD18

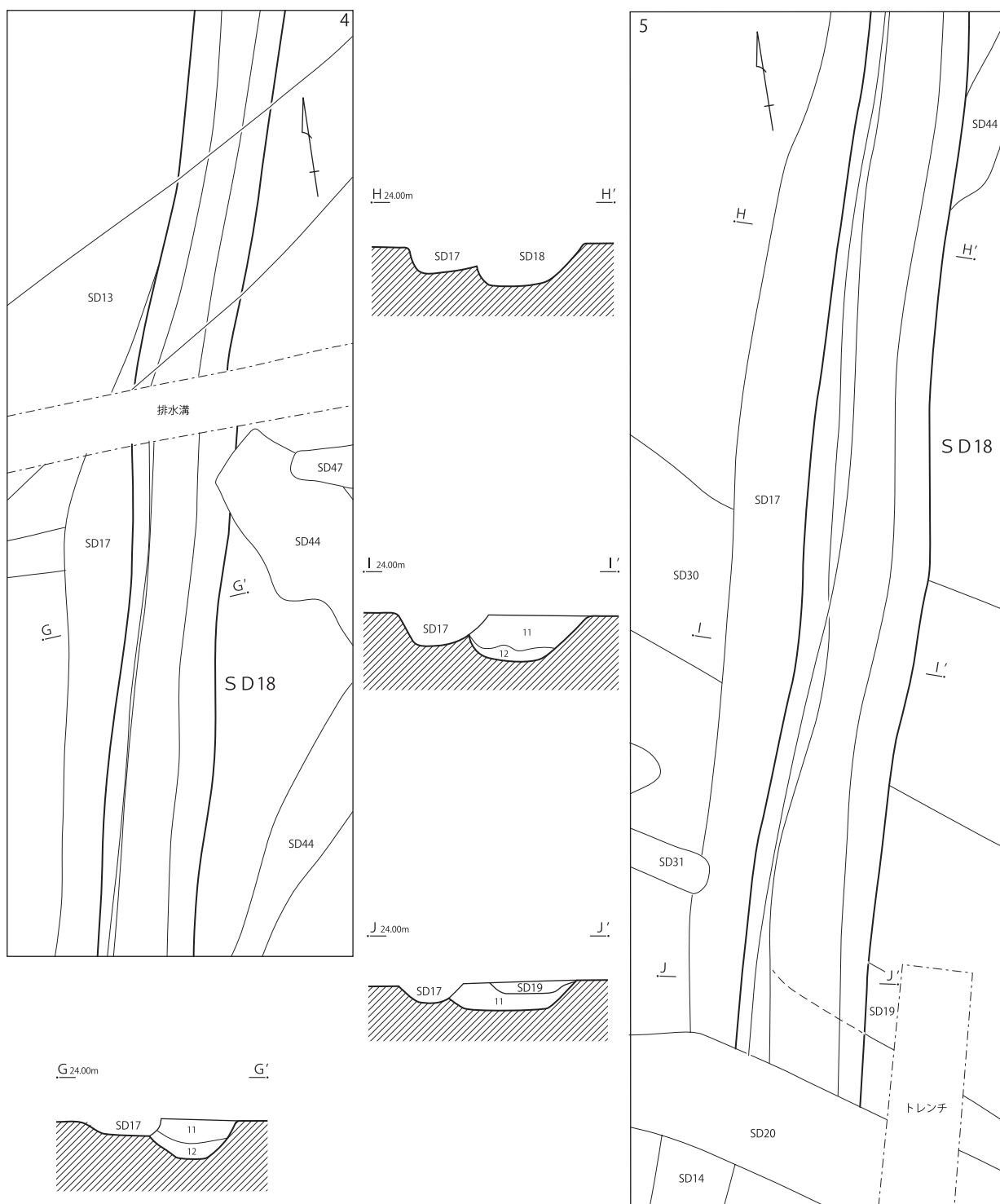
- 3 黒褐色土 しまりあり 粘性あり
炭化物のラミナが2枚ある
- 4 褐色土 しまりあり 粘性あり 炭化粒子少量含む
砂層によって3層に分層される
- 5 黒色土 しまりあり 粘性あり 砂を微量含む
- 6 褐色土 シルト質 しまり弱 粘性弱
暗褐色の粘土ブロック微量含む
- 7 灰白色土 しまりあり 粘性強 地山ブロック
- 8 褐色土 しまりあり 粘性あり
地山ブロック多量含む

9 暗灰色土

- しまりあり 粘性あり
上部25cmくらいまで炭化粒子を含む
- 10 暗オリーブ灰色土 しまりあり 粘性あり
地山の灰色粘質土をブロック状に含む

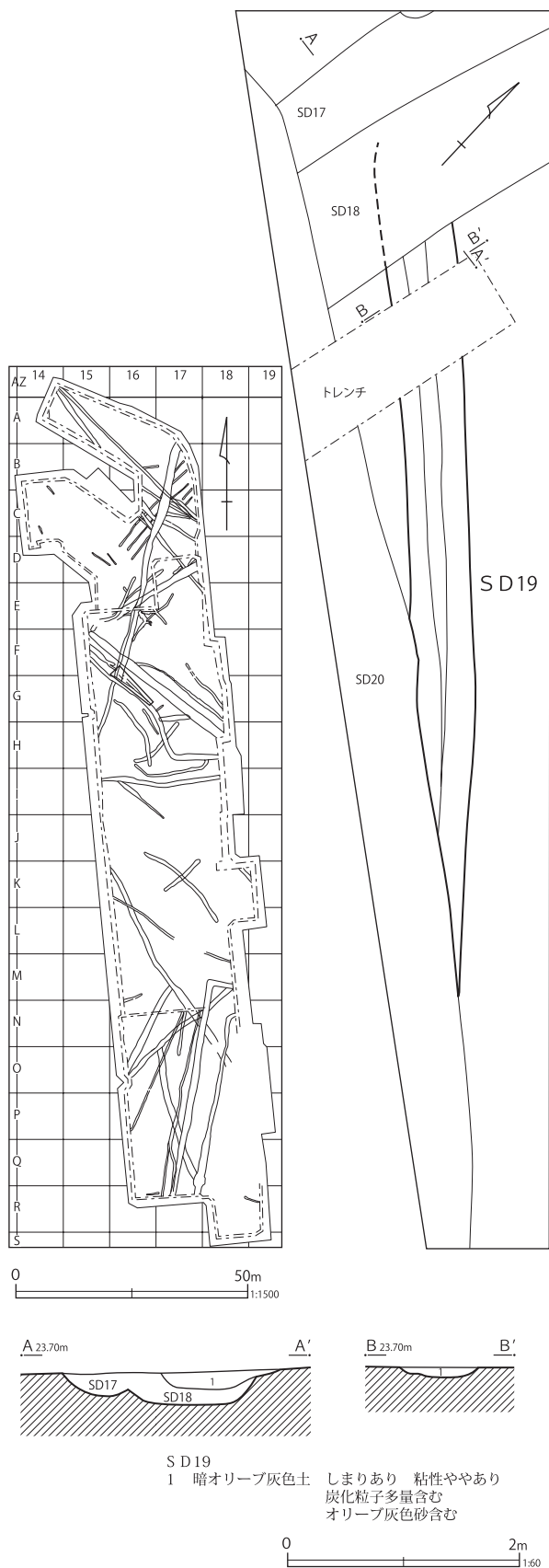
0 2m
1:60

第239図 第18号溝跡(2)



SD18
 11 暗オリーブ灰色土 しまりあり 粘性あり 炭化粒子含む
 12 暗灰色土 しまりあり 粘性あり 炭化粒子極少量含む
 暗青灰色砂を少量含む

第 240 図 第 18 号溝跡 (3)



第 241 図 第 19 号溝跡

I-15~18グリッドに位置する。東西方向に調査区域を横断し、調査区中ほどで緩やかに曲がっていた。両端は調査区外に続く。

重複する第32・50号土壇、第25号溝跡、第2号円形周溝状遺構、第3号溝跡は、畠跡の畝溝よりも新しい。第23号溝跡に接続する形で止まる第25号溝跡は、土層断面の観察から第23号溝跡が新しい。

規模は長さ25.80mで、幅は0.57~1.25m、深さは0.25~0.40mである。断面形はやや開いたU字形である。底面は西から東に向かって低くなり、高低差は0.17mである。

覆土は、褐灰色土、黄灰色土、灰色土で中層から底面にかけて砂を含み、自然堆積と考えられる。

遺物は、土師器の細片がごく少量出土したのみで図示できるものはない。

第24号溝跡 (第247図)

G・H-16グリッドに位置する。北西から南東方向に延び、中ほどでやや南に方向を変える。両端は調査区内で消失していた。第4号畠跡の北東側を迂回し、第29号溝跡或いは第20号溝跡の一部と並行するように延びる。南側で第21号溝跡と重複しているが、新旧関係は捉えられなかった。

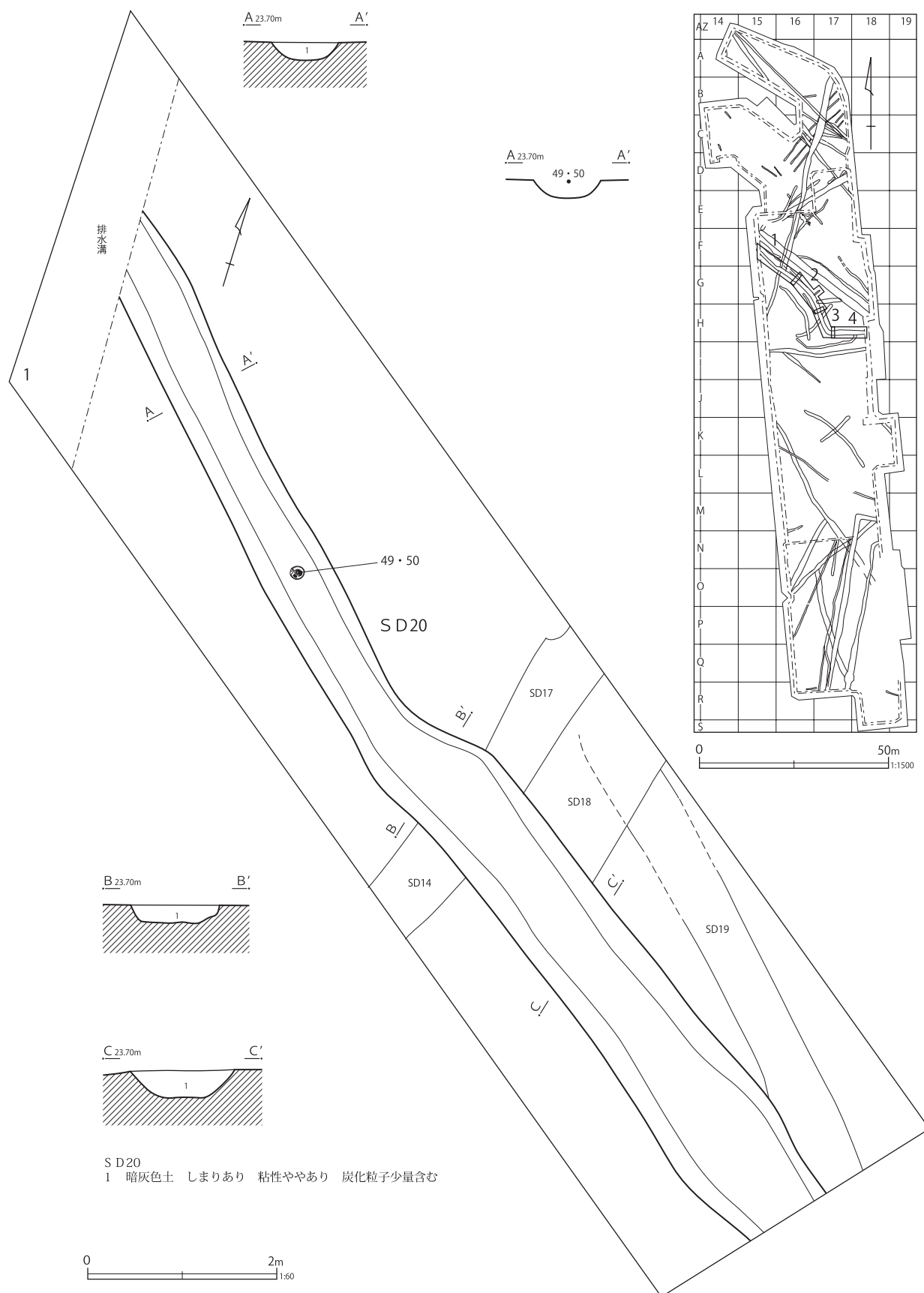
規模は長さ16.90mで幅は0.52~0.86mである。深さは0.21~0.23mである。壁の立ち上がりは比較的緩く、断面形は逆台形を呈する。底面は南から北に向かって低くなり、高低差は0.14mである。

覆土は灰色系の粘質シルトで自然堆積と考えられる。

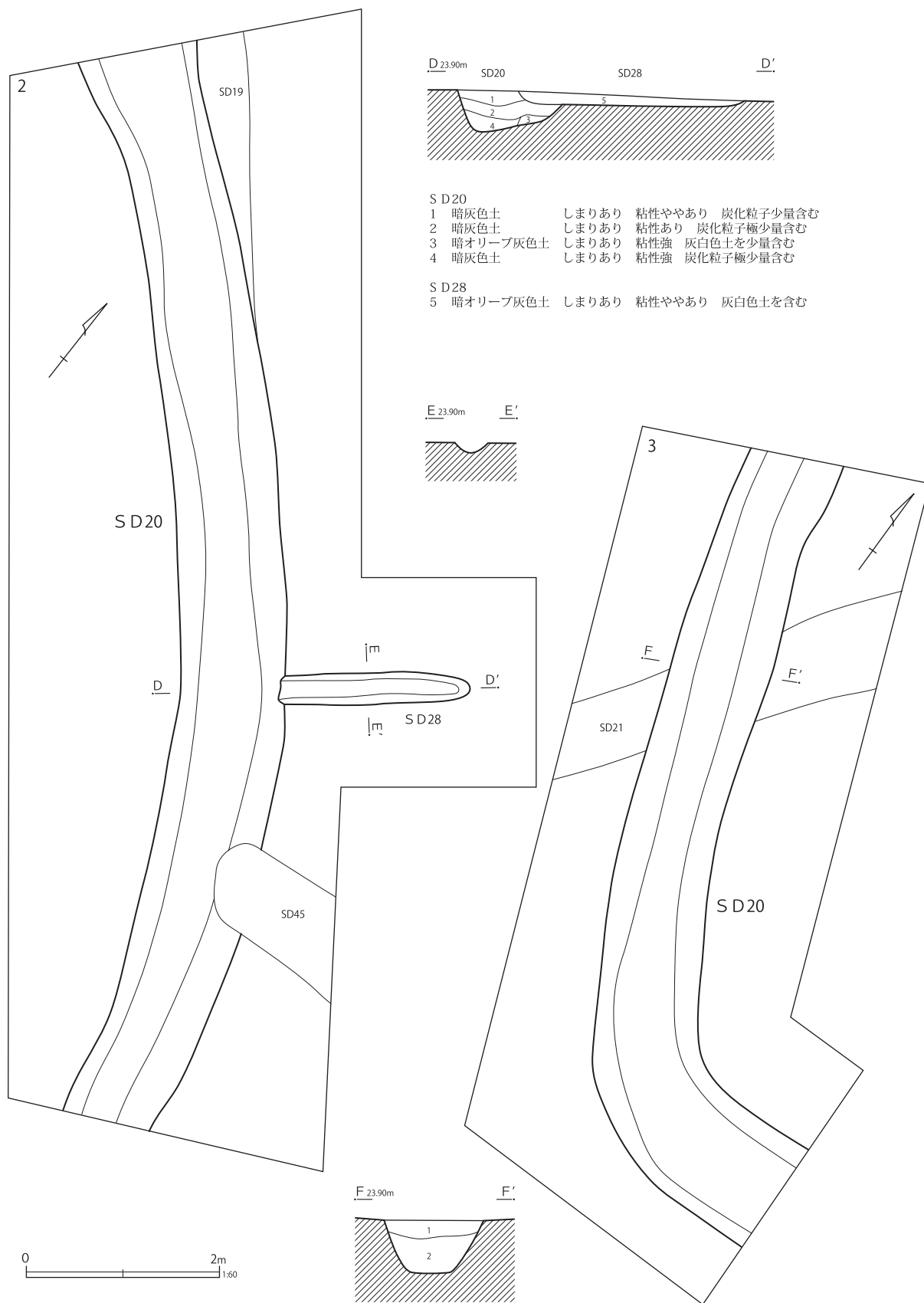
遺物は出土しなかった。

第25号溝跡 (第248図)

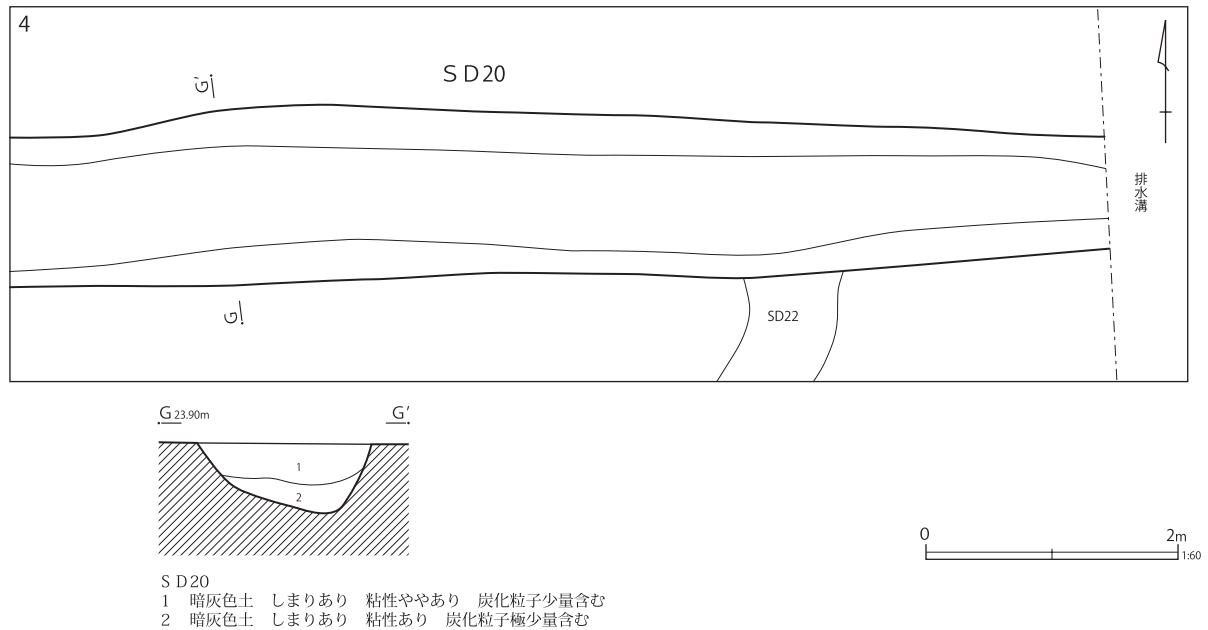
I-16、I・J-16・17グリッドに位置する。北東から南西方向に直線的に延び、北端は第23号溝跡に壊されていた。南半部は極端に幅を減じ、南端は調査区内で消失していた。第23号溝跡、第3号畠跡と重複し、第23号溝跡より古く、第3号



第 242 図 第 20・28 号溝跡 (1)



第 243 図 第 20・28 号溝跡（2）



第 244 図 第 20・28 号溝跡（3）

畠跡より新しい。

規模は長さ12.38mで、幅は北半が0.95mに対し南半は0.24mと細くなる。深さは0.09～0.30mである。壁の立ち上がりは緩く、断面形は大きく開いたU字状である。底面は、南端と北端で高低差がほとんどない。

覆土は、あまり含有物を含まない褐灰色土の単層である。

遺物は出土しなかった。

第28号溝跡（第242～244図）

G-17グリッドに位置する。北東から南西方向に延び、北端は調査区内で消失し、南端は第20号溝跡で止まっていた。第20号溝跡と重複しこれより新しい。

検出した長さは2.00mで、幅は0.24～0.34mである。深さは0.10m前後である。断面形は浅い皿形である。底面はほぼ平坦で高低差は殆どない。検出した規模や覆土の状況から畝跡の可能性も考えられる。

遺物は、出土しなかった。

第31号溝跡（第249図）

F-15・16グリッドに位置する。北西から南東

方向に延び、北側は調査区外に続く。南側は細い溝が分岐するように派生して、第17号溝跡に続くが、第17号溝跡との新旧関係は不明である。調査時の所見では、幅広の部分と細い溝には重複関係は認められず、同一の溝跡として取り扱った。また、第17・18号溝跡の東側の第19号溝跡に続く可能性がある。調査時には、確認できなかった。

検出した長さは7.46mで、幅は0.35～1.11mである。深さは0.10～0.37mである。断面形はU字状を呈する。底面は南東側がやや高く北西側に低くなる。

覆土は、灰色で、粘性のあるシルト質土が主体である。

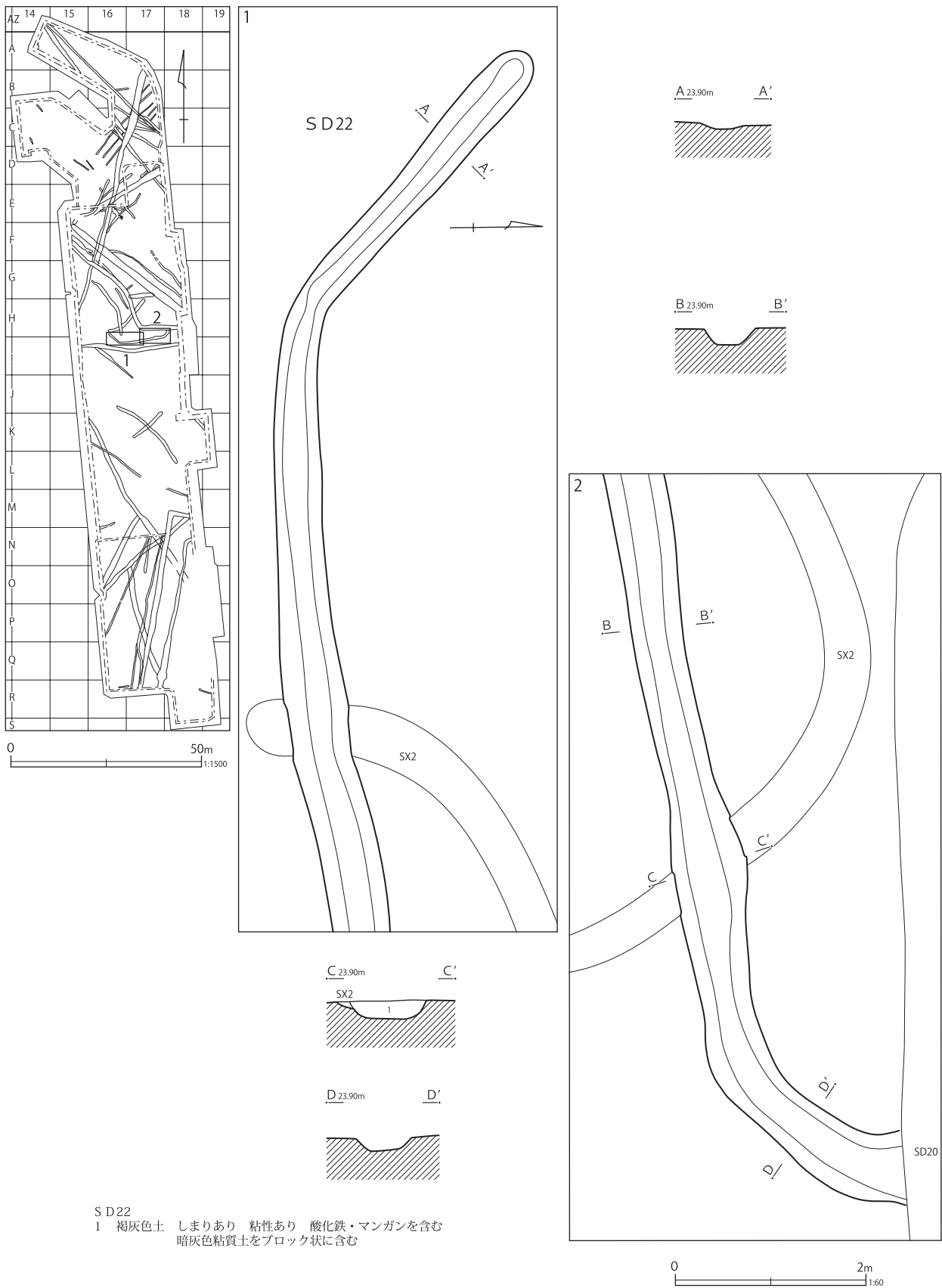
遺物は出土しなかった。

第35号溝跡（第250図）

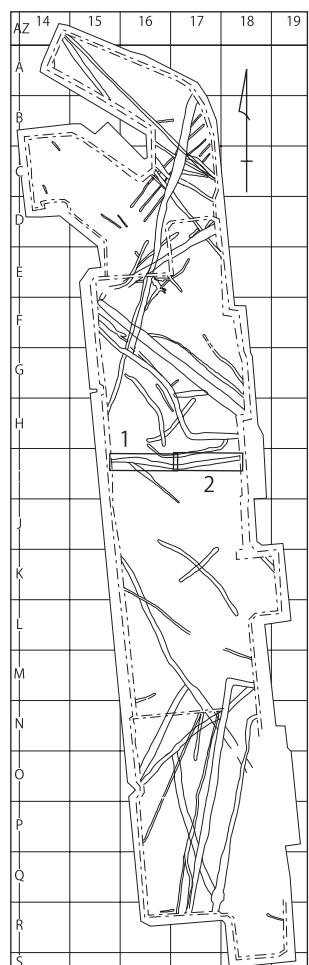
D-17グリッドに位置する。北東から南西方向に延び、両端は消失していた。近世の第13号溝跡に南側の一部が壊されていた。

検出した長さは2.35mで、幅は0.40～0.61mである。深さは0.10mである。浅いため断面形は皿状である。

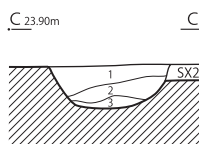
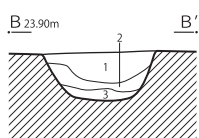
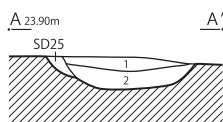
覆土は、灰白色粘土ブロックを含む褐灰色土の



第 245 図 第 22 号溝跡



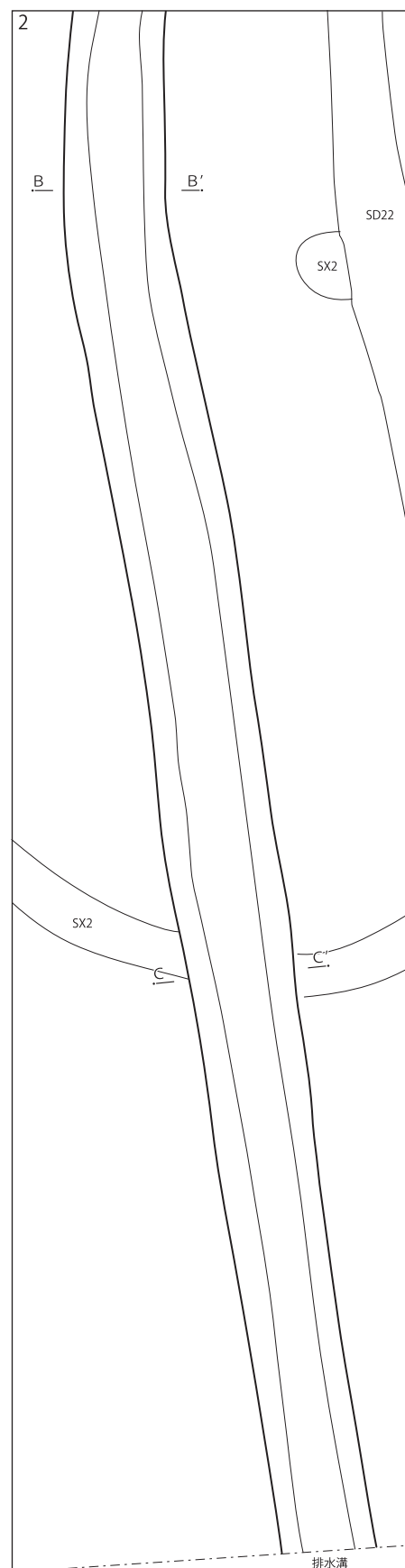
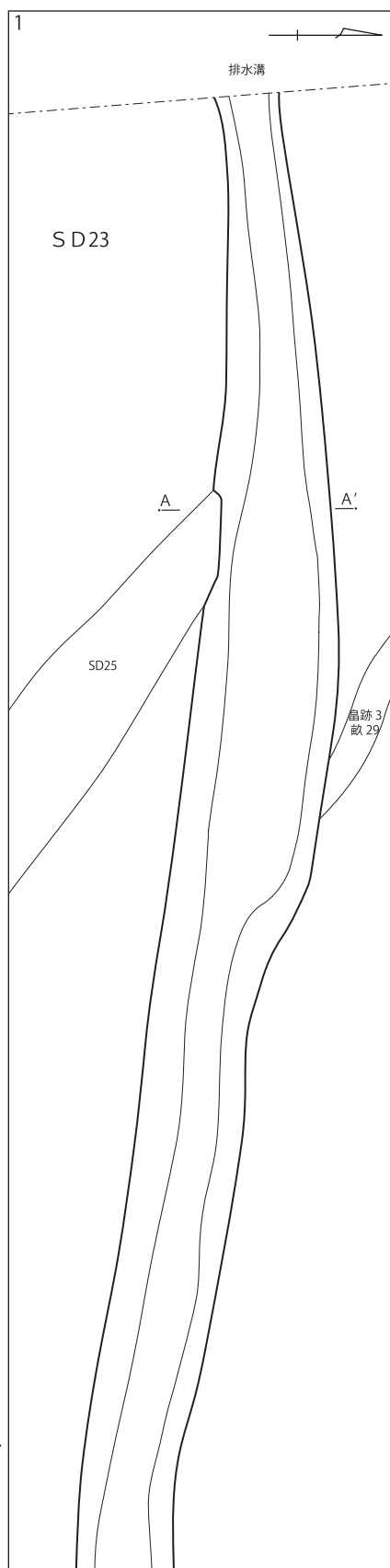
0 50m
1:1500



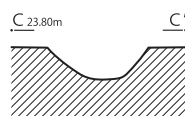
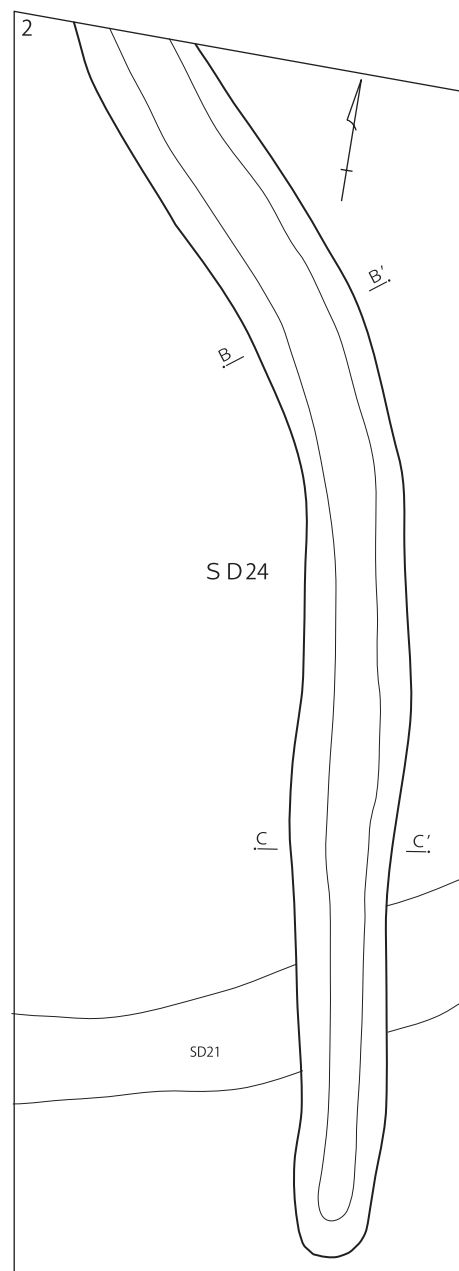
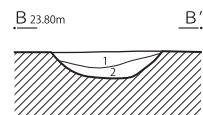
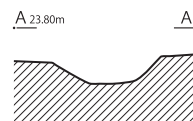
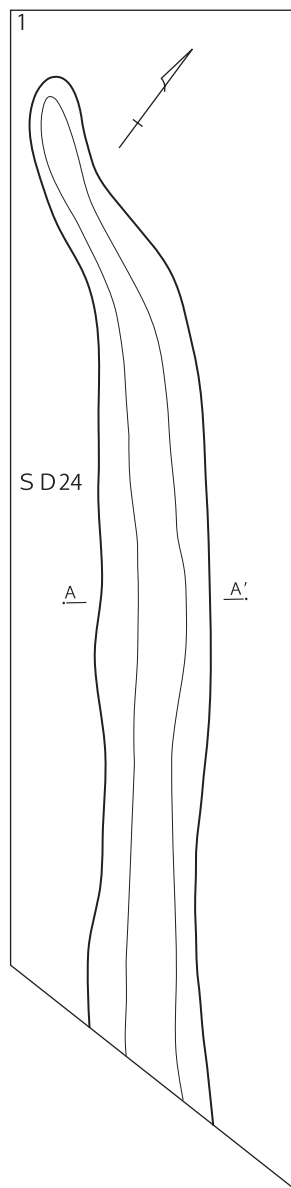
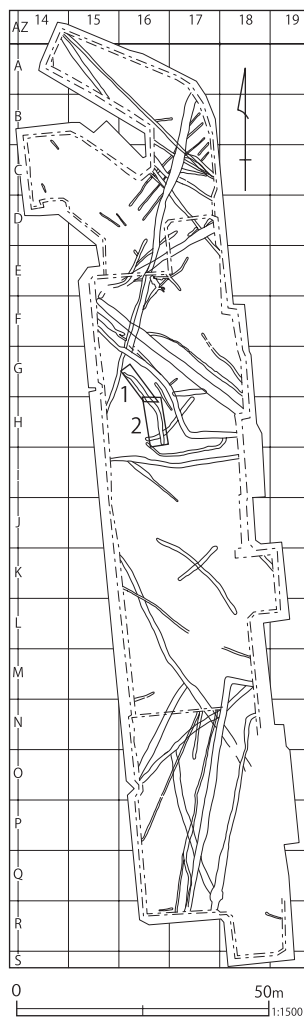
S D23

- 1 褐色土 しまりあり 粘性あり
酸化鉄・マンガンを含む
暗灰色粘質土をブロック状に含む
- 2 黄灰色土 しまりあり 粘性あり
酸化鉄・オリブ灰色砂を含む
- 3 灰色土 しまりあり 粘性あり
2層の土をブロック状に含む
オリブ灰色砂を含む

0 2m
1:60



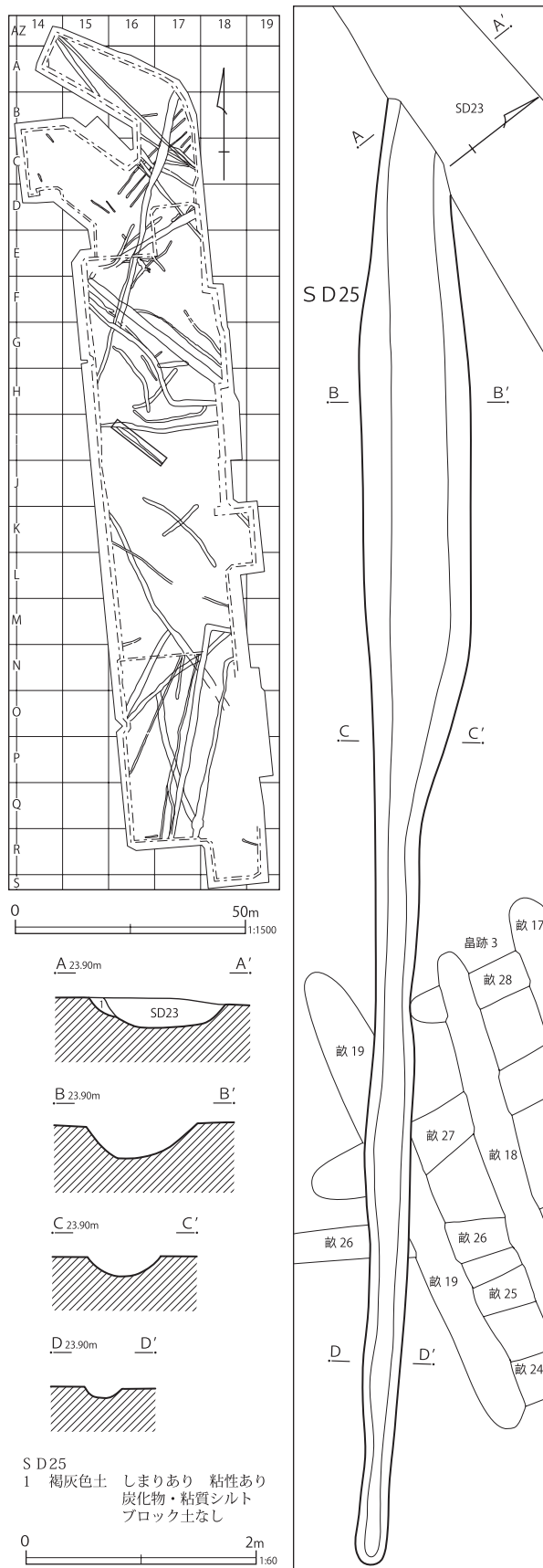
第 246 図 第 23 号溝跡



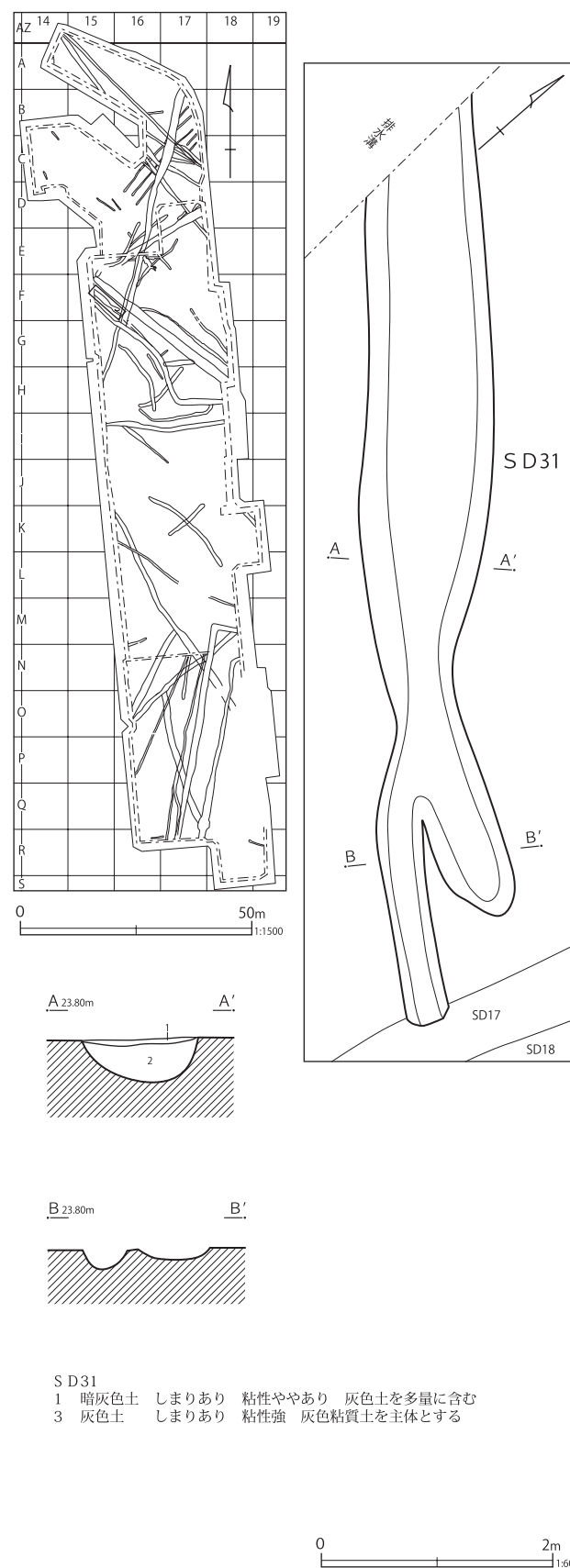
S D 24
 1 褐灰色土 粘質シルト しまりあり 粘性あり 酸化鉄を含む
 2 灰色土 粘質シルト 1層よりしまり弱 1層より粘性弱 酸化鉄を含む



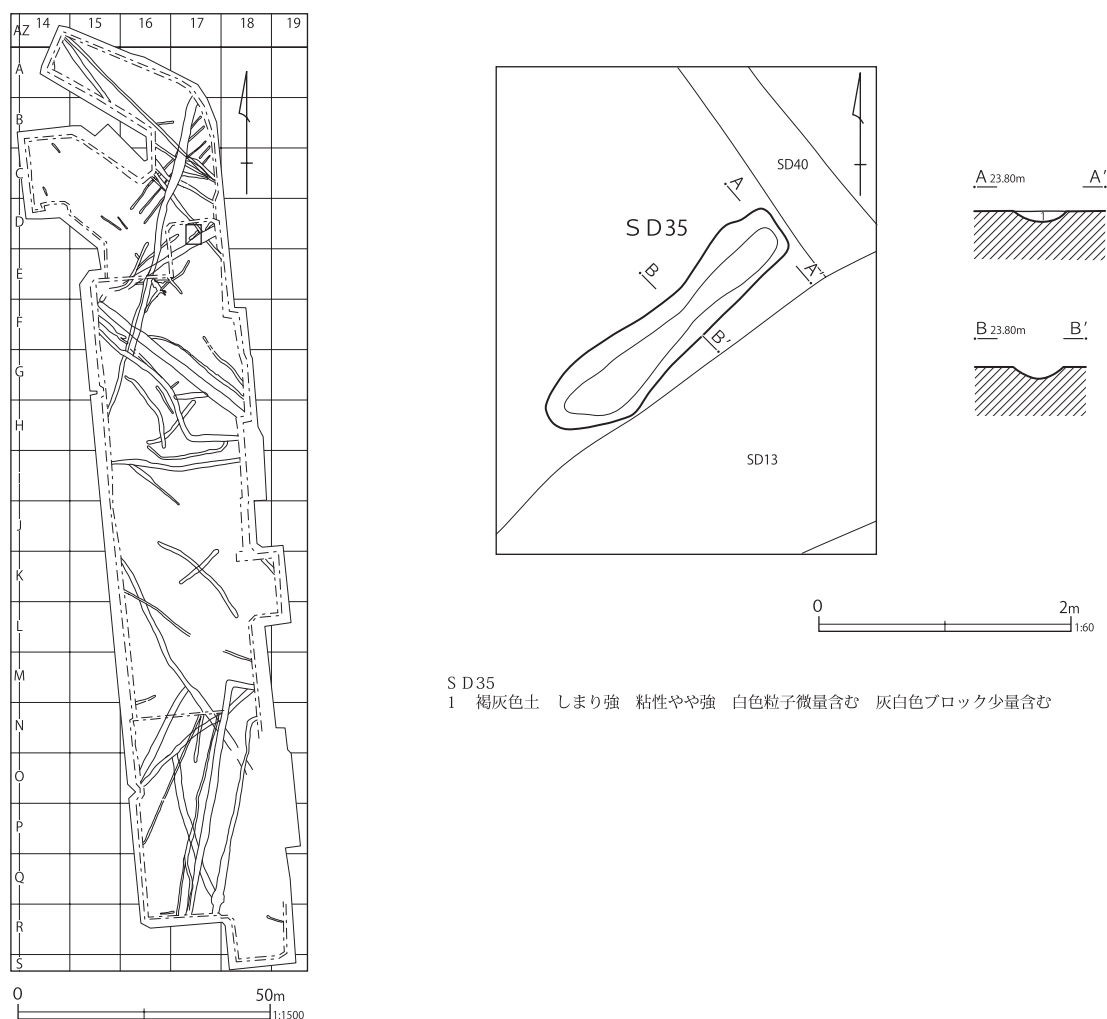
第 247 図 第 24 号溝跡



第 248 図 第 25 号溝跡



第 249 図 第 31 号溝跡



第 250 図 第 35 号溝跡

単層である。

遺物は出土しなかった。

第36号溝跡（第251図）

AZ-14・15、A-14・15、B-15グリッドに位置する。北西から南東方向に直線的に延び、両端は調査区外に続く。他の遺構との重複はないが、南側は未調査区を挟んで、C-16グリッドの第40号溝跡あるいは第48号溝跡に続く可能性がある。

検出した長さは14.30mで、幅は0.73～1.23mである。深さは0.24～0.37mである。断面形は逆台形である。底面は北西から南東方向に向かって僅かに低くなり、その高低差は0.05mである。

覆土は、地山土をブロック状に含む褐灰色土で、

埋め戻しの可能性がある。

遺物は出土しなかった。

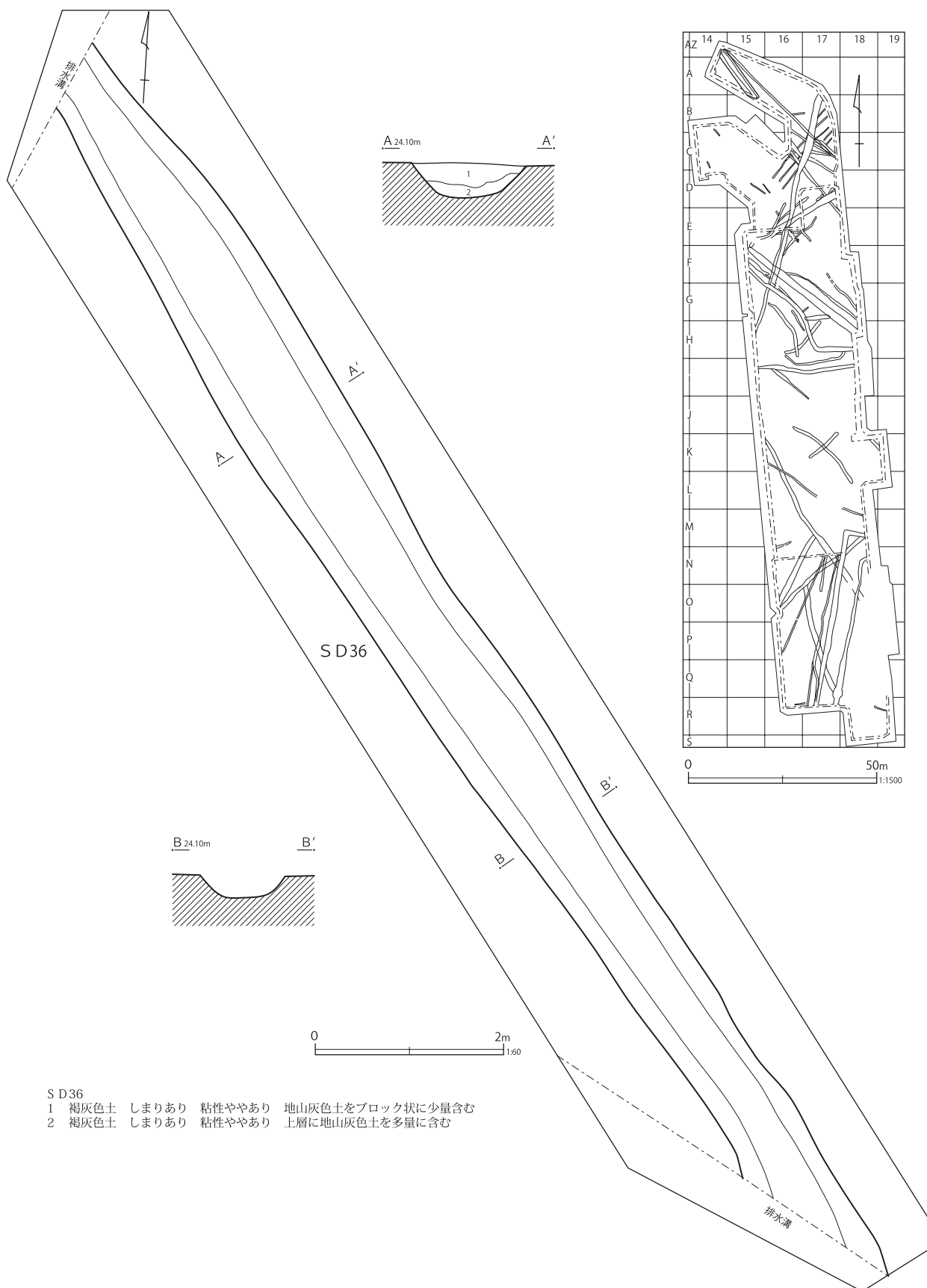
第37号溝跡（第252図）

D-16・17、E-16グリッドに位置する。北東から南西方向に直線的に延び、北東端は調査区内で消失し、南西側は第38号溝跡で止まる。重複する第18号溝跡よりも古い。

検出した長さは10.34mで、幅は0.31～0.75mである。深さは0.18mである。断面形は浅いU字状である。底面は、南西から北東に向かって僅かに低くなる。

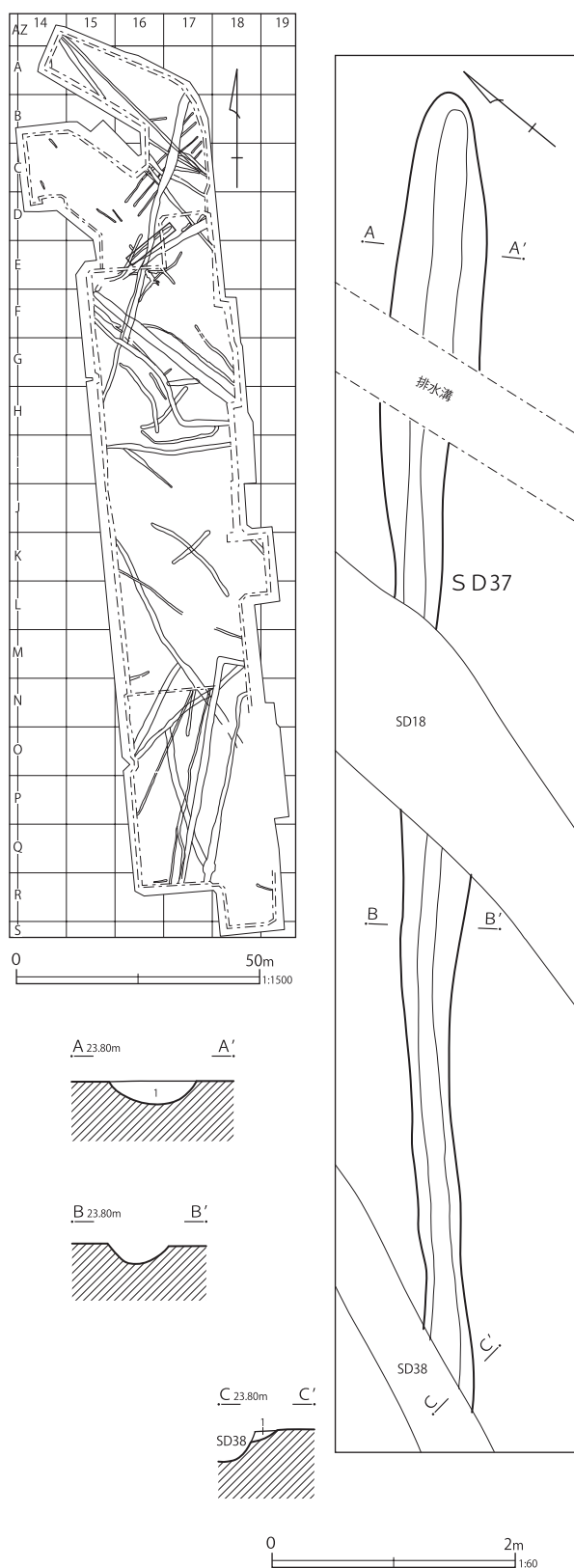
覆土は、黒色土を含む暗オリーブ灰色土の単層である。

遺物は出土しなかった。



- S D36
- | | | | | |
|---|------|-------|--------|------------------|
| 1 | 褐灰色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 地山灰色土をブロック状に少量含む |
| 2 | 褐灰色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 上層に地山灰色土を多量に含む |

第 251 図 第 36 号溝跡



第 252 図 第 37 号溝跡

第38号溝跡（第253図）

D-16、E-15・16、F-15グリッドに位置する。北東から南西方向に延び、南側で西方向に屈曲した後、再び南西方向に延びる。両端は調査区内で消失していた。重複する第37・39号溝跡、第7号畝跡の畝溝よりも新しい。

検出した長さは15.78mで、幅は0.46～0.84mである。深さは0.23～0.29mである。断面形はU字型である。底面の高低差は殆どない。

覆土は、暗オリーブ地山土を含む灰色のシルト質土で、自然堆積と思われる。

遺物は出土しなかった。

第39号溝跡（第253図）

E-16グリッドに位置する。北西から南東方向に延びているが、長さが短く第7号畝跡の範囲にあることから畝跡の可能性も考えられる。南東端は第38号溝跡に当り、止まっていた。

検出した長さは1.15mで、幅は0.44m、深さは0.13mである。断面形は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。

覆土は、地山土を含む暗オリーブ灰白土である。

遺物は出土しなかった。

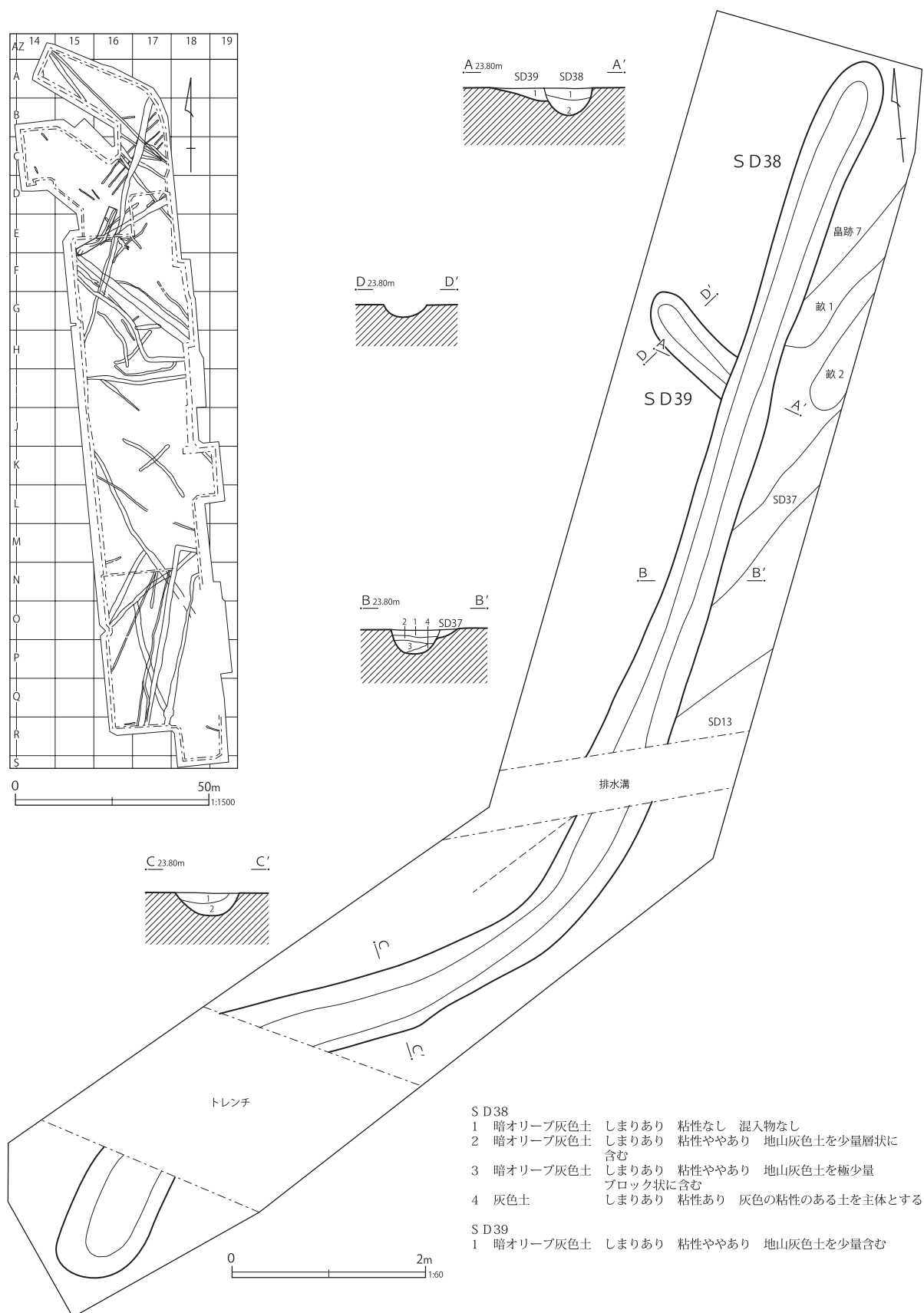
第49号溝跡（第254図）

C-17グリッドに位置する。東西方向にほぼ直線的に延び、西側は第18号溝跡で止まっていた。東端は調査区内で消失していた。第18号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。

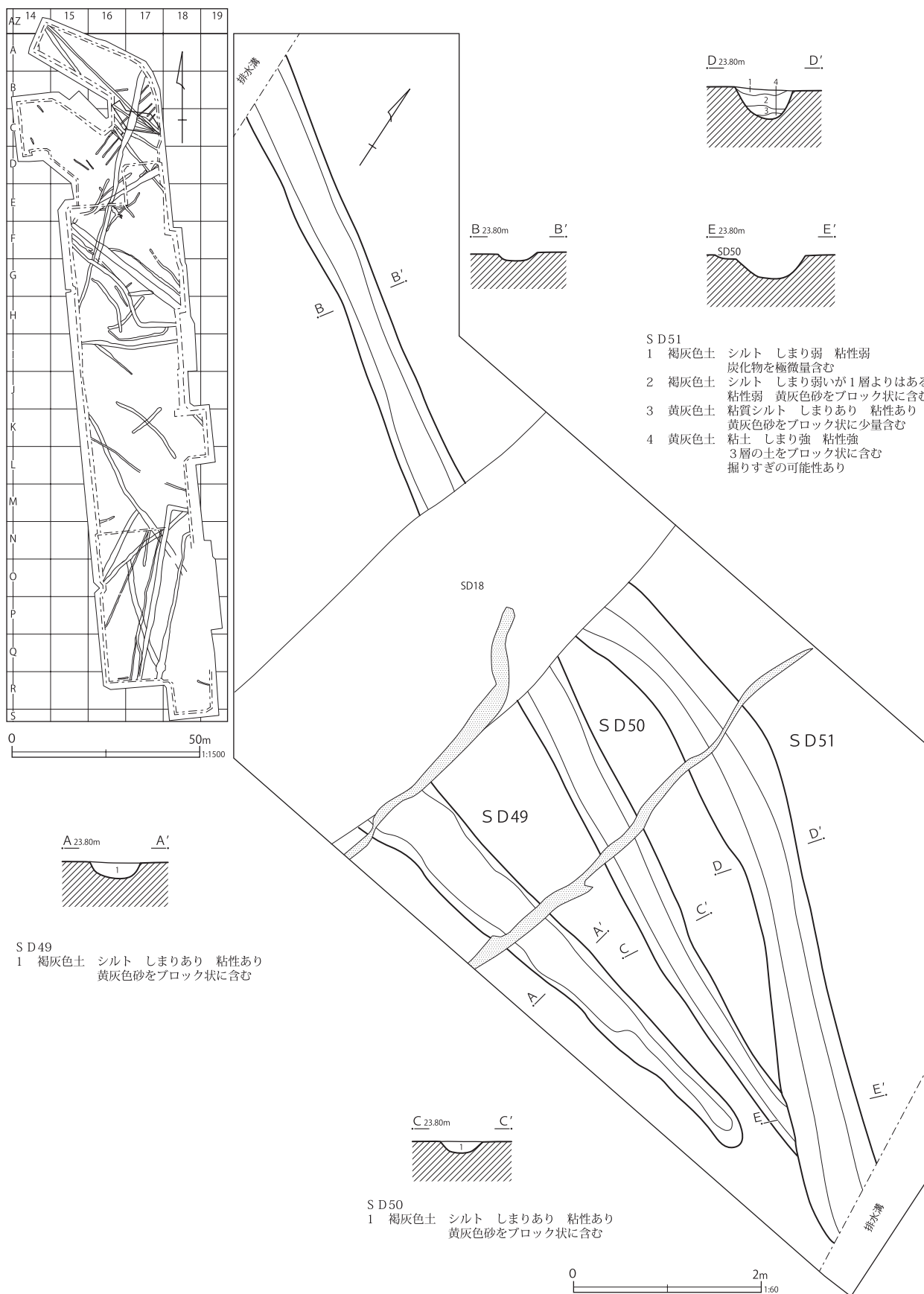
検出した長さは5.20mで、幅は0.32～0.67mである。深さは0.17mである。断面形はU字状である。底面は東側の先端部分が西側より低くなっているが、これは溝の中ほどを地震による地割れが横切り噴砂が噴出した影響で東側の地盤が下がったためと考えられる。

覆土は黄灰色砂ブロックを含む褐灰色シルトで埋め戻しの可能性がある。

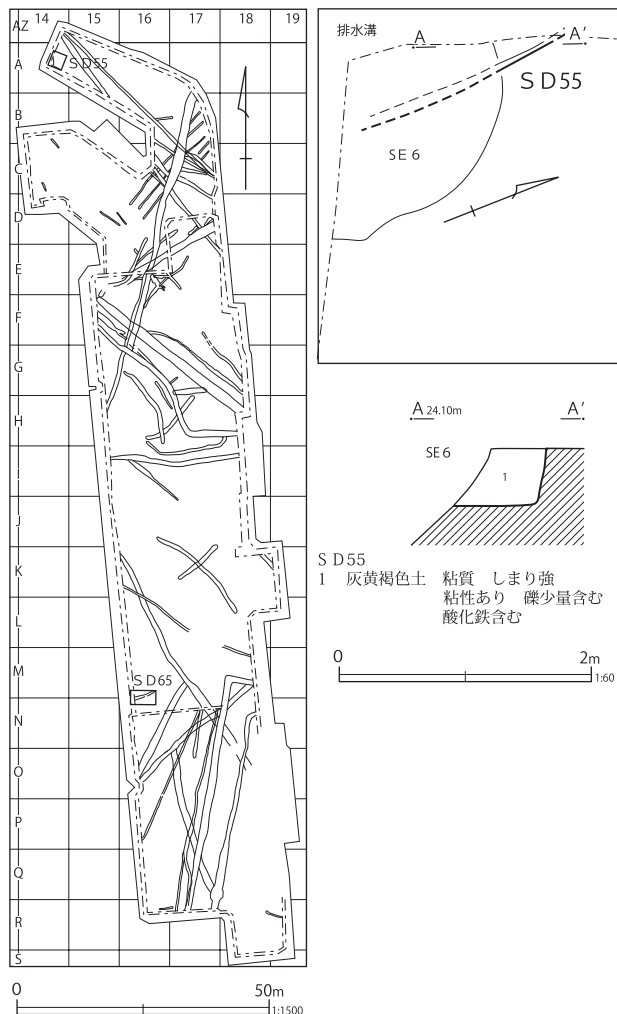
遺物は、土師器の小片が少量出土したが図示できるものはない。



第 253 図 第 38・39 号溝跡



第 254 図 第 49・50・51 号溝跡



第50号溝跡（第254図）

B-16、C-16・17グリッドに位置する。北西から南東方向に直線的に延び、西側は調査区外に続き、東側は他の遺構と重複していたため調査区外まで続くかは確認できなかった。

第18・34・51・56号溝跡と重複し、第34号溝跡より新しく、第18号溝跡より古い。他の溝跡との新旧関係は明らかにできなかった。

検出した長さは12.60mで、幅は0.42～0.54mである。深さは0.12mである。断面形は浅いU字状である。底面は北西から南東方向に僅かに低くなる。

覆土は、黄灰色砂をブロック状に含む褐灰色シルトで、埋め戻しの可能性がある。

遺物は出土しなかった。

第51号溝跡（第254図）

C-17グリッドに位置する。西から南東に湾曲して延び、南東端は調査区外に続く。西側は第18号溝跡に接続している。第34・50号溝跡と重複し、第34号溝跡より古い。また、他の溝跡との新旧関係は不明である。

検出した長さは7.60mで、幅は0.58～0.88mである。深さは0.25～0.30mである。断面形は箱葉研状で、底面は南東から北西方向に低くなり高低差は0.10mである。

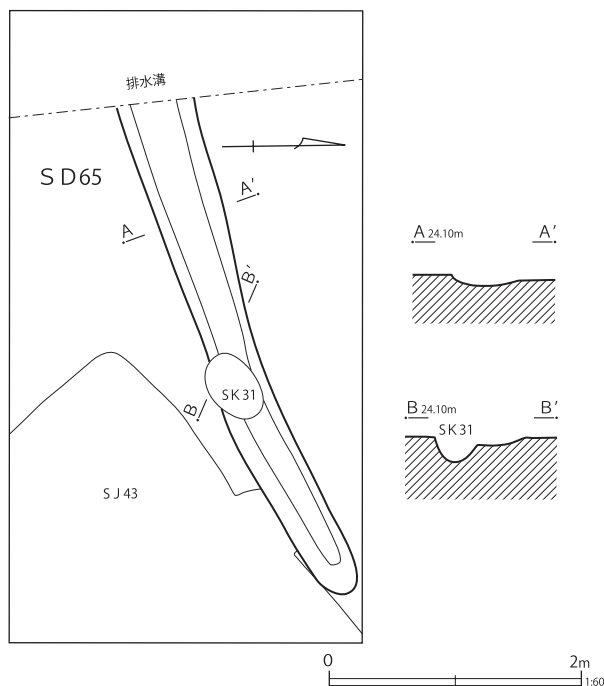
覆土は、黄灰色砂をブロック状に含む褐灰色シルト、黄灰色粘質シルトで埋め戻しの可能性がある。

遺物は、須恵器甕の破片が少量出土した。

第55号溝跡（第255図）

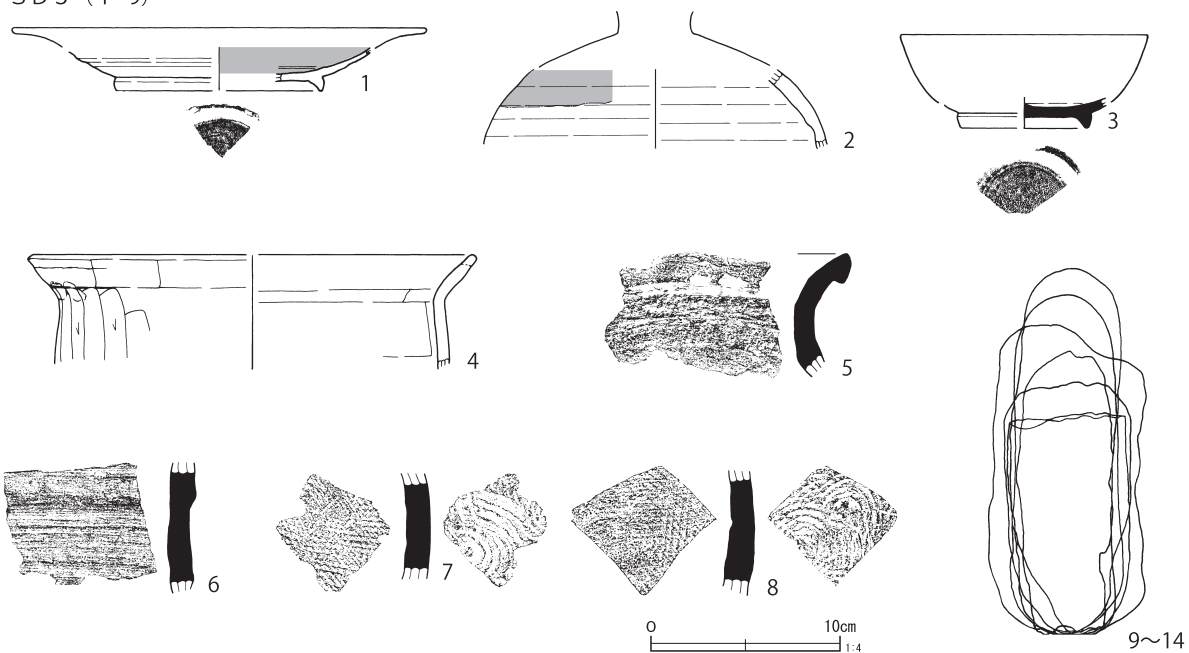
A-14グリッドに位置する。第6号井戸跡を調査していた過程で溝跡として確認した。南北方向に延びているようであるが、調査区際でごく一部の検出にとどまったため詳細は不明である。第6号井戸跡と重複し、それより古い。

検出した長さは0.48mで、幅は片方の壁が調査区外であり、調査区にかかる部分は第6号井戸跡

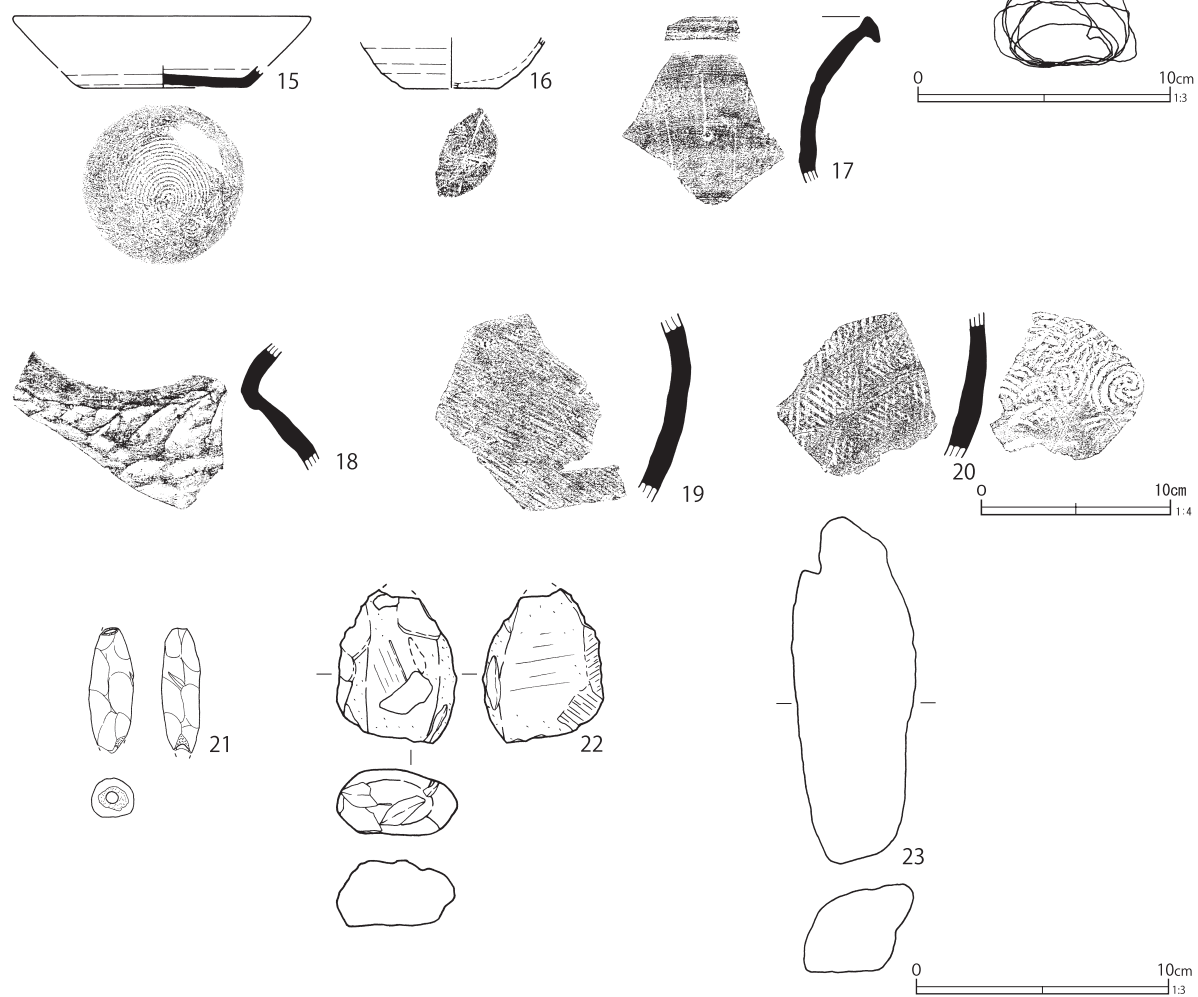


第255図 第55・65号溝跡

SD 3 (1~9)

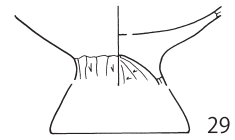
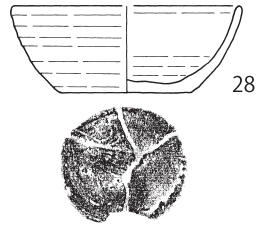
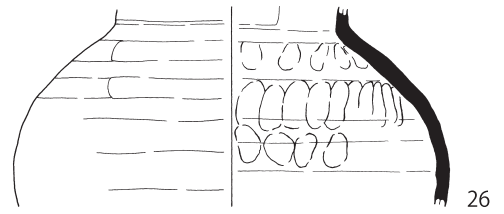
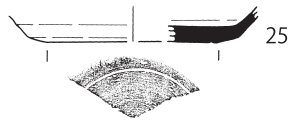


SD 6 (15~23)

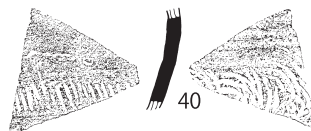
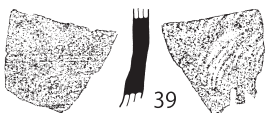
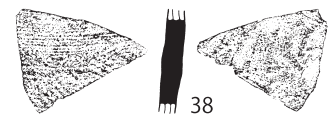
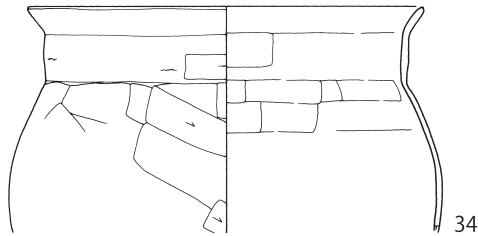
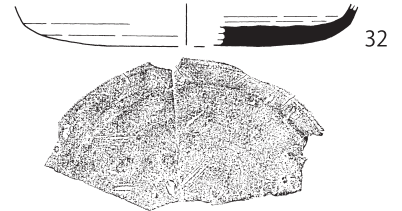


第 256 図 溝跡出土遺物 (1)

SD10 (24 ~ 29)



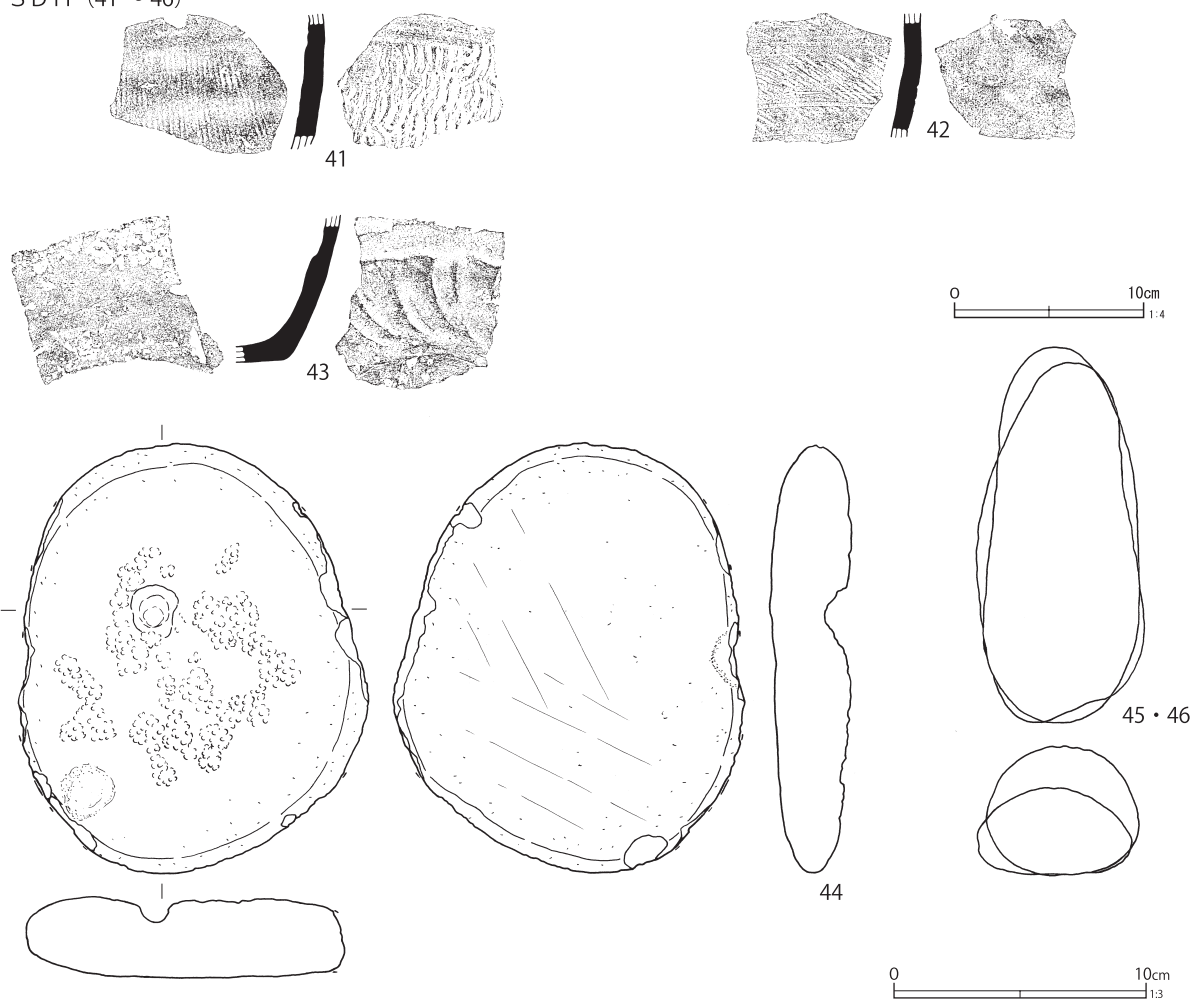
SD11 (30 ~ 40)



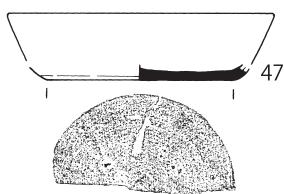
0 10cm
1:4

第 257 図 溝跡出土遺物 (2)

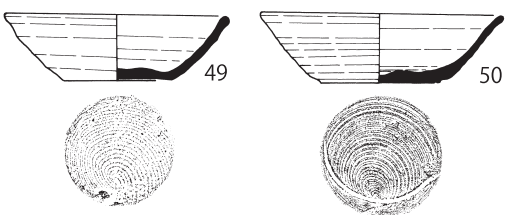
SD11 (41~46)



SD17 (47・48)



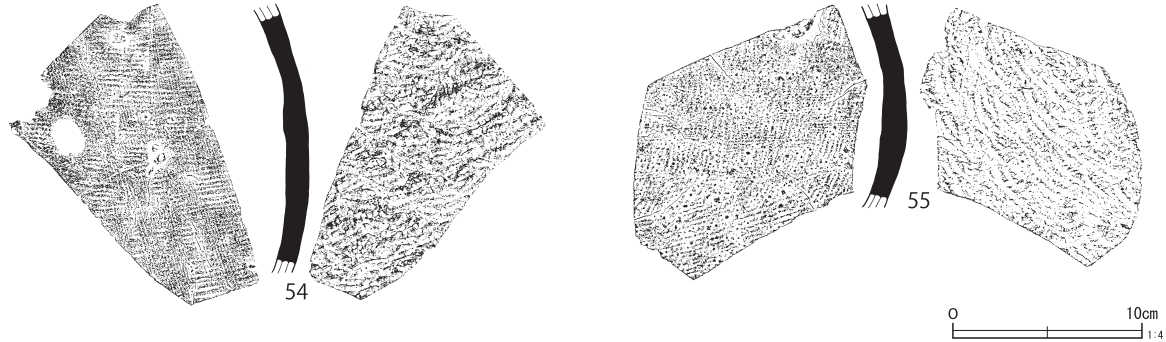
SD20 (49~53)



0 10cm 1:4

第 258 図 溝跡出土遺物 (3)

SD51 (54・55)



第 259 図 溝跡出土遺物（４）

第 74 表 溝跡出土遺物観察表（第 256 ～ 259 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	灰釉陶器	皿	—	[2.4]	(11.0)	I	20	良好	灰	SD 3 外面無釉 猿投産	77-3
2	灰釉陶器	瓶	—	[4.2]	—	I K	10	良好	灰	SD 3 猿投産	77-3
3	須恵器	坏	—	[1.6]	(6.6)	E G H I K	25	良好	灰	SD 3 底部回転糸切り 上野産か	77-3
4	土師器	甕	(23.0)	[6.0]	—	G H I K	20	普通	淡褐	SD 3 内面剥離	77-3
5	須恵器	甕	—	[6.5]	—	D E I K	5	良好	灰	SD 3 上野産か	77-3
6	須恵器	甕	—	[6.7]	—	D E I K	5	良好	灰	SD 3 上野産か	77-3
7	須恵器	甕	—	[5.6]	—	I K	5	良好	灰	SD 3 上野産か	77-3
8	須恵器	甕	—	[6.5]	—	I K	5	良好	黒褐	SD 3 上野産か	77-3
9	石製品	編物石	長さ 13.3 幅 4.4 厚さ 2.0 重さ 190.6 g							SD 3 凝灰岩	80-1
10	石製品	編物石	長さ 8.6 幅 4.6 厚さ 3.3 重さ 226.9 g							SD 3 砂岩	80-1
11	石製品	編物石	長さ 9.8 幅 5.3 厚さ 4.1 重さ 296.3 g							SD 3 砂岩	80-1
12	石製品	編物石	長さ 14.2 幅 3.8 厚さ 2.9 重さ 260.4 g							SD 3 砂岩	80-1
13	石製品	編物石	長さ 12.1 幅 6.2 厚さ 2.7 重さ 359.5 g							SD 3 チャート	80-2
14	石製品	編物石	長さ 11.1 幅 3.9 厚さ 2.6 重さ 152.8 g							SD 3 緑泥片岩	80-2
15	須恵器	坏	—	[1.2]	8.5	C E I J	25	良好	暗赤褐	SD 6 底部回転糸切り 二次被熱	77-3
16	須恵器	坏	—	[2.7]	(5.0)	E G H I K	45	普通	暗褐	SD 6 底部回転糸切り	77-3
17	須恵器	甕	—	[9.2]	—	I J K	5	良好	オリーブ黒	SD 6 N-18 南比企産	77-3
18	須恵器	甕	—	[5.9]	—	E K I	5	良好	黄灰	SD 6 上野産か	77-3
19	須恵器	甕	—	[10.0]	—	E I K	5	良好	黄灰	SD 6 上野産	77-3
20	須恵器	甕	—	[7.6]	—	I K	5	良好	灰	SD 6 N-18 上野産	77-3
21	土製品	土錘	長さ 4.9 最大径 1.7 孔径 4.5mm 重さ 12.0 g			G	100	普通	淡褐	SD 6	79-2
22	石製品	砥石	長さ [6.1] 幅 4.7 厚さ 2.6 重さ 49.6 g							SD 6 Q-17 角閃石安山岩 欠損	79-3
23	石製品	編物石	長さ 12.4 幅 4.7 厚さ 2.4 重さ 208.8 g							SD 6 砂岩	80-2
24	須恵器	坏	—	[2.1]	(5.6)	B I K	40	普通	暗灰	SD 10 No. 5 底部回転糸切り	77-4
25	須恵器	坏	—	[1.9]	(9.0)	I J K	25	良好	灰	SD 10	77-4
26	須恵器	甕	—	[10.6]	—	B I K L	25	普通	暗灰	SD 10 No. 1・3・7	60-6
27	須恵器	坏	(16.0)	[3.0]	—	A D E G K	25	良好	灰白	SD 10 No. 16	77-4
28	須恵器	坏	(11.8)	4.6	6.8	G H K	40	不良	淡褐	SD 10 No. 4 底部回転糸切り 漆付着	60-7
29	土師器	台付甕	—	[4.1]	—	C G I	10	普通	暗褐	SD 10	60-8
30	須恵器	坏	—	[0.8]	—	C G I K	10	良好	明灰	SD 11 上野産	77-4
31	須恵器	蓋	—	[2.1]	—	G I K	10	普通	灰	SD 11 上野産	77-4
32	須恵器	盤	—	[2.2]	—	A I K E	35	良好	灰	SD 11 上野産か	77-4
33	土師器	坏	(11.6)	[3.9]	—	H I K	25	不良	淡橙	SD 11	60-9

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
34	土師器	甕	20.9	[12.1]	—	A C G H	60	普通	淡橙	S D 11 煤付着	61-1
35	須恵器	甕	—	[6.8]	—	I K	5	良好	灰	S D 11 上野産	77-4
36	須恵器	甕	—	[3.4]	—	E I K	5	良好	黄灰	S D 11 上野産か	77-4
37	須恵器	甕	—	[5.5]	—	I L	5	良好	灰	S D 11 S D 9 と同一個体か 湖西産	77-4
38	須恵器	甕	—	[5.5]	—	E I K	5	良好	灰	S D 11 上野産	77-4
39	須恵器	甕	—	[5.2]	—	I K	5	良好	灰	S D 11 上野産	77-4
40	須恵器	甕	—	[5.3]	—	E I K	5	良好	黒褐	S D 11 上野産	77-4
41	須恵器	甕	—	[7.1]	—	I K	5	良好	黒褐	S D 11 上野産	77-5
42	須恵器	甕	—	[6.5]	—	E I K	5	良好	黄灰	S D 11 上野産	77-5
43	須恵器	甕	—	[6.6]	—	A I J K	5	良好	灰白	S D 11 南比企産	61-2
44	石製品	砥石	長さ 16.9 幅 13.9 厚さ 3.3 重さ 1006.6 g							S D 11 安山岩 周縁部一部欠損	79-5
45	石製品	編物石	長さ 14.7 幅 6.0 厚さ 5.5 重さ 693.5 g							S D 11 閃緑岩	80-2
46	石製品	編物石	長さ 13.8 幅 6.5 厚さ 3.4 重さ 474.8 g							S D 11 花崗閃緑岩	80-2
47	須恵器	坏	—	[0.8]	9.8	I J K L	50	普通	灰	S D 17	
48	須恵器	甕	—	[4.2]	—	I K J	5	良好	灰	S D 17 南比企産	77-5
49	須恵器	坏	11.8	13.6	5.7	I G J K	100	灰	灰	S D 20 №1 底部回転糸切り 南比企産 鳩山Ⅷ	61-3
50	須恵器	坏	12.8	3.7	6.3	C D E G	100	普通	黒灰	S D 20 №1 底部回転糸切り 産地不明	61-4
51	土師器	坏	(10.0)	[1.9]	—	G K	10	普通	橙褐	S D 20 G -17	61-5
52	土師器	坏	(11.6)	[2.4]	—	C G H	10	普通	橙褐	S D 20・S D 30	61-6
53	土師器	坏	(12.4)	[3.0]	—	G H	10	普通	橙褐	S D 20 G -17	61-7
54	須恵器	甕	—	[14.2]	—	A E J K	5	良好	灰褐	S D 51 上野産か	77-5
55	須恵器	甕	—	[10.7]	—	I K	5	良好	黒褐	S D 51 上野産か	77-5

に壊されているため不明である。深さは0.46mである。断面は逆台形或いは箱薬研形と考えられる。底面は平坦である。

確認できた覆土は、礫を含む灰黄褐色土である。

遺物は土師器の小片が少量出土したが、図示できるものはない。

第65号溝跡（第255図）

M・N-16グリッドに位置する。東西方向に延び、西側は調査区外に続く。第43号住居跡、第31号土壙と重複し、本遺構が古い。

検出した長さは4.20mで、幅は0.34～0.60mである。深さは0.09mである。断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。

遺物は出土しなかった。

溝跡出土遺物（第256～259図）

奈良・平安時代の溝跡からは、灰釉陶器、須恵器、土師器、ロクロ土師器、編み物石が出土している。

1・2は灰釉陶器である。1は段皿の底部外周である。猿投産。K-90窯段階。2は瓶類の肩部

である。肩部に釉が厚くかかる。猿投産。

28のロクロ土師器坏は、被熱しており、変色している。漆が付着している。

34は、土師器のコの字口縁の甕である。胎土には、角閃石、白色粒子が目立つ。器肉は薄く、刀子が用いられている。コの字の屈曲は弱い。

35は須恵器の甕口縁部である。剥離面の様相から、突帯が付く可能性がある。

37は小型の甕になると考えられる。湖西産で7世紀の資料である可能性が高い。

44は扁平な礫を用いたもので、表面には窪み石状の凹みが見られ、裏面は刃物痕が見られ、砥石として利用されている。安山岩製。

49・50は完形の須恵器坏である。いずれも底部回転糸切り。49は南比企産。50は産地不明である。西毛産か。

(3) 土壌

土壌は合計67基を検出し、このうち53基が奈良・平安時代に属する。(第260～264図)。

遺構の時期は主に出土遺物から判断したが、遺物の出土しないものも多かった。そこで、出土遺物のないものは、覆土や重複関係などから時期を判断した。

遺構は調査区全体に分布するが、特に調査区中央部にあたる、K～Nグリッド内に集中する傾向が認められる。

また、F-16グリッドに位置する、第60～65号土壌は、調査区北側の畠跡と溝跡が多く検出された範囲にあり、調査時には畠跡と関係するものと考えていた。検出状況は、当初しまりの強い灰褐色のシルト質土が不定形に広がっており、その段階では明瞭な平面プランを把握することができなかった。そこで、灰褐色土を掘り下げたところ連続する土壌状の掘り込みが確認できた。現地での確認が十分にできなかったため、本報告では調査時の所見に従って土壌として報告するが、道路跡にみられる波板状遺構との類似を否定できないと考えている。

第2号土壌 (第260図)

R-17グリッドに位置する。第6号溝跡と重複し、本遺構が古い。

平面形は不整楕円形で、断面形は鉢形である。覆土は3層に分層できた。このうち、最下層に黒褐色土、1・2層には褐灰色土が堆積していた。いずれも粘性が強かった。1・2層には炭化物粒子が、2層には焼土粒子が含まれていた。さらに、全体に地山の黄褐色土が混入していた。底面は不整楕円形を呈し中央部がやや低い。壁は緩い傾斜で立ち上がるが、南側はやや傾斜が急になる。規模は長軸長0.66m、短軸長0.48m、深さ0.34mである。長軸方位はN-78°-Wを指す。

遺物は、土師器甕の小片が少量出土したのみである。

第3号土壌 (第260図)

N-17グリッドに位置する。

平面形は不整楕円形である。底面は中央部が窪み、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は褐灰色の粘質土で上層は地山土のブロックが多いことから下層と分けて2層に分層できた。規模は長軸長0.80m、短軸長0.70m、深さ0.25mである。長軸方位はN-27°-Wを指す。

遺物は、土師器甕を主として坏、須恵器甕の小片が出土した。土師器甕の破片には器厚が薄く胴部が球胴となるものの底部が含まれていた。

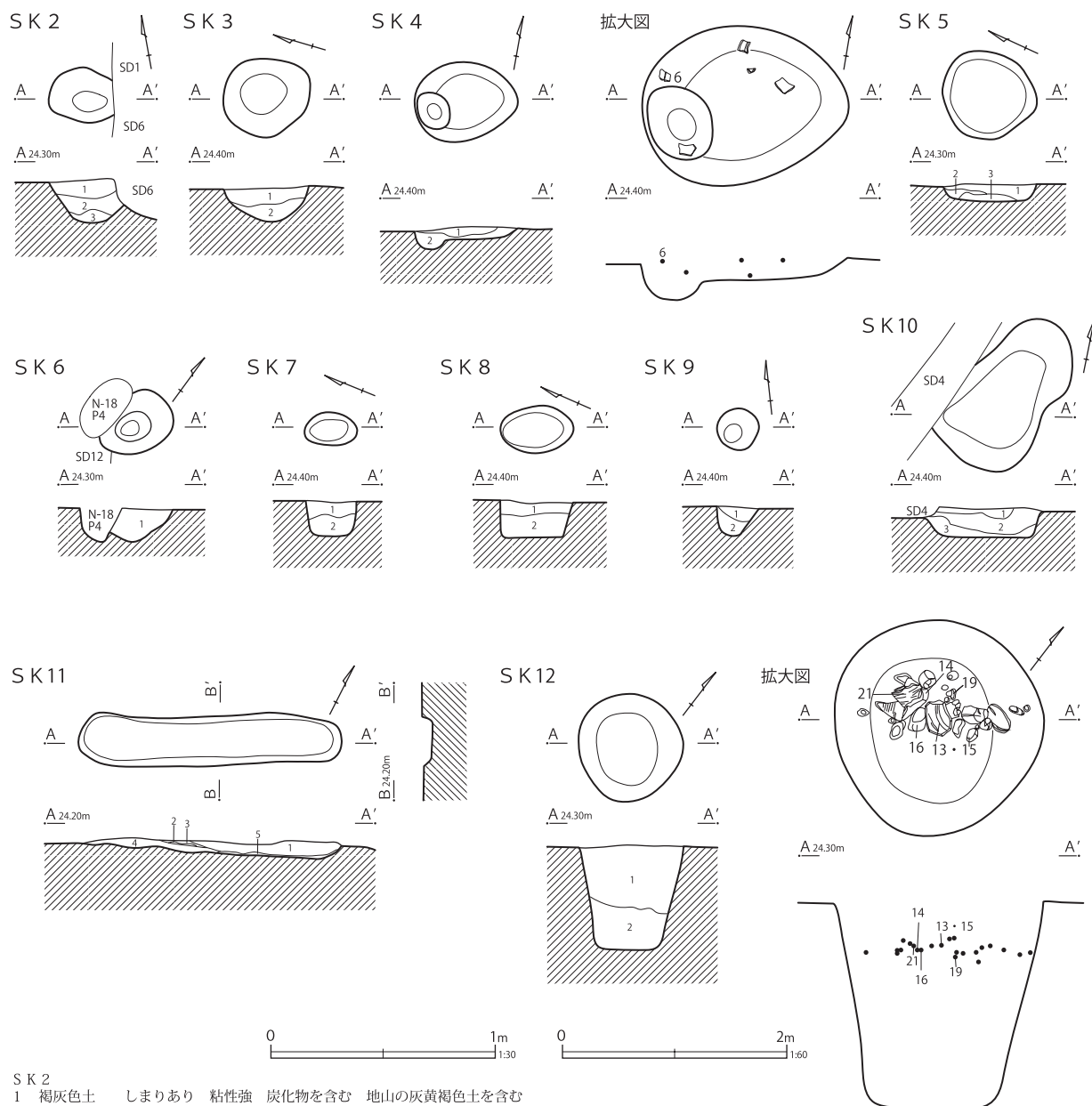
第265図1～5に、出土遺物を示した。1は土師器甕の底部である。内外面にヘラナデが施され、底部にはヘラケズリが認められる。前述のとおり、胴部が球形を呈するものと推察される。2～5は須恵器甕であり、胴部の破片と考えられる。いずれも、胎土に長石・石英を多量に含む。また、片岩がわずかに含まれることから、末野窯産と考えられる。外面には平行叩きが施された後、一部ではヘラ状工具によって叩きの痕跡がナデ消されている。内面には同心円状の当て具痕が認められる。胎土や器厚が極めて類似しており、同一個体の可能性が高い。5は、他の3片と比較してやや厚手であり、底部に近い部位と思われる。

遺構の時期は、出土した遺物から平安時代と考えられる。

第4号土壌 (第260図)

N-17グリッドに位置する。平面形は不整楕円形である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。西側にピット状の窪みがあるが土層断面では重複関係は観察されなかった。一方で、本土壌に伴う掘り込みであるかは不明である。覆土は2層に分層できた。自然堆積と考えられる。規模は長軸長0.92m、短軸長0.69m、深さ0.21mである。長軸方位はN-69°-Eを指す。

遺物は、土師器甕、須恵器坏などの小片が少量出土した。



SK 2
 1 褐灰色土 しまりあり 粘性強 炭化物を含む 地山の灰黄褐色土を含む
 2 褐灰色土 しまりあり 粘性強 焼土・炭化物なし 1層よりも地山土を多量に含む
 3 黒褐色土 地山土をわずかに含む

SK 3
 1 褐灰色土 粘質土 しまり強 全面に酸化鉄を多量含む
 灰黄褐色土（地山土）をブロック状に含む
 2 褐灰色土 粘質土 しまり強 酸化鉄を含むが1層より少ない

SK 4
 1 褐灰色土 粘質土 しまり強 酸化鉄・焼土粒子・炭化粒子を少量含む
 灰白色シルトブロックを少量含む
 2 灰白色土 粘質土 しまり強 全体に酸化鉄を含むが量は少ない

SK 5
 1 褐灰色土 粘質土 しまりあり 粘性強 焼土わずかに含む
 2 黒色土 しまり弱 粘性弱 炭化物を多量に含む
 3 灰黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり

SK 6
 1 褐灰色土 しまりあり 粘性強 炭化粒子少量含む

SK 7・8
 1 暗褐色土 しまりあり 粘性あり 酸化鉄を全体に多量に含む
 2 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 酸化鉄を全体に多量に含む

SK 9
 1 黒褐色土 しまりあり 粘性あり 酸化鉄少量含む
 2 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 酸化鉄多量含む

SK 10
 1 黒褐色土 しまりなし 粘性なし 炭化物多量に含む 焼土微量含む
 2 黄灰色土 しまりあり 炭化物微量含む 酸化鉄微量含む
 3 黄灰色土 しまりあり 炭化物なし 酸化鉄多量含む

SK 11
 1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり
 2 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 炭化粒子微量含む
 3 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 炭化粒子微量含む 焼土粒子多量含む
 4 黒色土 しまりあり 粘性あり 灰を主体とする 焼土粒子少量含む
 地山ブロック少量含む
 5 黒色土 しまりやや弱 粘性あり 灰層

SK 12
 1 褐灰色土 しまりあり 粘性強 白色粘土ブロック多量含む 炭化粒子を含む
 焼土粒子微量含む
 2 黒色土 しまりあり 粘性強 シルト質 炭化粒子少量含む
 ※2層底面にうすく黒色層 有機物が黒化したものか

第 260 図 第 2～12 号土壌

第265図6に出土遺物を示した。須恵器の坏の破片で、底部を欠損する。胎土の様相から、末野窯産と考えられる。

第5号土壌（第260図）

N-16グリッドに位置する。第9号溝跡と重複し、第5号土壌が新しい。

平面形は不整円形で、断面形は皿形である。覆土は3層に分層できた。1層の粘質土が主体であり、第2層は炭化物が主体を占める。3層は、地山に近い灰黄褐色土であった。底面はほぼ平坦で、壁は湾曲しながら立ち上がる。規模は長軸長0.85m、短軸長0.78m、深さ0.15mである。長軸方位はN-17°-Wを指す。

第265図7に出土遺物を示した。須恵器の坏の破片で、底部を欠損する。焼成は不良で、煤の付着により内面は黒色を呈する。胎土の様相から、末野窯産と考えられる。

第6号土壌（第260図）

N-18グリッドに位置する。第12号溝跡・N-18グリッドのP4と重複し、グリッドピットに西側を壊されている。第12号溝跡との新旧関係は不明である。

平面形は楕円形と思われ、断面形態は碗形である。覆土は単層であった。底面は狭く中央部が窪む。壁は中位で屈曲し広がりながら立ち上がる。規模は長軸長0.69m、遺存する短軸長0.50m、深さ0.30mである。長軸方位はN-30°-Eを指す。

遺物は、土師器甕、坏の小片が出土した。

第7号土壌（第260図）

O-17グリッドに位置する。

平面形は楕円形である。覆土は2層に分層できた。シルト質土で上層は暗褐色を呈し、下層は灰色が濃くなる。底面はほぼ平坦で、壁はやや開きながら急傾斜で立ち上がる。規模は長軸長0.47m、短軸長0.30m、深さ0.29mである。長軸方位はN-24-Wを指す。

遺物は、土師器甕の小片がごく少量出土した。

第8号土壌（第260図）

O-17グリッドに位置する。

平面形は楕円形で、断面形は船底型である。覆土および、底面・断面形態は第7号土壌に極めて近い。規模は長軸長0.66m、短軸長0.44m、深さ0.30mである。長軸方位はN-24°-Wを指す。

遺物は、土師器甕の小片がごく少量出土した。

第9号土壌（第260図）

O-17グリッドに位置する。重複する第64号住居跡より新しい。

平面形はほぼ円形である。底面はほぼ正円形である。壁は南西側がほぼ直立し、北東側は緩い傾斜である。規模は長軸長0.37m、短軸長0.36m、深さ0.24mである。長軸方位は、N-54°-Eを指す。

遺物は、土師器坏の小片が1点出土したのみである。

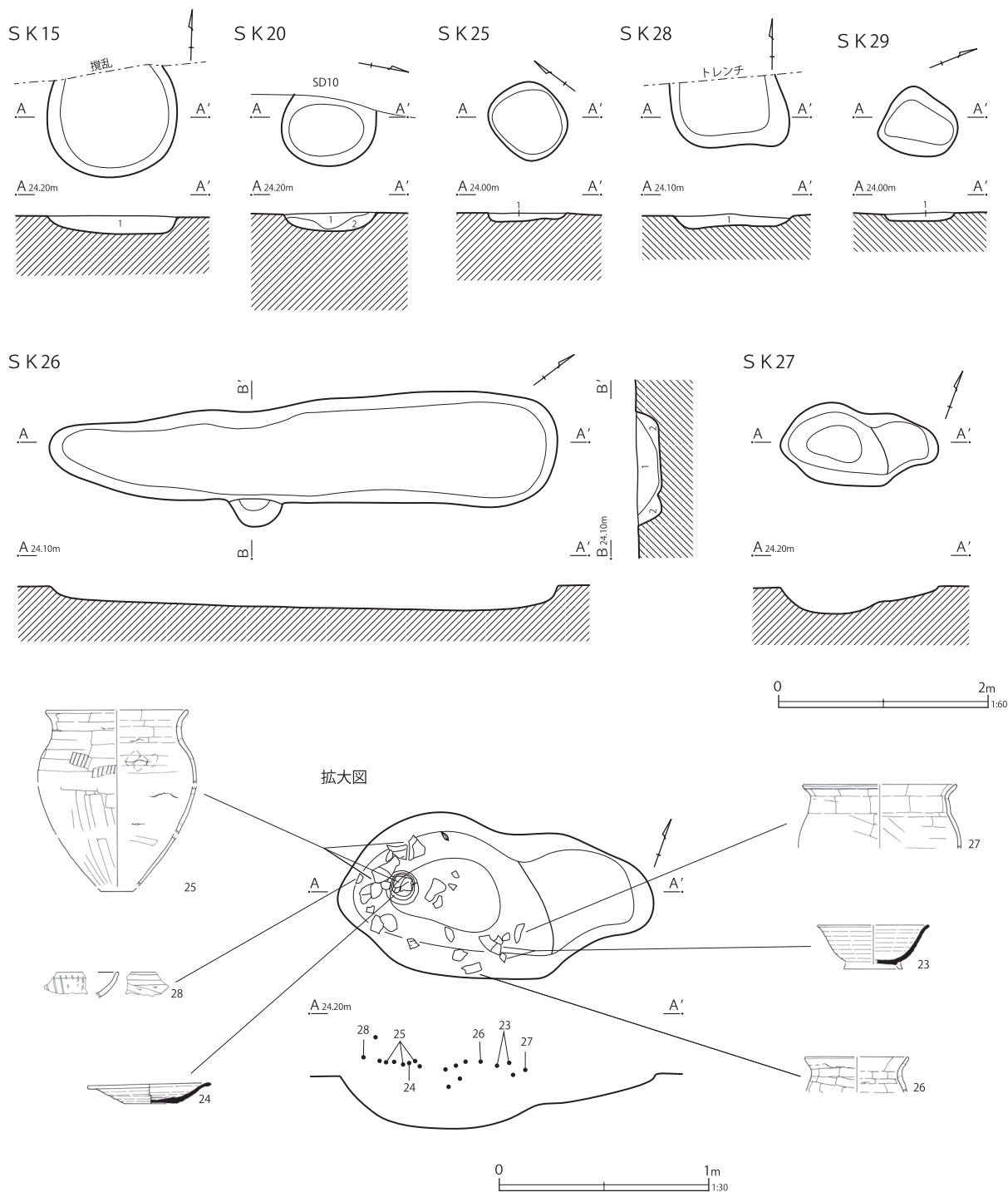
第10号土壌（第260図）

N-17グリッドに位置する。第4・5・11号溝跡、第19号住居跡と重複し、第4・5号溝跡より古く、他の遺構より新しい。

平面形は不整形である。底面は平坦で、壁は直線的に外傾して立ち上がる。覆土は3層に分類できた。このうち、第1層には炭化物が多量に含まれていた。堆積状況から自然堆積と考えられる。規模は長軸長1.47m、短軸長0.90m、深さ0.21mである。長軸方位はN-30°-Eを指す。

遺物は、土師器甕、須恵器甕などの小片が少量出土した。

第265図8～12に、出土遺物を示した。8は、土師器の甕で、口縁部の破片である。外面の上位には強いヨコナデを施し、中位に段が認められる。下位は胴部に向かってヘラケズリが施される。胴部の形状は、長胴形を呈するものと推察される。9～11は、須恵器の甕であり、胴部の破片である。9・11は、外面に平行叩きが施され、一部がナデ消されている。内面には、同心円状の当て具痕が



- S K 15
 1 灰黄褐色土 粘質シルト しまりあり 粘性ややあり 炭化粒子少量含む
- S K 20
 1 灰黄褐色土 シルト しまり強 粘性ややあり 焼土粒子・炭化粒子少量含む 地山粒子多量含む
 2 にぶい黄褐色土 シルト しまり強 粘性弱 地山主体で2層を混入する
- S K 25
 1 褐灰色土 しまり弱 粘性あり 炭化物・焼土を含む
 周辺に切り合う遺構なし 焼土は含むが地面には焼けた痕跡なし

- S K 26
 1 褐灰色土 しまり弱 粘性あり 焼土粒子・炭化物を含む
 2 褐灰色土 しまり強 粘性強 地山ブロック土を多量に含む
- S K 28
 1 褐灰色土 しまり強 粘性あり 炭化物・焼土粒子微量含む
- S K 29
 1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり マンガン・シルト質を微量含む

第 261 図 第 15・20・25～29 号土坑

認められる。10は外面に格子叩きを施し、内面には同心円状の当て具痕が認められる。12は凝灰岩製の砥石である。

第11号土壙（第260図）

M-16グリッドに位置する。重複する第47号住居跡よりも新しい。平面形は不整長方形である。覆土には、炭化粒子、灰を多量に含む。底面は小さな起伏が多い。壁は垂直気味に立ち上がる。規模は長軸長2.34m、短軸長0.46m、深さ0.15mである。長軸方位はN-63°-Eを指す。遺物は、土師器の小破片が少量出土した。

第12号土壙（第260図）

N-17グリッドに位置する。重複する第4・5号溝跡よりも古い。

平面形は不整円形である。底面は中央部がやや窪む。壁は垂直気味に立ち上がり、中位からやや開く。規模は長軸長0.97m、短軸長0.93m、深さ0.73mである。長軸方位はN-34°-Wを指す。遺物は、検出面で礫とともに土師器甕、須恵器甕・瓶頸部などの破片が出土した。

第265図13～18、第266図19～21に出土遺物を示した。13は、須恵器長頸瓶の頸部である。頸部としてはほぼ完形であるが胴部をすべて欠損する。内外面に、自然降灰の付着が認められる。14・15は、須恵器甕の底部である。いずれも、胎土に白色針状物質を含み、南比企窯産である。19～21は、須恵器甕の胴部である。19・20は外面に叩きが施され、内面には同心円状の当て具痕が認められる。21は、焼成がやや不良であり、また内面の剥離が激しいため、調整痕は不明瞭である。19・20は末野窯産、21は南比企窯産と考えられる。16は、土師器の台付甕である。口縁部には、外面に指頭痕が認められ、その後、内外面にはヨコナデが施されたものと考えられる。口唇部と、胴部との接続部には強いヨコナデによる段が認められる。台部を欠損しており、底部には、台部の剥離した痕跡が遺存する。17・18は、土師器甕の破片である。

17は口縁部に近い屈曲部から胴部にかけて、18は底部の破片である。いずれも小片である。

第15号土壙（第261図）

Q・R-18グリッドに位置する。重複する第2号掘立柱建物跡よりも新しい。北側は削平されていた。

平面形は円形と考えられる。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに湾曲しながら外傾して立ち上がる。規模は、長軸長1.25m、短軸長が遺存値で1.00m、深さ0.17mである。長軸方位はN-7°-Wを指す。遺物は、土師器甕、須恵器坏などの小片が出土した。

第266図22に出土遺物を示した。灰釉陶器の碗である。口縁部の破片であり、内外面に漬け掛けによる灰釉の施釉が認められる。

第20号土壙（第261図）

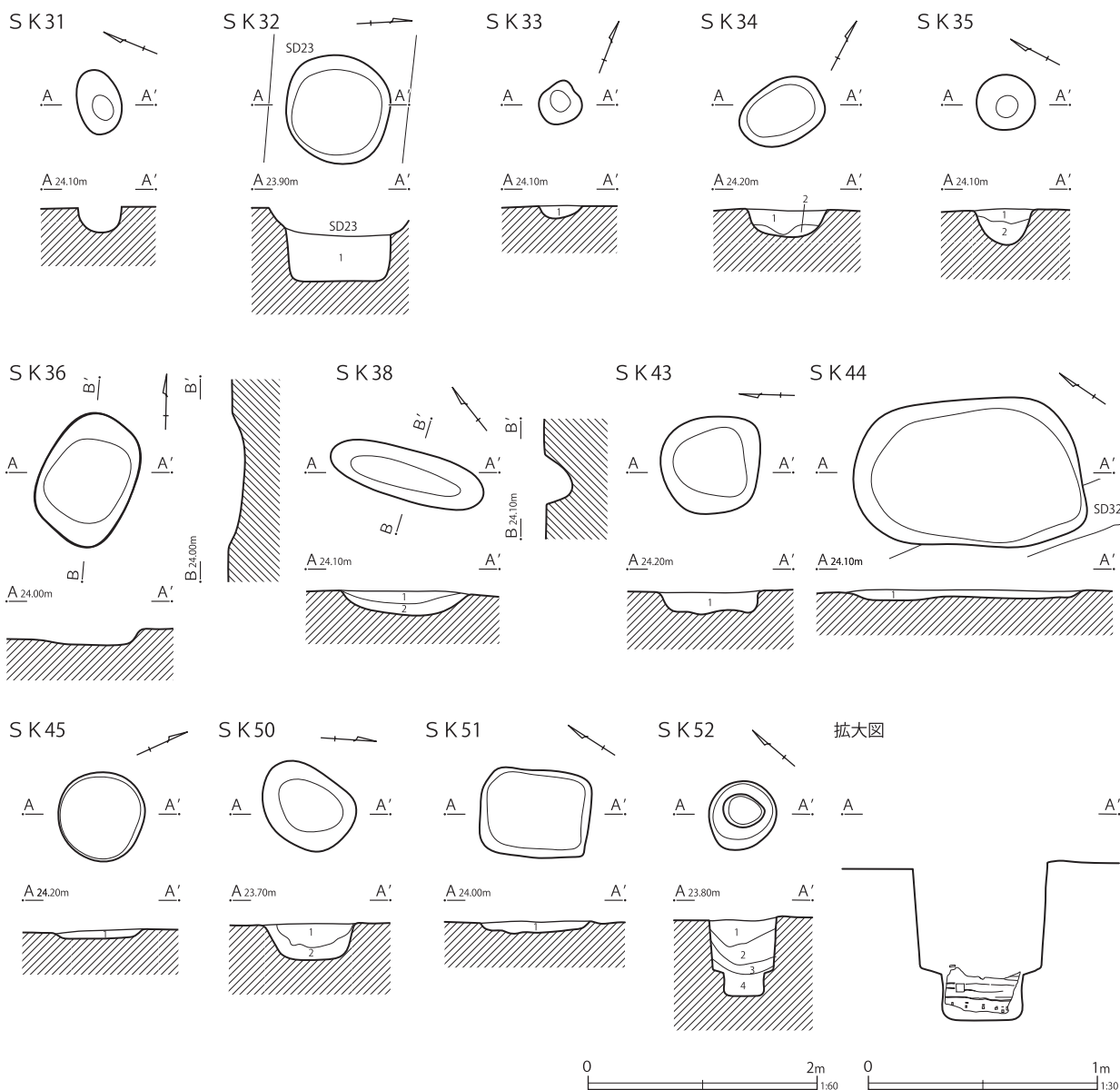
O-17グリッドに位置する。重複する第10号溝跡よりも古いと思われる。第1号円形周溝状遺構の内側に位置しているが、周溝状遺構との新旧関係、共存関係は不明である。平面形は楕円形と考えられる。底面は南側が僅かに下がっているがほぼ平坦である。壁は緩く湾曲しながら立ち上がる。規模は長軸長0.99m、短軸長が遺存値で0.71m、深さ0.14mである。長軸方位はN-7°-Wを指す。遺物は、土師器の小片が2点出土した。

第25号土壙（第261図）

L-18グリッドに位置する。重複する第1号畠跡の畝よりも新しい。平面形は不整方形、断面形は皿形である。底面は緩い起伏を持つ。覆土は単層で炭化物及び焼土粒を含む。規模は長軸長0.74m、短軸長0.67m、深さ0.08mである。長軸方位はN-11°-Eを指す。遺物は、土師器甕の小片が出土した。

第26号土壙（第261図）

K-18グリッドに位置する。重複する第1号畠跡の畝よりも新しい。南東壁の中ほどに位置するピット状の掘り込みが遺構に伴うかどうかは不明



S K 32
1 褐灰色土 しまり強 粘性強 灰色の粘土ブロック・マンガンを含む
自然堆積土ではなく人為的な埋め戻しか

S K 33
1 黒褐色土 しまりあり 粘性あり 灰を主体とする 焼土粒子微量含む

S K 34
1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 焼土粒子・炭化粒子微量含む
地山ブロック多量含む
2 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 地山ブロック極多量含む

S K 35
1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 地山ブロック多量含む
2 1層よりブロックが大きい

S K 38
1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 炭化物微量含む 土器片出土
2 黄灰色土 しまりは1層より強 粘性は1層より強 炭化物を微量含む

S K 43
1 灰黄褐色土 粘質シルト しまり強 粘性ややあり 炭化粒子少量含む
焼土粒子微量含む 地山粒子多量含む

S K 44
1 灰黄褐色土 白色粒子微量含む 炭化物微量含む 焼土微量含む

S K 45
1 黄褐色土 赤褐色ブロック少量含む 炭化物微量含む 白色粒子微量含む

S K 50
1 褐灰色土 しまり強 粘性強 炭化物極微量含む
2層の土をブロック状に含む
しまりは1層より強 粘性は1層より強 炭化物は含まない
※地山 掘りすぎ

S K 51
1 黄灰色土 しまりややあり 粘性ややあり 炭化物を層状（最大で幅 30 cm程・厚さ 2 cm程）に多量含む 焼土粒子を微量含む

S K 52
1 にぶい黄色土 粘質シルト しまりややあり 粘性やや弱
褐灰色土ブロック多量含む
2 灰黄色土 砂質シルト しまりややあり 粘性弱
やや砂質強く混入物ほとんどなし
3 黄灰色土 粘質シルト しまりあり 粘性あり
褐灰色土ブロック少量含む
4 灰黄褐色土 粘質シルト しまりやや弱 粘性あり
黄色地山粒子多量含む

第 262 図 第 31 ～ 36 ・ 38 ・ 43 ～ 45 ・ 50 ～ 52 号土壌

である。

平面形は東西に長い楕円形である。底面はほぼ平坦であるが、北東側が僅かに低い。壁は緩く湾曲して立ち上がる。規模は長軸長4.86m、短軸長1.12m、深さ0.33mである。長軸方位はN-38°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第27号土壙（第261図）

M-17グリッドに位置する。重複する第30号住居跡、第12号溝跡よりも新しい。

平面形は不整形である。底面は不整楕円形で中央部が僅かに窪む。壁は緩く立ち上がり、東側は屈曲してさらに緩い傾斜となる。規模は長軸長1.50m、短軸長0.76m、深さ0.26mである。長軸方位はN-68°-Eを指す。遺物は、土師器甕・坏や、須恵器坏・皿の小片が出土した。

第266図23～28に出土遺物を示した。23は、須恵器の高台付坏である。底部には、回転糸切り痕が認められ、高台は剥離し、欠損している。24は、ロクロ土師器の皿である。底部に回転糸切り痕が認められる。25～27は、土師器甕である。25は屈曲部直下に最大径があり、底部に向かって径がすぼまる形態である。外面は、口縁部から胴部の上位に横方向、胴部中位以下に縦方向のヘラナデが施される。内面にも主にヘラナデを施し、一部に指頭痕が遺存する。26・27はいずれも口縁部付近の破片である。28は土師器坏である。内面に放射状に暗文が認められる7世紀後半の所産の可能性が高い。出土した遺物は、ほとんどが9世紀代に位置づけられるものであり、27は、混入品と考えられる。

第28号土壙（第261図）

N-16グリッドに位置する。重複する第15・16号住居跡よりも古い可能性が高い。

平面形は方形ないしは長方形と思われる。底面は西側と南側に向かってやや低くなる。壁の立ち上がりは緩やかである。規模は長軸長1.13m、短軸長が遺存値0.68m、深さ0.18mである。長軸方

位はN-87°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第29号土壙（第261図）

K-18グリッドに位置する。重複する第1号畠跡の畝と重複し、それより新しい。平面形は不整形である。断面形は皿形で、底面は平坦である。

覆土は単層で、ややシルト質の灰褐色土である。規模は長軸長0.70m、短軸長0.64m、深さ0.11mである。長軸方位はN-7°-Eを指す。遺物は、土師器の細片が出土した。

第31号土壙（第262図）

M-16グリッドに位置する。重複する第65号溝跡より新しい。平面形は楕円形である。底面は中央部が塊形に窪み壁はやや斜めに立ち上がる。覆土は単層でシルト質の暗褐色土である。規模は長軸長0.57m、短軸長0.38m、深さ0.19mである。長軸方位はN-39°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第32号土壙（第262図）

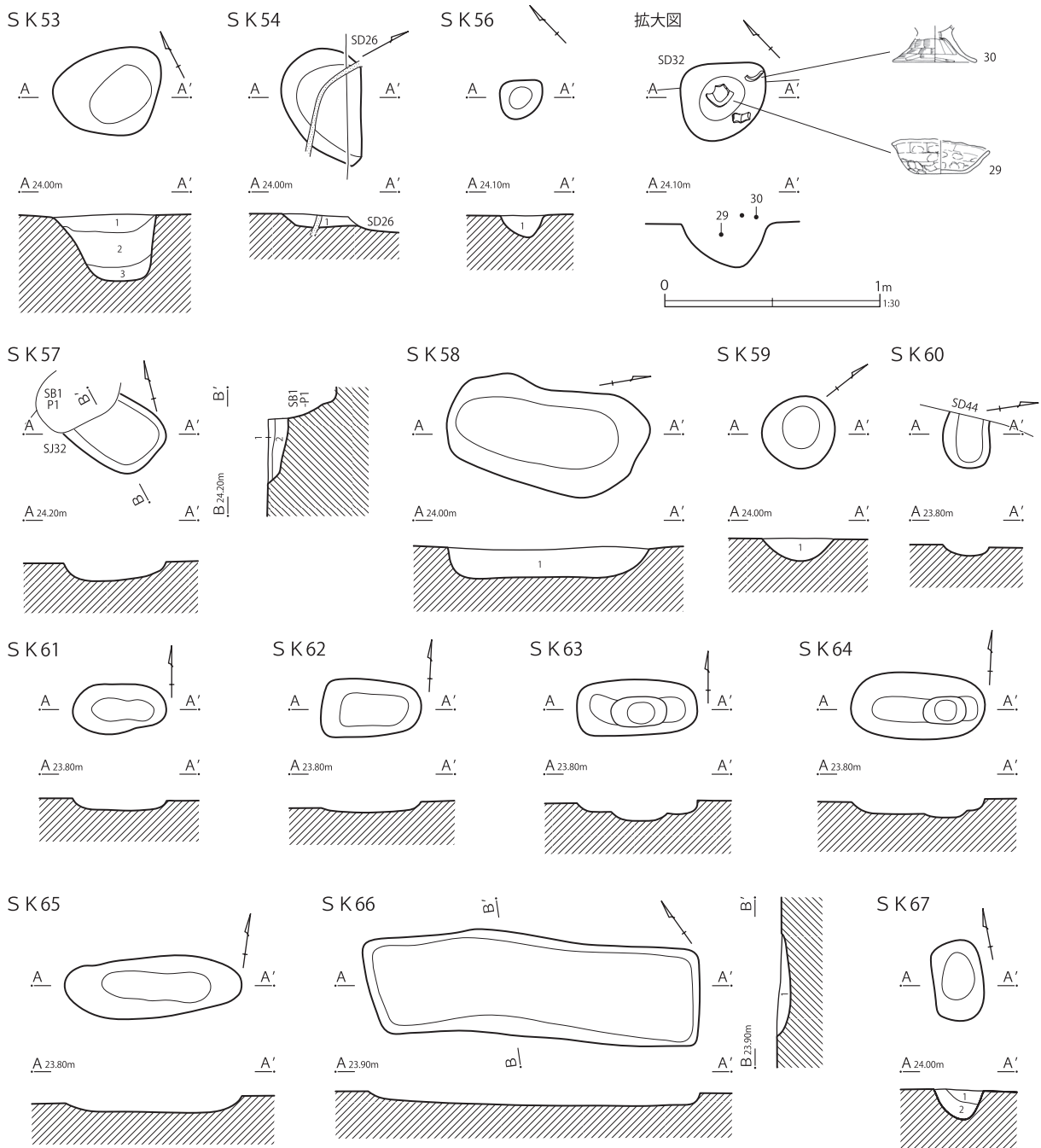
I-16グリッドに位置する。重複する第23号溝跡を完掘後、溝の底面で検出したことから、第32号土壙が古い。平面形は円形である。底面は平坦で、壁は底面からやや外側に開いた後、ほぼ直角に立ち上がる。覆土は粘土ブロック混じりの褐灰色土が主体で、埋め戻されたものと考えられる。規模は長軸長0.93m、短軸長0.90m、深さ0.46mである。長軸方位はN-18°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第33号土壙（第262図）

L-16グリッドに位置する。平面形は不整円形である。底面は中心が窪み、壁は緩く湾曲して立ち上がる。覆土は単層で、灰が多量含まれていた。規模は長軸長0.36m、短軸長0.35m、深さ0.12mである。長軸方位はN-52°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第34号土壙（第262図）

M-16グリッドに位置する。重複する第53号住居跡よりも新しいと思われる。平面形は不整楕円



S K 53
 1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 灰黄褐色砂をブロック状に部分的に含む
 2 褐灰色土 しまりは1層より強 粘性は1層より強 炭化物を微量含む
 3 黄灰色土 しまりあり (1層と同じくらい) 粘性あり (1層と同じくらい) 炭化物を微量含む

S K 54
 1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 地山の砂を全体に含む

S K 56
 1 灰黄褐色土 しまりやや強 粘性やや弱 白色粒子微量含む
 炭化物少量含む

S K 57
 1 褐灰色土 しまりあり 粘性ややあり 地山灰色土を極少量含む
 2 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 1層より暗い褐灰色土を主体とする

S K 58
 1 暗オリーブ灰色土 しまりあり 粘性あり 地山の灰色土をマール状に含む
 黒色土を少量マール状に含む

S K 59
 1 黒褐色土 しまりやや強 粘性やや強 白色粒子微量含む
 灰白色ブロックやや多く含む

S K 67
 1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 炭化粒子微量含む 地山粒子少量含む
 2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性あり 地山ブロック少量含む
 (2層の上層に多く含まれる)

第 263 図 第 53・54・56～67 号土壌

形である。底面は凹凸があり北東側が低い。壁はやや外傾して立ち上がる。規模は長軸長0.76m、短軸長0.53m、深さ0.19mである。長軸方位はN-34°-Eを指す。遺物は、土師器甕、須恵器坏の小片が出土したが図示できるものはない。

第35号土壙（第262図）

M-16グリッドに位置する。平面形は円形である。壁は東側が緩く湾曲する。覆土は2層に分層できる。地山ブロックが多く含まれ、埋め戻されたと考えられる。規模は長軸長0.52m、短軸長0.49m、深さ0.30mである。長軸方位はN-31°-Wを指す。

遺物は、土師器、須恵器の小片が出土した。

第36号土壙（第262図）

R-18グリッドに位置する。重複する第33号住居跡よりも新しい。平面形は隅丸長方形と考えられる。底面は、中央部がやや低い皿状を呈する。壁は緩く湾曲して立ち上がる。規模は長軸長1.13m、短軸長0.82m、深さ0.14mである。長軸方位はN-29°-Eを指す。遺物は、土師器の小片が少量出土した。

第38号土壙（第262図）

L-16グリッドに位置する。平面形は楕円形である。覆土は2層で上層に土師器細片が含まれていた。底面は幅広の薬研状で、壁の立ち上がりは緩やかである。規模は長軸長1.38m、短軸長0.44m、深さ0.19mである。長軸方位はN-37°-Wを指す。遺物は、土師器甕の小片が少量出土した。

第43号土壙（第262図）

N-17グリッドに位置する。他の遺構との重複はない。平面形は不整円形で、断面形は皿形である。覆土は単層で、シルト質の灰黄褐色土である。底面はやや起伏があり、壁は底面から湾曲して立ち上がった後ほぼ垂直になる。規模は長軸長0.87m、短軸長0.85m、深さ0.22mである。長軸方位はN-4°-Wを指す。遺物は、土師器甕・坏、須恵器甕の小片が少量出土した。

第44号土壙（第262図）

L-17グリッドに位置する。重複する第32号溝跡よりも新しい。平面形は不整楕円形で、断面形は浅い皿形である。覆土は単層で、やや粘性の強い灰黄褐色土である。底面は南側がやや低くなる。規模は長軸長2.06m、短軸長1.32m、深さ0.06mである。長軸方位はN-38°-Wを指す。遺物は、土師器甕・坏の小片が出土した。

第45号土壙（第262図）

L-17グリッドに位置する。平面形は円形である。ごく浅い皿状で、上部は削平されている可能性がある。覆土は単層で、わずかに炭化粒子を含む粘質のシルトである。底面はほぼ平坦である。規模は長軸長1.00m、短軸長0.74m、深さ0.07mである。長軸方位はN-48°-Wを指す。遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第50号土壙（第262図）

I-16グリッドに位置する。重複する第23号溝跡よりも古い。平面形は不整楕円形である。底面はほぼ平坦で、壁は急角度で外傾して立ち上がるが、南側は立ち上りの角度がやや緩い。覆土は2層に分層できた。埋め戻された可能性がある。規模は長軸長0.86m、短軸長0.64m、深さ0.33mである。長軸方位はN-31°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

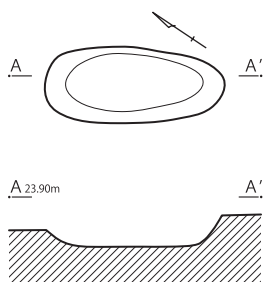
第51号土壙（第262図）

K-17グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、断面形は皿形である。覆土は単層で黄灰色土を主体とし、上面には厚さ2cmほどの炭化物粒子の堆積が認められた。底面はやや起伏がある。規模は長軸長0.96m、短軸長0.77m、深さ0.06mである。長軸方位はN-30°-Wを指す。遺物は、土師器甕の細片がごく少量出土した。

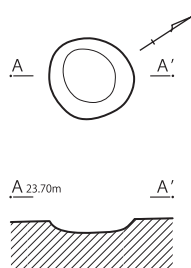
第52号土壙（第262図）

F-15グリッドに位置する。重複する第30号溝跡より新しい。平面形は円形である。底面中央に曲物が設置されていた。底面は砂層に達してお

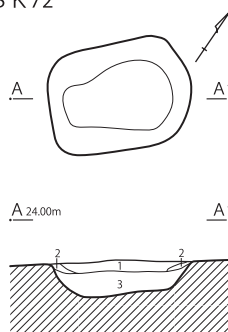
S K 68



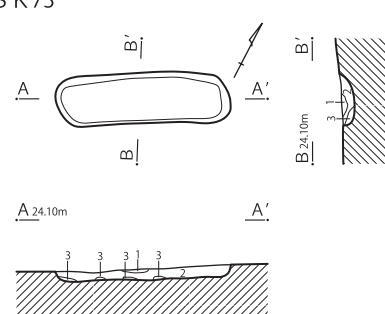
S K 70



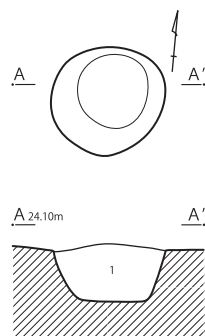
S K 72



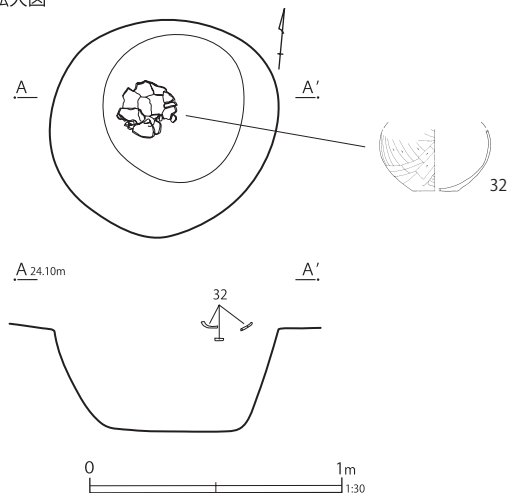
S K 73



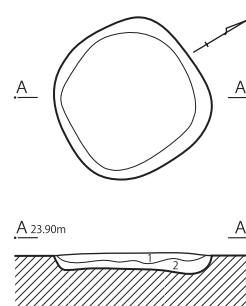
S K 71



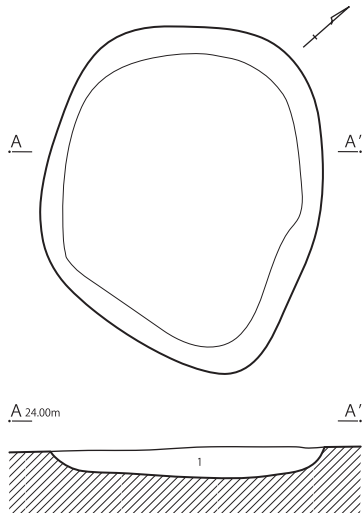
拡大図



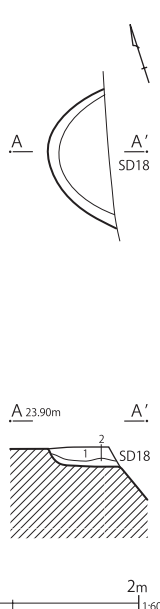
S K 74



S K 75



S K 76



S K 71

1 黒褐色土 粘質 しまり強 粘性あり 灰白色の地山土をブロック状に多量含む
礫を多量含む (埋め戻し土)

S K 72

1 灰黄褐色土 粘質シルト しまり強 粘性弱 下部に炭化粒子多量含む
2 灰黄褐色土 混土炭層 焼土粒子含む
3 褐灰色土 シルト しまりややあり 粘性弱 暗褐色土をブロック状に混入する

S K 73

1 暗褐色土 混土炭層 焼土極多量含む
2 褐灰色土 シルト しまりあり 粘性ややあり 焼土粒子・炭化粒子少量含む
3 灰黄褐色土 シルト やや砂質 2層土粒子少量含む

S K 74

1 褐灰色土 シルト しまりあり 粘性あり 炭化物微量含む
2 黄灰色土 粘質シルト しまりあり 粘性あり 焼土粒子を少量含む
一部層状を成す炭化物を多量に含む

S K 75

1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 黄灰色砂をブロック状に含む
炭化物・焼土なし 礫を多量に含む

S K 76

1 灰黄褐色土 粘質土 しまり強 粘性あり
2 にぶい黄褐色土 砂質シルト 地山粒子多量含む

第 264 図 第 68・70～76 号土壌

り、曲物は土壇底面の砂層中に、その径ぎりぎりの大きさの穴を掘り、嵌め込むように設置されたものと考えられる。しかし、土圧の影響であろうか、曲げ物は検出時やや歪んでいた。遺構の壁は垂直に立ち上がる。覆土は4層に分層でき、一部は埋め戻しに由来する可能性がある。規模は長軸長0.61m、短軸長0.59m、深さ0.69mである。長軸方位はN-49°-Wを指す。

曲物は、脆弱で傷みが激しくそのまま取り上げることはできなかった。調査時の観察では、側板の材質は広葉樹の樹皮様のものである。径は約20cmで、縦方向の材を横にして曲げてあった。厚さは1~2mmで、残存していた深さは約20cmである。下から4cmほどの範囲で、約6cm間隔でそれぞれ上下に2箇所、樹皮で綴じてあった。綴じ紐状の材は幅が5~8mmで、8mm間隔で出して潜らせている。紐を通す切目は、長さが10~12mm、幅は約1mmで、両端は閉じており鋭い金属製の両刃の刃物が使われたことを窺わせる。

第53号土壇（第263図）

K-17グリッドに位置する。重複する第2号畠跡の畝よりも新しい。平面形は不整円形である。覆土は3層であり、砂粒を含む褐灰色土が主体である。下層には炭化物がわずかに認められた。底面は楕円形で中央部がやや低くなり、壁は底面から湾曲して立ち上がった後ほぼ垂直になり、西側では上面で開いている。規模は長軸長0.97m、短軸長0.82m、深さ0.59mである。長軸方位はN-74°-Eを指す。遺物は、土師器甕の胴部破片が少量出土した。

第54号土壇（第263図）

K-17グリッドに位置する。重複する第26号溝跡より古い。平面形は、第26号溝跡によって北側が壊されているため詳細は不明であるが、残存部分から推定すると楕円形と考えられる。底面はほぼ平坦で、壁は緩く外傾して立ち上がる。覆土中には噴砂の貫入が認められた。規模は長軸

長(0.78)m、短軸長0.94m、深さ0.10mである。長軸方位はN-34°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第56号土壇（第263図）

L-17グリッドに位置する。第32号溝跡とわずかに重複し、第56号土壇が新しい。平面形は不整円形である。覆土はシルト質の灰黄褐色土単層である。底面は中央部が低く、壁はある程度の傾斜を持って立ち上がる。規模は長軸長0.38m、短軸長0.36m、深さ0.10mである。長軸方位はN-86°-Wを指す。遺物は、覆土中位から土師器甕・台付甕・坏などの小片が出土した。

第266図29・30に出土遺物を示した。29は土師器の坏である。器形のゆがみが著しい。体部には内外面ともに指頭痕が認められ、口縁部にはヨコナデが施される。底部にはヘラケズリが施される。30は、台付甕の脚部である。外面には、ヘラ状工具、あるいは木口状工具によるヨコナデが施され、内面はヘラケズリ後ヘラナデによって、絞り痕を消している。甕部をすべて欠損している。

第57号土壇（第263図）

R-18グリッドに位置する。重複する第1号掘立柱建物跡よりも古い。検出時には掘立柱建物跡の柱穴と形状が類似することから、掘立柱建物跡の重複と考えたが、他の柱穴には同様の掘り込みがなかったことから単独の土壇と判断した。

平面形は隅丸長方形と考えられる。底面は中央部が低くなるものと考えられる。壁は外傾して立ち上がる。規模は長軸長が残存値で0.80m、短軸長0.65m、深さ0.18mである。長軸方位はN-41°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第58号土壇（第263図）

E・F-17グリッドに位置する。平面形は不整楕円形である。底面は平坦で、壁は緩く湾曲して立ち上がる。規模は長軸長1.88m、短軸長0.98m、深さ0.26mである。長軸方位はN-15°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第59号土壙（第263図）

K-16グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、断面形は鉢形を呈する。覆土は単層で、黒褐色土が主体である。底面はやや楕円形で中央部がくぼみ、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。規模は長軸長0.69m、短軸長0.67m、深さ0.17mである。長軸方位はN-50°-Wを指す。遺物は、土師器甕の小片がごく少量出土した。

第60号土壙（第263図）

F-16グリッドに位置する。第44号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は不整楕円形と考えられる。底面はほぼ平坦で、壁は緩く湾曲しながら立ち上がる。覆土は単層で、灰青色の砂質土であった。規模は長軸長が残存値で0.50m、短軸長0.45m、深さ0.09mである。長軸方位はN-70°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第61号土壙（第263図）

F-16グリッドに位置する。平面形は不整楕円形である。底面はほぼ平坦で、壁は緩い傾斜で立ち上がる。覆土は単層で、拳大の礫を少量混入する灰青色砂質土である。規模は長軸長0.83m、短軸長0.48m、深さ0.08mである。長軸方位はN-83°-Eを指す。

第266図31に出土遺物を示した。31は、須恵器の胴部破片と考えられる。

第62号土壙（第263図）

F-16グリッドに位置する。平面形は不整楕円形である。底面はほぼ平坦で、壁は緩い傾斜で立ち上がる。覆土は単層で、礫を少量混入する灰青色砂質土である。規模は長軸長0.93m、短軸長0.54m、深さ0.08mである。長軸方位はN-89°-Wを指す。遺物は、須恵器甕片が1点出土した。

第63号土壙（第263図）

F-16グリッドに位置する。平面形は不整楕円形である。底面は中央部が浅いピット状に下がる。壁は緩い傾斜で立ち上がる。覆土は単層で、礫を

少量混入する灰青色砂質土である。規模は長軸長1.13m、短軸長0.52m、深さ0.22mである。長軸方位はN-90°-Eを指す。遺物は、須恵器甕の小片が出土した。

第64号土壙（第263図）

F-16グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、底面は中央が浅いピット状である。壁は緩い傾斜で立ち上がる。覆土は単層で、礫を少量混入する灰青色砂質土である。規模は長軸長1.24m、短軸長0.58m、深さ0.16mである。長軸方位はN-89°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第65号土壙（第263図）

F-16グリッドに位置する。平面形は長方形である。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは西側が緩い傾斜である。覆土は単層で、灰青色砂質土である。規模は、長軸長3.11m、短軸長0.95m、深さ0.15mである。長軸方位はN-49°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第66号土壙（第263図）

J-16グリッドに位置する。平面形は不整楕円形である。底面はほぼ平坦で、壁は緩い傾斜で立ち上がる。覆土は単層で礫を少量混入する灰青色砂質土である。規模は長軸長1.64m、短軸長0.56m、深さ0.10mである。長軸方位はN-85°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第67号土壙（第263図）

M-17・18グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形である。覆土は2層で、上層には炭化粒子を僅かに含み、全体に地山の褐色土を混入する。底面は楕円形で中央部がくぼむ。壁は外傾して立ち上がる。規模は長軸長0.75m、短軸長0.48m、深さ0.22mである。長軸方位はN-8°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第68号土壙（第264図）

J・K-17・18グリッドに位置する。平面形は楕円形である。底面は平坦で、壁は東側がやや傾斜が急であるが他は緩く外傾して立ち上がる。規

模は長軸長1.42m、短軸長0.60m、深さ0.24mである。長軸方位はN-35°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第70号土壙（第264図）

F-16グリッドに位置する。第42号溝跡・第6号畠跡の畝溝と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は円形である。底面はほぼ平坦で、壁は湾曲しながら緩やかに立ち上がる。規模は長軸長0.67m、短軸長0.66m、深さ0.10mである。長軸方位はN-33°-Eを指す。遺物は土師器甕の小片が1点出土したのみで、図示できるものはない。

第71号土壙（第264図）

A-14グリッドに位置する。重複する第6号井戸跡よりも新しい。平面形は楕円形である。底面はほぼ平坦で、壁は北側がほぼ垂直であるが、南側はやや緩やかに立ち上がる。覆土は粘質の黒褐色土である。地山ブロックを多量混入していたことから、埋め戻されたものと考えられる。規模は長軸長0.93m、短軸長0.83m、深さ0.40mである。長軸方位はN-19°-Eを指す。遺物は、遺構確認段階で出土した。

第266図32に出土遺物を示した。平安時代の土師器甕で球形胴の破片である。

第72号土壙（第264図）

C-15グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、北東辺の中央が外側に張り出している。底面は北東側が広く、南西側はやや狭い。南西から北東に向かってわずかに浅くなっていた。壁は急傾斜で立ち上がったのち外側に開く。覆土は3層に分層できた。第3層上面には、第2層の炭及び灰が薄く全面に検出された。第2層から上が外側に開く形状であることや、第3層は暗褐色土をブロック状に混入しこの層のみ埋め戻されたと考えられることから、第3層部分は本土壙の掘り方と考えられる。規模は長軸長1.15m、短軸長0.85m、深さ0.26mである。長軸方位はN-47°-Eを

指す。遺物は出土しなかった。

第73号土壙（第264図）

D-16グリッドに位置する。重複する遺構はない。平面形は隅丸長方形である。底面は細かい起伏があるもののほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は3層に分層できる。第1層は残存量が少ないが暗褐色土を少量混入する炭層である。規模は長軸長1.40m、短軸長0.71m、深さ0.13mである。長軸方位はN-61°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第74号土壙（第264図）

B-16グリッドに位置する。平面形は隅丸方形であるが各辺がやや外側に張り出す。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は2層に分層でき、第2層上部には少量の焼土とともに多量の炭及び灰が検出された。この状況は、第72号土壙と類似している。規模は長軸長1.19m、短軸長1.16m、深さ0.15mである。長軸方位はN-3°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第75号土壙（第264図）

A・B-16グリッドに位置する。平面形は不整形である。底面は緩やかな起伏があり、北西側がやや高くなる。壁は底面から湾曲して立ち上がる。規模は長軸長2.69m、短軸長2.23m、深さ0.24mである。長軸方位はN-44°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

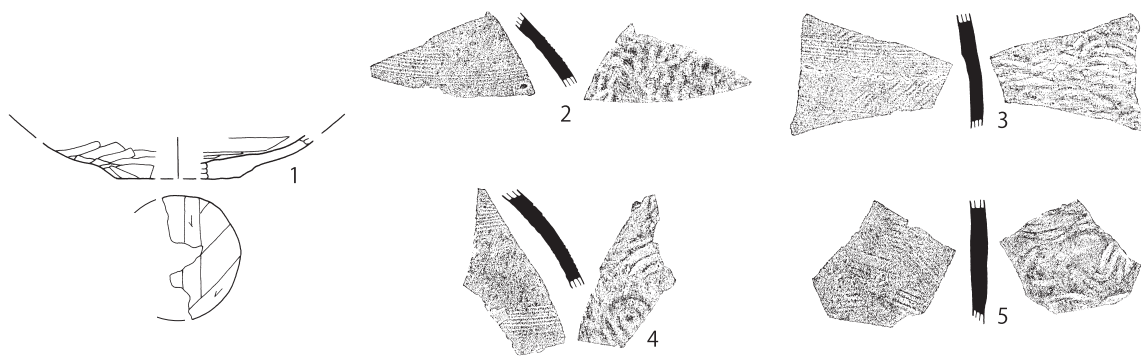
第76号土壙（第264図）

D-16グリッドに位置する。重複する第18号溝跡よりも古い。

平面形は、第18号溝跡によって大きく壊されているため不明であるが、円形ないしは楕円形と思われる。底面は平坦で、壁はやや外傾して立ち上がる。

覆土は2層に分層でき、自然堆積と考えられる。規模は残存値で長軸長1.12m、短軸長0.52m、深さ0.13mである。長軸方位はN-73°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

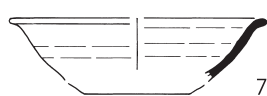
SK 3 (1~5)



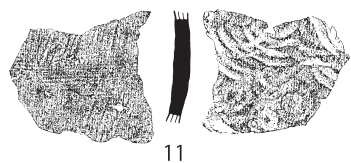
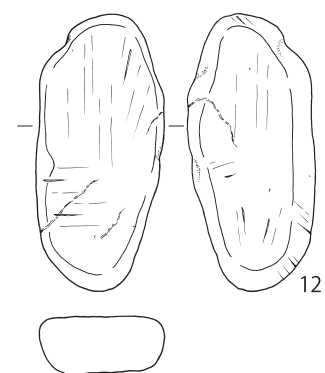
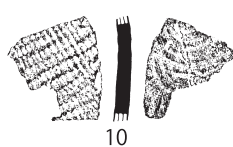
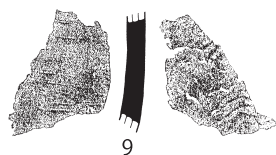
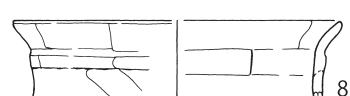
SK 4 (6)



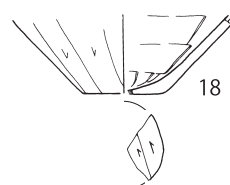
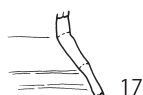
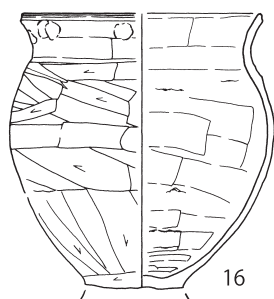
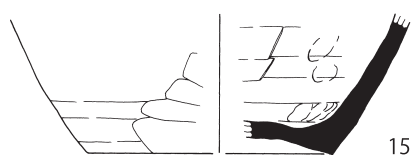
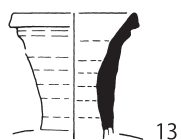
SK 5 (7)



SK 10 (8~12)

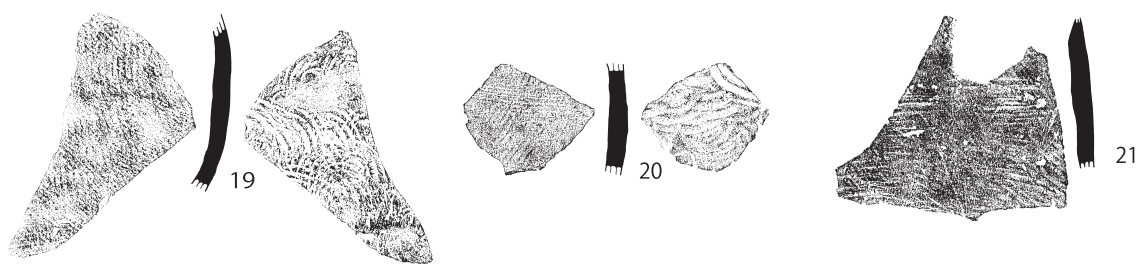


SK 12 (13~18)



第 265 図 土壙出土遺物 (1)

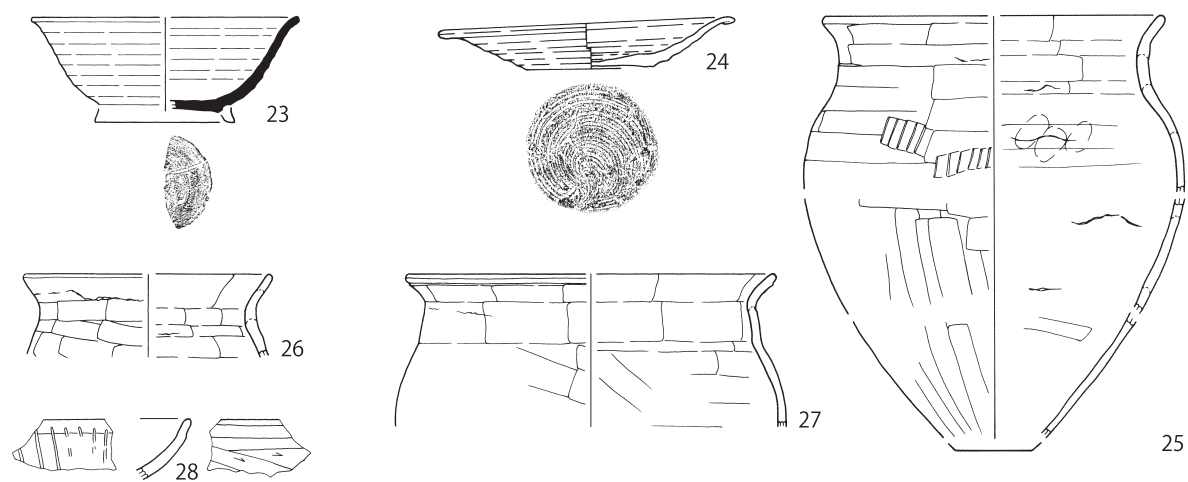
S K12 (19~21)



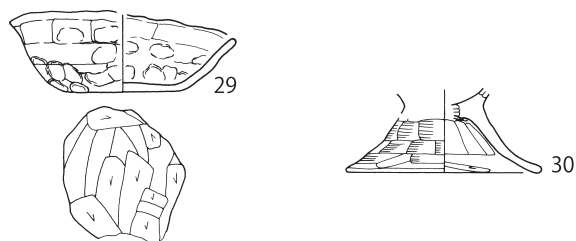
S K15 (22)



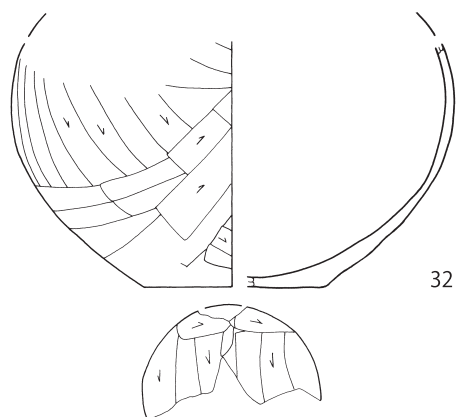
S K27 (23 ~ 28)



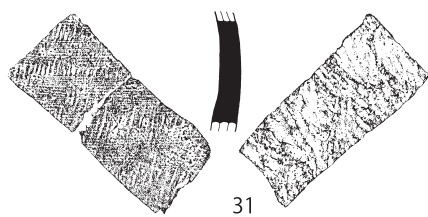
S K56 (29・30)



S K71 (32)



S K61 (31)



0 10cm
1:4

第 266 図 土壙出土遺物 (2)

第 75 表 土壌出土遺物観察表（第 265・266 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	—	[2. 3]	(6. 6)	C D E H I	40	普通	赤褐	S K 3 一括	77-6
2	須恵器	甕	—	[3. 8]	—	B D E I K	5	良好	灰	S K 3 一括 末野産	77-6
3	須恵器	甕	—	[6. 0]	—	B D E I	5	良好	灰	S K 3 一括 末野産	77-6
4	須恵器	甕	—	[4. 9]	—	B D E I K	5	良好	灰	S K 3 一括 末野産	77-6
5	須恵器	甕	—	[6. 4]	—	B D E H I K	5	良好	灰	S K 3 一括 末野産	77-6
6	須恵器	坏	(13. 6)	[3. 7]	—	C G H I	10	普通	淡褐	S K 4 No. 1 煤付着 末野産	62-1
7	須恵器	坏	(13. 6)	[3. 3]	—	C G H I	10	不良	淡褐	S K 5	77-6
8	土師器	甕	(17. 4)	[4. 1]	—	C G H	15	普通	淡褐	S K 10	77-6
9	須恵器	甕	—	[6. 3]	—	B D I	5	良好	灰	S K 10	77-6
10	須恵器	甕	—	[5. 4]	—	H I K	5	不良	黄褐	S K 10	77-6
11	須恵器	甕	—	[5. 7]	—	B I	5	良好	灰	S K 10	77-6
12	石製品	砥石	長さ 14. 6 幅 6. 8 厚さ 3. 1 重さ 493. 4g							S K 10 凝灰岩 完形	79-3
13	須恵器	長頸瓶	(6. 4)	[6. 5]	—	G I K	45	良好	灰	S K 12・S K 18 No. 1 降灰	62-2
14	須恵器	甕	—	[5. 2]	13. 2	G I J	30	良好	暗灰	S K 12 No. 18 底面棒状工具痕 南比企産	78-1
15	須恵器	甕	—	[7. 4]	(14. 0)	G I J K	25	良好	灰	S K 12 No. 1 南比企産 外自然釉	62-3
16	土師器	台付甕	(12. 8)	[14. 5]	—	C H I	10	普通	橙	S K 12・S K 18 No. 2 一部外自然釉煤付着	62-4
17	土師器	甕	—	[4. 8]	—	A G H	20	普通	暗褐	S K 12・S K 18	78-1
18	土師器	甕	—	[4. 1]	(4. 2)	C G H	25	普通	淡褐	S K 12・S K 18	78-1
19	須恵器	甕	—	[11. 7]	—	G K	5	良好	暗灰	S K 12 No. 19 末野産	78-1
20	須恵器	甕	—	[5. 8]	—	I K	5	良好	灰	S K 12 末野産	78-1
21	須恵器	甕	—	[10. 6]	—	G H I	5	不良	灰白	S K 12 No. 17 南比企産	78-1
22	灰釉陶器	碗	—	[2. 2]	—	I K	5	良好	灰白	S K 15 釉は漬掛	78-1
23	須恵器	高台付坏	(14. 2)	[4. 9]	—	B G	40	普通	灰褐	S K 27 No. 14・No. 15 底部回転糸切り	78-1
24	ロクロ土師器	皿	15. 6	2. 5	6. 7	B E G H	100	普通	橙褐	S K 27 No. 6 底部回転糸切り	62-5
25	土師器	甕	(18. 0)	[22. 3]	—	C G H	30	普通	暗褐	S K 27 No. 1・No. 2・No. 5 煤付着	62-6
26	土師器	甕	(13. 2)	[4. 3]	—	C G H I K	20	普通	暗褐	S K 27 No. 13 粘土紐痕明瞭	62-7
27	土師器	甕	(19. 6)	[8. 1]	—	C G H K	40	普通	淡橙	S K 27 No. 19	78-1
28	土師器	坏	—	[2. 4]	—	C E G H I K	5	普通	赤褐	S K 27 No. 4 内面放射状暗文	62-8
29	土師器	坏	11. 9	4. 3	6. 3	H K	60	普通	褐	S K 56 No. 1	62-9
30	土師器	台付甕	—	[4. 4]	10. 4	C G H I	80	普通	褐	S K 56 No. 3	63-1
31	須恵器	甕	—	[6. 2]	—	D H I K	5	良好	灰褐	S K 61	78-1
32	土師器	甕	—	[12. 9]	(9. 6)	E G H	45	普通	褐	S K 71 No. 1 大黒斑あり	63-2

（４）井戸跡

井戸跡は6基確認した。分布は1基を除いて住居跡の集中する南側にあり、堅穴住居跡と重複するものがないことは、居住域の中で機能していることを窺わせる。井戸跡の分布する箇所地盤は遺構確認面から1mほどで礫層に達するため、概して浅いのが特徴である。多くの井戸は、この礫層を掘り抜いて、下の砂層まで掘り込んでいた。

第1号井戸跡（第267図）

M-18グリッドに位置する。第6・11号溝跡と重複し、いずれよりも新しい。井戸枠等の施設は検出されず、素掘りの井戸と考えられる。

平面形は円形を呈するが、南北方向にやや歪んでいる。規模は長軸長2.30m、短軸長2.15mである。長軸方位はN-24°-Eである。

漏斗状の掘り方で、検出面から深さ1.1mほど掘り下げたところで砂混じりの礫層に達し、湧水した。壁が崩落する危険があったため、底面まで掘り下げることができなかった。

覆土は礫等を多量に混在していることから、埋め戻されていると考えられる。

遺物は、多時期にわたるものが出土した。土師器甕は口縁部が外反するもの、コの字状口縁を呈

するものなど、須恵器は底部周辺ヘラ削りの坏や糸切り後無調整の坏などがある。これらは、埋め戻されたときに混入したものと考えられる。

時期は、平安時代と考えられる第6号溝跡より新しいが、中世以降の遺物は出土していないことから、平安時代の中で捉えておきたい。

第2号井戸跡（第267図）

Q-16・17グリッドに位置する。他の遺構との重複はない。当初、楕円形の黒色土が確認できたことから土壌として精査を始めたが、周囲の地山と思われた部分も覆土の一部であることが判明し、結果的に井戸跡であることが判明した。

平面形はやや歪んでいるが、円形である。規模は長軸長1.15m、短軸長1.03mである。長軸方位はN-77°-Eである。断面形は円筒状である。深さ1.04mで、底面は礫層に達している。

覆土には多量の礫が含まれることから、埋め戻されたと考えられる。

遺物は、第3層下部から土師器甕が礫とともに出土した。

時期は、出土した土師器甕の年代から平安時代と考えられる。

第3号井戸跡（第267図）

N-16グリッドに位置する。他の遺構との重複はないが、南側に第4・5号井戸跡が近接している。

平面形は不整円形である。規模は、長軸長1.56m、短軸長1.42m、深さ0.84mである。長軸方位はN-15°-Wである。

断面形は円筒形で、上方がやや開いている。底面は礫層に達している。

覆土には多量の地山ブロックとともに礫が含まれるため、埋め戻されたと考えられる。

遺物は、土師器坏片1点と甕の小片が出土したのみで図示できるものはない。

時期は不明である。

第4号井戸跡（第267図）

N-16グリッドに位置する。他の遺構との重複はないが、北側に隣接して第3号井戸跡、南側に隣接して第5号井戸跡がある。

平面形態は円形であるが、僅かに歪みがあり南北方向がやや長い。規模は長軸長1.62m、短軸長1.52mである。長軸方位はN-37°-Eである。当初上面のプランが明瞭でなかったため一段下げて検出し、調査できた深さは0.66mと浅くなった。

断面形は円筒形で、本来は上方が開いていたと考えられる。底面は礫層上面で止まっていた。

覆土には多量の地山ブロックが含まれることから、埋め戻されたと考えられる。

遺物は土師器細片が出土したのみで、図示できるものはない。

時期は不明である。

第5号井戸跡（第267図）

N・O-16グリッドに位置する。他の遺構との重複はない。

平面形はやや楕円形である。規模は長軸長1.05m、短軸長0.87m、深さ0.60mである。長軸方位はN-11°-Wである。断面形は円筒形を呈する。底面は礫層に達している。

覆土には多量の地山ブロックとともに上層に礫が含まれることから、埋め戻されたと考えられる。

遺物は出土しなかった。

時期は不明である。

第6号井戸跡（第268図）

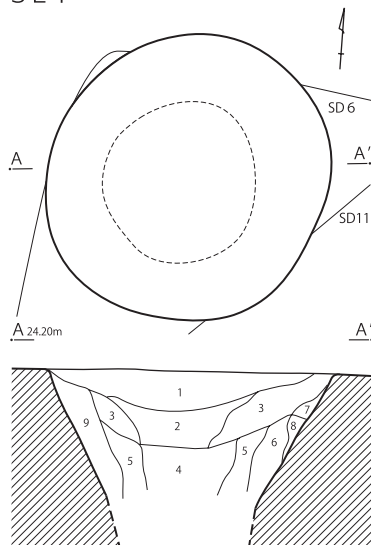
調査区北側のA-14グリッドに位置する。重複する第71号土壌より古く、第55号溝跡より新しい。

調査区の隅にかかっていたため形状は不明であるが、円形を呈すると考えられる。調査区内では約1.2mが調査されている。

覆土には多量の地山ブロックと礫が含まれることから、埋め戻されたと判断される。

断面は、上方が漏斗状に開く。底面は礫層に達している。

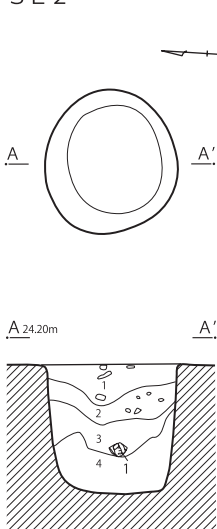
SE 1



SE 1

- 1 黒褐色土 焼土・炭化粒子少量含む 礫を混入
- 2 黒褐色土 焼土・炭化粒子やや多く含む 礫・土師器・須恵器片含む
- 3 暗褐色土 白灰色土をブロック状に含む 焼土粒子混入
- 4 黒褐色土 粘性やや強 炭化粒子を含む 礫・土師器片を含む
- 5 暗褐色土 粘性ややあり 焼土粒子を含む
- 6 暗褐色土 5層に近似 粘性ややあり 焼土粒子を含む
- 7 青灰色土 地山粘土ブロックを多量に含む
- 8 黄褐色土 地山黄褐色ブロックを含む
- 9 暗褐色土 地山褐色ブロックを含む

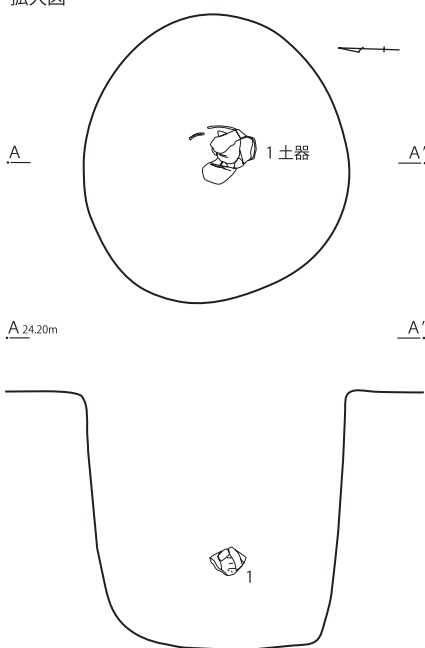
SE 2



SE 2

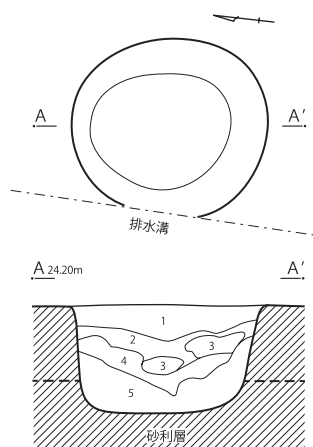
- 1 褐灰色土 しまりあり 粘性強 小礫・礫含む マンガン多量含む
- 2 褐灰色土 しまりあり 粘性強 小礫多量含む マンガン少量含む 炭化粒子微量含む
- 3 褐灰色土 しまりあり 粘性極めて強 小礫多量含む
- 4 褐灰色土 しまり弱 粘性弱 粗い砂と小礫から成る

拡大図



0 1m 1:30

SE 3

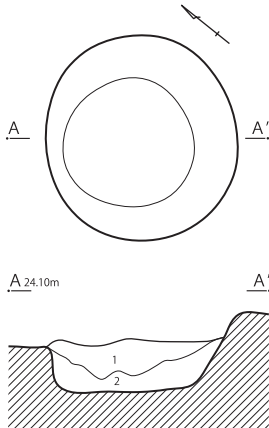


SE 3

- 1 にぶい黄褐色土 粘質シルト しまり強 粘性ややあり 地山ブロック・小礫含む
- 2 灰黄褐色土 粘質シルト しまり強 粘性ややあり 地山ブロック含む
- 3 砂利 礫と砂
- 4 褐灰色土 粘質シルト しまりあり 粘性あり 地山ブロック少量含む
- 5 灰黄褐色土 粘質シルト しまりややあり 粘性あり 地山大ブロック多量含む

※ 1～5層は埋め戻し土である

SE 4

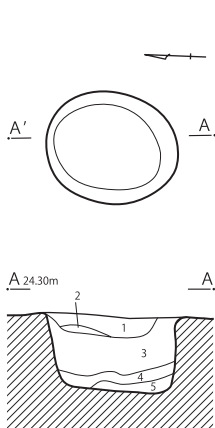


SE 4

- 1 褐灰色土 粘質シルト しまりあり 粘性ややあり ロームブロック多量含む
- 2 灰黄褐色土 粘質シルト しまりあり 粘性ややあり ローム大ブロック多量含む

※ 1・2層とも埋め戻し土である

SE 5



SE 5

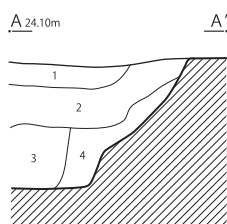
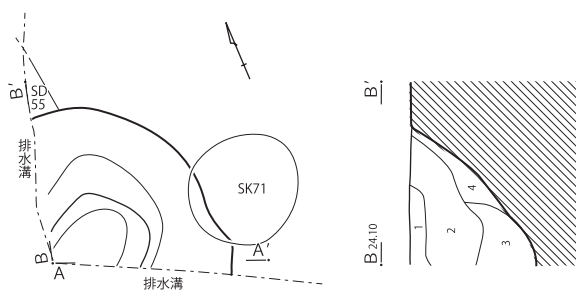
- 1 褐灰色土 粘質シルト しまり強 粘性ややあり 上面に礫含む 地山粒子含む
- 2 灰白色土 粘質シルト しまりあり 粘性やや弱 地山ブロック多量含む
- 3 褐灰色土 粘質シルト しまりやや弱 粘性あり 地山ブロック含む
- 4 褐灰色土 粘質シルト しまりやや弱 粘性あり 地山ブロック少量含む
- 5 灰黄褐色土 粘質シルト しまりやや弱 粘性やや弱 地山粒子・ブロック多量含む

※ 1～5層は埋め戻し土である

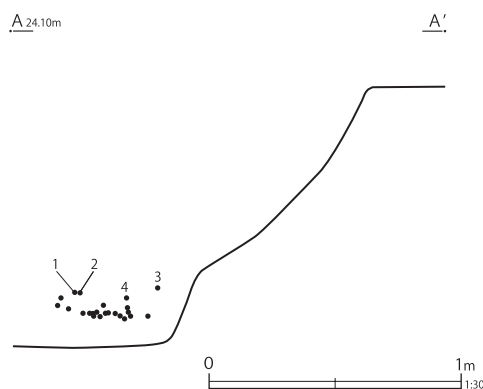
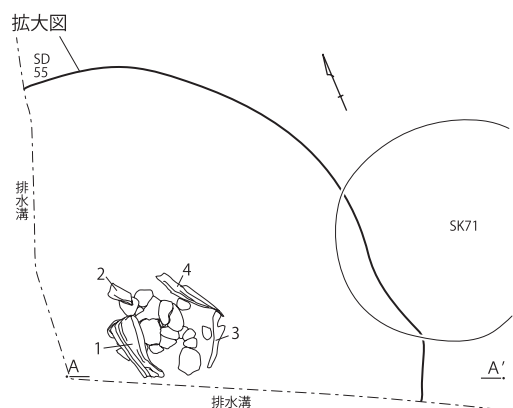
0 2m 1:60

第 267 図 第 1～5 号井戸跡

SE 6



- SE 6
- 1 灰黄褐色土 粘質 しまり強 粘性あり 灰白色地山土を多量含む 礫を含む
焼土粒子微量含む
 - 2 黒褐色土 粘質 しまり強 粘性あり 灰白色地山土を含む 礫を多量含む
 - 3 黒褐色土 粘質 しまりやや弱 粘性あり
 - 4 黒褐色土 粘質 しまり強 粘性あり 灰白色地山土・礫を含む
- ※ 1～4層は埋め戻し土である



第 268 図 第 6 号井戸跡

底面付近から木材を検出した。長さ24～33cmの板状あるいは棒状の材で、ほぼ直角の位置関係で出土した。しかし、端部で組まれていた様子はなく、杵としての高さもないため、井戸杵として設置されたものとは考えにくい。

遺物は出土しなかった。

時期は、重複する第71号土壌が平安時代の可能性があり、それ以前と考えられる。

井戸跡出土遺物（第269～271図）

第269・270図は第1号井戸跡出土遺物である。灰釉陶器、須恵器、土師器が出土している。

1は、灰釉陶器の稜碗である。猿投産で、漬け掛けである。

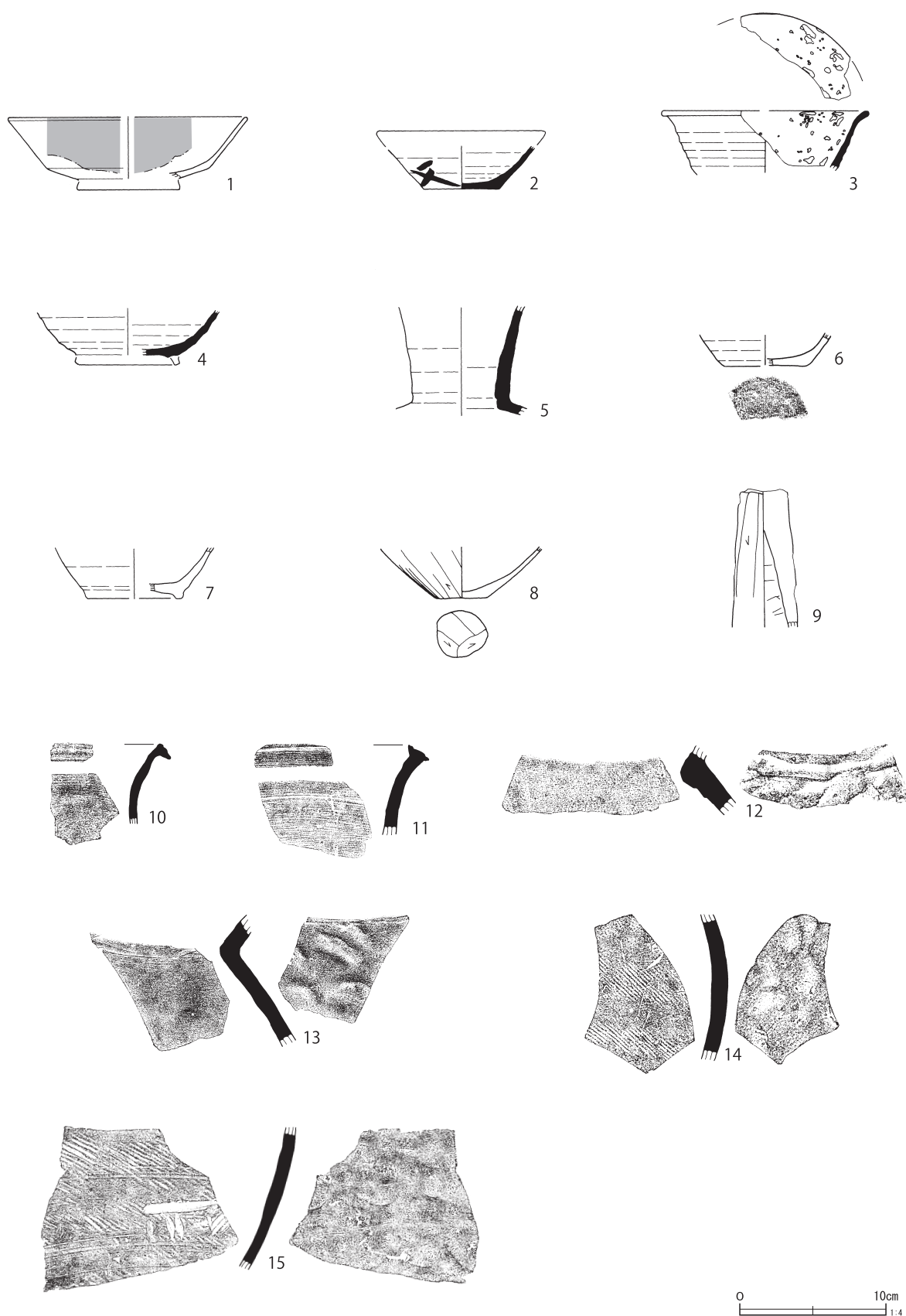
2～5は須恵器である。2は坏である。底部外周に「女」の墨書が施されている。灰白色の水簾されたような粘土で、雲母を含むが他にはほとんど含有物が見られない。全体に風化が進み、底部の回転糸切りが不明瞭である。産地不明。3・4

は脚付碗である。3は端部が大きく開く。内面に漆が付着する。末野産。4は脚部を欠く。底面回転糸切。見込み部分に薄く黒色の付着物が見られる。南比企産か。5は瓶類の頸部である。7世紀後半の湖西産と考えられる。内外面に自然釉がかかる。

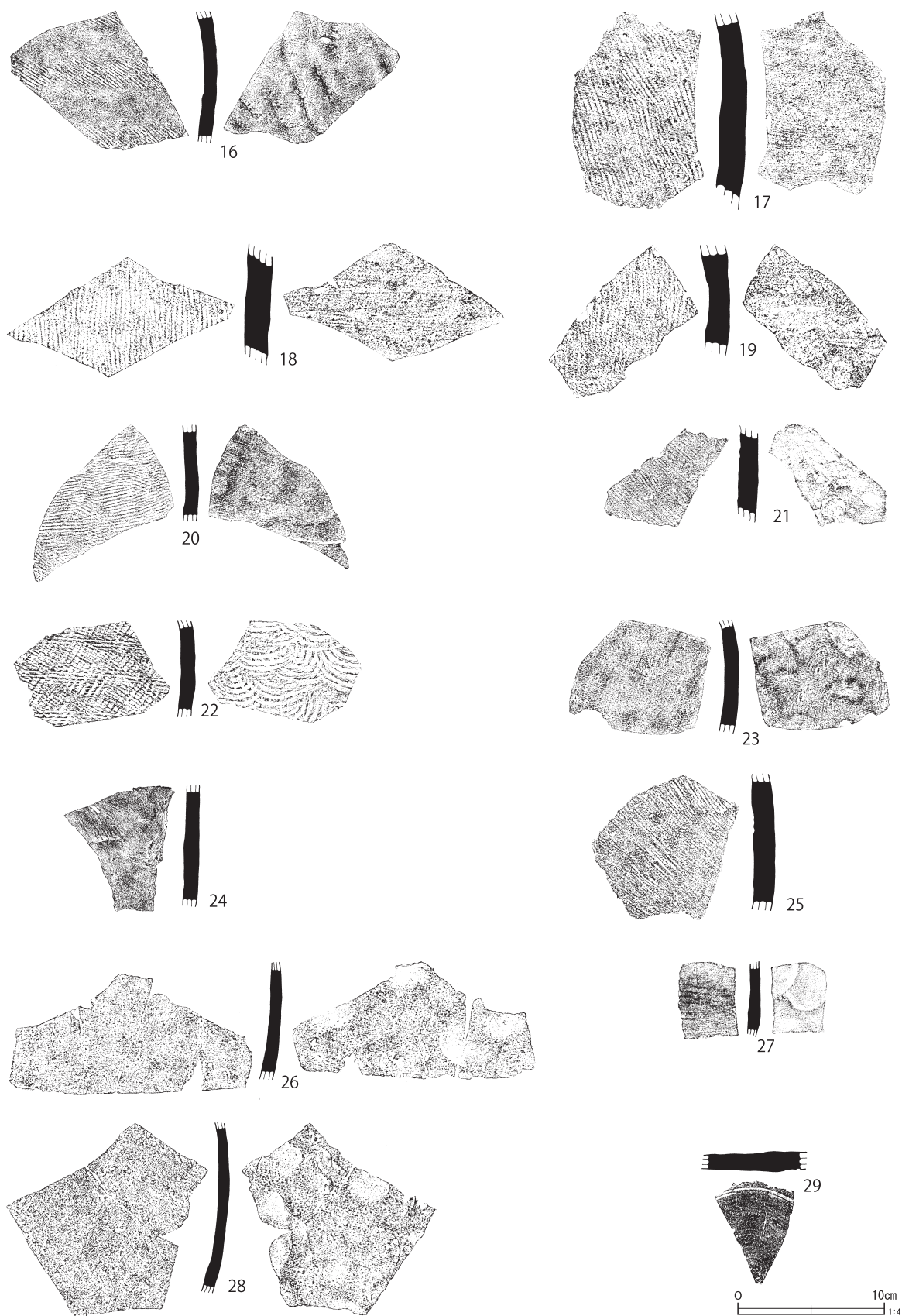
6・7はロクロ土師器である。6は坏、7は高台付坏である。両者とも風化が進み、調整がほとんど見えない。いずれにも多量の雲母が含まれる。新治産か。

7は土師器の甕底部である。外面全体ヘラケズリ、内面ヘラナデ。外面は一面に煤が付着する。雲母・角閃石・赤色粒子が目立つ。

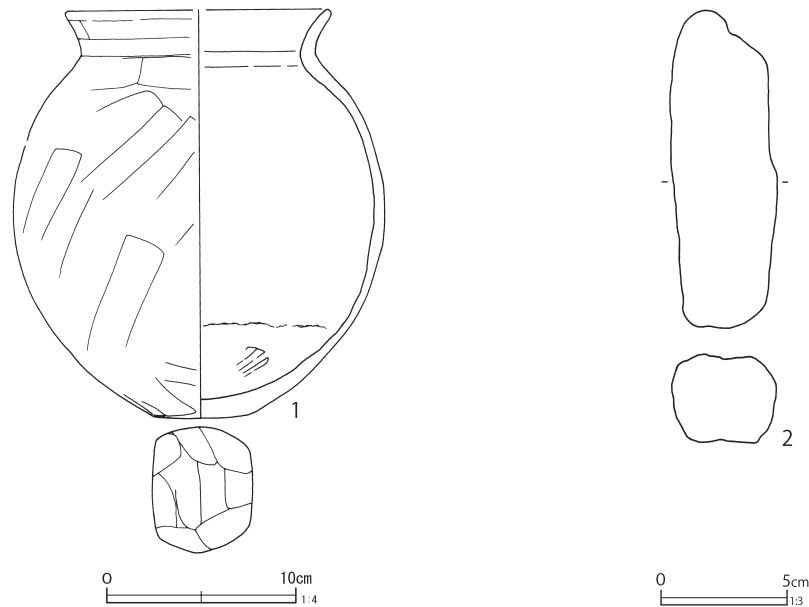
8は土師器の砲弾形の甕である。単孔である。胴部中位に接合箇所がないが、同一個体と考えられる。胎土には、雲母・角閃石・石英・赤色粒子が目立つ。胴部外面縦方向のヘラケズリ、内面横方向のヘラナデが施されている。



第 269 図 第 1 号井戸跡出土遺物 (1)



第270図 第1号井戸跡出土遺物(2)



第 271 図 第 2 号井戸跡出土遺物

9は土師器の高坏の脚部である。内外面ともヘラケズリが施されている。後期の所産と考えられる。風化が進み、粉状の粘土が手に付く。

10～29は須恵器の甕である。10・11は口縁端部である。10は端部外周に、11は端部先端に粘土を付加して複合口縁としている。10は硬質で、内外面に灰がかかる。産地不明。11は内面に灰がかかる。南比企産。

12・13は頸部の破片である。12は暗灰色を呈し、重量感がある。東毛産か。

14～28は胴部の破片である。外面は平行タタキで、大部分のものは横方向のナデが加えられている。内面の当て具はほとんどが無文のものである。

18は重量感がある。東毛産か。20はタタキが細かく、薄手である。21はやや軽量。

15は胴部下位の破片で、硬質。外面全体に灰がかかり、太いヘラ状工具で「ㄟ」のヘラ記号が付けられている。上野産。

24は硬質で光沢がある。東金子産か。

26は外面格子状タタキで、等間隔に4条1単位の刷毛目状工具による横方向のナデが施されている。内面は青海波文。薄手で大粒の石英を含む。

他の破片と焼成具合も異なり、古墳時代のものがある可能性がある。

29は底部の破片で、外周に高台が付く可能性が高い。

第271図は、第2号井戸跡出土遺物である。1は土師器の甕である。胎土は雲母・角閃石・赤色粒子を多く含む。口縁部は短く、直線的に開く。胴部はやや長い球形胴である。口縁部は横ナデが強く、頸部直下に横方向の刀子によるケズリ、それ以下は縦方向のヘラケズリが施されている。底面はヘラケズリ。風化がかなり進んでおり、調整は部分的に確認できるのみである。

2は編み物石である。床面出土。長さ12.6cm、幅4.1cm、重さは311.5gである。石材はチャートである。加工痕はなく、中央に僅かに擦痕が認められるのみである。

第 76 表 第 1 号井戸跡出土遺物観察表（第 269・270 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	灰釉陶器	稜碗	(16.0)	[4.1]	—	I K	10	良好	灰	露胎 猿投産 漬け掛け	78-2
2	須恵器	坏	—	[3.0]	5.0	A H I	70	普通	灰白	墨書「父」 底部糸切り痕 産地不明	63-3
3	須恵器	坏	(14.2)	[4.1]	—	I J K	20	普通	黒灰	内面漆付着 末野産	63-4
4	須恵器	高台付坏	—	[3.3]	(7.0)	B G	25	普通	灰	底部回転糸切り 南比企産	78-2
5	須恵器	瓶	—	[7.5]	—	I K	20	良好	灰	猿投産 外面施釉 湖西産	63-5
6	ロクロ土師器	坏	—	[2.3]	(5.5)	A B C E G	30	不良	黒	底部回転糸切り 新治産	78-2
7	ロクロ土師器	高台付坏	—	[3.5]	(6.4)	A B C G H	15	不良	橙褐	底部回転糸切り 煤付着 新治産	78-2
8	土師器	甕	—	[3.5]	3.4	A C G H I J K	50	普通	淡褐	外面黒色 一部おこげ状の付着物あり	63-6
9	土師器	高台付坏	—	[9.6]	—	A C G H I K	80	普通	橙		63-7
10	須恵器	甕	—	[5.5]	—	I J K	5	良好	灰	産地不明	78-2
11	須恵器	甕	—	[6.1]	—	I J K	5	良好	灰	南比企産	78-2
12	須恵器	甕	—	[4.7]	—	I K	5	良好	暗灰	東毛産か	78-2
13	須恵器	甕	—	[8.9]	—	C I J K	5	良好	灰	南比企産	64-1
14	須恵器	甕	—	[9.9]	—	A I J K	5	良好	灰	南比企産	78-2
15	須恵器	甕	—	[10.0]	—	A E I K	5	良好	灰	上野産 ヘラ記号	78-2
16	須恵器	甕	—	[8.9]	—	A I J K	5	良好	灰	南比企産 灰がかかる	78-3
17	須恵器	甕	—	[13.4]	—	E I K	5	良好	灰	上野産か	78-3
18	須恵器	甕	—	[8.2]	—	E I J K	5	良好	灰	東毛産か	78-3
19	須恵器	甕	—	[7.5]	—	A I K	5	良好	灰	上野産か	78-3
20	須恵器	甕	—	[6.5]	—	I J K	5	良好	灰	南比企産	78-3
21	須恵器	甕	—	[6.7]	—	A I J K	5	良好	灰	南比企産	78-3
22	須恵器	甕	—	[6.5]	—	I K	5	良好	灰	上野産か	78-3
23	須恵器	甕	—	[7.6]	—	I J K	5	良好	灰	南比企産	78-4
24	須恵器	甕	—	[8.3]	—	I K	5	良好	灰	東金子産か 硬質光沢あり	78-4
25	須恵器	甕	—	[9.3]	—	A E I K	5	良好	灰	産地不明	78-4
26	須恵器	甕	—	[8.0]	—	A E I K	5	良好	灰	産地不明 28 と同一か	78-4
27	須恵器	甕	—	[5.1]	—	A I J K	5	良好	灰	南比企産	78-4
28	須恵器	甕	—	[11.6]	—	E I K	5	良好	灰	産地不明 26 と同一か	78-4
29	須恵器	甕	—	[1.3]	—	A I J K	5	良好	灰	南比企産	78-4

第 77 表 第 2 号井戸跡出土遺物観察表（第 271 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(13.6)	21.6	5.1	A C G H	70	普通	橙褐	No.6	64-2
2	石製品	編物石	長さ	12.5	幅 4.1	厚さ 3.6	重さ 311.5 g			チャート	80-1

（5）ピット

調査区全体からピットは65基を検出した（第272～281図）。平面形は、円形もしくは楕円形のものが大半である。

出土遺物がほとんどなく、時期を特定できないが、いずれも古代の調査面から検出されていることから、古代に帰属するものとしておきたい。

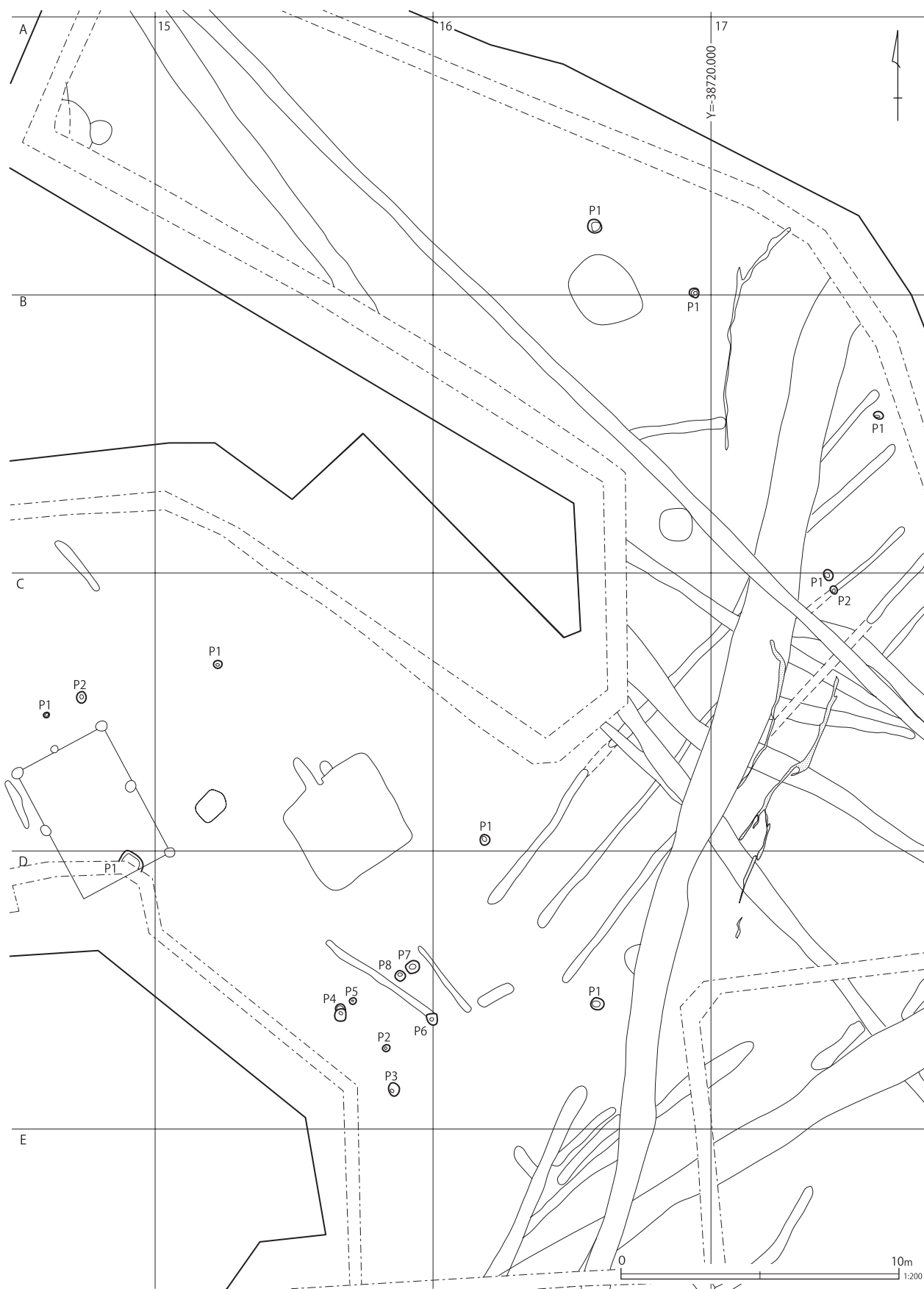
規模は直径0.30～0.50mのものが多く、深さは0.70～0.77mと一様でないが、概ね0.20～0.50mにまとまっている（第79表）。覆土は暗灰褐色土や、灰褐色土が主体で、全体にしまりがいい。

調査区内に散在した分布状況を示しているが、調査区中央の畠跡の周辺では希薄となる。

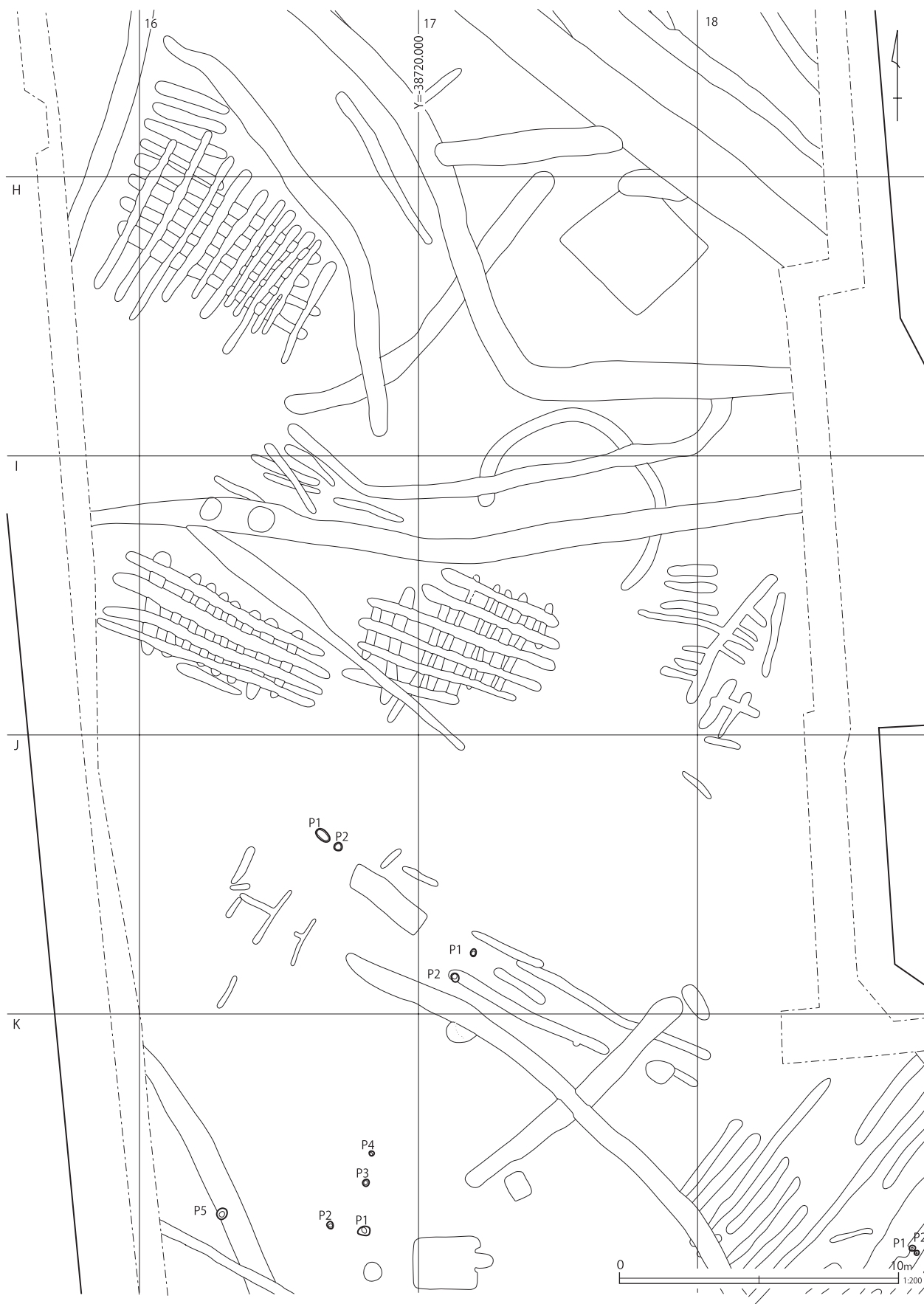
北側のD-16グリッドP1は直径3～5cmの礫が根石状に敷き詰められていたが、周辺ではピットは確認されず、単独のものと考えざるを得ない。
ピット出土遺物（第282図）

1は土師器の有段口縁坏である。口径が小さく、内外面黒色処理されている。

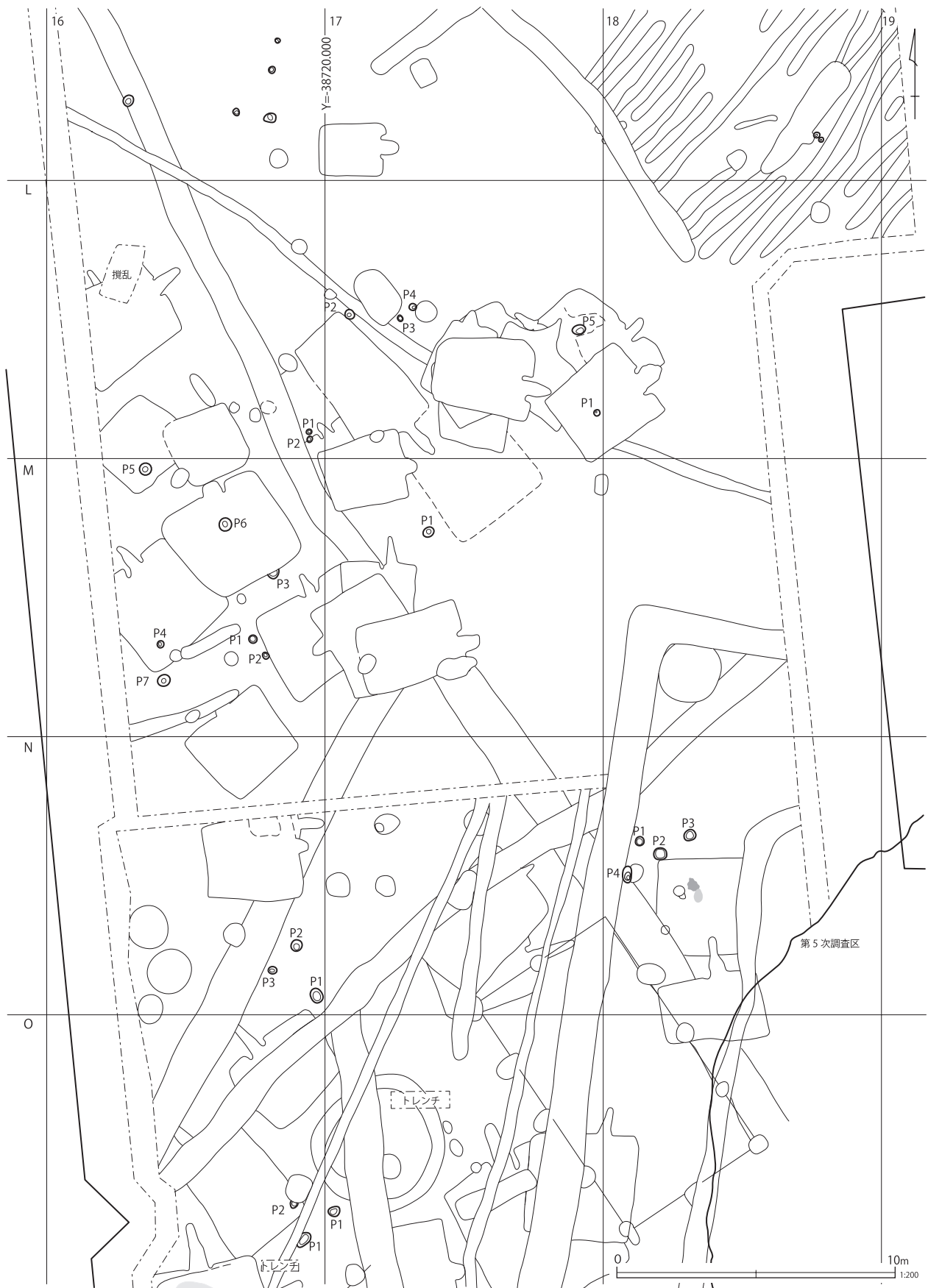
2は砥石である。各面が使用面になっており、刃物痕が見られる。全体的によく使いこまれている。



第 272 図 北島遺跡第 25 次調査区ピット分布図 1



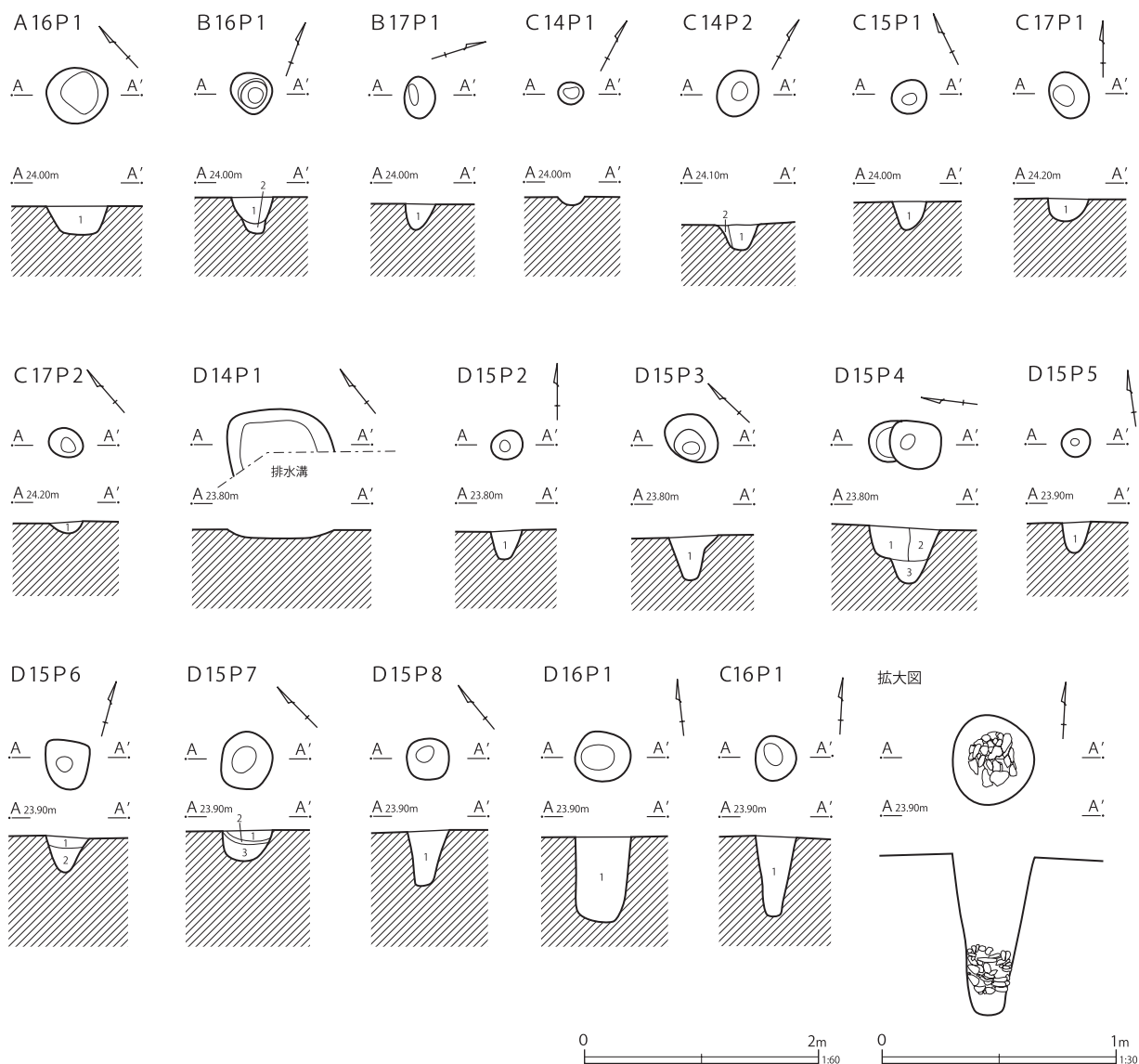
第 273 図 北島遺跡第 25 次調査区ピット分布図 2



第 274 図 北島遺跡第 25 次調査区ピット分布図 3



第 275 図 北島遺跡第 25 次調査区ピット分布図 4



A16 P-1
1 黄灰色土 しまりあり 粘性あり 小石を多量に含む

B16 P-1
1 褐灰色土 しまり強 粘性強 土師器出土 炭化物微量含む 焼土粒子微量含む
2 黄灰色土 しまり強 粘性強 炭化物微量含む 焼土粒子少量含む

B17 P-1
1 褐灰色土 しまり強 粘性強 炭化物を微量含む

C14 P-2
1 黒褐色土 粘質土 しまり強 粘性あり 灰白色地山粒子微量含む
しまり強くねっとりしている
2 にぶい黄橙色土 砂質シルト しまりややあり 1層土混入する

C15 P-1
1 褐灰色土 シルト質 しまりあり 粘性あり 黄灰色砂を含む

C16 P-1
1 褐灰色土 しまり強 粘性強 黄灰色粘土ブロックを含む 炭化物微量含む

C17 P-1
1 黄灰色土 しまりあり 粘性あり 黄灰色砂全体に少量を含む

C17 P-2
1 黄灰色土 しまりあり 粘性あり 黄灰色砂全体に少量を含む

D15 P-2
1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 地山の砂を全体に少量含む

D15 P-3
1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 黄灰色の粘質シルト塊を含む

D15 P-4
1 黄灰色土 しまりあり 粘性あり 2層の粘質シルト塊を多量に含む
2 黄灰色土 しまりあり 粘性あり 黄灰色の粘質シルト塊・炭化物を微量含む
3 褐灰色土 しまり強 粘性強 炭化物を少量含む

D15 P-5
1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 特筆すべき含有物はない

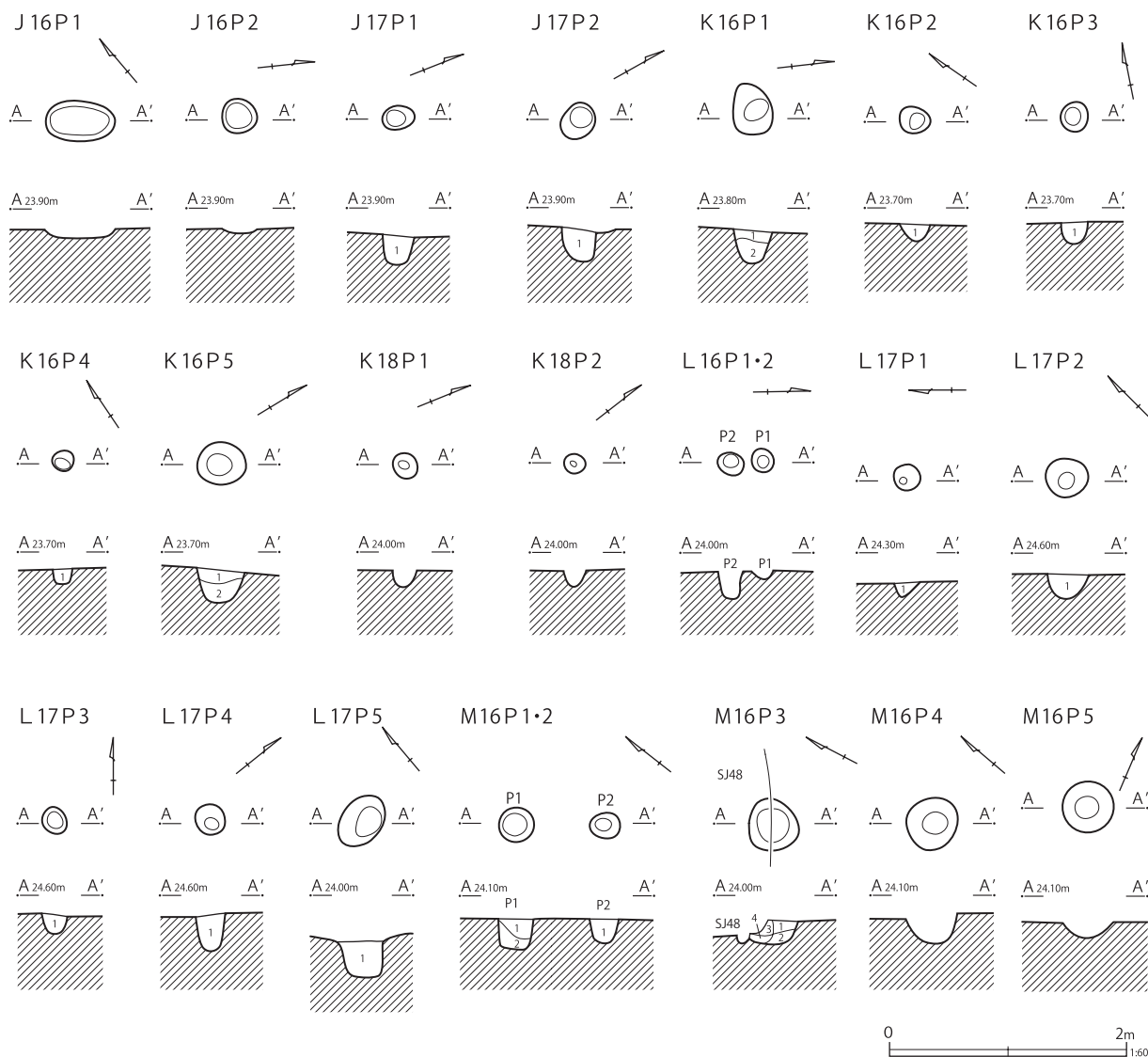
D15 P-6
1 褐灰色土 しまり弱 粘性弱 地山の砂を全体に含む
2 灰色土 シルト しまり弱 粘性弱

D15 P-7
1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 黄灰色砂をブロック状に含む
2 灰色土 シルト しまりなし 粘性なし
3 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 2層をブロック状に斑状に含む

D15 P-8
1 黄灰色土 しまりあり 粘性あり 黄灰色砂をブロック状に全体に含む

D16 P-1
1 黒褐色土 粘質シルト しまり強 粘性ややあり
混入物少ないが灰白色粒子微量含む
壁際に灰白色土ブロックやや多く含む

第276図 ピット(1)



J 17 P-1
1 褐灰色土 酸化鉄・マンガンを含む

J 17 P-2
1 褐灰色土 酸化鉄・マンガンを含む

K 16 P-1
1 オリーブ褐色土 しまりやや強 粘性やや強 白色粒子微量含む
2 黒褐色土 しまりやや強 粘性やや強 白色粒子微量含む
灰白色ブロック多量に斑状に含む

K 16 P-2
1 オリーブ褐色土 しまりやや強 粘性やや強 灰白色ブロック少量含む
白色粒子微量含む

K 16 P-3
1 灰黄褐色土 しまりやや強 粘性やや強 白色粒子微量含む
灰白色ブロック少量含む

K 16 P-4
1 灰黄褐色土 しまりやや強 粘性やや強 白色粒子微量含む

K 16 P-5
1 灰黄褐色土 しまりやや強 粘性やや強 白色粒子微量含む
灰白色ブロック少量含む
2 黒褐色土 しまりやや強 粘性やや強 炭化物微量含む
白色粒子少量含む

L 17 P-1
1 にぶい黄褐色土 しまりやや強 粘性弱 白色粒子微量含む

L 17 P-2
1 褐灰色土 しまり強 粘性強 炭化物・白色粒子微量含む

L 17 P-3
1 にぶい黄褐色土 しまりやや弱 粘性弱 白色粒子微量含む

L 17 P-4
1 にぶい黄褐色土 しまりやや弱 粘性弱 白色粒子微量含む

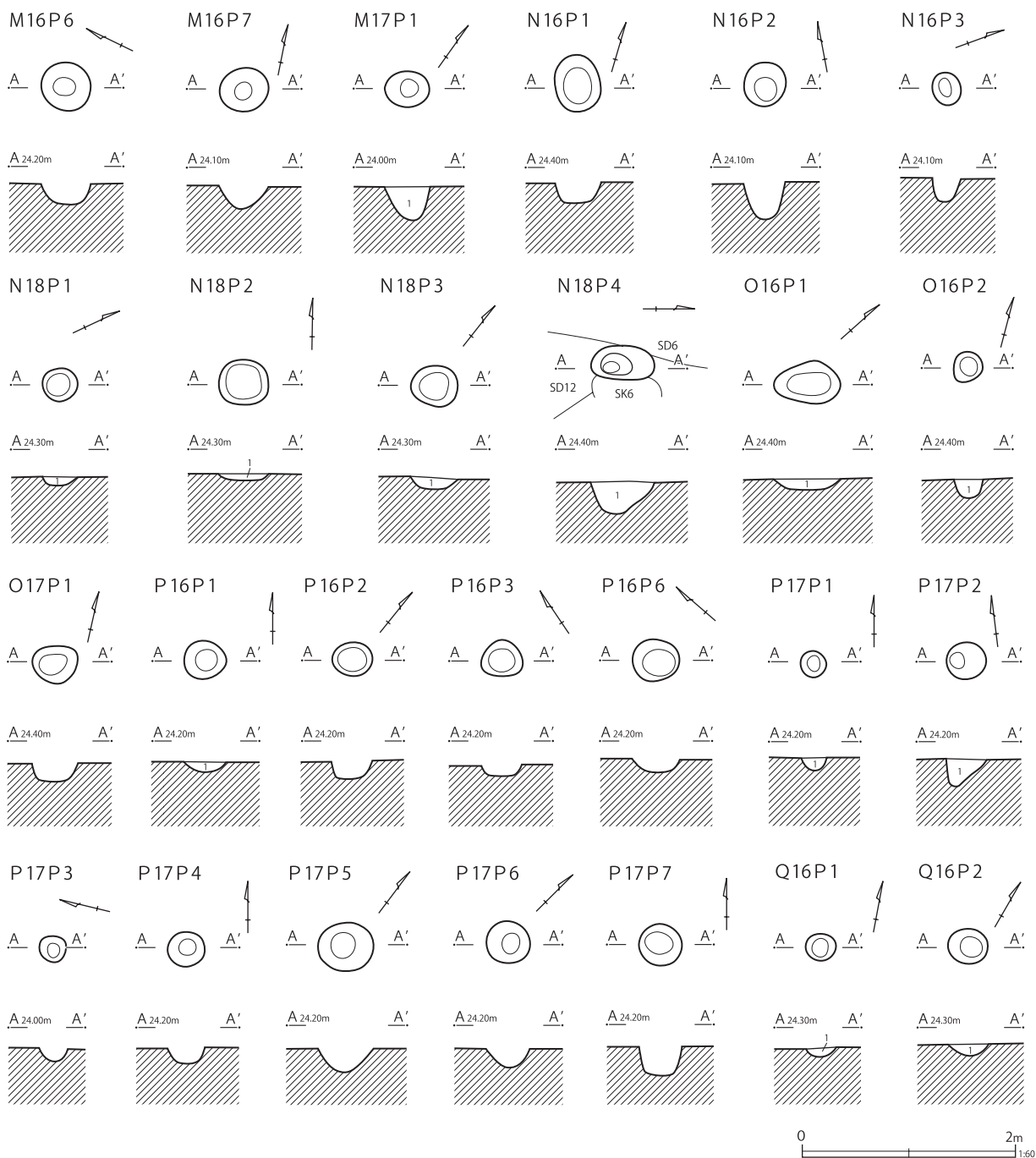
L 17 P-5
1 暗灰黄色土 しまりやや強 粘性やや強 白色粒子微量含む

M 16 P-1
1 褐灰色土 しまりややあり 粘性ややあり 灰黄褐色細砂を含む
炭化物を微量含む
2 黄灰色土 しまり強 粘性強

M 16 P-2
1 褐灰色土 粘質シルト しまりなし 粘性ややあり

M 16 P-3
1 褐灰色土 しまりややあり 粘性ややあり
炭化物・灰黄褐色粘質ブロックを微量含む
2 褐灰色土 しまりあり 粘性あり
1層と同じ粘土ブロック・灰黄褐色の粒子の細かい砂を含む
3 褐灰色土 しまりややあり 粘性ややあり
炭化物・灰黄褐色の粘質シルトを多量含む
4 黄灰色土 しまりあり 粘性あり
炭化物・褐灰色の粘質シルト微量含む

第 277 図 ピット (2)



M17 P-1
1 黒褐色土 白色粘土粒子少量含む 炭化粒子多量含む
上層に炭を多量層状に含む

N18 P-1～3
1 褐灰色土 しまり弱 粘性強

N18 P-4
1 黒褐色土 しまりあり 粘性強 焼土粒子微量含む

O16 P-1
1 褐灰色土 しまりあり 粘性強 焼土わずかに含む
地山土（灰黄褐色土）少量含む

O16 P-2
1 褐灰色土 しまりあり 粘性強 炭化物微量含む 地山土は無し
土器片あり

P16 P-1
1 褐灰色土 しまりあり 酸化鉄を含む 地山ブロックを含む

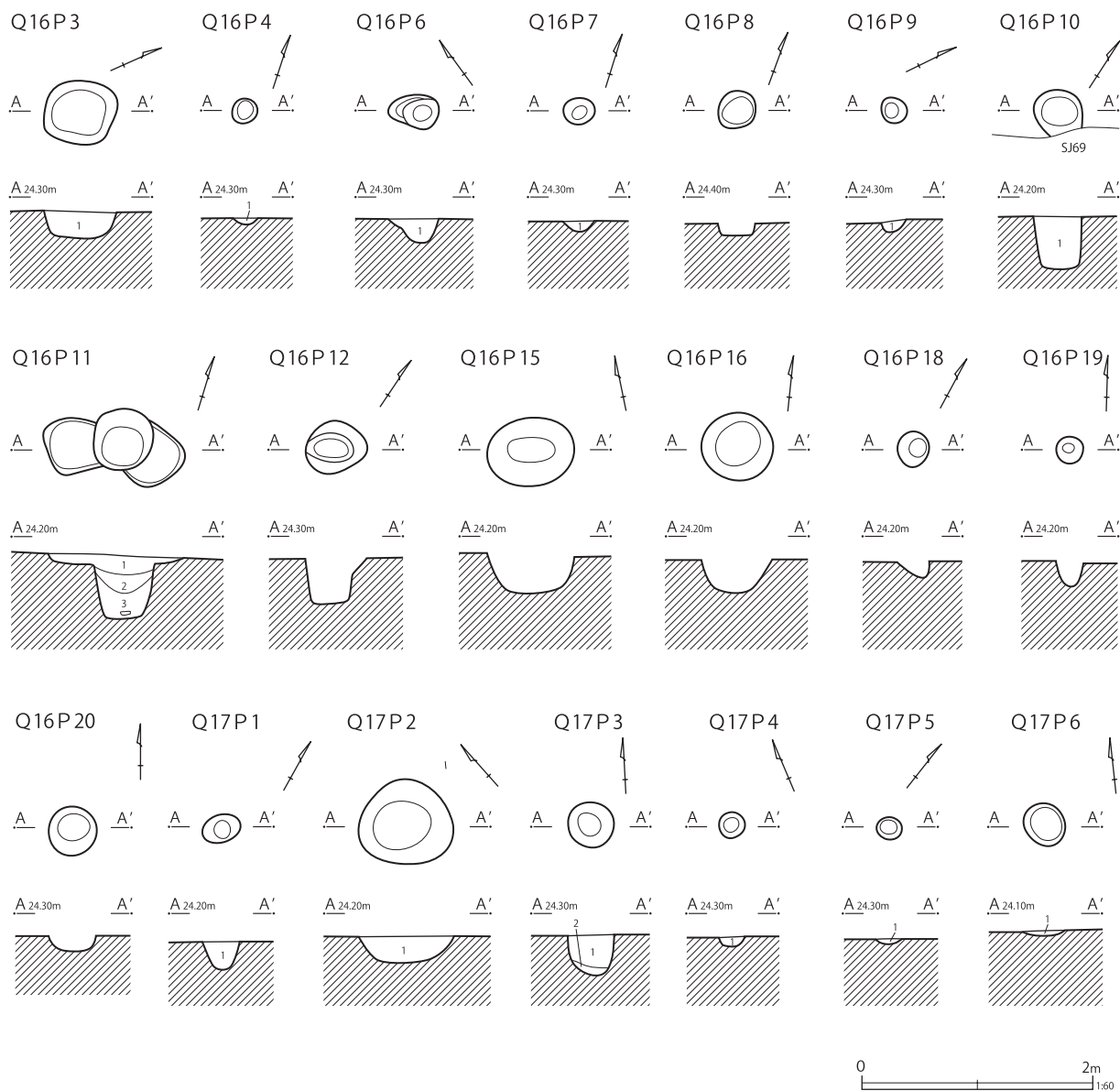
P17 P-1
1 褐灰色土 しまり強 粘性強 炭化物・酸化鉄・マンガン微量含む

P17 P-2
1 褐灰色土 しまり強 粘性強 酸化鉄を含む 土器片あり

Q16 P-1
1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 酸化鉄を全体に多量に含む

Q16 P-2
1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 酸化鉄を全体に多量に含む

第 278 図 ピット（3）



Q16 P- 3・8

1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 酸化鉄を全体に多量に含む 土器あり

Q16 P- 4

1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 酸化鉄を全体に多量に含む

Q16 P- 6

1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 地山ブロックを含む
酸化鉄を多量に含む

Q16 P- 7

1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 酸化鉄を少量含む

Q16 P- 9

1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 酸化鉄を多量に含む

Q16 P- 10

1 褐灰色土 しまりあり 酸化鉄を微量含む マンガンを含む

Q16 P- 11

1 灰黄褐色土 粘質シルト しまり強 粘性ややあり 酸化鉄多量含む
2 褐灰色土 粘質シルト しまりあり 粘性あり 地山粒子少量含む
3 褐灰色土 粘質シルト しまりあり 粘性あり 地山粒子少量含む

Q17 P- 1

1 褐灰色土 粘性あり 酸化鉄多量含む

Q17 P- 2

1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 酸化鉄多量含む 土器あり

Q17 P- 3

1 にぶい黄褐色土 粘質シルト しまり強 粘性ややあり
地山ブロック多量含む
2 黒褐色土 粘質シルト しまりあり 粘性ややあり
地山粒子少量含む

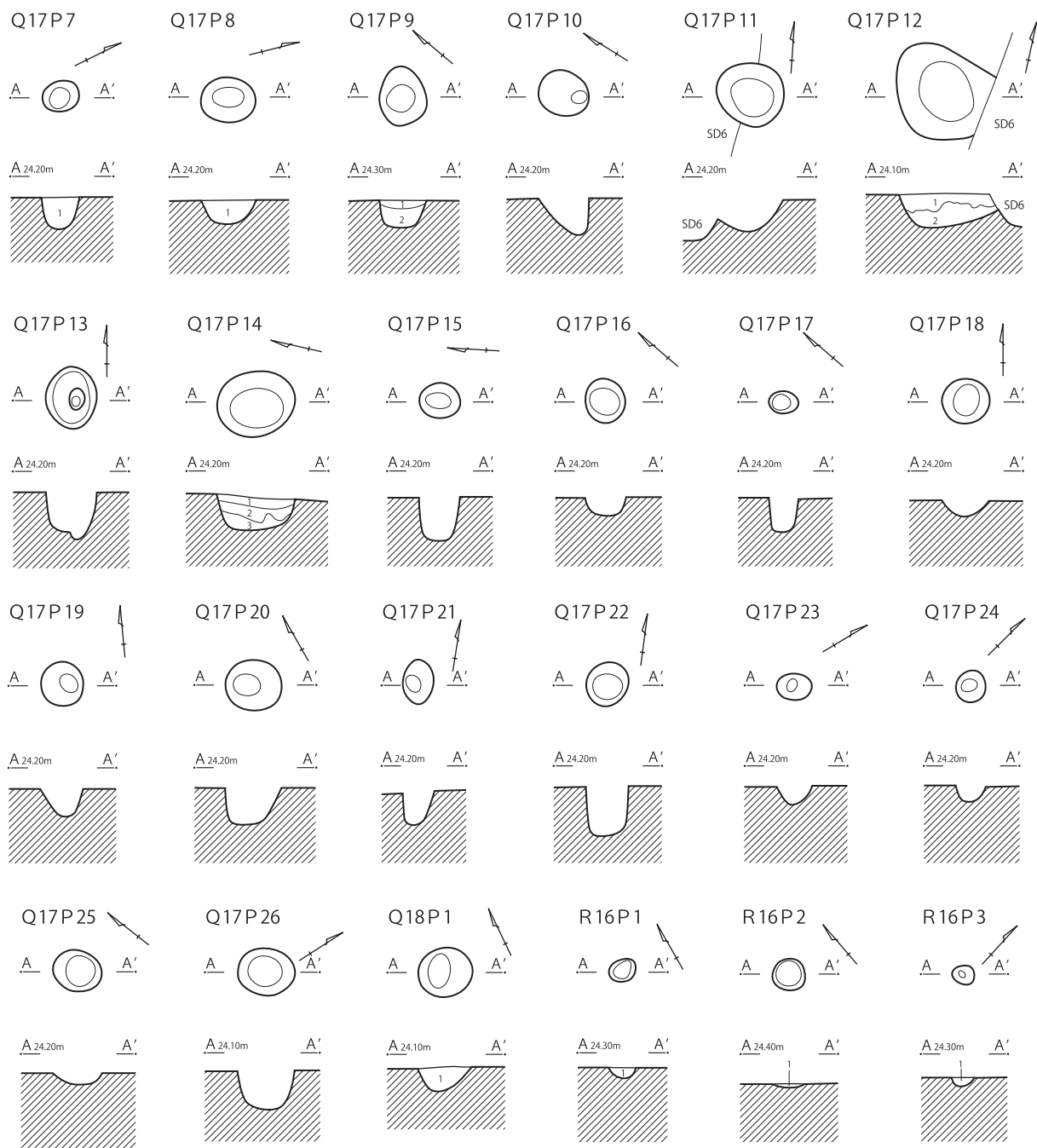
Q17 P- 4

1 褐灰色土 粘質粘土 しまりあり 粘性あり 酸化鉄少量含む
底面に薄く炭化物の広がりあり

Q17 P- 5・6

1 褐灰色土

第 279 図 ピット (4)



Q17 P-7
1 褐灰色土

Q17 P-8
1 褐灰色土 酸化鉄・マンガンを含む

Q17 P-9
1 にぶい黄褐色土 粘質シルト しまり強 粘性ややあり
地山ブロック多量含む
2 黒褐色土 粘質シルト しまりあり 粘性ややあり 地山粒子少量含む

Q17 P-12
1 灰黄褐色土 粘質シルト しまり強 粘性ややあり
灰白色地山粒子少量含む
酸化鉄少量含む 焼土粒子微量含む
2 褐灰色土 粘質シルト しまり強 粘性ややあり
灰白色地山粒子多量含む

Q17 P-14
1 灰黄褐色土

2 褐灰色土
3 にぶい黄褐色土
粘質シルト しまり強 粘性ややあり
灰白色地山粒子少量含む 酸化鉄少量含む
粘質シルト しまり強 粘性ややあり
灰白色地山粒子多量含む
粘質シルト しまり強 粘性ややあり
灰白色地山粒子多量含む

Q18 P-1

1 褐灰色土 酸化鉄・マンガンを含む

R16 P-1

1 褐灰色土 しまりあり 酸化鉄を微量含む

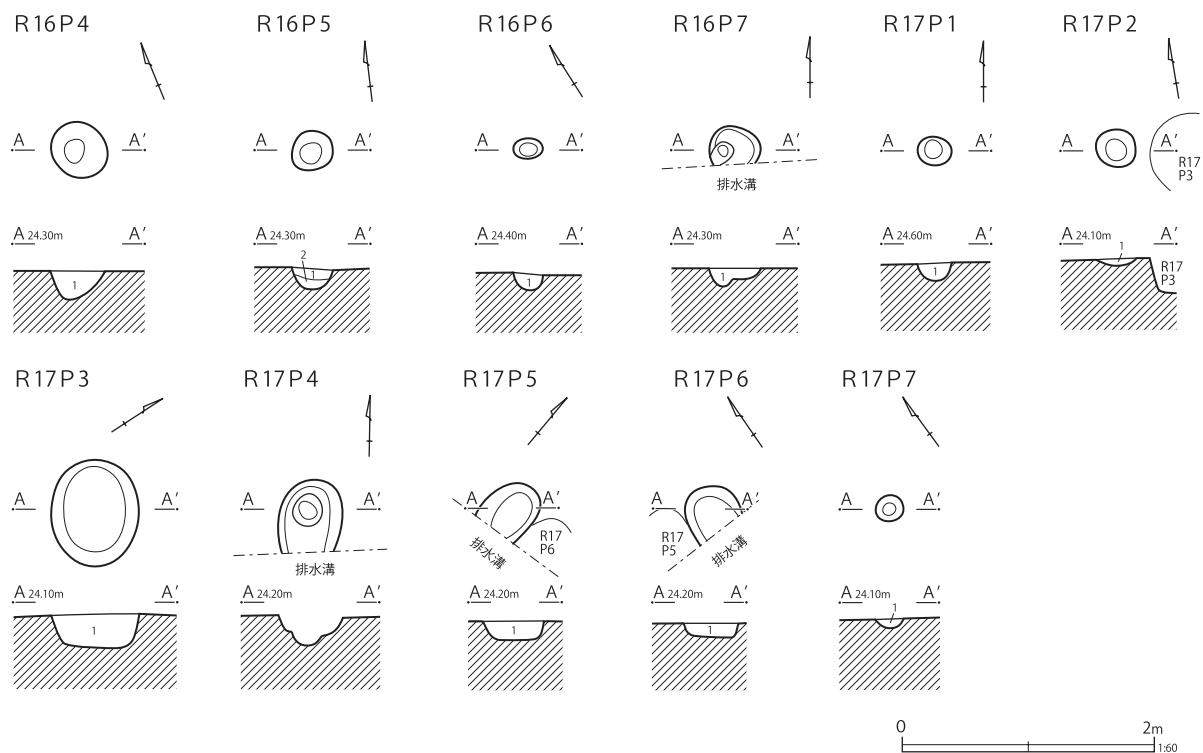
R16 P-2

1 褐灰色土 しまりあり 酸化鉄を微量含む

R16 P-3

1 灰黄褐色土 粘性強 酸化鉄多量含む マンガンを含む

第280図 ピット(5)



R16 P-4
1 灰黄褐色土 粘性強 酸化鉄多量含む マンガンを含む

R16 P-5
1 褐灰色土 シルト質 しまり強 酸化鉄少量含む マンガン含む
2 にぶい黄褐色土 シルト質 しまり強 酸化鉄多量含む

R16 P-6
1 灰黄褐色土 しまり強 粘性強 酸化鉄・マンガン含む

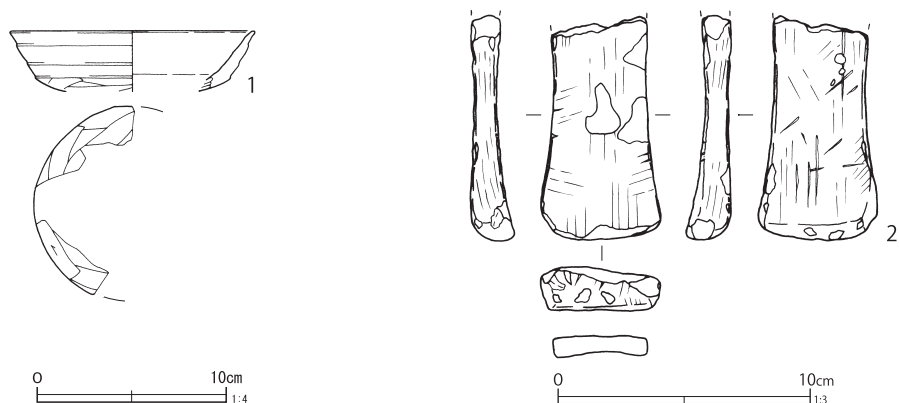
R16 P-7
1 灰黄褐色土 粘質シルト しまり強 粘性あり 焼土粒子微量含む マンガン含む

R17 P-1・2・5
1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 酸化鉄・マンガン含む

R17 P-3
1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 酸化鉄・マンガン含む

R17 P-6・7
1 褐灰色土 酸化鉄・マンガンを含む

第281図 ピット(6)



第282図 ピット出土遺物

第78表 ピット出土遺物観察表(第282図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.8)	[3.2]	—	H I K	40	普通	橙	D-16 P 2	64-3
2	石製品	砥石	長さ [8.8]	幅 4.7	厚さ [1.8]	重さ 71.9 g				N-18 P 2 凝灰岩製	79-4

第 79 表 グリッドピット計測表 (第 276 ～ 281 図)

グリッド	ピット番号	平面形状	長径	短径	深さ	重複遺構	出土遺物
A - 16	P - 1	楕円形	52	49	25		
B - 16	P - 1	楕円形	37	36	31		
B - 17	P - 1	楕円形	36	22	23		
C - 14	P - 1	楕円形	21	19	8		
C - 14	P - 2	楕円形	13	12	7		
C - 15	P - 1	楕円形	30	30	23		
C - 17	P - 1	楕円形	38	34	20		
C - 17	P - 2	楕円形	29	25	11		
D - 14	P - 1	隅丸方形?	(91)	(50)	7		
D - 15	P - 1	欠番					
D - 15	P - 2	楕円形	27	26	26		
D - 15	P - 3	楕円形	42	42	38		
D - 15	P - 4	不整形	64	41	48		
D - 15	P - 5	楕円形	25	25	26		
D - 15	P - 6	楕円形	41	38	30	SD61	
D - 15	P - 7	楕円形	50	43	26		
D - 15	P - 8	楕円形	50	35	47		
D - 16	P - 1	楕円形	39	35	68		根石
D - 16	P - 2	楕円形	47	42	74		
J - 16	P - 1	隅丸長方形	57	34	7		
J - 16	P - 2	楕円形	33	28	4		
J - 17	P - 1	楕円形	25	20	24		
J - 17	P - 2	楕円形	31	27	27	畠跡 2- 畝 3	
K - 16	P - 1	隅丸三角形	42	34	27		
K - 16	P - 2	楕円形	26	23	14		
K - 16	P - 3	楕円形	25	21	19		
K - 16	P - 4	楕円形	17	16	13		
K - 16	P - 5	楕円形	41	37	28	SD12	
K - 18	P - 1	楕円形	22	19	14	SK26	
K - 18	P - 2	楕円形	18	11	14		
L - 16	P - 1	楕円形	20	17	7	SJ72	
L - 16	P - 2	楕円形	25	19	24	SJ72・SJ80	
L - 17	P - 1	円形	23	(22)	15	SJ60	
L - 17	P - 2	楕円形	35	32	21		
L - 17	P - 3	楕円形	23	20	16		
L - 17	P - 4	楕円形	27	26	32		
L - 17	P - 5	楕円形	50	37	30	SJ74・75	
M - 16	P - 1	円形	31	30	25		
M - 16	P - 2	円形	25	23	20		
M - 16	P - 3	楕円形	45	(43)	20	SJ48	
M - 16	P - 4	楕円形	45	42	22	SJ47・SK11	
M - 16	P - 5	円形	43	42	13	SJ52	
M - 16	P - 6	円形	47	(45)	18	SJ48	
M - 16	P - 7	楕円形	46	42	22		
M - 17	P - 1	楕円形	41	34	32		
N - 16	P - 1	楕円形	54	41	19		土師器
N - 16	P - 2	楕円形	40	40	31		
N - 16	P - 3	楕円形	30	28	23		
N - 18	P - 1	楕円形	32	29	7		土師器
N - 18	P - 2	楕円形	46	42	6		
N - 18	P - 3	楕円形	43	38	11		
N - 18	P - 4	楕円形	61	31	30	SD6	
O - 16	P - 1	楕円形	61	40	9	SD4	土師器
O - 16	P - 2	楕円形	29	26	28	SJ62・SD4	土師器
O - 17	P - 1	隅丸三角形	42	35	16		土師器
P - 16	P - 1	楕円形	39	36	9	SD4	土師器
P - 16	P - 2	楕円形	35	31	16		
P - 16	P - 3	隅丸三角形	41	35	9		
P - 16	P - 4	欠番					
P - 16	P - 5	欠番					
P - 16	P - 6	楕円形	43	41	13	SJ59	
P - 16	P - 7	欠番					
P - 17	P - 1	楕円形	25	23	12		土師器
P - 17	P - 2	楕円形	37	35	25		土師器

グリッド	ピット番号	平面形状	長径	短径	深さ	重複遺構	出土遺物
P-17	P-3	楕円形	25	24	12	SJ12	
P-17	P-4	円形	35	33	12		
Q-16	P-1	楕円形	27	25	9	SJ9	
Q-16	P-2	楕円形	39	32	11		
Q-16	P-3	楕円形	61	55	14		
Q-16	P-4	楕円形	22	20	5		
Q-16	P-5	欠番					
Q-16	P-6	楕円形	42	30	21		土師器
Q-16	P-7	楕円形	26	24	9		土師器
Q-16	P-8	楕円形	32	31	10		
Q-16	P-9	楕円形	24	22	10	SJ38・SJ69	
Q-16	P-10	楕円形	41	(40)	46	SJ69	土師器・須恵器
Q-16	P-11	不整台形	120	62	54	SJ9	
Q-16	P-12	楕円形	52	47	39		
Q-16	P-13	欠番					
Q-16	P-14	欠番					
Q-16	P-15	楕円形	75	60	34	SJ9	
Q-16	P-16	楕円形	62	59	29	SJ9	
Q-16	P-17	欠番					
Q-16	P-18	楕円形	30	25	14		
Q-16	P-19	楕円形	23	21	21		
Q-17	P-1	楕円形	29	25	24	SD1	
Q-17	P-2	隅丸三角形	80	73	23	SJ9	土師器
Q-17	P-3	円形	40	38	34		
Q-17	P-4	楕円形	23	20	8		
Q-17	P-5	楕円形	21	20	4	SJ9	
Q-17	P-6	楕円形	39	36	4	SD1	
Q-17	P-7	楕円形	35	28	30		
Q-17	P-8	楕円形	50	42	22		
Q-17	P-9	楕円形	56	43	25		土師器
Q-17	P-10	楕円形	46	42	34	SD2	
Q-17	P-11	楕円形	68	59	29	SD6	
Q-17	P-12	不整形	87	(83)	31	SD6	
Q-17	P-13	楕円形	58	46	44	SJ9	
Q-17	P-14	楕円形	72	60	32		
Q-17	P-15	楕円形	36	34	40		
Q-17	P-16	楕円形	41	37	17		
Q-17	P-17	楕円形	26	20	32		
Q-17	P-18	楕円形	44	42	15		
Q-17	P-19	楕円形	42	40	17	SD2	
Q-17	P-20	楕円形	50	46	34	SD2	
Q-17	P-21	楕円形	42	26	31		
Q-17	P-22	楕円形	40	38	48	SD1	
Q-17	P-23	楕円形	34	25	18	SD1	
Q-17	P-24	楕円形	28	26	15		
Q-17	P-25	楕円形	44	38	10		
Q-17	P-26	楕円形	51	43	36	SD1	
R-16	P-1	楕円形	22	21	9		土師器
R-16	P-2	楕円形	30	28	3		
R-16	P-3	楕円形	19	16	9		
R-16	P-4	楕円形	45	42	24		土師器
R-16	P-5	楕円形	32	31	15		
R-16	P-6	楕円形	22	17	14		土師器
R-16	P-7	楕円形	40	(29)	14		
R-16	P-8	楕円形	43	40	14		
R-17	P-1	楕円形	26	23	16		
R-17	P-2	円形	31	30	6	Q-17 P-3	
R-17	P-3	楕円形	86	70	28		
R-17	P-4	楕円形	(52)	48	24	SD2	
R-17	P-5	楕円形	(42)	40	13		
R-17	P-6	楕円形	42	(35)	12		
R-17	P-7	楕円形	21	20	6		
R-18	P-1	楕円形	48	46	23		

（６）遺物集中区

調査当初、表土を掘削し遺構の確認を始めたところ、大量に土器片が集中して出土した箇所があった。遺構の存在を予想して確認を行ったがプランが把握できなかったため、サブトレンチを掘り土層断面の確認をしながら更にプランの把握に努めた。しかし、明確なプランの確認には至らなかったため、その部分を遺物集中区として扱った。出土した遺物は、出土位置を記録して取り上げた（第283～292図）。

遺物の分布範囲は、調査区の南側にあたるR-18グリッドを中心とする約9m×6mの範囲である。その中でも特に集中する範囲は、5m×3mとなる。

遺物の平面分布は、複数の円形あるいは楕円形のまとまりに見える。遺物の出土した高低差は約0.6mである。ここから1,017番まで遺物番号を記録した。番号は、明らかに同一個体とわかるものは複数の破片であっても一つの番号で取り上げた。

遺物の種類は圧倒的に土器が多く、次いで石製品である。

遺物の遺存状況は、土器は全て破片で、完形で出土したものはない。

全ての遺物の取り上げ後に、不整形の土壌状の掘り込みを3基検出した。規模は、長径1.37m・短径1.05m・深さ0.45m、長径1.37m・短径1.05m・深さ0.25m、長径1.37m・短径1.05m・深さ0.20mである。

覆土は、上層は炭化物層で、下位は灰黄褐色、褐灰色の粘質シルトである。埋め戻しの可能性がある。上層の遺物集中区に伴うものとして、本項で掲載した。

遺物の内訳は、土師器が圧倒的に多く2,558片、須恵器は64片である。時期幅は6世紀後半から9世紀後半まで見られ、7世紀後半から8世紀初頭のものが多い。石製品は編み物石と考えられるものが殆どである。

遺物集中区出土遺物（第293～302図）

遺物集中区から出土した遺物で、図化できたのは137点である。

1～12は須恵器である。古墳時代から平安時代にわたる時期のものが認められる。

1～3は坏である。1は湖西産で、底面手持ちヘラケズリ。ヘラ記号が認められる。7世紀後半。2は南比企産。回転糸切りで9世紀初頭である。

5は高台付埴である。焼成が悪い。末野産。9世紀後半。

6は湖西産のフラスコ形瓶である。肩に自然釉がかかる。7世紀後半。7は東海産の瓶類である。見込み部分に釉が垂れる。7世紀後半～8世紀初頭と考えられる。

8～10は大甕である。8は頸部に平行タタキ、9は横ナデ、10は格子タタキが施されている。10の内面は青海波文が認められる。8・9は9世紀、10は7世紀後半～8世紀初頭と考えられる。

11は瓶類の胴部である。外面平行タタキ。内面無文当て具。肩に自然釉がかかる。8世紀前半。

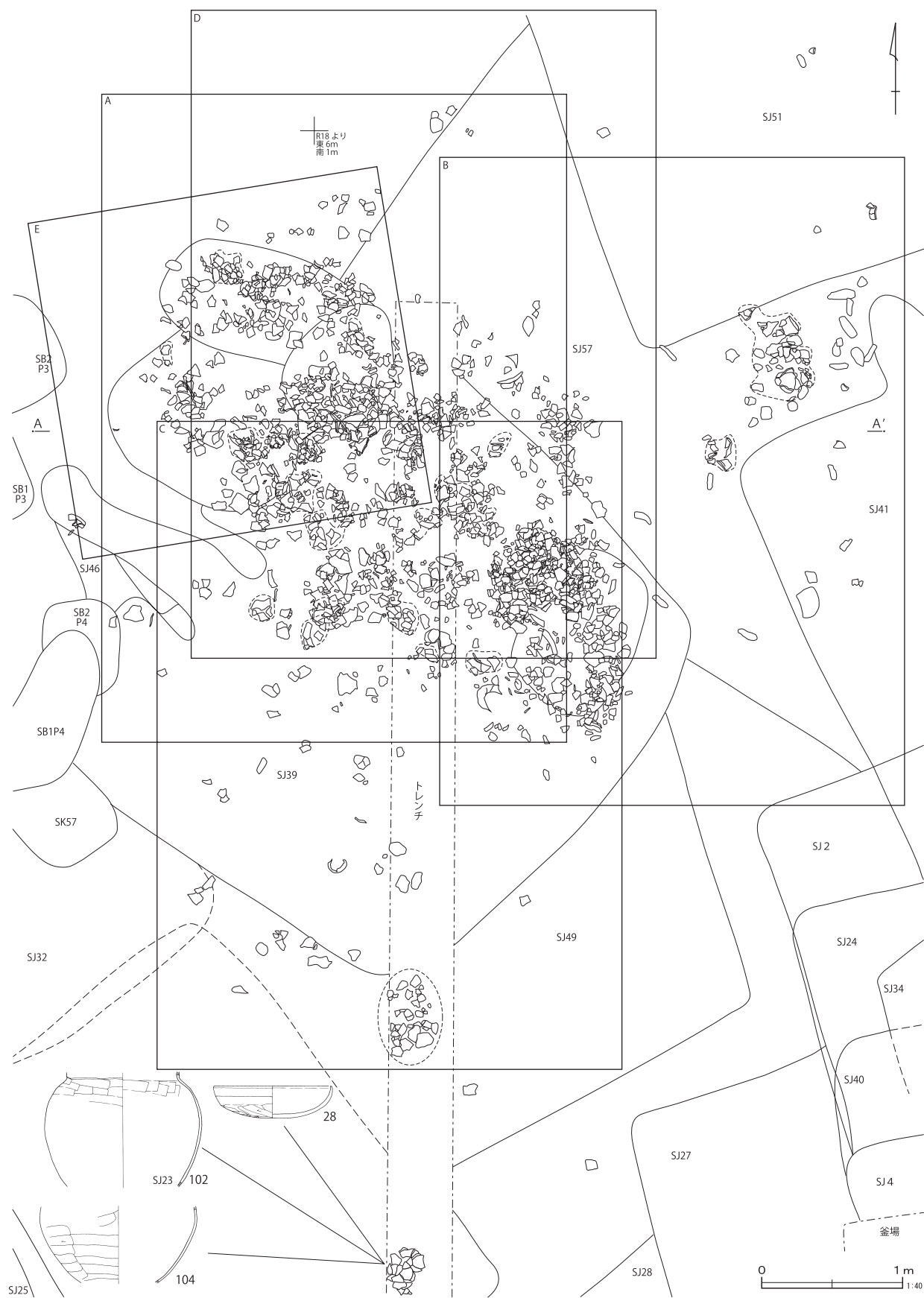
12は長脚2段の高坏である。三方透かしで、上段は貫通しない。内面に自然釉がかかる。6世紀後半～7世紀前半。産地不明。

13～118は土師器である。13～29は坏である。13が坏蓋模倣坏、14・15が有段口縁坏、他は北武蔵型坏である。13は7世紀前半。14・15は7世紀代である。北武蔵型坏は口径の大小や身の深さが異なる。大部分が7世紀末から8世紀初頭と考えられる。24は北武蔵型暗文坏の可能性はある。

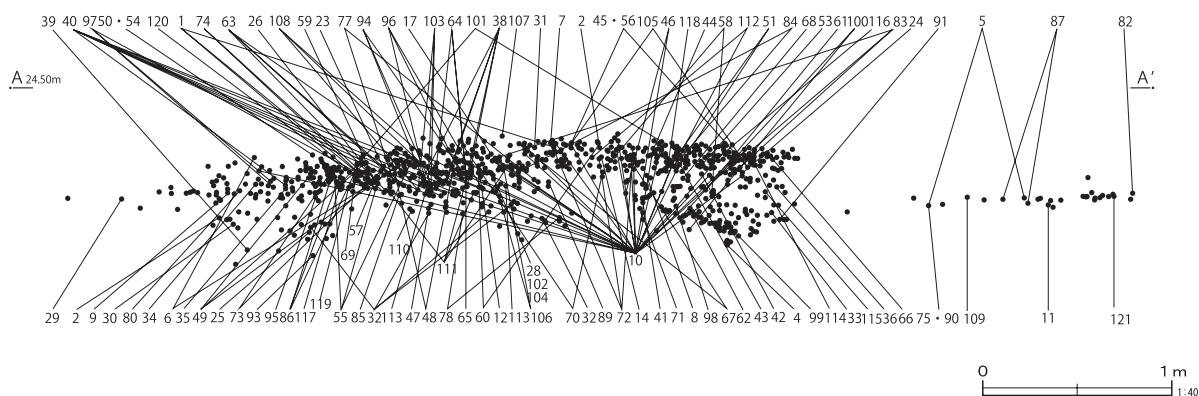
30・31は皿である。径が大きく、7世紀末から8世紀初頭と考えられる。

32・33は北武蔵型暗文坏である。両者とも口縁部が短く、放射状に暗文が施されている。7世紀末から8世紀初頭。

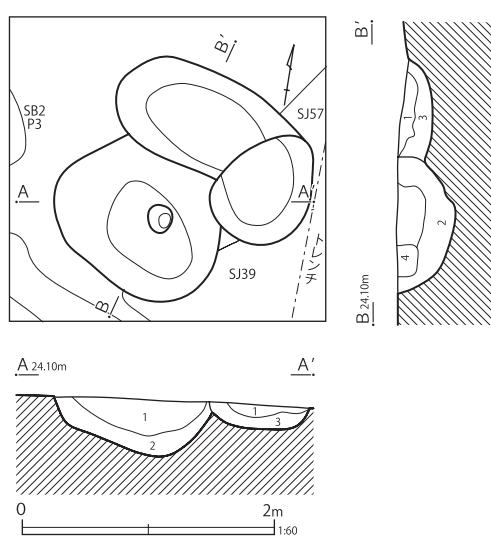
34は9世紀の北武蔵型坏である。体部上半は無調整である。



第 283 図 遺物集中 (1/40)



第 284 図 遺物集中 (1/40)



- 遺物集中
- | | | |
|---------|-----------------|-----------------|
| 1 炭層土 | 焼土粒子・焼土ブロック多量含む | 地山粒子少量含む |
| 2 灰黄褐色土 | 粘質シルト | しまりややあり 粘性ややあり |
| | 焼土粒子・炭化粒子 | |
| | 少量含む | 地山粒子・地山ブロック多量含む |
| 3 褐灰色土 | 粘質シルト | しまりややあり 粘性ややあり |
| | 炭化粒子少量含む | |
| | 地山粒子多量含む | |
| 4 灰黄褐色土 | 粘質シルト | しまりややあり 粘性ややあり |
| | 焼土粒子微量含む | |

第 285 図 遺物集中 E

35・36は甗である。口縁部が短く斜めに開く 6 世紀後半から 7 世紀初頭。37～74・77～80は、長甗である。39・40が 7 世紀前半。52・59が 6 世紀後半から 7 世紀初頭。これらを除いては、ほぼ 7 世紀後半から 8 世紀初頭のものである。胴部外面縦方向のヘラケズリ、内面横方向のヘラナデ。

75・76はコノ字甗である。9 世紀中葉。82・86・87・91は小型甗、83～85・88・89・94・95・104は小型壺である。胴部の調整は、横もしくは斜めのヘラケズリである。7 世紀後半から 8 世紀初頭。

90は、9 世紀の台付甗と考えられる。92・93・96～103・106・108・109は壺である。口縁部は外反する。胴部の調整は、横もしくは斜めのヘラケズリ、底面もヘラケズリである。102・103は器肉が薄く、ヘラケズリが不明瞭である。9 世紀後半か。これらを除いて他は、7 世紀後半から 8 世紀初頭のものである。109は輪台状の底部である。木葉痕が残る。6 世紀か。

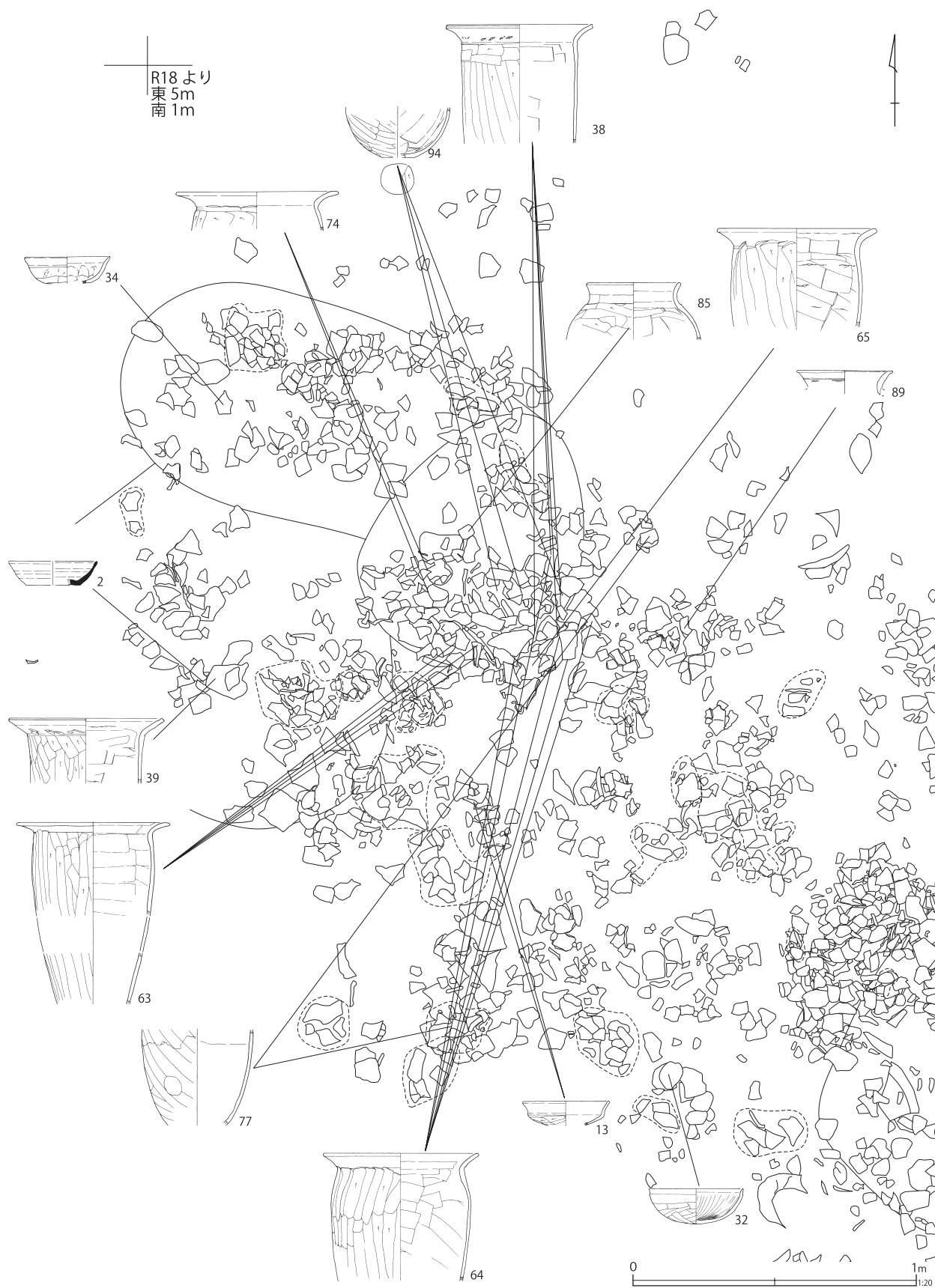
111は台付甗である。低平で特徴的な脚台部が付く。7 世紀か。112は時期不詳である。

113～117は甗である。113・114には小型の把手が付く。

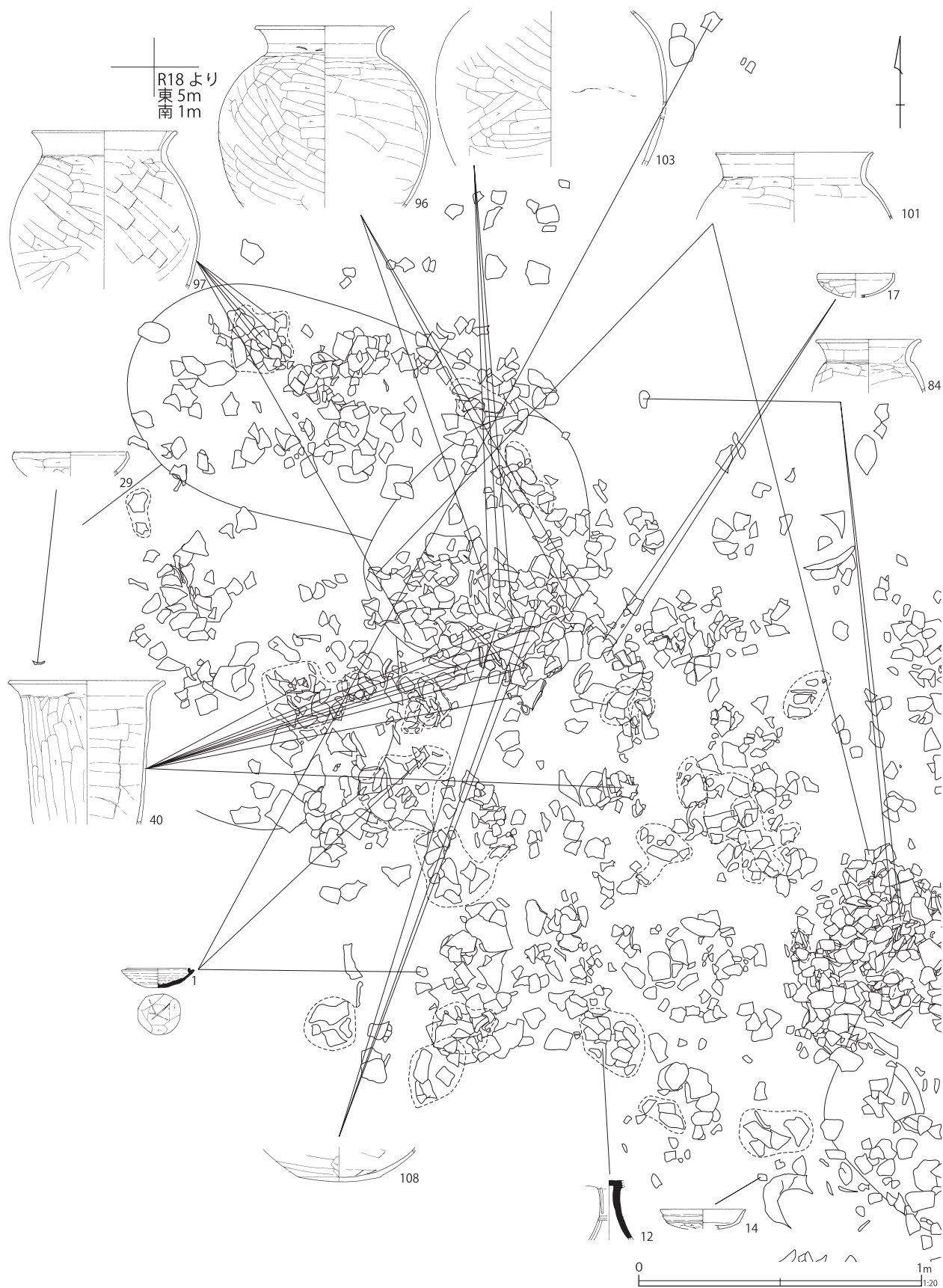
118は鉢である。大型の有段口縁で、内外面黒色処理されている。

120は砥石である。安山岩製。表裏面に刃物痕が残る。

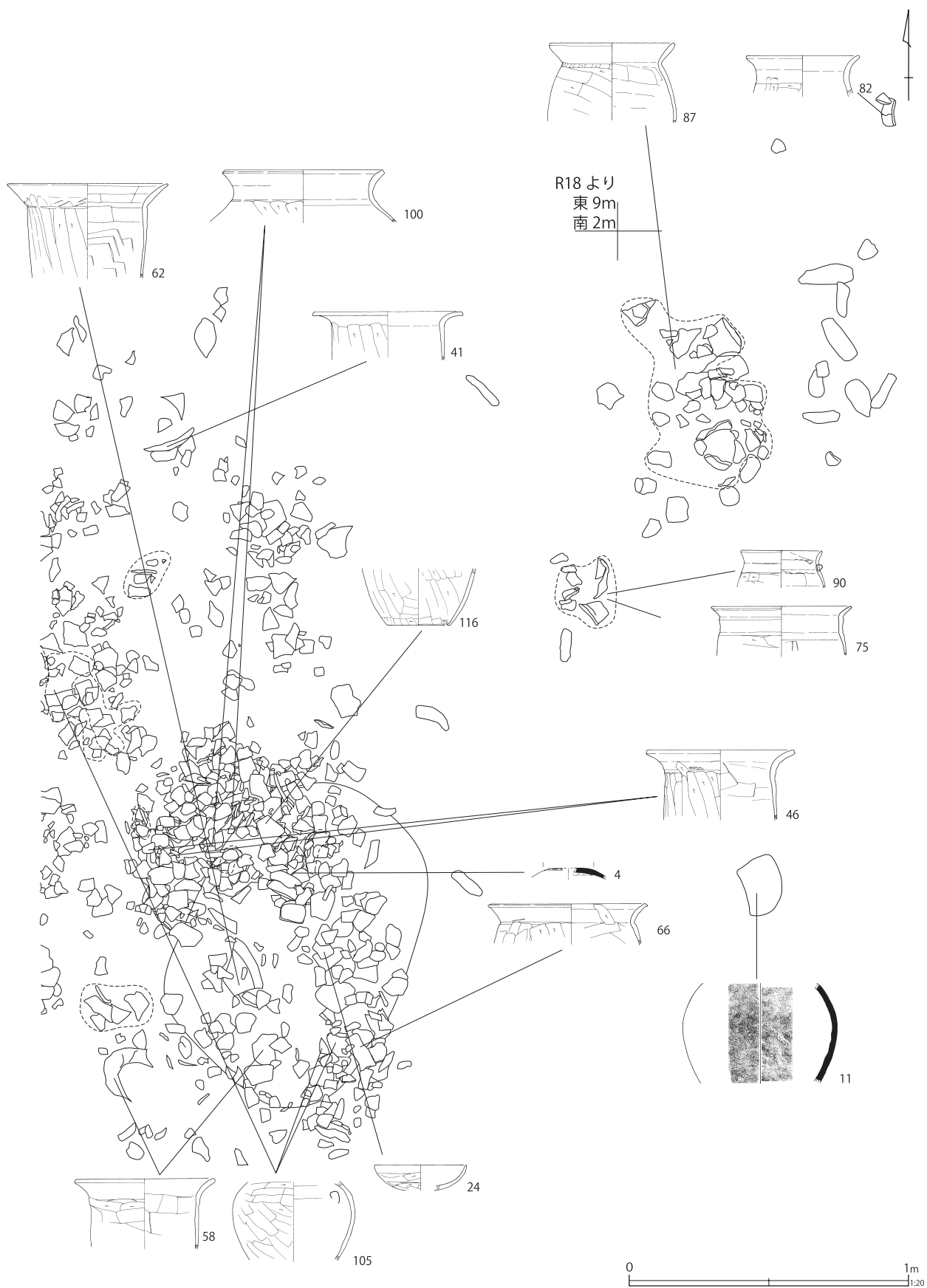
121～137は編み物石である。121は表裏面に煤が付着する。長さ 11.2～16.8cm、幅 3.9～7.5cm、厚さ 2.2～3.8cm、重さは 282.3～732.3g である。石材は大部分が砂岩で、他に凝灰岩、花崗閃緑岩、白雲母石英片岩、片岩、緑泥片岩がある。打割、剥離等の加工は施されず、中央に擦過痕がわずかに認められるのみである。



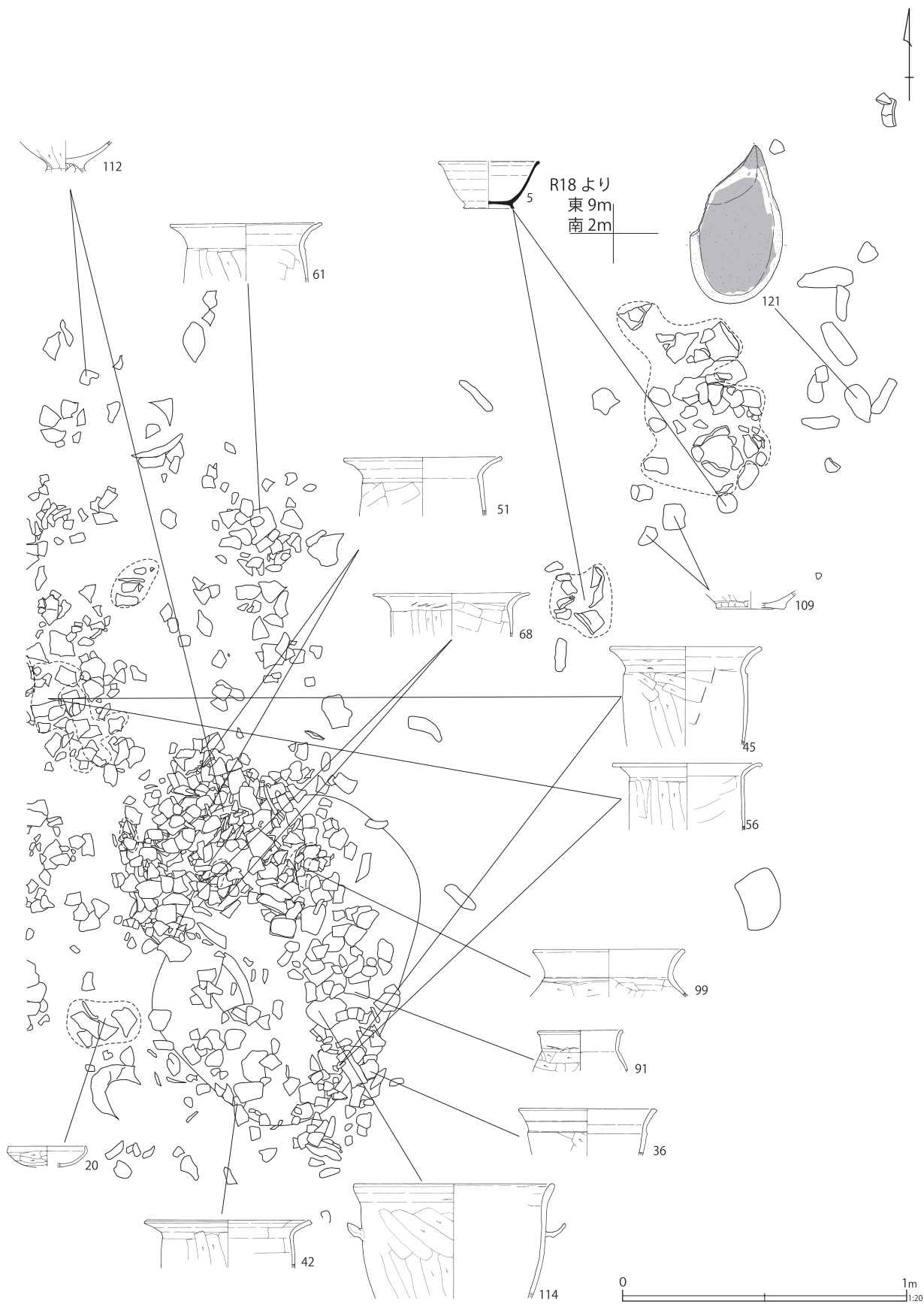
第 286 図 遺物集中 A (1/20)



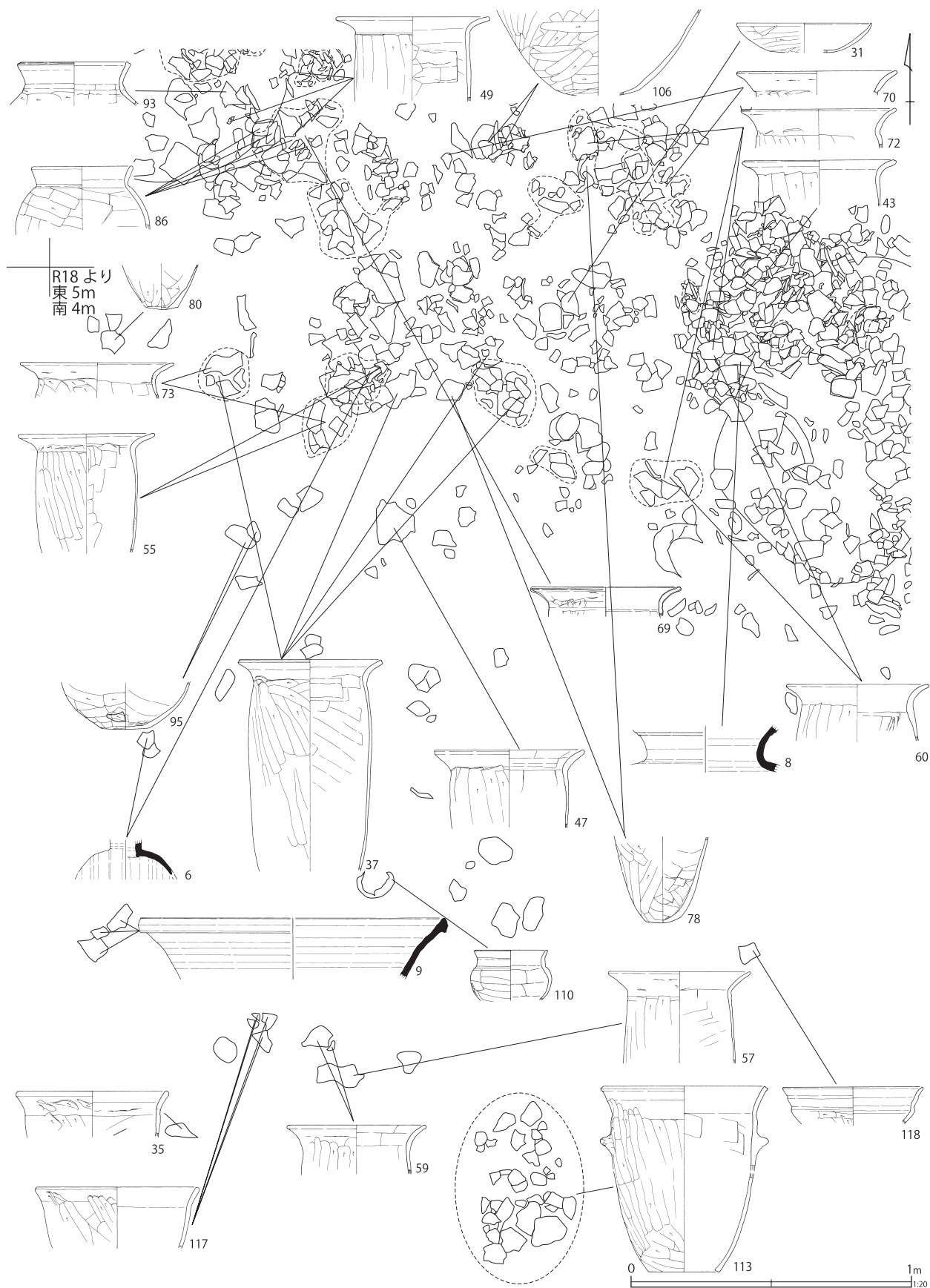
第 287 図 遺物集中 A' (1/20)



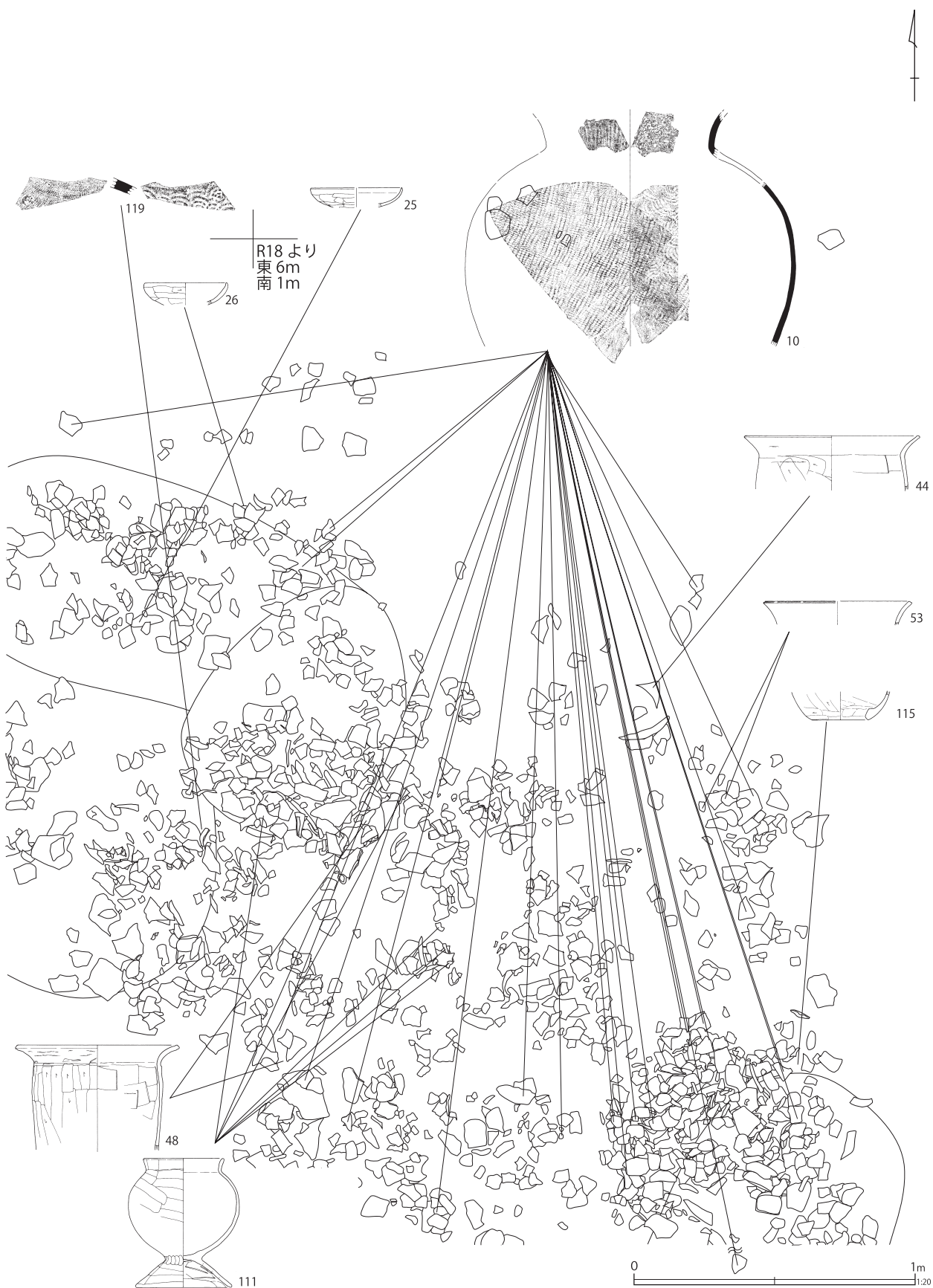
第 288 図 遺物集中 B (1/20)



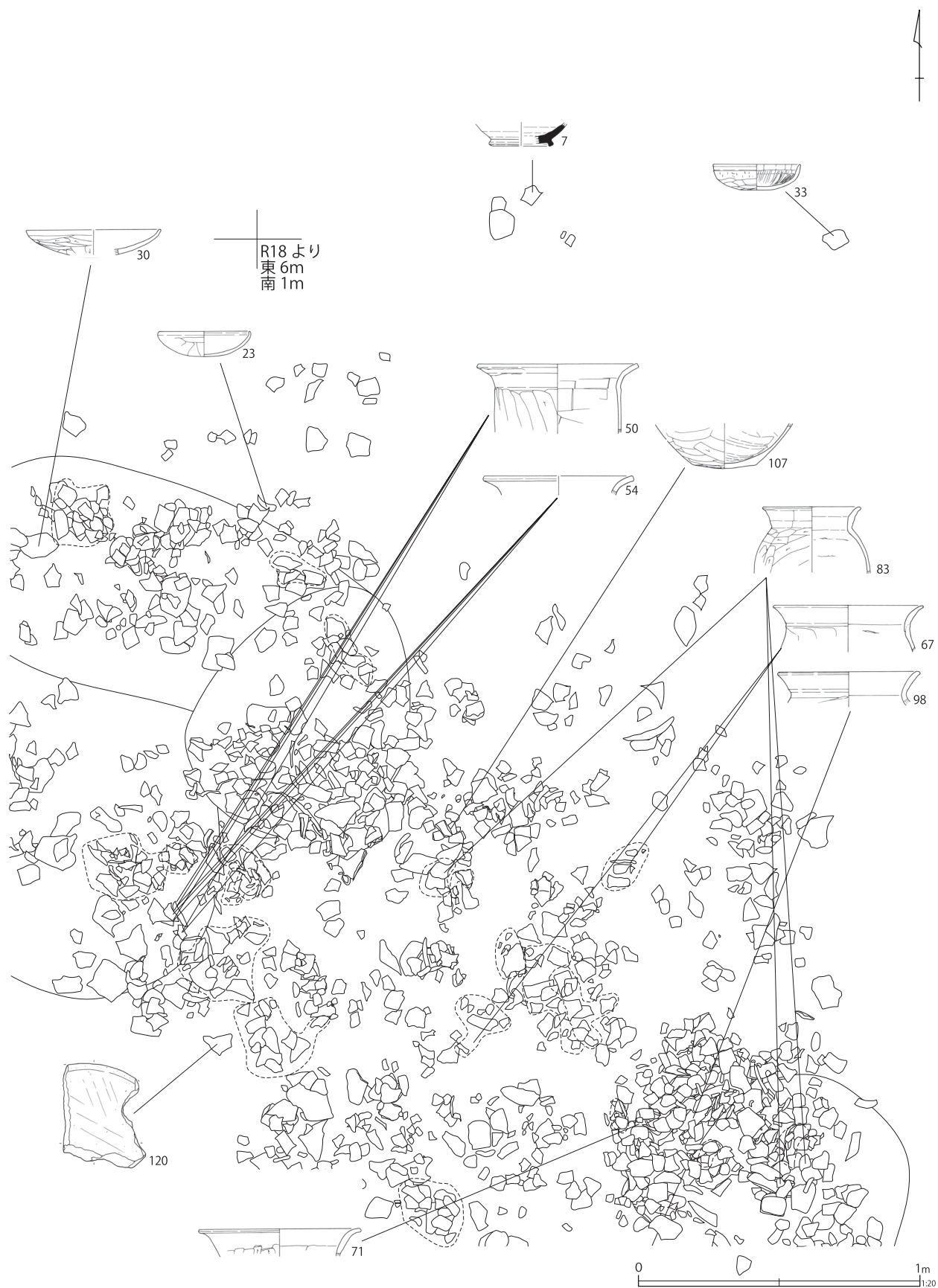
第 289 図 遺物集中 B' (1/20)



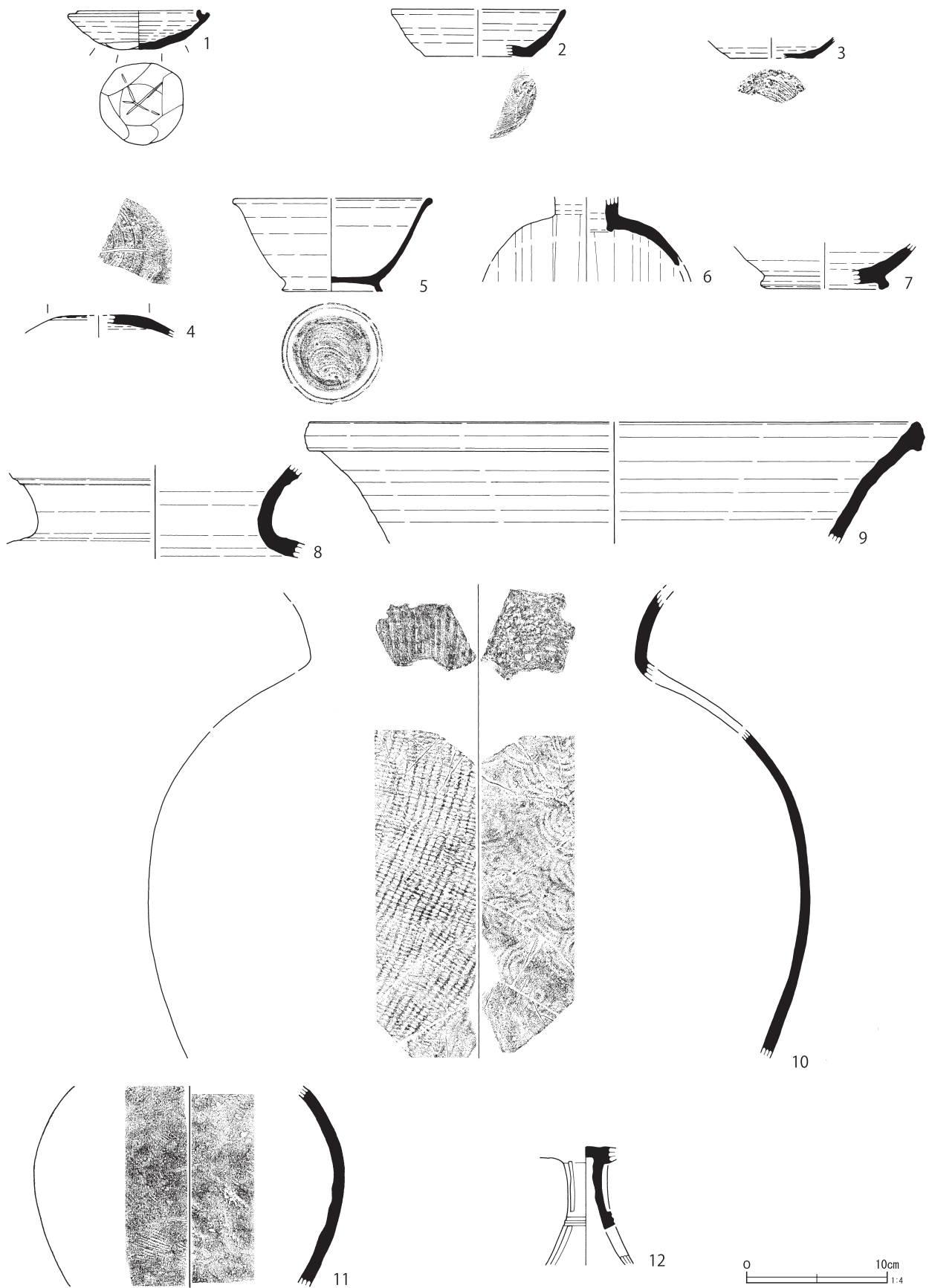
第 290 図 遺物集中 C (1/20)



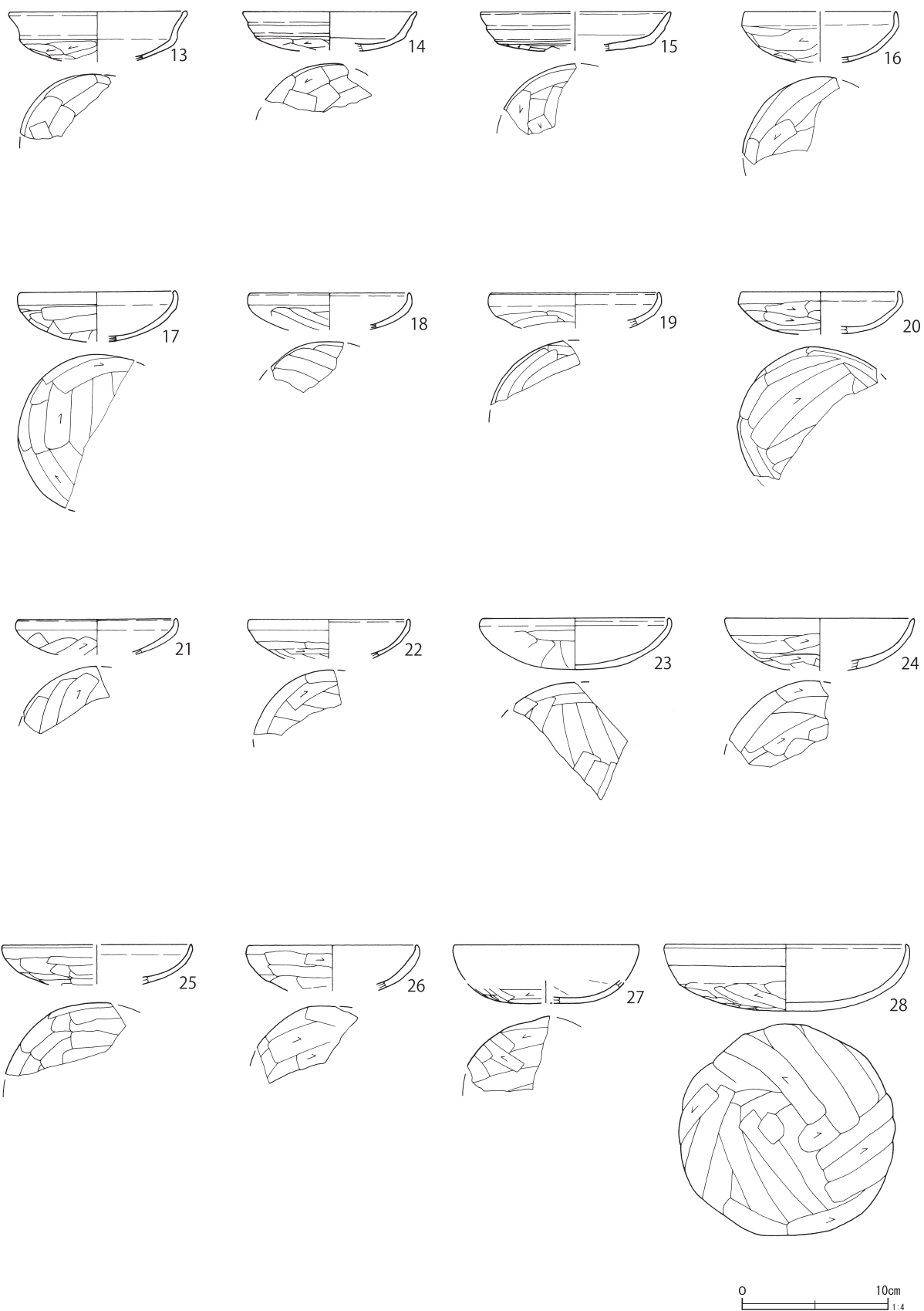
第 291 図 遺物集中D (1/20)



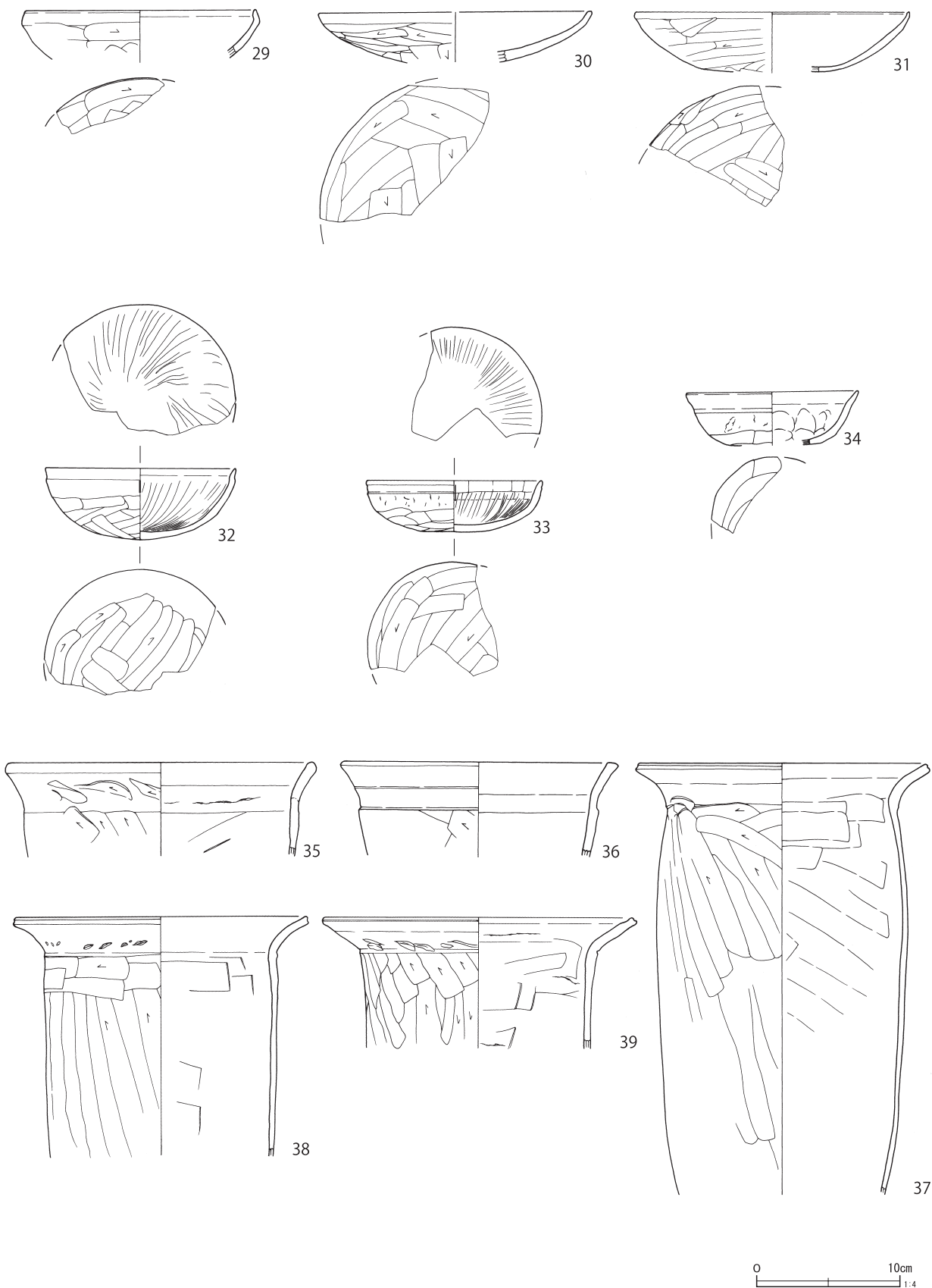
第292図 遺物集中D' (1/20)



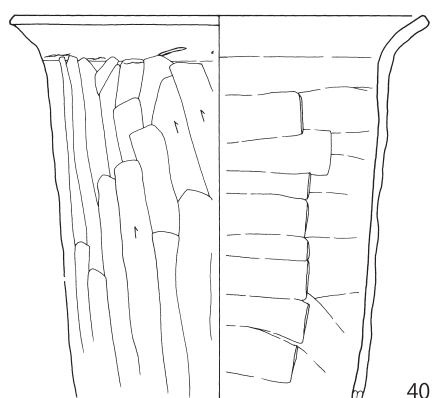
第 293 図 遺物集中出土遺物 (1)



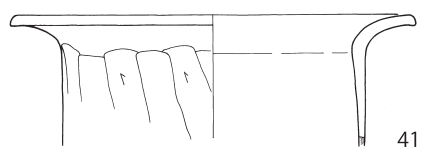
第 294 図 遺物集中出土遺物 (2)



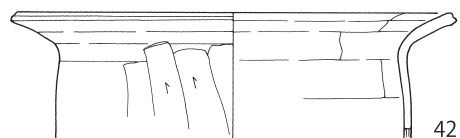
第 295 図 遺物集中出土遺物 (3)



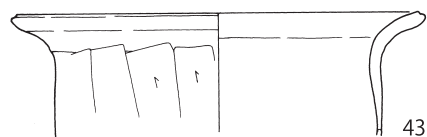
40



41



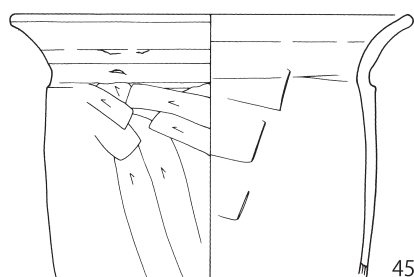
42



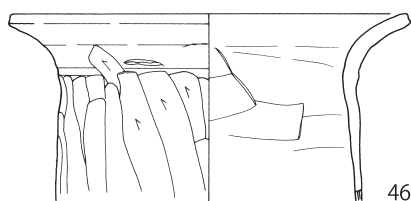
43



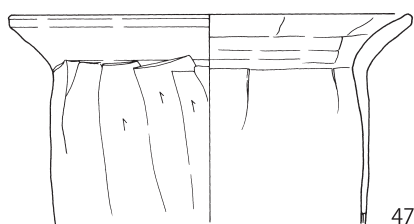
44



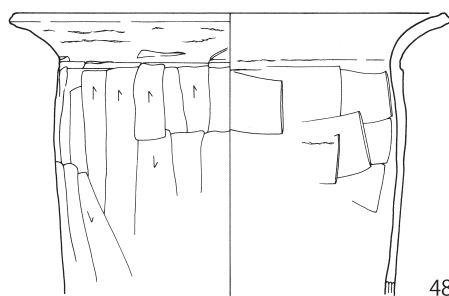
45



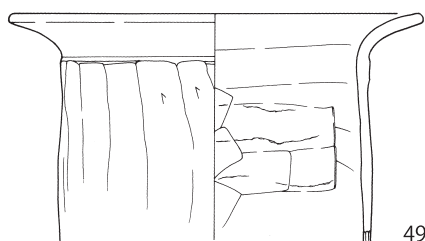
46



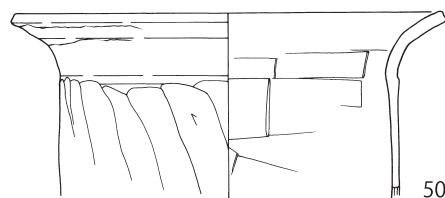
47



48



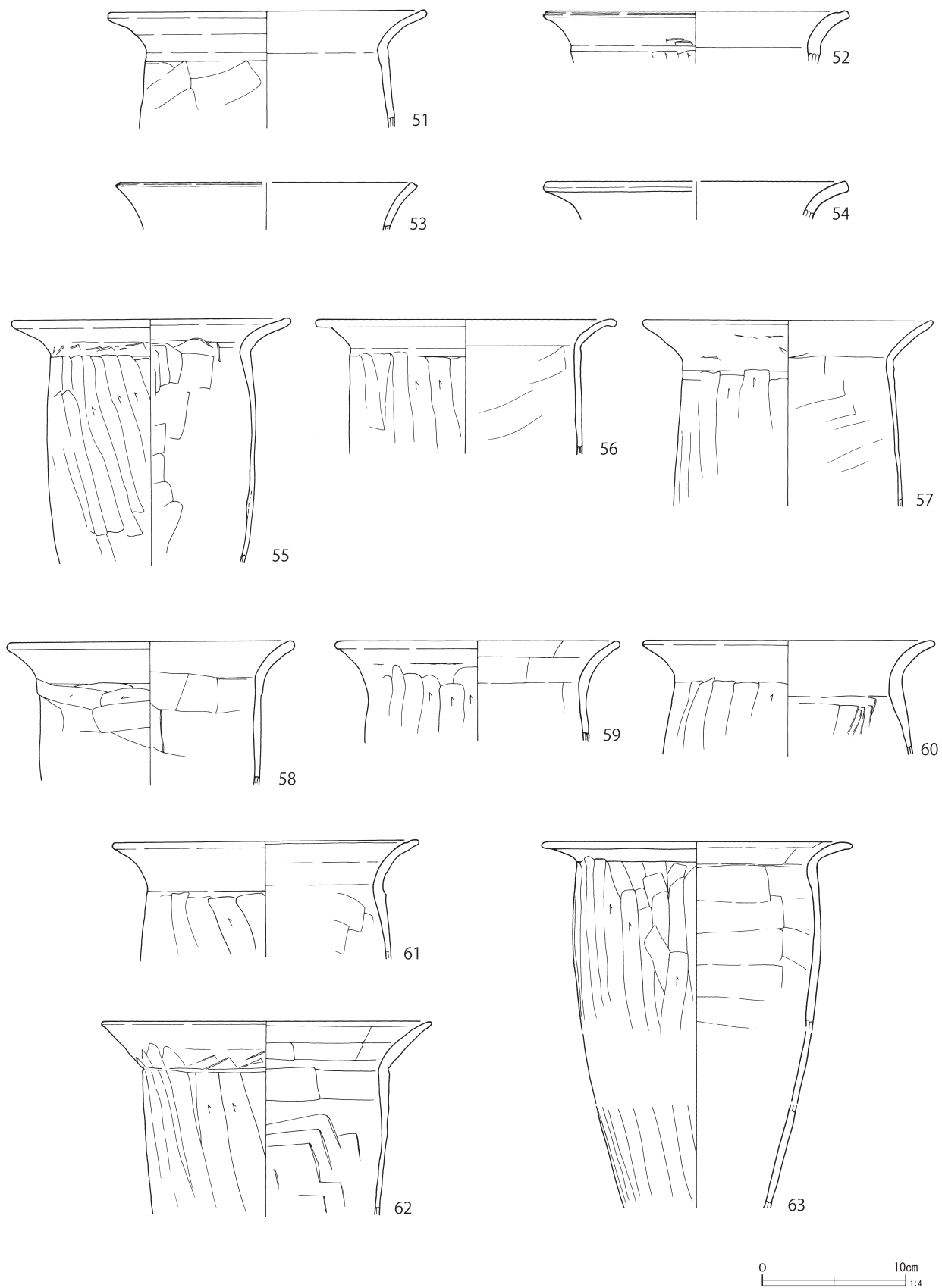
49



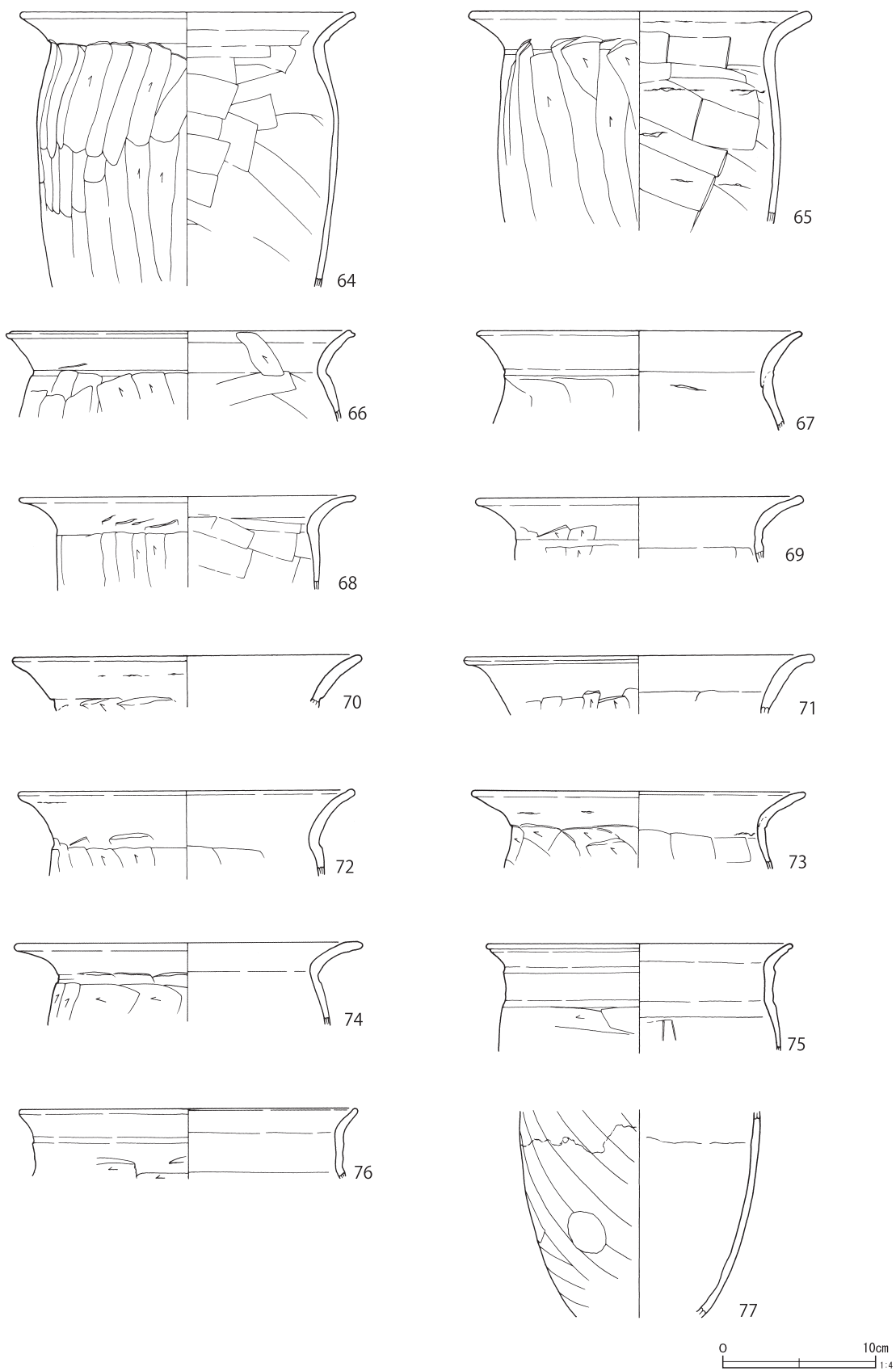
50

0 10cm
1:4

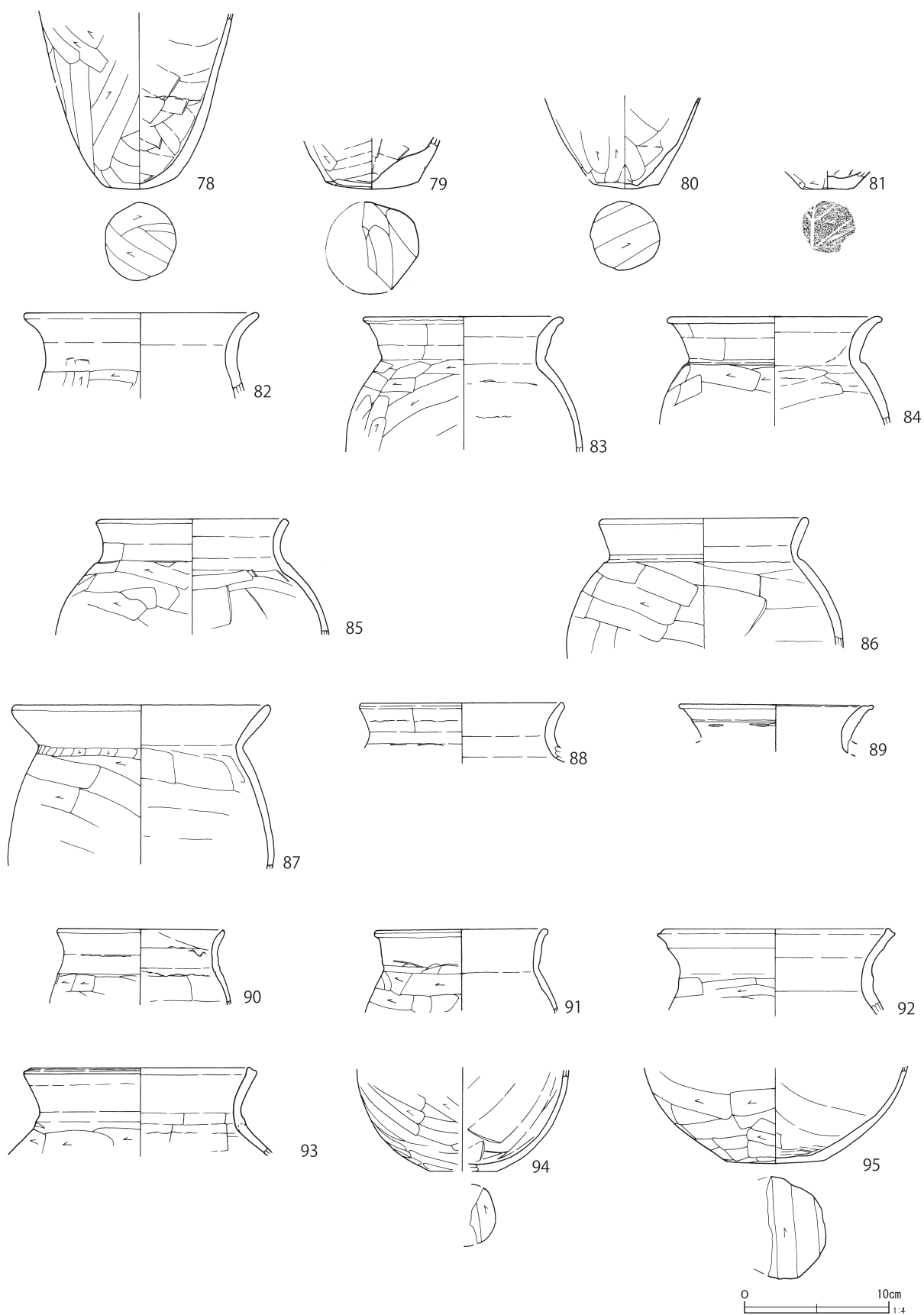
第 296 図 遺物集中出土遺物 (4)



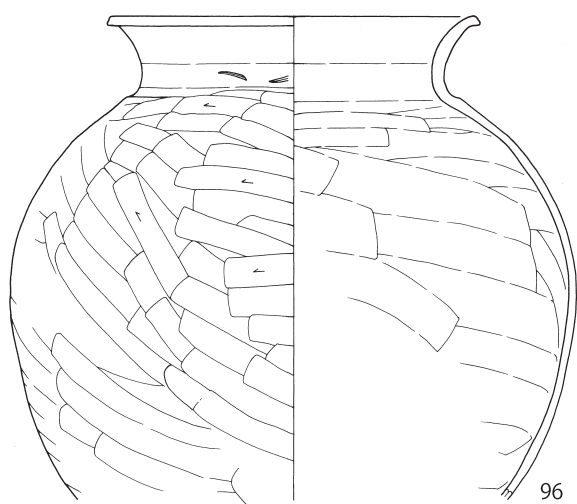
第 297 図 遺物集中出土遺物 (5)



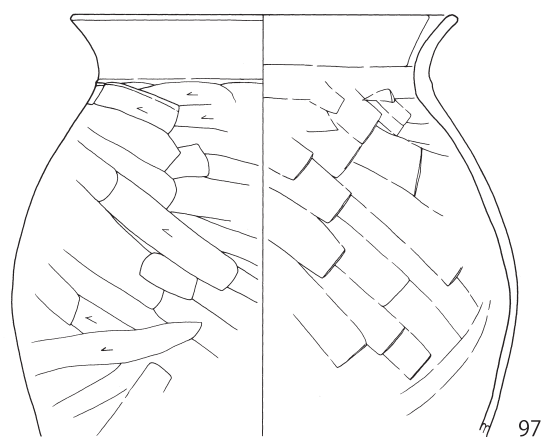
第 298 図 遺物集中出土遺物 (6)



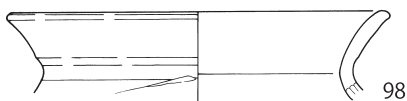
第 299 図 遺物集中出土遺物 (7)



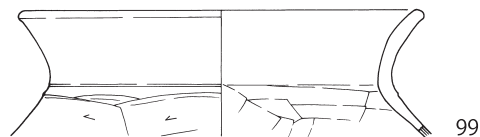
96



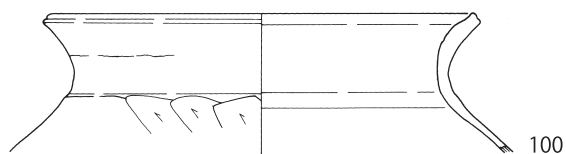
97



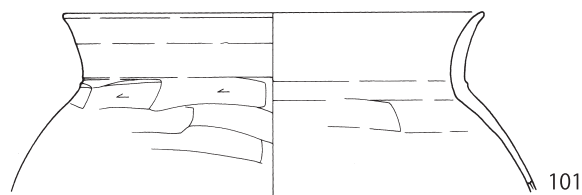
98



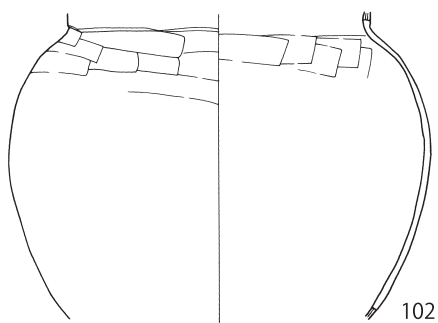
99



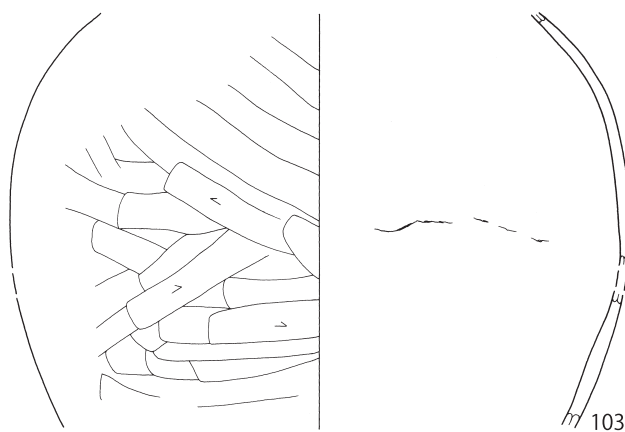
100



101



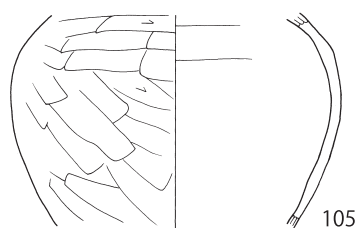
102



103



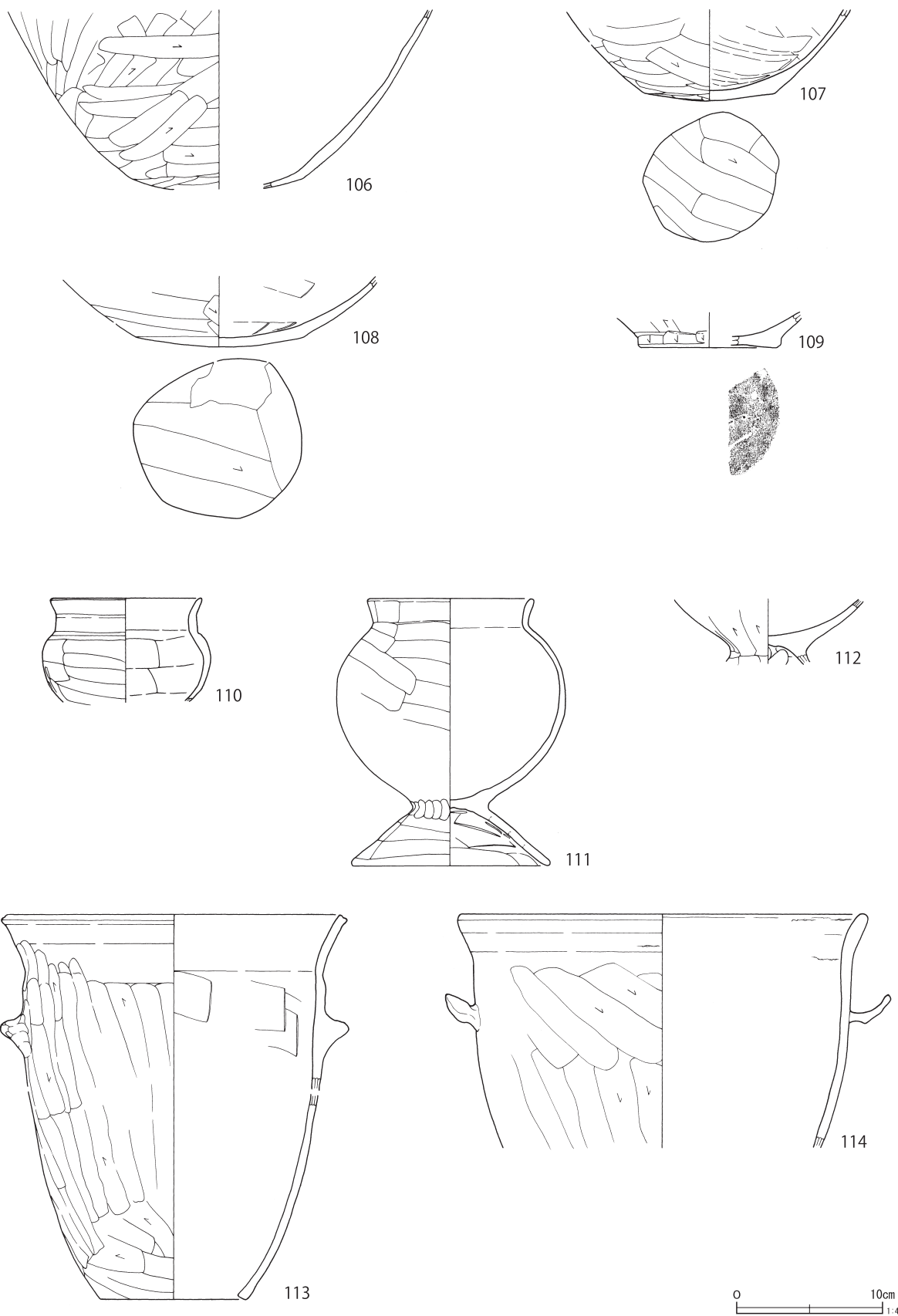
104



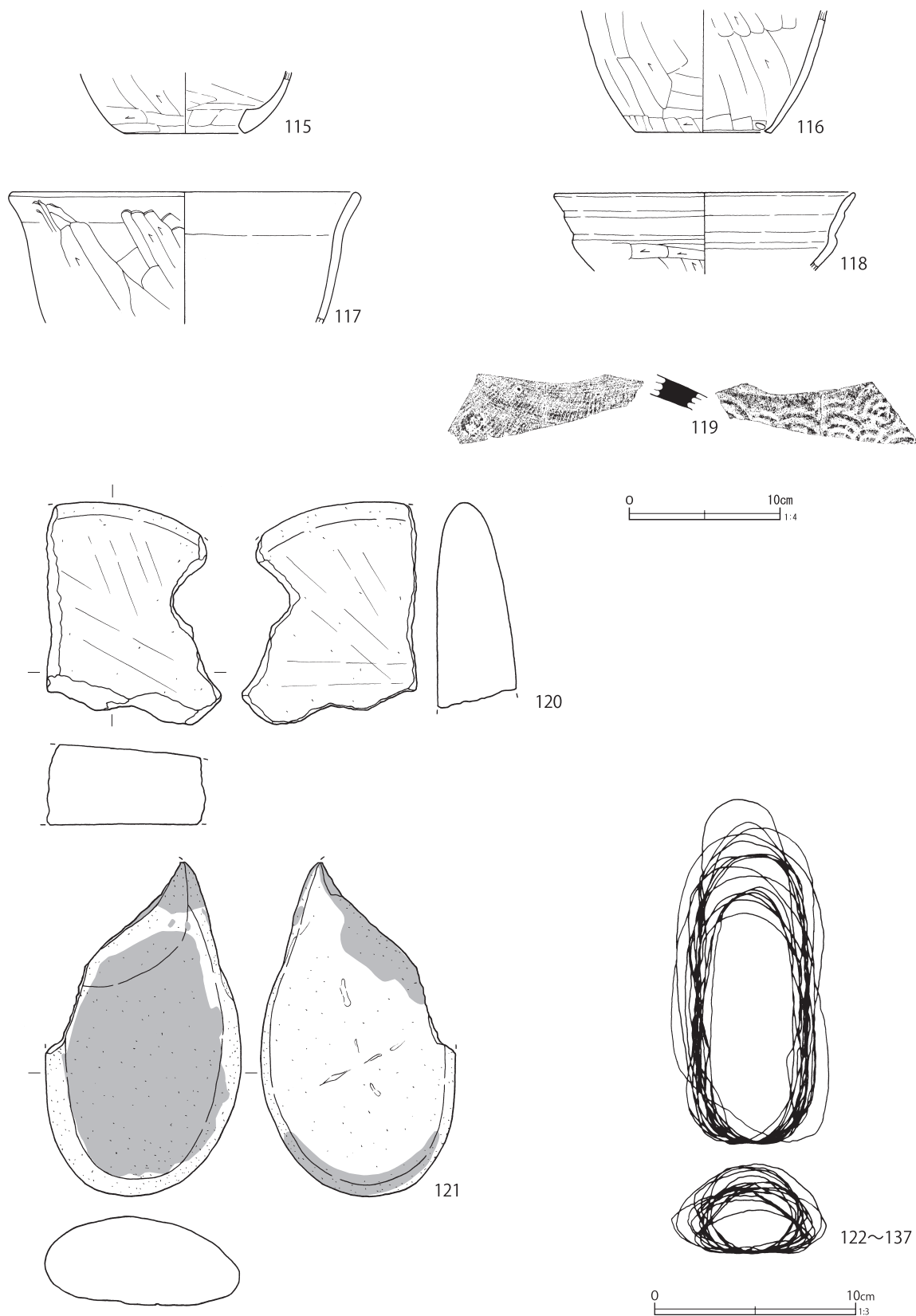
105



第 300 図 遺物集中出土遺物 (8)



第 301 図 遺物集中出土遺物 (9)



第 302 図 遺物集中出土遺物 (10)

第 80 表 遺物集中出土遺物観察表（第 293 ～ 302 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	8.6	2.8	—	E G K	95	良好	灰	No. 25・342・762 ヘラ記号 湖西産	64-4
2	須恵器	坏	(12.2)	[3.3]	(7.6)	D E J K	25	普通	灰白	No. 962 底部回転糸切り 内面自然釉付着 南比企産	64-5
3	須恵器	坏	—	[1.5]	(5.8)	B I K	20	普通	灰	末野産	78-5
4	須恵器	蓋	(7.2)	[1.6]	—	B G I	10	普通	灰	No. 996 天井回転ヘラケズリ 末野産	78-5
5	須恵器	高台付埴	(13.5)	6.6	7.1	B E G H	45	普通	灰白	No. 922・927 底部回転糸切り 末野産 焼き甘い	64-6
6	須恵器	フラスコ瓶	—	[4.9]	—	G I K	25	普通	灰白	No. 7・28・周辺 肩部は淡緑色の自然釉 湖西産	64-7
7	須恵器	瓶	—	[3.2]	(8.0)	E G I K	10	良好	灰白	No. 342 内面・釉付着 見込み部に自然釉 東海産	64-8
8	須恵器	甕	—	[6.7]	—	B D E G I	30	普通	灰	No. 377 頸部に平行叩き痕 末野産か	64-9
9	須恵器	甕	(43.0)	[8.6]	—	D E G J	5	普通	灰	No. 852 南比企産	65-1
10	須恵器	甕	—	[33.0]	—	G H I K	10	不良	灰黄	No. 3・18・31・35・45・46・63・98・146・183・185・229・271・283・284・311・313・326・373・399・419・424・463・493・521・751・942・下部・周辺・トレ・下層・Q-18 外面格子叩き 内面同心円文当具 産地不明	65-2
11	須恵器	(長頸) 瓶	—	[14.3]	—	D I J K	25	普通	灰白	No. 646 自然釉付着 外面平行叩き 内面無文当具 肩部自然釉 南比企産	65-3
12	須恵器	高坏	—	[8.4]	—	I K	50	良好	灰	No. 53 長脚 2 段三方透高坏 脚部内面に白色自然釉 胎土緻密 産地不明	65-4
13	土師器	坏	(12.0)	[3.4]	—	C G H I	25	普通	にぶい黄橙	No. 758 模倣坏	78-5
14	土師器	坏	(11.8)	[2.7]	—	C G H I	15	普通	橙	No. 161 有段口縁坏	78-5
15	土師器	坏	(12.6)	[2.7]	—	C G H I K	10	普通	橙	有段口縁坏	78-5
16	土師器	坏	(10.2)	[3.5]	—	G H	20	普通	淡褐	北武蔵型坏	65-5
17	土師器	坏	(10.5)	[3.4]	—	C G H	50	普通	淡褐	No. 553 北武蔵型坏	65-6
18	土師器	坏	(10.8)	[2.5]	—	C H I	15	普通	橙	器面磨滅 北武蔵型坏	78-5
19	土師器	坏	(11.6)	[2.4]	—	G H	15	普通	橙	北武蔵型坏	78-5
20	土師器	坏	10.8	[2.9]	—	G H K	40	普通	淡褐	No. 72・下部 北武蔵型坏	65-7
21	土師器	坏	(10.8)	[2.4]	—	H I K	15	普通	橙	下部 北武蔵型坏	78-5
22	土師器	坏	(10.8)	[2.7]	—	C E I	20	普通	橙	下部 北武蔵型坏	78-5
23	土師器	坏	(12.7)	3.5	—	C E I	10	普通	にぶい黄橙	No. 747 全体に風化 北武蔵型坏	78-5
24	土師器	坏	(13.0)	[3.6]	—	C G H I	20	普通	淡橙	No. 301 器面風化しているが北武蔵型暗文坏の可能性あり	65-8
25	土師器	坏	(13.0)	[2.7]	—	C G	20	普通	淡褐	No. 958 北武蔵型坏	65-9
26	土師器	坏	(11.5)	[3.1]	—	G H	15	普通	淡褐	No. 746 器面風化 北武蔵型坏	65-10
27	土師器	坏	—	[1.6]	—	C G I	25	普通	にぶい橙	北武蔵型坏	78-5
28	土師器	坏	16.5	4.6	—	G H	90	普通	橙褐	No. 1 内面風化 北武蔵型坏	66-1
29	土師器	坏	(16.0)	[3.4]	—	G I	10	普通	橙	No. 887 北武蔵型坏	78-5
30	土師器	皿	(19.0)	[3.5]	—	G H	25	普通	淡褐	No. 954	66-2
31	土師器	皿	(19.0)	[4.1]	—	C E G H I	15	普通	橙	No. 40	66-3
32	土師器	坏	(13.2)	5.0	—	C G	40	普通	淡褐	No. 656 北武蔵型暗文坏 内面放射暗文	66-5
33	土師器	坏	(12.0)	3.5	—	C G H K	20	良好	橙褐	No. 884 北武蔵型暗文坏 内面放射暗文	67-1
34	土師器	坏	(11.8)	[3.7]	—	H K	20	普通	橙	No. 725 内面指頭痕 北武蔵型坏 体部上半無調整	66-4
35	土師器	甗	(21.0)	[6.5]	—	G H I K	10	普通	淡橙褐	No. 851	78-6
36	土師器	甗	(19.0)	[6.5]	—	E H I K	15	普通	橙	No. 858	78-6
37	土師器	甕	(19.8)	[30.0]	—	A C E G H I	40	普通	淡橙	No. 613・660・663・667・673・下部 煤付着	66-6

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
38	土師器	甗	(20.2)	[16.7]	—	ACGHI	50	普通	淡褐	No.813・816・826・827 煤付着	67-2
39	土師器	甗	(21.2)	[9.1]	—	ACGHI	40	良好	暗赤	No.964	67-3
40	土師器	甗	21.6	[20.2]	—	AEGHI	40	普通	赤褐	No.795・798・826・900・901 二次被熱	67-4
41	土師器	甗	(21.0)	[6.9]	—	ACGHIK	15	普通	暗赤褐	No.976	67-5
42	土師器	甗	(22.8)	[6.6]	—	CDGHK	10	普通	赤褐	No.865	67-6
43	土師器	甗	(21.2)	[6.6]	—	DGK	20	普通	にぶい橙	No.71	68-1
44	土師器	甗	(25.0)	[7.8]	—	GHK	15	普通	橙	No.303	68-2
45	土師器	甗	(20.8)	[14.0]	—	BCEGHI	15	普通	赤褐	No.282	—
46	土師器	甗	21.2	[10.0]	—	CDGHI	30	普通	褐	No.608・616・下部	68-3
47	土師器	甗	(21.0)	[10.8]	—	ABGHK	10	普通	橙	No.835	68-4
48	土師器	甗	(22.8)	[15.0]	—	ACGHIK	20	普通	にぶい橙	No.229	68-5
49	土師器	甗	(21.6)	[12.1]	—	GHK	20	普通	淡橙褐	No.208	—
50	土師器	甗	(22.3)	[9.9]	—	CGH	40	普通	淡褐	No.209	68-6
51	土師器	甗	(22.0)	[6.8]	—	GHIK	45	普通	橙	No.71・397 風化・ヘラケズリ不明瞭	68-7
52	土師器	甗	(20.6)	[3.6]	—	CDEGH	20	普通	明赤褐	No.778	68-8
53	土師器	甗	(20.0)	[3.4]	—	AEGHI	25	普通	橙	No.522	68-9
54	土師器	甗	(20.6)	[2.6]	—	CEGHI	20	普通	橙	No.209	69-1
55	土師器	甗	(20.0)	[17.5]	—	CGH	15	普通	暗赤褐	No.27・29	69-2
56	土師器	甗	(20.0)	[8.9]	—	GH	15	普通	暗赤褐	No.282	69-3
57	土師器	甗	(20.0)	[13.0]	—	CGH	10	普通	淡褐	No.848	—
58	土師器	甗	19.4	[10.0]	—	CGH	90	普通	淡橙	No.159・867・下部 風化著しく調整不明跡	69-4
59	土師器	甗	(19.4)	[7.0]	—	GH	15	普通	淡褐	No.847	69-5
60	土師器	甗	(19.6)	[7.9]	—	ACGHI	20	普通	にぶい黄橙	No.58・72 風化し調整不明瞭	69-6
61	土師器	甗	(20.8)	[8.4]	—	CGHI	15	普通	淡褐	No.878 風化・ケズリ不明瞭	69-7
62	土師器	甗	(22.6)	[13.5]	—	AGHIK	20	普通	赤褐	No.1010	—
63	土師器	甗	20.4	[25.6]	—	AGHIK	40	普通	橙褐	No.226・793・796・797・814 煤付着	69-8
64	土師器	甗	21.6	[18.1]	—	CGH	25	普通	暗褐	No.554・563・827	69-9
65	土師器	甗	(22.0)	[13.8]	—	CGH	25	普通	赤褐	No.827	70-1
66	土師器	甗	(22.0)	[5.9]	—	GH	10	普通	淡褐	No.137	70-2
67	土師器	甗	(20.8)	[6.5]	—	EGIKL	15	普通	赤褐	No.270	70-3
68	土師器	甗	(21.6)	[6.1]	—	EHI	25	普通	にぶい橙	No.619	70-4
69	土師器	甗	(20.8)	[4.3]	—	CGI	20	普通	にぶい赤褐	No.213	70-5
70	土師器	甗	(22.6)	[3.4]	—	EGIL	15	普通	橙	No.241・433	70-6
71	土師器	甗	(22.6)	[3.8]	—	GHIK	15	普通	淡橙	No.941	70-7
72	土師器	甗	(21.8)	[5.7]	—	IK	20	普通	浅黄	No.58・72・281	70-8
73	土師器	甗	(21.3)	[5.0]	—	CGH	30	普通	橙褐	No.23・27	70-9
74	土師器	甗	(22.0)	[5.4]	—	ACGIK	25	普通	にぶい黄橙	No.897・898 煤付着	70-10
75	土師器	甗	(19.6)	[7.0]	—	CEGHI	10	普通	にぶい赤褐	No.927	71-1
76	土師器	甗	(22.0)	[4.6]	—	BEGH	5	普通	橙		71-2
77	土師器	甗	—	[13.5]	—	GHIK	20	普通	橙	No.451・698 二次被熱	71-3
78	土師器	甗	—	[12.1]	4.9	CGHI	70	普通	淡褐	No.905・下部 煤付着	71-4
79	土師器	甗	—	[3.5]	(6.4)	CEGHI	40	普通	にぶい褐	下部	78-6
80	土師器	甗	—	[6.4]	4.6	GHI	10	普通	淡褐	No.677	71-5
81	土師器	壺	—	[1.2]	3.5	CDG	95	普通	にぶい褐	下部 底部木葉痕 指頭痕	78-6
82	土師器	小型甗	(15.8)	[5.9]	—	EGHI	20	普通	明赤褐	No.908	71-6
83	土師器	小型壺	(13.4)	[9.4]	—	CGH	20	普通	淡橙	No.258・364・372	71-7
84	土師器	小型壺	(14.2)	[7.5]	—	GH	15	普通	淡橙	No.393・500 胎土精良	71-8
85	土師器	小型壺	(12.8)	[8.0]	—	AEGHL	15	良好	淡褐	No.789	72-1
86	土師器	小型甗	(14.0)	[9.1]	—	GH	85	普通	淡褐	No.458・460・765	72-2
87	土師器	小型甗	17.3	[11.3]	—	BCGH	100	普通	淡褐	No.920・921	72-3
88	土師器	小型壺	(13.8)	[4.1]	—	CEG	30	普通	明赤褐	下部	—

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
89	土師器	小型壺	(13.2)	[3.3]	—	C G H	20	普通	橙	No.690 胎土精良	72-4
90	土師器	小型(台付)甕	(11.4)	[5.2]	—	C H	25	普通	赤褐	No.927	72-5
91	土師器	小型甕	(11.6)	[5.9]	—	A C G H I K	15	普通	黒褐	No.1017	72-6
92	土師器	壺	(15.2)	[5.9]	—	E H I K	40	普通	にぶい黄橙	下部	72-7
93	土師器	壺	(15.0)	[6.1]	—	A E G H I	20	普通	にぶい橙	No.971	—
94	土師器	小型壺	—	[7.0]	(4.6)	G H I K	15	良好	赤橙	No.803・810・819	72-8
95	土師器	小型壺	—	[6.6]	6.8	A C G E H	10	普通	淡褐	No.829	72-9
96	土師器	壺	19.0	[25.6]	—	A G H I K	70	普通	褐	No.807・809 煤付着	73-1
97	土師器	壺	(20.0)	[22.3]	—	G H	25	普通	淡褐	No.744・794・893	73-2
98	土師器	壺	(19.3)	[4.7]	—	A C E H I K	15	普通	にぶい黄橙	No.937	73-3
99	土師器	壺	(20.6)	[6.7]	—	C E G H I	25	普通	にぶい橙	No.990	73-4
100	土師器	壺	(22.3)	[7.4]	—	A D G H I	25	普通	にぶい橙	No.938・980	—
101	土師器	壺	(22.0)	[9.6]	—	G H	20	普通	赤褐	No.562	73-5
102	土師器	壺	—	[16.2]	—	C E G H I	25	普通	橙	No.1	73-6
103	土師器	壺	—	[21.9]	—	A B C G H I	30	普通	淡褐	No.820・821 煤付着	73-7
104	土師器	小型壺	—	[10.8]	—	G H	15	普通	淡褐	No.1	73-8
105	土師器	小型壺	—	[11.7]	—	G H	15	不良	橙	No.282・352	73-9
106	土師器	壺	—	[12.1]	(11.6)	G H I	20	普通	暗褐	No.443・681 煤付着	74-1
107	土師器	壺	—	[6.3]	—	C E G H I	20	普通	赤褐	No.257	74-2
108	土師器	壺	—	[4.8]	11.4	A E G H I	20	普通	黒褐	No.817・822・823	—
109	土師器	甕	—	[2.4]	(9.4)	D E G H I K	25	普通	にぶい橙	No.925 底部木葉痕	78-6
110	土師器	鉢	(10.2)	[7.1]	—	A C G H I K	40	普通	灰褐	No.846 風化によりケズリ不明瞭	74-3
111	土師器	小型台付甕	11.0	18.3	13.4	A C G H I K	40	普通	赤褐	No.249・810・814・899 二次被熱	74-4
112	土師器	小型台付甕	—	[4.5]	—	G H	10	普通	黒褐	No.307・393	74-5
113	土師器	甌	(26.5)	(24.0)	10.0	A G H	25	普通	淡褐	No.2・トレ	74-6
114	土師器	甌	(28.0)	[16.0]	—	C G H I	10	普通	淡褐	No.121	74-7
115	土師器	甌	—	[4.1]	(7.8)	C E H I	10	普通	にぶい橙	No.930	78-6
116	土師器	甌	—	[8.1]	(9.0)	G H I	10	普通	淡褐	No.93	75-1
117	土師器	甌	(22.8)	[8.7]	—	A E G H I K	10	良好	淡褐	No.849	75-2
118	土師器	鉢	(19.6)	[5.2]	—	C G H I	15	普通	にぶい黄橙	No.854	78-6
119	須恵器	甕	—	[2.4]	—	I K	5	良好	灰	No.722 上野産 外面平行叩き後ロクロナデ(カキ目)内面同心円分当目 産地不明	78-6
120	石製品	砥石	長さ[11.1] 幅[8.6] 厚さ[4.1] 重さ575.9 g						No.202 安山岩系 一部残存 ヒビ		79-4
121	石製品	編物石	長さ[16.6] 幅9.6 厚さ4.6 重さ894.7 g						No.917 一部被熱 黒色化		80-6
122	石製品	編物石	長さ13.7 幅6.4 厚さ3.2 重さ395.8 g						No.41 凝灰岩		80-3
123	石製品	編物石	長さ12.2 幅5.3 厚さ4.1 重さ421.3 g						No.748 砂岩		80-3
124	石製品	編物石	長さ12.2 幅4.0 厚さ4.2 重さ282.3 g						No.775 砂岩		80-3
125	石製品	編物石	長さ12.0 幅5.4 厚さ3.3 重さ286.6 g						No.833 砂岩		80-3
126	石製品	編物石	長さ15.4 幅6.2 厚さ3.4 重さ535.7 g						No.881 砂岩		80-3
127	石製品	編物石	長さ14.1 幅5.4 厚さ3.8 重さ427.4 g						No.886 砂岩		80-4
128	石製品	編物石	長さ11.2 幅5.2 厚さ3.0 重さ231.0 g						No.907 緑泥片岩		80-4
129	石製品	編物石	長さ15.7 幅5.4 厚さ3.6 重さ395.9 g						No.911 砂岩		80-4
130	石製品	編物石	長さ15.0 幅7.3 厚さ4.5 重さ732.3 g						No.912 砂岩		80-4
131	石製品	編物石	長さ14.0 幅7.5 厚さ3.2 重さ469.9 g						No.914 砂岩		80-4
132	石製品	編物石	長さ14.7 幅5.0 厚さ4.3 重さ456.1 g						No.915 花崗閃緑岩		80-5
133	石製品	編物石	長さ16.8 幅5.6 厚さ4.6 重さ667.1 g						No.916 砂岩		80-5
134	石製品	編物石	長さ13.1 幅5.6 厚さ2.7 重さ332.6 g						No.923 白雲母石英片岩		80-5
135	石製品	編物石	長さ12.2 幅3.9 厚さ3.9 重さ317.3 g						No.928 片岩		80-5
136	石製品	編物石	長さ12.5 幅4.9 厚さ3.6 重さ305.7 g						No.929 砂岩		80-5
137	石製品	編物石	長さ14.0 幅6.3 厚さ2.5 重さ344.0 g						下部 凝灰岩		80-5

4. 近世

近世の遺構は、溝跡18条を検出した。調査区の南北に分布が集中している。

(1) 溝跡

第1号溝跡 (第303図)

N～R-17グリッドに位置する。北北東から南南西に延び、Q-17グリッドで南に緩く蛇行した後、再び元の方角に戻り、南端は調査区外に延びる。蛇行する箇所には第2号溝跡が直線的に接続している。他の遺構との重複関係はない。上面で調査をしたが古代の遺構に直接重複して壊している部分はなかった。

検出した長さは39.50mで、幅は0.19～0.78mである。深さは0.10～0.13mである。断面形は逆台形である。底面に大きな高低差はないが、北から南に向かって0.05m前後低くなる。

覆土は、黒褐色粘質土の単層で、浅間A火山灰を含む。

遺物は、土師器及び須恵器の小片が少量出土したが、いずれも埋没する過程で古代の層から混入したものと考えられる。

第2号溝跡 (第304図)

Q・R-17グリッドに位置する。北北東から南南西に延び、南端は調査区外に続く。北端は第1号溝跡と合流しているように見えるが、土層断面の観察では第1号溝跡より古い。上面で調査をしたが古代の遺構とは、重複しているものはない。

検出した長さは10.40mで、幅は0.24～0.39mである。深さは0.10～0.12mである。断面形は逆台形である。底面は、北から南に0.07m低くなっている。

覆土は、褐灰色土の単層である。

遺物は、土師器及び須恵器の小片が少量出土したが、いずれも埋没する過程で古代の層から混入したものと考えられる。

第4号溝跡 (第305図)

N-16・17、O-16・17・P-16グリッドに位置する。南端は調査区外に延びる。北端は浅くなり消失していた。北端で第5号溝跡と重複しているが、遺存状況が悪く新旧関係は確認できなかった。また、上面の調査のため古代の遺構とは直接重複していない。

検出した長さは28.20mで、幅は0.28～0.40mである。深さは0.07～0.09mである。断面形は、浅いために皿状となっている。底面は北から南に向かって僅かに低くなる。

覆土は、A s - a を含む褐灰色土の単層である。

遺物は、染付磁器碗の破片が1点出土した。その他に埋没過程で混入した土師器及び須恵器の破片が多く出土した。

第5号溝跡 (第306図)

N・O-17グリッドに位置する。南端は調査区外に延びる。北端で第4号溝跡と重複しているが、遺存状況が悪く、新旧関係は確認できなかった。

また、上面の調査のため古代の遺構と直接の重複はない。

検出した長さは9.70mで、幅は0.41～0.70mである。深さは0.07～0.10mである。断面形は浅いために皿状である。底面は北から南に向かって0.1mほど低くなる。

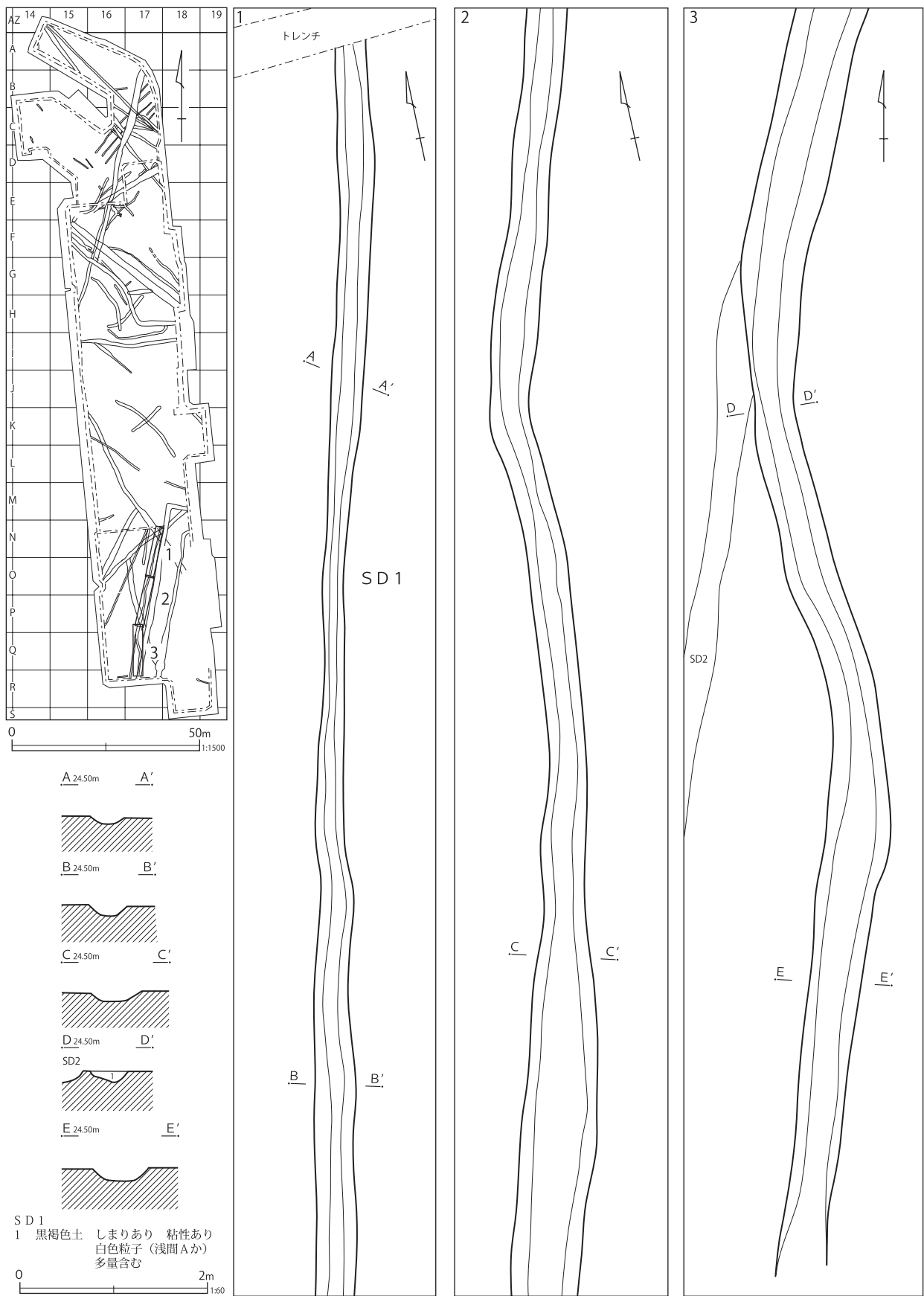
遺物は、埋没過程で混入した土師器及び須恵器の破片が少量出土した。

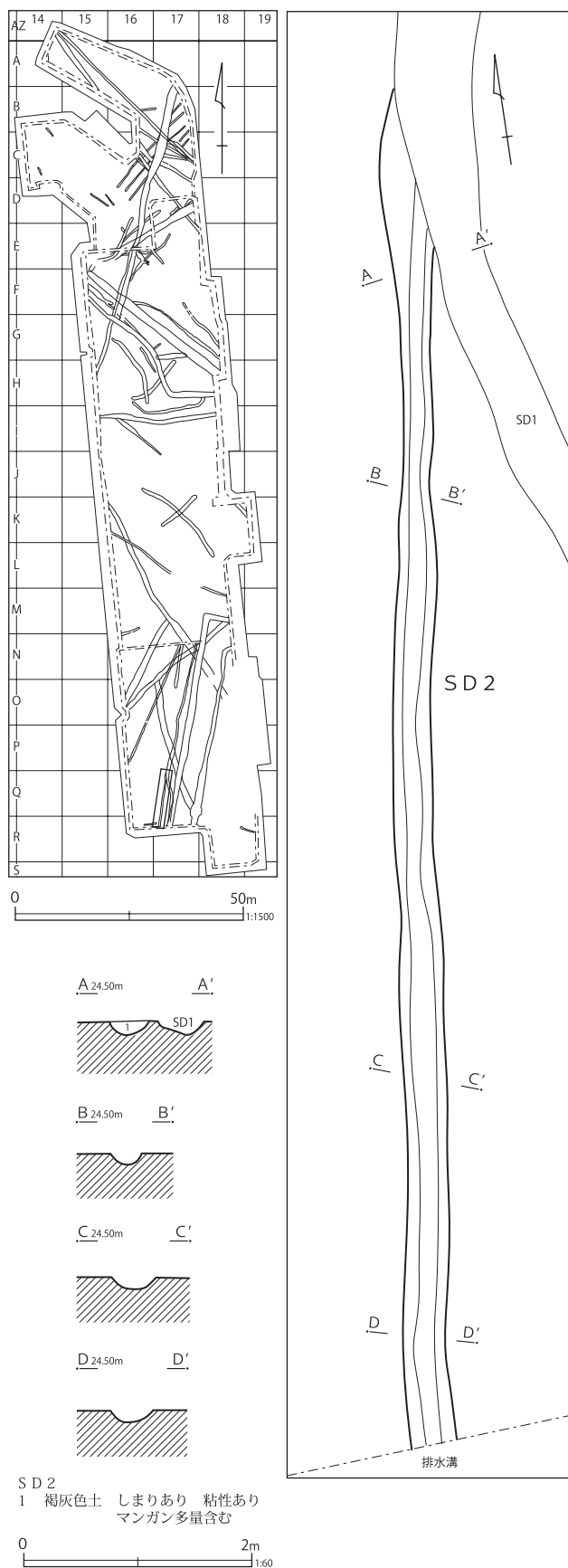
第7号溝跡 (第307図)

R-18・19グリッドに位置する。ほぼ東西方向に延びるが掘り込みが浅く、検出した長さは短く両端は消失していた。

検出した長さは3.27mで、幅は0.25～0.44mである。深さは0.09mである。断面形は皿状である。底面は東から西に向かって僅かに低くなる。

遺物は、土師器及び須恵器の小片が僅かに出土したのみで図示できるものはない。





第304図 第2号溝跡

第8号溝跡 (第307図)

R-16・17グリッドに位置する。東西方向の溝で、浅かったため両端は消失している。他の遺構との重複はない。

検出した長さは2.76mで、幅は0.18～0.37mである。深さは0.05m前後である。断面形は、浅いため皿状である。底面は西から東に向かって僅かに低くなる。

覆土は、灰黄褐色土の単層である。

遺物は、土師器細片がごく少量出土したのみで、図示できるものはない。

第13号溝跡 (第308図)

D・E-16・17グリッドに位置する。北東から南西に延び、北東端は調査区外に続く。掘り込みが比較的浅いため、南西端はE-16グリッド内で消失しているが、西側の調査区壁の土層で連続しているのが確認できた。重複する第17・18・38・40・47号溝跡より新しい。第47号溝跡との新旧関係は捉えられなかったが、第13号溝跡が新しいと思われる。

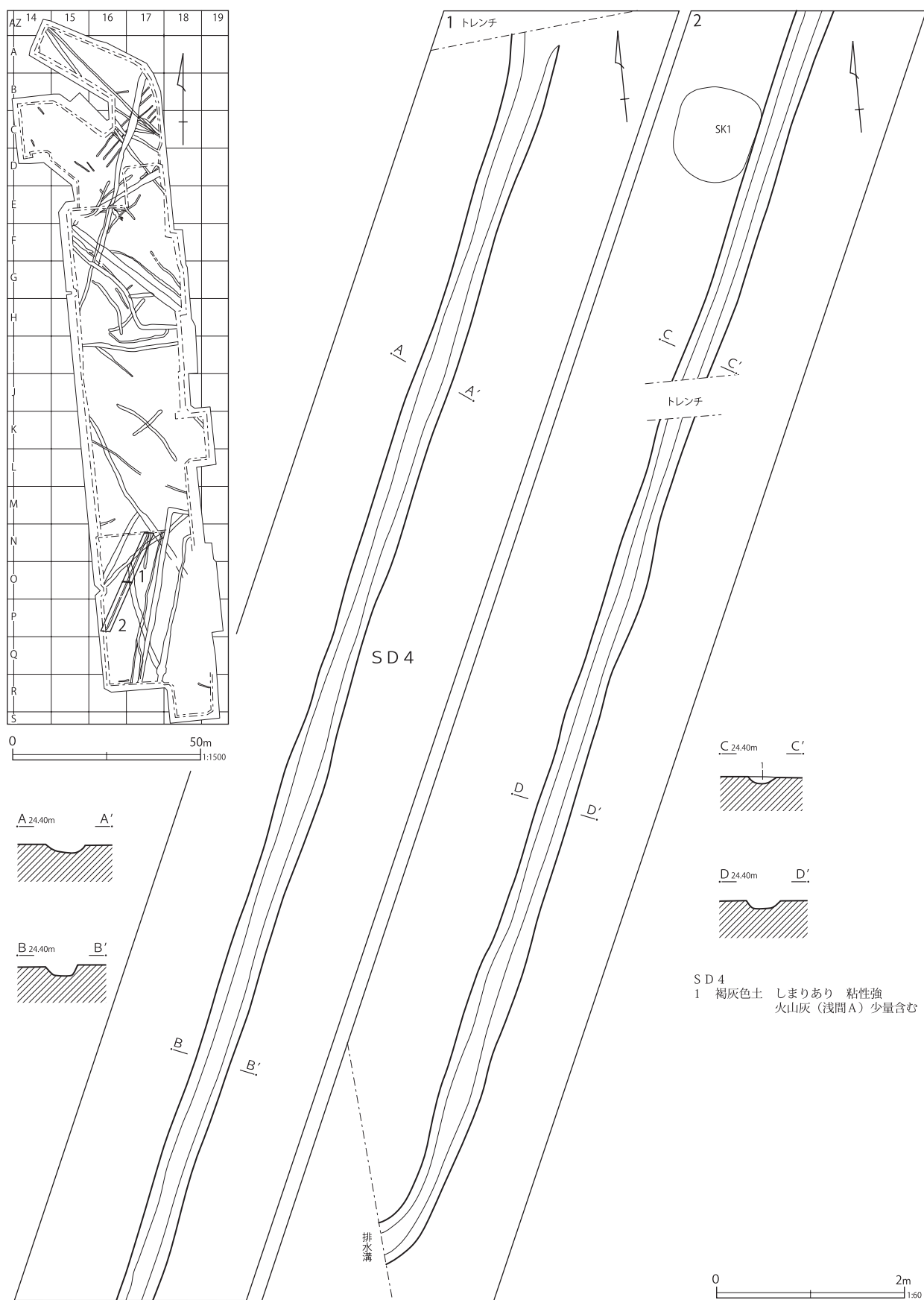
検出した長さは19.50mで、確認面での幅は0.85～1.98mである。残存する深さは0.10m前後である。断面形は残存状況が浅いため皿状となっているが、調査区の壁で碗形からU字状である。また、部分的に壁の立ち上がり付近に護岸と思われる丸太状の杭が打ち込まれていた。底面は、南西から北東方向に約0.1m低くなっていた。

遺物は出土しなかった。

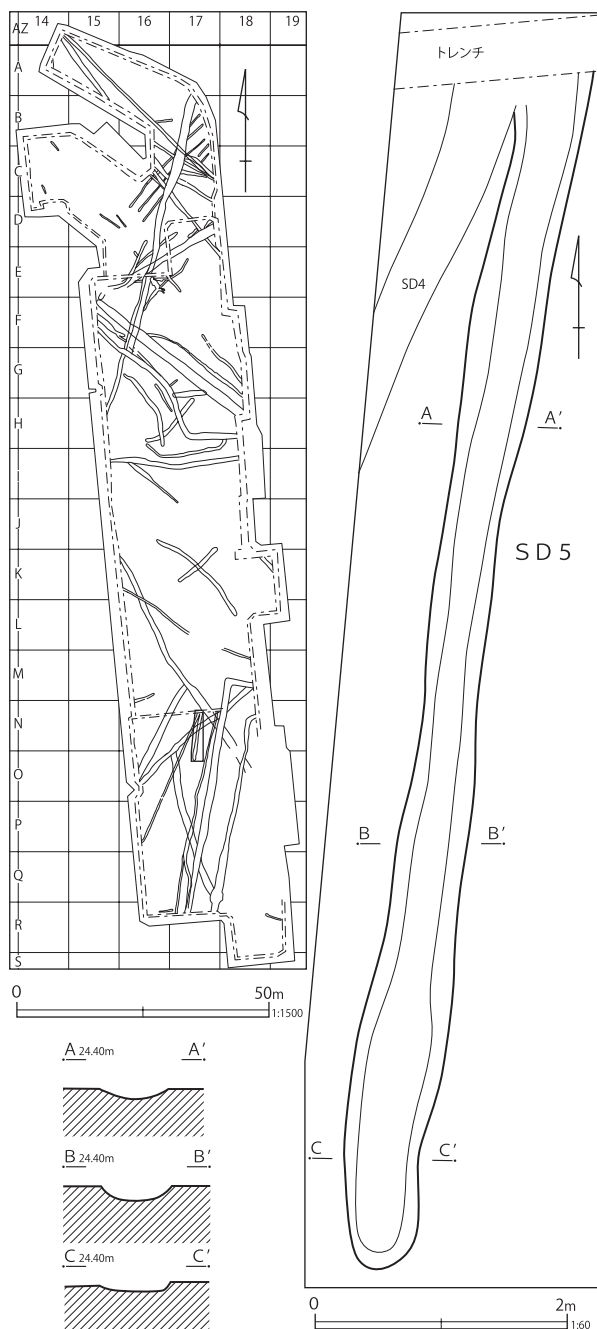
第26号溝跡 (第309図)

J-16・17、K-17・18、L-18グリッドに位置する。北西から南東方向に緩やかに湾曲しながら延びていた。北西端は調査区内で消失し、南東端は調査区内で止まっていた。重複する第54号土壇、第27号溝跡、第1号畠跡よりも新しい。また、第2号畠跡の範囲にかかっているが、畝溝との直接の重複はないため新旧関係は不明である。

規模は長さ21.8mで、幅は0.71～0.94mであ



第 305 図 第 4 号溝跡



第 306 図 第 5 号溝跡

る。深さは0.09～0.18mである。断面形は残存が浅いため皿形を呈している。底面は、南東から北西に向かって低くなり、その高低差は0.1mである。灰色粘土をブロック状に含む褐灰色土の単層で埋め戻しの可能性がある。

遺物は出土しなかった。

第27号溝跡（第310図）

J・K-17グリッドに位置する。北東から南西方向に直線的に延びる。検出した長さは短く、両端とも調査区内で止まっていた。重複する第2号畠跡よりも新しく、また第26号溝跡よりも古い。

規模は長さが10.10mで、幅は0.59～0.93mである。深さは0.07～0.09mである。浅いため断面形は皿形を呈する。底面は殆ど高低差がない。

覆土に砂を多量に含んでいたことから流水があったと考えられる。

遺物は出土しなかった。

第29号溝跡（第311図）

G・H-16、H-17グリッドに位置する。北西から南東方向に延び、両端とも調査区内で消失していた。重複する遺構はない。

規模は長さ6.30m、幅は0.27～0.49mである。深さは0.04～0.20mである。断面形は北側の浅い部分では皿形を呈するが、南側のやや深くなる部分では箱薬研状を呈する。底面は北西から南東に向かって低くなり、高低差は0.15mである。

覆土は、黒色土の単層である。

遺物は出土しなかった。

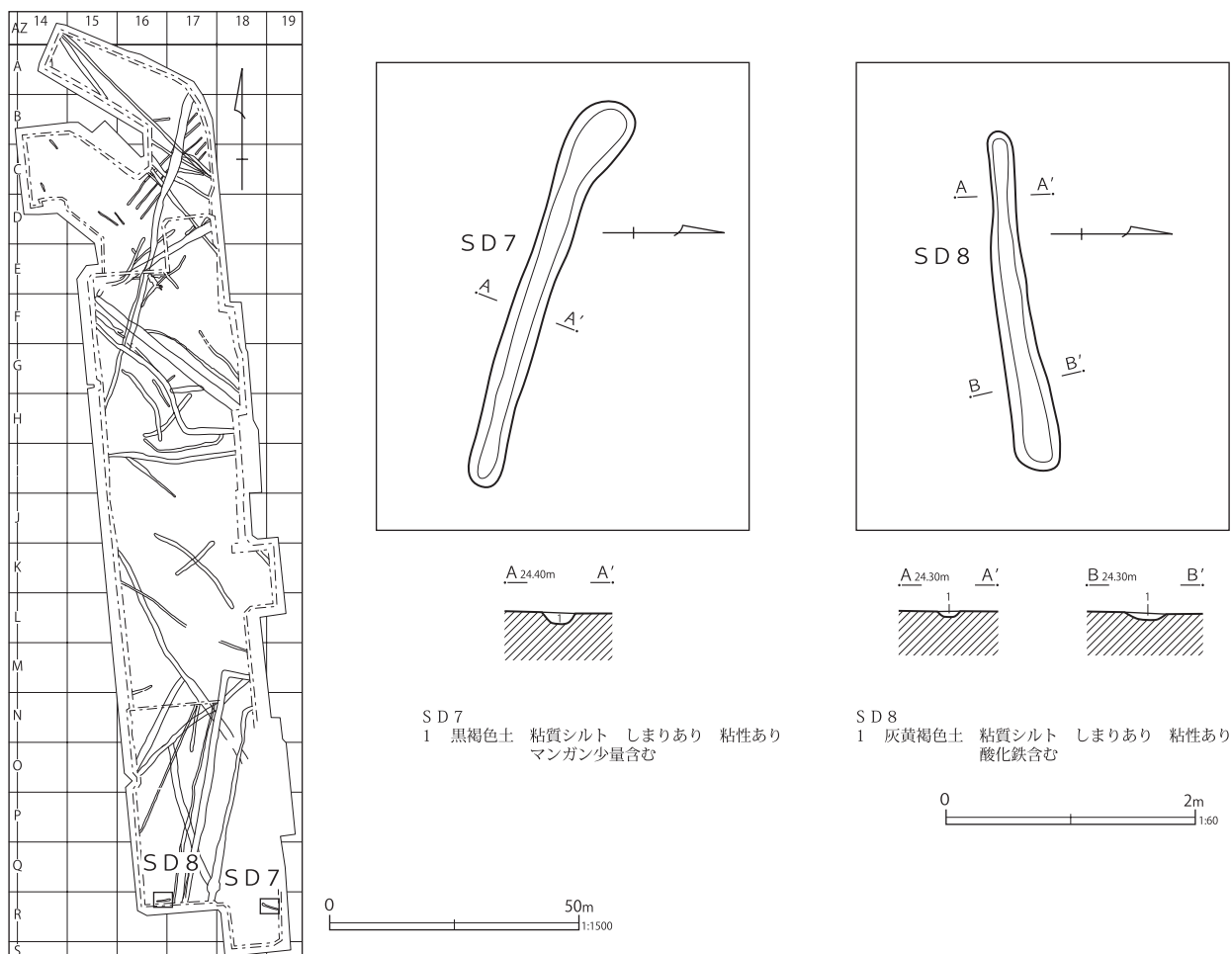
第34号溝跡（第312図）

AZ-14・15、A-15・16、B-16・17、C-17グリッドに位置する。北西から南東方向に直線的に延び、両端とも調査区外に続く。重複する第18・50・51号溝跡より新しく、第52号溝跡との新旧は不明である。

検出した長さは41.40mで、幅は0.46～0.62mである。深さは0.08～0.13mである。断面形は浅いため皿形を呈する。底面は北西から南東方向に低くなり、その高低差は約0.15mである。

覆土は、第1層に浅間A火山灰を多量に含み、下層には砂が互層状に含まれることから、水流による自然堆積と考えられる。

遺物は出土しなかった。



第 307 図 第 7・8 号溝跡

第43号溝跡（第313図）

E-16・17グリッドに位置する。北西から南東方向に延び、南端は調査区内で消失する。北端は調査用の排水溝から先では検出されなかったことから消失していると思われる。重複する第47号溝跡との新旧関係は捉えられなかった。

検出した長さは4.19mで、幅は0.43～0.56mである。深さは0.19mである。断面形はU字状で、底面はほぼ平坦で高低差は見られない。

遺物は出土しなかった。

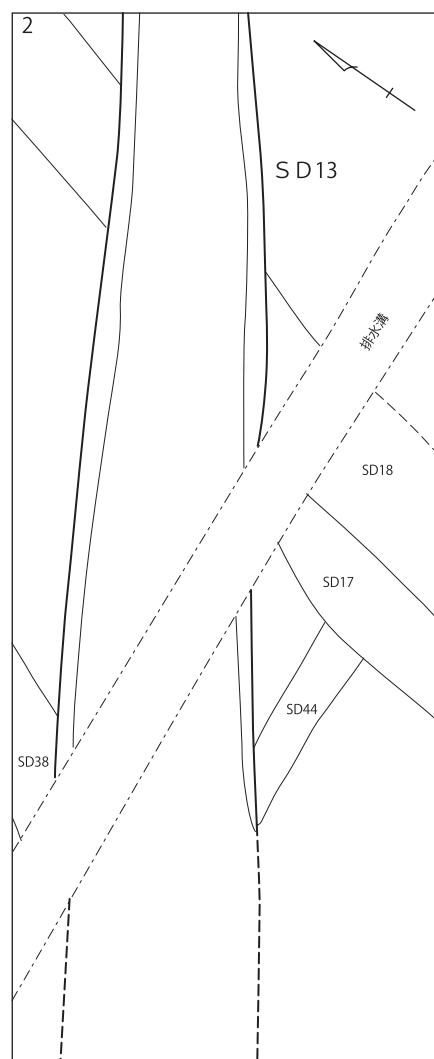
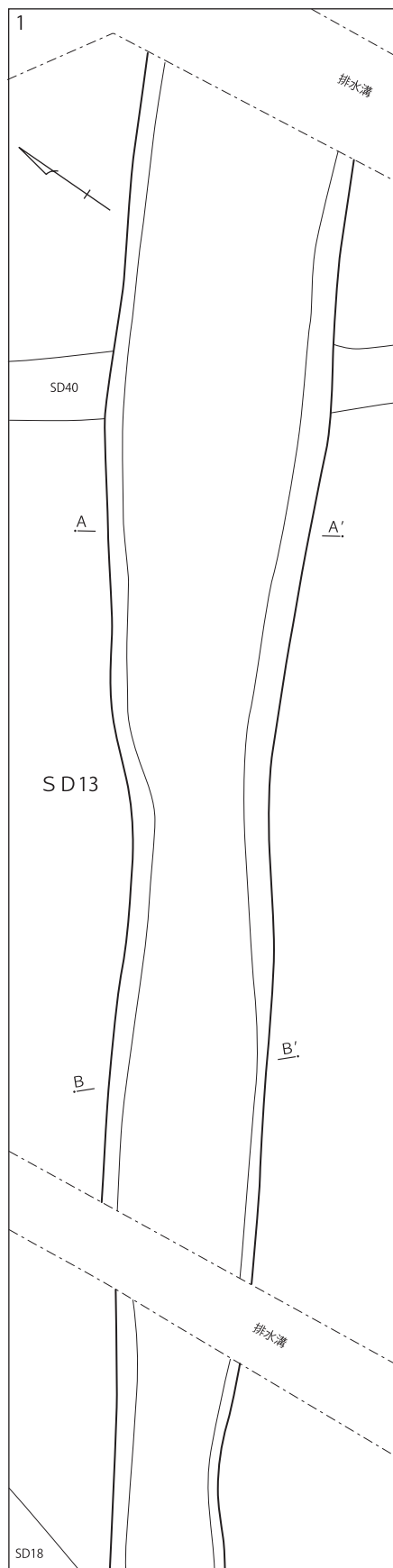
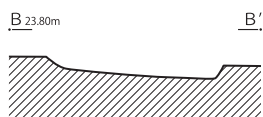
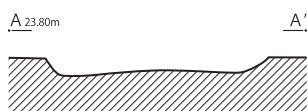
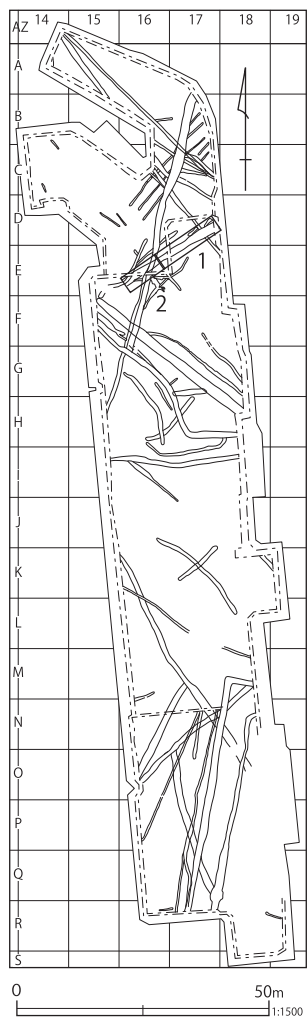
第44号溝跡（第313図）

E・F-16グリッドに位置する。北西から南東方向に延びた後、南西方向にほぼ直角に曲がる。両端とも第18号溝跡に接続して止まっていた。

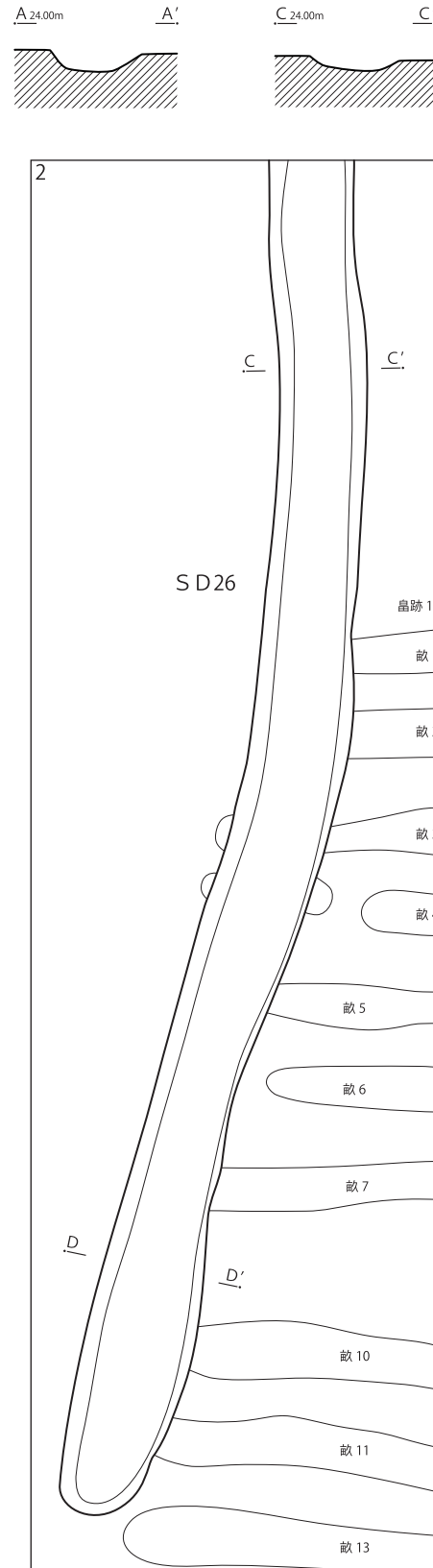
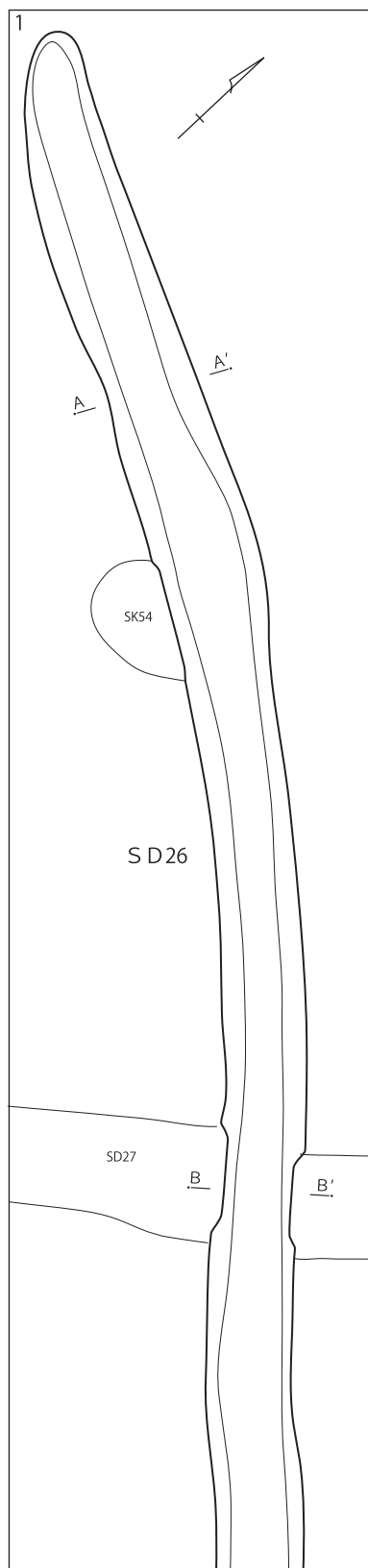
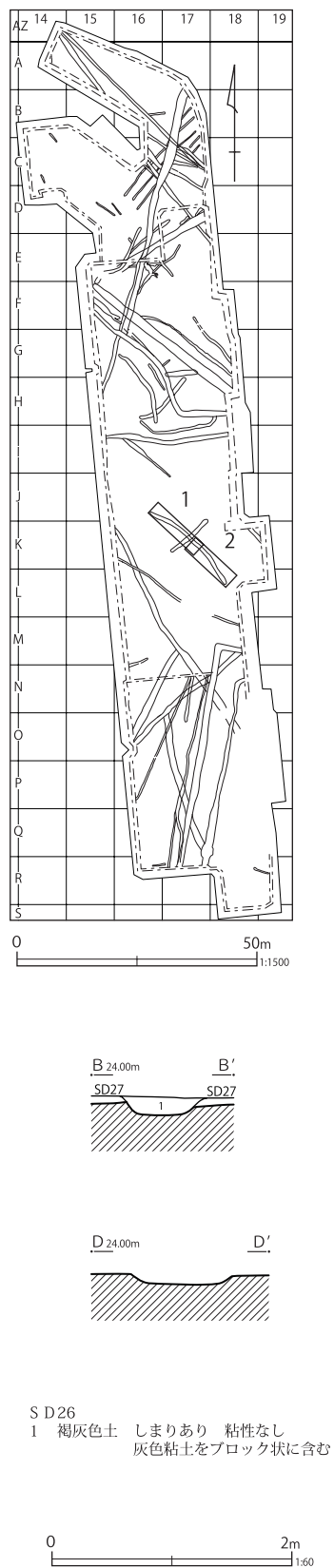
第60・69号土壌、第47・54号溝跡と重複している。同じ方向の第54号溝跡とは、底面の高さに違いがあり、土層断面では同一の遺構と確認できなかったが、底面の高さが同じである北西方向に延びるものを同一の溝と判断した。また、溝が曲がる部分の東側に極めて浅い不整形の落ち込みがあり、調査時の所見では本遺構に接続するものと考えられる。他の遺構との新旧関係は不明である。

検出した長さは、北西から南東方向に延びる部分が2.47m、北東から南西に延びる部分が5.43mで、幅は0.26～1.14mである。深さは0.19～0.21mである。断面形はU字状である。底面は南から北方向に低くなる。

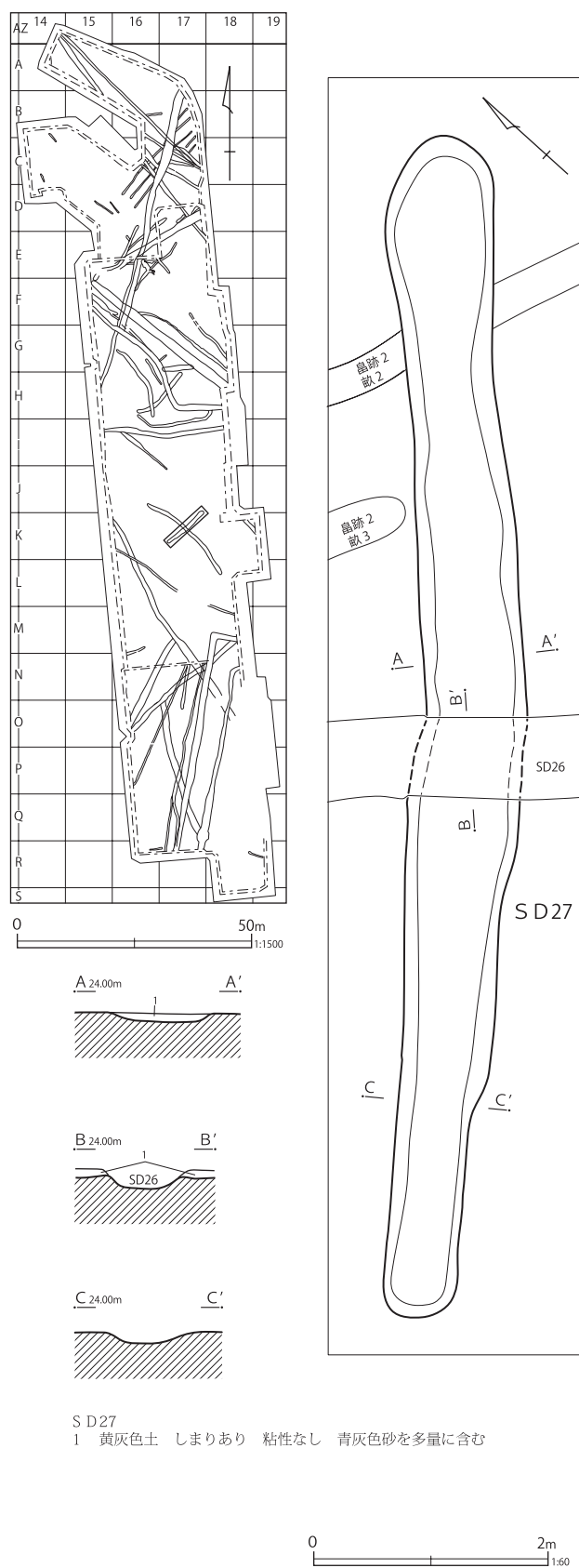
遺物は出土しなかった。



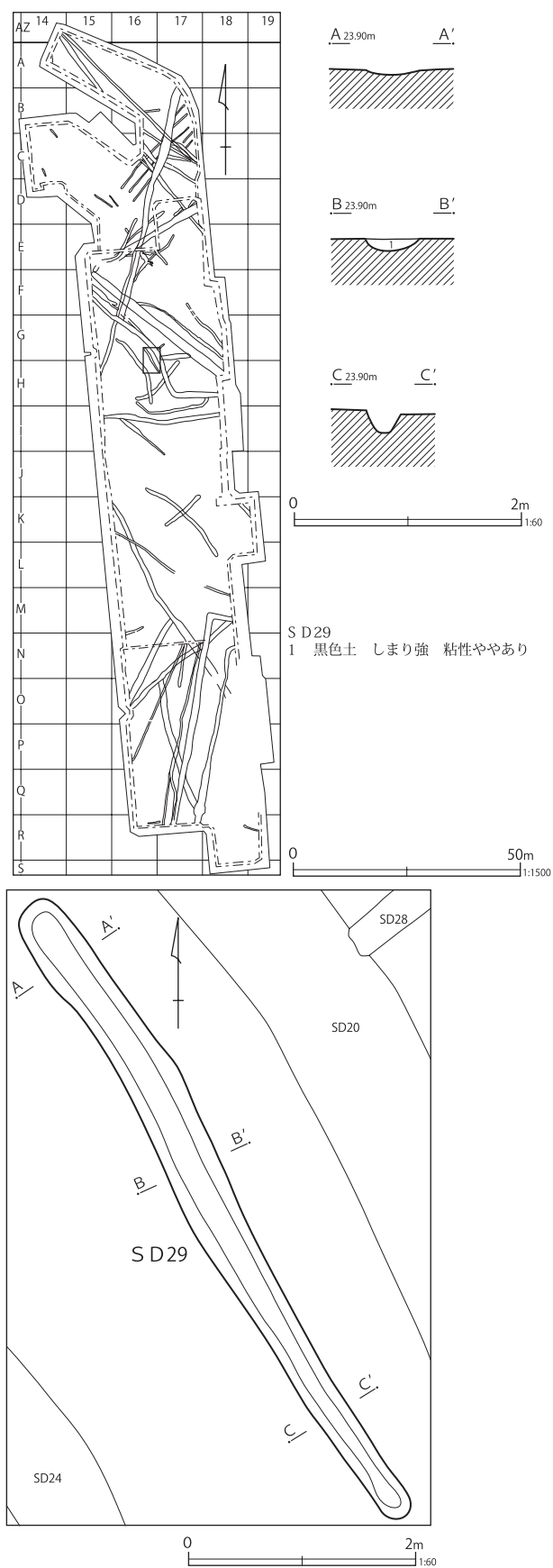
第 308 図 第 13 号溝跡



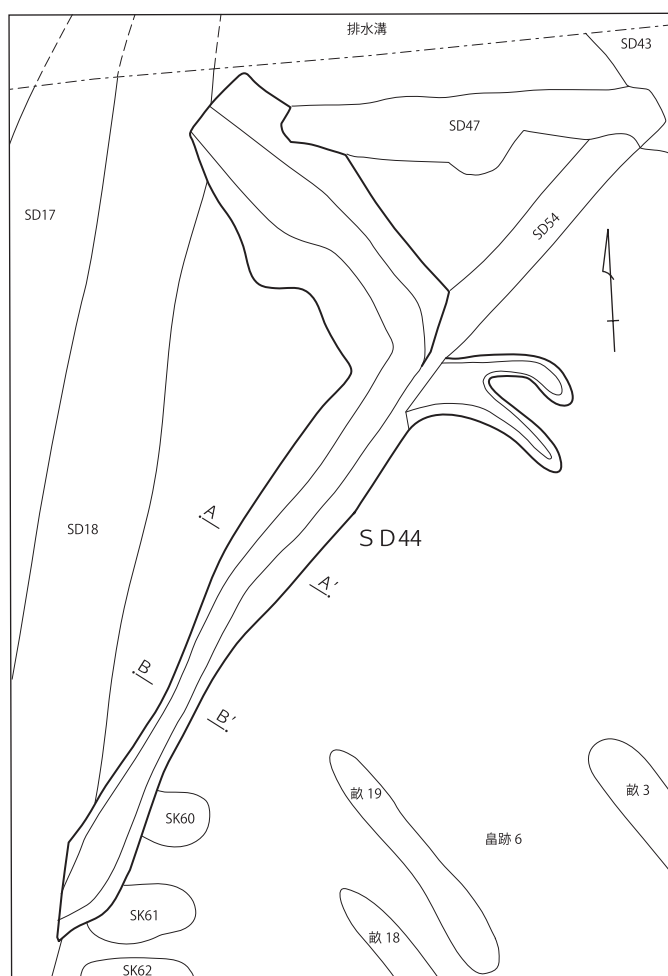
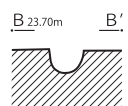
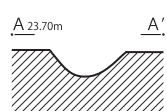
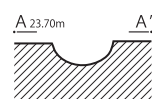
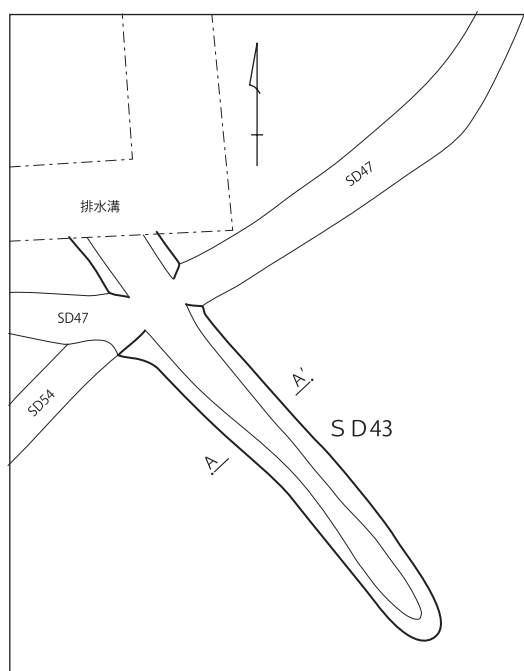
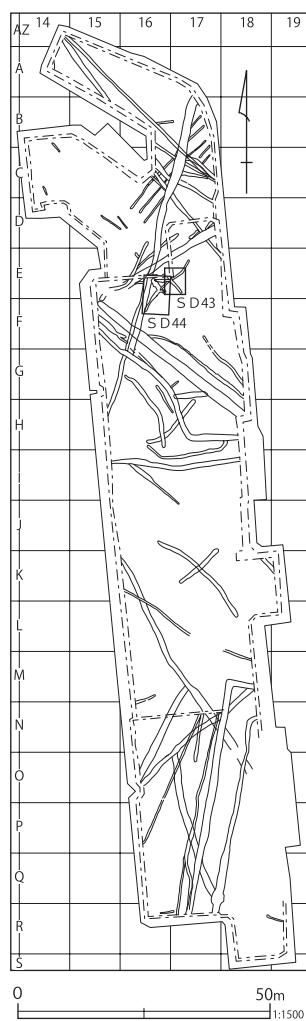
第 309 図 第 26 号溝跡



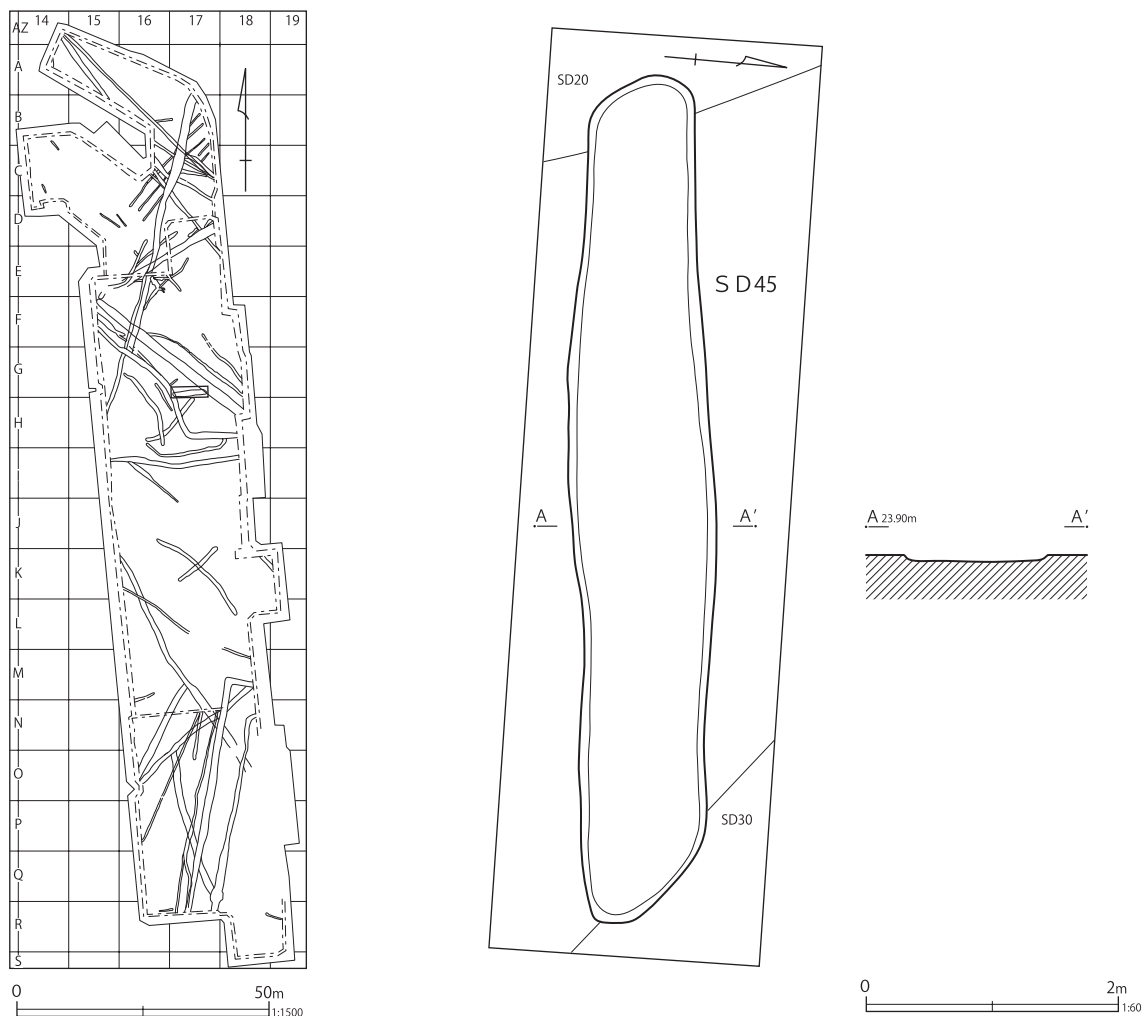
第 310 図 第 27 号溝跡



第 311 図 第 29 号溝跡



第 313 図 第 43・44 号溝跡



第 314 図 第 45 号溝跡

第45号溝跡（第314図）

G-17グリッドに位置する。東西方向に延び、西側は第20号溝跡、東側は第30号溝跡と重複しているが、非常に浅かったため新旧関係は確認できなかった。

検出した長さは6.62m、幅0.85～1.14mである。深さは0.04mである。断面形は残存状態が浅いため皿形となっている。底面はほぼ平坦である。底面に薄く灰が認められた。

遺物は出土しなかった。

第46号溝跡（第315図）

F-17、G-17・18グリッドに位置する。北西から南東方向に緩く蛇行して延び、北西端は調査区内で消失していた。南東側は調査区外に続く。

第6号畠跡の畝と重複し、これを壊していた。

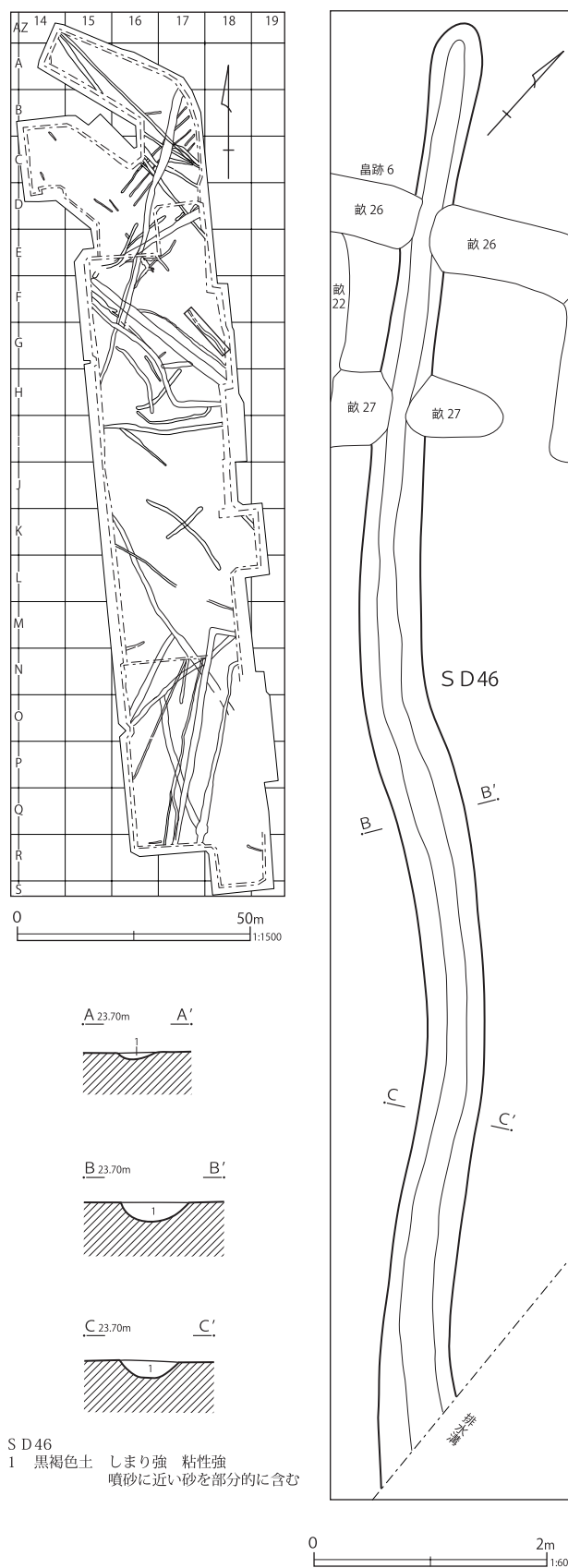
検出した長さは11.81mで、幅は0.33～0.60mである。深さは0.05～0.17mである。断面形はU字状から逆台形である。底面は北西から南東方向に低くなり、高低差は0.11mである。

遺物は出土しなかった。

第47号溝跡（第316図）

E-16・17グリッドに位置する。北東から南西方向に延びた後、西向きに曲がり直線的に延びる。北東端は調査区内で消失し、西端は第13号溝跡に接続しているようであった。重複する第17・18・43・44・54号溝跡よりも新しいと考えられる。また第13号溝跡とは、同時期である可能性が高い。

検出した長さは12.65mで、幅は0.36～0.65m



第 315 図 第 46 号溝跡

である。深さは0.07～0.12mである。断面形は皿形である。底面は、北東から南西方向に低くなり、西に向かう部分では第13号溝跡に向かって低くなる。

遺物は土師器の小片が混入していたが、最も新しい遺物は陶器の折縁皿が出土した。

第52号溝跡（第317図）

B-16・17グリッドに位置する。ほぼ東西方向に延びる。西側は第34号溝跡に接続し、東側は調査区内で消失していた。他に重複する遺構はない。

検出した長さは3.29mで、幅は0.29～0.39mである。深さは0.09mである。断面形は皿形で、底面はほぼ平坦で高低差はない。

遺物は出土しなかった。

第54号溝跡（第316図）

E-16グリッドに位置する。第44・47号溝跡を結ぶような位置関係にあるが両遺構との新旧関係は不明である。

検出した長さは2.35mで、幅は0.34mである。

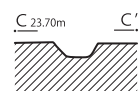
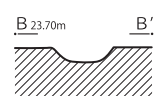
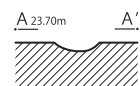
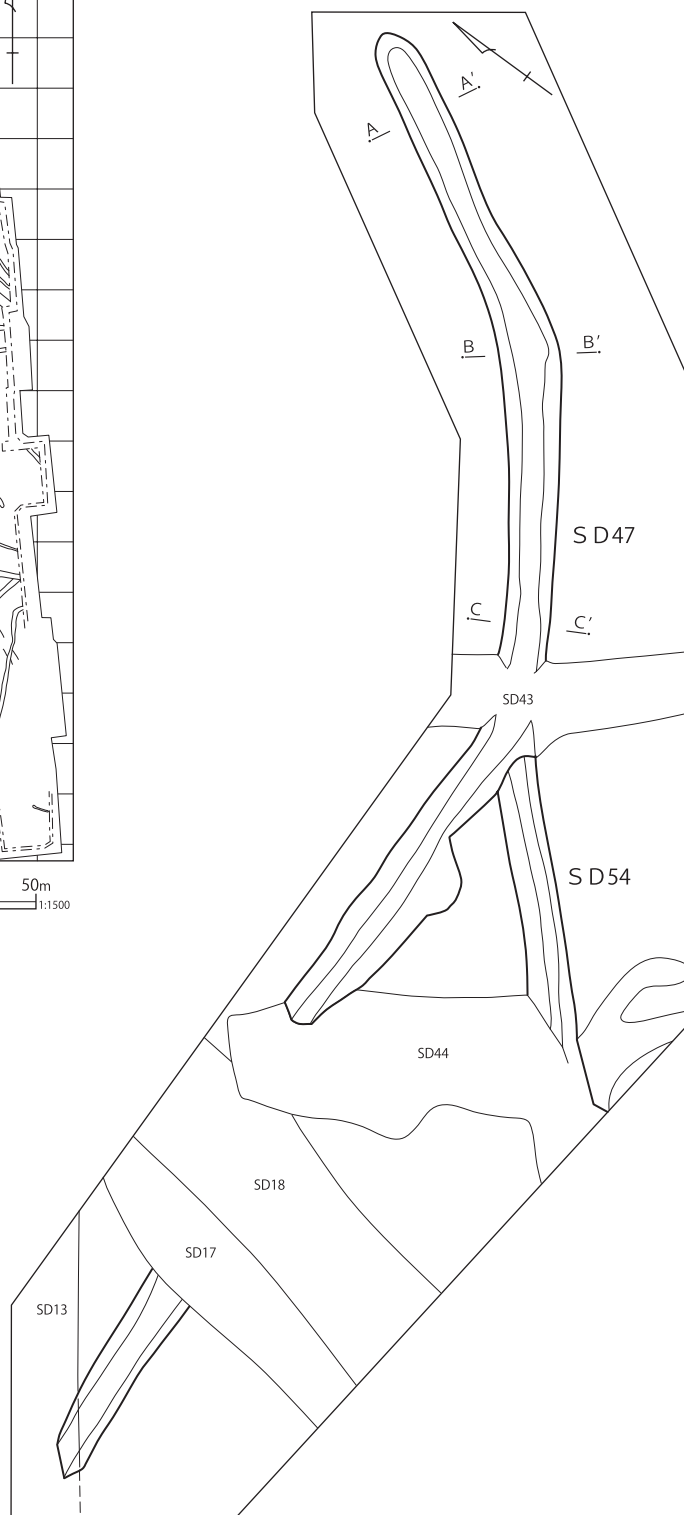
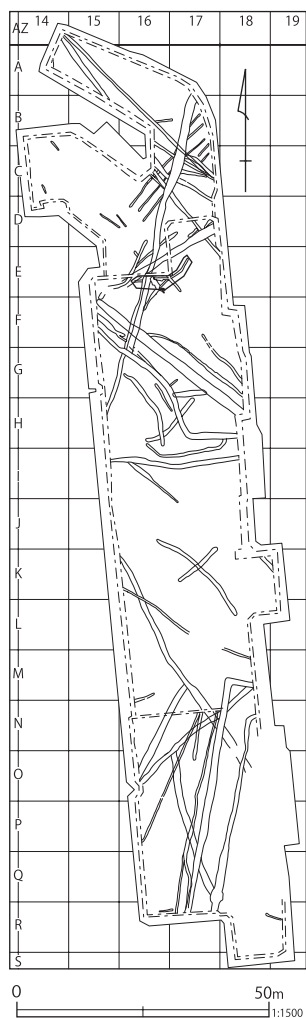
遺物は出土しなかった。

溝跡出土遺物（第318図）

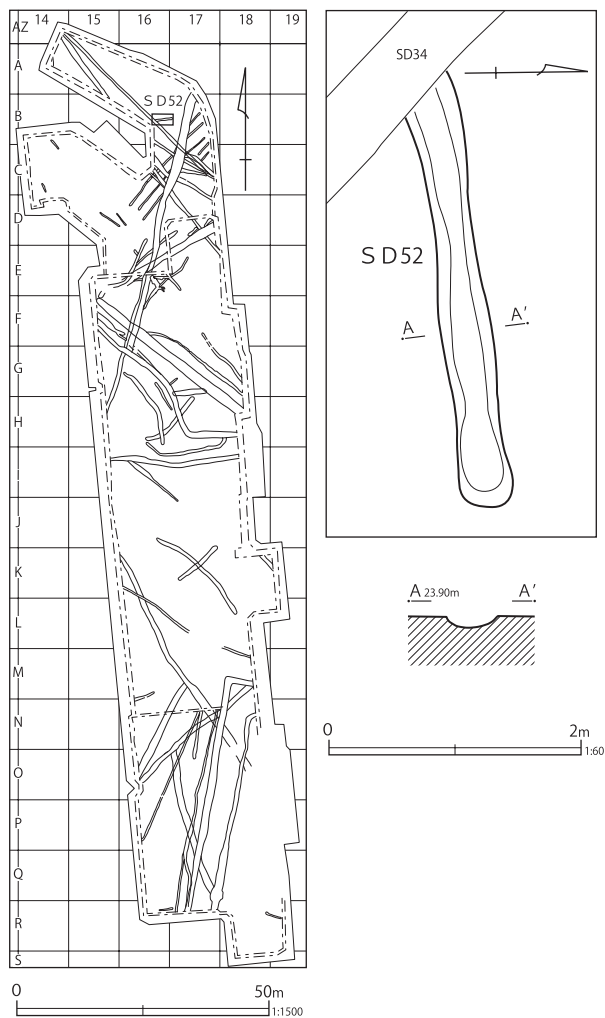
溝跡からは、ほとんど遺物が出土していない。大部分が混入の土師器、須恵器の細片である。僅かに第4号溝跡から、肥前系磁器のくらわんか手の碗の細片が出土したのみである。

1は須恵器の坏である。底面回転ヘラケズリ。8世紀前半と考えられる。南比企産。2は須恵器の甕である。灰白色を呈し、やや多孔質である。焼成はやや甘く、軟質である。外面に沈線状の工具の当たり痕が付く。西毛産か。

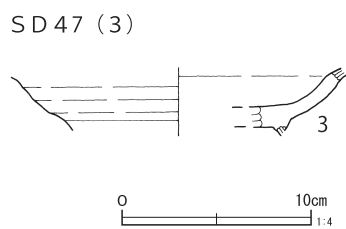
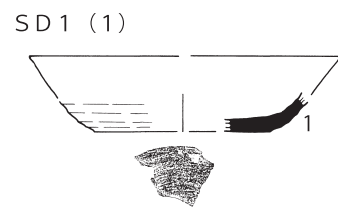
3は志野織部の鉄絵皿である。17世紀前半。外周のほとんどを欠いている。見込みに長石釉、折縁部分に緑釉がかかる。外面無釉。見込みに部分的に鉄絵が残る。



第 316 図 第 47・54 号溝跡



第 317 図 第 52 号溝跡



第 318 図 溝跡出土遺物

第 81 表 溝跡出土遺物観察表 (第 318 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	—	[2. 1]	(9. 2)	I K	10	良好	灰	SD 1 南比企産	80-7
2	須恵器	甕	—	[3. 2]	—	H I K	5	良好	灰黄	SD 5 西毛産か	80-7
3	陶器	折縁皿	—	[2. 6]	(8. 0)	HK	25	普通	浅黄橙	SD 47 重ね焼き痕	—

5 グリッド出土遺物

表土掘削や遺構確認時に出土した遺物には、土師器、須恵器、灰釉陶器、砥石がある（第319～326図）。

7・8・48・103は、猿投産の灰釉陶器である。7・8は瓶類である。7は胴部の破片で外面に釉がかけられ、8は見込み部分に溜まった状態である。48・103は皿である。48の釉は刷毛塗りである。103は輪トチン痕が見られる。

9・11・14・17・60・94・109・115は、須恵器の坏である。9・14は8世紀前半の南比企産。底面回転ヘラケズリ。11・17・94は南比企産。109は9世紀前半の末野産。底面回転糸切り。

18・70・123は、湖西産の須恵器である。18は坏G、70・123は坏Hの蓋である。7世紀後半。

29・71・105は、須恵器のかえり蓋である。29・71は7世紀後半と考えられる。29は湖西産。71は湖西産の可能性はあるが確実ではない。105は肌肉が厚く、全体に灰がかかる。8世紀前半。東毛産の可能性はある。72・91・110・111・116は、かぶせ蓋である。径に大小がある。111が東毛産の可能性があり、他は南比企産である。いずれも9世紀と考えられる。

3～6・12・15・20～23・36～41・76・92・93・96・112・113は、須恵器の甕胴部である。外面は平行タタキ、横方向のナデ、刷毛目状のカキ目加えられるものがある。内面の当て具は、大部分に青海波文が残る。産地は群馬産がほとんどで、特に色調が黒っぽく、重量感があり、東毛産と考えられるものが多い。西毛産としたものは、やや軽量で淡灰色を呈する。南比企産、末野産はごく少ない。3～6は同一個体の可能性がある。全体に暗灰色から暗赤紫色を呈し、硬質。重量感がある。東毛産か。40は他の個体の破片が溶着している。96の外面には、細いヘラ状工具によるヘラ記号が認められる。

69・74は、甕の底部である。69は末野産。74は

東毛産か。

50・84・85・104・106・107は須恵器の瓶類である。50は横瓶と考えられる破片で、3条のヘラによる沈線が施されている。淡灰色を呈する。産地不明。84・85は提瓶である。中心付近は不明瞭だが、細かな刷毛目状のカキ目が施されている。淡灰色を呈する。西毛産か。104・106・107は瓶類の口縁部である。106は湖西産。104・107は東毛産と考えられる。

10は、須恵器底部を転用した紡錘車である。底面の糸切り痕が残る。南比企産。

42・83はロクロ土師器である。底面回転糸切り。9世紀後半から10世紀前半。風化が進み、調整がほとんど見えない。

土師器は、古墳時代前期から平安時代に及んでいる。胎土には、角閃石・砂粒・赤色粒子を含むものが多い。いずれも風化が進んでいる。古墳時代後期の坏は、有段口縁坏、坏蓋模倣坏、北武蔵型坏がある。有段口縁坏は内外面黒色処理されている。77の外面には漆が付着する。108は北武蔵型暗文坏である。7世紀後半か。45は指頭痕が多く残る坏である。8世紀か。甕には長甕とコの字甕がある。24・114は古墳時代後期の鉢と考えられる。114は細かくヘラケズリが施されている。

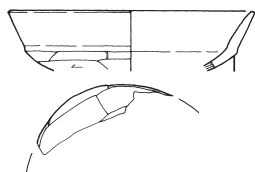
古墳時代前期の土器も若干みられる。119は二重口縁壺、120は複合口縁壺、66は高坏である。120の壺には細い棒状浮文が貼付されている。

13・16・27・59は砥石である。13・59は円礫を用いたものである。角閃石安山岩製。13は複数の平坦面が見られ、使用痕が多く残る。16・27は切石を用いたもので、16はかなり使い込まれている。凝灰岩製。

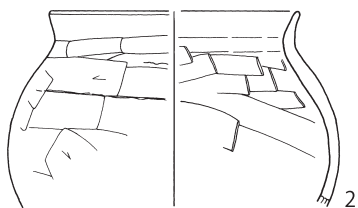
80・81の紡錘形の土錘は被熱し、煤が付着している。

47は、益子焼と考えられる播鉢である。鉄釉がかかる。19世紀後半。

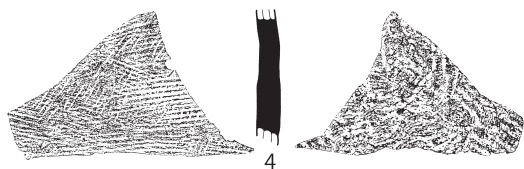
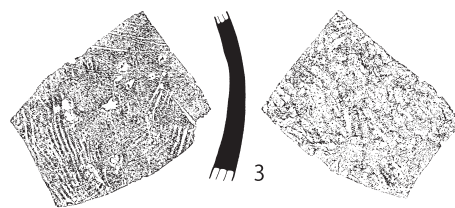
A-15 (1)



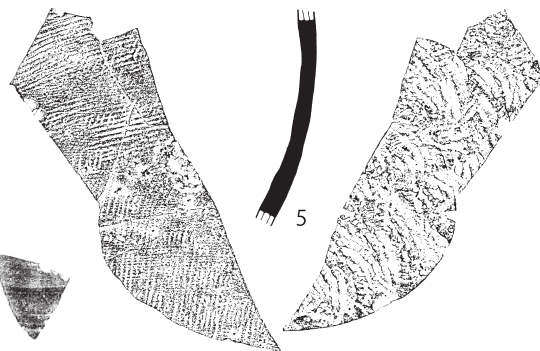
C-17 (2)



D-15 (3~5)

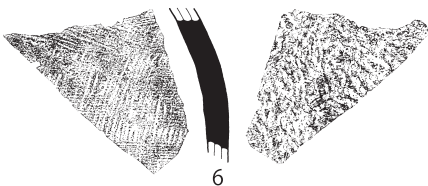


4



5

G-17 (6)



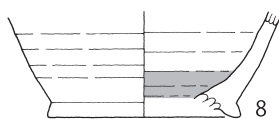
6

K-17 (7)



7

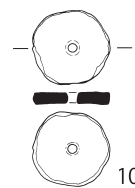
L-16 (8~10)



8

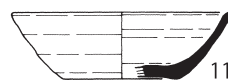


9



10

M-15 (11・12)

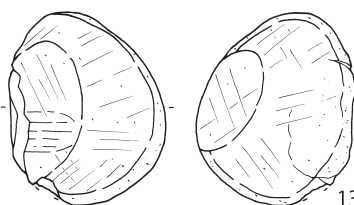


11



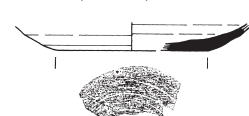
12

M-18 (13)



13

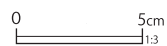
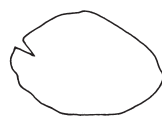
N-16 (14~16)



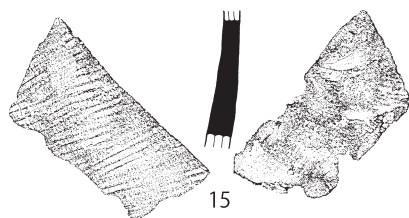
14



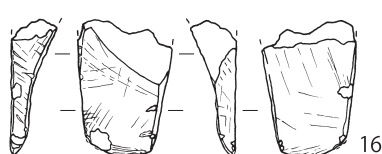
0 10cm 1:4



0 5cm 1:3



15



16



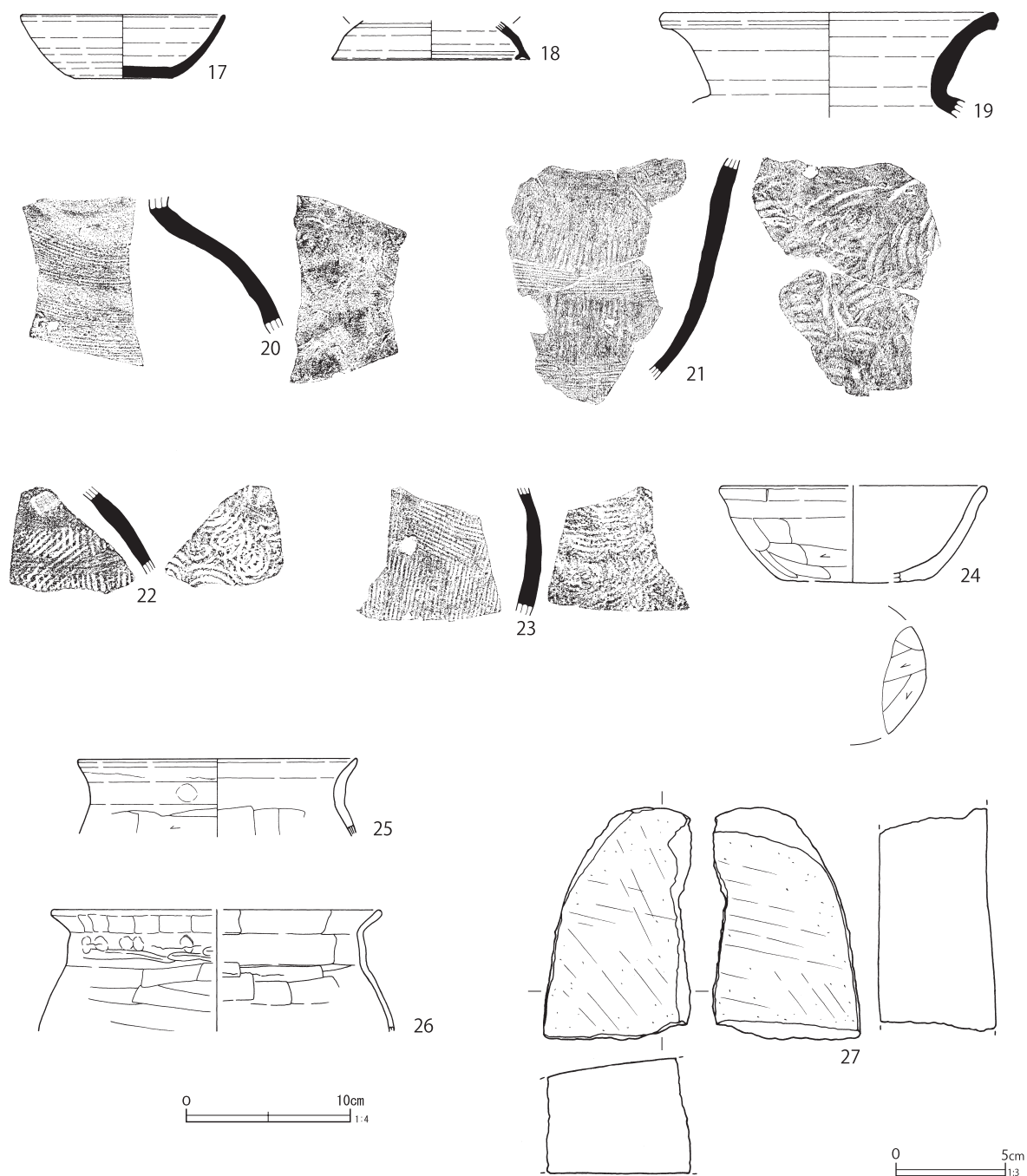
0 10cm 1:4



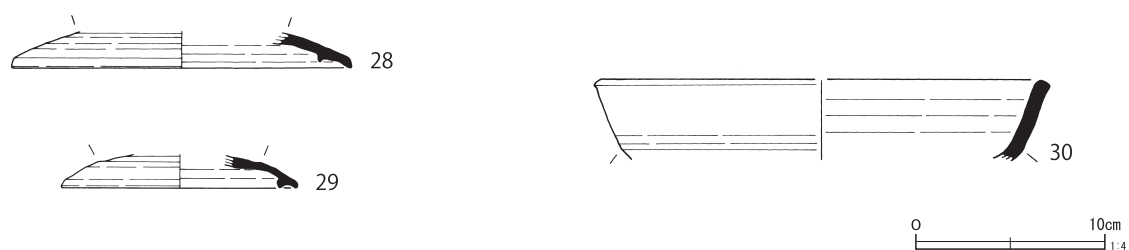
0 5cm 1:3

第 319 図 グリッド出土遺物 (1)

N-17 (17 ~ 27)

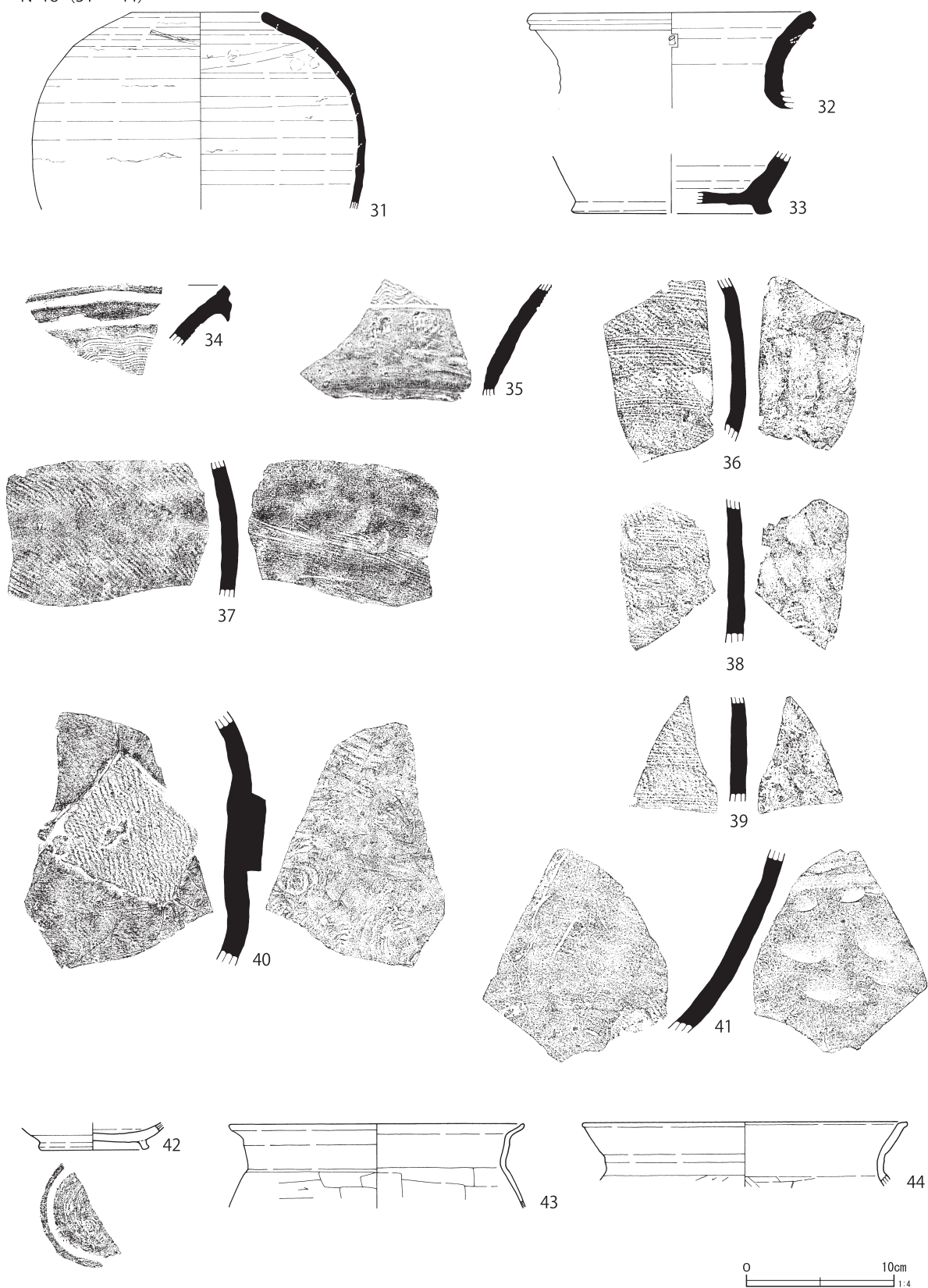


N-18 (28 ~ 30)



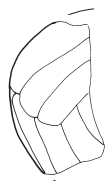
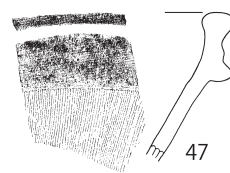
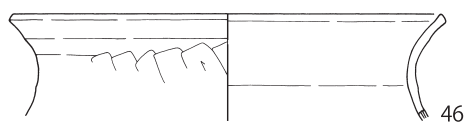
第 320 図 グリッド出土遺物 (2)

N-18 (31 ~ 44)

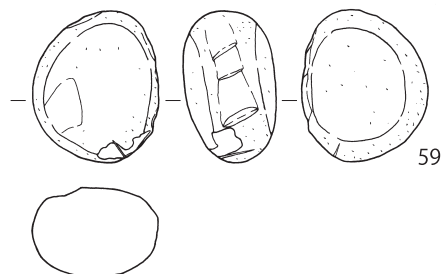
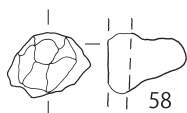
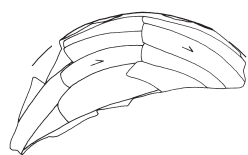
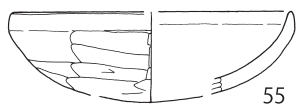
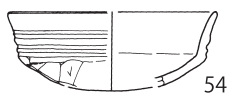
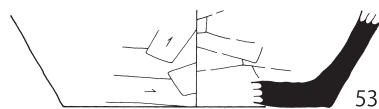
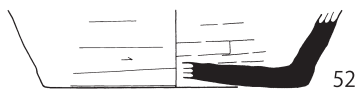
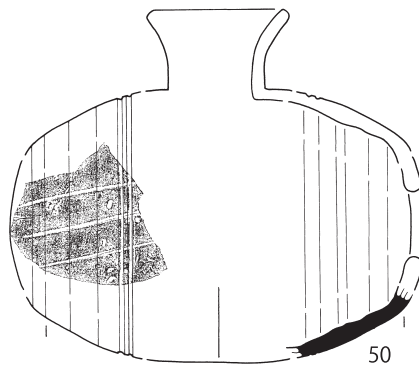
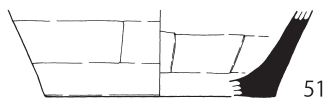
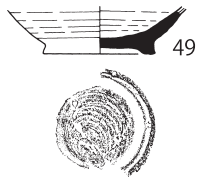
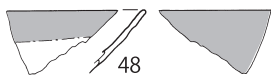


第 321 図 グリッド出土遺物 (3)

O-16 (45 ~ 47)



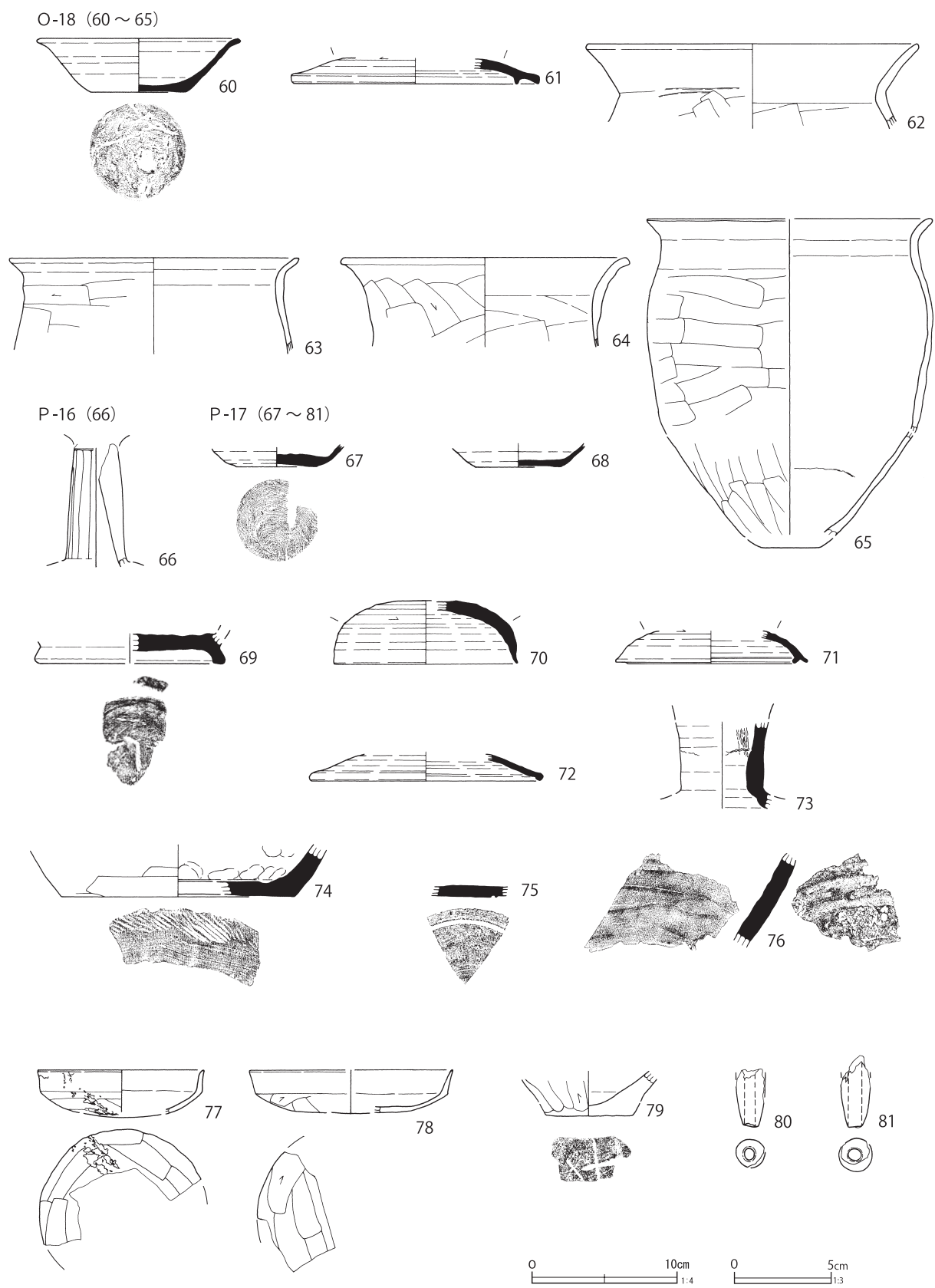
O-17 (48 ~ 59)



0 10cm 1:4

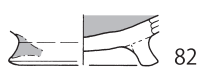
0 5cm 1:3

第 322 図 グリッド出土遺物 (4)

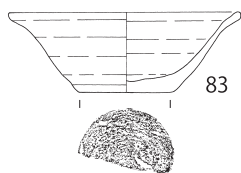


第 323 図 グリッド出土遺物 (5)

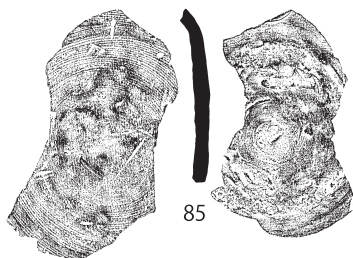
P-18 (82 ~ 86)



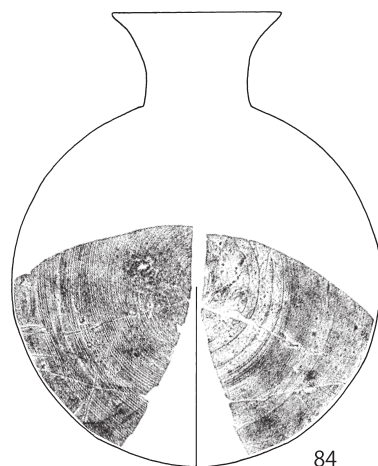
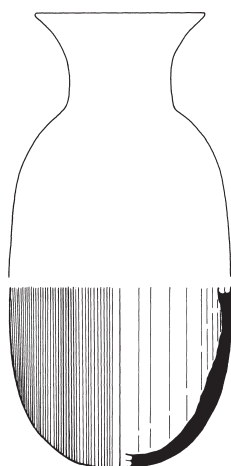
82



83

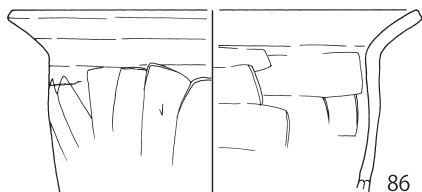


85

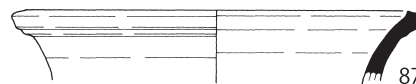


84

Q-16 (87 ~ 89)



86



87

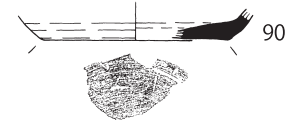


88

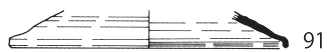


89

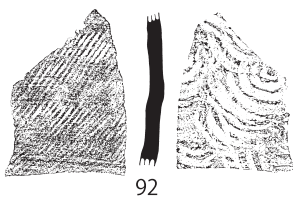
Q-17 (90 ~ 93)



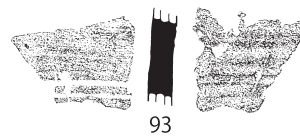
90



91

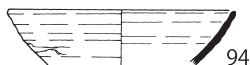


92



93

Q-18 (94 • 95)



94

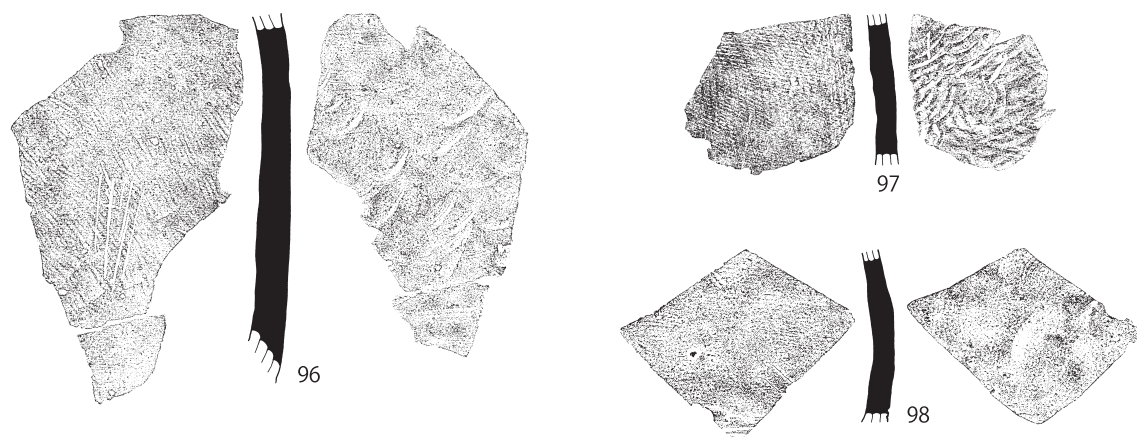


95

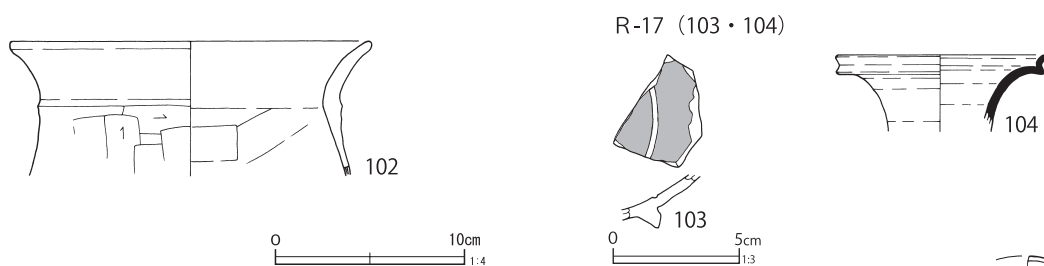
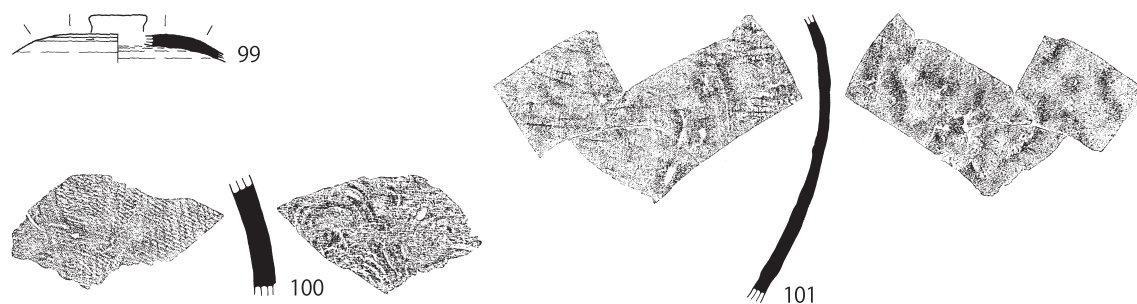
0 10cm 1:4

第 324 図 グリッド出土遺物 (6)

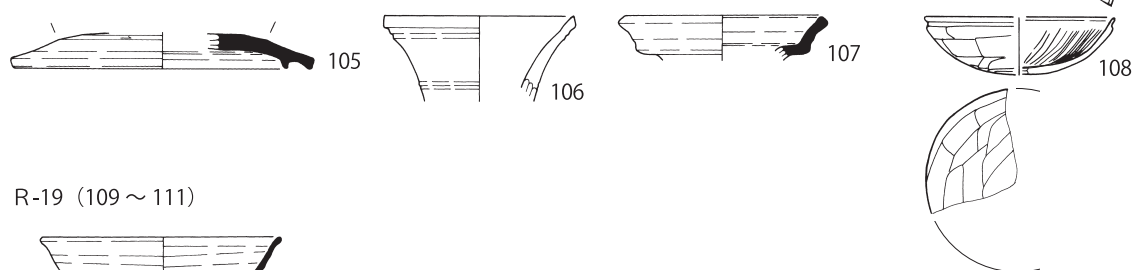
Q-18 (96 ~ 98)



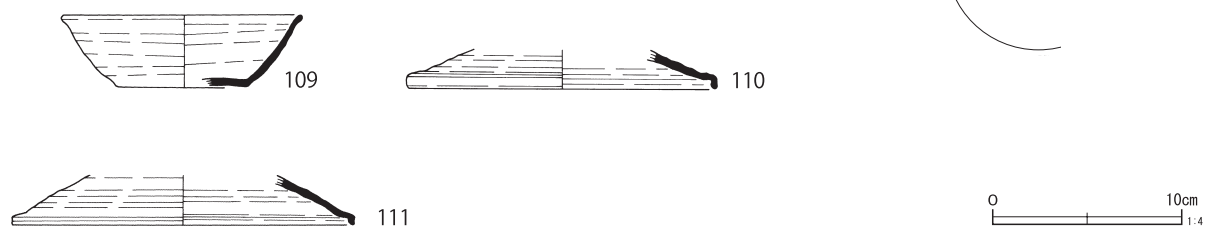
Q-19 (99 ~ 102)



R-18 (105 ~ 108)

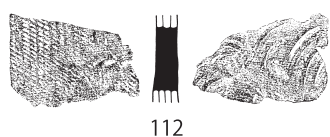


R-19 (109 ~ 111)

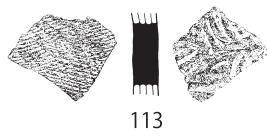


第 325 図 グリッド出土遺物 (7)

R-19 (112・113)

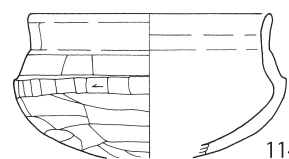


112



113

試掘 (114)



114

表採 (115～122)



115



116



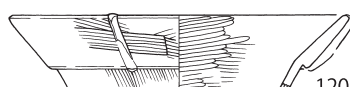
117



118



119



120



121



122

排水溝 (123)



123



0 10cm 1:4

第326図 グリッド出土遺物(8)

第82表 グリッド出土遺物観察表(第319～326図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(13.0)	[3.2]	—	CEHI	15	普通	にぶい橙	A-15	—
2	土師器	甕	(13.0)	[10.5]	—	EGHI	20	普通	橙褐	C-17・E-16 東毛産か	80-8
3	須恵器	甕	—	[8.9]	—	EIK	5	良好	褐灰	D-15 上野産 4～6と同一か 東毛産か	—
4	須恵器	甕	—	[7.1]	—	EIK	5	良好	褐灰	D-15 東毛産	—
5	須恵器	甕	—	[10.3]	—	EIK	5	良好	褐灰	B-17・D-15・E-16 東毛産 3と同一か	—
6	須恵器	甕	—	[8.2]	—	IK	5	良好	褐灰	G-17 東毛産か	—
7	灰釉陶器	瓶	—	[3.7]	—	K	5	良好	灰白	K-17 猿投産 外面施釉	—
8	灰釉陶器	瓶	—	[5.6]	(10.0)	HIK	15	普通	灰白	L-16 猿投産	—
9	須恵器	坏	(14.4)	[3.8]	(7.6)	DIK	20	普通	灰	L-16 南比企産	—
10	土製品	紡錘車	高さ1.0 幅6.0 孔径0.7 重さ39.1g					残存100		L-16 須恵器底部転用 糸切り痕 南比企産	81-1
11	須恵器	坏	(11.4)	3.5	(6.0)	IK	35	普通	灰	M-15 底部回転糸切り 南比企産	80-9
12	須恵器	甕	—	[7.1]	—	IK	5	良好	灰	M-15 東毛産	—
13	石製品	砥石	長さ7.6 幅6.2 厚さ4.1 重さ103.5g							M-18 角閃石安山岩	82-8
14	須恵器	坏	—	[1.5]	(8.0)	JDEGHIK	10	不良	灰黄褐	N-16 南比企産	—
15	須恵器	甕	—	[7.2]	—	IK	5	良好	にぶい黄橙	N-16 東毛産	—
16	石製品	砥石	長さ[5.3] 幅[3.7] 厚さ[1.8] 重さ26.9g							一部残存 凝灰岩	82-8
17	須恵器	坏	(12.3)	3.9	5.9	EJL	30	普通	褐灰	N-17・N-18 底部回転糸切り 南比企産	—
18	須恵器	坏	(11.9)	[2.3]	—	EI	10	普通	灰白	N-17 湖西産	—
19	須恵器	壺	(20.0)	[6.4]	—	EI	20	普通	灰	N-17 内外面自然釉付着	81-2
20	須恵器	甕	—	[8.3]	—	EIK	5	良好	灰	N-17 東毛産	—
21	須恵器	甕	—	[5.4]	—	EIK	5	良好	灰	N-17・M-18 東毛産	—
22	須恵器	甕	—	[5.3]	—	BEI	5	良好	灰	N-17 東毛産	—

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
23	須恵器	甗	—	[7.7]	—	A I K	5	良好	灰	N-17 東毛産	—
24	土師器	坏	(16.0)	[5.9]	(9.0)	E G H	85	普通	淡褐	N-17	81-3
25	土師器	甗	(16.9)	[4.7]	—	E G H	20	普通	にぶい黄橙	N-17	—
26	土師器	甗	(20.0)	[7.4]	—	C G H I	20	普通	淡褐	N-18 粘土紐痕	81-4
27	石製品	砥石	長さ [10.6] 幅 [6.7] 厚さ [5.4] 重さ 596.7 g							砂岩 周縁部欠損	—
28	須恵器	蓋	(17.8)	[1.9]	—	D K	5	普通	褐灰	N-18	—
29	須恵器	蓋	(12.3)	[1.7]	—	D I	10	普通	灰白	N-18 外面自然釉付着 湖西産	—
30	須恵器	盤	(24.0)	[4.3]	—	E K I	10	普通	灰	N-18	—
31	須恵器	無頭壺	(9.0)	[13.3]	—	B H K	20	普通	灰	N-18	81-5
32	須恵器	甗	(18.8)	[6.5]	—	E G L	25	普通	暗灰	N-18 焼け歪激しい 東毛産	81-6
33	須恵器	瓶	—	[4.2]	(13.4)	G K L	10	普通	灰	N-18 煤付着 内面自然釉	—
34	須恵器	甗	—	[3.9]	—	I K L	5	良好	灰	N-18 上野産か	—
35	須恵器	甗	—	[7.5]	—	E D I K	5	良好	褐灰	N-18 上野産 転用砥具	—
36	須恵器	甗	—	[10.0]	—	B E I K	5	良好	灰	N-18 東毛産か	—
37	須恵器	甗	—	[9.3]	—	D E I K	5	良好	灰	N-18 東毛産	—
38	須恵器	甗	—	[9.7]	—	I K	5	良好	灰	N-18 東毛産か	—
39	須恵器	甗	—	[7.0]	—	D I K	5	良好	灰	N-18 東毛産	—
40	須恵器	甗	—	[17.3]	—	E I K	5	良好	灰	N-18 破片溶着 灰 東毛産	—
41	須恵器	甗	—	[12.5]	—	D I K	5	良好	灰白	N-18 東毛産	—
42	ロクロ土師器	高台付埴	—	[1.8]	(6.8)	D G H I	30	普通	橙	N-18 底部回転糸切り	—
43	土師器	甗	(19.8)	[5.7]	—	C E G H I	10	普通	橙	N-18	—
44	土師器	壺	(21.8)	[4.3]	—	A E H I	5	普通	にぶい橙	N-18	—
45	土師器	坏	(14.0)	[4.3]	(10.2)	H I K	40	普通	橙	O-16 指頭痕	81-7
46	土師器	甗	(22.5)	[5.6]	—	A E G H	10	普通	にぶい橙	O-16	—
47	陶器	播鉢	—	[7.8]	—	I K	5	普通	褐灰	O-16 益子焼 鉄釉	—
48	灰釉陶器	埴	—	[2.5]	—	I K	5	良好	明灰	O-17 猿投産	—
49	須恵器	高台付埴	—	[2.5]	(5.8)	E I K	60	不良	灰	O-17 底部回転糸切り	—
50	須恵器	横瓶	—	[3.9]	—	G I K	5	良好	灰	O-17 産地不明	—
51	須恵器	壺	—	[4.6]	(12.0)	E I	10	普通	灰	O-17	—
52	須恵器	壺	—	[4.2]	(13.8)	D E H I	15	普通	灰白	O-17	—
53	須恵器	壺	—	[5.1]	(14.0)	E I J K	10	普通	灰	O-17 底部・内面自然釉付着	—
54	土師器	坏	(11.0)	[4.2]	—	E G H I	20	普通	赤褐	O-17	—
55	土師器	坏	(14.6)	[4.4]	—	C E G H	30	普通	淡褐	O-16	—
56	土師器	坏	(12.0)	[3.3]	—	E G H I K	25	普通	淡橙褐	O-17	81-8
57	土師器	甗	(13.2)	[4.0]	—	D E G H	15	普通	明赤褐	O-17	—
58	土師器	甗	—	[2.4]	—	G H I	5	普通	淡褐	O-17	—
59	石製品	砥石	長さ 6.0 幅 [5.0] 厚さ 3.6 重さ 55.9 g							角閃石安山岩	82-8
60	須恵器	坏	(13.6)	3.7	6.5	B C E H K L	30	不良	橙	O-18 炭周辺 底部回転糸切り	81-9
61	須恵器	蓋	(16.8)	[1.8]	—	E I K	5	普通	灰白	O-18 外面釉付着 湖西産	—
62	土師器	甗	(22.6)	[6.0]	—	C E G H I	10	普通	橙	O-18・SD 12	—
63	土師器	甗	(19.6)	[6.6]	—	E G H I	10	普通	黒褐	O-18 炭周辺	—
64	土師器	甗	(19.4)	[6.1]	—	E G H I	10	普通	にぶい黄橙	O-18	—
65	土師器	甗	(19.8)	[22.8]	—	E G H	40	普通	橙褐	O-18 炭周辺	82-1
66	土師器	高坏	—	[8.0]	—	C E G H I	40	普通	赤褐	P-16	82-2
67	須恵器	坏	—	[1.5]	5.6	D J	80	普通	褐灰	P-17 底部回転糸切り	—
68	須恵器	坏	—	[1.6]	(5.9)	E K	25	普通	灰白	P-17 産地不明	—
69	須恵器	瓶	—	[2.1]	(13.0)	B G H I	10	良好	暗灰	P-17 末野産	—
70	須恵器	蓋	(12.4)	[4.3]	—	D E H	10	普通	褐灰	P-17 湖西産	—
71	須恵器	蓋	(11.4)	[2.2]	—	E I	30	普通	褐灰	O-17・P-17	—
72	須恵器	蓋	(15.6)	[1.8]	—	E I L	5	普通	褐灰	P-17 南比企産	—
73	須恵器	長頸瓶	—	[6.0]	—	G I J K	10	良好	明灰	P-17 南比企産か	—
74	須恵器	壺	—	[3.7]	(16.0)	E I L	15	普通	にぶい赤褐	P-17 東毛産か	—

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
75	須恵器	坏	—	[7.5]	—	E I K	5	良好	灰	P -17 上野産か	—
76	須恵器	甕	—	[6.5]	—	I K	5	良好	黄灰	P -17 東毛産	—
77	土師器	坏	11.3	[3.0]	—	H I K	50	普通	淡褐	P -17 外面漆付着	82-3
78	土師器	坏	(14.0)	[2.9]	—	G H I	20	普通	橙	P -17 器面荒れ	—
79	土師器	甕	—	[3.0]	(5.0)	E G H	10	普通	淡褐	P -17	—
80	土製品	土鍾	長さ(3.0) 最大径(1.5) 厚さ(1.5) 孔径0.6 重さ3.9 g 残存40				5	良好	赤灰	P -17 煤付着	82-9
81	土製品	土鍾	長さ(3.7) 最大径1.5 厚さ(1.7) 孔径0.7 重さ4.2 g 残存30				5	良好	赤灰	P -17 煤付着	82-9
82	灰釉陶器	瓶	—	[2.6]	(7.8)	K I	15	良好	赤灰	P -18 釉付着	—
83	土師器	坏	(12.0)	4.2	4.9	C G H I	25	不良	橙	P -18 底部回転系切り	—
84	須恵器	提瓶	—	[9.5]	—	I K L	50	良好	灰	P -18 煤付着 西毛産か	—
85	須恵器	提瓶	—	[12.2]	—	I K	5	普通	灰	P -18 内外面黒色処理 西毛産か	—
86	土師器	甕	(21.0)	[9.1]	—	E G H	40	普通	淡褐	P -18	82-4
87	須恵器	壺	(20.0)	[3.8]	—	D K	5	普通	灰	Q -16 自然釉付着	—
88	須恵器	坏	—	[1.8]	(7.3)	E I K	30	普通	灰白	Q -16 底部回転系切り	—
89	土師器	甕	(21.8)	[5.0]	—	C E I G	10	普通	明赤褐	Q -16	—
90	須恵器	坏	—	[1.7]	(9.7)	E I K	10	不良	にぶい黄橙	Q -17 底部回転ヘラ切り	—
91	須恵器	蓋	(14.5)	[1.9]	—	E I J K	5	普通	灰	Q -17 南比企産	—
92	須恵器	甕	—	[8.1]	—	I K	5	良好	灰	Q -17 東毛産	—
93	須恵器	甕	—	[5.1]	—	E I K	5	良好	黒褐	Q -17 東毛産	—
94	須恵器	坏	(11.8)	[3.0]	—	D I J	20	普通	灰	Q -18 南比企産	—
95	須恵器	盤	—	[2.7]	—	B E G K	20	良好	暗灰	Q -18・Q -19 末野産	—
96	須恵器	甕	—	[19.5]	—	E I J K	5	良好	灰	Q -18 ヘラ記号 南比企産	—
97	須恵器	甕	—	[8.0]	—	A C E H I K	5	良好	黄灰	Q -18 上野産	—
98	須恵器	甕	—	[9.1]	—	A E I K	5	良好	灰	Q -18 上野産	—
99	須恵器	蓋	—	[1.1]	—	B E I	20	普通	灰	Q -19	—
100	須恵器	盤	—	[6.3]	—	I K	5	良好	灰黄	Q -19	—
101	須恵器	甕	—	[15.2]	—	E H I K	5	良好	灰	Q -19 南比企産	—
102	土師器	甕	(18.7)	[7.1]	—	E G H I K	10	普通	にぶい黄橙	Q -19	—
103	灰釉陶器	皿	—	[2.1]	—	I	5	良好	灰	R -17 輪トチン痕 猿投産	—
104	須恵器	瓶	(10.8)	[4.0]	—	E I	25	普通	灰	R -17 東毛産	—
105	須恵器	蓋	(15.5)	[1.8]	—	E H K	10	普通	褐灰	R -18 東毛産か	—
106	灰釉陶器	瓶	(10.0)	[4.5]	—	I K	10	良好	灰	R -18 内外面自然釉	—
107	須恵器	壺	(10.3)	[2.3]	—	D I	10	普通	灰	R -18 東毛産	—
108	土師器	坏	(10.0)	[3.0]	—	C G H I	20	普通	橙	R -18 北島型暗文坏	82-5
109	須恵器	坏	12.5	3.8	(6.7)	B E I K L	70	普通	灰	R -19 底部回転系切り 自然釉付着 末野産	82-6
110	須恵器	蓋	(16.0)	[2.0]	—	E I J	10	普通	褐灰	R -19 南比企産	—
111	須恵器	蓋	(17.8)	[2.6]	—	E I	20	普通	灰	Q -19・R -19 東毛産か	—
112	須恵器	甕	—	[4.5]	—	I K	5	良好	灰黄	R -19 東毛産 113 と同一か	—
113	須恵器	甕	—	[4.3]	—	I K	5	良好	灰黄	R -19 東毛産 112 と同一か	—
114	土師器	鉢	(12.6)	[7.7]	—	C D H I	75	普通	にぶい橙	1 回目 3 T r 包含層下層	82-7
115	須恵器	坏	(12.0)	3.9	(4.4)	D E K L	30	普通	灰白	底部回転系切り	—
116	須恵器	蓋	(16.7)	[2.7]	—	E J	10	普通	灰	南比企産	—
117	須恵器	蓋	—	[2.1]	—	E I K	50	普通	褐灰	回転ヘラケズリ つまみ径 2.7 cm	—
118	須恵器	甕	(19.0)	[3.6]	—	D E	10	普通	灰赤	外面施釉 内面釉付着	—
119	土師器	壺	(18.6)	[3.7]	—	C E H I K	25	普通	にぶい黄橙	口縁部に赤彩痕	—
120	土師器	壺	(17.6)	[4.3]	—	C E H I	5	普通	明赤褐		—
121	土師器	壺	—	[3.0]	4.4	C E H I K	70	普通	にぶい黄橙	底部ヘラケズリ	—
122	土製品	土鍾	長さ 5.3 最大径 1.3 孔径 0.5 重さ 5.7 g			H I K	100	普通	灰白	暑さ 1.1 cm	82-9
123	須恵器	蓋	(10.4)	3.1	—	G K	20	不良	灰褐	南 ロクロ 湖西産	—

V 自然科学分析

北島遺跡第25次調査では、調査区中央から畠跡が検出され、溝跡から種実が、掘立柱建物跡から柱根、井戸跡から井戸枠の可能性のある木材が出

土した。

畠跡の栽培植物、建築用材の特定、当時の環境復元を目的に、自然科学分析を実施した。

1. 北島遺跡(第25次)の自然科学分析

(1) はじめに

北島遺跡(埼玉県熊谷市上川上地内)は、現在の星川左岸域に位置しており、松丸(1974)・久保(2000)などを参考とすると、荒川扇状地扇端付近に分布する沖積地に立地する。北島遺跡は、これまでに多くの地点で発掘調査が実施されており、弥生時代中期～近世までの遺構や遺物が確認されている。今回の第17次調査地点は、第1地点と第5地点の発掘調査区との間の領域にあたり、古墳時代～古代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡をはじめ、畠跡や溝跡、中世～近世の井戸跡などが確認されている。

本報告では、古墳時代～古代頃における古植生や栽培植物、遺構内から出土した種実遺体の種類や木製品の樹種などに関わる資料の作成を目的として、自然科学分析を実施した。

(2) 花粉分析

① 試料

試料は、調査区中央の西壁および東壁付近より検出された畠跡から採取した土壌4点(サンプル1～4)である。畠跡は、最大幅40cm程度を測る小溝群から構成されており、2箇所の小溝群はいずれも北東～南西方向を主軸とする。試料は、西壁付近の畠跡では、遺構の確認状況を踏まえ、任意の小溝2箇所の覆土より黒灰色～暗灰色泥(シルト～粘土)(サンプル1, 2)を採取している。また、東壁付近の畠跡では、小溝2箇所より、それぞれ遺構内に設定されたベルトより覆土に相当す

る暗灰色砂質泥(サンプル3, 4)を採取している。

② 分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉(1973)、中村(1980)、三好ほか(2011)等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。表中で複数の種類をー(ハイフオン)で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

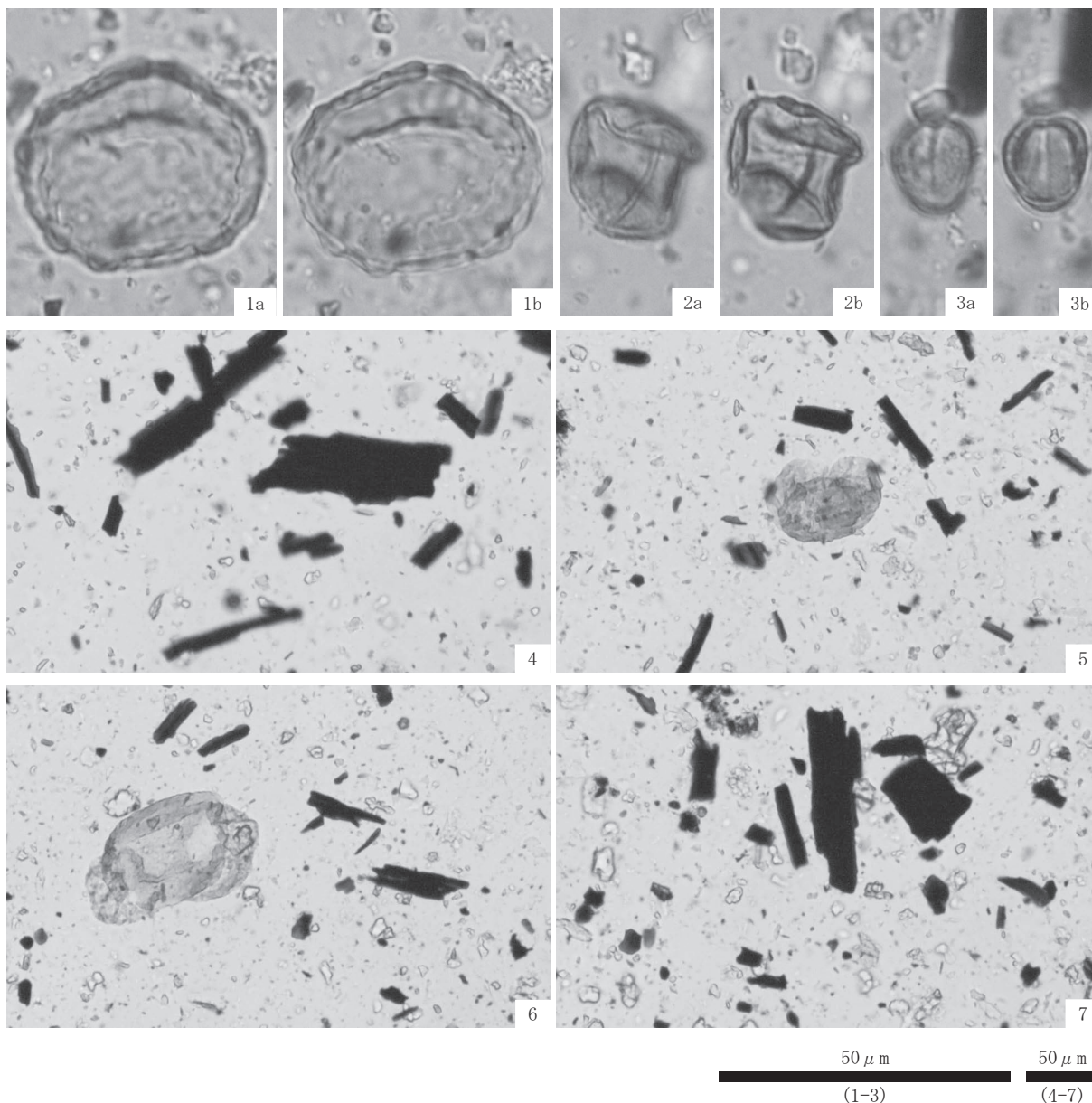
③ 結果

結果を第83表に示す。畠跡を構成する小溝埋積物(サンプル1～4)は、いずれの試料も花粉化石の産出が少なく、定量分析に耐えうる個体数は検出されなかった。また、わずかに検出された花粉化石は保存状態の悪いものが多く、花粉外膜が破損・溶解するものも確認された。

検出された種類は、木本花粉ではツガ属、マツ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属一ケヤキ属などが、草本花粉ではガマ属、イネ科、クワ科、アブラナ科、ヨモギ属、キク亜科などが、わずかに認められた程度である。

なお、各試料の分析残渣中には、微細な炭化植

第327図 花粉化石



- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1. ニレ属-ケヤキ属 (畠跡;3) | 2. イネ科 (畠跡;4) |
| 3. ヨモギ属 (畠跡;3) | 4. 花粉分析プレパラート内の状況 (畠跡;1) |
| 5. 花粉分析プレパラート内の状況 (畠跡;2) | 6. 花粉分析プレパラート内の状況 (畠跡;3) |
| 7. 花粉分析プレパラート内の状況 (畠跡;4) | |

物片（いわゆる微粒炭）が認められた。検出された微粒炭は、いずれも母材の推定が困難な不明型であり、木材組織を有するものや、イネ科由来とされる波状構造を有するものなどは確認できなかった。

④ 考察

畠跡試料（サンプル1～4）の花粉分析の結果、各試料からは花粉化石はほとんど検出されなかつ

た。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている（中村, 1967; 徳永・山内, 1971; 三宅・中越, 1998 など）。北島遺跡のこれまでの発掘調査では、自然堤防（微高地）を中心に集落が展開しており、畠跡なども検出されることが明らかとされている。第25次調査地点においても調査区南側を中心に古

第 83 表 花粉分析結果

種 類	畠跡			
	西壁付近		東壁付近	
	サンプル 1	サンプル 2	サンプル 3	サンプル 4
木本花粉				
ツガ属	—	—	—	1
マツ属	—	—	—	1
コナラ属コナラ亜属	—	—	—	1
ニレ属—ケヤキ属	—	—	1	—
草本花粉				
ガマ属	—	—	1	—
イネ科	—	—	—	1
クワ科	—	1	—	—
アブラナ科	—	—	—	1
ヨモギ属	2	1	2	6
キク亜科	—	1	1	—
不明花粉				
不明花粉	1	2	2	3
シダ類孢子				
シダ類孢子	5	6	3	9
合 計				
木本花粉	0	0	1	3
草本花粉	2	3	4	8
不明花粉	1	2	2	3
シダ類孢子	5	6	3	9
合計（不明を除く）	7	9	8	20

墳時代後期および平安時代の竪穴住居跡が検出されているため、居住や耕作に適した好气的環境にあったことが推定される。また、わずかに検出された花粉化石の保存状態を考慮すると、堆積時に取り込まれた花粉はその後の経年変化の影響により分解・消失している可能性が高い。

わずかに検出された種類についてみると、木本類のツガ属は周辺の丘陵上や山地などの森林要素、マツ属やコナラ属コナラ亜属は二次林要素、ニレ属—ケヤキ属は河畔林要素に由来すると考えられる。草本類のイネ科、クワ科、アブラナ科、ヨモギ属、キク亜科などは人里植物を含む分類群であることから、調査地周辺の草地植生を反映しており、ガマ属は周辺に分布した水湿地などに生育したと思われる。また、クワ科には草本類の他に木本のクワ属も含まれる。後述するようにヤマグワの生育も想定されることから、検出されたクワ科

はヤマグワなどの木本類に由来する可能性もある。

なお、今回の花粉分析では、栽培種に由来する花粉化石は検出されなかったことから、畠跡における栽培植物の検討には至らない。

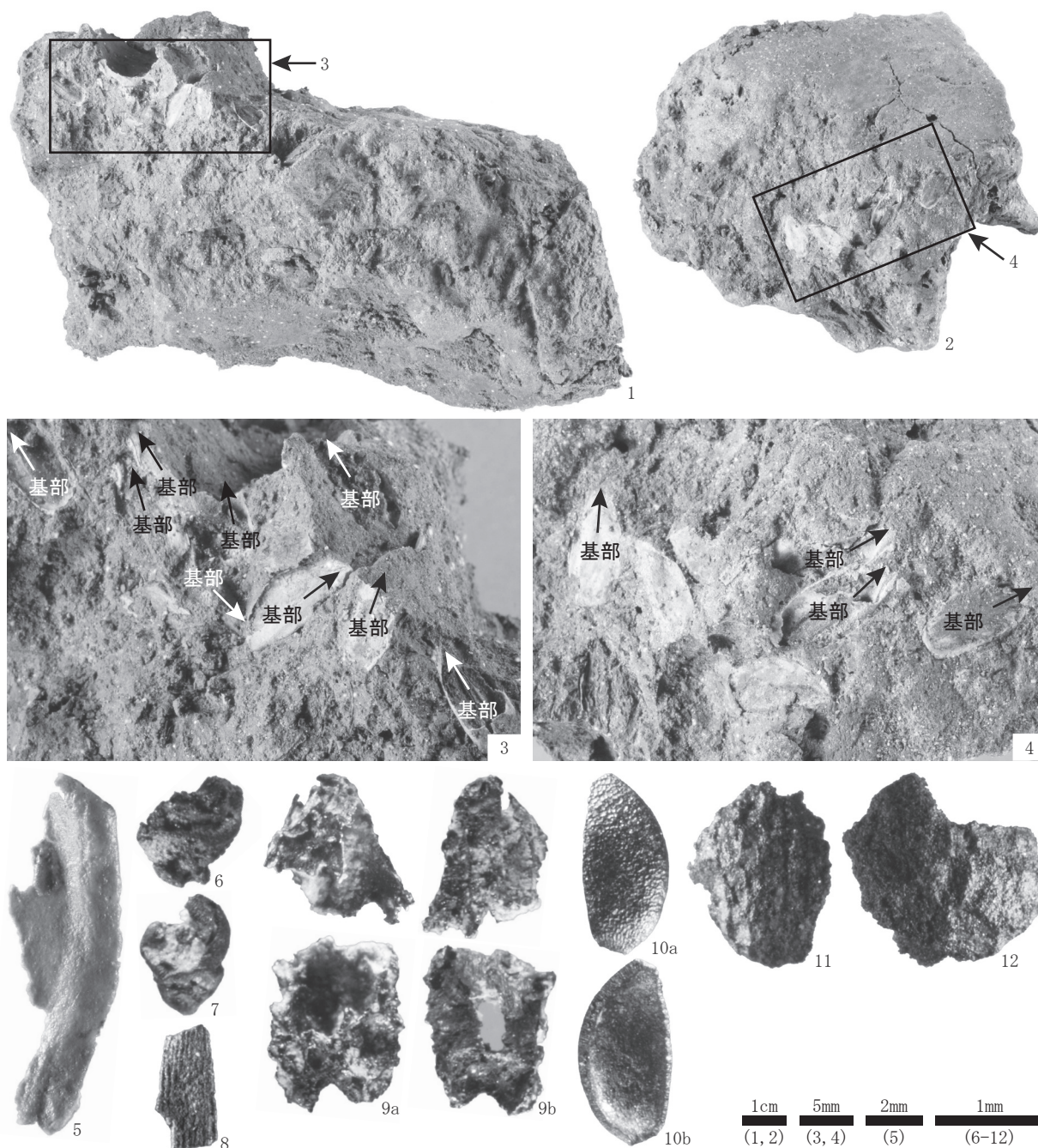
（３）種実遺体分析

① 試料

試料は、平安時代の溝状遺構の覆土上層より出土した種実遺体が混じる土壌試料である。土壌試料は、種実遺体が密集する部位を含む土塊（不攪乱土壌）として取り上げられている。土塊は、大きさが15.4cm×8.6cm×5.9cmのもの（以下、土塊A）と、10.2cm×8.9cm×4.9cmのもの（以下、土塊B）の2点からなる。

なお、土塊試料には、表面に種実遺体の密集部が認められ、これらはいずれも脆弱と判断された。そのため、担当者との打合せに基づき、土塊Aの種実遺体が密集する部分は保存を優先し表面観察

第328図 土塊試料・種実遺体



1. 土塊試料概観(道路跡;A)
3. ヒョウタン類 種子密集部(道路跡;A)
5. ヒョウタン類 種子(道路跡;B)
7. イネ 炭化穎(基部)(道路跡;B)
9. イネ科 炭化胚乳(道路跡;B)
11. サンショウ 種子(道路跡;B)

2. 土塊試料概観(道路跡;B)
4. ヒョウタン類 種子密集部(道路跡;B)
6. イネ 炭化穎(基部)(道路跡;B)
8. イネ 炭化穎(道路跡;B)
10. ヤナギタデ近似種 果実(道路跡;B)
12. サンショウ 種子(道路跡;B)

に留め、土塊Aの種実遺体密集部以外と土塊B全量を対象として水洗および種実遺体の抽出・同定を実施した。

② 分析方法

土塊表面に確認される種実遺体密集部を記録した後、表面に付着する土砂を面相筆で慎重に除去し、種実遺体の出土状況を観察する。土塊Aは、種実遺体が密集する範囲(8.6cm×4.8cm

第 84 表 種実遺体分析結果

分類群	部位・状態		道路跡			備考
			土塊 A		土塊 B	
			—	種実遺体 密集部		
木本種実						
サンショウ	種子	破片	2	—	—	
草本種実						
イネ	炭化穎（基部）	破片	—	—	2	
	炭化穎	破片	—	—	1	
イネ科	炭化胚乳	破片	—	—	1	
ヤナギタデ近似種	果実	破片	—	—	1	
ヒョウタン類	種子	破片	25	約 15	103	
分析残渣＊						
炭化材			++	+	++	
植物片			+	—	+	
昆虫類			+	—	+	
高師小僧			++	+	+++	最大：長さ 2cm, 径 0.7cm
砂礫・土粒			++	+	++	
分析量			200	—	143	容積 (cc)
			438	—	327	湿重 (g)

＊：＋：少量，++：中量，+++：多量。

×2.8cm) 以外を包丁で切断し、水洗対象とする (200cc)。種実遺体密集部はポリ袋に入れて密封し、容器に入れて保管する。

土塊 A の種実遺体密集部以外の 200cc (438g) と、土塊 B の全量 143cc (327g) を水に浸し、粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。水洗後の試料を粒径別にシャーレに入れ、粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体を抽出する。

種実遺体の同定は、現生標本や石川 (1994)、中山ほか (2010)、鈴木ほか (2012) などを参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表で示す。同定した分類群は、写真を添付して同定根拠とする。種実以外の分析残渣は袋に入れ、確認された種類の定性的な量比を一覧表に＋（プラス）で示す。

分析後は、種実遺体を分類群別に容器に入れて保管する。ヒョウタン類とヤナギタデ近似種は約 70% のエタノール溶液で液浸保存する。

③ 結果

結果を第 84 表に示す。土塊 A, B に認められた密集する種実遺体は、栽培種のヒョウタン類の種子に同定された。その他、土壌 343cc (765g) の水洗の結果、ヒョウタン類の種子の破片が 128 個と、栽培種のイネの炭化穎が 3 個、草本のイネ科の炭化胚乳が 1 個、湿生草本のヤナギタデ近似種の果実片が 1 個、落葉広葉樹のサンショウの種子片が 2 個同定された。種実以外では、炭化材、植物片、昆虫類、高師小僧（長さ 2cm, 径 0.7cm）、砂礫・土粒が確認された。

なお、土塊 A の密集するヒョウタン類種子群は、表面の 8.6cm×4.8cm×厚さ 2.8cm に約 15 個が確認された。種子群は、基部の向きが揃う箇所が認められるものの、全体的には基部の向きは区々な状況である（第 328 図－3）。また、土塊 B のヒョウタン類種子群も土塊 A と同様の状況であった。

④ 考察

道路跡から出土した種実遺体密集は、栽培種のヒョウタン類の種子に同定された。ヒョウタン類は古くからの渡来種とされ、果実が食用や容器に

利用される。この結果から、当時のヒョウタン類の利用が示唆される。なお、ヒョウタン類の種子が密集して出土した状況から、果実の状態として埋積した、あるいは利用後の残渣の痕跡などが想定される。ただし、密集部の観察では基部の向きが揃う箇所が認められたものの、状態が悪くその判断には至らなかった。

一方、土塊試料の水洗の結果、ヒョウタン類の種子の他に、栽培種のイネの穎や草本のイネ科、ヤナギタデ近似種、落葉低木のサンショウなどの種実遺体が確認された。穀類のイネは、ヒョウタン類とともに当時利用された植物質食料と示唆され、炭化していることから火を受けたとみなされる。また、河畔や林縁等の明るく開けた場所に生育するサンショウや人里草本のイネ科、湿生草本のヤナギタデ近似種などは調査地周辺の植生を反映していると考えられる。また、イネ科は炭化していることから火を受けたとみなされ、共伴するイネや炭化材とともに火を受けた可能性もある。サンショウは果実が香辛料などに利用可能である。出土種子に人が利用した痕跡は認められないが、当時利用された可能性も考えられる。

(4) 樹種同定

① 試料

試料は、第3号掘立柱建物跡の柱材2点と、中世～近世とされる第1号井戸跡から出土した木製品1点の計3点である。なお、第3号掘立柱建物跡の柱材は、試料採取時に名称が付されていなかったため、溝状遺構を挟んで西側の柱材をサンプル1、東側の柱材をサンプル2として扱っている。

② 分析方法

資料の木取りを観察した上で、剃刀を用いて木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパ

ラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995-1999）を参考にする。

③ 結果

同定結果を第85表に示す。試料は、針葉樹1分類群（ヒノキ）と広葉樹1分類群（ヤマグワ）に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-10細胞高。

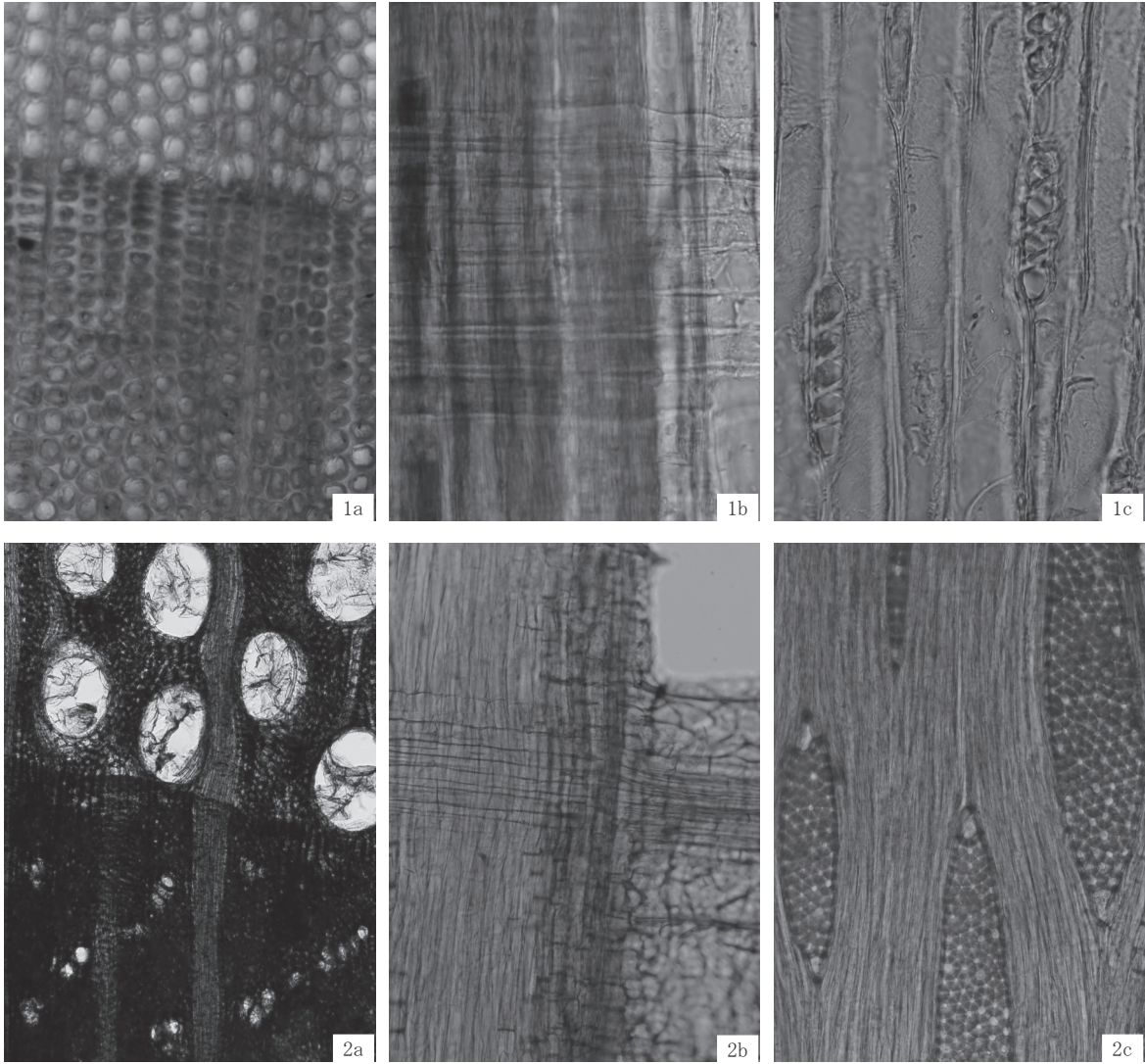
・ヤマグワ (*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は3-5列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では単独または2-4個が複合して斜方向に配列し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高。

④ 考察

第3号掘立柱建物跡の柱材は、いずれも分割材状を呈する資料であり、2点（サンプル1, 2）ともに針葉樹のヒノキに同定された。ヒノキは、木理が通直で割裂性・耐水性が高いことから、水湿に強い木材の利用が考えられる。ヒノキは、山地や丘陵地の尾根筋などに生育する常緑高木であ

第329図 木材



1. ヒノキ(第3号掘立柱建物跡 柱材;1)
2. ヤマグチ(第1号井戸跡;木製品)
a:木口, b:柾目, c:板目

100 μ m:2a
100 μ m:1a, 2b, c
100 μ m:1b, c

第 85 表 樹種同定結果

試料名	器種	木取りなど	試料名	種類 (分類群)	備考
第 3 号掘立柱建物跡	柱材	分割材状	サンプル 1	ヒノキ	溝状遺構の西側
	柱材	分割材状	サンプル 2	ヒノキ	溝状遺構の東側
第 1 号井戸跡	不明	分割材状(芯持材)		ヤマグチ	

る。現在の埼玉県内では、植林の影響もあり本来の自生地は不明であるが、ヒノキが好む土地条件などを考慮すると遺跡周辺にはヒノキは生育しておらず、より遠方の丘陵地や山地より調達された可能性が考えられる。

北島遺跡では、これまでに古代の掘立柱建物跡

の柱根の木材利用に関わる調査事例が蓄積されており、クリを主体としてヤマグチが混じる組成が明らかとされている(伊東・山田, 2012)。ヒノキは、第12地点の第129号土壇から出土した時期不明の柱材に確認された例がある。さらに、周辺地域の古墳時代～中世までのヒノキあるいはヒ

ノキを含むヒノキ属の柱材が確認された事例では、小敷田遺跡（熊谷市・行田市）の古墳時代後期（鬼高式期）とされる四角柱（サワラ）、築道下遺跡（行田市）の古代とされる柱材（サワラ）、下田町遺跡（旧大里町）の古代とされる柱材（ヒノキ）、滝下遺跡・中宿遺跡（旧岡部町）の古墳時代中期～平安時代とされる建物跡を構成する柱材（ヒノキ属）がある。柱材の多くはクリを中心として広葉樹材が利用されており、ヒノキを含むヒノキ属の利用は僅かである。

一方、第1号井戸跡から出土した木製品は、広葉樹のヤマグワに同定された。ヤマグワは、河畔等に生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度と耐朽性が高い。本資料は、最大幅（径）約30cm程度と推定される芯持材であり、上・下面および側面の一部に加工痕を有する。現時点では器種は

不明であるが、ヤマグワの材質などを考慮すると強度や耐朽性を必要とする用途に利用されていた可能性がある。

本遺跡周辺における中世～近世のヤマグワの出土事例は、小沼耕地遺跡（旧騎西町）の杭に確認されている（伊東・山田, 2012）のみであり、当該期のヤマグワの利用実態は不明である。一方、北島遺跡では、弥生時代中期の堰を構成する杭や横木、古墳時代前期の梯子や刳抜木棺、古代の井戸枳材に認められている。また、隣接する小敷田遺跡では、弥生時代中期、古墳時代前期、古墳時代中期～後期、奈良・平安時代とされる自然木にヤマグワが認められている。これらの状況から、少なくとも弥生時代中期以降において河畔林要素としてヤマグワが生育しており、木材の入手は可能であったと考えられる。

<引用文献>

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久（編）, 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 449p.
- 久保純子, 2000, 荒川扇状地とその周辺の丘陵・台地, 貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・山崎春雄・鈴木毅彦編 日本地形4 関東・伊豆小笠原, 東京大学出版会, 198-200.
- 松丸国照, 1979, Ⅰ 地形分類図. 県北比企開発地域 土地分類基本調査 熊谷 5万分の1 国土調査, 埼玉県企画財政部調整課, 13-22.
- 三宅 尚・中越信和, 1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態. 植生史研究, 6, 15-30.
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子, 2011, 日本産花粉図鑑. 北海道大学出版会, 824p.
- 中村 純, 1967, 花粉分析. 古今書院, 232p.
- 中村 純, 1980, 日本産花粉の標徴ⅠⅡ（図版）. 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12, 13集, 91p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2010, 日本植物種子図鑑（2010年改訂版）. 東北大学出版会, 678p.
- Richter, H. G., Grosser, D., Heinz, I. and Gasson, P. E.（編）, 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社, 70p. [Richter, H. G., Grosser, D., Heinz, I. and Gasson, P. E., 2004, IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.

島倉巳三郎, 1973, 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.

鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文, 2012, ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実 ー形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種ー. 誠文堂新光社, 272p.

徳永重元・山内輝子, 1971, 花粉・孢子. 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.

Wheeler, E. A., Bass, P. and Gasson, P. E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler, E. A., Bass P. and Gasson, P. E., 1989, IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .

VI 調査のまとめ

1. 調査の成果

北島遺跡第25次調査では堅穴住居跡81軒、掘立柱建物跡5棟、円形周溝状遺構2基、溝跡63条、井戸跡6基、土壇67基、畠跡7箇所、遺物集中区1箇所、ピット122基が検出されている。

時代ごとの遺構数は、古墳時代が堅穴住居跡39軒、掘立柱建物跡5棟、土壇14基、円形周溝状遺構2基、溝跡21条、畠跡7箇所、奈良・平安時代が堅穴住居跡42軒、井戸跡6基、土壇53基、溝跡24条、ピット122基、遺物集中区1箇所、近世は溝跡18条である。

集落の中心となる時期は7～9世紀で、住居跡の分布は調査地点の南側に密集している。古墳時代中期の第55号住居跡からは管玉や白玉がまともに出土している。

掘立柱建物跡は、古墳時代の堅穴住居跡と併存している。第3号建物跡は、桁行4間、梁行2間の大型建物で、ヒノキの柱材が見つかった。

古墳時代の畠跡は、堅穴住居跡が分布する北側に隣接して広がっている。

円形周溝状遺構は、古墳時代のものである。調査区の南側と中央に各1基分布していた。溝跡は各時期とも多い。砂の堆積もみられるため用途は排水目的と考えられる。一方、第3・6号溝跡は並行して直角に曲がるため、何らかの区画溝の可能性もある。

調査区南端から検出された遺物集中区からは、6～9世紀の3000点余りの土器片が細片の状態で出土しており、意図的に廃棄されたものとして注目される。

2. 弥生時代

弥生時代（Ⅰ期）は、遺構を伴わないが、弥生時代後期前半の岩鼻式と考えられる土器片が出土している。北島遺跡では、これまで中期後半の北島式、後期後半の吉ヶ谷式の集落が調査されてい

るが、後期前半の遺構・遺物はこれまで見つかっていなかった。遺構は検出されていないが、中期後半から後期後半、古墳時代前期まで継続的に集落が形成されていた可能性が考えられる。

熊谷扇状地では、中期の集落として、前中西遺跡（熊谷市教育委員会1999・2002・2003・2009～2012）、諏訪木遺跡（熊谷市教育委員会2001）、古宮遺跡（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2004）、天神東遺跡（同事業団1999）、小敷田遺跡（同事業団1991）、池上遺跡（埼玉県教育委員会1984）が知られており、県内でも最も中期の集落が集中している。中でも、前中西遺跡は中期中葉から後期前半の継続的な大規模集落である。

北島遺跡も同様の消長を示すとすると、二つの継続的な大規模集落が近接して営まれていたことになる。今後、両者の関係とともに、周辺遺跡を含めた検討が必要と考えられる。

3. 古墳時代

古墳時代（Ⅱ期）の遺構は、堅穴住居跡39軒、掘立柱建物跡5棟、土壇14基、円形周溝状遺構2基、溝跡21条、畠跡7箇所を検出した。

およその遺構の分布はLグリッド列を境にし、北側に畠跡が、南側には住居跡が分布している。堅穴住居跡は、前期が2軒のみで、その他は後期のものである。

土器 遺物の主体は土師器で、有段口縁坏、坏蓋、模倣坏が主体で、一部に北武蔵型坏が組成に加わっている。須恵器は湖西産の一群を除いて、多くは上野産と考えられるが産地は不詳である。

土師器と須恵器の型式論的变化をもとに、住居跡出土資料を中心に、古墳時代を3時期に区分した。なお、第25次調査では、良好な資料が少なく、隣接する第26～28次調査の成果と合わせて再検討の必要があると考えられる。

Ⅱ－１期 第55・77号住居跡が該当する。古墳時代前期後半である。複合口縁壺と高坏が出土している。複合口縁壺は、口縁部が短く頸部の締りが緩いものである。高坏は、浅い壙型の坏部で柱状の脚部が接合すると考えられる。

Ⅱ－２期 第3・49・58・59・71・72号住居跡が該当する。良好な出土遺物がなく、層位論的な前後関係で設定した。第58号住居跡の坏蓋模倣坏は、大振りで、浅めである。第71号住居跡の長甕は、径が大きく、胴部上半が若干張っている。北武蔵型坏が組成に加わる直前の段階、7世紀前半～中葉としておきたい。

Ⅱ－３期 第7～10・14・20～23・31・36・37・39・42・50・52・54・61・64・68・69・81～83号住居跡が該当する。重複関係から、8・10・31・52・61・64号を中段階、7号を新段階、その他を古段階とできる。しかし、良好な一括資料が乏しく、現段階では細分は適当ではないと考えられる。

須恵器は、湖西産須恵器とともに上野産と考えられる須恵器が多くを占めている。器種は径11cm前後の小型の坏類と共に、提瓶、フラスコ形瓶などの瓶類が多い。

土師器は、坏蓋模倣坏、有段口縁坏に北武蔵型坏、北島型暗文坏（田中1992）（北武蔵型暗文坏）が組成に加わる。良好な資料が出土している第20・39・50号住居跡を中心に見ていくと、坏蓋模倣坏、有段口縁坏は口径が小さく、口縁部が短い。体部と坏部の境はやや不明瞭になる。有段口縁坏はいずれも内外面黒色処理されている。第8号住居跡出土資料を新しい段階のものとする、坏身が浅く、やや径が大きくなる方向に変化する可能性が高い。長甕は胴部が細身のものと太目のものがあり、胴部の上位が若干張るものが見られる。

第50号住1（第60図1）は、北島型暗文坏である。口縁部が短く直立するもので、半球形の深身、内面に放射状のヘラ磨きが施されている。北

島型暗文坏は、田中が7世紀後半の畿内産暗文坏との弁別を目的に提起した類型である。同時期の所謂北武蔵型暗文坏に比して、短い口縁部外面にヘラケズリが施されるなど、作りがシャープである。北武蔵型暗文坏の一類型と捉え直すことができると考えられる。南比企・末野窯産須恵器流通の前段階、7世紀後半～末の年代を考えておきたい。

編み物石 遺物の中で土器に次いで多いものが編み物石で、72点が出土している。主として住居跡から出土しており、第3・6・7・8・10・20・22・25・31・41・48・49・50・51・62号の15軒、全住居跡の約2割から出土している。第41・52・53号住居跡が平安時代、その他は古墳時代である。

点数は、第3号住居跡が9点、第20・22号住居跡が7点と多く出土している。この3軒を、一つの単位を示すものと仮定すると長さは10～15cmが23点中19点、重さは200～400g台が19点である。石材は、砂岩が最も多く40点、緑泥片岩が5点、片岩、凝灰岩が各4点、頁岩、ホルンフェルス、蛇紋岩、花崗緑閃岩が各3点、白雲母石英片岩、チャートが各2点、砂質凝灰岩、流紋岩、閃緑岩が各1点である。

北島遺跡第25次よりやや古い時期ではあるが、155点が出土した深谷市砂田前遺跡（埼玉県埋蔵文化財調査事業団1998）の資料を分析した佐藤康二は、重量が300～800gと幅があるのに対して、大きさが長さ12～17cm、幅4～7cmに大きさが集中していることを指摘している。佐藤は重量よりも大きさ、形態に重きが置かれているとしている。北島遺跡例の方がやや小型で、重量にもまとまりがある。砂田前と北島の差異が何に起因するかは不明だが、集落ごとに規格があった可能性も考えられる。

出土点数の多さから、北島遺跡は編組製品の生産において中心的な役割を果たした可能性がある。

紡錘車 北島遺跡第25次調査では、後期の紡錘車

5 点が出土している。埼玉県内における古墳時代後期の紡錘車を 5 点以上出土する集落遺跡は、本庄市今井川越田遺跡の 8 点（埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995・1996・1997）、築道下遺跡の 11 点と北島遺跡である（註 1）。中でも北島遺跡は今回の調査分を合わせると 15 点と群を抜いている。

紡錘車は、集落内における糸の生産を具体的に示す資料である。住居跡から出土するため、集落の規模と比例的な関係にあるとも考えられるが、比企地域や大宮台地などの大集落では多くは認められず、地域差があるようである。そのため、一遺跡における出土点数の多さは、糸の生産について中心的な役割を果たす集落の存在や地域的な特徴を示すと考えられる。

北島遺跡は、地域の糸生産の中心的な役割を持つ集落である可能性が高い。また、北島遺跡では奈良・平安時代でも、石製、土製、鉄製を合わせて 61 点の紡錘車が出土している。古墳時代からの継続性を示すものとも考えられ、更に検討を進める必要があるだろう。

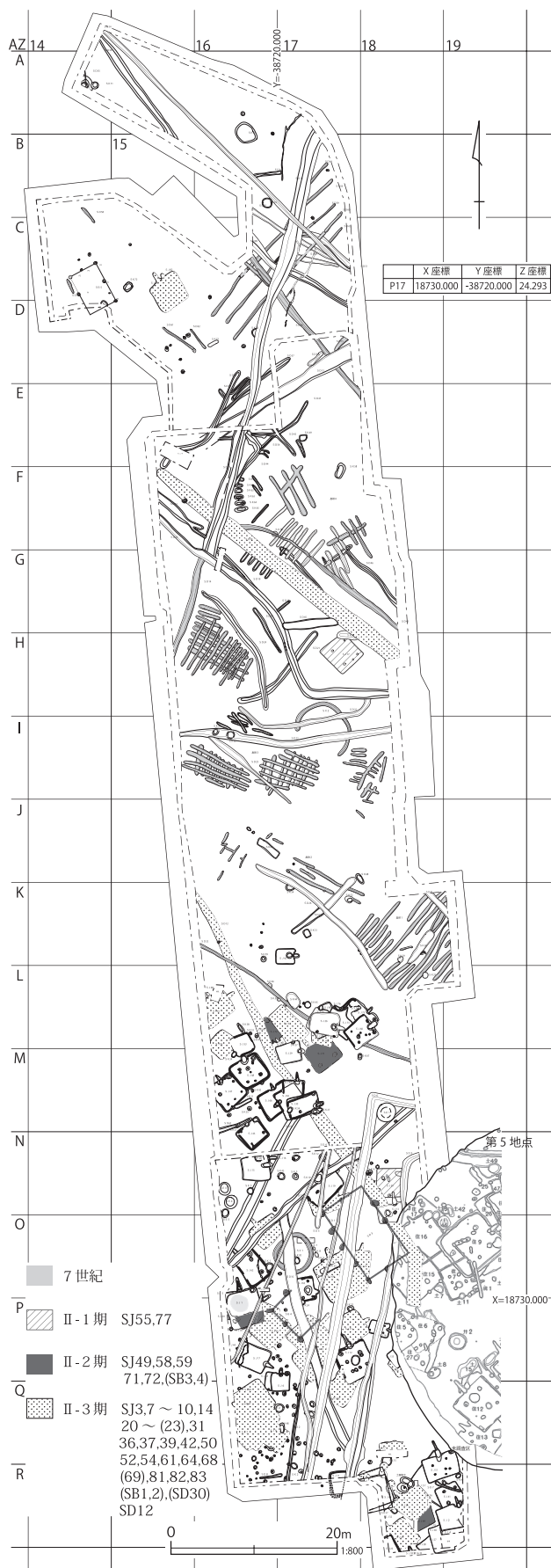
住居跡 古墳時代の遺構としては、前期が竪穴住居跡、後期は竪穴住居跡、掘立柱建物跡、円形周溝状遺構、畠跡が認められる（第 330 図）。

Ⅱ－1 期の古墳時代前期で確実な例は、第 55 号住居跡 1 軒のみである。調査区の南側から検出されている。一辺 3.5m ほどの方形で、中央よりやや北側に炉跡が設けられている。床面からまともな管玉と白玉が出土しており、大型の礫が配置されるなど、特異な状況である。

調査区中央付近の第 77 号住居跡は、一辺 4m ほどの方形で、4 本柱穴である。遺物は出土していないが、その形態から前期の可能性はある。

中期、後期に当たる 5・6 世紀代の遺構は確認されていない。

Ⅱ－2・3 期とした 7 世紀の竪穴住居跡は、北側の第 81・82 号住居跡を除き、L グリッド列より南側に分布している。平面形は方形もしくは長



第 330 図 古墳時代の遺構変遷図

方形で、主軸は3～4m、5～6mの大小がある。カマドは、基本的に北西方向に設けられている。第9・21・31・61・74・75号住居跡は北東方向、第54号住居跡は南東方向である。ほとんどが、地山から削り出した基部に、灰白色粘土と地山土の混合土によって構築された燃焼部を接合していると考えられる。カマド各部位が明瞭に残っている例はなかった。時期や造営箇所による規模の差異は見出せない。

柱穴は、4本柱穴が第50号住居跡のみで、第31号住居跡では2本が確認できるのみである。多くは規則性がないか、ピットが見られない。貯蔵穴は、カマドの左右に設けられている。

遺物の出土状態は様々で、床面の場合と、上層への流れ込み、一括廃棄の場合がある。

住居跡の造営単位は、Ⅱ－3期の細分を保留した状況では捉え難い。しかし、重複関係を参考にすると第20・21号住居跡、第22・42・50号住居跡、第10・34・60号住居跡などが同時期に近接して営まれており、2～3軒のまとまりが一つの単位であった可能性がある。

掘立柱建物跡 掘立柱建物跡は、住居跡と同様の軸方向であり、集落に付随する建物であったと考えられる。柱穴が7世紀の住居跡の床面精査時に確認されたことから、7世紀に帰属すると考えられる。

第5号建物跡が北側に、その他は住居跡と同様の南側の範囲に分布している。いずれも北西－南東方向の軸方向である。

第1・2号建物跡、第4号建物跡は重複等により全体の様相が明らかでなく、桁行方向2間、梁間方向2間以上になると考えられる。第3号建物跡は桁行方向4間、梁間方向2間、第5号建物跡は桁行方向2間、梁間方向2間である。

第1・2号建物跡は建て替えが行われている。第3号建物跡は、ヒノキの柱根が遺存していた。軸方向は前述のように、住居跡と同様の北西－南

東方向である。第3・4号建物跡は南側の梁間の軸線がほぼ同一線上にあり、同時期に併存していた可能性がある。

円形周溝状遺構 調査区の南側と中央に各1基分布している。第1号円形周溝状遺構は内径3.98m、第2号円形周溝状遺構は大型で内径6.09mである。

第1号円形周溝状遺構は、集落域の中に位置し、規模も大きくなく、これまで県内で検出されている例に近い。第20号土壌が区画内の中央より南寄りに位置しているが直接の関係は明らかでない。

古墳時代後期の円形周溝遺構については、近傍では下田町遺跡等の類例がある。円形周溝状遺構については、村上泰司（村上1993）、大塚昌彦（大塚1996）、岡本淳一郎（岡本1998）らの研究がある。福田も古墳時代前期の周溝遺構について検討を行い（福田2014）、平地式建物に関する施設とした。北島遺跡の古墳時代の2例も、他の例と同様の平地式建物の施設と考えられる。現状では、これらの平地式建物の集落内における性格付けは不明である。

畠跡 古墳時代の畠跡は、竪穴住居跡が分布する北側に隣接して広がっている。第25次調査では、前述のように居住域と耕作域が明瞭に分かれており、調査区内における畠跡が占める面積は2700㎡に上る。

時期を特定できる遺物の出土がないが、7世紀末から8世紀初頭の第30号溝跡との重複関係と土師器の細片の様相から、7世紀代である可能性が高い。分布箇所ごとに畝溝の軸方向が異なり、第1号畠跡、第2～5号畠跡、第6号畠跡、第7号畠跡の4群に分けられる。第2～6号住居跡は畝溝が交差している。

第1号畠跡は最大長が12.13m、畝溝の間隔0.3～0.5m、第2～5号畠跡は最大長が8.38m、畝溝間が0.11～1.0mで平均0.3～0.6m、第6号畠跡は最大長が6.02m、畝溝間が0.11～1.0mで平均0.3～0.5m、第7号畠跡は最大長が3.24m、

畝溝間が0.1～0.2mである。

畝溝が完結し、一つの単位を示すと考えられる第4号畝跡は、最大長が8.19m、畝幅が0.3m前後、畝溝間が0.2～0.6m、面積77.88㎡である。

関東地方では群馬県で浅間C軽石（4世紀中葉）、榛名山の火山灰で覆われた畝跡が多く検出されている。能登健は、古墳時代の畝作には、井峯遺跡のような陸稲栽培、白井遺跡群のようなアワ・ソバ・シソ・エゴマなどの畝作作物の栽培の二つの種類があることを指摘している（能登2000）。前述のように、北島遺跡では第17地点を中心とした箇所水田跡が検出されており、水稲耕作が行われているため、後者の畝作作物の栽培が推定される。

埼玉県内では、畝跡の検出事例そのものが少ない。古墳時代の例としては、北島遺跡第17地点、20地点、熊谷市一本木前遺跡（熊谷市教育委員会2002・2004）、本庄市今井条里遺跡（埼玉県埋蔵文化財調査事業団1988）、深谷市清水上遺跡（同事業団1994）等が挙げられる。このうち古墳時代後期は、一本木前遺跡B区のみで、その他は前期とされている。

一本木前遺跡B区の畝跡は8ブロックに分けられる。遺存状況により規模はまちまちだが、畝溝が完結し、一つの単位を示すと考えられる第6号畝跡は最大長9.5m、畝幅が0.3m、畝間が0.5m、面積78.0㎡で、北島遺跡第25次4号畝跡とほぼ同規模である。

また、北島遺跡第25次第3・5・6号畝跡も、第4号畝跡と同規模の単位の組み合わせと考えられ、この規模が一つの単位である可能性が高い。

畝跡は今回の調査区に接する第26～28次調査の北スタンド部分からも検出されており、類例が少なく詳らかではないが、北島遺跡ではかなり広範囲にわたって畝作が行われていたと考えられる。今後、集落、水田との関係が問題になってくるだろう。

遺物集中区 調査区南端から検出された遺物集中区からは、6～9世紀の3000点余りの土器片が、細片の状態で出土している。3期の土器が最も多く、集落の盛行期との同時性が問題になる。

器種や時期による分布の偏りは見られないが、土師器甕類の割合が非常に高いのが特徴である。完形率が低く、完形品の配置とは考え難い。意図的な破片の廃棄と考えられるが、その意図については不明と言わざるを得ない。

北島遺跡では、第19地点中央を南北に貫く水路の西側に、完形の土師器坏を中心に意図的な配置による土器集中が見られる。一本木前遺跡A区第1号土器祭祀跡等でも、7世紀代の、やはり完形品を中心とした土器配置による遺物集中が見られる。

しかし、本例のような「廃棄」に近い土器集中は、管見に触れる限りでは見出せない。類例の収集と、集落との関係、廃棄の意図の解明が課題である。

4. 奈良・平安時代

奈良・平安時代をⅢ期とし、住居跡出土資料を中心に4時期に大別した。主に一括遺物の型式学的変化から分類し、深谷市の熊野遺跡（富田2002）の編年を参考に時期を決定した。破片が多かったため、口径・底径値の確認には復元個体も含めた。須恵器は、産地が不明のものが多数あり、これらのなかには上野地域を産地とするものが含まれる可能性がある。

Ⅲ－1期 第12・19・41・47・74・75号住居跡の7軒が所属する。

主に土師器は北武蔵型坏と武蔵型甕、これに南北企産、末野産を中心とした須恵器が伴う。

土師器は底部が丸底を呈する北武蔵型坏と、武蔵型甕がある。甕は、口径21cm前後にまとまる。第48号住居跡からは北武蔵型暗文坏（第192図5）が出土している。

須恵器は少なく、第41号住居跡から坏、高台付

坏、埴（第181図1～7）が、第12号住居跡からは蓋（第149図1）が、第19号住居跡からは末野窯産の須恵器盤（第158図1）が出土した。坏の底部はすべて回転糸切り後無調整である。埴は南比企窯産で、底部は回転糸切り後周辺ヘラケズリである。熊野Ⅲ・Ⅳ期に並行し、8世紀代と考えられる。

住居跡はLグリッド以南全体に分布する。カマドの位置は、北側が6軒、東側が1軒である。

第10・11号溝跡も当該時期と考えられるが、住居跡の分布との関連を確認できなかった。

Ⅲ－2期 第1・2・4・6・15～17・24・34・40・43・44・51・53・65～67・70・73・78・84号住居跡の21軒が所属する。

主に、須恵器坏は口径に対する底径比が概ね1/2であり、口径12cm前後、土師器坏は平底気味で口縁端部がやや内湾する。これらに口縁部がコの字状かそれに近い形態を呈する土師器甕などを伴う。

須恵器は、坏、高台付坏・埴、蓋、高台付壺がある。坏の底部は、第6号住居跡出土の1点（第144図1）を除き回転糸切り後無調整である。産地は器種によって偏りがあり、坏は南比企窯が多く、高台付坏・埴はすべて末野窯産、蓋はほぼ南比企窯産である。全体では南比企産が多い。

土師器は、坏、甕、台付甕があり、甕は口径が15～21cm前後のものと、11～14cm前後のものに大別できる。熊野Ⅴ期に並行し、9世紀前半と考えられる。

遺構は、調査区の西側壁寄りにやや集中する。カマドは北側が9軒、東側が6軒である。

Ⅲ－3期 第26・29・30・38・60・62・63・76号住居跡の8軒が所属する。

土師器坏は平底で体部が逆ハの字状を呈し、甕の口縁部は、多くがコの字状である。少量ながらロクロ土師器を伴う。

須恵器坏は口径に対する底径比が1/2以下に縮

小し、体部下位が膨らみ、口縁部が外反するものが主体となる。坏の底部は、第26号住居跡の回転ヘラ切りのもの（第163図1）を除き、回転糸切り後無調整である。また、皿（第171図8）が認められる。須恵器の産地は主に末野・南比企窯であり、末野窯産が主体である。熊野Ⅵ期に並行し9世紀後半と考えられる。

遺構の分布は、Pグリッドライン以南には認められなかった。カマドの位置は、北側が3軒、東側が4軒、西側が1軒である。

井戸跡は6基検出されている。出土遺物がないものもあり確実ではないが、第1・2号井戸跡出土の土師器、須恵器が平安時代の所産であるため、平安時代に帰属するものと考えておきたい。第1号井戸跡は底面まで調査できなかったが、その他は礫層に達する底面まで調査することができた。いずれも井戸枠は確認されず、素掘りである。覆土は、いずれも地山ブロックや礫を含む。埋戻しである。

Ⅲ－4期 第13・45号住居跡の2軒が所属する。

主に、ロクロ土師器、土師器甕から構成され、灰釉陶器を伴う。

須恵器は少なく、器種は高台付埴のみである。土師器は坏、甕があり、甕は口縁部がコの字状を呈するものが認められなくなる。第45号住居跡から出土した灰釉陶器（第181図1）は、転用硯として使用されている。熊野Ⅶ期に並行し、10世紀前半頃と考えられる。

方形区画を成すと思われる第3・6号溝跡は、当該時期にも機能していたと考えられる。しかし、住居跡の分布との関連は確認できなかった。カマドは、北側1軒、東側1軒である。

集落の変遷（第331図） 7世紀頃から開始される住居跡の造営は、1期で減少し2期に再び増加した後、3期以降減少傾向となる。カマドの位置は、古墳時代で北側が主体であるのに対して、7世紀後半から1期で東側が次第に増加し、2期で



第331図 奈良・平安時代の遺構変遷図

は北・東側がほぼ同数となり、住居跡の主軸方位の変遷が窺われる。本調査区は、隣接する第5地点や、第26次調査区と一体の集落と考えられる。これらを含めて検討することが必要であり、今後の課題としたい。

以上、甚だ不十分ながら第25次調査の成果を検討してきた。改めて、古墳時代、平安時代の本遺跡の重要性を再認識した次第である。過去の調査成果と合わせた総合的な検討が今後の課題である。

註

1、魚水環氏のご教示による

引用・参考文献

- 柿沼幹夫2009「北武蔵中央部の後期土器」『南関東の弥生土器2』考古学リーダー16 六一書房
熊谷市2015『熊谷市史』
埼玉考古学会2003『北島式土器とその時代』
佐藤康二1998「V発掘調査の成果と課題」『砂田前遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第198集
田中広明1995「関東西部における律令制成立までの土器様相と歴史的動向―群馬・埼玉を中心として―」『東国土器研究第4号』東国土器研究会
富田和夫2002「Ⅷ調査のまとめ」『熊野遺跡（A・C・D区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第279集
能登健2000「関東地方のはたけ」『はたけの考古学』日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会
村上泰司1993「環形圍繞遺構小考」『土曜考古第17号』土曜考古学研究会
大塚昌彦1996「円形平地式建物について」『土曜考古第20号』土曜考古学研究会
岡本淳一郎1998「弥生時代周溝遺構に関する一考察」『富山考古学研究創刊号』富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
福田 聖2014『低地遺跡からみた関東地方における古墳時代への変革』私家版

調査報告書

- 熊谷市教育委員会 2001『諏訪木遺跡』
熊谷市教育委員会 2002『前中西遺跡Ⅱ』
熊谷市教育委員会 2002『前中西遺跡Ⅱ』
熊谷市教育委員会 2002『一本木前遺跡Ⅲ』
熊谷市教育委員会 2003『前中西遺跡Ⅲ』
熊谷市教育委員会 2004『一本木前遺跡Ⅴ』
熊谷市教育委員会 2009『前中西遺跡Ⅳ』埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書第3集
熊谷市教育委員会 2010『前中西遺跡Ⅴ』埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書第7集
熊谷市教育委員会 2011『前中西遺跡Ⅵ』埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書第9集
熊谷市教育委員会 2012『前中西遺跡Ⅶ』埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書第12集
埼玉県教育委員会 1984『池守・池上』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994『清水上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第152集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995『今井川越田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第177集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1996『今井川越田遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第178集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997『築道下遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第188集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997『今井川越田遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第191集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998『今井条里遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第192集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998『築道下遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第199集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1999『天神東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第240集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2000『築道下遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第245集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2004『古宮／中条条里／上河原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第298集